
**クラス転移に巻き込まれたコンビニ店員のおっさん、勇者には必要なかった余り物スキルを駆使して最強となる
ようです。**

日浦あやせ

HinaProject Inc.

注意事項

このPDFファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をPDF化したものです。

このPDFファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

クラス転移に巻き込まれたコンビニ店員のおっさん、勇者には必要なかった余り物スキルを駆使して最強となりますようです。

【Nコード】

N1428FD

【作者名】

日浦あやせ

【あらすじ】

【お知らせ】コミカライズ版、好評発売中です！

コンビニ店員のおっさんが、勇者召喚に巻き込まれて異世界に！

いわゆるクラス転移というやつに巻き込まれた、冴えない三十五歳の独身男性、乙木雄一。

召喚された勇者たちは女神様からチートスキルを一つずつもらって

転生するが、おっさんは巻き込まれただけなのでチートは売り切れ、貰えなかった。

代わりとばかりに女神様は、チートスキルを作るための参考に集めていた余り物、廃棄スキルをまとめておっさんにぶち込み、強制的に異世界で送り出す。

ステータスも低く、スキルも役立たず。でもおっさんはがんばります。

気付けばおっさんの周りには、なぜかおっさんを慕う女の子や男の娘がたくさんいて。

おっさんもまんざらじゃない気分だったり。

廃棄スキルも駆使したら、全然弱くなかったり。

そんなおっさんの異世界での、なんてことの無い物語。

01 一人暮らし独身三十五歳（前書き）

前作（魔女っ子おじさん、日常を往く！）が完結していないにもかかわらず、新連載を開始します。

魔女っ子おじさんを期待していた方は、すみません。

また、魔女っ子おじさんとは作風がかなり変わると思います。

それでもよければ、拙作とどうぞお付き合いくださいませ。

01 一人暮らし独身三十五歳

私の名前は乙木雄一。髪は荒れてぼさぼさ。目の下には寝不足の為に隈。落ち込み窪んだ瞳。コケた頬。間抜けな猫背。情けない外見を整えようとしてもしない、枯れた三十五歳の独身男性です。

職業はコンビニ店員。今日も米と味噌汁だけを腹に掻き込み、夜勤の為に出勤します。

家賃三万円のボロアパートを出ます。二階の私の部屋は特に古い部屋で、下に降りる階段の振動で家がみしみしと鳴り騒ぐほどです。しかし、そんな家だからこそ風呂付きで三万という破格の家賃。逆にこれだけのボロアパートを残している大家さんには、感謝しかありません。

夕方の六時。私は自転車に乗って勤務先に向かいます。片道十分の近場に職場があるのは楽で良いです。夕方の心地よい空気感に肺を喜ばせながら、少し軽い調子で自転車を漕いでいきます。

すぐに勤務先に到着しました。自転車を駐車場の隅に置き、店舗の入り口から入店します。

「おはようございます」

私は夕方勤務の主婦の方に挨拶します。気の抜けた調子で、おはようございまーす、と返ってきます。が、私はそれを背中で聞きつつ事務所へ入ります。

レジ近くで店員と少しでも無駄話をしていると、クレームの対象ですからね。危険を冒す必要はありません。話すことがあれば、事務所でもいくらでも話せます。

私はタイムカードを押さず、まずはシフト調整の仕事をします。今日はシフト提出の期限日です。私はここでの勤務が長く、シフト組みを任されています。仕事中に組む時間は無いので、こうして早めに出勤し、タイムカードを押さずに組むわけです。

シフトを組むと言っても簡単ではありません。休みの日というのは、誰しも同じような日に重なるもの。そうでなくても、休みが重なる日は少なくありません。

しかも、うちはオーナーの方針で従業員はギリギリの人数しか雇っていません。どこかの日を人数少なめで回す、といった調整は出来ないのです。

そして、期限日までにシフトを提出しない人も多く居ます。基本は新しく入った学生さんが提出忘れをしがちです。ただ、ご年配の方も提出しないことが多いです。

出していないんだからいつもどおりだろ。という理屈で出さない方単純に出し忘れる方がいます。なので、電話をして一つ一つ確認しなければなりません。いつもどおりに決まっているだろ、と怒られるのには、もう慣れてきました。

そうしてシフトを半分ほど組み上げたら、気づけば二十時です。今日はシフトに穴があった日なので、これから私が出なければなり

ません。本来の夜勤は二十二時からです。しかし、二時間の空白を埋められるのは、私しかいません。

シフト組みの作業を途中で止めます。机を片付け、着替えて店に出ます。

「交代します」

「お疲れ様です」

夕方勤務の学生さんが事務所に下がります。二十二時までは、二人で回します。僕と、もう一人の夕方勤務の学生さんです。

この時間は会社帰りのおじさんが多いので、レジが忙しくなります。その関係で、他の仕事はまともに出ません。清掃作業。商品の品出し、前出し。本来はこの時間にいくらか済ませておくものですが、そうも行きません。

02 夜勤のつらいところ

やがて二十二時になると、夜勤の子が来ます。二十代のフリーターの子です。彼と一緒に、朝までに数々の仕事を終わらせませす。店中の商品の在庫を出して、棚に詰めていきます。後ろに詰める作業は見た目よりも手間がかかります。隣の商品と距離が近いので、一度全てを出さないと奥に入れられないのです。

そして日付が変わる頃になると、客入りが減ります。そうなる清掃作業です。フライヤー、肉まん、おでん。それぞれの機材を順に洗っていきます。

これが終わればウォークイン。ドリンクの補充です。だいたい四十個ほど、ダンボールでドリンクの在庫が入ります。これを全て開封し、減っている場所に補充して、余りは棚に並べて保管します。

この作業が、だいたい二十分ほどで終わらせねばなりません。それ以上かかると、レジが忙しくなってお客さんが並び、クレームになるからです。

重いダンボールを急いで運び、開封し、補充して棚に戻す。これを一つ三十秒で終わらせる計算になります。

慣れないうちは一時間は掛けていましたが、今ではしっかり二十分で終わらせられます。

ただ、この作業のせいで身体を痛めるので、生活に鎮痛剤が欠かせませんね。

補充作業が終われば、また商品の補充です。深夜に搬入される商品を棚に並べ、余ったものを在庫に片付けます。

在庫は朝昼夕方勤務の人が好き放題に出し、好き放題に戻すので荒れ放題です。これを整理し直すのも夜勤の仕事。

散らかっていると、オーナーや店長から文句を言われますからね。

一通り終われば、床やトイレの清掃が入ります。お客さんがいない時間を見計らい、さっと床をモップがけします。お客さんの前で掃除をすると、すぐにクレームになりますからね。掃除道具を見える場所に置いていてもクレームです。

店内の清掃が終われば店外。駐車場や、店周辺の清掃です。この時間は、休憩を取らなければならないので一人で店を回すことになります。当然、レジを見ながら。

レジを見ながら店の外を清掃しなければなりません。矛盾しているので、お客さんが来るとそれだけで仕事が滞る時間ですね。なので滞ることを前提に、気合を入れて急いで清掃せねばなりません。店周辺のタイルのモップがけなどは、腰が痛いぐらいのペースで磨きます。

このタイミングでまた鎮痛剤のお世話になります。

そして清掃が終われば、冷凍食品が配送されてきます。大量の冷凍食品は、溶けると困るので急いで片付けねばなりません。

そして片付ける場所は、商品棚の下です。お客さんは上から取るので、新しいものは下に詰めなければなりません。

腰をかがめて前のめりの姿勢で、大量の冷凍食品をすばやく取り出し、すばやく新しいものを下に詰め、すばやく戻します。この作業のお蔭で、また腰が痛くなります。

また鎮痛剤のお世話になります。

そうして朝が来ます。朝はおでん、肉まん、フライヤーの仕込みがあります。一番楽な時間です。レジをするだけでいい時間ですからね。

朝八時になると、夜勤の終わりです。

「お疲れ様でした」

夜勤のフリーターの子は先に帰ります。が、僕はまだ帰れません。まずは休憩時間を消化しつつ、シフト組みの続きです。夜勤の休憩時間は四十五分。そして今日の僕はシフトが埋まらなかった分、昼まで勤務が続くのでさらに十五分の休憩時間があります。

合計一時間、事務所に籠もってシフトと睨み合います。

そしてシフトが完成したら、休憩が終わってなくてもレジに出ます。この時間は、本当は二人回しの時間ですからね。休憩を消化していたら仕事になりません。

そうしてレジをしていたら、昼の配送です。お弁当など鮮度が重要なものが運ばれてきます。

これらの品出しをしながら、レジをしていたら気づけば十一時。ようやく仕事の終わりです。

しかし、ここでトラブルが発生。昼勤務の大学生の子が遅刻です。電話にも出ません。恐らく寝坊か、学校の急な用事で拘束されているのでしょう。

仕方がないので、僕は続けて出勤することになります。

もちろん、タイムカードは切っています。勝手に残業をつけると、

オーナーがくどくど文句を言いますからね。

03 六ツ賀谷高校

昼になると、近所の高校の生徒が昼食を買いに多く訪れます。六ツ賀谷高校。私の母校でもあります。

多くの学生の買う商品をレジ打ちしていきます。すると、不意に目の前の学生さんが話しかけてきます。

「店員さん、お疲れなんですか？」

「はい？ ええと、まあ。夜勤から続けて働いてますから」

「そうなんですか。大変ですね、頑張ってください！」

女子高生に労ってもらえるのは、なかなかうれしいものですね。私は頭を下げ、ありがとうございますとだけ伝えます。そしてレジ打ちの業務に戻りました。

「もう、沙織恥ずかしいよ。そういうのやめよう？」

「ええ、なんでえ？」

「だって、キモいじゃんあの店員。話しかけたら、こっちまで仲間みたいじゃん」

「ちょっと雪ちゃん。言い過ぎだよ」

レジ打ちが終わると、労ってくれた女子高生は待っていた友達と合流し、そんなことを話していました。

キモいのは事実ですので、仕方ないですね。いつものことです。

その後も大量のレジ打ちを続けて、気づけば十三時。ようやく昼勤務の学生さんが出勤したので、私は退勤します。

といっても、そのままは帰れません。店内のゴミ。品出した後の空きダンボール。廃棄になった弁当等の生ゴミ。そういったものを集め、店外のゴミ集積場に片付けます。

片付けに行くと、大抵の場合ゴミが乱雑に置かれています。ゴミの回収業者さんに迷惑なので、仕方なく整理していきます。ダンボールは綺麗に積み、ゴミは種類で分別して集めます。それぞれ別の業者さんが回収するので当然の処置です。

これでようやく帰れると思った私は、事務所に荷物を取りに戻ります。

すると、遅れてきた大学生の子が話しかけてきます。

「あの、乙木さん。店の前で学生さんがたむろってて。追い払ってもらえませんか？ お客さんにもクレームをつけられちゃったので」「なるほど」

言われて、監視カメラの映像を確かめます。確かに、店外に四人組の学生が座り込んでいます。威圧感があるので、お客さんが不快に思うのも無理はありません。

こういう時のクレームも店に入り、店の責任になるのが面倒なところですよ。

けれど対処しないわけにはいきません。私は覚悟を決めて、店の外へと向かいます。

「あの、お客様。あまりお店の前で休憩なさるのはおやめ頂けませんか？」

私はまたユニフォームを着直して、四人組の学生、六ツ賀谷高校の生徒らしき子達に話しかけます。

「あ？ なんだおっさんコラ。座ってるだけだろうが。文句あんのかコラ」

「店の前は座ってご休憩頂くための場所ではございませんので。ほかのお客様のご迷惑にもなりますから」

「ああ？ 誰が迷惑だコラ。ぶっ殺すぞ」

「テメエ調子こいてんじゃねえぞコラア！」

四人の学生のうち、三人の男が私に向かって暴言を吐きます。そして私を取り囲んで来ます。

こうして殺害予告されるのは、コンビニ店員を続けてきて何度もありました。今さら恐れるような事態でもありません。冷静に対応します。

「申し訳ございません。お客様を優先はさせて頂いているのですが、こちらの場所は他のお客様も通ることがございますから。どうしても、座り込んでご休憩、というのはこちらとしても認めるのが難しくなっております」

「ゴタゴタうつせえんじゃコラ！」

男の一人が私の胸ぐらに掴みかかります。

先に暴力に出てもらえたら、こちらの勝ちです。映像の証拠が残るので、補導できます。このまま怒ってもらうのもアリですね。

ただ、痛いのは避けたいです。できれば納得して、退去して頂きたいのですが。

そんな時、最後の一人の声が上がります。

「おっさんなんかイジメてんなよ、オメーら」

六ツ賀谷高校の制服を着た、女の子です。

黒く焼けた肌に金髪という、少し古く感じるスタイルの不良娘です
ね。

04 異世界召喚

実は私、この不良娘のことを知っています。

名前は美樹本有咲^{あじさ}。結婚した僕の姉の娘であり、つまり姪っ子です。恐らく有咲さんは覚えてないでしょうが、小学生ぐらいの頃に会ったことがありますね。

あの頃と比べて、随分大人びています。が、顔立ちはその頃の面影がそのまま残っています。髪や肌の色が違っても、私が判別できるぐらいに。

「おい有咲、おまえこいつの肩持つのか？」

「ちげえよ。こないだタカシがしょっ引かれたばっかだろ。手え出すんじゃねえぞっつってんの」

「ちっ。おいおっさん！ ナメてっつとマジで殺すぞコラ！」

男三人は、有咲さんに説得されて引き下がるようです。

「どうやら有咲さん、不良グループの中では一目置かれているようですね。」

「不良になっているのは頂けません、リーダーシップがあるのは良いことです。」

と、私が無駄で関係の無いことに考えを巡らせた矢先のことです。

突然、六ツ賀谷高校の四人の身体を、まばゆい光が包みます。

「お、おい！ 何だこれ！」

「眩しいじゃねーか！」

生徒たちは慌て、互いを見合わせています。

「おい、おっさん！ テメエなんかしやがったな！」

有咲さんが、私を疑って胸ぐらを掴んできます。

「いや、私は何も」

「じゃあ何なんだよこれ！」

私に分かるはずがありません。コンビニ店員に、人を輝かせる力なんかありませんからね。有咲さんも、どうやらかなり混乱しているようです。

「ぶっ殺すぞおっさん！」

「テメエどうにかしろやコラ！」

「死にさせボケエ！」

男三人も、私が原因だと思いこんでいるようです。困りましたね、光る高校生に囲まれてしまいました。逃げられません。

そうこうしている内に、光は強くなります。

そして光が高まり、景色が見えないほどになると、足元に魔法陣のようなものが出現します。

私は高校生に囲まれているので、きつちり魔法陣の中に入り込んでいます。

私が四人になにかしたというか、むしろ私が巻き込まれそうなく

らいですね。

困りました。今日はまだ寝ていないので早く帰りたいのですが。

「おいふざけんなよおっさん！ これ消せよ！」

有咲さんが私に文句を行ってきます。でも無理なので、何も言えません。どうしたものか、と考え込みます。

やがて足元の魔法陣も光を放ちます。

そして魔法陣の光が私たちの身体を包んだ後、意識を失ってしまいます。

05 勇者召喚のボーナススキル

気がつくのと、真っ白な空間に立っていました。

周囲には、大勢の高校生。制服が六ツ賀谷高校のものばかりです。中には大人の姿もあります。が、高校生に声を張り上げて指示を出しているので、恐らくは高校教師なのでしょう。

そして、私の近くに有咲さんは居ません。もちろん、男三人もです。

私が周囲を観察していると、不意に声が響きます。

「よくぞいらっしやいました、勇者の皆様」

それは、耳に馴染む優しい女性の声でした。

しかし突然のことだったので、高校生たちは慌ててしまいました。

まあ、いきなり声だけ聞こえたら驚くでしょう。しかもこんな意味不明な景色の場所ですから。突然場所を移動して、姿の見えない誰かの声が響く。子供には刺激が強すぎますね。

客に突然殴られたり、姿の見えないクレーム相手に戦ったりしたコンビニ店員の私にとっては大したことじゃありません。

「まずは落ち着いてください。皆様の状況について説明致します」

女の人の声が丁寧に高校生たちを宥めます。声の優しさもあって、次第に誰もが落ち着きを取り戻します。

場が静まり返ってから、また声が響きます。

「皆様の住む世界とは、異なる次元に存在する世界があります。今、その世界では魔王が現れ、人々が脅威にさらされています。そこである国が異世界から勇者を召喚し、魔王に対抗する戦力とすることを決定しました」

「まじかよ、勇者召喚！ クラス転移つてやつじゃん！」

高校生の、誰かが声を上げます。周囲の皆が睨みを利かせたので、すぐにその子は黙ってしまったようです。

「そして勇者召喚の儀式を行い、集められたのが皆様なのです」
「ちょっと待ってくれ！」

一人の男子高校生が声を上げます。金髪ピアスなのに、どこか真面目そうな顔立ちの青年です。

「そもそも、俺たちは勇者なんかじゃない！ 普通の高校生だ！
その、魔王とかいうやつと戦わせられるなんてごめんだ！ 戦う力なんてないし、そんな経験もない平凡な高校生が、急に魔王とか何だとか、受け入れられるわけがない！」
「ごもつともな話です」

女の声が悲しげに響きます。

「しかし、召喚したのはかの国の者たちです。そして、私はそれを止めることは出来ない。皆様を元の世界に戻すこともできない」

「あの……声の人は、いつたいどこの誰なんですか？」

女の子の声が、素朴な質問をします。見ると、なんと今日のお昼に私を労ってくれた女の子です。

「私は、皆様が召喚される世界を管理する女神です」

その回答があつたと同時に、場がざわつきます。

何しろ、相手は女神です。しかも、その女神ですら私たちを元の世界に返せないと言っていました。

となると私たちは、もう二度と元の世界に帰れないかもしれないのです。動揺するのが当たり前でしょう。

私は残してきたものなんか無いので特に問題はありませんが。

ああ、鍋に味噌汁が残っていましたね。勿体無いことをしました。こんなことなら、昨日は二杯飲んでおけばよかった。

「皆様が私の世界に来ることは、既に確定しています。止めることはできません。ですが、皆様が私の世界で生きやすいよう、特別な力を授けることは出来ます」

女神様は、どうやら話を続けるようです。

「私の世界には、魔法やスキルといった特別な力が存在します。皆様には、そうした特別な力を手に入れた上で召喚されることとなります。魔物の徘徊する私の世界で、その力は生きる助けとなるでしょう」

「やっべえ！ チートスキルじゃん！ やった！」

また、どこかの男子生徒が興奮して声を上げたようです。やはり

一同が睨みを利かせます。

「確かに、皆様の世界の言葉で言えば、チートスキルというものに該当します。私が与える力は、とても強いものになりますから」

「どうやら、騒いだ少年の言ったことは間違いでは無かったようです。」

「では、皆さん。順番に名前を呼びますので、呼ばれた人は拳手をしてください」

こうして、女神様による特別な力、チートスキルを貰う時間が始まりました。

05 勇者召喚のボーナススキル（後書き）

本日の連続投稿はここまでとなります。

明日以降も、一日五回の投稿が続きます。

どうぞ宜しくお願い致します。

ブックマーク、評価の方も歓迎しております。

ぜひこの作品を今後もお読み頂けるのであれば、ブックマークか評価を付けて頂けると幸いです。

06 チートの中のチート

「それでは、まずはチートスキルの中でも特別な、勇者称号のスキルを与えようと思います」

勇者称号ですか。なかなか、強そうな響きです。

「勇者召喚の要とも言えるスキルです。あらゆるチートスキルを統合した、チートの中のチートと言えるスキルです。中でも『勇者』のスキルは特別です。順調に成長すれば、一人で魔王軍と渡り合うことさえ可能でしょう」

高校生たちがざわつきます。

勇者のスキルを手に入れたら、それはこれから行く異世界で安全を保証されるも同然です。誰もが欲しがって当然でしょう。

「では、まずは『勇者』のスキルを与えます。金浜蛍一さん。挙手をしてください」

「お、俺です！」

挙手をしたのは、なんと勇者召喚にただ一人だけ異論を唱えた男子高校生でした。

なるほど。正義感も強く、冷静で、行動力もある。そういう人物にこそ、勇者は相応しいのでしょうか。

彼は咄嗟の状況で命の危機に気づき、反抗しました。それはきつ

と、自分だけでなくクラスメイトも危ないと思ったからなのでしよう。

勇者に相応しい人選と言えます。

「では金浜蛍一。貴方の行く末に幸多からんことを祈ります」

女神様の声が聞こえると、金浜君の身体が光に包まれます。そして光が収まった頃には、既に金浜君の姿はありませんでした。

「既に金浜蛍一さんは転移を済ませました。スキルを与えた者から、このように異世界へと送ってゆきます」

女神様は状況を説明してくれました。なるほど、手っ取り早いですし、与えたスキルの差等で騒ぎを起こしづらい仕組みです。

この白い空間ではもちろん、転移先にも時間差で出るので。一人ずつ、別々に対応すれば、転移者同士でのトラブルを避けやすいでしょう。

女神様はけっこう仕事が出来るタイプの方ですね。

「次に『聖女』のスキルを与えます。三森沙織さん」

「わ、私です!」

名前を呼ばれて挙手したのは、なんと今日のお昼に私を労ってくれた子です。

優しい子でしたからね。聖女という優しげな称号もぴったりですよ。

「聖女のスキルは、勇者よりも治癒と補助魔法に特化したスキルです。貴方の行く末に幸多からんことを祈ります」

そして女神様が金浜君の時と同じ言葉を口にします。すると、三森さんが光に包まれ、姿を消します。

良い子ですから、転移先で良い扱いを受けられるよう祈っておきましょう。

「次に『剣聖』のスキルです。勇者よりも剣技と近接戦闘能力に特化したスキルです。受け取るのは、東堂陽太さん」

「俺じゃん!」

挙手したのは、坊主頭の男子です。

見覚えがあります。うちのコンビニで毎朝パンを買っていく子です。

恐らく、部活に熱心で毎朝練習に励んでいるのでしょう。早朝から顔を見る学生なので、覚えてしまいました。

「貴方の行く末に幸多からんことを」

こうして、東堂君も異世界に転移していきます。

「次に、勇者称号系のスキル最後の一つ『賢者』を与えます。これは勇者よりも攻撃魔法に特化したスキルです。受け取るのは、松里家勇樹さん」

「僕のようにだな」

挙手したのは、眼鏡をかけた賢そうな男の子です。コンビニでは見ない子なので、どういった生徒なのかは私には分かりません。

「貴方の行く末に幸多からんことを」

そうして、松里家君も異世界に転移します。

これで勇者称号系のスキルは全て与えたいです。
つまり、勇者とは今名前が挙がった四人が主役なのでしょう。みんな良い子だと思うので、悪いようにはならないでほしいですね。今からでも、四人の無事を祈っておきましょう。

07 チートの中では普通のチート

「では続いて、特別な力を持った特殊スキルというものを付与します。これらは勇者称号スキルでも出来ないような、特殊で特別な力を発揮します」

女神様は、続けて与えるスキルについて説明を始めました。

「但し、勇者称号系のスキルは全て、特殊スキルに対する耐性か、あるいは対抗手段を持っています。ですので、自分の力に自惚れ、勇者を廃して自分が頂点にのし上がるう、等とは考えないようお願いいたします」

その忠告があつた段階で、何人かの生徒が動揺している様子でした。

自分が一番になりたい、という気持ちは分かります。でも、勇者たちはクラスメイトですよ。危ないことをしてはいけません。

女神様の忠告があつて良かったです。これで勇者も、今苦い顔をしている子達も不幸にならずに済みます。

「ではまず『魔法無効化』スキルから。全ての魔法を無効化するスキルです。仁科雪さん」

「あ、あたしじゃん！」

挙手したのは、今日のお昼に三森さんと一緒にいた子です。僕を

キモいと言っていた子ですね。

僕は気にしません、異世界で同じ態度だと苦労するでしょう。どうか手助けしてあげたいですが、無理でしょうね。私はキモいと思われていますから。

そうこう考えているうちに、仁科さんは異世界へ転移していました。健闘を祈っておきましょう。

「次は『絶対鑑定』のスキルです。あらゆるものを鑑定し、正確な情報を得ることが出来ます。受け取るのは、真山正蔵さん」

「おっしゃ！ きたこれ！ お約束のチートスキルじゃん！」

拳手ではなく、ガッツポーズで応えたのは、何度も変なことを言ってみんなに睨まれていた男子生徒です。

どうやら、異世界に転移するのが好きなようです。経験者なのでしょうが？

あるいは親が異世界に転移していたのかもしれないね。不思議なこともあるものです。

真山君が転移したら、すぐに女神様は次のスキルの説明を始めます。どうやら、勇者称号系のスキル以降はテキパキと与えていくつもりなのでしょう。

「次は『技能模倣』スキル。チートスキル以外の全てのスキルを見ただけで習得できます。野村浩一さん」

「俺じゃん！」

手を上げたのは、今日の昼に私を取り囲んだ不良男子の一人ですね。茶髪に目付きの悪い子です。

あまり調子に乗っていると、異世界で怖い人に怖いことをされま

すよ。

現代日本だって、調子をこくとヤクザさんが出てきて折檻されま
すからね。気をつけたほうがいいでしょう。

「次は『即死魔法』のスキルです。自分より魔力の低い相手を即死
させることが出来ます。神崎竜也さん」

「絶対つえーじゃん！マジぶっ殺すわ！」

手を上げたのは、またお昼の不良男子の一人です。黒髪をツンツ
ンに立てて、耳にピアスをした子ですね。

不良に人を殺すスキルを与えていいのでしょうか。調子にのって
友達や知り合いに手を出してしまうかもしれないよ。

でもまあ、女神様が与えるスキルです。性格も込みで、よく考え
て与えているはずです。きっと身内に関しては安全なのでしょう。

「次に『完全回復』スキルです。聖女の治癒魔法でさえ不可能な死
者蘇生と、四肢の欠損を治療することが可能です。鈴原歩美さん」
「私だわ」

拳手したのは、数少ない大人の一人です。白衣を着ているので、
恐らく養護教諭さんでしょう。ぴったりのスキルだと言えます。

「次は『暗殺術』スキルです。暗殺に有用な複数のスキルが統合さ
れたスキルになっています。木下ともえさん」
「わ、私ですかっ？」

驚きの声と一緒に拳手したのは、また大人でした。高校生に指示
を出していた一人なので、クラス担任か何かでしょう。

何だか柔らかい雰囲気的女性なので、暗殺はあまり似合いません
ね。

少しふくよかで肉付きがよく、丸顔で愛らしい顔立ち。私の好みのタイプの女性ですね。異世界に転移して機会があれば声をかけてみましょう。

どうせキモがられて終わりでしょうけど。

「次は『超加速』スキルです。自分だけが高速で動けるようになるスキルです。周囲の全てがスローモーションになったように見え、あたかも時間が止まったような世界の中を行動できます。七竈八色さん」

「はい」

呼ばれて手を上げたのは、ミステリアスな雰囲気少女です。髪が長く、顔立ちがよく見えません。

それにしても。なかなかまど、やいろ。特徴的な名前ですね。興味が無くても覚えてしまいそうです。

「次は『弱体化』のスキルです。触れた相手の能力を少しずつ低下させていくことが出来ます。これは不可逆な効果なので、仲間には使わないでくださいね。加藤淳也さん」

「おっしや、俺じゃん！」

今度は、お昼に私を囲んだ不良男子の最後の一人です。金髪で長髪の男の子です。顔立ちが中性的なので、女性に間違われそうですね。

「次は『洗脳調教』スキル。目を合わせた相手を洗脳し、自分の言いなりにすることが出来ます。意思が強い相手や、魔力の高い相手、状態異常に耐性のある相手には効きません。内藤隆さん」

「俺かよ」

拳手したのは、制服を着ていない男の子です。灰色の髪に、唇にピアスがしてあります。

そういえば今日、有咲さんがタカシ、という人の名前を出していましたね。もしかしたらこの人がそのタカシ君なのかもしれません。

その後も、女神様によるスキル付与は続きました。

迷宮創造。成長促進。無限魔力。召喚魔法。不死身。無限収納。

超位錬金術。絶対零度。灼熱業火。必中狙撃。支援重複。絶対防御。

その辺りまで話を聞いたところで、耳を傾けるのにも疲れてきました。

私はただ黙って、自分がチートスキルを貰える順番を待ちます。

そしてとうとう、私以外の全員がチートスキルを貰い、異世界に転移しました。

いよいよ、私の番です。

08 チートじゃないスキル

私は期待して、女神様の声を待ちます。

しかし、いくら待っても女神様の声は響きません。

「あの、すみません」

私は仕方なく、こちらから女神様に呼びかけてみます。

「うわっ、誰っ？」

女神様の驚いたような声が響きます。

「あの、私もそろそろチートスキルを貰って、異世界に転移させて貰えると助かるんですが」

「へ？ あれ、うそ、なんで？ もう全員送ったはずなんだけど？」

なにやら、話の雲行きが怪しくなってきました。

「えっと、間違いないわ。用意したチートスキルは全部無くなって。ちゃんと勇者召喚で要求された人数だけ向こうに送ってるわ」

「あ、そうなんですか」

「え、いや。じゃああんた誰なの？ おかしいじゃん！」

何だか、先程までの女神様とまるで口調が違いますね。
人がたくさん居た間は、仕事の口調で喋っていたのでしょうか。
個人的には、親しみやすくして今の口調の方が好きです。

「えっと、私は乙木雄一という者です。三十五歳の独身で、コンビニでバイトリーダーのような感じの仕事をしております」

「あ、そうなの。これはご丁寧に」

腰の低い感じの声が返ってきます。

「って、そうじゃなくて！ コンビニ店員って、なにそれ！ おかしいじゃん！ 勇者召喚は勇者称号に相応しい四人と、関係の深い人達、つまりクラスメイトや教師だけを召喚したはずよ。コンビニ店員が紛れ込む余地が無いわよ！」

「あー、なるほど。そういう感じでしたか」

なんとなく、流れが読めてきました。

つまり私は本来、召喚されていないはずの人間だったのでしょうか。

「なんであんだ、じゃないや乙木さんはここに来ちゃったの？」

「それは多分、巻き込まれたからではないかと。おそらく勇者召喚のタイミングで、私は六ツ賀谷高校の生徒四人に絡まれて、胸ぐらを掴まれていたので」

「冷静にっらいこと言ってる！ なにこの人！ ちょっと怖いわよ！」

女神様が興奮しているようです。でも、高校生に囲まれる程度を辛いこととは面白いですね。コンビニ店員はヤクザに囲まれることもありますよ。四人じゃなくて十人ぐらいに囲まれて殴られたこともあります。

四人の高校生に囲まれるぐらい、可愛いものです。

「可愛くないわよ!」

おおっ。なんと、女神様は心が読めるようです。

「手っ取り早く話を済ませたいから、心を読ませてもらってるわ。で、本題に戻るわよ」

はい。話を逸らせてすみません女神様。

「困ったことに、乙木さんは勇者召喚で呼ばれてないからチートスキルは残っていません」

ですよね。在庫管理はしっかりするべきですし、当然です。

「でも元の世界に帰すこともできないし、このまま異世界に飛ばすことも出来ない。召喚に巻き込まれた以上、何かあげないと異世界に飛ばせないのよ」

となると、このまま女神様とずっと一緒ですか。

女性経験が少ないので、声だけでも一つ屋根の下というのは、ちよつと嬉しいですね。

「何この変態! キモいんだけど!」

ああ、やはり嫌われてしまいました。

まあキモいと言われるのは慣れているので平気ですけどね。

「慣れてるってところがよけいキモいわよ。もうやだ、早く転移して

よ変態」

と言われても、私には転移する手段がありませんし。女神様の方でどうにかしてもらおうしか。

「こつちだつてそんな方法あればやつてるわよ！ もうチートスキルは売り切れだし、無理なものは無理！」

ですよね。

「あつ。でもないかも！」

そうなんですか。

「チートスキルを作る参考の為に、あらゆる魔物、植物、無機物から集めたどうでもいいクズスキルが大量にあるのよ。私がつけても仕方ないっていうかスペースを圧迫して困るし、どこかに捨てなきゃいけないかったのよね」

はあ、なるほど。

「そこで乙木さんの出番よ。この廃棄スキル全部あげるわ。そうしたらちゃんとスキルを貰った判定になるから、異世界転移もできる！」

そうですか。でも廃棄スキルなんですよ。大丈夫なんですか？
そんなの身体に突っ込んで。

「大丈夫よ、多分。ダメでも乙木さんキモいし別に私は気にならな
いわ」

酷い言われようですね。

でもキモいのは私のせいなので仕方ありません。

それに廃棄品とはいええ、貰えるのなら貰ったほうがいいでしょう。

「じゃあ決定！ ほら廃棄スキルどくん！」

女神様の言葉と同時に、大量の何かが私の中に入り込む感覚がありました。

これは、ちょっと、苦しいのですが。

「知らないわよ！ 死にそうなら勝手に向こうで死んでちょうだい！ じゃあさよならどくん！」

今度は女神様の言葉と同時に、私の身体が光り始めます。どうやら異世界転移が始まったようです。

そして、私は謎の胸の苦しさもあって、あっさり意識を失うのでした。

09 遅れてきた謎のおっさん

気がつくのと、私は見たことのない豪華な広間の真ん中に立っていました。

「ここは、どこでしょうか」

「お前、何者だ！」

状況を把握する前に、私は鉄の鎧を着た人に取り囲まれてしまいます。全員が剣を持っていて、その気になれば私をすぐに殺せるでしょう。

ヤクザさんに囲まれた時も、ドスを持った人がいましたね。ちょうど予行練習になった形ですね。助かりました。

「あの、私も勇者召喚とやらでこの世界に来てしまった者なのですが」

「何だと？ 既に予定していた人数は召喚されている！ 嘘を言っ
な！」

鎧の人の中でも、一番豪華なデザインの鎧を着た人が怒りの声を上げます。まあ、確かに召喚側からすれば私は勝手に来たおっさんです。警戒されても仕方ありません。

「実はですね」

そのまま、私はこうなってしまった事情を話します。
一つずつ話をして、さらに勇者召喚された人しか知らないはずの情報を口にする、なんとか鎧の人たちに信じてもらうことが出来ました。

召喚された勇者たちの名前をいくらか覚えておいて助かりました。

「なるほど、乙木殿が巻き込まれてこの世界に来てしまった、という事情は分かった」

そう言って、豪華な鎧の人が兜を脱ぎます。

なんと、中から出てきたのは美人の女性です。

「私は騎士団長のマルクリーヌだ。今回の勇者召喚で訪れた勇者を、順に状況説明の担当者の所へ連れて行く任を担っている」

「どうも、マルクリーヌさん。私は乙木雄一、しがたいコンビニのバイトリダーです」

「コンビニ、はいと？ よく分らんが、そちらの世界の身分のようなものか？」

「はい、そうなりますね」

「なるほど。世界が違つと身分も色々だな。私のような騎士のことを、そちらの世界では『くつころ』と呼ぶのだと教えてくれた勇者様もいらっしやっただ。勉強になると共に、非常に面白い話を聞けて嬉しいよ」

「なるほど、そうですか」

くつころ、という言葉の意味はよく分かりませんが。ともかくマルクリーヌさんは勇者たちに良い印象を持ってくれているようです。安心しました。

「ふふ。乙木殿は人が良いようだな」

「はい？」

「私が勇者様に好意的な話をした途端、表情が緩んでいたぞ」

「どうやら、顔に出ていたようです。まあ問題は無いのですが、見透かされるのは少し恥ずかしいですね。」

縁の下で大した力でもない力を振るうのが私のモットーですから。

「さて、乙木殿。実は貴方にもこの世界の状況について説明したいのだが、そのための人員が用意されていないのだ。すまないが、代替案として私に説明役を任せて頂けないだろうか？」

マルクリーヌさんは申し訳なさに言います。

「問題ありません。むしろ、説明していただけるのですから、感謝しかありませんよ。どうかお顔を上げてください、マルクリーヌさん」

「そうか。いや、ありがとう乙木殿。貴方は気遣いの出来る良い殿方だな」

あまり女性に褒められる経験が無い私です。ちょっと照れてしまいました。

頬をぽりぽりと搔いていると、マルクリーヌさんが話を進めます。

「では、場所を移動しましょう。このような広間で話をする必要はありません。どこか座って、ゆっくり出来る場所にご案内しますよ」

「お気遣い頂き、ありがとうございます」

「いえいえ。これも私の務めの一つですから」

こうして私は、マルクリーヌさんに案内されて謎の広間から移動

しました。

10 ルーンガルド王国

私はマルクリーヌさんに従って歩いていきました。勧められるままに部屋に入り、そして席につきまます。

ごんまりとした部屋ですが、調度品は豪華で、私という人間があまりにも場違いに感じてしまいます。

「さて、乙木殿。まずは何の話から始めましょうか」

「そうですね、とりあえずこの国の名前。それと、魔王という存在について。後は戦況がどうなっているか、正確に知りたいですね」

私が要求すると、マルクリーヌさんは頷いて話をしてくれます。

要約すると、こうです。

まず、この国の名前はルーンガルド王国。数ある人間が作り上げた国家の一つで、中でも国土が最も大きく、人類の代表的な国家でもあります。地球におけるアメリカのような国でしょう。訊けば、軍事力で周辺諸国に協力もしているとのことでした。

そして魔王について。魔王とは、魔族と魔物を従える隣国の王のことらしいです。別に化物の王様ということではなく、ちゃんとした国のトップであるらしいです。

その魔王の国、魔国側が魔物を率いて、魔物の森からルーンガルド王国に侵攻してきたのが今から十年も前のことだとか。それ以来、国境の魔物の森付近で一進一退の攻防が続いているらしいです。

「つまり、魔王軍との戦いというのは、悪と戦う正義の物語ではない、ということですね？」

「そう言われると、国の騎士としては頷くことはできないな」

マルクリーヌさんはばかすように言いましたが、それは実質肯定したようなものです。

となると、魔王軍との戦いとはつまり、ルーンガルドと魔国の領土問題に過ぎないわけです。単なる利権を争う領土戦争。そう考えると、勇者召喚された学生たちが可哀そうに思えてきます。

「親元から強制的に離されて、二度と故郷にも帰れない。その上、正義の戦いじゃなくて単なる国家間の既得権益を奪い合う戦争に駆り出される。兵器として期待される子供たち。なんとも、酷いことをなさいますね、この国は」

「私も、騎士でなければ乙木殿と同じことを口にしていただろうな」

マルクリーヌさんは疲れたような表情でため息を吐きます。

騎士団長とはいえ、一介の騎士風情がどうにかできる問題ではありません。けれどマルクリーヌさんの正義感が、勇者召喚というものを選んだ国を、それを止められなかった自分を許せないのでしょう。

「お辛かったですしょう、マルクリーヌさん」

「は、えっと、私ですか？」

「子供たちを拉致して戦争に送り込むような真似をしなければなら

ない。そんな立場で苦しみながら、騎士団長だからこそ悲鳴も飲み込むしかない。きつと、とても大変だったと思います」

バイトリーダーという中間で大変な思いをする仕事をしていた私には分かります。マルクリー又さんは必死に頑張っている。それでもどうにも出来なくて、自分を責める。だからこそ、もっと頑張る。疲れて、苦しくて、自分をよけいに責めてしまう。

そんな悪循環に、きつと心が押しつぶされそうになっていたはずです。

ましてや、マルクリー又さんはバイトリーダーなんかとは桁違いの重責を背負っています。

その胸の痛みは、想像を絶するものだったでしょう。

「と、突然、人の心の核心を突くなんて。ずるいですよ、乙木殿」「すみません。でも、頑張っている人には報われてほしい性分なので。せめて労うぐらいはしてあげたくなるのです」

私が言うと、マルクリー又さんは微笑みを浮かべます。

「それは異世界の、こんびに、ばいとリーダーだからこそ出来ることなのでしょうな」

「かもしれませんね」

私もまた、マルクリー又さんに微笑みます。

このキモい私の笑顔でも、少しぐらいは気を安らげる役に立ってくれるでしょうから。

10 ルーンガルド王国（後書き）

本日の連続投稿はここまで。

少しずつ、主人公の乙木が女性にモテはじめます。

乙木の今後が気になる、という方はぜひ、ブックマークや評価をして頂ければ幸いです。

11 ステータスチェック

マルクリーヌさんから説明を受けた後。私は、他の勇者達と同じく王の謁見の間に集められました。

なんでも、一度説明をしてから謁見の間で正式に勇者へ任命し、任務を与えるそうです。

召喚された部外者をさっそく自分の家来のように扱う。なんともまあ、選民的な思想です。下々の人間はどう扱っても良い、と耳に聞こえてきそうなぐらいです。

「さて、勇者諸君。状況については既に説明が済んでおるだろうが、改めて語ろう」

玉座に座っている、王冠を被った偉そうなご年配の方が口を開きます。多分国王なのでしょう。が、何だか気に食わないのでご年配の方とお呼びしましょう。

「かつて、我が国と魔国は共に手を取り合い、歩み寄っておった。協調し、種族の差なく力を合わせて優れた国を作ろうと約束を交わした仲であった。しかし！ 奴らは十年前、突如として我らを裏切った！ 魔物の森から魔物を引き連れ進軍し、国境付近の我が国の民を虐殺。そして今なお多くの土地が奴らに占領され、人間が差別され、苦しみ喘いでおるのだ！ このような悪逆非道、断じて許すわけには行かぬ！」

「ご年配の方が、熱の入った演説を繰り広げます。ただ、その内容は胡散臭いものです。話を聞く限り、あまりにもルーンガルド王国に都合が良すぎます。いくら悪逆非道の国だったとしても、そこまで酷い行いを前触れ無く突然実行するはずがありません。」

恐らくは、何らかの外交トラブルが発展し、解決できない大きな歪みとなり、起こった戦争なのでしょう。」

ですがそれを認めると、自国にも非があつたことになります。だから、ルーンガルド王国は隠蔽しているのでしょう。少なくとも、勇者に対しては。」

勇者は赤の他人です。悪逆非道の魔王軍でもなれば、力を貸してくれる保証はありません。だから偏った話を聞かせ、印象操作をして、言うことを聞かせるつもりなのでしょう。」

見ると、数人は居たはずの大人の姿がありません。現代日本の教育を受けた大人であれば、これが印象操作であることぐらい見抜けるでしょう。そして見抜いた結果、不利益になる発言をされると困るから隔離された。」

あるいは今も何らかの方法で説得されている最中かもしれません。」

そう考えると、私の説明役がマルクリー又さんで本当に良かったです。」

私が色々と考え込んでいる内に、ご年配の方の話が終わったようです。」

「以上の理由から、我々は諸君、勇者の力を借りたい。無論、力を借りる以上それ相応の報酬は約束しよう。望めば望んだだけ、我々

が用意可能な全ての報酬を与えよう」

金、権力、女。いくらでもお前らにやるぞ。だから協力しろ。そういうことですね。

欲望が強く自制心の弱い子供なら、ころつと靡いてしまおうでしょう。

中には反抗する者もいるかもしれませんが、問題は数です。大多数が協力派に傾いてしまえば、たった一人が抵抗しても潰されるだけです。

むしろ他に仲間のいない異世界で、数少ないクラスメイトという絆に縋る者も少なくないでしょう。たとえ本心では危険と分かっているにしても、欲望に傾いたクラスメイトと同様、王国の口車に乗るしか無くなるはずですよ。

ただ、希望はまだあります。勇者称号系のスキルの持ち主。つまり四人の真の勇者です。この四人は他の勇者と比べて特別な存在です。だからこの四人が国王の要請を断れば、全員が戦争に参加させられる運命を回避する目もあります。

ですが、見たところ期待は薄いでしょう。

金浜君は正義感に燃えているようで、やる気にみなぎる笑みを浮かべています。三森さんも国王の話信じているらしく決意に表情を引き締めています。東堂君もやる気満々、といった様子で肩を回しています。

ただ一人だけ、松里家君だけが苦々しい表情をしています。ですが、やはり一人で国王に逆らうのは難しいでしょう。それが分かっているからこそその苦い顔なのでしょう。状況が好転することは無さそうです。

「では諸君、これにて契約は成った。これから我らは一心同体。共に悪しき魔族を打倒し、蹂躪された悲劇の大地に住む人類を解放する戦いに赴こうぞ！」

「ああ、任せてくれ！ 苦しんでいる人がいるなら、助けに行く！ 当たり前のことだからな！」

「そうだね。大変な思いをしている人がいるんだから、力を貰った私たちが頑張らないと！」

「へへっ、腕がなるぜ！」

「君たちがそう言うなら、僕は何も言わないでおくよ」

国王の宣言に、四人がそれぞれ声を上げて応えます。その後、他の勇者たちも口々に決意を口にします。

かなり、危険な状態ですね。やりがい搾取をされる労働者のような状況です。

「さて。これで話は終わりだが、解散する前に一つ済ませておかねばならぬことがある。我々は諸君の力に期待している。だが、漠然と期待だけ持っていては諸君を適切に導き、必要なものを揃えて援助することも難しい。よって、諸君の力をこの場で見せてほしい」

国王の言葉に、勇者たちはざわめきます。力を見せてほしい。それは、ここで戦ってくれ、と言っているようなものです。

「おっと、済まない、勘違いしないでくれ。戦えというわけではない。諸君のステータスを見せてほしいだけなのだ」

言い直された途端、勇者たちのざわめきが収まりました。

ステータス、ですか。そんなものまであるとは。まるでゲームの世界ですね。

12 勇者の素質とおっさんの素質

「ステータスの確認は単純である。ステータスチェック、と念じればステータスが表記された『ステータスボード』が出現する。これに諸君の能力、レベル、スキル、他にも様々なことが表記されている。早速、確認してくれたまえ」

国王が言った途端、勇者たちは言われた通りのことを実行します。そして成功したらしく、全ての勇者たちの目の前に半透明の薄い板のようなものが出現しました。

板は浮遊しながら、勇者たちと適度な距離を保っています。そして板には、沢山の文字が書かれているようです。どうやらこれがステータスボードというものなのでしょう。

私も、早速試してみましよう。ステータスチェック。

【名前】 乙木雄一

【レベル】 1

【筋力】 G

【魔力】 G

【体力】 G

【速力】 G

【属性】なし

【スキル】 ERROR

「どうやら、あまり良くないのではないかと思えます。Gというのは、普通こういう表記の場合はかなり低い数値に使うものでしょう。下手をすれば、最低値です。」

「では諸君。順番に担当の者が確認し、内容を記録していくので、そのままではばらく待機してくれたまえ」

国王に言われたので、私も仕方なく酷いステータスを晒したままで立ち尽くします。

やがて、近くにいた担当の者らしき人が私のステータスボードを覗き込みます。そして眉を顰めて、手に持った紙にいろいろ記載していきます。

そうやって、多くの人の情報が記録されていきます。

これは正直、かなりヤバイのではないかと思えます。この国はどうやら、完全に勇者を手中に収めたいらしいです。その能力でさえ管理し、把握しておこうというのでしょうか。

戦争の道具として管理し、保管し、時に使用する。そんなことになれば、まさに兵器です。人間扱いではありません。

ステータスの記録は勇者たちの後方から順に始まったので、ようやく前の方に集まっている人の記録が始まりました。

つまり、勇者称号の四人の記録もです。

「う、これはすごい！ さすが真の勇者様！」

記録担当の人が、金浜君のステータスを覗いた瞬間に声を上げます。

「そ、そんなに凄いのか？」

「凄いに決まっています！ どうぞ真の勇者、金浜様！ 拡大と念じれば、ステータスボードは巨大化します。そのステータスをこの場で人々に知らしめて下され！」

「え、えつと、それじゃあ」

金浜君は目を瞑って念じたようです。次の瞬間、ステータスボードは巨大化します。最も後方にいる私でも文字が読める大きさでした。

【名前】 金濱 蛍一

【レベル】 1

【筋力】 S

【魔力】 S

【体力】 S

【速力】 S

【属性】 光 炎 治癒 闘気

【スキル】 勇者

私とは大違いのようです。Sという表記は、こういうものと最上級の数値を指す場合がほとんどです。

記録担当の人の驚き具合を見るに、私の推測は間違っていないでしょう。

「このSってというのは、そんなに凄いのか？」

「もちろんですとも！」

金浜君が問いかけると、興奮した様子で記録担当の人が解説します。

「通常、人間はどのステータスにおいてもAが限界だと言われています。それがレベル1にもかかわらず、既にSへ到達しております。これはとんでもないことですぞ！ しかも、属性は『なし』が普通であり、一つあれば魔法使いとして優秀、二つは天才、三つは奇跡とまで言われております！ それを金浜様は一人で四つ！ 奇跡を越えた奇跡でございます！」

記録担当の人の興奮した言葉のお蔭で、金浜君の凄さがよく分かりました。確かに、それだけ図抜けていれば興奮もするでしょう。なにしろ、そんなとんでもない人間兵器を手にしてしまったのですからね。

13 他の者たちの素質

「Aが人間の限界で、Sがそれ以上ってことなら、ステータスの最大値はSなのか？」

金浜君は素朴な疑問を浮かべます。

「それについては、違うとお答えせねばなりません。人間の限界はAですが、魔物や魔族にはSやSS、つまりダブルエスといった能力を持った者がおります。さらには、歴史上にはSSSSS、つまりファイブエスという能力を持っていた龍が存在したという記録さえ残っております。よって上限はSではないのです」

記録担当の人の解説は為になりますね。ステータスはSになってもまだ伸びるということ。つまり、金浜君はまだまだ強くなる。そうなる、それこそファイブエスに到達してもおかしくないでしょう。

さすがはチートの中のチート。勇者スキルの持ち主です。

「金浜様だけではありませんぞ！」

盛り上がり割り込むように、今度は別の記録担当の人が声を上げます。

「聖女三森様、剣聖東堂様、そして賢者松里家様も飛び抜けたステ

「タスをお持ちのようですよ！」

「ほう。三人とも、ステータスボードを拡大してくれぬか？」

傍観していた国王が急に口を開き、三人にお願いします。三人は頷きあつて、ステータスボードを大きく拡大します。

私からも見える大きさになって、その凄さがよく確認できてしまいます。

【名前】三森沙織

【レベル】1

【筋力】A

【魔力】SS

【体力】A

【速力】A

【属性】光 水 治癒 支援 結界

【スキル】聖女

【名前】東堂陽太

【レベル】1

【筋力】SS

【魔力】A

【体力】S

【速力】S

【属性】 闘気

【スキル】 剣聖

【名前】 松里家勇樹

【レベル】 1

【筋力】 A

【魔力】 SS

【体力】 A

【速度】 A

【属性】 炎 雷 大地 冷気 風

【スキル】 賢者

三人のステータスも拡大されて、合計四枚のステータスボードが巨大化している状態です。誰もがその数値を目にして唖然とします。

これが勇者称号系スキルの力というわけです。圧倒的なステータス。そして、無数のスキルの効果が称号にはまとまっているのです。ここまでの違いを見せつけられたら、たとえ同じ勇者同士でも絶句する他無いでしょう。

けれどそんな中、不審な動きをする人影がありました。

有咲さんの友達であり、クラスの不良生徒の一人、野村浩一君で

す。

「おい、見るよ！ 金浜とは違う意味ですげえステータスのやつがいるぜ！」

野村君は言いながら、私を指差します。

確かに私のステータスは真逆の意味ですごいのでしょうか。

「おいおっさん！ お前のステータス見せてやれよ！」

「はぁ。まあ別にかまいませんが」

私は特に逆らうことも無く、ステータスボードに拡大、と念じます。するとステータスボードは金浜君たちと同じくらいまで拡大されて、誰の目からも確認できるサイズになります。

そして、途端に勇者たちからあざ笑うような声が聞こえてきます。

「全部Gって何だよおっさん！ おもしろすぎんだろバーカ、腹いてえ！」

野村君はわざとらしいくらい笑っています。確かに能力がGで揃っているのは面白いぐらいですが。そこまで笑うほどでしょうか？

しかしこれは、逆に都合がいいですね。

私の低すぎるステータスを見て、自信を過度に喪失していた子たちが元気を取り戻しています。自分より下の人間を見つけると、人は少しはマシな気分になるものです。

子供たちが変なストレスを感じていれば、そこから王国の人間に啓発、啓蒙されて洗脳されかねません。人を見下す形であっても、

多少は元気のある今の方が安全でしょう。

それに、これだけ大々的にステータスの低さが露呈したのです。私は上手く行けば、王国の企みから逃れることが出来るかも知れません。

本当に、都合の良い展開になってきました。

14 呼び出し、そして追放

ステータスの確認と記録が終わると、勇者たちは解散となりました。それぞれが部屋を与えられているらしく、謁見の間から自室へと戻っていきます。

そんな中、私だけは呼び止められ、謁見の間に残されました。

「さて、乙木君。おおよその事情はマルクリーヌから聞いた。お主は異世界転移の秘術に巻き込まれ、望まれてもいないのに女神様の領域へと至ってしまった。その罰として女神様から不要とされたスキルを与えられ、この世界へと落とされた。相違無いな？」

国王の言い方は、かなり悪意のある方向に捻じ曲げられています。さすがに、このまま頷くわけにはいきません。

「女神様のいる場所に至ったことは事実です。しかし、私が貰ったスキルは罰として与えられたわけではありません。この世界で生きる為の力として、女神様から正式に与えていただいたものです。確かに勇者様たちには不要なスキルでしょうが、何も持たない私のような者には必要でございます」

私がかどうか国王の発言に反論すると、国王は嫌そうに眉を顰めます。

やはりこの人は国王と呼びたくありませんね。ご年配の方です。それもたちの悪い方。

「ではこうしようではないか。勇者に不要なスキルを得たお主もまた、勇者にとつては不要な存在である。よってこの王宮から追放処分とし、今後勇者に近づくことを一切禁ずる。良いな？」

正直、かまいません。が、ここであつさり引くと不自然です。それにできれば、王宮でしか知ることの出来ない情報を少しでも多く集めておきたい。

いくらか反論を返しておきましょう。

「それは、困ります。私はまだこの世界のことを何も知らぬ身です。いきなり野に放り出されたとなれば、生きてゆける保証もありません」

「だが、生きてゆく為に女神様からスキルを授かったのだから？
何の問題もあるまい」

確かに国王の言う通りです。女神様から貰ったスキルを罰でないと語るために言った言葉が仇となりました。

しかし、反論の材料はもう一つあります。

「女神様の意図が第一とおっしゃるのでしたら、この身が確かに勇者様と同じ場所、王宮へと送り届けられた事実も鑑みて頂きたい。それが女神様による慈悲の一つであるとすれば、嬉々として私を追い出すのは女神様への冒瀆とも言えます。違いますか？」

この言い分は、正直半分以上が賭けに近いものです。この世界でどの程度、女神様が信仰されているのか。あるいは、女神様を祀る宗教団体がどれだけの力を持つのか。それによって、国王に対する牽制としての効果がまるで変わります。

私の言葉に迷いを抱いたらしく、国王は何人かの側近を呼び寄せ、耳元で囁くように相談を始めました。

そして数分の間を置いて、ようやく私の処遇が決まったようです。

「お主の主張も分かった。しかしやはり、お主のスキルが勇者様にとって不要であり、場合によっては害となる可能性も考えると、手厚く保護するというわけにもいかぬ。よって、追放処分は確定。しかし執行は一週間後とする。その間、お主にはマルクリーヌを監視役としてつけ、王宮での活動を許す。市井での生活手段を整えるなり何なり、自由にすると良い」

おおよそ、望んだ通りの展開です。ただ一週間という期限は少し短いですね。寝る間も惜しんで情報を集めなければいけなさそうです。

「感謝致します、国王陛下」

私は仰々しく、国王への感謝の意を示す為に頭を下げました。

15 生きるための知識

私の追放が決まり、ようやく自由に行動が出来るようになりました。

マルクリー又さんの監視付きではありませんが。しかし、この世界についての調べ物が出来るのは大きな進展です。しかも王宮の資料を読めるのです。確実に私の助けとなるでしょう。

問題は、期限が一週間であること。十分に必要な知識を詰め込むことが出来るか不安です。

時間との勝負。一刻も早く、調べ物を始めてしましましょう。

「というわけで、マルクリー又さん。すみませんが、魔法やスキルについての知識を纏めた本などが置いてある場所にご案内頂けませんか？」

「何が『というわけ』なのか分からんが。まあ、構わんさ。乙木殿には自由にさせるよう仰せつかっているからな」

謁見の間を出てから早速、私はマルクリー又さんをお願いをします。

そして案内された場所は、大図書室という場所でした。多くの資

料はこの部屋に纏められていて、魔法やスキルについても基礎から応用まで詳しく学べるそうです。

「助かりました、マルクリー又さん」

「いい、気にするな」

感謝もそこそこに、私はすぐに調べ物に取り掛かります。

不思議なことに、異世界の文字はまるで私が読み慣れた言語のようにすんなり理解できてしまいます。まるで日本語のような感覚です。

これは恐らく、転移した人が全員そうなのでしょう。言葉の壁とこののはとても大きいですからね。そこを女神様がうまく調整してくれたのでしよう。

私は本の背表紙から内容を推察し、次々と魔法やスキルに関する物だけを手にとっていきます。大量の本を抱え、読書の為に用意されている机まで運びます。

「こ、こんなに一度に読むのか？」

「いえ、読みませんよ？」

私はマルクリー又さんの疑問を否定します。

「恐らく実際に目を通すのはこの中の一割にも満たないと思います。数だけ集めて、ざっと目を通して、理解しやすそうなもの、有用そうなものだけを厳選するんです。そうして選んだ本を集中して読み込むのが最も手っ取り早いですから」

「なるほど。だが、それだと読まなかった本に重要な情報が残されていた場合はどうする？」

「どうもしません。時間いっぱい、読めるだけの本を読むだけです。」

それで手に入らなかつた情報は、取らぬ狸の皮算用ですよ」

「とらぬた、ぬき？ 分からんが、要するに全力を尽くしてダメだったものは諦めるしか無いといったところか？」

「まあ、そんな感じですね」

次々と本の中身を物色しながら、雑な会話をマルクリー又さんと繰り広げます。

その後、三十分ほどかけて本を選び抜き、そして選んだ本を順に読んでいきます。読むだけなのでマルクリー又さんは暇になったのか、一緒になつて適当な本を読み始めました。

そうして大図書館の閉室時間が近づいた頃になつて、ようやく今日厳選した本を読み終わりました。

「どうだ、有意義だったか？」

「はい、とても」

私にこりと笑いながら、マルクリー又さんの問いに頷きます。

「明日はここに無い本を読むのだろうか？ この調子でいけば、一週間と待たずに大図書館の魔法書、スキル書を読み尽くしてしまうだろうな」

「あ、それは無いです。また同じ本を厳選し直しますので」

私が言うと、マルクリー又さんは妙な視線でこちらを睨んできます。

「お前の行動は私には予測が難しい。理由を説明してくれ」

「えっと、単純な話です。今日読んだ本のお蔭で、私の知識は増しました。その上で、今日の厳選に漏れた本も洗い直します。すると恐らく、新たに興味の湧く本が出てくるはずなんです」

私の説明に、マルクリーヌさんは驚いたような顔をします。そしてすぐに頷き、納得した様子で唸ります。

「なるほど。そうすれば一冊の漏れも無く、必要な本を厳選できるというわけか。繰り返し篩にかけていくようなものだな」

「はい、そんな感じですね」

「えらく丁寧な手順で本を読むのだな、乙木殿は」

「はあ、まあ。趣味でしたので」

沢山の本をどれだけ効率よく読んでいくか。それは大学生時代に散々チャレンジしました。結果本の読み過ぎで授業に出なくなっただけで、留年、退学というコースに入ってしまったが。

15 生きるための知識（後書き）

本日の更新はここまで。

そろそろ、乙木の無双が始まります。

乙木の活躍が楽しみ、という方はぜひブックマークや評価をして頂けると幸いです。

16 魔法とスキル

五日ほどかけて、かなりの本を読みました。そのお蔭で、魔法とスキルについてかなりの知識を蓄えることが出来ました。

まず、魔法とスキルの違いについて。

スキルとは、条件の達成による恩恵の設定です。何らかの条件があつて、それを満たした時に得られる恩恵も設定してある。それがスキルというものの構造です。

例えば闇魔法スキル。条件は十分な魔力の消費。そして得られる恩恵は闇魔法の発動です。これが例えば生命吸収のスキルであれば、条件は対象への接触。そして得られる恩恵は体力の吸収です。

重要なのは、条件と恩恵の間に因果関係はありません。世界のルール、つまり物理法則のようなものを無視した、新たな限定的な上位ルール。それがスキルというものと言えるでしょう。

そして、魔法とは手順を追うことにより発生する現象です。

例えば闇魔法であれば、必要な魔法陣を描き、魔力を流すことで一定の魔法現象が発生します。

これはスキルとはことなり、この世界そのもののルールに則っています。つまり物理法則のようなものに従って発生する現象で、ちゃんと前後に因果関係があります。

これを知ること、私は重要な知識を得ることが出来ました。

まず、魔法は正しい手順を踏めば、スキルを前提とする特殊な魔法を除いて全ての属性を全ての人間が使えるということ。

魔法陣を描き、魔力を流す。これだけが魔法の発動に必要な行為です。そこに属性の適性やスキルの有無は関係ありません。この世界がこの世界である限り、必ず起こせるのです。

では、ステータスにおける【属性】とは何か。これは、言わばスキルに近いものです。属性持ちの人間は、なんと魔法陣を介することなく魔法を発動できるのです。

例えば、属性なしの私は闇魔法のダークボールを発動するために、魔法陣を書いてそこに魔力を流し込むという過程が必要です。

ですが、闇の属性持ちの人間はその存在が闇魔法の魔法陣のようなものなのです。ですから、魔力を自分の身体に流すだけで魔法が使えます。

ただ、身体を魔法陣の代わりにするため、魔法一種類ごとに身体が慣れていかないと、ちゃんと魔法は発動しません。そこが難しいところだったりします。

まあ、私は属性なしなので、属性魔法については何の関係も無い話なのですが。

重要なのは、魔法陣さえ知っていればどんな魔法でも使えるという事です。

この知識によって、私は魔法を使えるようになるべきだと判断しました。

理由は幾つかありますが、最大の理由は私のスキルを活かす為です。

私は無数のスキルを持っています。スキルとは条件を満たさなければ恩恵が得られません。そして、私のスキルの多くは魔物や植物、鉱物から得たものだと言っていました。

そうになると、スキルの効果を得るための条件をそもそも満たせないことになります。つまり私は、持っただけでも効果の無いスキルを大量に所持しているのです。

この、大量の不良在庫を利用する方法は無いかと考えました。スキルの発動条件を変える方法は無いかと調べましたが、存在しませんでした。

逆に私がスキルの発動条件に合わせて肉体を変化させる、という手段も考えました。が、それだと非効率です。使いたいスキルが変わるたび、身体を作りかえる魔法を使っただけではキリがありません。というか、どんな副作用があるかわかったものじゃありません。

どうしたものか、と悩んでいるところで見つけた魔法。それが方向性を決めました。

その名も、付与魔法。

非常にシンプルな魔法で、属性やスキルを物品や他人へ付与するだけの魔法です。

本来の使い方は、自分が持つスキルや属性を、仲間に付与して分け与える目的で使います。

ただ、生物は生命活動による新陳代謝があるせいで、付与したスキルや属性は時間が経つと剥がれて、元に戻ってしまいます。

しかし、例えば石や鉄にスキルを付与すると、素材が劣化して壊れるまでスキルは維持されます。属性もまた、維持されます。

けれどこのやり方は主流じゃありません。

原因は属性とスキル、それぞれ異なります。

属性付与は、属性という性質が特殊であるため、付与可能な物質が限られてくるのです。また、付与するための付与魔法の魔法陣も複雑化します。

そのため、魔法銀、通称ミスリルと呼ばれるような特殊で優秀な金属に属性を付与した高価な魔法剣ぐらいでしか使われません。

しかも物質には慣れというものがありませんから、熟練のよく鍛えられた属性を持つ人から付与しないと、そもそも魔法すら発動しません。

そして優れた属性使いは、自分の力の優位を守るため、滅多に魔法剣への付与には協力しません。

これが、物体への属性付与が流行らない理由です。

そして、スキル付与が流行らないのはもっと深刻です。

スキルの場合は、大抵の物体に付与が可能です。けれど、付与すること自体に何の意味もないのです。

何しろスキルには発動条件があります。人間のスキルを鉄や木や花や石に与えたところで、そもそも発動条件を満たさないのです。

つまり、ちょうど私の悩みと同じ現象が起こるわけです。

よって、物体へのスキル付与は誰も使おうとしません。

けれど、ここに例外が居ます。

そう、私です。

私は、人間では条件を満たせない無数のスキルを持っています。

そしてその数々のスキルを、条件を満たせる物質に付与魔法で付与すればどうなるか？

単なる石が鉄より硬い礫になります。
ボロの鉄剣が魔物を豆腐のように切り裂けるようになります。

もちろん、まだ実際に付与をして全てを試したわけではないので、
そこまで上手くいくかは分かりません。

けれど、私の数々の廃棄スキルを有効活用する可能性があるとしたら、それは付与魔法だけでしょう。

そこで私は、付与魔法を習得することにしました。
そのために、調べ物を五日で切り上げたのです。

17 付与魔法の教師

六日目の朝、私はさっそく付与魔法を学ぶため、マルクリーヌさんに頼み込みます。

「というわけで、マルクリーヌさん。付与魔法を習得したいのですが」

「お前はいつも突然だな、乙木殿」

呆れたようにため息を吐くマルクリーヌさん。でも、こうして本題から入ったほうが手間がなくて良いでしょう。これはお互いの為の合理化の結果です。

「魔法を学びたいなら、宮廷魔術師のシュリヴァを紹介しよう。騎士団長の私からの頼みなら、奴も聞いてくれるはずだ。ましてや、乙木殿を不自由にさせるなという王命もあるからな」

そう言っつて、マルクリーヌさんは早速私を宮廷魔術師のところへ案内してくれます。

宮廷魔術師シュリヴァさんは、常に王宮の西側から伸びる尖塔の最上階にある研究室に引きこもっているらしい。

色々と、恨みがましい言葉を一緒に並べながらマルクリーヌさんは説明してくれました。

奴は変態だ、気をつける。乙木殿は恐らく奴の好みに合致する。これまで奴の後始末に奔走した回数は何れも数知れない。そんなことをマルクリーヌさんは言い続けます。

私も女神様に変態のお墨付きを買っているので、もしかしたら仲良く出来るかも知れませんね。

マルクリーヌさんの愚痴を聞き続けるうちに、シュリヴァさんの研究室に到着しました。

まずはマルクリーヌさんが扉をノックします。

「シュリヴァ。私だ、マルクリーヌだ。用件があつて来た。別にお前を罰する任務ではないので、ここを開けてほしい」

何やら妙な物言いで頼みを告げると、ゆっくりと扉は開きました。どうやら自動ドアのようです。内開きで助かりました。外開きならマルクリーヌさんがドアにしばかれるところでしたね。

いや、マルクリーヌさんはこのドアの構造を知っているはずですから、外開きなら距離を置いていたのでしょう。恐らく。

「入るぞ」

マルクリーヌさんが言って、室内に踏み込みます。それに続き、私も部屋に入ります。

「やあやあマルマル。ボクに用事だなんて、急にどうしたのかな？」

部屋の奥から声がします。

視線を向けると、そこには幼い少女のような見た目の人物が立っていました。可愛らしい、ボブカットの青い髪が印象的です。

少女にしては不釣り合いな、立派な刺繍の施されたローブを身にまとっています。

「シユリヴァ。今日の頼みは私からではない。こやつ、異世界から召喚された乙木殿の頼みなのだ」

「まじ？ 異世界人の頼み？ 聞く聞く、聞いてちょう！」

シユリヴァさんは部屋の奥から急にこちらへ駆け寄って、私の側で立ち止まります。

少女らしい身長で、シユリヴァさんの頭は私のお腹辺りまでしかありません。

「キミが異世界人かな？」

「はい。乙木雄一と申します」

「オトギューウィッチ、ううん、かわいくないからキミは今日からオトギンだ。そう名乗るといいよ」

「はあ、分かりました。異世界人のオトギンです」

「物分りがいいね、オトギン。そういう子はボク、大好きだよ！」

少女にしか見えないシユリヴァさんが、私に抱きついてきます。

身長差のせいで、シユリヴァさんの胸辺りに私の股間が当たります。

困ってしまい、ついマルクリーヌさんの方を見ます。

「乙木殿、気にしない方がいい。こいつはこの見た目で既に齡百歳を超えるご老人だ。しかも、このなりで男なのだ」

「男ですか、それはまた」

珍しい外見の人がいるもんですね。さすが異世界です。

18 オトギンとシュリ君

「ボクがヨボヨボ老人で男だって聞いて、動揺しないとはなかなかやるねオトギン」

何やらシュリヴァさんに感心されてしまいます。

「いえ、単に異世界ならシュリヴァさんのようなことも普通にあるのかな、と思ひまして」

「ううん？ 普通に珍しいけど？」

「そうなんですか。では以後驚くように気をつけます」

「どっちにしろ驚いておらんではないか乙木殿」

マルクリーヌさんがツッコミを入れてきます。はて、私は何か変なことでも言ったのでしょうか。

「で、オトギンのお願いって何かな？」

シュリヴァさんが、私の股間に胸を擦り付けながら無邪気な笑顔で訊いてきます。

相手が男と分かっているにも、この可愛い顔立ちは独身男性で童貞の私にはきついですね。

「実は付与魔法を教えていただきたくて」

「へえ。付与魔法ねえ。不人気魔法なのに、何か理由でもあるのか

な？」

理由を問われたので、私は一部始終を話すことにしました。女神様に廃棄スキルを貰ったこと。廃棄スキルは人間向けではないので条件が満たせず、発動しないこと。付与魔法で物体にスキル付与すれば、有効活用できるのではないかということ。

細かく話していくうちに、シュリヴァさんは真剣な表情に変わっていきます。やはり魔法が本職の方です。こうした話題には興味が引かれるのでしょうか。

「なるほど。確かにオトギンが自称してる状況なら、付与魔法はとも有効だろうね。実はボクも昔、スキル付与を有効活用しようと試行錯誤したことがあってね。キミと近い発想で実験したことがあるんだ。高度な金属が持つスキルを、低俗な金属に付与する実験。結果は成功だったけど、魔法陣の構成の難しさと魔力コストから意義が低いと判断して、お蔵入りしたんだ」

「どうやら、私の発想は宮廷魔術師も一考するほどのアイデアだったようです。」

「でもキミが自分のスキルを物質に付与するなら、それはとても低コストで難易度も低い。二日どころか、一日あればものにできるだろうね」

「おお、それは助かります」

「ついでに、付与魔法と似た体系の魔法陣も教えてあげるよ。きっと王宮を追い出された後も役に立つよ」

「ありがとうございます、シュリヴァさん」

「だから、そのかわりにね？」

シュリヴァさんが、妖艶な笑みを浮かべて私に擦り寄ります。

「ボク、オトギンの童貞がほしいなあ〜?」

媚びるような声で、シュリヴァさんがおねだりしてきます。

「はい、構いませんよ」

私は取引を受け入れます。

するとどうでしょう。話を聞いていたマルクリーヌさん。そして取引を提案した本人のシュリヴァさんでさえ顔を引き攣らせ、硬直してしまいます。

「あの、オトギン?」

「はい何でしょうか」

「えっとね、ボ、ボクはオトギンのさ、ど、童貞を貰おうって言うてるんだよ?」

「はい、把握しております」

「つまりだよ? オトギンはボクとえっちなことをするわけだよ?」

「そうですね」

「いいの? ボク男だよ? お爺ちゃんだよ? そんなあっさり男の尻に捨てていいの?」

「問題ありませんが?」

「なんでだよお!」

「私は恥ずかしながら、三十五歳にもなりながら未だ童貞でして。正直、そろそろ可愛ければ男でもいいや、という心境になりつつあります」

「なにそれ、想定外なんだけど!」

シュリヴァさんが何やら怒っていますね。私は提案を呑まない方

が良かったのでしょうか？

「乙木殿よ。お前のことを私は尊敬したほうがいいのか、軽蔑したほうがいいのかわからなくなってきたぞ」

マルクリーヌさんまで私を非難します。どうやら、選択を間違えたようです。

「シュリヴァさん、不快にさせたのなら謝ります。申し訳ありませんでした」

「へっ？ い、いや？ 別にボクは気にしてないっていうか、むしろ嬉しいっていうか、そもそも少しも恥ずかしがってくれないオトギンに困惑してるっていうか」

「やはり私のせいですか。男女関係の情緒に疎いものでして。申し訳ありません」

「いや、そういう感じの話じゃないんだけどなあ？」

シュリヴァさんは困ったように唸ります。

「ひとまず、私では先程の取引条件ではシュリヴァさんを満足させることができないようです。申し訳ないのですが、新しい条件を提示していただければと思います」

「う、うん。わかったよお」

シュリヴァさんは考え込むように頭を押さえます。やはり無理な提案をしてしまったようです。もしかすると、付与魔法を学ぶのは望み薄かもしれませんが。

「じゃあ、新しい交換条件！ オトギンはボクのことを、シュリ君って愛称で愛情込めて呼ぶこと！ これで付与魔法を教えてあげる

よ！」

「それだけでいいのですか？」

「うん、おっけーだよ？」

「ありがとうございます、シュリ君」

私はシュリヴァさん、ではなくシュリ君の頭を撫でます。愛情を込めると言われたので、行為でそれを示してみました。

「うへへえ。ありがとうオトギン！」

満足げなシュリ君を見る限り、どうやら正解のようです。

そこで急に、マルクリーヌさんがため息を吐きます。

「よく分かった。乙木殿。お前もシュリヴァと同じくアホで変態だったのだな」

なんと。女神様に引き続き、マルクリーヌさんにまで変態の太鼓判を押されてしまいました。困りましたね。原因がよく分かりません。これでは撤回のしようもありません。

仕方ないので変態の称号を甘んじて受けましょう。

「ありがとうございます、マルクリーヌさん」

「なぜ感謝するのだ！ 本物の変態みたいではないか！」

19 付与魔法使いのおっさん旅立つ

シユリ君から付与魔法を習い、私はいよいよ王宮を出ていく準備を整えました。

付与魔法と魔法陣の似ている回復魔法、支援魔法についても軽く学び、簡単な最低限のものだけは使えるようにもなりました。

ただ、魔力がほとんど無いので一日に一回使えば終わりといった感じですが。

一方で付与魔法は効率が良らしく、なんと一日に十回も付与できます。

シユリ君には、物質へのスキル付与が一日十回しか出来ない奴なんて初めて見た、とかそういったことを言われていましたが。

何にせよ、私は二日かけて魔法を学び、これからの生活の目処についてもおおよそ立てることが出来ました。

なので、今日はいよいよ旅立ちの日です。

静かに身支度をすませ、最低限の道具だけを王宮に用意してもらい、それを袋に詰めて背負って出ていきます。

特に親しい人は勇者たちの中にもいませんから、見送りが無いのは当然です。

そうしていよいよ、王宮の門を潜ろうとした時でした。なんと、門の前で誰かが道を塞ぐように立っています。

「えっと、シユリ君？」

「やほーオトギン！」

立っていたのは、シユリ君でした。見送りに来てくれたのでしょうか。だとしたら、嬉しいです。王宮を離れてしまえば、もう二度と会うこともないでしょう。なのに私を見送ってくれるというのは、それだけ私との出会いを大切に思ってくれている証拠です。ついつい、シユリ君の頭を手をおいて撫でてしまいます。

「でへへ、オトギンは撫でるのが好きだねえ」

「はい。シユリ君を撫でるのは好きですね」

そうして、一分か二分ぐらいはシユリ君の頭を撫でていました。しかし、さすがにいつまでもこうしているわけにはいきません。私は手を離して、シユリ君と向かい合います。

「ではシユリ君。この二日間、お世話になりました。教わった魔法を活かして、王宮を出てからも上手くやっていこうと思います」

「うん、頑張つてね。オトギンはボクの数少ない弟子なんだから」

「弟子なんですか？」

「そういうことにしといてあげるよ？」

「ありがとうございます」

肩書があるというののは、どこかで役に立つ機会があるかもしれない。ありがとうございます。おきましよう。

「さて、オトギン。ボクがわざわざここに来たのは、実は見送りのためだけじゃないんだ」

「そうなんですか？」

「うん。実はオトギンに餞別をあげようと思ってね」

言つと、シュリ君は背負っていた背囊らしきものを私に手渡してきます。中には多少物が入っているように見えますが、妙に軽く感じます。

「まず、この背囊はアイテム収納袋っていう魔道具なんだ」

「魔道具、ですか」

魔道具については、時間が足りずにあまり大図書館でも調べることが出来ませんでした。なので、私の知識としては薄い部分です。

「この袋の中には、見た目よりも沢山のものが入る。そうだね、このレベルだとせいぜい一人用のお風呂の湯船と同じぐらいの容量になるかな？」

「けっこう入りますね」

「そうでもないよ。一般的な収納袋はこの三倍から五倍ぐらいは入るから。餞別用の、オトギンにあげてもこっちが痛くないやつだからね。性能は微妙だよ」

自分で自分の用意した餞別を語るとは。シュリ君はやはり、変なところがありますね。変わった子も嫌いじゃありませんよ。

と、そこまで考えて思い直します。シュリ君は子供ではありません。この見た目で勘違いしてしまいますが、立派なご年配の方です。子供扱いはいけませんね。きちんと敬いましょう。

「ん、急にまた頭を撫でてどうしたのオトギン？」

「シュリ君を敬っております」

「そっかそっか。ボクを敬いたまえ」

と、話が逸れてしまいます。

20 シュリ君とアレの約束

シュリ君の頭を少しだけ撫でたら、すぐに話に戻ります。

「で、その収納袋には少しのお金といくらか魔法に使う小道具、それにちよつとしたものが入ってるんだ」

「ちよつとしたものですか」

「うん。待ってね、今取り出すから」

そう言って、シュリ君は収納袋の中に手を入れて、がざがざと中を探ります。随分手を深く飲み込んでいますが、袋が変形することはありません。腕を動かしても袋は萎んだ形を維持しています。どうやら、本当に特殊な袋のようですね。

「あつたあつた、これこれ！」

そしてシュリ君は、一冊の本を取り出しました。表紙には手書きで『付与魔法 記録』と書かれています。それ以外は何もありません。

「これは？」

「ふふふ、聞いて驚くなかれ。これはこのボクが昔付与魔法を研究した時に調べたデータを纏めたノートなのだ！」

「ほうほう」

「ちよつとは驚いて！ ねえ、オトギン素直すぎるよ！」

「はあ、でも驚くなかれと言われたものですから」

「言葉のあやまってやつだよ！」

「では今後多少驚くように心がけます」

答えながらも、私はシュリ君から本を受けとって中身に目を通します。確かに、手書きらしい文字で複雑な付与魔法に関する情報がたくさん記載されていました。

「人に見せるつもりで作ったものじゃないから読みづらいかもしれないけど、これから付与魔法を頼りに生きていくオトギンには必要なものかと思つてね。特別にプレゼントするよ」

「いいのですか？」

研究者の研究結果を、こんなにあつさり渡してしまうのは良くないように思います。

「だから言つたでしょ、オトギンはボクの弟子だつて」

なるほど。つまり、私は弟子という肩書きがあるので問題ない、ということでしょう。

恐らく、シュリ君は宮廷魔術師ですから研究内容も国の資産の一部です。となれば、情報統制もあるでしょう。迂闊に大事な研究結果を渡すことは出来ないはずですよ。

となれば、弟子という肩書きも必要なものになるのでしょうか。

しかし、こんな私の為に大切な研究結果を一部分とはいえ渡してくれるなんて。シュリ君には、何とお礼を言えばいいのか分かりません。

「ありがとうございます、シュリ君。本当にお世話になってばかり

で、お返しできないのが申し訳ないです」

「そう。だったらさ、一つお願いがあるんだけど」

シユリ君が顔を赤らめながら言います。

「何でしょう?」

「そ、そのお。ほら。オトギンって童貞って言ってたでしょ? も、もしその気があったらさ。よかつたらボクと、そういうことしてくれないかなあ、って? 思ったり? する感じだったり?」

「いいのですか? それは私にとってご褒美になります」

前のめりに訊いてしまいます。シユリ君はどう見ても美少女に見えないお爺さんです。となれば、私としては性行為に及ぶのもやぶさかではありません。童貞の歪んだ性欲を舐めてもらっては困ります。

「も、もちろんボクとしては、オトギンが嫌じゃなければ、なんだけど」

「嫌なわけありません。童貞を舐めてるんですか?」

「なんか変に自信あるね、オトギン。でも、嬉しいよ! ボクを最初っから受け入れてくれる人なんて、初めてだから」

顔を真赤にして照れるシユリ君。可愛らしいですね。お爺さんだということをつい忘れてしまいます。

「じゃあ、オトギン。またいつか、ボクの心の準備ができれば、ボクのお尻でオトギンの童貞を捨ててくれるかな?」

「もちろんです」

前のめりに即答します。

「ありがとう、オトギン！ 約束だからね！」

「はい、約束します」

それが、最後の会話となりました。シュリ君は嬉しそうな笑顔を浮かべて、王宮の方へと戻っていきます。

「うへへ、三十五年モノのダメそうなおっさんの童貞。じゅるり」

シュリ君が何かを言いながら立ち去っていきましたが、残念ながらよく聞こえませんでした。

さて。シュリ君から素晴らしい饞別も頂きました。童貞を捨てる予約まで出来てしまいました。幸先が良い、順風満帆とはこのことですな。

私は気分良く、王宮から追放されて城下町へと歩いていくのでした。

20 シュリ君とアレの約束（後書き）

本日の連続投稿分はここまでで終了です。

変態シヨタジジイ、シュリヴァ君はいかがでしたでしょうか？

ちなみに、メインヒロインではありません。

サブヒロインです。

少年が性的に好きな私の友達の間さんは、ぜひブックマークや評価の方をして頂けると幸いです。

21 冒険者ギルド

王宮を離れて城下町を歩く私ですが、目的地は決まっています。それは、冒険者ギルド。

まず、この世界は魔物の徘徊や魔法という存在などが理由で未開の地が多く残されています。

そんな未開の地にも、様々な資源があります。むしろ、人が住めないような環境だからこそ、魔法的に優れた資源が数多く眠っているとも言えます。

そうした貴重な資源を採取する為、そして何より魔物そのものを資源として狩る為、それを専門とする労働者が存在します。

それが、冒険者という存在です。

そして冒険者ギルドとは、元々はほとんどならず者同然だった冒険者をまとめ、管理し、規則をもって統率した組織のことです。

好き勝手やっていた個人事業主を集めて契約し、決まったフォーマットで働かせることで効率化。そういうイメージで考えると分かりやすいでしょう。

もっと言えば、フランチャイズのようなものです。冒険者だけでは困難な仕事を、ギルドという大きな組織が肩代わりする。その代わり、冒険者にはギルドが指定する一定のルールを守って働いてもらう。そして冒険者が上げた利益の一部がギルドのものとなる。

ここで重要なのは、冒険者は元々ならず者のような存在だという

ことです。未開の地に入り、魔物を殺し、貴重な資源を売り歩く。蛮族のような存在が、本来の冒険者だったのです。

しかし冒険者ギルドは、そんな蛮族達を管理する必要性がありました。その過程で必要だったことの一つが、身分証です。

決まった街に滞在せずあちこちを渡り歩く冒険者は、ある街では信頼される冒険者だとしても、別の街では新参のならず者です。これでは実力のある冒険者が働く上で、極めて不合理です。一から信頼を築き上げるのは、大変な作業になるからです。

そこで、ギルドが冒険者の身分、そしてその実力をランク制で保証します。するとその冒険者は、どの街に行ってもある程度の実力があることが一発で分かります。すぐに実力者向けの仕事を任せることが出来て、効率的なわけです。

このシステムは、現代日本のフランチャイズ展開する企業でも見られるものです。

ある店舗の従業員の技術を、企業がレベルやランクといった形で保証します。すると、例えば近隣の同じフランチャイズ店舗で人員が不足した時に、即座に応援に出し、穴を補えるわけです。

もしもレベル制がない場合、応援は人と人の信頼を元に出す必要があります。そして信頼を築き上げるのは時間がかかりますし、広がりにも限度があります。一人の店員が持つ能力を活かしきる場所が狭まってしまふわけです。

ちなみに、私の働いていたコンビニでも同様のシステムは存在しました。が、オーナーの方針でよそからの応援を受け入れないようにはしていたので、仕方なく私が穴を埋めていました。応援をしない、されない以上、横の繋がりを持つ人間が存在しないため、店の人間だけで穴を埋めなければならなかったのです。

とまあ、あまり良くないことを思い出している場合ではありませ
ん。

考え事をしているうちに、冒険者ギルドに到着しました。

ちなみに、場所については事前に調べてありました。それに、シ
ユリ君のくれた饞別の中には王都の地図も入っていました。迷うは
ずありません。

「おう、そこのおっさん！ 邪魔だ退きな！」

私が冒険者ギルドの看板を見て建物を確認していると、後ろから
声がかかります。恐らく、入り口の近くで邪魔だったのでしょう。
慌てて隅に寄ります。

「申し訳ありません、以後気をつけます」

「おう！ えらく丁寧だなおっさん！ 気にすんなよ！」

声をかけてきた男 大柄で筋肉質な、いかにもという感じの冒
険者さんは言います。そしてギルドの扉を開き、中へ入っていきま
した。

背中には、狼のような生き物の死骸を背負っていましたね。恐ら
く、倒した魔物の素材を買い取ってもらいに来たのでしょうか。

さて、見学で満足している場合ではありません。

今回私が冒険者ギルドに来た理由は二つ。

冒険者になり、身分証を手に入れること。

そして冒険者として依頼を受け、最低限の資金を貯めること。
これを達成するために、冒険者ギルドまで足を運んだのです。

全ての成否は、ここから始まり、ここで決まると言っても過言ではありません。

「よし。気合を入れていきましょうか」

私は自らの顔を両手でパンっ、と挟み、気合を入れてから冒険者ギルドへと足を踏み入れます。

22 新人、おっさん、三十五歳

ギルドの建物に入ると、中は意外と小奇麗になっていました。冒険者が使う施設ですから、もっと粗野な施設かと思っていましたが、けれど、ギルドには外部からの依頼も入りますからね。冒険者ではなく、そうした依頼者を意識して施設が綺麗に保たれているでしょう。

見渡すと、受付らしい窓口が並んでいる場所がありました。一番手近な受付窓口に近寄ります。

「こんにちは。本日は、どのようなご用件でしょうか？」

「はい、実は冒険者として登録をしたいと思ひまして」

「かしこまりました。ご新規ですか？ それとも再登録になりますでしょうか？」

「いえ、新規ですな」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

そう言つて、受付さん ネームプレートの文字を読む限りだと、シャーリーさんは奥に引っ込んでいきます。そして何やら書類を幾つか取り出して、受付の方へと戻つてきます。

「では、まずはこちらの紙へご記入ください。文字の方は問題ありませんか？」

「あ、はい。書けます。問題ありません」

女神様の調整のお蔭で、この世界の言語の読み書きは完璧です。問題なく書類にも記入できます。

名前。年齢。性別。定住地の有無。定住地がある場合は住所。無い場合、よく利用する宿屋があればその名前。配偶者の有無。世帯人数。

そうした私という個人を証明するために必要な情報を記入する項目がずらりと並んでいます。

「こんなに多くの項目、冒険者さんは皆さん書くのですか？」

「いえ。それが、冒険者さんの多くは文字が書けませんので。こちらで代筆することが多くあります。記入される場合でも、多くが空欄となりますので、こちらで質問して空欄を埋める形を取っているんですよ」

受付のシャーリーさんは笑顔で答えてくれます。なるほど、確かに受付さんが言う通りの手順で進みそうな気はします。相手が文字を書けない。書いても細かい社会常識に疎いのですから、仕方ないことなのでしょう。

せめて、私は手間をかけないようにしましょう。記入できる項目は、全て埋めていきます。

そうして記入を進めていくと、ある項目の部分でピタリと手が止まります。ステータスを記入する欄があったのです。レベル、筋力、魔力、体力、速力、属性が必須。そしてスキルは任意記入。

私は迷った結果、スキル部分は空白にしました。そしてそれ以外の部分は正直に真実を書きます。つまりレベル1。ステータスはオールド。

全ての項目に記入が終わると、シャーリーさんに用紙を渡します。

シャーリーさんは記入漏れとミスのチェックの為に目を通し、そして眉を顰めます。

「あの、乙木さん。レベルが1で、ステータスがGというのは本当ですか？」

「はい、事実です。証拠はこれです」

私は言つて、ステータスチェックと念じてボードを出現させます。これを覗き込んだシャーリーさんは息を飲みます。

「こ、こんなステータスの人って実在するんですか？」

「ここにいますが」

「で、でもレベル1つて、ありえないですよ。普通の生活をしていても経験値は入るものですから、十歳ぐらいの子供だってレベルは2か3ぐらいはありますよ？　なのに乙木さんは三十五歳でレベル1つて」

「そういう体質だと思ってください。ほら、スキルがエラーとなっていますよね？　もしかしたらこのせいなのかもしれません」

私はそう言つて、シャーリーさんを丸め込みます。なおもシャーリーさんは信じきれない様子でしたが、ステータスボードを見ると納得せざるを得なかったようです。

私は嘘も言つていませんし、何の問題もありません。

こうして冒険者としての登録が完了し、身分証としても使える冒険者証明証、通称ギルドカードが発行されます。

材質は、現代日本でいう銀行のカードのような感じですね。プラスチックがこの世界に存在するのか分かりませんが。触った感触や力を込めて曲げた感触は完全にプラスチックです。

「これは、もしかしてプラスチックですか？」

「ぷらすち？ えっと、ギルドカードは、全て軟鉄という魔法金属と、銅や錫といった金属の合金製です」

なんと、この柔らかさと復元性で金属だったようです。

「冒険者さんは激しい戦闘を行いますし、時には炎の攻撃魔法に晒されたり、海に入って採取をすることもあります。なので、軟鉄をベースとした熱に強く、腐食もしにくい金属製のカードが使われているんですよ」

「ははあ、なるほど。納得しました」

シャーリーさんは、親切に詳しく説明してくれました。

親切ついでに、いくつか必要なことを訊いておきましょう。

「ちなみに、私のギルドでのランクはいくつでしょうか？」

「通常ですと、新人の方はFランクから開始するのですが、乙木さんの場合はステータスが低く、属性もスキルも無しという申告の為、さらに下のGランクからのスタートになります」

「どうやら、ギルドランクですら最低レベルからスタートするようです。」

まあ、ランク上げをする楽しみが増えたと思っておきましょう。

「後、ギルドでの依頼について教えてほしいのですが。冒険者は依頼をこなして報酬を得る、ということは知っていますが、具体的なことはまだ知らなくて」

「それでしたら、建物内で閲覧できる新人向けの冒険者マニュアルが貸し出されていますから、そちらをご覧くださいただければご理解いただけると思います。もしもそれでもわからないことや、疑問に思っ

たことがあれば、窓口の方で聞いていただければお答えします」

シャーリーさんは、建物の隅の方を手で示しました。そこには小さな本棚と、待ち合い用に使われるような背もたれの無いソファがあります。どうやら、そこに冒険者向けの知識の載った本があり、それを施設内で読めるようになっていようです。

「助かります。ひとまず、マニュアルを熟読してから依頼については考えます」

「ええ、ぜひそうしていただけると助かります。新人の方は、知識も無いままに依頼を受けようとしてトラブルを引き起こしがちですから」

シャーリーさんの気持ちは分かります。マニュアルや指示に従わない新人がいると、苦労しますよね。私もコンビニで経験があります。何度言ってもゴミ箱にゴミを片付けてくれない新人さんに悩まされました。出っぱなしのゴミを見たお客さんに、何度クレームをつけられたことが。

ともかく、今はマニュアルを読むべきですね。私はシャーリーさんに一礼し、窓口を離れます。そして部屋の隅にある本棚の方へと向かいました。

23 冒険者のいろは

マニュアルを読んで、かなりの知識が得られました。

まず、冒険者の基本的な活動の流れについて。

冒険者ギルドの開館時間は早朝六時。かなり早いですが、この時点でギルドに来る冒険者さんは少ないらしいです。

というのも、新しい依頼の貼り出しは朝九時からなのです。

多くの冒険者さんは、この朝九時の貼り出しのタイミングに合わせてギルドに顔を出します。施設内が最も混雑するのが、この時間らしいです。

その後は少しずつ冒険者さんの数が減ってゆき、日が暮れる頃になつてまた一気に増えます。依頼の達成報告と、討伐した魔物や採取した素材を買い取ってもらう為です。

そうして一日の活動の報酬をその場で得た冒険者は、夜の街で飲み食いした後、固定の宿に帰ったり、人によっては自宅に帰ったりします。

そうして翌日もまた、同じ流れで冒険に出ます。

多くの依頼は日雇いのような形で、一日で終わるものです。数日跨いで時間が必要な依頼はごくわずか。というのも、宵越しの銭を持たない冒険者は数多く、日当が出ない依頼は敬遠されるためです。それでも、ごく一部の依頼は数日を跨いだものになっています。

魔物の討伐依頼で遠征する場合や、大規模な採取、開拓となると一

日では終わらないからです。

ただ、遠征の場合は日当が出なくとも依頼者側で最低限の食事は用意されている場合がありますし、大規模採取や開拓は日割りで報酬を貰うことが可能な場合もあります。

こうして確認してみると、さながら派遣の日雇い労働者のようですね。

搾取も、実際にされているでしょう。

ただでさえ学のない人間が冒険者になることが多いのです。貯金の重要性を認識していなければ、その日を暮らすのに十分なお金さえあれば満足してしまうでしょう。ましてや、日当方式です。まともって大きなお金を手に入れることも難しい以上、学のない冒険者にはなおさら貯金が難しい。使ってしまうのが当たり前、となってしまう。

それに、頑張って難易度の高い依頼を達成すれば収入は増えます。達成感は、日当であればなおさら大きいでしょう。たとえ全体で見た時かなりの手数料を取られているとしても、文句を言う気は起きないに違いありません。何しろ、頑張れば稼げるのです。稼げないのはギルドのせいではなく冒険者の実力のせい。そうやって、いくらでも責任を冒険者側に転嫁できます。

システムはフランチャイズ。労働者は日雇いの派遣。命がけの労働に、宵越しの銭も持てない程度の低収入。

こう考えると、冒険者ギルドとは日本のブラック企業でも真っ青になるほどの中間搾取企業に聞こえてしまいますね。

とはいえ、この世界では仕方のないことでもあります。

中間搾取と言うとブラックに聞こえます。しかし冒険者ギルドは、冒険者から仕入れた素材の流通も担っています。

そして流通に、この世界では多大なコストが掛かります。

移動手段は良くても馬車。街道近辺には魔物という危険が潜む。そんな状況で、冒険者が好き勝手に仕入れてくる素材を合理的に捌かなければならないのです。多少手数料がキツくても仕方ない程度には、冒険者ギルド側もコストを払って運営されているのです。

とは言え、冒険者ギルドが大きな手数料を取っていることには代わりありません。この世界でお金を稼いで生活しようと思うなら、冒険者は間違いでしょう。

スタート地点としては冒険者以外を選べませんが、いずれしつかりと店舗を構え、客商売に本腰を入れるべきでしょうね。

特に実力のある冒険者は、自分の技術で貴重な素材を仕入れることが出来ます。独自の仕入れルートを持つことが出来るのは強みです。しかも他人に影響されない、自分という圧倒的なパイプです。学さえあれば、冒険者は貯金して小売業に転職するのが正解なのでしょう。

幸い、私はコンビニのバイリーダーの経験があるので一般の冒険者よりは商いに通じています。本物の商人ほどではありませんが、小売業で生計を立てる程度の器量はあるでしょう。

というわけで、今後の方針は決まりました。まずは冒険者として活動し、貯金する。そして資金を貯めたら小売業に転職。

まあ、元々考えていた通りの流れですね。ただ、冒険者について詳しく知ったことで、余計に方針がはっきりと固まりました。冒険者一筋、という可能性は万に一つもありえなくなりました。

さて、そろそろマニュアルも大半は読み終わります。残っている依頼にでも目を通して、私でも受けられそうなものを探しましょう

か。

そう考えて、本を閉じようとしたところでは。

「おいおい！ いい年こいたおっさんが新人マニュアルなんか読んでやがるぜ！」

何やら、煽るような声が響きます。

トラブルの匂いがしてきました。

24 おっさん冒険者とおっさん冒険者

私は、煽るような声のした方へと目を向けます。

すると、五名ほどの男性の姿が目に入りました。全員が三十代から四十代ほどに見えます。体格が良く、鎧や剣を身につけていますね。恐らくは、ベテランの冒険者さんなのでしょう。

さて、お互いおじさん同士です。仲良くしたいものですが、上手くいくでしょうか。

「なあ、アンタ。その年で冒険者に転職かあ？」

「はい。以前は接客業をしていたのですが、とある事情で住んでいた場所からも追い出され、泣く泣く王都に辿り着きましたので。どうにか食い扶持を得ようと冒険者になりました」

私は事情を軽く説明します。それだけで、私に絡む男以外の四人は気まずそうに顔をしかめます。そこまで悪い奴らではないのでしょう。思ったよりも深刻な身の上を聞いて、からかうのは申し訳なく感じたのでしようね。

ですが、私に絡む約一名だけは悪びれません。

「おいおい！ 客商売なんざやってたヒョロヒョロのモヤシ野郎に冒険者が務まるでも思ってたのか？ かっつ、ナメられちまってるなあ、おい。冒険者つつうのは、ヘラヘラ笑ってりゃあできる仕事じゃねえんだぞ？ アアン？」

「どうやら何か気に食わない様子です。怒りを言葉に含めて、こちらを睨んできます。」

「ここは下手に出ておきましょう。」

「おっしゃるとおりでございます、先輩」

「ん？ ああ？ 先輩なあ？」

「思わぬ返答に困惑する様子の男。この調子で下手に出て、手玉に取りましょう。」

「私のような未熟な男では、冒険者になってもすぐに命を落としてしまうに違いありません。野山の草の根の養分となるか、獣の餌となるかです。そのような未熟者を相手に、経験不足のご指摘を頂き誠にありがとうございます」

「んんっ？ おう、まあ、なんだ？ 俺は当然のことを言っただけだからなあ」

「上手く男の威勢を削ぐことが出来ました。この調子で行きましょう。」

「ですが、冒険者として活動しなくては、私のような身元の怪しい人間はその日を暮らすことも出来ないのです。街で死ぬか、野山で死ぬか。それをただ選ぶだけだったのです」

「そうか、お前も苦労してんだなあ」

「急に親身な態度を取る男ですが、これも想定の内。むしろ好都合な態度ですね。」

「けれど、私は幸運です。素晴らしい先輩と出会うことが出来まし

た

「ん？　もしかして、そりゃ俺か？」

「はい。実は、私は先輩がギルドに魔物の死体を運んでくる姿を見たことがあります。あんなに強そうな魔物を倒すことが出来るなんて、どれほど素晴らしい冒険者の方なのだろう、とひたすら感服するばかりでありました」

「そうかそうか！　わはは！　そりゃ、こないだ倒したグレイウルフだなあ！　あんなの俺様にかかりゃ瞬殺よお！」

男はおだてられ、調子に乗ります。もちろん、姿を見たなんて嘘です。剣を持った冒険者、しかもベテランともなれば魔物をギルドに卸すことぐらいあるでしょう。絶対に外すことのない推測です。

こうして嘘や煽てに乗せられる頭の悪い人間を見ると、心底思います。自分は馬鹿でなくてよかった、と。

「ぜひとも、先輩のような素晴らしい冒険者にご指導、ご鞭撻を頂きたいと思っております」

「そりゃ謙虚なことだなあ！　しかしまあ、俺様は高いからな。お前がそれなりの金を積むつつうんなら考えてやらんこともないぜ」
「ありがとうございます。いずれ、機会がありましたらお願いします」

「ははは、そりゃあいいや。お前はいい冒険者になるぜ、俺が保証してやる」

「ありがとうございます」
「にしても、わざわざ金払ってまで指導を受けたっていうのは変わった趣味だな」

「物事を見抜く知識と知恵は冒険者の宝です。そして宝を持つ先人の冒険者ほど、新人の私のような人間が尊敬するべき人はいません。お金を払ってでも学びたいことがあるのは当然のことです」

「がははは！　言うねえ、気分がいいぜ！」

男は気持ちよさそうに豪快に笑います。私の言った言葉の意味に気づいていないようですね。

この男は自分が尊敬すべき先人と言われたように思っていることでしょう。ですが、私の発言は『お前みたいに嘘も見抜けないほど頭の悪い奴には大した価値は無い』と言ったに等しいのです。

まあ、男も煽てられて幸せ。私も男を煽って満足。お互い気分良く済むのですから、これが何よりの選択でしょう。

それにしても馬鹿というのは嫌だな、と思います。

頭が悪いと、嘘を見抜く権利を失います。それは即ち、どれだけ騙されても、馬鹿にされても気付けないことを意味します。これは、人としての最低限の尊厳さえ失っているとも言える有様でしょう。つまり馬鹿は人扱いされないのです。

人ではないのですから、こうして適当に煽てて、適当に騙しても問題はありせん。悪いことをしたとも思いません。

その後も、私は男を適当に煽ててあしらいました。

男は散々馬鹿にされたにもかかわらず、機嫌良さそうに帰っていききました。

私の嫌味に気づいた受付の女性達は、時おり笑いを浮かべていたようです。

やはり馬鹿は嫌だな。と、そう思います。

25 薬草採取とスキル付与

男をあしらった後、私はギルドで依頼の確認をしました。

依頼は大きく分けると二種類が存在します。

一つは通常の依頼。一件ごとに一人の冒険者、あるいは一つの冒険者パーティが担当し、依頼が達成されたら終了するタイプのものです。

もう一つは常設依頼と呼ばれるもの。

例えばウルフ退治や薬草採取といった、いくらでも、いつでも存在する仕事のことです。こうしたものは特に依頼の受注処理をしなくても、討伐証明部位や採取した物品を持ち込めば、その時点で依頼達成として処理をしてくれます。

そして何度達成しても、常設依頼が取り下げられることはありません。

私が依頼を確認したのは午後に差し掛かったぐらいの時間だったので、既に手頃な依頼は残っていませんでした。なので今回は特に受注はせず、常設依頼を処理することにします。

中でも私が狙うのは、薬草採取です。いくつか理由はありますが、最大の理由は私が弱いからです。武器も持たず、ステータスも低いのですから。魔物の討伐依頼など受けるわけがありません。

というわけで、私は身支度を整え、薬草採取場所として指定されている森にやってきました。王都を出ると半時間ほどで到着する場所にあります。これはもちろん、新人マニュアルに書いてあった知識によるものです。

新人マニュアルとは名ばかりで、その内容はかなり精細な部分まで冒険者の活動に関わる情報がまとめられていました。主要な近隣の採取場所、魔物の生息状況、生態、弱点まで。

冒険者としての活動のいろはだけでなく、生存率や稼ぎに関わるような情報が山のように載っていました。

これを読まない新人というのは、かなり勿体無いでしょう。

とは言っても、仕方のないことですが。冒険者は識字率が高くありません。簡単な単語と数字ぐらいなら分かる人も多いですが、本を読むのは厳しいでしょう。代読を頼むとなるとお金も掛かります。誰も読もうとしないのも自然なことなのです。

さて、私はマニュアルを読み込んで得た情報を頼りに、薬草を採取していきます。一種類だけではありません。常設依頼に存在する薬草、全てを採取します。

採取した薬草ごとに、別々の袋へと入れていきます。そして一杯になった袋は、アイテム収納袋の中に入れます。そしてアイテム収納袋から、また新たな袋を取り出します。

なんと、アイテム収納袋の中には冒険者には必需品と言えるようなものがしっかりと揃っていたのです。採取物を分別する為の革袋が十数枚。金貨数枚と銀貨と銅貨。解体用のナイフに、水袋や最低限の野営道具まで。さらには魔法陣を描くための触媒筆まで入っています。

シユリ君には感謝してもしきれませんね。本当に可愛くて頼りになる師匠です。

次々と薬草を採取していきますが、順調に全て事が進むわけではありません。

この森にはゴブリンという魔物が生息しています。人肉を好み、棍棒などの原始的な武器を扱える知性ある魔物です。

彼らは時に待ち伏せ、奇襲をして冒険者を襲います。一人で採取をしていると、気付けば取り囲まれていた、なんて話も数多くあります。ちなみに、これもマニュアル知識です。

とまあ、無駄なことを考えている間に私が囲まれてしまいました。ゴブリンが五体。棍棒だけでなく、ボロボロの短剣を持っている個体も居ます。

一体が私に襲いかかってきます。棍棒を振り上げ、私の頭を狙ってきます。私は、これを回避しませんでした。

棍棒はごぶつ、と鈍くゆるい音を立てて、私の羽織るボロボロの口ローブに弾き返されます。

「ゲギヤツ？」

ゴブリンはわけがわからない様子で、こちらと棍棒を順に見比べています。

分からないのも無理はありません。何しろ、このボロボロローブは三つもスキル付与した特製防御ローブなのですから。

現在、このローブには『形状記憶』と『衝撃吸収』、そして『耐

刃』のスキルを付与しています。

形状記憶と衝撃吸収は、ギルドカードにも使われている軟鉄という魔法金属の持つスキルです。叩いても衝撃を吸収し、変形しないという非常に優れた性質を持ちます。

ただ、軟鉄の場合は刃を通すことが難しいのですが、ボロ布の場合には刃を通してしまいます。なので、刃物や爪、牙といったものへの対策として耐刃も付与しています。

耐刃は、ハリワタフジと呼ばれる植物から得られる素材、針綿が持っているスキルです。針状の硬い繊維が混じった綿毛で種子を包む性質がある植物で、この針綿が魔物の牙や胃の消化液から種子を守ります。なので、もし食べられても糞の中に混ざって土に還り、芽を出すことができます。

この針綿が持つ強靱な防刃性能を、ボロ布に付与したわけです。

ちなみに、形状記憶と衝撃吸収は非生物であれば何でも良いという緩い条件。そして耐刃は素材が植物性の繊維であれば良いという比較的達成しやすい条件でした。

なので、このボロ布のローブ、綿製の古着を街で購入し、こうしてスキル付与して使っているというわけです。

そうとも知らぬゴブリンは、私が得体の知れない強敵か何かだと勘違いしているようです。五匹もいて、足踏みして躊躇っています。

ここは、別のスキルを使って追いついてやりましょう。

25 薬草採取とスキル付与（後書き）

本日の連続投稿は以上となります。

乙木が、少しずつ頭角を現していきます。

ですが、今はまだひねくれたただのおっさんですね。

これからの乙木にご期待下さい。

ブックマークや評価の方を頂けると幸いです。

26 加齢臭

私はゴブリンを追い返すために、あるスキルを強く発動しよう
念じます。

すると、途端に私の身体から異臭が立ち込めます。
臭いの原因たる私でさえ、顔をしかめるほどの悪臭です。
人間よりも鼻が利くゴブリンからしてみればたまったものじゃあ
りません。途端に五匹は両手を上げて逃走します。

その様子をしつかりと確かめてから、私はスキルを解除します。
そのスキルの名前は『加齢臭』。身体から異臭を放つスキルです。

どうやらこの加齢臭スキル、女神様に貰ったものではなく、私が
自分で習得したもののようなのです。

というのも、実は私の持つスキルの中に『スキルチェック』とい
うスキルが存在します。自分のスキルの詳細を確認できるスキルで
す。

このスキルのお蔭で、私は無数にある自分のスキルを調べて確認
し、把握することが出来ます。

王宮にいるうちから、私はこのスキルチェックで自分のスキルを
確認していました。

すると見つけたスキル、加齢臭。こんなものを与えられてしまっ
たのか、と少しムツとしましたが、よく確かめてみると習得時期が

かなり過去の時間を示しているのです。

それでふと気になった私は、他にも幾つかのスキルを確認してみました。

結果、私が女神様に会うより遙かに昔から習得していたことになっているスキルがいくつも有りました。

そこから私は、ある仮説を立てました。

女神様によって異世界に転移する過程で、その人が持っている特殊な能力はスキルに変換されてしまうのではないか。

これにより、女神様に会うより前の習得となっているのではないか。

真偽は定かではありませんが、おおよそこれで間違いないと思っています。

何しろ、私は『読書』と『速読』のスキルを持っています。そして、このスキルは今から十年以上も昔に習得したことになっています。ちょうど、私が大学生の頃に図書館へ入り浸っていた時期に該当します。

そう考えると、私は日本で生活していたころから加齢臭がしていたのか、とちよっとだけ悲しくなりました。が、重要なのはそこではありません。

もう一つ、有用なスキルを習得していたのです。

その名は『不眠症』。眠気がなくなり、眠れなくなるスキルです。普通ならこのスキルは人の身体を苦しめるものになりますが、私の場合は違います。

何しろ、シユリ君に教わった回復魔法がありますから。

不眠症で眠らずに活動し、回復魔法で肉体と脳の疲労を回復させ

ます。そしてまた長時間活動して、時間と共に回復した魔力で疲労を回復。この繰り返しで、私は一切眠らずに活動し続けることが可能となりました。

また、幸いなことに魔物が持つていたらしい『夜目』スキルのお蔭で、夜の森でも周囲がよく見えます。よって、眠らずに夜の森のなかでも薬草採取を続けることが出来るのです。

これは通常の薬草採取と比べて、遥かに効率的な作業と言えるでしょう。

さらに、これでまだ終わりではありません。

私は『病魔』というスキルを持っています。これは病原菌を撒き散らし、人々を苦しめる魔物が習得しているスキルらしいのですが、その効果が特殊なのです。

人間を不健康にして苦しめたら苦しめるほど、経験値が得られるというのです。

病気を広げる魔物なのですから、病気を人に広めることで強くなるスキルがあるのも不思議ではありません。

ですが、この場合は条件の緩さが重要です。

なんとこのスキル、人間であれば誰でもいいのです。そう、たとえばそれが自分であっても。

私は不眠症スキルで眠らずに作業をしています。そして回復魔法で無理やり身体を動かしています。この間、私は不健康な生活をしていることになりました。お蔭で病魔スキルが経験値取得の条件を満たすので、どんどんレベルが上がるのです。

今となっては、私のステータスはご覧のとおりです。

【名前】 乙木雄一

【レベル】 48

【筋力】 C

【魔力】 C

【体力】 C

【速力】 C

【属性】 なし

【スキル】 ERROR

既に、冒険者として十分やっていけるレベルのステータスです。平均がCもあればCランク冒険者、つまり一流のプロとして活動できるでしょう。

レベルが48にもなつてこのステータスというのはめっちゃくちゃ低いのですが。

それでも強くなれるというのは良いことです。お蔭で、恐らく本気で殴り合えばゴブリン程度なら倒せるでしょう。

つまり、命の安全が約束されているというわけです。これは仕事をする上でとても重要です。

この世界では労災なんて降りないでしょうからね。自分の身は自分で守らなければいけません。

27 専属冒険者乙木

一晩中薬草を集めた私は、朝方になってようやく森を抜け出し、王都に帰還しました。そして早朝の六時半。朝っぱらの誰も居ないような時間から、冒険者ギルドへと顔をだします。

「ふああゝ。退屈うゝ」

入った瞬間に聞こえたのは、間の抜けた欠伸と声です。

私は声の主、シャーリーさんに視線を向けます。シャーリーさんも私がギルドに入ってきたことに気づいたようで、慌てて表情を取り繕います。

「ど、どうなされましたか?」

「慌てなくても、大丈夫ですよ。朝の勤務がづらい気持ち、分かりますから」

私が言うと、シャーリーさんは安堵したように息を吐きます。

「すみません、本当に。朝はどうしても眠くって」

「早朝から勤務とは、お疲れ様です。一人なんですか?」

「はい。依頼貼り出しの一時間前までは、基本的に受付は一人回しですよ」

「大変ですねえ」

「そうでもないですよ。本当に、冒険者さんは全然来ませんから」

「うっかり欠伸と独り言を窓口で漏らす程度には、ですか？」
「もう、乙木さん！ それは言わないでくださいっ」

シャーリーさんは顔を膨らませて怒ります。可愛らしい方ですね。きつと冒険者の方々にも人気があるでしょう。正直、私も好きです。童貞なので、こういった可愛らしい女性の仕草を見るとすぐ好きになっけてしまいます。

ごまかす意味も込めて、シャーリーさんとの会話を続けましょう。

「朝勤務は、いつもシャーリーさんが？」

「はい。私は一番新人なので。それで夜七時の閉館まで働いて、終業作業をしたら退勤は夜八時とかになっちゃんいます。帰って夕食の用意をして、家事を済ませたらもう寝る時間って感じですねえ」

「はあ、それはきつそうですね。私も寝れずに働き続けた経験はありますから、分かりますよ」

「分かって頂けます？ 本当にもう、眠くて苦しくて。週五日の今でもかなり厳しいのに、先輩が寿退社で辞めるからってもうすぐ週七になっちゃんいそうですねですよ」

どうやら、けっこう深刻に大変なようです。というか、週七日ともなれば休めずにすぐ身体を壊してしまうでしょう。

「ちなみに、休憩時間はどれぐらい？」

「お昼に四十五分だけですなえ」

これはアウトですね。

私は顎に手を当て、どうにかシャーリーさんを助けてあげられないか考えます。

なにか使える知識は無いか、と私はスキル『完全記録』を発動し

ます。

完全記録とは、自分の理解した知識を情報として蓄え、好きに閲覧できるように脳内で整理し保管しておくことができるスキルです。本来はダンジョンゴレムと呼ばれる魔物が命令を覚え実行するためのスキルなのですが、これが人間の脳との相性が良かったらしく、ほぼ完全記憶能力のような便利スキルと化しています。

お蔭で、王宮で読んだ数々の本の内容も、ギルドで読んだ新人マニュアルの内容も忘れなくて済んでいます。

そして今も、とっさには思い出せないような情報をスキルの力で順に精査し、閲覧していきます。

よし、見つけました。

「ところでシャーリーさん。週七日勤務になっても、毎日午後休が取れるとしたらどうします？」

「へっ？」

私の問いかけの意味がわからないのか、シャーリーさんはぼかんとしています。が、すぐに顔を引き締め、言われたことを吟味します。

「そうですねえ。それなら余裕で頑張れると思います。というか、仕事自体は好きなんですよ。寝不足と過労で苦しいだけなので」

なるほど。それなら、良い作戦があります。

「シャーリーさん」

「はい？」

「私と、専属契約を結びませんか？」

私が提案しても、まだシャーリーさんは呆けたままでした。

28 薬草おじさん

あの後、私はシャーリーさんと専属契約を結びました。

専属契約とは、冒険者と受付嬢の特殊な契約です。自分の仕事の技や情報を人に漏らしたくない冒険者が稀にとることがある形態です。

これにより、冒険者は特定の受付嬢にしか納入できない代わりに、その受付嬢との間に守秘義務が生まれ、自分の秘密を守ることが出来ます。

受付嬢の方は専属契約が入るとボーナスが出ます。これは、契約した冒険者の納品処理を一人で受け持たなければならぬため、仕事とその分難しく、大変になるからです。

そして専属受付嬢はいくつかの権利で守られています。

働きすぎで倒れて専属の取引が出来なくなつては困ります。また、専属冒険者が無理を言つて受付嬢を拘束し、倒れるまで働かせるような事態になつてもいけません。なので、労働時間の上限が設けられています。

裁量によって多少は上下しますが、基本は週に四十時間。週五日勤務で、一日八時間という計算です。

そこで、私の提案の話に戻ります。

私はこれから、毎日早朝一番に薬草を納品しに来ます。それに合わせて、専属受付嬢のシャーリーさんも朝から毎日出勤します。そ

して朝の暇な時間の内に薬草の納品作業を済ませて、その後は普通の業務をこなします。

そして、専属受付嬢の労働時間は週に四十時間です。朝から昼の十三時まで働くだけでも、週七日だと四十二時間。超過です。つまり、シャーリーさんは実質毎日午後休が貰えることになるのです。

この話をした時、シャーリーさんは喜んで同意してくれました。そして私が持ってきた大量の薬草を見て、絶句しました。仕分けと鑑定だけで二時間はかかる、とのことでした。

ちなみに明日からはもつと持つてくる、と話したところ、口を開けて驚いていました。

ともかく、そんなこんなを経て私はシャーリーさんと専属契約を結び、毎日薬草を納品する生活を始めました。

朝六時に薬草をギルドに持っていきます。そしてシャーリーさんに鑑定と仕分けをしてもらいながら、雑談をして時間を過ごします。朝九時の依頼貼り出しまでに納品が終われば、その時点で報酬を受け取ります。終わらなければ、翌日の朝に貰う約束になっています。納品が終われば、私はまた薬草採取に向かいます。王都から半時間着く森の中、徹夜で朝まで駆け回り、大量の薬草を採取します。そして日が昇る前に王都へと戻り、ギルドの開館時間に合わせて薬草を納品する。ひたすらこれを繰り返す日々です。

そのせいで、私はギルドの職員さんや他の冒険者の皆さんから『薬草おじさん』とからかうようなあだ名を付けられてしまいました。そこには馬鹿にするような、嘲る意味も含まれています。シャーリーさんも、薬草おじさんと専属契約している薬草女、と揶揄され

ることがあったそうです。

でも、それは最初の一ヶ月だけのことでした。

私が納品する大量の薬草には、他の冒険者さんでは集めてくるのが難しいものが数多くあります。

マニュアルと王宮の大図書館の知識があり、一日中森を探索できる私だからこそ、採取の難しい薬草でもそれなりの数を集めてくることが出来ます。

また、薬草集めをするような冒険者は新人が多く、その為簡単で集めやすい薬草ばかりに人手が集中します。希少な薬草となれば、知識のあるベテランが討伐依頼のついでにたまたま見つけて捨てる、程度のもなのです。

当然、ギルドは納入された品物を流して利益を出しているわけですから、私が納品した希少な薬草は高い利益を出します。それも連日、安定して納品しているわけです。

こうなると、一ヶ月もすると私は稼ぎ頭。ギルドから見ると利益を生む金の鶏です。薬草おじさん、という言葉は愛称になり、早期から私を見出した、ということまでシャーリーさんの評価も上がりました。

また、冒険者の間での私の評価も上がりました。一ヶ月も同じことをしていると、目撃される場面も増えます。私が眠らずに働いていることは周知の事実であり、特殊なスキルを持っているのでは、と思われるようです。また、ゴブリンやウルフに囲まれても追いつくぐらいの実力はある、というのも目撃されています。

結果、薬草おじさんは単なる変わり者の冒険者、として受け入れられることになりました。

そうして二ヶ月、三ヶ月と時は過ぎてゆきます。

私も薬草だけでなく、様々な採取の依頼を受けるようになりました。きのこ、希少な植物。洞窟に入って鉱物の採取など。

薬草おじさんというあだ名が冗談のようになりつつある日々。採取専門の凄腕新人、という評価が広まりつつある頃。ようやく、私は目標を達成しました。

そう。お金が貯まったのです。

29 冒険者はダメ

「実はそろそろ、冒険者としての活動を控えめにしようと思っ
ています」

私は、ある朝シャーリーさんに打ち明けました。すっかり習慣と
なった朝の納品業務。雑談の合間に投げ込まれた私の言葉に、シャ
ーリーさんは驚きで口をあんどぐり開けています。

「あ、あの、今なんと？」

「冒険者活動を控えめにしよう、と言いましたね」

「そんな！ 乙木さん、やめちゃうんですか？」

シャーリーさんが作業の手を止め、困惑と少しの悲しげな視線を
送ってきます。

「いえ、完全に辞めるわけではないですね」

「ど、どういふことですか？」

「実はお金が十分に貯まりました」

私が言うと、シャーリーさんは首をかしげます。

「確かに乙木さんの稼ぎっぷりは凄まじいものがありますけど。で
も、もう冒険者をドロップアウトして隠居するにはいくらなんでも
額が足りない気がしますけれど？」

「いえ、引退するわけではないとさつきから言っていますか？」

私の言いたいことが分かっている様子で、なおも首を傾げるばかりのシャーリーさん。

「資金が集まったので、これを元手に個人商店を運営しようかと思っ
つていました」

「お店を開くんですか？」
「はい」

「確かにそういう冒険者さんは稀にいらっしゃいますが。乙木さん
ぐらい実力があるなら、冒険者としていずれ有名になって、高ラン
ク冒険者としての待遇を受けることが出来ると思いますか」

シャーリーさんは、私が店を開くことに納得していないようです。
確かに、多くの冒険者は高ランクを目指し、有名となって名声を
得ることを目的としています。そして、実際に高ランク冒険者は凄
まじい高待遇を受けることになります。Aランク以上ともなれば貴
族にも並ぶ扱いで、ギルドからは活動に対して賞与、つまりお金が
貰えるわけです。

Aランク冒険者が自分の素材を自分で売る店を持って、たかが
知れています。しかし、Aランク冒険者は貴族同然の身分待遇に賞
与による贅沢な生活。格差は言うまでもなく、冒険者の方が遥かに
高待遇です。

この傾向はBランク冒険者でも同じです。Cランクなら特別な権
利も持たないので、店を持った方が有益でしょうか。

なので店を開く冒険者とは、長年続けてきたベテランCランクの
引退した後というのがほとんどです。

ただ、そこには罫が潜んでいる、と私は思います。

確かにBランク以上になれば、普通の仕事で利益を上げるよりも遥かに美味しい思いができます。ですが、それには高ランクである必要があるのです。

高ランクを目指す冒険者の活動は過酷です。危険な魔物との戦い。未開の地での採取業務。命の保証もない状況での労働ばかりです。

だから冒険者はよく命を落とします。将来有望な、たとえば順調にいけばBランクも狙える若者が、あっさり死んでしまうことも珍しくないのです。

つまり待遇は餌なのです。それに釣られた冒険者は、まるで間引かれるように命を落とします。

高ランク冒険者にしか出来ない仕事なんて、そう多くはありません。だから高ランク冒険者は沢山必要ではないのです。むしろ高い報酬を約束している以上、高ランクが増えた分だけギルドは苦しくなります。

また、ギルドの主な利益はCランク以下の無数の冒険者たちです。そもそも、高ランク冒険者という存在が、夢に釣られた愚かな労働者を集める為の広告塔なのです。高ランク冒険者への見返りの全てが、実質は広告費に過ぎないのです。

そうして集まった冒険者たちは、高ランクになることを夢見て、本人も同意の上で次々死んでいきます。そして死んだ数を新たな夢に釣られた冒険者が埋めていきます。

そのサイクルに、私まで組み込まれるというのは勘弁願いたいものです。なので、冒険者を続けるという選択肢はありません。

数々の難しい依頼をこなし、幸運にも命を落とさなければ冒険者として大成するでしょう。

しかしそうでなければ、命を使い捨ててギルドの利益に貢献する

駒として人生を終えるだけです。

そして幸い長い間死なずに済んだ幸運な冒険者も、そのほとんどはランク止まり。命という担保を預けて得るにしておいては虚しい肩書きです。

というようなことを、私はシャーリーさんに説明し、自分が冒険者を辞める理由としました。当然、シャーリーさんは苦い顔をします。

「こつも堂々とギルドを批判されてしまうと、困っちゃいますね。私は別に、冒険者さんを使い捨てているつもりは無いんですけれど」「ですが、冒険者というものが死ぬことを前提に使い潰される労働者であるのは事実です。気持ちで命は買えませんから。私は、自分の命を大事にさせてもらいます」

私がそう言うと、シャーリーさんはため息を吐きます。

「そうですね。確かに、お金も名声も生きていてこそ、ですからね。もう引き止めません」

どうやら納得して頂けたようですね。シャーリーさんとは冒険者になった日からの付き合いですから、理解してもらえて嬉しいです。

「それにしても、乙木さんが冒険者をやめるとなったら、少しさびしくなっちゃいます」

シャーリーさんはそう言って、顔をうつむけます。

「今だからこそ正直に言いますね。私、乙木さんのような素敵な冒険者の力になりたくて受付の仕事を選んだんです。だから、乙木さんがいなくなるって思うと、やりがいが薄れるってわけではないんですけど、気が抜けちゃうといいますが」

「そこまで私を評価してくださって、ありがとうございます。でもそんなに私は良い冒険者ですかね？」

「当たり前です！」

私が聞くと、シャーリーさんは身を乗り出して力説します。

「乙木さんは真面目で実力があって、マナーも良いですし。全部揃ってる冒険者さんなんて、王都でもほとんど見ませんよ。高ランク冒険者さんならいるかもしれませんが、そういう人は上のお抱えなのでこっちの受付には顔を出しませんし。私にとって、身近な理想の冒険者さんが乙木さんだったんです！ 本音でいうと、憧れます！ 乙木さんに！」

憧れている、とまで言われると嬉しくなってしまうですね。感謝

の意を伝えておきましょう。

「ありがとうございます、シャーリーさん。こんなキモい私のことでも偏見無く受け入れてくれて、嬉しく思います」

「そんな、乙木さんがキモいだなんて！ むしろ、可愛い部類じゃないですか！」

シャーリーさんの発言に、私は首をかしげてしまいます。

はて。私は可愛いと言われるような顔はしていなかった気がしますが。ここ最近鏡を見ていないので、もしかしたら回復魔法の使すぎで顔が變形してしまったのかも知れません。

「あの、シャーリーさん。お手数ですが、私の顔の特徴について教えて頂いてもいいですか？」

「はい？」

突拍子のない要求に驚きながらも、シャーリーさんは応えてくれます。

「目の下に隈があつて、目が落ち込んで、痩せ気味で、髪がボサボサで、猫背ですね」

「紛れもなく私ですねえ」

どこが可愛いのか理解が出来ません。

「ちなみに、私のどこが可愛いのでしょうか？」

「どこって、全体的にでしょうか。洞窟ドワーフにそっくりで可愛いらしいと思いますよ」

「洞窟ドワーフ」

これは初耳ですね。私の完全記録スキルにも情報がありません。

「ちなみに、その洞窟ドワーフというのはどういう存在なのでしょう？」

「えっ？ 乙木さん、洞窟ドワーフを知らないんですか？」

知らない方が変だ、というような言い方をされてしまいます。それほど有名なら、なぜ散々調べ物をした私が知らないのでしょうか。不思議ですね。

「洞窟ドワーフというのは、子供向けのおとぎ話によく出てくる架空の人種です。色んなおとぎ話の中で、大変な目にあつた人に親切にしてくれる小人なんです。不思議な力をもっていて、人間のことが好きでいつも見守ってくれている。そういう存在なんですよ」

「おとぎ話ですか。そういうものには疎くて」

何しろ、異世界人ですので。というのは黙っておきましょう。

しかしおとぎ話であれば、確かに知らないのも納得です。そういう情報は調べても直接の利益にならないので、そもそも調べていないのです。

「子供向けのおとぎ話では必ず出てきますし、とても良い隣人として描かれるので、世の中のほとんどの人は洞窟ドワーフのような外見を見れば親しみを覚えると思いますよ。乙木さんは洞窟ドワーフみたくて可愛いよね、って受付嬢の間でも話題になってましたし」

「そこまでのんですか」

思っていた以上に、この世界で私の外見は評価が高いようです。可能性を感じます。何の可能性とは言いませんが。

それに、この外見が洞窟ドワーフにそっくりだと言っなら、客商売で上手く利用できるに違いありません。

接客や接待で美人を使うのは基本ですが、この世界では私の顔も上手く使えそうな気がします。洞窟ドワーフの顔というだけで、初対面の人に親しみを持ってもらえそうですし。何かと役に立つでしょう。

当分は店を開いても自分だけで働くことになるはずですし。外見で良い印象を抱いてもらえるのはプラスに働くでしょう。

ちなみに後日、本を読む機会があった時に洞窟ドワーフの出てくる絵本があったので読ませてもらいました。

肖像権の侵害かな？　と思うほど私にそっくりでした。

30 洞窟ドワーフ（後書き）

本日の投稿分はここまでとなります。

いよいよ、乙木のスキルチートぶりが発揮されだしましたね。

ここから乙木の成り上がりは無双が始まります。

今後もぜひ、乙木の活躍とヒロインたちとのラブコメをお楽しみ下さい。

ブックマークや評価の方を頂けると幸いです。

31 追放少女

私はシャーリーさんから今日の報酬を頂いた後、不動産屋へと向かいました。

そして軽く話をしたところで、冒険者ギルドへと逆戻りです。

なんでも、私の持っている金額なら賃貸ではなく土地ごと買える物件もあるのだとか。そして土地ごと購入となる場合、ギルドカードのような簡易の身分証明では無理らしいのです。

そこで身分証明の出来る書類をギルドで発行してもらったため、引き返してきたというわけです。

時刻は九時。既に混雑が始まっているでしょう。

私がギルドに向かうと、やはり混雑していました。仕方なく私も列に並び、なんとか受付に辿り着きます。

そして身分書類の証明が必要なので発行して欲しい、という旨を伝えると、少し時間がかかるので待つて欲しいと言われました。

こうして、私は書類発行までの時間をギルドの片隅でソファに座って待つこととなります。

しばらく、ぼんやりと人の流れを眺めていました。

やがて混雑が少しずつ解消され始めた時、ギルドにまた誰かが入ってくる音が聞こえました。

特に何というわけでもなく、顔を向けます。

「おや」

つい、声を出してしまいます。

そこには見知った顔がありました。日焼けサロンか何かで焼いたらしい肌。脱色して作ったわざとらしいキンキンの金髪。そして、昔は柔和で可愛らしかったのに、鋭く尖ってしまった目付き。

美樹本有咲。六ツ賀谷高校の生徒で、私を勇者召喚に巻き込んだ張本人。そして、私の姪っ子でもあります。

しかし妙な話です。勇者は本来、王宮に手厚く保護されています。いや、保護という名目で、監視され拘束されているはず。そんな勇者の一員が、どうしてギルドなんか顔を出すのでしょうか。しかもたった一人。良く見れば、とても不安げで緊張した表情をしています。

私はそのまま、有咲さんを目で追います。何となく、何をしに来たのか気になったのです。

しばらく有咲さんはうろつろとギルド内をうろついたら後、意を決したように受付へと続く列に並びます。

少しずつ、列が進んでいきます。その間もずっと不安そうな顔をしています。

やがて十分ほどかけて、有咲さんは受付に到着しました。ここからでは何を話しているか聞こえません。が、内容が気になってしまっています。姪っ子ということもあって、つい世話を焼きたくなってしまいますね。しかも不安げに一人でいればなおさらです。

そこで私は、スキル『聞き耳』を発動することにしました。

このスキルはダンジョンと呼ばれる場所に出現する『ウォール・ミミアリイ』という魔物のスキルです。壁に擬態し、周囲の音に聞き耳を立て、油断している生き物の上に倒れ込んで押しつぶし攻撃を仕掛けてきます。冗談みたいな魔物ですが、実在するらしいです。

そんな魔物のスキル『聞き耳』は、ただ耳が良くなるだけのスキルではありません。集中すれば、物音を聞き分け、特にしっかりと聞き取りたい場所の音を聞き分けることも出来ます。

正に、今の状況下で重宝するスキルです。

ただし、発動条件は身動きしないこと。それだけなので人間の私でも発動できるのですが、一切動かないようにしなければいけないのは少し大変です。判定がシビアで、ちょっととした動きでも音が聞こえなくなり、途切れ途切れになってしまうのです。

ともかく、今はこの聞き耳スキルに頼りましょう。

「冒険者になれば生活できるって聞いたんだけど」

有咲さんが、受付嬢に向けてぶっきらぼうに言います。どうやら冒険者になりたがっているようです。

しかし、冒険者になったからといって、生活できるわけではありません。言い方が悪いので、受付嬢さんに軽く訂正されます。

「冒険者として当ギルドで登録いただければ、依頼の達成と引き

換えて現金の報酬をお渡しすることが出来ます。また、ギルドに登録致しますと発行される冒険者証明証、通称ギルドカードは簡単な身分証明証としてもご利用いただけます。宿や賃貸のご利用でも、身分証として通用しますので、ご提示いただければ大丈夫です」

賃貸は分かりませんが、宿でもギルドカードの提示が必要なのですね。初めて知りました。今まで寝ずに過ごしてきましたから、一度も利用していないので気づきませんでした。

ちなみに身体の汚れを落とすため、大衆浴場は利用したことがあります。普段は森の泉で水浴びですが、たまには温まるのも悪くはありません。

「よくわかんないけど、なんか仕事してお金貰えるんでしょ？　じやあ登録してよ」

「かしこまりました。では、こちらの書類にご記入ください」

どうやら有咲さんは冒険者になるようです。これで仲間ですね。仲良くやっていきたいものです。不良少女でも、姪っ子ですし。有咲さん可愛いですし。

有咲さんは書類に記入を済ませると、受付嬢さんに渡します。

「これでいい？」

「いくつかお聞きしたいことがございますが、よろしかったでしょうか？」

「いいよ、何？」

「ご家族がいらっしやらない、というのはどういことでしょうか？　あと、自宅部分に記入が無いようですが」

「親はいるけど、今は頼れない。家が無いのは、住んでるところを追い出されたから。仕方ないじゃん」

おや、重要なことを言っていますね。

どうやら有咲さんは、王宮から追い出されたようです。勇者は勇者で、なかなか大変な目に遭っているのでしょうか。

しかし王宮はひどいことをしますね。有咲さんのような子供を追い出すなんて。私と違って一人で生きる術も知らない子供です。路頭に迷い、毎日お腹を空かせる日々を過ごすかも知れません。

それはよくありませんね。子供は、できれば毎日お腹いっぱいご飯を食べるべきです。

そうして、私の中で一つの考えが固まりつつありました。

32 有咲と薬おじ

無事冒険者として登録を終えたらしい有咲さんが、受付から離れます。そして早速、依頼票の貼り出された掲示板に向かい、依頼を吟味します。

「なにこれ、意味わかんない」

何だか困惑しているようです。

「こんなん、どうやっていいのか分かんないじゃん」

消え入るような、弱々しい声で文句を言っています。

どうやら、依頼をどうやって達成していいのかが分からず、そもそも選べないようです。

それも仕方ありません。最も簡単な常設依頼でさえ、王都の外での採取になります。土地勘の無い異世界の子供が出来るような仕事ではないのです。

そして、冒険者というのは便利屋ではありません。雑用や住民のお悩み相談のような依頼は、無くもないですがほぼ存在しません。あっても、新人冒険者が早いうちに依頼を受けてしまいます。こんな時間には残っていないでしょう。

つまり、女の子が街の中で安全に達成できるような依頼は存在しないのです。

有咲さんはうろろしながら、ただ依頼の前で困惑しています。そこへ、三名ほどの男性冒険者が近づいていきます。親切な人かな？

「お嬢ちゃん、なにか困ったことでもあるのかい？」

「は？ 何だよお前ら。関係ねえだろ」

「そう言うなよお。なあ、悪いことは言わねえ。そんな泥臭い仕事なんかしてねえでよ。お嬢ちゃんぐらいのツラしてりゃあ幾らでも楽な仕事があるぜえ？」

「うるせえな。分かってんだよこっちも！ それが嫌だから冒険者つてのになっただよバーカ！」

「へへ、反抗的な態度も今のうちだけだぜえ？」

そう言っつて、男たちが有咲さんを囲みます。ちなみにギルドの施設内とは言え、荒くれ者が基本です。この程度のトラブルは日常茶飯事であり、ギルドは介入しません。

つまりこのまま行くと、有咲さんは男たちの慰み者になってしまいます。

さすがに、可愛い姪っ子がそんな目に遭うのを黙って見ているわけにはいきませぬね。

私はソファから立ち上がり、有咲さん達の方へと近寄っていきま

す。
「どうしたんですか？」

私は話しかけます。

「げっ、薬おじー！」

男たちの一人が反応します。ちなみに薬おじというのは、薬草おじさんの略です。最近の私のあだ名でもあります。

「あつ、テメエおっさん！　なんかあんのかコラ！」

有咲ちゃんは早速喧嘩腰になります。私のこと嫌いなようですね、この子。

「私と、こちらの女の子、有咲さんは知り合いなんですよ。それでもお誘いになるつもりですか？」

とりあえず、有咲さんの喧嘩腰については後回しです。冒険者の男三人組に言って、順に顔を見回します。

「いや、アンタの知り合いに手え出すほど馬鹿じゃねえよ」

「悪かったなオッサン」

「チツ」

私がでしゃばった途端、男たちは引き下がります。私個人だけの圧力ではこうもいきません。私はCランクのベテラン冒険者さんと繋がりがあり、仲良くしています。彼らのようなEかDランクのごろつきが喧嘩を売れる相手ではないのです。

男たちが引き下がるのを、有咲さんは驚いた顔で見えました。そしてすぐに気を取り直したように、私と向かい合います。

「わりい。テメエのお陰で助かった」

「いえいえ、無関係ではありませんからね」

私はそう言っつて有咲さんに微笑みかけます。顔に自身がないので、ちゃんとした笑顔になっているか心配ですね。ただまあ、有咲さんには関係ないようです。

「でもおっさん。助けられたからって、テメエのことは許さねえからな」

はて。私は何か有咲さんに恨まれるようなことをしたのでしょうか。

「私がおかしましたか？」

「うるせえ！ アタシが追放されたのは、テメエのせいなんだよ！」

そう言っつて、有咲さんは涙目でこちらの胸ぐらに掴みかかってきました。

33 有咲の追放事情

興奮しがちな有咲さんを宥めて、どうか話のできる状態にしました。その後、ソファに座って詳しい話を聞きます。

案の定、有咲さんは王宮から追放されてしまっていました。理由は有咲さんのスキル『カルキュレイター』にあります。

どうやらコンピューター並みの高速演算が可能となるスキルらしいのですが、有咲さん自身が頭が良くない為、使い道が分からなかったそうです。その関係でどうしても実力が伸び悩んでいたとか。

気付けば、有咲さんのスクールカーストは底辺まで落ちていたそうです。クラスの間柄やタクらしい真山君とやらにも馬鹿にされるほどだったとか。

ギヤル仲間や、取り巻きだった男子たちにもボロクソに言われていたそうです。時には肉便器、と呼ばれて性行為を強要されそうになっていたとか。かろうじて騎士団員の助けを借りて身は守っていたそうですが。

そんな王宮での日々の中、ついに有咲さんの追放が決定してしまいました。

有咲さんは嫌がったそうです。しかし、私という人間を既に追放した前例がある以上、見逃すことは出来ないのだ、と言われたそうです。なるほど、それで私が原因で追放された、という考えに至ったのでしょうか。

追放後は、事前に騎士団員から聞き及んでいた冒険者ギルドに来ることとなり、そして後は知っての通り。依頼も受けれず、途方に控えていたそうです。

「まず言わせてもらいます。私が居なくても、王宮は貴女を追放したでしょう」

「うるせえ！ テメエまで役立たずだつて言うつもりか？」

「いえ、違いますよ」

私は、王宮が勇者を、六ツ賀谷高校の生徒たちを戦争の道具として使おうとしていることを詳しく説明します。マルクリーヌさんの証言等から裏も取れている、とも話します。

すると、有咲さんは途端におとなしくなります。

「アタシ、人殺しをやらされるかもしれないなかつたんだ」

「そうなりますね。幸い王宮は見る目が無いので、貴女を追放しました。これで、戦争に関与する必要はなくなります」

「でも、生活できなきゃ死ぬだけだろ。そんなのどつちにしる嫌だよ」

「大丈夫です」

私は断言しました。すると、有咲さんは不機嫌そうにこちらを睨みます。

「テメエに何が分かんだよ」

「分かります。有咲さんの面倒は、私が見ますから」

「ハア？ 意味分かんねえんだけど？」

有咲さんは威圧するような声で疑問を投げかけてきます。

「実は私、冒険者としてそれなりに活動してきて裕福なんです。今日、ちょうど家を買って新しく商売をしようと思っていました。有咲さんには、そのお店で従業員として働いてもらいましょう。住み込みですから、寝床の心配もありません。冒険者のような危険な労働でもありません。どうですか？ 良い条件だとは思っているのですが」

私が説明すると、有咲さんは呆気にとられたような顔でこちらを見ます。

そして少し間を置いてから、訊いてきます。

「なんでおっさん、アタシの為にそこまでするんだよ。意味分かんねえよ。赤の他人なのにさ」

「それが、他人というわけでもないんですよ。有咲さん。お母さんの名前は？」

「は？ 紀恵だけど？」

「あの人、私の姉なんです」

言った途端、有咲さんは固まってしまいます。どうやらかなりの驚きだったようです。

「つまり私は貴女の母方の叔父というわけです。私から見れば、有咲さんは可愛い姪っ子ですからね。助けてあげたいと思うのは当然のことです」

私が説明するほどに、有咲さんは驚きを顔に浮かべます。そして、こちらを指差しながらぶるぶる震えつつ言います。

「も、もしかして、雄一お兄ちゃん？」

「あ、そう呼んで頂けますか。久しぶりで嬉しいです」

「うそだろ！ 全然顔が違っじゃん！」

「有咲さんと会ったのは、まだ私が仕事に忙殺されてはいない頃でしたね。ちゃんと眠っていましたから、大分顔色は良かったはずですよ」

「いや、顔色っていうか、別人っていうか」

有咲さんは混乱しているようです。未だ私が雄一お兄ちゃん本人だと信じて頂けないのでしょうか。

仕方ないので、あの話掘り返しましょう。

「最後に会ったのは、夏休みの時でしたね。かき氷を食べ過ぎた有咲さんはお昼寝した後におねしょをしまして、私はその後片付けで大変でしたよ」

「ばっ、バカじゃねえの！ なんでそんな話いするワケっ？」

「これで私が雄一お兄ちゃんだと信じてもらえましたか？」

「あー、それは信じるけどさー！」

有咲さんは頭を抱えながら言います。どうやら信頼を得られたようです。良かった。

「影のあるイケメンだった雄一お兄ちゃんが、どうしてこんな変なおっさんになっちゃったんだよ。初恋だぞ。シヨックすぎるだろ」

何かを小さな声でブツブツと呟く有咲さん。小さすぎて、何を言っているか聞き取れませんね。聞き耳スキルを発動していれば聞き取れたかも知れませんが。

「さて、有咲さん。私が雄一お兄ちゃんだと信じて頂けたところで、もう一度提案します」

私は本題に話を戻します。

「これから私が開業するお店で、従業員として働きませんか？」

再度の提案に、有咲さんは思案するように俯きます。そして少し時間を置いてから、口を開きます。

「おっさんのことは嫌いだ。でも、冒険者はできそうにないし。こつするしかねえよな」

そう言って、有咲さんは右手を差し出してくれます。

私は、有咲さんの手を取って握手を交わします。

「では、これからよろしくお願いします、有咲さん」
「ケツ。よろしく」

顔を逸した有咲さん。その頬が、少し赤くなっているように見えます。

血が上るほどは。よほど私のことが気に入らないのでしょうかね。

34 優良物件

有咲さんを従業員として雇う約束をした後。ようやく身分証明証となる書類を発行してくれたギルドを出て、不動産屋へと向かいました。

有咲さんも連れてきています。が、まるで借りてきた猫のようにおとなしくしています。場所もわきまえず調子づくほどのお馬鹿ではないようで安心しました。これなら接客業を任せても良さそうです。

ギルドの身分証明書類を渡すと、不動産屋の人は驚いていました。

「おお、ギルドの証明書ですね。しかもこれ、ギルドの責任保証書ですよ」

「責任保証書、ですか？」

「ええ。何か問題があればギルドがある程度肩代わりする、という内容のものです。ベテランの、それも優れた冒険者でなければこういうものは発行されませんから。よほどの腕前だったんでしょねえお客さん」

どうやら、ギルドが発行してくれた書類はかなり良いものだったようです。こうなると、ギルドにも何か恩を返したいという気持ちになります。

ギルドからの仕入れを最優先にするぐらいのことはしましょうか。いずれ、の話ですが。最初は私が自分で仕入れをしないといけません

んじ。

資金は店舗と当分の生活費で吹き飛びます。有咲さんの生活も保証しなきゃいけないので尚更です。

「さて、乙木様にご紹介しようと思っていた物件なのですが。実はご提示頂いた条件にはぼ当てはまる物件が一軒だけございまして」「ほう、それはどのような?」

「こちらの物件です」

そう言つて、不動産屋の人は幾つかの書類をこちらに渡してくれます。私はそれに目を通し、内容を確認します。

築四十年の、元は宿屋として営業していた物件。宿としては小さく、元々は老夫婦が経営していた。それが今年になって、老夫婦の夫が腰を悪くしてしまつたそうです。宿を畳んで治安の良い区画に小さな家を買つて引越す。後に残されたのが、この物件。

立地は冒険者が利用する宿場通りの端の方。少し道を外れて行けば住宅街があります。冒険者がギルドに向かう為に使う道と重なつていて、人通りは多いはず。

望み通り以上の物件です。私が提示した条件よりも、さらに都合が良い。多少古い物件のようですが、それも問題ありません。私が付与魔法で補強すれば良いだけですから。

「最高です。こういう物件を正に探していました。しかも、空いたのは今年ですか。本当に運が良い」

「立地的に、宿を経営する人でないとなかなか欲しがらない場所です。乙木様が即金でお支払いして下さるんですしたら、少しばかりお安くして、これぐらいの金額でどうでしょう?」

不動産屋の人は、金額を紙に書いて提示してきます。内訳は物件

が一割、土地代が九割といったところですよ。ただ、立地自体が良いからか、安くして貰っても私の三ヶ月分の稼ぎが九割ほど吹き飛びます。

しかし、立地の良さを考えるとこれは安い。本当に宿の経営以外を視野に入れていないからこそその値段でしょう。

「分かりました。お支払いしましょう」

私は言って、収納袋から次々と金貨袋を取り出します。私の稼ぎの全てがここに入っています。

収納袋から、明らかに容量以上の物が出てくるのを見て、不動産屋の人は驚きます。

「これはこれは、なんと。アイテム収納袋ですか。貴重な魔道具ですな、実物は初めて見ましたよ」

「そうなのですか？ 実は、容量は少ない方なのですが、私の魔法の師匠から餞別として譲り受けたものでして」

「これほどの魔道具を餞別として下さるとは、きっと高名な方なのでしょうな」

「ええ。師匠は宮廷魔術師です」

「なんと！ すると、乙木様は宮廷魔術師様のお弟子さんだったのですか」

「一応は。学んだ期間はほんの僅かな間でしたが、それでも弟子を名乗ることを許していただけました」

「なるほどなるほど。ギルドが責任保証書を発行するのも領けますな」

実はギルドの方は私がシュリ君の弟子だなんて知らないのですがね。恐らくシャーリーさんが便宜を図ってくれたのでしょう。まあ、ここでそれを言うと話が広がりまするので黙っておきます。

話をしながらも、不動産屋の人は順調に金貨の枚数を数えていきます。そして金額ぴったりの金貨だけ受け取り、残りをこちらに返却してくれます。眼の前で数えるのも含め、こっそり数枚抜き取ったりしないという誠実の現れでしょうね。

「では、これでこの物件は乙木様のものです。後は書類に幾つかサインをいただければ、もう今日にでも使っていたいで大丈夫ですよ」

「ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ。乙木様が居なければ土地を余らせ遊ばせることになりそうでしたから」

確かに、立地だけは良い場所ですからね。宿をこれから開業しようとする人が手を出すには高すぎる物件です。もっと土地の安い場所か、同じ額でも宿場通りの中心地を普通なら選ぶでしょう。

その後、私は契約条項を確認した上で書類にサインをしました。これで、宿場通りの片隅が正式に土地も含めて私のものです。

私は早速、有咲さんを連れてその物件へと向かいました。

01 開店準備

元宿屋だった建物は、想定以上に私にとって都合の良い物件でした。

入り口は通りに面していて比較的大きい。入るとまず酒場代わりの広いエントランスがあつて、奥に調理場と倉庫。階段を上がれば部屋が四部屋。確かに宿としては小さく、夜にお酒を出すことで利益を出していたようですね。

エントランスを店舗に改築し、調理場は事務所に。二階は居住と在庫保管の倉庫に使いましょう。宿の受付に使っていたらしいカウンターは解体して、事務所側に新しくカウンターを作ってレジも置きましょう。

二階への階段は鍵付きの扉を作って、お客さんが勝手に入れないようにしましょう。どこかひと部屋を、従業員控室として利用するのもいいかもしれません。

ともあれ、まずは清掃です。しばらく使われていなかった分、埃が積もっています。それに、有咲さんが住む為の部屋をまずは片付けなければなりません。

「さて、有咲さん。どの部屋がいいですか？」

私は有咲さんを連れ、二階に行きます。希望の部屋を、有咲さんの自室として使うつもりです。

「おっさん、アタシの部屋以外はどう使うつもりなんだよ」

「倉庫と、後はいずれ従業員を増やした時には更衣室や控室として使うつもりです」

「じゃあ一番奥」

こうして有咲さんの部屋は決まりました。

幸い、どの部屋にもベッドと最低限の家具は残っていました。元々が冒険者向けの宿だったのですから、当然と言えば当然でしょう。部屋の掃除だけ手伝わたら、後は有咲さんに任せてしまいます。

有咲さんが自分の部屋を好きに模様替えしている間に、私は宿の掃除を済ませてしましましょう。

掃除をしている最中に、ちょうどよいものを発見しました。足の折れた木製の長テーブルです。木をそのまま使った、趣のあるデザインで、ちょうど看板等に利用できそうです。店の裏手に置きっぱなしになっていたものを、中に入れてしまいます。

すると、ちょうど部屋の模様替えが終わったのか、有咲さんが二階から降りてきていました。

「おっさん、何してんの？」

「おお、有咲さん。ちょうどいいところへ来てくれました」

私はそう言って、有咲さんの方へ歩み寄ります。

「あのテーブルの足を外して、看板に再利用しようかと思っていま

して」

「ふーん。いいんじゃない？」

「そこで有咲さんに最初の仕事をお願いしようかと思ひます」

「は？ 足外すぐらい自分でやれよ」

怒られてしまいました。ですが、残念。違います。

「そうではありません。看板の書き文字を、有咲さんをお願いしようかと思ひまして」

「あー、そういうこと。いるよね、文字とか女子に書かせたら可愛くなるだろ、みたいな奴。バイト先で何回かやらされたことあるわ」

なんだか言葉が刺々しいです。可愛い姪っ子に嫌われていると思うと少し堪えますね。

「お願いできませんか、有咲さん？」

「まあ、いいよ。ここに住ませてもらうんだし。従業員になるならそれぐらいはやるよ」

「ありがとうございます」

「で、なんて書けばいいの？ 書く道具は？」

「さすが有咲さん。よく気づきますね。私は全く考えていませんでした」

「アホだろおっさん」

ぐうの音も出ません。店の名前も考えていなかったのは事実ですし、書く道具も用意していません。

「そうですね、店の名前は『洞窟ドワーフ魔道具店』でいきましょう」

「洞窟ドワーフ？」

「この世界で有名なおとぎ話に出てくる種族です」
「へえ。まあなんでもいいけど。で、書くものは？」

言われて、私は収納袋の中身を探ります。シュリ君から貰ったものの中に、魔法陣を書く為に使う筆があったはず。魔法陣用の質の良い塗料もあつたはず。

両方を取り出し、有咲さんに渡します。

「これを使ってください」

「これ、筆もインクも良いやつなんじゃない？」

「そうなのですか？」

「王宮にいる時、金浜とかが魔法陣の練習する時に使ってたやつと同じっぽい。おっさん、なんでこんな良いもん持ってたの？」

「まあ、色々ありまして」

シュリ君と性行為の約束と引き換えに貰った、とは説明できません。相手は女子高生ですから。セクハラになる話題は避けねばなりません。

その後、手っ取り早くテーブルの足を壊して取り外し、すぐに看板として使える状態にしました。

「では、看板はお願いしますね。文字はできるだけ可愛くしてください」

「はいはい、分かってるって」

有咲さんは言いながら、看板と向かい合います。真剣な表情で筆を握っています。これなら、任せてしまっても大丈夫でしょう。

「有咲さん、すこし出かけるので、その間に看板の方をお願いしま

す

「あ？　どっか行くの？」

「はい。店として営業するために必要なものを仕入れに行きます」

私はそう告げると、店に有咲さんを残して出掛けます。

目的地は、冒険者ギルドです。今日だけで三回目の訪問です。

01 開店準備（後書き）

本日のこの投稿までで、一週間続いた連続投稿は締めとなります。

これからも投稿は続きますが、ペースは下がります。

出来るだけ更新をしていきたいとは思っていますが、どれだけの更新ペースを維持できるか、自分でも分かりません。

それでもこの作品を面白いと思ってくださる方は、ぜひこれからも末永くお付き合い下さいませ。

皆様が作品を楽しめるよう、最善を尽くしていこうと思います。

また、もし宜しければブックマークや評価を付けて頂けると幸いです。

作者のモチベーションにも繋がり、更新頻度が上がるかもしれません。

02 クズ魔石

私は訪問すると、まずはギルドの受付に向かいます。

「こんにちは。乙木さん、今回はどのようなご用件ですか？」

受付嬢さんが笑顔で応対してくれます。ちなみに、シャリーさんではありません。シャリーさんは基本的に午後休なので、今はギルドにいませんからね。

「実は、魔石をお譲り頂きたいと思っております」

「魔石、ですか？ ギルドでは魔石の買い取りはしていますが、販売となると専門の商店でお買い上げいただくこととなりますが」

受付嬢さんが首をかしげます。まあ、それも当然でしょう。

魔石というのは、魔物の身体に埋まっている石のようなものです。魔力を溜め込み、魔物が生物として活動するためのエネルギーとして使う為の臓器です。人間で言うと、脂肪を蓄積するようなものでしょう。

多くの場合、魔物を倒すとその体内には魔石が残っています。これには魔物が蓄積した魔力が蓄えられています。この魔力に価値がある為、ギルドでの買取対象素材にもなっています。

魔石の持つ魔力は、日本で言うと電池のような用途で使われます。

一般のご家庭だけでなく、冒険者も利用します。主に魔道具の動力源として、一般的に使用されているのです。

ただ、冒険者が納品した魔石がそのまま使われているわけではありません。形や大きさがまちまち。しかもほとんどの魔石はサイズが小さい為、使いづらいのです。

なのでギルドは引き取った魔石の魔力を、使いやすく、大きい魔石に移します。そして魔力で一杯になった魔石を、市場に流します。魔力補充に使われた小さい魔石は、廃棄品となります。

「実は、私が欲しいのはクズ魔石の方なのです」

そう。今言ったとおり、私が欲しいのはクズ魔石。廃棄となった小さい魔石の方なのです。

「はあ、クズ魔石ですか。そんなものを、どんな目的で？」

「魔法陣を描く塗料に使おうかな、と思っていたりします」

「魔法陣ですか」

受付嬢さんは渋い顔をします。これも、当然の反応ですね。

魔石は魔力を蓄積する為、魔法陣の塗料に向いています。ですが、実際に使おうと思えば専門の処理を施した後の粉末でなければいけません。そうでない場合、性能が低すぎて使わないのとあまり変わりないのです。

しかも、魔法陣の塗料を必要とする人はそう多くありません。一方で、魔石は大量に納品されます。その関係で、魔力の無い魔石はほとんどが使われず、ギルドが独自に処分しているのです。

「まあ、廃棄処分となるものなので問題はありませんが」

「ありがとうございます。あるだけ全部の魔石を頂ければ嬉しいのですが」

「はい。では、少々お待ち下さい」

受付嬢さんは、渋い顔をしながらも認めてくれました。これで売の元となるものがタダで仕入れられることになります。

ちなみに、どのように使うかは既に決めています。が、これから実験しなければいけないので確定ではありません。

とはいえ、上手く行けば商品をタダで仕入れたも同然なのです。とても美味しい展開です。

「乙木さん、これぐらいあればいいでしょうか？」

受付嬢さんが戻ってきました。カウンターの向こうから、こちらに出てきます。手押しの手台車に、膨れ上がった大袋を三つも乗せています。中身が全部魔石と考えると、かなりの量です。

「はい、これだけあれば助かります。ありがとうございます」

「いえいえ。こちらもクス魔石の処分の手間が省けて助かりました」

私と受付嬢さんで、お互いに感謝しあいます。そしてもう用件も終わりです。私は魔石の入った袋の中身を、私の収納袋の中へと移していきます。

大量の魔石が入った収納袋を、私は持ち上げます。少しだけ重くなりましたが、大量の魔石が入っているとは思えません。こうして荷物を軽量化できるところも、アイテム収納袋の便利な部分ですね。

「では、ありがとうございました」

最後に一礼して、私は冒険者ギルドから離れます。

さて、次は家に戻って商品を作りましょうか。

03 魔石加工

私が戻ると、有咲さんが寄ってきます。

「おいおっさん、どこ行ってたんだよ」

「冒険者ギルドです。商品になる予定のものをお譲りしてもらいました」

私は言つと、アイテム収納袋を掲げてみせます。

「ふーん。で、お腹すいたんだけど」

「ああ、もう夕方ですもんね。お昼もまだでしたか？」

「まあ、朝追い出されたばっかだからな」

「じゃあ、これで好きなものを食べてきて下さい」

私は言つて、収納袋の中から数枚の銀貨を取り出し、有咲さんに握らせませす。

「これで、どんぐらいの価値があるわけ？」

「そうですね……だいたい、千円ぐらいでしょうか」

私は自分の記憶を頼りに価値換算します。

銅貨が百枚で、銀貨一枚。銀貨が百枚で、金貨一枚。そして、銅貨数枚でりんごやパンなどが買えます。

りんごやパンというものの価値を日本の価値で換算すると、おおよそ銅貨一枚を十円として考えていいでしょう。日本の十円玉よりも小さく、大きさは五十円玉と同じぐらいでしょうか。

その百倍の価値がある銀貨は千円。大きさは銅貨と同じで、柄も同じです。

さらに百倍の価値がある金貨は十万円。大きさも柄も、やはり銅貨や銀貨と同じ。

ちなみに、硬貨はどうかやら人間の国では世界共通となっているようです。ルーンガルド王国が過去に統一したそうです。周辺諸国もこの硬貨、通称ルーン硬貨を使用しています。

また、銀貨や金貨は純金、純銀ではなく、合金です。特に銀貨は銀の含有量が少ないのだとか。まあ、銀や金の塊を硬貨として大量に流通させるのは現実的ではありませんからね。

ついですので、有咲さんに貨幣価値と知識について教えておきます。

説明すると、有咲さんは興味ありげに聞いてくれます。

「ふーん、そうだったんだ。おっさん、どうしてそんなにこの国のこと詳しいわけ？」

「お城に居た頃、書物を読み漁って知識を蓄えましたので」

「そっか、まあおっさん陰キャっぽいし似合ってたな。じゃ、アタシ、飯行ってくるから」

「はい。お気をつけて」

そうして、有咲さんは食事の為に家を出ました。

有咲さんが居なくても、作業は出来ます。まずは魔石の加工を試みましょう。

まず、収納袋から魔石をいくつか取り出します。そして、魔法陣を描くための塗料と筆。

あとは魔法陣を描くものですが、廃材となった木の板があります。それを使いましょう。

私は木の板に魔法陣を描きます。私自身のスキルを付与する、付与魔法の魔法陣です。単純な上に、必要とする魔力も少ない。極めて単純な魔法陣です。

幾つかの図形と、付与に関する色々を決定する言葉の数々。どんなスキルを、どのように、何に付与するのか。そういった情報を書き込んでいきます。図形と言葉の並びは、魔法によって決まっています。そして配列された図形と言葉を、線でつないでいきます。

そうして出来上がったのは、あまり日本人が思い浮かべる魔法陣とは似ても似つかないものです。円の中に五芒星とか、六芒星があるわけではありません。幾つもの図形と言葉が並び、それらを線でつないだだけ。見ようによっては、黒板に教師が授業内容を書いた板書にも見えます。

そして、図形の終端に円があります。ここに乘せたものに、付与魔法が発動するという仕組みになっています。

私は魔石の一つを円の上に置きます。そして魔法陣の始点に触れ、魔力を流します。すると魔法陣は光り、続いて魔石も光ります。

そこまで見届けて、私は魔力を流すのを止めます。そして、魔石を持って円の中から退けます。

同じような手順で、私はもう一つの魔法陣を描き、同じ魔石にもう一度魔法を付与します。

二回の付与、つまり二つのスキルが魔石に付与されたことになり
ます。結果を確認するため、私は魔石を持って家の外に出ます。

時刻は夕刻、日も傾き、地平線に没するかという頃合いです。私
は魔石を、その赤くなつた太陽に向けて翳します。

数分ほど、そのままの姿勢でいました。人通りも結構多いので、
注目されてしまいます。ですが気にせず、魔石に光を浴びせ続けま
す。

そして十分かな、という頃合いになって、やっと私は魔石を太陽
に翳すのを止めます。そして魔石を持って家に戻ります。

家の中に戻つた途端　なんと、魔石は光を放ち始めました。

私が狙つた通りの現象です。つまり、魔石へのスキル付与は成功
しました。

ですがこれだけではまだダメです。次に、私は魔石に僅かな魔力
を流します。すると、魔石は発光するのを止めます。勝手に光り始
めないことを確認すると、もう一度魔力を流します。すると魔石は
また発光を始めます。

光の強さはそれほど強くありません。せいぜい、ランプ程度の明
かり、といったところでしょうか。少し期待よりも弱い気がします。
ですが、これでも十分実用範囲内です。

そう。実は、魔石にスキルを付与することで、照明となる魔道具
を作ろうとしているのです。

付与したスキルは二つ。『蓄光』と『発光』です。

蓄光は、幾らかの種類魔物が持つスキルです。日光を浴びることと、それを魔力に変換して魔石に蓄積します。植物型の魔物に多く見られるスキルで、そう珍しいものではありません。

そして発光は、ダンジョンと呼ばれる場所に生息する『ヒカリゴケ』という苔の持つスキルです。自身が持つ微弱な魔力を消費して、光を放つ苔です。魔力を浴びると驚いて光を消してしまう性質があります。もう一度浴びせたら、また光を放ちます。

そんな二つのスキルを合わせて魔石に付与することで、日光を浴びて魔力を蓄積し、任意でオンオフを切り替えられる照明となったわけです。

蓄光も発光も、植物由来のスキルです。植物であれば発動します。そして魔石は植物、動物どちらの魔物も体内に持っています。つまり魔石とは植物であり、動物でもあるのです。どちらの条件も満たすため、こうして植物由来のスキルでも有効となるわけです。

さて、魔石が照明となることはこれで確認できました。あとはこれを量産するだけですな。

私はさっそく、二つの魔法陣の上に魔石を置き、次々とスキルを付与していくのでした。

04 おむかえ

しばらく付与魔法を使い続け、だいぶ魔力を消費しました。すでに日は暮れ、外も暗いです。魔石は四分の一ほどを付与し、照明魔石に変えました。

この時間になっても、有咲さんが帰ってこないのは妙ですね。食事につくり時間をかけていたとしても遅すぎます。

街の治安は悪くありませんが、良くもありません。有咲さん自身もあまりマナーの良い人ではありません。何か、トラブルに巻き込まれていてもおかしくはないでしょう。

ひとまず、お迎えに向かいましょうか。

恐らく近場の飲食店のどこかにいる有咲さんを探し、私は家を出ます。

家を出てすこし歩くと、すぐに有咲さんは見つかりました。というのも、通りのど真ん中で揉めているようです。

「へへ、いい加減に諦めなねーちゃん。てめえみてーな女に冒険者は無理なんだよ」

「だから、もうそれは大丈夫なんだつつつてんだろ！」

「だったらためー、あの薬おじのカキタレになったのは認めるのか

よ？」

「それも違うつってんだろ！ アタシはちゃんと働くんだよ！」

「けっ、だから俺らがもつと良い働き口紹介してやるつってんだろ！ 素直になりゃあいいもんを、つけあがりやがって！」

男に囲まれて、有咲さんは色々と難癖をつけられているようです。しかもどうやら、男たちは一度冒険者ギルドで追い払った奴らのようです。まさか食事をした帰りに彼らと遭遇するとは。運がありません。

しかしいくら運がないとは言え、運命だけでなく私まで有咲さんを見放す必要は無いでしょう。しっかりと助けに入ります。

「どうしたんですか、有咲さん？」

「あ、おっさん！ こいつら追っ払ってくれよ！」

私を見つけた瞬間、有咲さんは困ったような顔をしてこちらを頼ってきます。可愛い姪っ子に頼られるというのは、気分が良いですね。

私はつい、調子にのって有咲さんの前まで歩み寄ります。そして男たちから有咲さんを守るような位置に立ちます。

「てめえ、薬おじ！ いいかげんにしろよ！」

男たちの一人がキレます。はて、怒られるようなことをしたのでしょうか。身に覚えがありません。

「テメエの女だと思って見逃してやったら、違うつつうじゃねえかよ！ 調子こきやがって！」

先に唾つけたのは俺らだろうが、しゃしゃり出てんじゃねえぞコ

ラ！」

「ギタギタにしてやろうか、おおん？」

どうやら、男たちは有咲さんが私の恋人か何かだと思っていたようです。そして偶然出くわして、有咲さんと会話して誤解が解けた。そこで、恋人でもないなら有咲さんに手を出せると思ったのでしよう。

短絡的な考え方です。呆れてため息が出てしまいます。

「あのですね。有咲さんは私の姪っ子です。訳あって今日から保護することになりました。ですから、皆さんのような輩に預けるわけにはいかないですよ」

「ああん？ 俺らの何が不安だっつうんだコラ？」

「女性に軽々しく娼婦になることを薦めるようなところですよ。可愛い姪っ子を傷物にされてはたまりませんからね」

「うっせえよ！ 親でもねえテメエに何の関係があんだコラ！」

だから姪っ子と叔父という関係があると言っているのですが。まあ、頭が悪いと話の内容が理解できないのも仕方ありません。可哀そうに。

ですが哀れみのあまり見逃すというわけにも行きません。彼らは今後也有咲さんに寄ってくるでしょう。悪い虫は早めに潰すに限ります。

「関係ないというなら、いくらでも好きにすればいいでしょう。無関係な男が割り込んできたんですから、実力行使なり何なり、好きにすればよいのでは？」

「ああん？」

「何だこら薬おじ！ 調子こいてんじゃねえぞコラ！」

「調子も何も、体格の割に脳みそが小さいようですね。はっきりと

見下しているんですが。ご理解頂けませんか？」

「おう、言うじゃねえか temeエ！」

「草むしってデカイ面してんじゃねえぞボケ！」

男たちは興奮します。そして内一人が、ついに堪忍袋の緒が切れたのでしよう。拳を振り上げ、私に襲いかかってきます。

「おっさんッ！」

後ろから、有咲さんの心配するような声が上がります。でも、大丈夫です。安心してくださいね有咲さん。

元から、こいつらでは私に傷一つ付けられませんから。

「ぐすつ、という鈍い音が響きます。男の拳が、私の顔に直撃した音です。

「ああ？」

そして、男は疑問の声を上げます。

当然でしょう。全力の拳を顔面に叩き込んだはずなのに、私はまだ立っています。普通なら、気持ちよく吹き飛んで倒れるところですよ。

しかし、残念ですね。今の私が相手では、そうはいかないのですよ。

「どうしましたか？ 蠅でも止まっていたなら、追い払ってくれたことを感謝しますが」

「くっ、なんなんだよ temeエ！」

「何なんでも何も、私は草むしりをしてデカイ面をするだけのおっさんですよ。草むしりもできなさそうな、ひ弱な皆さんよりはマシな男です」

「うるせえ！ ボコすぞコラ！」

そう言っつて、男の前蹴りも私に直撃します。が、少しの衝撃で身体が揺れただけで、私には大したダメージにもなっていません。

「手加減がお上手ですね。今まで熱心に曲芸でも学んでいらしたのですか？」

「クソが、ぶつ殺す！」

そうしてキレた男が、何度も私を殴打し、蹴り込んで来ます。

しかし、ただの一発も私へまともなダメージを与えることはありません。さすがに異様だと気づいたのか、殴ってくる男の表情に焦りと恐怖が浮かびます。他の男たちも、私の様子に驚き、硬直しています。

やがて、男は息を荒くして、疲れのあまり手を休めます。

「はあ、はあ」

「お疲れ様です。せっかくですし、お手本を見せてあげましょう」

言っつて、私は男の鳩尾に拳を打ち込みます。

ドゴオツ！ という音を立てて、私の拳は男の胸にめり込みます。

「コハアツ！」

男は息を漏らして、そのまま痛み之余り蹲り、その場に倒れます。その姿を見て、他の男たちも慌て始めます。

「さて。うちの有咲さんに手出しする方は他にもいらっしやいますか？」

私はそう言って、順に男たちの顔を見ます。誰もが首を横に振って否定します。

「では、そろそろお帰りになられては？ 良い宿が埋まってしまいますよ」

失せろ、と私が暗に言うと、いくら馬鹿でもそれぐらいは理解できたでしょう。倒れた男も拾って、男たちは退散していきます。

私はその姿を眺めながら、満足げに頷きます。

しかしなかなか。こうして時には調子をこいてみるのも爽快感があつて小気味よいですね。悪党相手には実力行使も辞さない方向で行きましょう。

05 有咲とおっさんの現在ステータス

「おいおっさん。あんた強かったんだな」

有咲さんは私の後ろから、その声を掛けてきます。声色は安堵に染まっていて、普段の有咲さんよりずっと優しい口調に聞こえます。ちゃんと姪っ子を守り、いい格好も出来たと思うと気分が良いです。

「まあ、これでも冒険者を三ヶ月ほど続けていたので」

私は、有咲さんの問いかけに曖昧に答えます。

「ふうん。それだけで、あんなに強くなれんの？」

「いえ、無理でしょうね。ですから真似しちゃダメですよ、有咲さん」

「子供あつかいすんなバーカ。で、実際どうやって強くなったわけ？」

「まあ、働いた分だけレベルが上がるスキルみたいなものがあるんですよ」

「は、マジ？」

有咲さんが驚き、疑ってきます。が、真実なので私は肯定の為に頷きます。

実際、私の今のステータスはこんな感じですよ。

【名前】 乙木雄一

【レベル】 112

【筋力】 B

【魔力】 B

【体力】 B

【速度】 B

【属性】 なし

【スキル】 ERROR

レベルの割にはかなり弱いのですが、それでも全てのステータスがBです。彼らは筋力EかD程度しか無いはずですから、体力Bの私にまともなダメージを与えられるはずが無いのです。

武器を使えば話は別でしょうが。まあ、そのときはこちらにも対応の対処をするまでです。

「そういえば、有咲さんは勇者だったんですね。あれぐらいのころつき、ステータスの差で追い払えたのでは？」

「うっせえ。出来ねえんだよ」

そうやって、有咲さんはステータスプレートを表示し、私に見せてくれます。

【名前】 美樹本有咲

【レベル】 8

【筋力】 E

【魔力】 A

【体力】 E

【速度】 E

【属性】 なし

【スキル】 カルキュレイター

レベルが一桁で、既に私の魔力を越えています。さすが勇者ですね。

しかしそれ以外の水準はあまり高くありません。まあ、Eとなれば成人男性並みの能力になるはずなので、女子高生の有咲さんにしては高いでしょう。が、鍛え上げた冒険者の男に困まれて抵抗できるほどのものではありませんね。

それに属性がなし。せつかく魔力が高くて、有効活用が難しい。そしてスキル、カルキュレイター。有効活用が難しいスキルです。

まあ、スキルについては既に私の方で活用法を考えてあります。と言っても、大した方法ではありませんが。

バツが悪そうにステータスプレートを見せる有咲さんを、私は慰めます。

「有咲さん。レベル8でそれだけのステータスがあるのは十分凄いですよ」

「けっ。おっさんは自分がつええからそんなこと言えんだろ？」

「はい、まあ強くなって多少調子に乗ってますが。でも、有咲さん

も凄いですよ」

「いや、そういうことは謙遜しろよ」

有咲さんに突っ込まれてしまいました。正直者すぎるのも考えものという事ですな。

「つていうかおっさん。暴力に訴えることあるんだな」

「はい、まあこの世界に来て強くなれましたので。あ、ステータス見ます？」

「自慢かよ」

「はい、自慢です。可愛い姪っ子にもっと持ち上げてほしいので」

「キモイんだよおっさん。やめろ」

「はい、すいません有咲さん」

そんな話をしながら、私と有咲さんは並んで帰ります。

「でも、暴力に訴えるというのは少し違いますよ。あくまでも、私は悪い人にだけ調子をこいていくつもりですから」

「あー、調子こいてるのは否定しねーんだな？」

「それはもちろん。コンビニ店員の長年の夢ですからね」

「コンビニ店員関係あんのか？ ねーよな？」

「いえいえ、ありますとも。彼ら邪悪な神の眷属に深い恨みを持っているのはコンビニ店員なら誰でも同じですからね」

「は？ 意味分からん」

ちなみに、邪悪な神の眷属とは比喻表現です。お客様が神様だとしたら、マナーの悪い客は邪悪な神。そしてマナーの悪い人間はその同類ですから邪悪な神の眷属というわけです。私は普段から、マナーの悪い客は心の中で邪神と呼んでいました。当然、日夜神を討たんと願い続けていましたね。

その関係で、マナーの悪い人や調子に乗って迷惑なことをしている人を見ると、邪神討伐をしたい気持ちに駆られるのです。こればかりは、コンビニバイトをしていた以上仕方ありません。

「ともかく、有咲さんに何かあればいつでも駆けつけて守りますから。そこは安心して下さい」

「お、おう。わりーなおっさん」

有咲さんはそう言って、家に入る直前のところで一人立ち止まります。

「優しいし、強いし。顔さえ雄一お兄ちゃんのままなら完璧なのにな」

「ん？ 何か言いましたか？」

有咲さんが小声で何かを呟きます。大通りの喧騒や扉を開く音に重なったのもあって、よく聞こえませんでした。

「なんでもねーよ、おっさん！」

そう言っつて、有咲さんは私の背中を突き飛ばしてきます。その勢いで、私は家の中へと押し込まれます。

ふむ。軽い暴力に訴えるほど私が嫌われているとは。もっと有咲さんには優しくしてあげないといけませんね。

嫌われた分だけ優しくしていれば、いつかそのうち仲直りもできるでしょう。

05 有咲とおっさんの現在ステータス（後書き）

いつもお読み頂き有難うございます。

日間ランキングで上位に入ったお陰か、たくさん感想を頂いていくようです。

有難うございます。

ただ、基本的には感想に返信をする余裕が無いため、一律で返信は控えております。
申し訳ありません。

ただ、感想そのものには全て目を通しております。

至らぬ点、指摘された部分におきましても、改善できる部分は改善していきたいと思っております。

どうかこれからも、当作品を宜しくお願いいたします。

06 看板とメイン商品

私は家に戻ると、収納袋から幾つかのランプを取り出します。冒険用のランプですが、私はスキルのお蔭で必要ありません。なので、照明魔石が揃って完璧に稼働しだすまでの室内灯に使いましょう。

既に日も落ち、暗かった我が家かつ未来の店内は、すぐにランプで照らされます。暗い部屋では作業が出来ませんからね。

ちなみにランプは、クズでない魔石を使う魔力灯です。魔石は本来、こうした道具を使う為に決まった形のものを買うことになりません。私もいくつか買って、収納袋に入れてあります。が、ランプの分はシュリ君に貰った荷物に入っていました。

ほんと、なんでも用意してくれてますね。シュリ君大好きです。

さて、そんなことより今日のうちにできる残りの作業を済ませましょう。

「さて、有咲さん。看板は出来ていますか？」

「おう、バッチリな！」

そう言って、有咲さんは看板の方を指し示します。

そこには『洞窟ドワーフの魔道具屋さん』と書かれた看板があります。おかしいですね。たしか私は『洞窟ドワーフ魔道具店』と書いてくれと頼んだはずですが。

まあ誤差の範囲内でしょう。オペレーションを守らずアドリブで

勝手なことをするのは学生バイトや年配の方の基本スキルですからね。これぐらいの小さなこと、気にしたら負けです。

「完璧です、有咲さん」

「でしょ？ 可愛くしろつつたから、アタシなりに工夫したんだからな？」

「なるほど」

恐らくそれで文面が変わっているのでしょう。確かに私が提案した名前より、可愛げがあります。

当然、文字も可愛いフォントに仕上がっています。この看板を掲げれば、店が可愛く見えること間違いなしでしょう。

そして店内には可愛い私。いえ、正確には可愛いと言われる洞窟ドワーフに似た私があります。若い女性に人気がでるのも無理はないでしょうね。今から楽しみです。

「で、おっさん。商品つてのはどこにあんの？」

「ふふ。それはですね、これです！」

私は不敵に笑いながら、有咲さんに照明魔石を見せつけます。見た瞬間、有咲さんが眉をしかめます。

「なにこれ、石？」

「光る石です」

「光ってねえじゃん」

「今は光っていませんが、これから光りますよ」

私は、照明魔石に魔力を僅かに流し込みます。すると、魔石はすぐに反応し、淡い光を放ちます。

「へえ、けつこう明るいじゃん」

「どうですか。これがあれば二十四時間働けます」

私が言うと、有咲さんは呆気にとられた顔をします。

「は？」

そして威圧感のある声を出します。女の子相手でも威圧されると怖いので、勘弁してほしいですね。

しかし私は威圧にも負けず、有咲さんに詳細を伝えます。

「この照明魔石があれば、二十四時間営業のコンビニを再現することが可能になるんです」

「再現してどうすんだよ」

「夜勤、ですかね」

「そうじゃねえから。おっさんの働き方とか聞いてねえから。コンビニ再現すんのにどんな意味があんのかっつってんの。分かれよ」

ただひたすらにツッコミを入れられてしまいます。「冗談を言った甲斐がありました」。

「私はコンビニ業務以外の経験がありませんからね。コンビニを再現して、まずは形から入ろうと思います。そして私の知識と、この世界の需要とを照らし合わせながら、店を少しずつ変えていこうかと」

「で、売り物は？」

「それは、この魔石です」

「照明なんか、そんなに売れんの？」

「間違いなく売れますよ」

私は断言します。これについては自信があります。値段設定等についてはこれから考えますが、かなり高額にしても売れるだろうと踏んでいます。

少なくとも、最初の需要は爆発的なものになるはずですよ。

「ま、そういうのあたし分かんないし。おっさんに任せるわ」

「はい、任せて下さい。ちゃんと有咲さんの生活は保証します」

私が言うと、有咲さんは困ったように眉をしかめます。

「そついや、儲けなきゃあたしも生活できなくなるんだよな。頑張れよおっさん」

「はい、頑張ります。それに有咲さんも、今から頑張ってもらいますよ」

言って、私は有咲さんの肩を掴みます。そして背中を押しながら、ある場所に案内します。

「おい、おっさん？　なんだよ？」

「お仕事です」

私は、有咲さんの目の前を指差して言います。そこには、付与魔法の魔法陣が描かれた板が一枚。

「簡単な作業ですよ。私が魔石を渡したら、それをこの円の中に置いて下さい。で、魔法陣に魔力を流す。すると魔石が光りますから、光ったら魔力を止めて下さい。魔法陣と魔石の光が収まるので、そうしたら完成です。こっちの完成品の山の方に置いて下さい。後は、同じ作業をひたすら繰り返します」

単調作業ですので、これなら有咲さんでも任せられるでしょう。

「分かった。簡単そうだし、任せろ！」

有咲さんは意気込んで、魔法陣の前に座ります。スカートなので、前から見ると下着が見えるかもしれないような姿勢です。

ああでも、注意するとセクハラになってしまいます。黙っていることとしましょう。

「ん、どうしたのおっさん。早くしろよ」

「はい。急ぎます」

私はもう一つの魔法陣の前に立ちます。そして収納袋から魔石を取り出しては付与魔法を施し、魔石を有咲さんに渡します。

有咲さんは魔石を受け取ると、すぐに付与魔法を施します。ちなみに、魔法陣は私のスキルを指定して付与するようにしています。

なので効果範囲に私がいる限り、魔力を流すのが有咲さんでも、ちゃんと私のスキルが付与されるようになっていきます。

作業の効率化は基本ですからね。最初から、有咲さんに手伝ってもらうつもりで魔法陣を描いたわけです。

そうしてこの日は、すっかり夜になるまで付与魔法を続けました。その甲斐もあり、貰ってきたクス魔石の全てに付与が完了しました。

07 価格調査

翌日。私は有咲さんにはお留守番をしてもらって、一人で商店街へと向かいます。

目的は、既存の照明器具の価格調査です。照明魔石を売るとしても、その適正価格を判断しなければなりません。適当な価格設定では、利益が小さくなってしまいますからね。

まずは冒険者向けの道具店です。冒険者は暗いダンジョンや洞窟、夜間等の暗い場所で探索を行うことがあります。なので、松明やランプ等、照明器具は必需品なのです。当然、種類も豊富で価格帯も様々。

一口に冒険者向けと言っても、最低のGランクからCランクまでが利用しますからね。それぞれに合わせた商品が存在する、というわけです。

私は順に棚を見ていきます。

安いものだと、ごく普通の松明があります。この辺りは使い捨て前提で、費用対効果で言えば安くはないとも言えます。

ですが使うのは火です。火が苦手な魔物が出る洞窟の探索には有用です。そして、松明自体が棍棒のようにも使え、緊急時には武器にもなります。また、荒々しく使っても壊れず、燃え続けて照明としての役割を果たせる点も大きいです。

ランプ等は戦闘中は邪魔になります。松明は適当に足元へ投げ

捨てておけば、あとで拾って再利用できます。その点を重視し、照明に松明を愛用する冒険者も多いです。

松明と同等に安いのが、油を使うランプです。実は、冒険者には余り人気がありません。

壊れやすく、手入れも必要なランプはガサツな冒険者には扱いたらないのです。しかも、戦闘中は邪魔になります。うっかり投げ捨てたら、すぐに壊れます。頑丈に作っても、油は液体なのですぐに溢れます。そうやってすぐ灯りが消えるので、冒険者はあまり使いません。

移動が少ない採掘系の作業が得意な冒険者は使うことがあります。が、主流でないことには変わりありません。

一方で、油ではなく魔力で光るランプは人気があります。ただ、高額なので手に入れようと思えばかなりの貯金が必要です。

光る原理も、発光スキルではなく炎属性の付与による発火です。つまり、原理は魔法剣等と同じなので、絶対数が少ないのです。

それに、維持費もかなりかかります。魔力の補充に、魔石を必要とするからです。それも、こうした魔道具は魔力補充の魔石のサイズ、規格が決まっています。なので、自分で集めた魔石で補充、というのは難しいのです。

上位の冒険者であれば、魔石の魔力を移す技術を持っていたりします。そうになると、規格に沿った魔石を購入する必要がありません。結果的に維持費を節約出来ます。

一方で、無理をして魔力ランプを買った中位の冒険者が、維持費が出せずに結局売り払ってしまうことも多いです。

そして最後に、最も人気のあるランプ。ヒカリゴケのランプです。ヒカリゴケの生えた石を入れただけのランプですが、苔が死滅しない程度に気をつけてあげるだけで長期間持ちます。多少乱暴に扱っ

ても平気で、油のランプより使い勝手も良いです。

値段はそれぞれの種類で大きく異なっています。また、同じ種類の照明でも品質によって値段が変わります。松明や油ランプは銅貨数十枚程度。ヒカリゴケのランプは銀貨数枚。魔力ランプは最低でも金貨からスタートです。多くの商品がその程度の価格帯に収まっています。

変わった形の商品は、中でも価格が高いです。例えば、鉄製の棍棒の先端に松脂を塗った布を巻く為の突起が付いている商品もあります。こういうものは、実際に使ってみると思ったほど便利ではないんですよね。この棍棒の場合、突起がすぐに折れてただの鉄棍棒になりそうです。使い回せる上に武器にもなる松明、とはいかないようです。

そもそも、張替える手間をかけるなら、新しい棍棒を買ったほうが楽ですしね。手間をかけて節約するほど、松明は高額商品ではありません。

とまあ、おおよそ店内の照明関連の商品を見て回りました。ひとまず、私の作った照明魔石と各種照明の価値を比較してみましょう。その上で、値段設定を考えてみます。

まず、照明魔石は松明と同等の使い回しが期待できます。魔石ですから、戦闘中は適当に放り投げて置いておけば良いのです。武器にこそなりません、使い勝手の良さは松明に匹敵するでしょう。

そして、明るさはヒカリゴケのランプ以上です。ヒカリゴケは体積が少ないので、光も弱いのですが、照明魔石はしっかり松明並みの灯りを灯します。

維持費に関してはヒカリゴケ以下です。維持の手間も、ヒカリゴケより楽なはずです。日光を浴びせたら、浴びせた時間の三倍から四倍は光り続けますからね。

そして、光り続ける時間は魔力ランプを大幅に越えます。炎を生み出す魔力ランプは、魔石の魔力消費が激しいのです。そのため、長くても五時間程度が光り続ける限界になります。

一方で、私の照明魔石は一日天日干しすれば何日も使い続けられます。曇りの日でも、日光を浴びせた時間の二倍から等倍程度は発光します。日の当たる窓際に照明魔石を幾つか置いておけば、それだけで魔力切れも無く使い回せるはずです。

こうして比べてみると、照明魔石の性能が圧倒的に高いですね。

でも、それも当然のことです。本来は、蓄光と発光のスキルは付与が困難です。自分のスキルを付与するのは簡単ですが、他人のスキルを付与するのは途端に付与魔法の魔法陣が複雑化します。必要な魔力も多くなりますし、発動する魔法の制御も難しくなります。

なので、植物系の魔物から蓄光スキルを、ヒカリゴケから発光スキルを付与するのは高いコストがかかります。当然、魔力ランプの魔石よりも貴重な品になってきます。

私が人間でありながら、この二つのスキルを持っているからこそ簡単に作れる魔道具なのです。

ちなみに、照明魔石を作る段階で有咲さんに手伝って貰うことが出来たのには工夫があつてこそそのことです。

有咲さんに私のスキルを付与してもらうとなると、魔法陣は複雑化します。なので、魔法陣は私が私のスキルを付与する形で描いて、魔力の消費先だけ受け身、つまり貰った魔力で発動する形にしてお

きました。

これは自分の魔力ではなく、魔石の魔力を使って魔法を発動する時に使われる魔法陣です。が、それを利用することで『有咲さんの魔力を使い、私が私のスキルを付与する』という形式を取ることが出来ました。

これにより、低コストで有咲さんが私のスキルを付与できたというわけです。

もちろん、この裏技は私だから可能な技です。ヒカリゴケにヒカリゴケのスキルを付与させることは不可能なので、発光スキルを普遍的に低コストで付与することは出来ません。蓄光スキルなら、知性ある植物型の魔物と仲良くなれば可能かもしれませんが、それを狙うのは他人のスキルを付与する魔法を使うより遥かに困難でしょう。

08 お値段以上

おおよそ、照明に関する魔道具の価値については把握しました。その上で、照明魔石の価格を考えてみましょう。

性能的に言えば、魔力ランプより優秀です。となれば、一つで金貨数十枚という値段になるでしょう。

と、考えてしまいそうになりますが、それは間違った値段設定になるでしょうね。

実際問題として、金貨数十枚は日本円で言えば数百万円です。実用品に、そこまでのお金をかける人が居るとは思えません。居たとしても、数える程度でしょう。

重要なのは、この商品が広く普及することです。たまたま上位の冒険者に金貨数十枚で売りつけても、それは一度きりの臨時収入です。継続的に利益を上げ続けるには、商品そのものが一般に求められなければなりません。

というわけで、性能的に妥当な値段でも、高すぎるというのはよくありません。

かといって、原材料とかかった労力から逆算するのもよくありません。クズ魔石と少しの魔力で作れるわけですから。やろうと思えば銅貨一枚でも利益が出せます。

けれど、そんなことをすれば既存の市場を過度に破壊してしまい

ます。誰も照明魔石以外を買わなくなります。そして私は、需要に合わせて膨大な魔石を死ぬ気で付与し続ける羽目になるでしょう。さすがに、照明魔石を製造するだけで一日が終わるような日々は避けたいです。やりがいがありませんからね。

それに、市場破壊によつて起こる悪影響は想像もつきません。どんな形で私の災いとなるのかも分かりません。同業者の恨みを買うのは間違いありません。また、需要の変化がどのような環境の変化を起こすかも分かりません。つまり、市場が読めなくなります。後の商売を考えるなら、そんな真似は止めておきたいです。

何よりも、薄利ですからね。もっと高い値段で売れるものを、わざわざ薄利多売にする必要はありません。

というわけで、値段設定の上で重要な点は三つ。誰もが手に入られる値段であること。売れすぎによる増産で時間を食われないよう制御すること。競合する商品の市場を破壊しないこと。これらを満たす価格設定が、理想というわけです。

そうなると、参考にすべきはヒカリゴケのランプでしょう。ヒカリゴケは、繰り返し使える照明として一般的に冒険者に好まれています。つまり、ヒカリゴケの価格帯は冒険者にとって手を出しやすいものだということです。

けれど、同じ価格帯ではヒカリゴケと需要を奪い合います。そう考えると、照明魔石はヒカリゴケのランプのワンランク上位の魔道具として売り出すのが良さそうです。

ヒカリゴケのランプは銀貨数枚が主な価格帯で、十枚以上になるものはほぼありません。となると、照明魔石は十数枚程度の価格帯に設定するのが良さそうです。

魔石の大きさが蓄光で蓄えられる魔力量の差、そして発光量の差になります。なので、大きさの違いをそのまま商品ごとの価格差に出してしまえばいいでしょう。

となると、照明魔石の価格帯は銀貨十枚から二十枚程度に収めるのが良さそうですね。

08 お値段以上（後書き）

今日は、夜にももう一話投稿します。

09 ポロ布ロープ

価格調査も終わり、値段設定についてもおおよそ考察できました。なので、せっかく商店街に来たのですから、色々と見て回ろうと思います。ここで見て感じた商品の売れ行き、ラインナップが、そのまま私の店で売る商品を決める為の参考になります。ですから、ここはしっかり観察していきましょう。

商店街を歩いていると、やはり売れる商品の多くは冒険者向けの物が多いと分かります。

彼らは人数が多く、消費の激しい生活をしています。魔物の討伐や採取に使う道具はいずれ壊れますから。定期的に、新しいものを買わねばなりません。

採取物を収納する革袋。丈夫で歩きやすい靴。各種武器類、防具類。大きくて機能的な背囊。各種道具を吊り下げる為の丈夫なベルト。

そして欠かせないものの一つが、ロープです。森林等を探索する際、枝葉による擦り傷や虫刺されを防ぎます。荷物もまとめて上から覆うので、防塵効果もあります。砂やゴミが入って壊れる魔道具を保護するのです。雨風をしのぎ、体力を温存するのも重要な役割の一つです。

ロープは多種多様なものが存在します。デザイン、サイズ、素材、機能性。色々な要素が絡み、一つのロープが出来上がっているので

す。そんな多様なロープの中から、冒険者は自分好みのロープを選んで羽織るわけです。

そんなロープの並ぶ商店の最中。私は、気になるものを見かけました。

薄汚れた布の塊が、台の上に捨てたような乱雑さで置かれています。手にとって見ると、どうやらロープの形はしています。けれど薄手の生地ですし、使っているうちにすぐ破れて使い物にならなくなるでしょう。

「あの、すみません。このロープは何なのですか？」

私は、お店の方に声をかけます。恰幅の良い、中年の女性です。

「ああ、そりゃあねえ。ボロ布で作っただけの、ロープとも呼べないような商品だよ。装備や魔道具で支度金を使い果たした新人冒険者なんかたまたま買っていくねえ」

「なるほど。ですが、これではすぐに破れてしまうのでは？」

「もちろんそうさ。でも、それでもいいってぐらいの格安だからねえ」

「おいくらですか？」

「銅貨十枚さ」

「なんと。十枚ですか」

安すぎますね。いくらボロ布のロープとは言え、この値段では製造者の利益が相当薄いはずですよ。

「どうして、そこまで安く売れるのですか？」

「このロープはねえ。捨てるはずだった布を、孤児院の子供が裁縫の勉強で再利用して作ったものなのさ。元はゴミだし、作ったのも

子供。まともな値段で売れやしないよ」

その言葉を聞いて、納得しました。確かにゴミになるはずだった布を再利用すれば原材料はタダ。労働力も、対価を払って働かせたものではない。銅貨十枚でも、お小遣い程度にはなるのでしよう。

と言うより、そもそもこのボロ布ローブ自体が慈善事業に近いのかもしれない。

孤児院の子供が手に職をつける為に作ったものを買取り、お金を渡す。これで孤児院は僅かでも裕福になります。

そしてボロ布ローブはお金に困った新人冒険者の手に渡り、一時凌ぎの代物として十分活躍をする。やがて破れた頃にはお金も貯まって、新しいローブが買える。そういう仕組みなのでしょう。

面白いものを見ました。そして、これは良い知識を得たような気がします。

感謝の意味も込めて、このローブを買ってあげましょう。

「このボロのローブのうち、綿か麻で出来た物を頂けませんか？」

「は？ 買うのかい？」

「ええ。ちょうど、こうしたボロのローブに使い道が有まして」

「ふーん、まあこっちは構わないけどね。こんなもん買っちゃまって、後悔すんじゃないよ？」

「はい、もちろん了承の上です」

「そんじゃあ、これとこれが綿で、こっちは麻で」

お店の方は、ボロ布ローブをより分け、私の要望した通りの素材のものを選び出します。私ではまるで見分けが付きません。さすがプロといったところでしょう。

「よし、全部で十二着だね。銀貨一枚と銅貨二十枚だ」
「では、これをお願いします」

私は、収納袋の中から銅貨の沢山入った硬貨袋を取り出します。

「あはは、小銭が溜まってたってわけかい。待つてな、数えるから」

お店の方は、勘定用に使う硬貨入れを取り出します。十枚びつたり入る溝が十本彫られた木の板です。この溝に銅貨を詰めれば、簡単に枚数を数えることが出来ます。

これは、便利な道具ですね。計算間違いを減らせそうです。帰ったら自作してみましよう。

と、私が観察しているうちに銅貨の勘定が終わります。

「ほい、銅貨百二十枚ちょうど頂いたよ！」

お店の方から、硬貨袋を返してもらいます。

「ありがとうございます」

「品物はどうする？ そのまま抱えて帰るのかい？」
「いえ、この中に」

私はアイテム収納袋の中に、十二枚のボロ布ローブを片付けます。すると、お店の方は驚きの表情を浮かべます。

「こりゃ驚いた。アイテム収納袋かい？」

「はい、一応そうですね」

「へえ、アンタ見かけによらず裕福なんだね？」

実際は賈い物に過ぎないので裕福というわけではないのですが。
まあ、否定すると話が長くなります。曖昧に笑って頷いておきます。

10 仕込み

ボロ布ローブを購入した後、私は一通り商店街を見て回り、次の目的地に向かいました。

それは冒険者ギルドです。

実は今日もクズ魔石を分けてもらおうと思っっています。また、可能そうならもう一つの目的も果たすつもりです。

ギルドに入り、まずは軽く人を探します。目的の人がいなければ、今日はクズ魔石だけを貰って帰るつもりです。

で、見渡すと見つかりました。私はその人の方へと歩み寄りませ

「こんにちは。ガイアスさん」

「お？ なんだオトギじゃねえか！ どうした？ この俺に訊きたいことでもあんのか？」

私が話しかけたのは、とある冒険者。名前はガイアス。

何を隠そう、私が新人マニュアルを読んでいた時に絡んできたベテラン冒険者です。

あのトラブルを収めてから後日、実際に私はガイアスさんから先輩冒険者の教えというものを学ばせてもらいました。まあ、内容は新人マニュアルとほぼ被っている程度でしたが。

そしてその時に知りましたが、なんとガイアスさんはCランクの

冒険者なのだそうです。頭が悪くても冒険者は務まるといい例ですね。私が冒険者という仕事の将来性を低く見積もる理由の一部でもあります。

しかし、それでもCランク冒険者というのは強い肩書きです。Bランク以上は特別な人しか到達できない以上、実質的に一般の冒険者の中ではCランクが最上位になります。その発言力、権威は凄まじいものがあります。

実際に、私はガイアスさんと仲良くすることで他の冒険者からも一目置かれている部分があります。この人を煽てるだけで、勝手に私の評価が高まるという寸法です。なんともまあ楽な話です。

そして今日も同様です。調子に乗りやすく頭が悪い。けれど発言力があって一目を置かれているガイアスさんを利用する為、ギルドに来たのです。

そうとも知らずに楽しそうに笑うガイアスさん。こうしていると意外と無邪気で悪いやつでもありません。いいように利用しているのが少しだけ申し訳なくあります。でも、それはガイアスさんの頭が悪いせいであって、私のせいではありません。

なので何の問題もありませんね。

「実は、今日はガイアスさんに使ってもらいたい魔道具を持ってきたのです」

私はすぐに本題を切り出します。そして、収納袋の中から照明魔石を取り出します。

「ん？ なんだ、ただの魔石じゃねえか」

「いえ、実はこれ自体が既に魔道具となっているんです。試しに、手に取って軽く魔力を流して見て下さい」

「おう、任せろ」

ガイアスさんは照明魔石を受け取ります。そして魔力を流しました。

当然、照明魔石はスキルの効果で発光を始めます。

「うおっ！ なんだこれ、光ってるじゃねえか！」

「はい。その名も、照明魔石という魔道具です。魔力を流すことで灯りを点けたり消したりできます」

「マジかよ。すげえ便利じゃねえか！」

「はい。使い心地について、是非先輩であり優れた冒険者でもあるガイアスさんから訊きたいと思ひまして」

「がはは！ そりゃいい考えだ！ 俺は丁度、これからダンジョンへ行くところだからな。暫くは暗がりをはつつき歩くことになる。そんな時にこの、照明魔石だっけか？ こいつを使つてやるよ」

「有難うございます」

私はしっかりと頭を下げ、礼を言います。こうした態度を示している限り、ガイアスさんは調子に乗ります。こちらの都合で動かし易くなるというわけです。

「注意点としては、魔石の魔力が切れたら発光が収まるという点があります。連続して使用しても、普通の照明よりは長持ちしますが「なるほどな。使い捨てつてわけか」

「いえ、実はそうでもないんです。照明魔石は日光を浴びると、魔力が補充されるようになっていきます。なので魔力切れを起こさないよう、小まめに陽の光を当てていれば、ずっと使い続けられますよ」「それはまた、すげえ性能だな」

ガイアスさんは、まじまじと魔石を見つめます。それだけの高性能

能な魔道具だというのが信じられないでしょう。

「まあ、ともかくその辺の真偽も含めて、試してやるよ。近いうちにまとめて報告してやるぜ。感謝しな、オトギ！」

「はいもちろん。重ね重ね、感謝しております」

また私は頭を下げます。ガイアさんは豪快に、満足げに笑います。

「がははは！ そんじゃあオトギ。こいつは預かつとくぜ。またな！」

そして、ダンジョンへ向かうパーティメンバーが集まったのでしよう。男達が群れる方へと立ち去っていきます。

これで、重要な目的を達することが出来ました。

恐らくガイアさんは、上手い具合に広告塔として機能してくれるでしょう。

彼は自信家であり、他人に偉ぶるのを好んでいます。なので、特別な魔道具を手に入れたとあれば、当然知り合いの冒険者に自慢して回るでしょう。

そして彼は、曲がりなりにもCランク。一般人の中では最上位の冒険者です。そんな人物が使い、性能を保証してくれます。普通に見る限りではただのクス魔石に過ぎない照明魔石の信憑性を高めることになるでしょう。

何の手も打たなければ、照明魔石は怪しいクス魔石に過ぎません。しかも銀貨十数枚というぼったくり価格です。新しく出来た魔道具店に、そんなものが置かれてあっても誰も手にしません。つまり売

れません。

そんな状況を避けるために、今回はガイアスさんを利用させていただきます。

利用料は、無償で譲った照明魔石で代えるものとしましょう。

11 いよいよ開店

ガイアスさんに照明魔石を渡した後は、ギルドでクズ魔石を回収し、家に帰ります。そしてまた有咲さんと一緒に魔石に付与魔法を施しました。

そうして、ギルドに顔を出してクズ魔石を集めては付与魔法を施す日々が数日続きました。日中は廃材の木材を加工し、時には商店街で仕入れをして店内をそれらしく整えました。

その甲斐もあって、一階部分はかなりお店らしい体裁を整えることが出来ました。

こうなれば、いよいよ開店準備です。

まだ人通りもほとんど無い早朝から、私と有咲さんは起き出します。まあ、私はそもそも寝ていないので起きたのは有咲さんだけです。

そして二人で協力し、店の外に看板を運びます。

「有咲さん。段差に気をつけてくださいね」

「おう。分かってるっつーの」

ここ数日で、すっかり有咲さんとも仲良くなりました。と言っても、自然な会話が出来るようになった程度ですけど。

しかしこれは大きな進歩です。私を警戒しているのか、常に緊張していた有咲さん。それが今では自然体で私に接してくれます。幼

い頃の有咲さんを思い出して、なんだか懐かしい気持ちにもなってしまう。

「おっさん、なんでニヤケてんの。キモいんだけど」

ああ、つい顔に出ていたようです。キモがられてしまいました。まあ私がキモいのは事実なので仕方ありませんが。

そうして元は長テーブルだった大きな看板を外に運び出すことが出来ました。

「で、どうやって取り付けんの？」

有咲さんがシンプルな疑問を口にします。

私も有咲さんも、工具は一切持ち出してきていません。あるのは脚立だけです。これでは、看板を高く掲げるぐらいしか出来ないでしょう。

しかし私には策があります。

「任せて下さい。今こそ、私の廃棄スキルの出番です」

「おお、なんか分かんねえけど、すごいことするんだなおっさん！」

有咲さんが期待する目をこちらに向けてくれます。ふふ、たまにはこうして格好つけてみるものですね。

というわけで、私は看板を取り付けるため、あるスキルを発動します。人間であっても発動可能な、こういう時でもなければ使う価値の無いスキルです。

まずは有咲さんが持っている側の看板の端へと近寄っていきます。

「ペッ！」

そして、私はツバを吐き捨てます。

「は？ 殺すぞ」

有咲さんがマジギレしました。

「いえ、待つて下さい有咲さん。これには深い理由があります」

「いや、あつても殺すから。いきなりツバ吐くなよ。キモいから。マジ無理。キモいキモい死んでほんとマジ死んで」

ものすごく不評を買ってしまった。まさかここまで否定されるとは。おっさんという生き物はいきなりツバや痰を吐く生き物なので、許してほしいところです。

「すみません、有咲さん。でも、これは必要なことですから」

「いや、必要とか関係ないから。普通に無理。キモい」

取り付く島もない状態です。このままいくら謝っても、効果は薄いでしょう。一方的に話を続けていきます。

「実は、この唾液はスキルで発生させたものなのです。その名も『粘着液』といいまして。くっつけて乾かしたら、頑丈に固まってく

れるんです」

「だから何？」

「ですので、この粘着液で看板を接着しようかと」

「キツモい、無理」

全否定されました。仕方ありません。ここは無理を言っただけでお願いする他ありません。

「有咲さん、どうかお願いします。私一人では看板を上手く接着できません。なので、片側を掲げる役割を担って頂けないでしょうか？」

「チツ。いいよ、それぐらい別に」

「ほんとすみません」

「ツバ吐くのはキモいけど、仕事ぐらい手伝うっつーの」

「はい、すみません」

とにかく平謝りします。機嫌が悪い相手の威勢を削ぐにはこれが一番です。次第に有咲さんも機嫌を直します。と言っても、最悪が少し悪い程度に回復しただけですが。

ともかく、有咲さんにも納得してもらいました。私は看板の裏に次々と唾液を吐き捨てます。そして裏面がベチャベチャになったら、脚立を使って看板を入り口の高い場所に掲げ、接着します。

ツバが乾くまで同じ姿勢を要求されますが、私はステータスのお陰か苦しくありません。有咲さんはツバが嫌なのか、顔をしかめながら看板を持っています。

これも一種のセクハラになるのでしょうか。だとすると、これは後で本気の謝罪をしないといけませんね。

そんな事を考えながら、数分後。見事に唾液が乾き、粘着液スキルの効果でしっかりとくっつきます。手を離しても落ちてこないことを確認すると、作業完了です。

紆余曲折ありましたが、これでお店を開けますね。

いよいよ仕事の始まりです。

12 閑古鳥

いよいよ店を開けました。これから私の魔道具屋としての日々が始まります。

が、初日はさすがにお客さんが来ません。誰も知らない未知の魔道具店。入客数に期待できないのは当然です。

そしてたまに入ってくるお客さんも、置いてあるのがクズ魔石とポロ布ローブだと分かるとすぐに出ていきます。みな一様に怪訝そうな顔をします。

まあ、当然の反応ですね。魔道具に見えないゴミ同然の物体が置かれているだけですから。

「おい、おっさん。暇すぎない？」

とうとう有咲さんが限界を越えたのか、文句を言ってきました。

「いいことではないですか。働かずに給料を貰える。素晴らしい話です」

「いや、そうじゃなくて。この調子だと、赤字だよな？ アタシに給料払えんの？」

有咲さんの睨むような視線が私に飛んできます。

「まあ、このままの状態が続けば不可能ですね」

「ダメじゃん」

私が正直に言うと、有咲さんはため息を吐きます。

「はあ。こんなおっさんに期待するんじゃないかった」

私の株価がぐんぐん下がっているように感じます。ここは一つ、頼もしいところを見せねば。

「大丈夫です。安心して下さい有咲さん。じきに照明魔石の噂は広まりますから。そうなればかなりの利益が見込めます。有咲さんの生活は保証しますよ」

「まあ、そういうことなら分かったけどさ。で、おっさんはなんで腕まくりしてガッツポーズしてんの？」

有咲さんに指摘されます。私は頼もしさを主張するため、腕まくりして力こぶを作っているはずなのですが。どうやらガッツポーズに見えたようです。

まあ些細な問題です。私の頼もしさは伝わったはずですよ。いそいそと捲った袖を元に戻します。

「ともかく、これから人が増えるのは間違いないはずですよ。何しろ、布石は打っておきましたから」

私は言いながら、調子に乗りがちなランク冒険者、ガイアさんの事を思い返します。

今日、私はここに店を構えたことで悪目立ちしたはずですよ。そして来店した冒険者によって、クス魔石を売っているおかしな店、という噂が流れるはずですよ。

その噂がガイアスさんの耳に届いたら、作戦は成功です。彼は間違いない、私の照明魔石について噂を広めてくれるでしょう。そして照明魔石の話が広まれば、自然と冒険者さんが店に訪れます。そこで照明魔石の有用性を説き、売りつけければ完璧です。後は放っておいても人気が上がっていきます。そのついでにボロボロブを新人や金欠の冒険者に売りつけたら完璧です。

と、私が脳内で計画についておさらいしていたところ。店の扉を勢いよく開く人が現れました。

「おう、オトギ！ てめえこんなところに店開いたのか！」

ガイアスさんです。どうやら、もう噂を耳にしたようです。そして自分でも噂の店を確認する為に訪れたのでしょう。

「噂になってるぜ、オトギ。洞窟ドワーフそっくりのおっさんがクズ魔石をバカみてえな値段で売ってるってな」

「それは良かったです」

「あ？ 良かねえだろ」

私の意図を知らぬガイアスさんは、私の一言に首を傾げます。今はこの話題を掘り下げても仕方ないので、別の話題を振ります。

「それよりもガイアスさん。今日はどのようなご用件ですか？」

「おう。そりゃ決まってるだろ。例の光る魔石の感想だよ」

そういえば、感想を教えて欲しいという建前で無理やり押し付けたのでした。

「いかがでしたか？」

「すげえ便利だったぜ。だから四六時中使ってたせいでよ、魔石一個じゃ足りねえって話になつてな。それに仲間内でも欲しがってる奴らが出てきてよお。てめえに直接、もっと作ってくれねえかって頼みに来たわけなんだわ」

「なるほど」

既にガイアさんの仲間内に話が広まっているようです。これは好都合ですね。

「実は、店に置いてあるクズ魔石は全部がその光る魔石になっているんですよ」

「なっ！マジかよ？」

「はい。小さいものは銀貨十枚から販売しております。どうなさいますか？」

「買った買った！デカイのを三つくれ！」

早速、ガイアさんが魔石を買ってくれるようです。私はちゃっかり銀貨二十枚の魔石を三つ用意します。

「大きいものは一つで銀貨二十枚です。合計で銀貨六十枚。構いませんか？」

「おう。こんだけ便利な照明がありゃ、探索がずいぶん楽になるかな。百枚出しても惜しくないぜ」

「どうもありがとうございます」

そうして、ガイアさんは支払いに金貨一枚を取り出しました。私はお釣りの銀貨四十枚を返します。ガイアさんは銀貨袋にこれを片付け、最後に照明魔石を受け取ります。

「おいオトギ、こいつらちゃんと光るんだろうな？」

ガイアさんは、受け取ってからそんなことを訊いてきます。

「はい、当然です。なんなら、今ここで魔力を流してみてください。全ての魔石は多少の魔力をチャージしてありますので、ちゃんと光ってくれるはずですよ」

私が言うと、さっそくガイアさんは魔石を光らせます。三つの照明魔石がしっかりと機能することを確かめると、にんまり笑います。

「こいつはいいな。すげえもんを買わせてもらったぜ」

「こちらこそ。お買い上げいただいて有難うございます」

「じゃあな、オトギ！ こいつの噂、俺様が広めてやるからよ！」

「はい、宜しくおねがいます」

こうして、ガイアさんは店から出ていきます。照明魔石を気に入って頂けたみたいですし、噂も広めてもらえるようです。既に悪い噂が広まっている分、照明魔石の話題性はかなりのものになるでしょう。

さあ、ここから巻き返していきましょう。

13 新人冒険者の背伸び

ガイアスさんが来店してからというもの、一気に客足が増えました。当日の夕方ごろには噂を聞いた冒険者が足を運びはじめ、その後の数日間は冒険者さんの来店は増える一方でした。

私と有咲さんでひたすらに会計をすませていきます。それでも客足が収まるまでは何時間も掛かるような状態でした。夕方になるとまた客足が増え、そして夜にはすっかり暇になります。

この時間になってやっと余裕が出来るので、店内の清掃や商品の並べ直し等をしていきます。この作業は夜間業務ですので、有咲さんは関わっていません。二十四時間働ける私だけですませてしまいます。

そんな日々が一週間ほど続くと、客足も少しずつ落ち着いてきました。元々の値段がそれなりに高いこと、そして一度買えば当分は買い足す必要がないこともあって、少しずつお客さんが減ってきました。

この頃には、用意した照明魔石の約半数ほどが売れていました。もしかしたら多少は窃盗の被害に遭っているかもしれませんが、基本的に私が目を光らせていたので大丈夫なはずです。

そして完璧に客足が落ち着くと、一日通してちらほらと客が来る程度になりました。それでも日に五、六個は売れます。値段や金銭状況を理由に買えなかった冒険者さん達でしょう。

また、冒険者さんの間で話題になったお陰か、一般のお客さんも来るようになりました。

冒険者さんと違って、一般の方は安くて長持ちする油のランプを使っています。けれどそれでも手入れの手間などを面倒がる人はいません。恐らくはそういう人達が、照明魔石を買い求めにやってきます。

そうして客足も落ち着いてきた、開店から二週間ほど経ったある日。ちよつと気になるお客さんが来店しました。

真新しい装備に身を包んだ冒険者さんが三人。見た目も若く、有咲さんよりも年下ぐらいに見えます。

そんな若い冒険者さんが、魔石を見て回っては、ため息を吐くのです。

「どうなさいましたか？」

私はその三人のお客さんに声をかけます。

「えっと、あの。実は噂の照明魔石を買いだいたいと思って」

「そうでしたか。こちらにあるのがその照明魔石になります。お試しになりますか？」

「いや、いいです。なんか高くて、俺たちじゃ手が出ないなあ、なんて。なあ？」

お客さんの一人が言うと、他の二人も頷きます。

「ちなみに、ご予算はいくらぐらいでしょうか？」

「えっと、所持金は三人合わせて銀貨十枚あるんだけど、でもまだロープを買わなきゃいけないので」

「ふむふむ、なるほど」

おおよそ状況が理解出来ました。つまり彼らは新人冒険者。装備を一式整えるついでに照明魔石も買おうとしたものの、ロープを買う分を含めると予算が足りない。そういうことでしょう。

これは、好都合ですね。

「でしたら、こちらのロープなどはいかがですか？」

私は、店の隅に置いてあるボロ布ロープを紹介します。新人冒険者さん三人は、眉を顰めます。

「さすがに、ロープは実用的なものを買いたいので」

「おや、そうですね。しかしこちらのロープはちゃんと実用的ですよ。内ポケットもついていきますし、フードもあります。色合いも森に紛れるのにちょうどよいと思いますが」

「でも、その、すぐ壊れそうなものはちょっと」

狙い通りの反応を返してくれますね。売り込みのやりがいがあります。ここが攻めどころでしょう。

「そうですね、そうですね。すぐ壊れるものは皆さんお嫌いですからね。このロープは、しっかりその点も考えられていますとも」

「はあ。どういうことですか？」

「実はこちらのロープは魔道具なのです。実際に、見てもらったほうが早いでしょうね。まずは私が着てみましょう」

そう言って、私はボロ布ロープを身に着けます。

「では、早速ですがお客様。その剣で私をローブの上から斬りつけてみて頂けませんか？」

「ええっ！ そんな、まずいですよ！」

「問題ありません。このローブは魔道具ですから。それに、私自身もステータスがかなり高いのです。新人さんの攻撃では、びくともしませんよ。」

そう言つて、私はステータスプレートをお客さんに見せます。三人共驚いたような顔をして、互いに顔を見合わせます。

「て、店員さん。どうしてそんなに強いのに魔道具店を？ 冒険者になつたほうが絶対いいですよ！」

「昔は、冒険者をしていましたよ。訳あつて今は魔道具店を開いています」

嘘ではありません。昔と言つても、ついこの間のことですが。

けれど意味ありげな私の言葉から、勝手に何かを察してくれた三人は押し黙ってくれます。そして私のステータスを信頼してくれたのか、ようやく一人が頷きます。

「分かりました。店員さんの強さと、その魔道具を信じてみます」

「はい。遠慮なく斬りつけて下さい」

「では、いきます！」

新人冒険者さんは剣を抜き、そのまま私へと横薙ぎに斬りつけてきます。

すると剣はボロ布ローブに当たつた瞬間、ぼすっ、という音を立てて静止します。

「えっ、あれ？」

「なんだこれ！ すごい！」
「どうなってんの？」

三人の冒険者さんが口々に驚きの声を上げます。

「ご理解いただけましたか？ こういう魔道具なので、簡単には壊れません。むしろ普通のロープよりも遥かに長持ちするでしょう」

私はロープの宣伝をすかさず口にします。実際、このロープは私が冒険者として活動する時に使うロープと同じスキルを付与していません。防刃、衝撃吸収、形状記憶のスキルです。

これらのスキルを付与したお蔭で、私は冒険者時代はずっと同じロープを使い続けることが出来ました。経年劣化による摩耗は多少あるのですが、それぐらいではすぐにダメになることはありません。

「こ、このロープはいくらなんですか？」

新人冒険者さんの一人が目を丸くしながら訊いてきます。

「そうですね。こちらのロープはまだ商品としては試作品なので、実は値段をつけていないのですよ」

「そうなんですか？」

「はい。ですので、皆さんには照明魔石一つとこちらのロープ三枚をセットでお買い上げいただいて、お値段は据え置き銀貨十枚、ということでしょうか？」

私が提案すると、三人は顔を見合わせます。そしてすぐにこちらに向き直り、勢いよく頭を下げます。

「それをお願いします！」

「ありがとうございます！」
「大事に使います！」

それぞれ別々のお礼を言ってくれます。こうして感謝されるのは気持ちがいいですね。

「いえいえ。こちらこそ、ありがとうございます」

お買い上げいただいて、というのもありますが。こちらにも魂胆がありますからね。

新人がボロ布ローブを着ていれば、当然目立ちます。それはつまり、このボロ布ローブがただのボロ布ではないことがすぐにバレるということになります。

やがて、少年たちにボロ布ローブを買った店を訊く冒険者も現れるでしょう。そうなれば、次の稼ぎ時です。

まあ、今回は分かりづらい仕込みですから、すぐに売上につながるというわけではありません。気長に待ちましょう。

そして待っている間に、いつ売れ始めても良いように準備を済ませましょうか。

14 ポロ布の仕入れ

新人さんにポロ布ロープを売りつけた翌日。私は日中の暇な時間を有咲さんに任せ、とある場所に向かいます。

商店街を抜け、住宅街も抜けていきます。やがて土地が安く、貧乏人が住むようなエリアに入ります。

そして事前に聞いてきた道順通り、とある建物を目指します。

「ここですか。思ったよりも立派な建物ですね」

そして私が到着したのは孤児院。そう、ロープ店にポロ布ロープを卸していた、あの孤児院です。

すっかりとした、石造りの大きな造物がまるまる孤児院として使われているようです。そして裏手には、かなり広い土地が広がっています。

これらも全部、孤児院の土地でしょう。子供を育てる場所なので、すから、遊び場となる広い庭も必要です。

さらによく見ると、孤児院には十字架や翼の生えた人間の像が飾られています。察するに、宗教施設も兼ねているのでしょう。何かしらの宗教団体の社会貢献の一環であり、信者獲得の為の戦略でもあるのでしょうかね。

「あら。何か御用ですか？」

私が孤児院をじっくり観察しているところに、背後から声が掛かります。振り向くと、そこには修道女らしい服装に身を包んだ女性がいました。

「ええと、どちら様でしょうか？」

「私は、この孤児院で院長を務めております、イザベラと申します」

女性　イザベラさんはニコリと笑いながら頭を下げます。優しい雰囲気的女性で、しかも美女です。私も礼儀を払い、丁寧に頭を下げます。

「これはこれは。申し遅れました、私は乙木という者で、今は冒険者向けの魔道具店を営んでいる者です」

「はあ、冒険者様向けの」

私の自己紹介にピンと来なかったのか、イザベラさんは首を傾げます。確かに、孤児院と冒険者向けの魔道具店に何の関係があるかと考えれば首も傾げたくなるでしょう。

なので、私は早急に用件から話してしまいます。

「実は、こちらの孤児院で冒険者向けのローブを縫って店に卸しているというお話を聞きました。そこで、私の店の方にもローブを卸して頂けないかと考え、お話に参ったのですが」

「まあ、そうだったのですか。あのローブを買い受けて頂けるのであれば、是非。どうぞ乙木様、詳しいお話は中で致しましょう！」

私がああポロ布ローブを買い取ってくれる、実質的な寄付をしてくれる人間だと気づいた途端、イザベラさんの態度が変わります。ぐいぐいと、私を逃さないとも言つかのように孤児院へと引き込みます。

綺麗な女性に捕まるのであれば、本望ですね。この流れに従いましょう。

私はイザベラさんに手を引かれるまま、孤児院へと入ります。

「ひとまず、お話は院長室でお聞きします。そこであれば、子どもたちが入ってきて邪魔をするということもありませんので」

「なるほど。しかし、話をしているところにも入り込むのですか。元気があって良いではありませんか」

「そう言っただけで頂けるとありがたいです。商人の方にはお怒りにならない方もいらっしゃるのでは」

商談の席に入られるのが癪だったのでしようね。けれど、子供に大人並みのマナーを期待する方が無茶というものです。むしろ好奇心旺盛で、将来有望な面白い子だと言えるでしょう。

その後、特に子どもたちから絡まれることもなく、院長室に到着します。子どもたちは私の方を興味深そうに見ていましたが、話しかけてくる様子はありませんでした。恐らく、院長であるイザベラさんのお客さんだと理解していたのでしよう。

「さて、乙木様。さっそくですが、うちで作っているロープについては既にご存知ですか？」

院長室で互いに席へ座り、話を始めます。切り出しは、ロープについてです。恐らくは、孤児院で作っているのがボロ布のロープであることを事前に確認を取り、トラブルを未然に防ぐための質問でしょう。

「もちろんです。既にローブ店で何着か購入し、うちの店で魔道具として売っているところですから」

「まあ、そうだったんですか。それはありがとうございます」

またイザベラさんは頭を下げる。仕事上の会話とはいえ、イザベラさんは本当に嬉しそうに微笑んでくれます。会話していて楽しいタイプの女性ですね。

「ですが、申し訳ありません。今回私が卸していただきたいのは、ボロ布のローブではないのです」

私が言うと、イザベラさんはきょとん、とした表情で首を傾げます。

「あの、うちではその、古布を再利用したローブしか作っておりませんので」

「はい、理解しております。ですから、こちらでご用意させていただきます」

「は、はい？」

イザベラさんは意味が理解できなかった様子です。ならば、もう一度わかりやすく、はっきりと言いましよう。

「ですから、布はこちらで用意致します。その布を、孤児院の皆さんでローブに仕立て上げて下さい。もちろん布の代金は取りませんし、仕上げた着数と品質に応じて十分な賃金を支払うとお約束します」

私が説明をはっきりすると、イザベラさんの顔が途端に喜色に染まります。

「まあ、まあっ！　なんて、素敵な提案でしょうっ！」

14 ポロ布の仕入れ（後書き）

投稿時刻がバラバラで安定せず、日頃お読みいただいている皆様にはご迷惑をおかけします。申し訳ありません。

15 孤児と契約

私が提案した話を、イザベラさんは本心から喜んでくださっているようです。

孤児院の子ども達が手に職をつける為の裁縫が、これからはお金になるのです。当然、それだけで喜ぶに値します。

また、定期的に仕入れを約束するということは、定収入の約束でもあります。孤児院の運営を考える上でも、助かる話でしょう。

「それでは、詳細な部分について話を詰めていきましょうか」
「はい！」

私が言うと、イザベラさんは嬉しそうに頷き、返事をします。

そして、今回の契約についての詳細な話を詰めていきます。

まずは、仕入れの数について。

これは、出来上がったものから順次買い取っていく形にします。恐らく、大量に作るという事は難しいでしょうから。ローブを作るのはまだ子どもです。それに、私としても早さより丁寧さを優先してもらおうと思っています。

そして仕入れ値ですが、一着につき一般的なローブの半額程度で仕入れることにしました。仕入れ値としてはかなり高額な設定なので、イザベラさんは驚くどころか、遠慮するほどでした。

が、この設定にも意味はあります。私の見立てでは、今後この孤

児院の子ども達の人材としての価値は高くなります。なので、これは先行投資でもあるのです。

また、私が実際に売るのはただのローブではなく、魔道具となったものです。その時の売値で換算すれば、実は仕入れ値は一割にもなりません。そう、ボツタクリなのです。素材となる布をこちら持ちで用意しても、有り余る利益率となります。

ただ、その辺りを説明するわけにもいきません。より好印象でいてもらいたい為、相場より高い仕入れ値は孤児院への寄付の意味合いもある、という説明をしました。

「本当に、重ね重ねありがとうございます！」

イザベラさんが深々と頭を下げ、感謝の言葉を口にします。ここまで感謝されてしまうと、実はボツタクリ価格なのだというのが申し訳なく思えてきます。

しかしここは我慢です。孤児院は相場より高くローブを売れる。私も高い利益率で商品が売れる。お互いに得をする関係なのでから、問題ありません。

他にも細かな話を幾つか取り決めて、この日の商談は終了しました。

「ひとまず、契約についてはこのような形でかまいませんでしょうか？」

私は、持参した紙に書いた契約内容の詳細をイザベラさんに確認してもらいます。

「はい、これで問題ありません」
「では、これで契約成立ということでは」

契約が成立したので、もう一枚の紙に同様の内容を書き写し、両方にお互いのサインをした後、捺印します。私の方は、この数日の間に木を彫って作った自作の印鑑です。

これで契約完了。二枚の契約書を、互いに一枚ずつ手に取ります。

「さて。これで契約は完了ですが、その前によろしければ子ども達と会わせて頂けませんか？ 今後、仕事を任せるものとしては気になります」

「ええ。是非会ってくださいませ。みんな元気で、良い子たちばかりですから」

イザベラさんの笑顔から、どれだけ子どもが好きなのか伝わります。それに、これだけ愛されながら育つ子どもたちですから、実際に良い子に違いないでしょう。

これは、期待が持てますね。

なにしろ、今後この孤児院の子ども達には、様々な仕事をしてもらうつもりなのですから。

今はまだ計画の段階ですが、将来的には孤児院の子どもたちを教育し、より私にとって都合のいい人材に育て上げ、労働者として雇うつもりです。

そう言う悪い企みのように聞こえます。が、実際は基礎教育を施して労働者として雇うだけです。悪いどころか、むしろ孤児の未来を明るくする善行とすら言えるでしょう。

とはいえ、一方的に利用するつもりが言うのも問題がありません

すね。

何にせよ、私はこの孤児院の子ども達を利用するつもりなのです。ですから『良い子』であるのはとても都合が良いわけです。

さて、ご対面と行きましょうか。

15 孤児と契約（後書き）

大変お待たせいたしました。

ここ十日ほど、体調を崩して執筆が出来る状態にありませんでした。年末故に仕事も多く、しっかりと休むこともできず、ずるずると執筆の出来ないような状態が続いていた為、ストックが無くなり更新が途絶えてしまいました。

毎日の更新を楽しみにして下さっていた皆様には、本当に申し訳なく思っております。

今日ようやく熱も引き、喉や身体の痛みも大分収まった為、執筆を再開致しました。

可能な限り毎日更新のペースに戻していこうと思っております。

今後共、どうか当作品を宜しくお願い致します。

16 洞窟ドワーフ、懐かれる

私はイザベラさんに案内されるまま、建物から庭へと出ました。そこでは、沢山の子ども達が走り回って遊んでいます。

「皆さーん！ 少し集まってくださいーい！」

イザベラさんが大きな声で呼びかけると、子どもたちは一斉に集まりだします。

「どしたの、せんせー？」

「おじさんだあれ？」

「洞窟ドワーフだあ！」

子ども達がきゃいきゃいと騒ぎます。中には、私の外見を見て笑っている子もいるようです。どうやら、本当にこの世界では私の外見はウケが良いようです。何だか得した気分です。

「こちらのおじさんは、乙木さんという方です。これから皆さんがお裁縫の時間に作ったものを、買い取ってくれることになっています。これから何度も顔を合わせるようになるでしょうから、覚えておいてくださいね？」

イザベラさんの言葉に、子ども達は「はい」と返事をします。小さい子はよく分かっていないようにも見えますが、十歳を越えた

ぐらいの子は理解して返事しているようです。

「それと、乙木さんはお裁縫に使う布まで寄付していただけます。これからは、ボロボロの布じゃなくて、ちゃんとした布でお裁縫ができるようになりますからね」

「ほ、ほんとですか？」

女の子の一人が、驚いたような顔でこちらを見ます。

「はい。本当ですよ。私の店でローブを販売する予定ですので。よい商品を作って頂くために、こちらで素材は用意させて頂きま

す」
「あ、ありがとうございます！」

私が言うと、女の子は頭を下げて感謝してくれます。

「あの子は、お裁縫が好きでみんなのリーダーのようなことをやってくれている子です。元々、お裁縫の時間にローブを作るようになったのもあの子がいたからなんですよ」

「ははあ、なるほど。裁縫チームのリーダー、というわけですか」

良いことを聞きました。後でしっかりと仲良くなっておきましょう。

今日のところは個別に時間を取れないので、子ども達全体に覚えてもらうのを優先しますが。

「せっかくの機会です。私も子ども達の遊びに混ぜてもらえませんか？」

「ええ、仲良くなるにはそれが一番ですから。ぜひ、子ども達の相手をしてみてください。きっと喜びますよ」

イザベラさんにも確認をとったので、私は子ども達の方へと歩み寄ります。

近づいて、まずはしゃがんで視線の高さを合わせます。

「こんにちは。はじめまして、ですね。私は乙木と言います」

「オトギ？」

「はい。言いにくかったら、略しておっさんとか、おっちゃんとかで良いですよ」

「おっちゃん！」

「おっさん！」

子ども達が楽しそうにオウム返ししてきます。元々はバイト先の女性の陰口で使われていたあだ名ですが、ここは印象深く思ってもらう為には有効活用していきます。

「私も皆さんと仲良くなりたいたので、遊びに混ぜてもらっていいですか？」

「いいよ！　じゃあ、追いかけてこの続きからね！」

遊びのリーダーらしい男の子が声を上げます。

いけませんね。シュリ君のせいなのか、少年がなぜだか性的に見えてしまいます。こんな変態性欲を持っていることを悟られてはなりません。ここはぐっと我慢です。普通のおっさんに擬態しましょう。

「追いかけてここですか。私は追う側ですか？　逃げる側ですか？」

「えーっと、じゃあおっちゃんは逃げる方ね！」

「了解です」

言われて、私は立ち上がります。そしていつでも逃げられるように身構えます。

「さあ。いつでも逃げられますよ。どこからでも追いかけてきなさい」

「よし！ じゃあ、みんななかかれ〜！」

なんとということでしょう。男の子の号令で、子ども達はいつせいに私へめがけて走り出します。

驚きつつも、私は対処します。レベルのお蔭で高まった身体能力を活かして逃げます。

突然のスタートだったので危なかったですが、なんとか逃げられました。

「おっちゃんはや〜い！」

「す〜！」

「きゃははは！ 待って〜！」

「洞窟ドワーフのおっちゃんを捕まえたやつが、今日の一番な！」

遊びのリーダーの少年が言うと、子ども達はいつそう元気に私を追ってきます。どうやら、洞窟ドワーフみたいな私を追いかけるだけで楽しいようです。

まあ、確かに空想上の生き物が目の前にいたら興奮するでしょうね。蝶やトンボを追いかけて遊ぶのに似た感覚なのでしょう。

さて。では私も、子ども達の思い込みに乗ってあげましょう。

「ふふふ。捕まえてみなさい。この私、洞窟ドワーフを捕まえた勇者には良いものを差し上げましょう」

「うわ！ 本当に洞窟ドワーフだったんだ！」

「いいものってなあに？」

「お菓子ほしいな〜！」

「お菓子〜！」

勝手に子ども達の間で盛り上がり、お菓子をあげることが決まっ
てしまいました。お菓子は持ってきていないので、困りましたね。

17 子ども達の未来

結局、子ども達と小一時間ほど遊び続けました。と言っても、ほぼずっと私が追いかけられていたのですが。

最後には私が降参する形で、追いかけてここから抜け出しました。今はイザベラさんと一緒に、子ども達が駆け回る姿を見守っています。

「子ども達は元気ですねえ」

「ええ。いつも元気よく、遊び回っているんですよ。お蔭で、見ているこちらまで元気が出てくるような気がします」

「確かに。元気のよい子ども達の姿というのは、良いものですね」

私とイザベラさんは頷き合います。しかし、本当に子ども達の姿を見ていると癒やされますね。心安らぎます。もちろん、健全な意味で。

と、ここで私はイザベラさんからあることを訊き出します。

「ところでイザベラさん。幾つか訊いておきたいことがあるのですが」

「はい、なんでしょうか？」

「裁縫の得意な女の子が、元々はローブを作り始めたのだと仰っていましたね？」

「はい。ローサという子なのですが、孤児になる前に母親に教えて

貰ったことだったみたいで。ここに来てからは、ずっと裁縫ばかりしていたんです」

「なるほど、そういう経緯だったのですか。のめり込むのも当然でしょうな」

私は言いながら、別の事を考え、次の質問を口にします。

「元々は孤児ではなかったということは、ローサさんは最近になってご両親を亡くされたのですか？」

「はい。このご時世ですから、魔王との戦争で父親を亡くす家庭が後を絶ちません。そうなれば、女手一つで子どもを育てなければなりません。無理が祟った母親が病気や事故で亡くなることも少なくないので、結果的にローサさんのような子が増えているんです」

おおよそ、予想した通りの答えでした。

この孤児院を見る限り、子ども達の数が多すぎます。そして今は戦時中です。孤児が増えている理由は、火を見るよりも明らかです。

しかしそれでも確認をしたのは意味があります。ほぼ間違いない予想と実際に確認された事実では、重みが違いますから。ようするに、情報としての信頼性の違いです。私はより確実な『これからも孤児は増え続ける』という情報が欲しかったわけです。

なにしろ、私はこれから孤児たちを労働者として利用していくつもりですから。労働力が安定して供給されるかどうかは重要です。

そして前提からして、戦争が続く間は孤児は増え続けるでしょう。

増える以上、その労働力を利用しない手はありません。それに、仕事があれば子ども達も助かることでしょう。決して、悪いように扱うわけではありませんから。

確認したいことの一つは確認できたので、今度は別の話題を口にします。あたかも気まずい話題を逸らすような流れで、話題を変えます。

「ところで。ローサさんのように、何か特技のある子どもは他にもいらっしやるんですか？」

「えっと、はい。そうですね、いろんな子がいますから。花を育てるのが好きな子や、リーダーシップがあつて、面倒見のいい子もいます。今、子ども達の遊びを纏めているのがその子ですね。ジョアンという子です」

庭を駆け回る子どもの中でも背が高い男の子を視線で示しながら、イザベラさんは紹介します。

なるほど。私を追いかけっこに巻き込んだ男の子がジョアン君ですか。

その後も、私はイザベラさんから子ども達の特技について詳しく訊き出しました。

理由は単純。子ども達を、そのまま専門職として得意な仕事に専念してもらおう予定だからです。

将来的に、私の店で扱う品物は多岐にわたる予定です。その際に必要な品物の製造者として、子ども達の中に適任がいれば、そのまま任せてしまおうと思っています。現在はロープだけなので、適任者は裁縫のローサさんだけです。しかし、例えば薬草栽培をお願いするなら花を育てるのが好きな子に任せたいでしょう。

また、いずれは仕入れや配送の仕事も子ども達に頼む予定です。そうになると、まとめ役としてジョアン君のような子が居ると助かり

ます。

まあ、全てはまだ予定。遠い未来の話です。今はまだ、そういう可能性があるとただに過ぎません。

しかし、可能性の程度については先に品定めしておいた方がいいのも事実です。

とまあ、色々な魂胆がありますから、今後はこの孤児院と深くお付き合いしていく必要がありますね。

ふふ。子ども達の将来が楽しみになってきました。是非、よい人材に育って欲しいものです。

そのためには、私の方からも助力は惜しみません。教育に必要な書物等も買い与えて、寄付という形で孤児院に渡していきましょ。お金が必要なら、これもまた寄付という形で協力を惜しみません。

あくまでも、自分が破産してしまわない範囲での話ですが。

18 突然の来訪者

孤児院での用事を済ませ、私は店に帰ってきました。時刻はまだ夕刻になる前で、空も明るいのです。街に戻ってきた冒険者さんで店内が賑わう前といった頃合いですね。

そんなタイミングで帰宅した私を、思わぬ客人が出迎えてくれました。

「やつほ、オトギン！ 元気してる？」

なんと、シュリ君が来店していたのです。

「乙木殿。お久しぶりです。まさか、こんなにも早く商店を持って生計を立てているとは思いませんでしたよ」

そしてマルクリーヌさんも居ました。

「なあおっさん、この二人が知り合いつてマジなのか？」

訝しんだ有咲さんが、私に寄ってきて小さい声で尋ねてきます。もちろん、私は頷いて答えます。

「はい。二人とも、私が城を追い出されるまでの間に世話になった恩人です。特に、シュリ君には感謝してもしきれない恩があります」

「マジかよ。こいつら二人とも、勇者の教育係とかで顔だしてた偉い人じゃん。なんでそんな人と知り合いなわけ？」

「なんで、と言われても。普通に知り合っただけですが」

「いや、普通じゃねえから。アタシとか、会話するのも許されなかったレベルの相手だぞ」

なんと、有咲さんはどうやら二人をご存知のようです。しかし、会話すら許されなかったのですか。どうやら、役に立たない勇者は切り捨てるといふ王国の方針は想像よりも過激だったようです。今も王宮に実質的に監禁されている皆さんが心配になります。

「ちよつとちよつとお！ せつかくボクが来てあげたのに、二人して内緒話なんてひどいよオトギン！」

「ああ、すみませんシュリ君。ようこそいらっしやいました」

私は有咲さんとの話をきりあげ、シュリ君の方へ近寄ります。そして、シュリ君の頭に手を置いて撫でてあげます。

「えへへ。久しぶりのオトギンの手だあ」

「はい、これは他ならぬ私の手ですね」

「ボク、オトギンの手で撫でてもらうの大好きだよ！」

「そうですか。私もシュリ君は大好きですよ」

お互いの好意を確認し合ったところで、師弟のスキンシップは終わりです。私が手を離し、シュリ君も姿勢を正します。

「さて。それじゃあ本題に入るつか。オトギン、この魔石だけど、国に売るつもりは無いかな？」

「国に、ですか」

「うん。具体的には、戦争の前線基地で利用したいと思ってるんだ。

だから、かなりの数をお願いしようかなって思ってるんだけど」

突然、大口の取引の話が舞い込みました。

実は元から狙っていた話ではあるのですが、それにしても早い展開です。予想を越える速度で、照明魔石の噂は広まっているのでしよう。

「異存はありませんが、可能ならいくつかお願いがあります」

「お願いね。何か？　ボクに叶えられる範囲なら、なんでも叶えてあげるよ！」

シユリ君は自信満々に言います。では、こちらも遠慮せずにお願いしましょう。

「まず、納品は分割でお願いします。一気に制作すると、そのための手間やコストで、私がこの店を続けることに支障をきたす可能性があります。なので、できれば作業自体を分割したいのです」

「ふむふむ、なるほど」

ちなみに、これには作業量を分割して減らす他にも、収入を分散させて安定した利益として計算できるようにする目的もあります。

「そしてもう一つ。私の開発する魔道具にご期待頂けるようでしたら、融資をお願いしたいのですが」

「へえ。お金が必要なんだ？　照明魔石の売上じゃ足りないのかな？」

「はい、足りません」

私が堂々と言い放つと、マルクリーヌさんと有咲さんが目を見開いてこちらを見ってきます。

「乙木殿。軍で必要とされる照明魔石は千や二千といった程度の数ではありません。金貨換算、千枚の利益は見込めるでしょう。それでも、まだ必要だというのですか？」

「そうだよおっさん。これが売れたら、もう仕事しなくてもいいぐらの儲けになるじゃねーか。これ以上働かなくていいんだぞ？」

二人して、私の判断に制止をかけようとしているようです。しかし、どうやら二人は根本的に理解していないようです。これは、説明しておいた方がいいでしょう。

「あのですね。まず有咲さん。この世界は、私たちのいた平和な世界、日本ではありません」

「あ？ そんなのわかってるつつの」

「ええ。そもそも、私たちが召喚された理由こそ、まさに戦争の為なのですからね。よくご存知のはずです。その上で、考えてみてください。戦争中の国で、たかだか数千枚の金貨を手にしたところで、十分な生涯の安全が保障されると思いますか？」

「え、それは。えっと」

私の言葉に、有咲さんは言葉を失います。恐らく、言われたことについて判断がつかないのでしょう。

しかし、少し考えれば分かるはず。千枚の金貨。日本円に換算すれば一億円です。一生を裕福に暮らすには少なすぎる金額です。しかも、この国は戦時中。いつ情勢が変わるとも知れませんが

魔王が戦争に勝てば、この国は貧しくなります。そんな時に、たった千枚の金貨を握っていることなど、大したアドバンテージにはなりません。

そうでなくとも、戦況次第で金貨の重みなどどうとも変わりま

す。

つまり、照明魔石を軍に売った程度の利益では、私と有咲さんの生活が保障されることにはならないのです。

18 突然の来訪者（後書き）

また、投稿に時間が空いてしまいました。
申し訳ありません。

少しストックを書き溜める余裕があったので、しばらくは毎日投稿が続くと思います。
今後共、当作品を宜しくお願い致します。

追記

数値の修正をしました。

19 乙木の将来設計

「おっさんは、戦争でこの国がヤバくなるって思ってたのか？」

有咲さんは、困ったような声で訊いてきます。私の問いで、不安を抱いてしまったのでしょうか。

「いえ、そうとは限りません。しかし、現代日本と同程度の安全は保障されないでしょう。まあ、それについては戦争が無くても同じですが。有咲さんも、体験しているでしょう？ 治安の悪い土地では、やはり生きにくいものなのですよ」

「ああ、まあそれは確かに。分かるけどさ」

有咲さんは、以前冒険者に絡まれ、身の危険を身近に感じたことがあるはずです。この世界では、あの程度の危険が当たり前なのです。それを前提に考えれば、金貨数千枚というのは少なすぎる金額です。

たとえ数万枚の金貨を手にしたところで、私たちの生活が現代日本と同等の安全を保障されたものになることは無いでしょう。

「そして、マルクリーヌさん。貴女は、恐らく私の目標を勘違いしています」

「はあ。乙木殿の目標ですか。戦争に関わらず、一市民として平和に暮らしたいのではありませんか？」

「そうですね。その願いは間違いなくあります。しかし、基準がこ

の世界の方々とは大きく違います」

そう言って、私はマルクリー又さんに説明をしていきます。

「まず、私や有咲さんのいた世界はとても平和で、満たされた世界でした。冒険者のような、暴力的な組織は存在しません。少数精鋭の騎士団のような存在が、勇者よりも優れた力を発揮する武器を用いて国を守っていたのです。強すぎる力を多くの国が持った結果、戦争で勝ち得る利益よりも、戦端を開くことによる被害の方が大きくなってしまった。故に、どの国も戦争を起こそうとはしません。人々は冒険者すら必要としない安全な土地で、飢えること無く満たされた街で十分な衣食住を保障され、平和を享受していました」

「なんと。それは、信じがたい話ですが」

私の説明に、マルクリー又さんは半信半疑のようです。まあ、私の説明も例えが多く、日本を取り巻く状況としては不完全ですが。ともかく。今は私たちの世界の方が裕福であったことだけ理解してもらえればいいのです。

「信じる信じないは、マルクリー又さんの自由です。けれどこの世界と、私たちの世界では一日の価値が違います。今日経験した同じ生活の中でも、幸福の重みが違います。この世界のパンは明日から二度と食べられないかもしれないパンです。しかし、私たちの世界のパンは、明日からも毎日ずっと食べられることを約束されたパンなのです」

「なるほど。乙木殿は、そのような世界から来た、ということですね？」

マルクリー又さんは、ともかく今は私の説明を鵜呑みすることに決めたようです。私は確認するような問いかけに頷いて答えます。

そしていよいよ本題に入ります。

「ですので、私たちが思い描く十分に満ち足りた生活というのは、マルクリーヌさんが想像するよりも遥かに満たされたものなのです。裕福かつ安全な生活を、私たちはずっと続けてきました。この世界でも、当然同等の生活を求めています。召喚されるまで当然のように得られていた権利ですから。以後も求め続けるのは、何もおかしいことではないでしょう?」

「言われてみれば、勇者の方々はどこか常識外れな部分がありましたな。我々からすれば贅沢すぎる境遇にありながら、不平不満を平気で零す子ども達は多く居ました。確かに、乙木殿の言うような環境で育ってきたのなら、仕方ないことだったのかも知れませんが」

マルクリーヌさんは何かを思い返すように頷き、そしてまた、私に問いかけてきます。

「そして、乙木殿も同様というわけですか。我々から見れば十分すぎる報酬、つまり数千枚の金貨ではまるで釣り合わない。そう言いたいわけですか?」

「はい。私が望むレベルの生活を保障するには、あまりにも心許ない金額です」

「ようやく合点がいました」

どうやら、これでマルクリーヌさんは納得して頂けたようです。

「そこまで言うならさ。オトギンの思う、十分に満たされた生活っていうのには何が必要なのかな? ボクも少し、興味が出てきちゃったな」

シユリ君が、好奇心に目を輝かせながら言います。

「私が必要とするものですか？」

「そうそう。数千枚の金貨だけじゃないよね。国からお金を借りてまで、オトギンは何をやるうとしてるんだい？」

なるほど。つまりシユリ君は、私が求める生活水準を満たす為に必要な条件は何か。そしてその条件を満たすために何をするつもりなのか気がなっているのでしょうか。

この際ですし、話してしましましょう。別に、シユリ君やマルクリー又さん。そして有咲さんには聞かれても問題無いはずですし。

「そうですね。私が生活に必要なものは、絶対の安全と私の世界に準ずる衣食住の品質です。まあ、この世界もそう捨てたものではありませんが。便利で安全な生活、という点では私たちの世界には遠く及びませんね」

「ふむふむ。オトギンはずっと、安全っていう言葉をよく使うね。

そこがとても重要なポイントなんじゃないかって思うんだけど、違うかな？」

「さすがシユリ君。話が早いですね」

「でへへへ」

私がシユリ君を褒め、頭を撫でてあげます。シユリ君は嬉しそうに顔を緩ませます。和む瞬間ですが、こんなことばかりしているとは話が進みません。

「シユリ君の言う通り、私が重要視するのは安全です。そして、この世界で安全を脅かす原因は現状で二点あります。まず、戦争をしていること。次に、冒険者を始めとしたならず者同然の人間が街を闊歩していること」

「なあおっさん。前から思ってたけど、おっさんって冒険者の評価

めっちゃ低いよな」

「当然ですよ。彼らは暴力で生計を立てているんですよ。日本で言えば暴力団です」

「いや、それはさすがに違うとアタシでも思うんだけど」

「まあ、細かいところは置いておきましょう」

私が話を流すと、有咲さんは納得いかない様子ながらも、口を嚙みます。

「安全を保障するために、私がやるべき最大の目標は一つだけです」

もったいぶった私の言い方に、皆さん息を飲みます。

私ももったいぶって、少し間を置いて宣言します。

「戦争を止める。それが私の、最大目標になります」

20 おっさんの絵空事

「戦争を止める、か。随分とまあ大きく出たもんだね、オトギンは」

シユリ君は、楽しそうにニンマリ笑いながら言います。確かに、大きく出てはいるのでしよう。しかし、これだけはどうしても必須です。

何しろ、自分だけの問題ではありませんから。私の他にも、この世界に召喚された日本人々がいます。理不尽に、日本で得られたはずの幸せを奪われた子ども達です。そんな皆さんの為にも、出来るなら戦争の一つや二つぐらい、止めてあげたい。そう思うのが、大人というものじゃありませんか。

しかしまあ、そんな感情論は偽善です。私の自己満足に過ぎません。おっさんの感傷。子どもを救ってヒーローになりたい。ただそれだけの、いい年こいたおっさんのみつともない自己実現願望に過ぎません。

でも、私には願望を実現出来るかもしれない力があります。

役に立たない廃棄スキル。無数に手に入れた役立たずのパズルのピース。これを組み合わせればもしかしたら？ と、考える何かが私の中にあるのです。

ちょっとぐらい、ヒーロー願望に浸ってみてもいいじゃありませんか。

「戦争を止めると言っても、それは簡単なことではありませんよ？」

マルクリーヌさんが、私を咎めるような視線で睨んでいます。マルクリーヌさんは騎士であり、戦争を実際に現場で取り仕切っている人間です。私の軽い言葉に、気分を害する部分でもあったのでしよう。

しかし、私はためらいません。

何しろ無数の廃棄スキルが私にはあります。そして何より、有咲さんという最大のパズルのピースが揃っています。

やってやれないことは無いんじゃないか、とも思っているのです。

「一応、ただ口だけで言っているわけではありませんよ」

私は、自分の頭の中にある絵空事について語り始めます。

「まず、戦争については人間の軍が圧倒的に強くなれば良いのです。つまり、私が優れた魔道具を作って、軍を強くすればいい。そうすれば自然とこの国が勝ちます。勝てば戦争は終わりますから。単純な話です」

「無理だね。そのためには幾つかの壁が存在するよ」

シュリ君が、私の言葉を否定してきます。思わぬタイミングでの否定に驚いてしまいます。が、シュリ君は構わず話し続けます。

「まず、オトギンの力で戦況を覆すほどの魔道具が作れる可能性が低い。召喚された勇者に匹敵する戦力を全員が持てるならまだしも、そうじゃないでしょ？ だったら、勇者召喚を上回るレベルで戦況を覆す何かを生み出すことは不可能。勇者の力で戦争が終わらない

可能性を最初に想定しているんだから、つまりオトギンの想定は矛盾していると言えるね」

さすがシユリ君。この中で一番頭がいいだけではありません。一瞬で私の主張の矛盾点を指摘してしまいました。

「それにもう一つ。オトギンが仮に、勇者以上の戦力となる魔道具を用意する能力があったとしても、そんなものを軍全体に配備するのは不可能。オトギン一人で、軍全体の戦力を底上げするのは無理だよ。身体が足りない。だからオトギンの力で軍を強くして戦況を覆すなんてことは不可能。これで二つ。理由が二つもあるんだから、オトギンが戦争の結末を左右する能力は無いに等しいと言っているよ」

さらに二つ目の指摘が入ります。これも、ご尤もな話。そもそも、照明魔石でさえ必要数を作るために相当な労力がかかります。それでさえ、ただ前線の夜がちょっと明るく、便利になるだけです。

確かに私が魔道具を用意し、軍を強くするというのは無理があります。

ですが、この視点自体、そもそも落とし穴に嵌ってしまっています。間違った解釈なのです。

「シユリ君。私からもいくつか反論しますよ」

「いいよ」。弟子がどれだけ優秀なのか、このボクが直々に判断してあげるよ！」

シユリ君はニコニコと、笑いながら待ち構えています。

さて。私はこの表情を驚きに変えてやらねばなりません。

「まず、第一の勘違いです。魔道具の生産は、何も私がやる必要は無いんですよ」

私が言った瞬間、シュリ君は眉を顰めます。

「オトギン、正気？ オトギンの魔道具は、オトギンが持っているスキルを利用した付与魔法で作られているから特別なんだよ。そして、その特別性を保証しているのは付与魔法の必要魔力量の壁。自分の持たないスキルを、自分以外の何かに付与するには膨大な魔力が必要になる。これから軍に配備予定の照明魔石をオトギン以外が作ろうとしたら、魔力源に利用する魔石に支払うお金だけで国庫が傾いちゃうよ。そんなもの、他人に作らせるつもりなの？」

「はい。そうなりますね」

私が平然と言うと、シュリ君は呆れたような息を吐きます。

「あのねオトギン。まさか、いくら何でも、そんな膨大な魔力を魔石から集めるつもりなんかじゃないよね？」

「いえ、魔石を使うつもりですが？」

私が答えると、さらにシュリ君は呆れたように息を吐きます。深い溜息に、なんだか心が抉られてしまいます。

別に私としては、何も間違ったことを言っただけじゃないつもりなのですが。

「あのねえ。いくらお金を集めるつもりだからって、膨大すぎるっていうか、世界経済全てをオトギンが掌握したとしても、そんな莫大な量の魔石を買い集めるなんて不可能だよ」

「はい。でしょうね。私も、買うつもりなんか毛頭ありません」

「へ？」

今度の回答には、シユリ君は驚いたような表情を浮かべてくれます。ようやく狙った表情を引き出せましたね。

「買わないってことは、オトギンが自分で集めてくるつもり？」

「いえ。集めるわけでもありません。いや、ある意味では集めているのかもしれませんが」

「んん〜？」

私の言葉に、とうとうシユリ君は首を傾げてしまいます。

ふふ。シユリ君の悩む姿を眺めているのも良いですが、そろそろ答え合わせといきましょう。

「ふふふ。シユリ君が悩んでいるようですので、ヒントを出しましょう。かしこいシユリ君であれば、ヒントがあればきっとすぐに気が付きますよ」

「ひ、ヒントちょうだいっ！」

「では、ヒントです」

私は、もったいぶって間を起きます。まずは照明魔石を一つ手に取って、それを掲げてみせます。

「ヒントその一。照明魔石の仕組みを、改めて考え直してみてください」

私が言うとシユリ君は顎に手を当て、首を傾げて考え始めます。

そして、数秒の後。

「あああああああああああつ！ うそッ！ 天才でしょ、オトギン！」

シュリ君の絶叫が、店内に響き渡るのでした。

21 おっさんの壮大な計画

シュリ君の絶叫に、マルクリーヌさんと有咲さんが驚いたような顔をしています。確かに、突然上げるには大きすぎる声でした。

しかし、構わずシュリ君は興奮しっぱなしです。頭を抑えて、興奮のままに語り続けます。

「なんてことしてくれるんだよ、オトギン！ もしそれが本当に実現できるなら、冗談じゃなく付与魔法の歴史が変わるよ！ いや、世界が変わると言ってもいいね！ 誰もが実現しようとして、結局出来なかった夢の技術が、まさか現実のものになるなんて！ ほんと信じられない！ どうかしてるよ、このおっさん！」

「なんだか褒めてるのが取らぬのか分からない言葉が混じっていますが、ありがとうございます」

「褒めてるんだよ！ いや、褒めてるってどうか、信じられなくて動揺してるってどうかさあ！」

シュリ君は興奮したまま語ります。が、マルクリーヌさんと有咲さんはまだ納得していない様子。シュリ君の奇怪な行動に、訝しげな視線を向けます。

「さあ、シュリ君。他二人にも分かるように、説明してくれませんか？ 答え合わせと行きましょう」

「ああ、うん。そうだね。ボクもオトギンの考えを、直接確認して

おきたいし」

そう言うってから、こほん、と咳払いをしてシュリ君が説明を始めてます。

「まず、この照明魔石は『蓄光』と『発光』の二つのスキルのお陰で成り立ってるわけだけど、それはお二人も理解しているかな？」

シュリ君の言葉に頷く女性二人。そのまま、シュリ君は気分良く解説を続けます。

「今回、重要なのは『蓄光』スキルの仕組みだね。浴びた光を魔力に変えて蓄える。シンブルなスキルだけど、実は昔から研究はされていたんだよ。ヒカリゴケからどうにかしてエネルギーを取り出せないか、ってね。まあ、取り出せはしたんだけど。ヒカリゴケ自体が魔力を使うし、元々の蓄積量も少ない。大量のヒカリゴケを栽培までして得られる魔力としてはあんまり旨味が無い感じだった。だから、ヒカリゴケから魔力を得るという研究については凍結されたままだった」

なんと、そんな先行研究が存在したのですね。私は知りませんでした。確かに言われてみれば誰もが考えるでしょう。

蓄光でエネルギーを蓄えるヒカリゴケ。そのエネルギーを利用してきれば、魔石を動力にする魔道具の動力源を、冒険者が狩る魔物に頼る必要が無くなります。

しかしヒカリゴケは植物。寿命もあり、栽培し続けるにはコストもかかります。その上、直射日光下での栽培には適さず、寿命も縮み、繁殖力も弱まります。日光から得られる魔力と栽培コストを考えると、旨味が無かったという話にも頷けます。

「でも、そんなヒカリゴケの欠点をオトギンの作る照明魔石は解消しちゃったんだよ！ 栽培する必要が無い。一度作れば物質として風化して壊れるまで機能し続ける。蓄えられる魔力量もヒカリゴケより多い。そして、魔石は非生物だから魔力も消費しない。蓄光スキルで蓄えた魔力を、そのまま全て利用できるわけなんだよ！」

そうです。シュリ君の言う通り、私の作った照明魔石はヒカリゴケの欠点を克服した魔道具です。

それは蓄光という観点に絞っても同じで、実際にあらゆる点でヒカリゴケより優れています。なので、蓄光で得た魔力をどこかで再利用する、という話も現実的になってきます。

「つまり、乙木殿の作った照明魔石は、何度でも使える魔石に変わったも同然ということですか！」

ようやく合点がいったように、マルクリーヌさんが声を上げます。これにシュリ君は頷き、さらに説明を続けます。

「その通り。そして、魔石から魔石に魔力を移す技術は既に十分実用レベルで世界的に普及しているからね。膨大な数の、蓄光スキルを付与した魔石を用意すれば、半永久的に日光から魔力を得続ける事ができる。もう、ここまで言えば分かるよね？ 付与魔法に必要な莫大な魔力を賄うことさえ、不可能じゃないんだよ！」

「そのとおりです、シュリ君。大正解です」

私が肯定することで、シュリ君は安心したように頷きます。

「やっぱり、オトギンの狙いはそれだったんだね」

「はい。莫大なエネルギーの供給さえ可能となれば、付与魔法をす

るのは私である必要はありません。ですから、まずは蓄光スキルを付与した魔石、いくなれば蓄光魔石で魔力を生み出すだけの工場を作れば良いのです。一度エネルギーの問題さえ解決してしまえば、蓄光魔石を工場で量産することもできます。人類が利用可能な魔力の桁が爆発的に増えていくことになります」

使える魔力量の桁が増える。それで出来ることは、付与魔法の革命だけではありません。恐らくエネルギー量の壁という問題で実現できなかった、様々な技術が実現可能となるはずです。そして新たな技術から新たなアイデアが生まれ、加速的に技術は進歩していきます。

正に、世界が変わる一手というわけです。

「そのためにも、莫大なお金が必要です。まず作るべきは魔力を生み出すだけの工場。蓄光魔石から魔力を取り出す大規模な工場を作ります。次にこの魔力を元に、私抜きで可動し続ける魔道具工場を作ります。私だけでは実現不可能な量の魔道具を生産していく予定です」

「そのために、お金を国から貸して欲しいってわけだね？」

「はい、そのとおりです」

これで、話が元に戻ります。元々、私がなぜお金をたくさん欲しがるか、という話でしたね。これで、皆さんにも理解して頂けたかと思えます。

22 戦争終結の糸口

「しかし、乙木殿。革命が起こるといふのは理解できました。ですが、それは戦争が終わる保証にならないのではありませんか？」

マルクリーヌさんが、疑問を口にします。確かに、工場を作って技術革命が起こるだけでは、戦争は終わらないでしょう。しかし、連鎖的に戦争終結につなげることは出来ません。

「そうですね。例えば、ですよ。例えば一億のゴブリンが一斉に攻めてきたとしましょう。勇者は人類を守りきれると思いますか？」
「それは、不可能でしょう。勇者の皆様がどれほど強かろうと、一億の軍勢を同時に押し留めることはできません。一列に並んで襲ってきて頂けるなら、話は別ですが」
「でしょうね」

私はマルクリーヌさんの回答に満足し、頷きます。

「では仮に、この国の騎士を総動員すれば、被害を抑え込むことは可能でしょうか？」

「それも不可能でしょう。我が国の騎士は総勢十万にもなりません。ゴブリンであれば、一人あたり二十か三十は殺せるでしょうが、それで一億の軍勢を壊滅させることは無理というものでしょう」
「ですね。まったくもって、そのとおりだと思います」

私はさらにマルクリーヌさんの意見に同意し、そしてさらなる問いを投げかけます。

「では、最後に質問です。騎士一人辺り、千から二千のゴブリンを倒せるような魔道具を装備として支給します。この騎士が総勢十万の軍勢を作るとしたら、ゴブリン一億の軍勢を撃退することは可能でしょうか？」

「そこまで行くと、妄想の域になります。が、可能と思われる。一億の軍勢と言っても、恐らくは縦に長い隊列を組んで襲ってくるでしょう。これを横に長い隊列で受けるならば、仮定に従えば勝てると思います」

「やはり、そう思われますか。ならば、問題ありません」

私の言葉に、マルクリーヌさんは首を傾げます。そろそろ、もっと具体的な言い方で説明しましょうか。

「今までの例えは、戦争の敗因の一つを想定したものです。軍と軍が衝突した場合、大きく分けて二つの敗因があるはず。それは質と量。兵の質が低くて負けるか、兵の数が少なくて負けるか。まあ、作戦が勝敗を左右する部分もあるでしょうが、大きな要因はこの二点で考えて間違いないでしょう」

私の言葉に、マルクリーヌさんも頷きます。そのまま私は説明を続けます。

「そこで、私は思いました。勝利で戦争を終結させるには、まず大きな敗因となる要素を取り除かねばなりません。一つは量。軍勢に押しつぶされないために私が出来るのは、それ以上の軍勢を作ることではありません。軍勢に対処できるような、優れた騎士を武器によって生み出すことです。勇者ほどの力が無くとも、魔道具で武装

を強化された騎士の軍勢を作れば対応能力は上がります。つまり、数の暴力に押しつぶされる可能性を大きく減じることができるわけです」

「つまり、勇者という戦局規模の優位性だけでなく、軍全体を強化することで戦略規模の優位性を得ようということですね？」

マルクリーヌさんが、上手く理解してくれたようです。私は頷いて肯定します。

すると、今度はシュリ君がツツコミを入れるように問いを口にします。

「じゃあオトギン。もう一つ、質に関してはどうなのかな？ 例えば勇者を全員ワンパンで倒しちゃうような敵が一人いて、そいつが王都へ攻め込んでくるとしたら？ オトギンは、そんな化物を相手にどうやって戦争に勝つつもりかな？」

「それは、単純ですよ。勇者か、あるいは私自身が強くなってその敵を倒せば良いのです」

「えっ？」

私の答えに、シュリ君は驚きの表情を浮かべます。

「勇者はともかく、オトギンが？ それは、ちょっと、無謀じゃないかな？」

「そうですね。最初は、あくまでも私以外の誰かを強くする方が可能性も高いと置いていたのですが。今は状況が違いました」

そう言って、私は有咲さんの方を見ます。

「な、なんだよ」

理由が分からないのか、有咲さんは困惑しつつ、こちらを睨み返してきます。

「今は、私には有咲さんという強力な仲間が居ます。有咲さんの力があれば、まあ大抵のことは不可能ではないんじゃないかと」

「そ、そこまで言うか？」

有咲さんが、照れたように頬を指で掻きながら言います。こちらとしては、本心を言っただけです。決して誇張したわけではありません。

「たしかその子も勇者の一人。スキルはカルキュレイター、計算が上手くなるスキルだったっけ？」

シユリ君は、疑うような声で言います。

「そうです。有咲さんのスキルは、カルキュレイター。私が期待しているのも、他ならぬそのスキルなのです」

「へえ。面白いね。理由が知りたいな？」

私の言葉に、シユリ君は試すような笑みを浮かべます。そして、さらなる詳しい説明を求めてきました。

「ここから先は、推測や勝手な想像、期待が交じる話になります。それに、私の計画の核心部分です。あまり詳しく話すわけにはいきません。」

しかし、今日この場でシユリ君を納得させるには話さなければならぬ部分でしょう。

私は意を決して、有咲さんのスキルの仮説について話をする事

に
し
ま
す。

22 戦争終結の糸口（後書き）

本文中の表現が分かりづらかった為、修正しました。

一万の騎士で一億のゴブリンを抑えるというのは、騎士が消耗し切る前に、横長の隊列で交代しつつ受け切るイメージでした。
これは解釈としてもあまり良くないと思い、数の方を確実に勝てる数字に変更しました。

23 カルキュレーターへの期待

「そうですね、まずはシンプルな計算を試してみましよう。一足す一は、いくらですか？」

「二だね」

私の問いに、シュリ君は答えを出します。

「では、次です。あるところに少年と少女がいます。少年はりんごを一つ。少女はりんごを二つ持っています。少年はりんご一つと半分で満腹に。少女はりんご半分で満腹になります。さて、二人が満腹になるまでりんごを食べた時、残るりんごの数はいくつですか？」

「一つだね」

これに、シュリ君はまた答えます。まあ、どちらも簡単すぎる問題ですからね。答えられて当然です。

しかし、重要なのはその『答えられる』という事実です。

「二つの問題に答えて貰いましたが、どちらの答えを導くにしても、シュリ君は頭の中で計算を行いましたね？」

「そうだね。単純な四則演算を頭の中で処理して、答えを導いたよ。それがどうかしたのかな？」

「はい。実は、最初の問いで私は数式を提示しました。しかし、二つ目の問いで私は数式を提示していません。なのに、なぜシュリ君は計算できたのだと思いますか？」

「きゅ、急に哲学的な問いになったね」

話題の方向性が突如変わったせいか、シュリ君は面喰らいます。

「そうだね。多分、答えを導くため、数式に当てはめて考えるのが楽だったからじゃないかな？」

「なるほど。確かに、数式とは数を扱いやすくするために作られた言葉と言えます。数を処理しなければならぬ問題に直面した時、人は問題の内容を数式に当てはめ、計算し、答えを導きます」

私のもったいぶった言い方に、シュリ君は眉を顰めます。

「オトギン。何を言いたいのか、はつきりしてほしいな」

「ええ。では次の問いに行きましょう。問題の答えを導く為、数式を扱う場合とそうでない場合。その二つにはどのような違いが存在するとシュリ君は思いますか？」

「むう。また遠回しだね。それは、使う理論の違いじゃないかな？」

数式を使う場合には数学という理論で答えを導く。使わない場合は、帰納的なり演繹的なり様々な方法で答えを導く」

「なるほど。では、それ以外に大きな違いは無いと？」

「そうだね」

よし。満足のいく答えを得られました。これで話が進みます。

「ここで最初の話題に立ち返りましょう。カルキュレーターというスキルは、計算をしてその答えを導くスキルです。その『計算』の中には、どこまでの範囲が含まれると思いますか？」

「どこまでって。それは数学的な範囲に決まって」

そこまで言って、シュリ君は言葉を止めます。そして数秒の沈黙

の後、再び口を開きます。

「いや。そうとも限らないのか。数学的な処理なんて、結局はボクたち人間が勝手に作ったものを基準にした考えにすぎない。スキルは人間の文化が生んだものじゃない。だったら、スキルが人間の文化に合わせた範囲で有効になるとは限らないんだ」

シュリ君は、少し難しい言い回しをします。これについていけないように、マルクリー又さんと有咲さんは首を傾げます。

ここで、私が補足するように説明します。

「数学というのは、人類が生み出した数字という言葉によって形作られています。自然界には存在しないんです。そして、スキルは人間が生み出したものではありません。自然のものです。自然から生まれたものが、人間の生み出したものを基準に作られているというのは、不自然ですよね？」

私の言葉に、マルクリー又さんが頷きます。有咲さんはよく分かっているのか、首を傾げたままです。が、ここでこれ以上説明を続けると話の腰が折れます。今は話を先に進めましょう。

「そう考えると、カルキュレイターというスキルが計算可能なものが数学的処理だけであるとするのは不自然になります。むしろ、数学以外のあらゆる問題について計算し、処理して答えを導くことが可能だと考える方が適切でしょう」

そうです。つまり、カルキュレイターが計算し、答えを導くのは数式に限らないあらゆる問題全般であると推測できるのです。

「例えば、一足す一という計算は、数式で表すことが可能です。し

かし、これは数学的に言った場合の話に過ぎません。もつと言えは『複数の情報を比較し、新たな情報を得る』という処理を数字で表現したものが数式なのです。つまり、数式は計算の本質ではなく、表面に過ぎないんです。そしてカルキュレーターというスキルで処理されるのは、我々人類が表面に与えた数式という皮の部分ではありません。その根源である複数の情報の比較。そして解を得るといふ行為こそが計算の本質。つまり、カルキュレーターの本領なのです」

私が説明をするほどに、マルクリー又さんと有咲さんは困惑の表情を浮かべます。わけがわからない、といった様子で首を傾げます。

「つまり、どういうことなんだよ！」

有咲さんが不満げに声を荒げます。確かに、要約しなかった私の説明も悪いですね。ここは、分かりやすく何が出来るようになるのかを言ってしまうでしょう。

「要するに、めちやくちゃ頭が良くなるんです。どんな問題でも、必要な情報が揃っていれば答えが出せます。カルキュレーターとは、つまり『絶対に正解する』能力に等しいんですよ」

私の要約に、有咲さんはぼかんとした顔になります。

「アタシ、別にそんな頭良くなつてないけど？」

そして、私の説をあっさり否定しました。

23 カルキュレーターへの期待（後書き）

投稿から一ヶ月ほどが経過しました。

記念というほどではありませんが、数日ほど日に複数回の投稿を続けようと思います。

ストックに関しては問題ない程度に書き溜めてあるので、この後も連日投稿は暫く続きます。

宜しくお願い致します。

24 スキルの成長性

「それについては、仮説があります」

私は、有咲さんに否定されたのですぐさま反論をします。

「恐らく、有咲さんはまだカルキュレーターを使いこなしていないだけなのではないかと思えます」

「はあ。使いこなすっただって。よく分かんねえけど」

有咲さんは言って、不貞腐れるような仕草をします。上手くスキルを使えていない、と言われて実力や努力の部分を否定されたように感じたのでしょうか。

「別に、有咲さんの能力を疑っているわけではありませんよ。そもそも、スキルとはそういうものなのです」

「は？ どういうこと？」

「スキルには、使うほどに上達して効果が高くなるものがあるんですよ。そして、有咲さんはまだカルキュレーターをあまり使用していないはずなんです。なので、現状ではカルキュレーターは大した効果の無いスキルになっているんです」

「ああ、なるほど。そういうことね」

私の言葉に、有咲さんは納得したように頷きます。

「さすがオトギン。スキルには成長性のあるものも存在するって話よく知ってたね」

「ええ。王宮で書物を読み漁った時、知った知識の中に取りましたから」

私にとって、重要な情報でした。何しろ、廃棄スキルでも成長すれば使い物になるかもしれないからです。暗記するのも当然ですよ。

なお、実際に成長性のあるスキルというのはそう多くはありません。

例えば、蓄光スキルに関しては決まった法則があります。一定の光に対し、一定の魔力を生み出す。この変換効率はどれだけ蓄光が繰り返されようと一定のままです。

また、発光スキルの場合も似たようなものです。消費する魔力量を様々な条件で変更することは可能ですが、同一の消費魔力に対する発光量については永久に一定です。

このように、ほとんどのスキルが持つ法則性というのは、常に一定です。

しかし、一部のスキルはこの法則性が崩れます。使えば使うほど、性能が変化し、効果が上がるものも存在するのです。

実は私もそのようなスキルをいくつか所持していることが、文献を読み漁った結果分かっています。今の所、変化は起こっていませんが。

ただ、スキルを使用するほどに効果が高まり、時には異なる名前やスキルに変化することさえあるというのは確認済みの現象なのです。

そして、カルキュレイターというスキルについては未確認ですが、成長性があると考える方が自然です。

何しろ、元々は女神様が与えてくれたチートスキルなので。まさか、簡単な四則演算が出来て終わり、なんていうしょうもないスキルであるはずがないのです。

つまり私は、女神様から貰ったチートスキルが弱いはずがない、という仮定から逆算し、カルキュレイターというスキルの成長性、そして最終的な性能について仮説を立てたわけです。

そして、この話は既に単なる仮説ではありません。

「実は、今まで有咲さんにお店の手伝いをしてもらっていたのもカルキュレイターというスキルの為だったりします。レジ打ちというシンプルな計算行為を続けることで、カルキュレイターの成長を促していたんですよ」

「ほうほう。それで、結果は？」

シュリ君が興味深そうに、話の続きを促してきます。

「恐らくですが、成長性があると思われれます。最初の頃の有咲さんは、簡単な計算でも暗算に時間が掛かっていました。しかし、今では値段の違う照明魔石を複数バラバラに並べても即座に値段を計算してくれます。私よりも素早く正確に計算できるようになっているんです。これは、恐らくカルキュレイターが成長したという証拠でしょう。まあ、実は有咲さんに暗算の才能があり、最近になって開花したという説も無くはありませんが」

「まあ、そうだね。確定は出来ないけど、成長性がある可能性は高いね」

シュリ君も、私の説に同意してくれます。

「で、そこまでしてカルキュレイターのスキルを強化して、オトギンは何をするつもりなのかな？」

「それについては未定ですね。というより、正確に言えば『何でも出来る』と言った方が近いかもしれません」

私は、カルキュレイターというスキルが期待通りの性能を発揮した場合の未来について説明します。

「もしもカルキュレイターが『絶対に正解する』能力、私の世界で言うならばスーパーコンピューターさえ超える計算能力を持つのだとしたら。恐らく、私が想像できる範囲のありとあらゆる技術が実現可能となってしまう。それは最早、予定を立てる必要すら無いものです。手当たり次第、効果的で優れた技術を実用化するだけの話になります」

シュリ君は顎に手を当て、考え込みつつ私の想定に評価を下します。

「なるほど。まあ、仮定に仮定を重ねた、甘い見通しだね。でも、ありえないわけでもない。それに将来的な展望はカルキュレイターがどの程度まで成長するスキルなのか、って部分にかかっている。結局カルキュレイターの成長性の程度に依存するんだから、道筋は立てようもないか。出来るとすれば、有用そうな技術に優先順位をつけて、どこからカルキュレイターの力で未解決問題を解消するのか決めておくぐらいかな」

「ですね。私もおおよそ、そのような計画を立てています」

これで、私の計画については納得してもらえたでしょう。

実際、シユリ君は満足したような笑みを浮かべて頷いています。まあ、マルクリーヌさんと有咲さんは話には完全にはついてきていない様子ですが。この場では、シユリ君に理解してもらおうのが最も重要です。今はお二人の理解を深める必要も無いでしょう。

25 シュリヴァと乙木の契約

「よし、分かったよ。オトギンの計画についても理解できた。確か、融資をして欲しいんだっただね？ 正式に宮廷魔術師付きの魔道具店として認めてあげるよ。そうすれば、研究費という名目でオトギンに国の予算を渡せるはずだよ」

シュリ君から、私の聞きたかった言葉が聞けました。長々と説得に時間がかかりましたが、これでようやく将来への見通しが立ちます。

「ありがとうございます、シュリ君」

「うん。他ならぬオトギンのお願いだし、お金を無駄にするわけでもなさそうだしね。っていうか、蓄光魔石の工場を作るだけでとんでもない国益を生み出すはずだよ。ボクが拒否する理由なんて、ぶっちゃけ全く無い感じだったりするけどね」

まあ、そうでしょうね。しかし、それでもシュリ君は詳細を気にしていました。それは恐らく、私という存在を品定めする意味もあったのでしよう。

出資するにしても、ただ蓄光魔石の工場を作る為だけなのか。それとも、それ以上の利益を期待するのか。これが違えば、図つてもらえる便宜の程度も変わってきます。

「というわけでオトギン。契約は成り立ったわけだし、そろそろあ

の約束、報酬を貰いたいな、って思ってるんだけど？」
「あの約束、ですか！」

私は前のめりに反応します。これにマルクリー又さんと有咲さんが驚いている様子ですが、気にしません。

あの約束、というものが何より重要なのですから。

「あの約束と言いますと、やはり王宮を出る時に交わしたあの約束ですか！」

「そうだよ。ようやくボクも、覚悟が決まったっていうか、本気になったっていうか。いつまでも本調子じゃない態度でいるのはらしくないなって思ったんだよ。だから、今日はしっかりそのつもりでここに来たんだ」

シュリ君の笑顔に、どこか妖艶に思える部分が混じります。

「というわけでオトギン？　ここじゃアレだし、別の場所に行こうか！」

「はい是非」

私はシュリ君の手を取り、店を出ようと足を動かします。

「おい待ておっさん！　どついうことなんだよ、さっぱりわかんなーいんだけど！」

そんな私を呼び止める有咲さん。

姪っ子に、あの約束について説明するのは避けたいです。というか、少年のお尻を狙うおっさんだと知られたら、今後の関係が危うくなります。ここは何としても隠し通さねばなりません。

まずは、念のためにマルクリーヌさんの方を見ます。どうやら、シュリ君の行動については傍観を決め込んでいるようです。ムスツとしていますが、何も言いません。恐らく、下品な話を有咲さんの耳に入れるのを避けてくれているのでしょう。さすがです。

後は私が適当にごまかせばいいだけですな。

「有咲さん」

「な、なんだよ」

私は真面目な顔で有咲さんと向かい合います。

「私はシュリ君と契約を交わし、以前からとある報酬を引き渡す約束をしていました。そして、その報酬というのは他人の目につく場所です。ボクは見られながらも全然平気だよ？」

シュリ君がアブノーマルな提案をしますが、ここは乗るわけにはいきません。無視します。

「というわけで、私はこれからシュリ君に報酬を引き渡す為、適切な場所を探しに向かいます。また少しの間お店から離れますが、ピークまでには帰ってきますので宜しくおねがいします」

「わ、分かったよ」

有咲さんの了承も得られました。夕刻のピークまではまだ二時間以上の時間があります。そこまでは、有咲さんに任せてしまっても大丈夫でしょう。

いえ、多少大丈夫でなくても、今回ばかりは逃せません。

何しろ、念願の、長年夢見た脱童貞のチャンスが訪れているので
すから。

「ではシュリ君いきましょう」

「う、うん。っていうかオトギン。ほんとの話題になるとグイグ
イ来るよね？」

「当然です。積年の望みが叶うのですから」

脱童貞は私の人生の主目的と言っても過言ではありません。興奮
するのも当然と言えるでしょう。

「さあ行きましょうシュリ君さあ早く！」

「わ、わかつたってば！ もう、積極的だなあオトギンはっ！」

こうして私は、シュリ君の手を引き、適当な連れ込み宿を探して
店を後にしました。

その後。

私はついに願いを叶えることが出来ました。

詳しく語ることは出来ません。

ただ、シュリ君の身体は最高でした。それだけは言っておきまし
ょう。

26 乙木雄一という男

シュリ君に私の童貞を美味しく頂いてもらった後、私は二人で店に戻り、そのまま各種契約を書面で交わしました。

なにやらぐつたりした様子のシュリ君を、有咲さんは不思議そうに見ていました。が、私とシュリ君がやることやってきたとまでは思っていないでしょう。さすがに、バレていないはずですよ。とかバレたらいけません。さすがに有咲さんに本気で嫌われかねません。

姪っ子に汚物でも見るような目で見られながら一緒に生活する。

そんな地獄、考えるだけでも嫌なものです。

と、言っておきながら。

考えてみると、短期的にはそう悪くもない気がしてきました。

とまあ、関係ないことは今は置いておきましょう。

私と契約を交わし、後日王宮から正式な書面を以って本契約を交わす約束をして、シュリ君とマルクリーヌさんは帰っていききました。そしてようやく訪れたピークを私と有咲さんで捌き、時刻は夜。

既に店内に人の姿はありません。この時間になると、そもそも来客する人が居ません。ごく稀に、冒険者でもない一般の方が照明魔

石に興味を持って来店するぐらいです。それも、必ず買っていくというわけでもありません。

当然、暇です。私一人で仕事は可能なので、既に有咲さんは自由時間。

普段なら銀貨を握りしめ夕食に出かけるところですが、何故か今日は出ていきません。

何かを言いたげに、ずっと私の側に座っています。

「なあ、おっさん」

そしてついに口を開きます。

「おっさんって、どうしてコンビニ店員なんかやってたんだ？」
「なぜ、そのような質問を？」

私は有咲さんの質問の意図が分からず、つい訊き返してしまいました。

「いや。だって、おっさんって、雄一お兄ちゃんだったわけじゃない？」

「いやいや。今も雄一お兄ちゃんですよ」

「いやいやいや！ それはわかってるっつーの！ なんつうか、雄一お兄ちゃんって頭が良くて、何でも知ってるすごいお兄ちゃんってイメージだったのにさ。なんでコンビニ店員なんかやってたのかわかって思ったんだよ。今日のおっさん、なんかすげー雄一お兄ちゃんっぽかったからさ」

有咲さんは、顔を赤くしながら言います。どうやら、私のような

おっさんを褒めるのが気恥ずかしい様子です。

恥ずかしい思いをしてまで、こんな質問をするのです。理由は分かりませんが、なかなか強い好奇心が働いているのでしょうか。ここは雄一お兄ちゃんとしては、答えてあげねばならないでしょう。

しかし、どう語ったものか。

私も説明に困る話ですからね。

ふむ。そうですね。では、順番に有咲さんの疑問が解消されるまで、一つずつ遡って答えていきましょう。

「そうですね。まず、コンビニで働いていた理由ですか。それは、私のような大学を留年して中退した人間がまともにもありつける仕事が多くなかったからですよ」

「そう、なのか？」

「ええ。格安飲食チェーンの店員や、介護、派遣労働、警備業など色々ありますが。どこもさして待遇は変わりませんよ。たまたま、私が最初に面接で受かったのがコンビニだったというだけです」

当時のことを思い返しながら、語ります。

私のような社会的信用の低い人間は、面接で高い確率で落とされます。まあ、コミュニケーション能力が高い方でもありませんし。さほど若くもありません。

もっと若い学生アルバイトや高卒のフリーター。コミュニケーション能力の高い人間。労働経験の豊富な定年退職後のおじさん。など、競争相手は数多くいます。

若くなく、コミュニケーション能力が高くなく、経験も低い私が受かるアルバイトというのは、人材が相当不足している業種でなければありえないのです。

つまり、単純に賃金が低くきつい仕事。あるいは、労働環境が悪く雇ったアルバイトが抜けていきやすい。そんな場所しか残っていません。

大学時代、全ての時間を読書に費やし、個人的な知識欲を満たすだけの年月を送った結果がこれです。

私には、いい条件で働ける仕事など残っていなかったのです。

とまあ、そのようなことを有咲さんに、分かりやすく噛み砕きつつ説明しました。

「本ばっか読んでたんだったら、図書館の司書とかなれなかったのか？」

「司書というのは、本を読むだけでなれる仕事ではありませんよ。むしろ資格が必要ですから、私のような経歴の人間とは縁遠い仕事です」

実は若い頃の私も、有咲さんと似たような甘い考えを抱いたことがあります。当然、図書館司書の資格について調べてすぐに諦めました。

「じゃあ、なんでおっさんは大学を留年して、中退したんだ？ ちゃんと卒業すりゃ良かったじゃん」

「それは、卒業が不可能になったからです。大学を卒業するために単位というものが要になります。しかし、私は単位をほとんど取得しないまま、六年も在籍していました。計八年が在学できる最大期間でした。しかし、私が卒業するために必要な単位を全て取るには三年は必要でした。つまり、完全に詰みだったわけです。それに大学に通う理由もほぼなくなっていましたから。退学するのは、自

然な選択でした」

私が言うと、有咲さんは眉を顰めます。

「なんでおっさんは、その単位ってやつを取らなかつたんだよ？」

全くもって正論です。

しかし、当時の私はその正論を聞き入れるつもりがありませんでした。

ある意味で、とてつもない馬鹿だったのです。

「その理由については、若い頃の私の行動原理について話す必要がありませんね」

「行動原理って？」

有咲さんが聞き返してくれたので、私は頷き、正直に話します。

「若い頃の私の行動原理は二つでした。一つは、知識欲を満たし続けること。もう一つは、女の子にモテること」

そして私が正直に言った結果、有咲さんは呆れたような表情を浮かべます。

27 乙木雄一の昔話

幼い頃。私は、周囲よりとても頭の良い子どもでした。

そして子どもの身でありながら、なまじ頭が良かったせいで他人を見下す癖がありました。

頭が悪いというのは、なんて不自由で、不幸なことだろう。自分だけは、そうなりたくない。

そんな思いを、それこそ物心ついたころからずっと思い続けていました。

思春期になった頃には、その思想を拗らせていました。

どうして、私より頭の悪い奴の方がモテるのだろう。

私の方が優れているのに、どうして馬鹿な奴らの方に女性が寄っていくのだろう。

そんな疑問を、私は身勝手に傲慢な仮説で解決してしまいます。

きっと、馬鹿な奴らに集まる女性も馬鹿なのだ。だから、賢くて優れた自分を理解できない。同じレベルの馬鹿でしか集まること出来ないのだ。

そんな、愚かな考えを抱いていました。

やがて私は、大学という場所に希望を見出すようになりました。

きっと高校の人間よりも、ずっと賢い女性が集まる場所のはず。ならば、自分を理解してくれる女性も多い。きっと、賢く優秀な自分がモテるようになるはずだ。

そう思い、私は大学への進学を決意しました。

当然、大学へ通うことでより自分の知識を増やし、賢くなりたいという思いもありました。

しかしそれと同程度ほど、大学に行けば自分も女性にモテるはず、という期待があったのです。

しかし現実是非情です。

幸いにも、最終的には数人の女性とお付き合いすることは出来ました。

しかし誰一人として長続きせず、一方的にフラれるばかりでした。結局、一度も性行為に至ることすら無いまま、私は大学で孤立していきました。

283

さすがにこの頃になると、経験を通して私も理解していました。頭が良いだけでは、モテるわけが無い。

そもそも頭の良さで人を見下すような人間が、見知らぬ誰かにパートナーとして選ばれるわけが無かったのです。

大学という、高校よりは開放的な環境。そして私という人間の欠陥を知らぬ人が多い環境。それらが重なったお陰で、女性と付き合いどころまでこぎつけることは出来ました。

しかし、残念ながらそこまです。事実を知られた時、結局私は拒絶されるだけでした。

この頃になると、もう私には知識以外に取り柄というものがありませんでした。他人より賢い。他人より優れている。その事実だけ

が、私の寄辺となっていました。

知識だけを求めて、大学に通う日々が続くようになりました。

私の知識欲が求めるまま、卒業を考えずに不要な授業を履修し、必修科目をサボって読書に励みました。

人より優れていれば、きっと結果がついてくると信じていました。

しかし、待っていた現実には、コンビニ店員という就職先です。それもアルバイト。数年のニート生活を経た後のことです。

六年の大学生活を終えた私は、留年と中退という二つのイエローカードのお蔭でまともに企業面接すら受けられない状態でした。受けた面接も、確実に落ちます。

そもそも、卒業すらしていない私が受けることのできる面接自体数少ないものでした。知人のコネクションがあれば話は違ったのでしょうか。選民的な思想で孤立していた私には縁遠いものでした。

自分という存在の価値について、現実を知りました。

そうして私は、あえなくニート生活に落ちたわけです。

その後数年の墮落した生活を経て、最終的にはコンビニ店員として働き始めたわけです。

28 雄一お兄ちゃんと姪っ子の有咲

「とまあ、それが私という人間の半生です」

私は、長々と有咲さんに自分の話を語ってしまいました。

有咲さんは、気まずそうにうつむいています。

やはり、あまり気分のいい話題ではありませんね。こういう話は、しないほうが得策です。しかし黙っているというのも、訊かれた手前よくありません。

どう対処すれば良かったのか。半端に歳を重ねた私のようなおっさんには、そんなことさえ分かりません。

ああ、情けない。

「なあ、おっさん」

有咲さんが、口を開きます。

「アタシは、雄一お兄ちゃんは何でも知ってる、すごい人だっと思ってた。今でも覚えてるよ。雄一お兄ちゃんはすごい。かっこいい。って、ずっと思ってた」

なんだか、むず痒くなってしまう言葉ですね。

気恥ずかしくなり、ごまかすように頬をぱりぱりと搔いてしまします。

「だから、なんて言えばいいか分かんねーけどさ。とにかく、雄一お兄ちゃんはずげーんだよ。アタシは、そう思ってる。大学留年とか中退とか、よく分かんないし。アタシは、アタシが見たものことしか分かんない。だから、やっぱアタシの雄一お兄ちゃんは、今でもカツコいいよ。すげー人のまんまだよ」

「あ、有咲さん」

胸にくる言葉を貰いました。

目元がじんわりと熱くなります。

いけませんね。いい年こいた男が見せるものではありません。私は零れそうになるものを堪えて、感謝の言葉を口にします。

「ありがとうございます」

「ま、まあな。ってか、雄一お兄ちゃんが凄くても、おっさんはおっさんだからな！調子に乗んなよなっ！」

「ふふ。そうですね。分かりました」

有咲さんの照れ隠しのような暴言が、何だか心地よく感じてしまします。

私の姪っ子は、とても良い子です。本当に、誇りに思います。

「で、結局おっさんは色々あって、最終的にコンビニ店員になったってことだよな？」

「はい、そういうことです」

とても雑なまとめかたですが、有咲さんの言葉に私は同意します。

恐らく、頭の中では分かっているのでしょうか。

「でもやっぱ、おっさんって本当はすげーんだからさ。ちゃんと頑張れば、もっと普通の仕事で働けたんじゃないの？」

そして、有咲さんがさらなる疑問を口にします。

「そうですね。確かに、資格等を取って、就職先を探せば、どこかの企業に就職することは出来たかも知れません」

「じゃあ、なんでコンビニ店員なんかしてたんだ？」

「まあ、それについては難しいところですね」

私は、正直な所を口にします。

「私という人間の可能性について諦めていた部分もあります。長年の選民思想が抜けず、今更媚を売るような努力をしたくなかった、というのがあります。ただ、最大の理由は、やはり十分に満足していたからでしょう」

「満足？ してたのか？」

「はい」

訝しむ有咲さんに頷いてみせます。

「コンビニ店員という仕事はともかく、一緒に働く従業員の皆さんの助けになれることが嬉しかったのですよ。そこに、小さいですが満足感がありました。割に合いませんが、充実感が得られました。だから、自分の居る環境を変えようとは思わなかったのかもしれない」

私の言うことがよく理解できないのか、有咲さんは納得できてい

ない様子でした。

実は他にもちよつとした理由があったりするのですが。この場で有咲さんに打ち明けるのは少々気恥ずかしいので、誤魔化してしま
いましょう。

29 冴えないおっさんの人生観

「有咲さん。人間というのは、年を取ると矛盾した、無駄の多い行動を取るようになるものなんですよ」

私は、自分の思う、人という生き物についての観念を言葉にします。

「自分が優れてると思いつながら。もつと違う場所に居場所はあるんだと思いつながら。悪いオーナーが経営するハズレのコンビニでアルバイトを続けるようなことだってあるんです」

「そう、なのかな」

「ええ、そうなんです」

私は年配者ぶって、有咲さんを諭します。ウザいと思われるかもしれませんが、どうにもついで口が開くと止まりません。

「年を取るごとに、人は経験を積みみます。経験は財産であり、同時に毒です。祝福であり、呪いでもあります。積み重ねた経験は心に記憶として残り、決して消えることはありません」

私の説教じみた言葉を、有咲さんは真剣な様子で聴いてくれます。それが有り難くて、つい語りすぎてしまいます。

「良い経験は財産であり、人生の祝福となるでしょう。けれど悪い

経験は毒となり、呪いとなります。他人をどこか見下すような私の気質が良くないと分かっている、もうそれは一生消えないのです。態度に出さない努力をするしか無いのです」

自分について省みながら語ります。

語った通り、私は馬鹿な人を見下す癖がこの年齢になっても抜けません。反省してから十年近く経ったはずなのに、今でも頭の悪い人を見ると非情で黒い思考が頭の中に湧き上がります。

「それと同じように、どれだけ理性や理屈で分かっている、心に刻まれたものが矛盾した行動を選んでしまうこともあります。年を取ると、人間はそうやって矛盾した、無駄だらけでみっともない存在に変わり果てていくものです。私のように」

事実、私はチグハグです。

労働環境に文句を言いながらも、その環境を変えようとしなくて、良くないと思っただけでも、馬鹿な人達を見下してしまう。誰かの為になりたい。力になりたいと思っただけでも、全てを投げ売るほど没頭はできない。

経験を毒や呪いに変えてきた結果、私は抜け出せない泥沼に足を踏み入れてしまったのです。

「おっさんは、それでいいの？ 諦めるのかよ？」

有咲さんの問いかけは、抽象的でした。けれど、私は迷わず頷きます。

「仕方ありませんから。今さら、私は私を変えることなんて出来ません。とくに覚悟は出来ていませんね。大したことないのに人を見下す嫌な奴として、これからも生きていく。ちゃんと嫌われ者

として人生を全うするつもりですよ。自分をダメなおっさんとして認め、その上でありのままを肯定して生きるつもりです」

それが、せめて自分の人生を悲観せずにする唯一の方法ですからね。

「でも、だからこそ私は、誰かの力になりたいと思います。自分みたいな人を増やしたくないですから。少しでもマシな人生を、若い人には送ってもらいたい。だから私は、心の何処かにヒーロー願望を抱えているんです。自分が情けないからこそ、こんな惨めな思いを誰にも味わってほしくない。だから誰かの力になりたい。人生を良い方向に変えてあげたい」

そう言うてから、有咲さんに微笑みかけます。

「当然、有咲さんにもそう思っていますよ。私のような失敗をせず、幸せになって下さい」

私みたいに惨めな人間は、居ない方がずっと良いのです。

語り終えて、沈黙が暫く流れます。

そして私の言葉を受け、よく考え込んでいた様子の有咲さんがようやく顔を上げます。

「わかったよ。アタシなりに、頑張ってみる」

前向きな言葉が貰えました。

お説教くさい話をしたことで怒られてしまいかも、と思っていました。やはり、有咲さんは性根が素直で、良い子ですね。

私なんかには、もったいない姪っ子です。

と、いけませんね。暗い話をしたからか、頭の中がどこか悲観的になっていきます。

私らしく、もっと楽観的にいきましょう。自分を肯定する。ありのままの自分で、自然体で振る舞う。

少しだけ瞑想して、意識を切り替えます。

そして目を開くと、すっかり普段どおりの私です。

「さて。お話はこれぐらいにしてしましましょう。有咲さん。そろそろ夕食に向かわないと、夜道が危なくなってしまうですよ」

「分かった。じゃあ、メシに行ってくる」

有咲さんはそう言って、銀貨を握りしめて店を出ていきます。

心なしか、去り際の一言が優しげな声色に聞こえたのは、気のせいではないでしょう。

後日。シュリ君は正式な書面を持って再び私の店に訪れました。そして正式な契約を交わし、定期的に照明魔石を仕入れることとなりました。

また、私の店『洞窟ドワーフの魔道具屋さん』は正式に宮廷魔術師付きの店として指定していただきました。

これは要するに、宮廷魔術師が研究過程で必要とするものを仕入れる時に使う店だ、と名指しすることを意味します。

このお蔭で、研究過程が必要だ、という名目で予算を貰い、私の方へと流してもらうことが可能になるわけです。

まあ、当然名目上の研究、つまりお金を貰うための建前を考える必要がその都度生まれるわけですが。

しかし借金ではなく、勝手に使って良いお金を貰えるわけです。単に私の店へ融資してもらうよりも、遥かに良い待遇だと言えるでしょう。

お金に関してはある程度の見通しが立ちました。が、残る問題は労働力。つまり私の店で働く従業員についてです。

計画としては、孤児院の子たちを教育し、良い人材として育て上

げるつもりです。

が、すぐさま労働力となるわけではありません。

そもそも、孤児院の子たちは将来の幹部候補とでも言ったほうがいいでしょう。ヒラの従業員については、一般から募集するつもりです。

そこで、魔道具店の新たな従業員を募集することとしました。

理由としては、これから商品のラインナップが増えれば忙しくなることが予想されるからです。特に、私は店頭に立つ以外の仕事も数多くこなす予定です。有咲さん一人で、今以上のしごとを回すのは不可能でしょう。

そこで、新たな労働力として従業員を二、三名ほど雇うことを決めました。

狙い目は、冒険者の旦那さんを亡くされた未亡人です。

冒険者さん同士の口コミや人間関係から、求人情報が行き渡りやすい点。そして何より、恐らく安定した時間を働いてくれる見込みが高い点が目をつけた理由になります。

当然、未亡人の知り合いを紹介して下さい、等とは口に出しません。

あたかも普通の従業員を募集するように、冒険者さんに世間話を切り出します。

その上で、安定して長時間働ける点や、仕事内容は簡単で、体力をそれほど必要としない点などを説明します。

するとあら不思議。自然と冒険者さん同士で情報が共有されて、自然と未亡人の方へと話が伝わるわけです。

冒険者という仕事柄、友好関係は既に働いている人間か、知人の冒険者の家族ぐらいなものです。

そして既に働いている人間は求人には食いつきません。冒険者は仕事上、安定して長時間働くことは出来ません。

なので自然と、求人情報は冒険者の家族の元へと行き渡るわけです。

そして、火急仕事を必要としているのは、その中でも夫を失い、収入源を失くした未亡人です。夫が生きていれば、無職の妻は専業主婦に徹します。あるいは夫の稼ぎが足りず、既に働いているはずです。

そうした理由から、求人には未亡人の応募が来ると予想しました。当然、未亡人でなくとも条件に合えば雇うつもりですが。

そうして募集した結果、二組の応募がありました。一組目は、予想通り未亡人。C級の冒険者さんの夫を亡くしたばかりで、すぐに働きたかったとのこと。

面接の結果、人格的にも問題はありませんが、簡単な足し算引き算も出来ません。当然、すぐに雇いました。

そして、二組目の応募です。こちらが、少々変わり種でした。

面接にやってきたのは、身なりの整った女性。そしてそっくりな顔立ちの少年と少女です。

「はじめまして、乙木様。私はマリアと申します」

身なりの良い女性、マリアさんは丁寧にお辞儀をします。こちらもお辞儀を返し、手早く本題に入ります。

「さて、マリアさんは、なぜ今回の求人に？」

「はい。実は」

そうして、マリアさんの身の上話が始まりました。

四年前に旦那さんを亡くしたそうなのですが、その旦那さんがなんとA級冒険者だったそうです。十分すぎるほどの財産を残してくれたそうで、四年間働くことは無かったとのこと。

しかし、子どもを育てつつ家に引きこもっていると、人間関係が希薄になり、時おり寂しく思うことがあったそうです。

そこで、マリアさんはどこかで働くことを考えたそうです。それも、子どもと一緒に。

子どもから目を離したくない為、子供だけを家に置いて働きには行けない。けれど子どもでも働けるような仕事はそう多くない。あっても、三人を同時に雇い入れてくれるような仕事はなかなか存在しません。

そんな中、私の出した求人情報を耳に入れ、興味を持ったそうです。簡単な仕事であれば子どもでも出来るだろう、と考えてのこと。

「しかし、常に三人一緒に働いてもらう、というのは難しいですね」

私は正直に、マリアさんの要望には応えられないことを告げますが、マリアさんは首を横に振ります。

「それについては、場合によっては気にしません。乙木様が、しっ

かり面倒を見て下さるのでしたら、うちの子だけの出勤もアリだと考えています。それに、託児所扱いするわけではありませんが、私が働いている間は子ども達をお店のどこかに置いて頂けるだけでも良いのです」

「ほづ、なるほど」

そうになると、シフト組みもなんとかかなりそうです。幸い、うちの店の二階には部屋の余裕があります。ひと部屋を、仮の託児スペースとして使う分には問題ありません。

「しかし、お子様からそれほどまでに離れられないというのは、何か理由がおりなのですか？」

「ええ。実は」

そう言って、マリアさんは双子の少年と少女、ティオ君とティアナさんの耳元の髪を掻き分けず。

そして耳を顕にします。

耳の先端が、人間ではありえない程度に尖っているのが見えました。

「うちの子は、ハーフエルフなのです」

02 ハーフエルフの双子

マリアさんの子ども、双子のテイオ君とティアナさんは、ハーフエルフと呼ばれる存在でした。

ハーフエルフとは、エルフと呼ばれる人種と一般的な人が交わり生まれた存在のことを指します。

この世界では、エルフとは人種の一つであるそうです。妖精を起源に持つ人種である、等という説もあるそうですが、真偽は定かではありません。

ただ、そう言われても不思議ではない特徴があります。

それは、エルフは皆総じて大変美しい顔立ちをしているという点です。

多くの人種にとって、エルフは極めて美しく整っているように見える顔立ちをしています。その関係で、古来はエルフを観賞用の奴隷として売買するような時代もあったのだとか。

さすがに現代のこの世界ではありえない事です。が、それでもエルフの容姿、そして血は特別なものとして認識されています。

そんな中、無防備にハーフエルフの子どもを放置するとどうなるでしょう。

卑しい大人に目を付けられる場合もあるでしょう。最悪、人攫い

などに狙われる可能性もあります。

つまり、エルフの血を引くティオ君とティアナさんは、普通の子どもよりもずっと危険に見舞われやすいのです。

実際、二人はエルフの血を引いているお陰か、儂げで大変美しい顔立ちをしています。

親であるマリアさんが心配をするのも頷けます。

「事情は理解できました」

私は頷き、そして決定を口にします。

「三人共、うちの従業員として雇いましょう。特に、ティオ君とティアナさんに関しては、護身用としてうちの店で開発した魔道具を貸し与えることをお約束します」

「っ！ ありがとうございます、乙木様！」

想像以上の待遇だったのでしよう。マリアさんは喜びと驚きに表情を染め、感謝の言葉を告げつつ頭を下げます。

優遇にはなりますが、こちらとしても悪い手段ではありません。マリアさんの元旦那さんはA級冒険者で、しかもエルフだったわけです。その人脈は相当なものだったと推測できます。となると、マリアさんと親しくしておけば、私もその人脈にあやかることが可能となるわけです。

情けは人の為ならず。まさに、こういう場面で使う言葉でしょう。

「本当に、心から感謝いたしますわ。乙木様のような心優しく、そ

れも力強い殿方の庇護を得られるとなれば、私も安心して子ども達を預けることが出来ます」

「はあ。そうですか。って、力強いですか？」

どうにも、私の外見からはかけ離れた評価が出た為、つい反応してしまいます。

「ええ。これでも私、元々はA級冒険者の妻ですもの。強い殿方を見分ける目には、自信がありますの」

言いながら、マリアさんがすり寄ってきます。

妙に色気のある仕草な上、距離も近いです。つい、そういう目線で意識してしまいます。

「うふふ。乙木様のような殿方であれば、旦那を亡くした私の寂しさを埋めてくれるのでしょうかね」

「は、はあ」

「これからも、宜しくおねがいますわ、乙木様。特に子ども達とは、それこそ親子のように仲良くして頂けると嬉しく思います」

「こ、これはどうも」

返答に困ります。

何のしがらみも無い身でしたら、この誘いに調子よく乗るのですが。さすがに子どもを育てるという責任まで負うことは出来ません。せめて今後予定している幾つかの事業が安定するまでは、マリアさんのアプローチには応えられません。

据え膳が目の前に迫ってくるのに、食うことができないとは。まさか、異世界に来てこんな贅沢な悩みを抱えることになるとは思ってもみませんでした。

「テイオ、ティアナ。二人はどうかしら？ 乙木様とは仲良くやっていけそう？」

「マリアさんが、直球で二人に質問します。」

「うん。私は乙木のおじさま、好きだよ」

「ティアナさんからは好印象を貰えているようです。」

「僕もだよ。おじさまみたいなのが、僕のパパだったらとっても良いなって思うもん」

「テイオ君にも好印象のようです。」

「というか、パパと言うのはやめてほしいですね。直球過ぎますし、正直言つて変な意味に聞こえてしまいます。」

「私はシュリ君のお蔭で性癖が広がりました。なので、テイオ君のような中性的な美少年ならぶつちやけかなりアリです。変な意味でパパになるのもやぶさかではありません。」

「とまあ、邪な感情に流されている場合ではありません。」

「これからも、従業員と雇い主として、仲良くしていきましょう皆さん」

「私は、しっかり線引きしつつ話をまとめます。」

「ええ。そして出来るなら、ただの従業員以上の交流を持ちたいと思いますわ」

そしてマリアさんは、遠慮なくアプローチを重ねてきます。

これが、肉食系というやつでしょうか。

体験してみると、嬉しくもあり、恐ろしくもありますね。

02 ハーフエルフの双子（後書き）

この話までで、連続投稿を終了します。

ストックが切れるまでは、連日投稿自体は続きます。

これからもどうぞ宜しくお願いします。

03 孤児院への寄付

従業員を増やしたことで、私の自由時間が増えると思っていました。

が、さほど増えることはありませんでした。

新しい従業員の皆さんに仕事を教えた後も、結局はマリアさんの約束でテイオ君とティアナさんの面倒を見なければならず、あまり店から離れる機会が増えなかったのです。

とはいえ、マリアさん一家は誰か一人が出勤するだけの日でも、ほぼ必ず三人揃って店に顔を出します。用事がある時は普通に外出出来るので、問題は無いといえは無いのですが。

ただ、マリアさんの勤務中にはテイオ君とティアナさんの二人に囲まれる羽目になります。

そして二人から、あらゆる手段でパパになってほしいと暗にアプローチされるのです。

正直、精神的プレッシャーが半端じゃありません。

親子揃って肉食系というのは、なんとも恐ろしい話です。

従業員についてはひとまず解決したので、余裕のある時間を使っ

て孤児院へと通いました。

最初の頃は子ども達と親しくなるために遊びを交えつつの交流。一人ひとりに私の顔を覚えてもらい、警戒心が無くなる程度には仲良くなります。

そして、教育用に購入した書籍を孤児院に寄付します。子ども達の将来のために活用して下さい、と言って渡せば、自然とイザベラさんが教育係を担ってくれます。子ども達も、信頼するイザベラ先生の話であれば真剣に聞いてくれるので効果的です。

そうして孤児たちに英才教育を施しつつも、私は既に二人ほどの人材を引き抜こうと画策しています。

一人は裁縫の得意な少女、ローサさん。そしてもう一人は子ども達のまとめ役であり、年長者でもあるジョアン君です。

二人に関しては、既に任せたい仕事や、特別に学んで欲しいことがあります。

なので、イザベラさんに話を通し、お願いしたいことがあるので二人と話をさせてほしい、と頼みました。

結果、私はローサさんとジョアン君の二人とじっくり話をする機会を貰いました。もちろん、イザベラさんという保護者も一緒に話を聞くことになっています。

ある日の午後、私は約束どおり孤児院のとある一室でローサさん、ジョアン君と向かい合います。傍らにはイザベラさん。

私のことを信頼してくれているとは思いますが、それでも子ども

だけを相手に妙な話をされるのは困るでしょう。だからこうして場を見守る立場で同席しているのでしょうか。

「さて。今回、ローサさんとジヨアン君をお呼びしたのは他でもありません。お二人に、私の店に関わるお仕事をお願いしたいのです」「仕事？」

ジヨアン君が首をかしげます。

「おっちゃんのお願いなら別にいいけど、でも俺もローサも子どもだよ？ まだ仕事なんて早いよ」

その通り。ジヨアン君でもこの世界の成人である十六歳まであと三年はあります。ローサさんは五年か、六年程度でしょうか。

しかし、問題ありません。別に、成人に任せるような仕事をお願いするわけではありませんから。

「もちろん、大人にお願いするような難しいお仕事を頼むわけじゃありません。お仕事というよりは、お手伝い。いえ、お勉強と言った方がいいかもしれません」

そう言うてから、私は順にお願いしたい仕事の内容について説明します。

04 ローサとジョアンのお手伝い

「まず、ローサさん。貴女は裁縫が得意ですね？」
「えっと、はい」

おとなしい子なので、ローサさんは小さな声で答えます。

「その技術を、もっと磨いて欲しいのです。私が、ローサさんの為に裁縫のことが分かる本や、色々な服をプレゼントします。これを使って、ローサさんにはいろんな服を作れるようになって欲しいのです」

「え、えっと。はい」

私のお願いの意味は分かっているのでしょうか、ローサさんは頷きます。恐らく、それほど難しいことではないと考えたのでしょう。

しかし、これは重要なことです。将来的に、ローサさんには服飾関係の仕事を取りまとめる幹部として働いてほしいと思っています。そうになると、早いうちから様々な服に関する知識に触れていた方が遥かに有利でしょう。

なので、私はローサさんに教材として本や服をプレゼントします。もちろん、勉強するだけでは仕事という建前を満たせません。なので、建前としての仕事の内容についても説明します。

「そして、ローサさんは新しく学んだ知識を元に、いろんな服やズボン、とにかく布で作れる衣服類を作って欲しいのです。その全てを、私が買い取り、商品にします」

「あ、あの。今つくってる、ローブはどうしたら、いいんですか？」

ローサさんが、ローブ作りのお仕事の方を気にしたようです。それについても考えてあります。

「ローブを作っているのは、ローサさんだけじゃありませんよね？」

「ローブ作りは他の子に任せちゃって下さい」

「でも、それだと大変になります。みんな、裁縫はそんなに得意じゃないので」

「なら、ローサさんが上手な作り方を詳しく教えて上げて下さい。

本や服を見て学んだ知識も、他の子に教えてあげてもいいですよ。

それに、ローブを作るのはノルマではありません。作りたいように、楽なペースで仕上げてくれたら良いのです」

「わ、わかりました。乙木のおじちゃんの言う通りにしてみます！」

覚悟を決めたように、拳をぐっと握ってローサさんが返事をします。同時に、私はイザベラさんの方へ視線を向けます。

どうやらこのやり取りには問題が無かったらしく、ニコニコと笑顔を浮かべたままです。

さて。次はジョアン君と交渉しましょう。

「では次に、ジョアン君。君には、商品の配送を手伝ってほしいのです」

「えっと、どういうこと？」

「私の店では、今後多種多様なものを販売する予定です。そのために、あちこちから商品となるものを取り寄せます。この時、たくさ

んの店に顔を出して仕入れをしなければなりません。が、とても手間がかかります。なので、この部分の仕事を手伝ってもらいたいです」

「えーっと、おつかいをしてほしいってこと？」

「そうです。そんな感じですよ」

「じゃあ、任せてよ！」

ジョアン君はトン、と胸を叩いて引き受けてくれます。

「ちょっと待ってください」

ですが、ここでイザベラさんが口を挟みます。

「その仕事は、子供だけに任せるのは危険ではありませんか？ 時刻に関わらず、子供だけにお金をもたせて街を歩かせるのは同意できません」

尤もな意見です。イザベラさんが心配するのも当然でしょう。が、当然その点については考えがあります。

「大丈夫ですよ。お金をもたせる予定はありません」

「へ？」

「お金は、私が先にお店の方へ払っておきます。ジョアン君には、お店を回って品物だけを集めてもらいたいです」

これは当然、ジョアン君の身を守る意味もありますが、一括で契約することで仕入れ値を安くしたり、金銭を末端で扱うことで損益が不透明になることを防いだりする意味もあります。

「で、ですがそれでも、子供の一人歩きは危険です！」

「同意します。ですので、ジヨアン君には身を守るための魔道具をお渡ししようと思います」

私はそう言って、いくつかの魔道具をアイテム収納袋から取り出します。

05 防犯魔道具セット

「まずは、このローブです。皆さんに作ってもらったローブですが、実は私の店では付与魔法を施して魔道具として売っているのです」「そうだったのですか？」

イザベラさんは興味深そうにローブを眺めます。何も変わった所が無いのを確認すると、再び口を開きます。

「このローブは、どのような魔道具なのですか？」
「単純に、鎧よりもずっと頑丈なだけです。剣を突き立てても破れませんよ」

「まあ、そんな素晴らしい魔道具をお作りに？ ダンジョンから発掘される魔道具並みの性能ではありませんか！」

私の説明に驚き、イザベラさんは再びローブを観察いたします。
「が、まだ他にも魔道具は用意してあります。」

「そして次にこの飴です」

私は一つの袋の口を開き、中から球状の飴を取り出します。

「これは防犯キャンディーと名付けたお菓子の魔道具です」

「お、お菓子を魔道具に？」

「はい。舐めている分には普通の飴です。しかし噛むと」

言って、私は飴を口に放り込み、噛みつきます。
すると飴は砕けること無く、女性の悲鳴のような甲高い音を力強く発生させます。

皆さんが突然の騒音に耳を塞ぎます。さすがに鳴らし続けるのは酷でしょう。私は飴玉を噛むのを止めます。

「このように、大きな音を鳴らします。仕事中、これを舐めていればいざという時に大きな音で相手を怯ませることが出来ますし、周囲の人間に何かが起こったのだと気づいてもらえます」
「な、なるほど」

イザベラさんは飴の入った袋を、苦々しい表情で見つめます。どうやら相当不快な音だったようです。

ちなみに付与したスキルは『衝撃吸収』と『悲鳴』です。
衝撃吸収はローブにも付与してあるスキルです。悲鳴は、とある鉱物の性質がスキル化したものです。圧力をかけると、悲鳴のような音が鳴るだけのスキルです。

この圧力を飴に耐えて貰うため、衝撃吸収のスキルを付与しています。ちゃんと舐めると溶けるので、食べ物としての機能も失ってはいません。

ちなみに、悲鳴スキルは私の不眠症や速読等のスキルと似たような存在だったりします。そもそも、この世界には特殊な性質がスキル化する、という現象は極稀に確認されていることでもあります。

悲鳴のスキルに関しては自然にスキル化したわけではなさそうですが。恐らく、女神様がスキルを生み出す練習として作ったタイプ

の廃棄スキルでしょう。

でなければ、鉱物としてありふれて存在するはずの性質がスキル化するのとは不自然ですからね。

さて、私が今日持ってきた防犯魔道具はもう一つあります。

「最後に、こちらの魔石です」

私は、一つの魔石を取り出します。

「これは防護魔石と名付けました。身体の表面に身を守る結界を張る魔法を、魔石に付与してあります。いざという時、手に握って魔力を流して下さい。すると、魔石に蓄えられた魔力を消費して結界魔法が発動します。魔力が空になっても、日光に当てていれば魔力が自然回復しますので、危ないと思っただときは遠慮なく使ってもらって大丈夫ですよ」

私の言葉に、イザベラさんは目をぱちくりと見開いて驚きます。

「ま、魔法を付与した魔道具ですか。高価だったのではありませんか？」

「大丈夫です。自作ですので、大したお金は掛かっていませんよ。まあ、商品として売る時はそれなりの金額を設定するつもりですが」

そう言いながら、私はジョアン君に防護魔石を握らせませす。

「ではジョアン君。試しに防護魔石を使ってみて下さい」

「は、はい！」

ジョアン君は私に言われた通り、魔石を握って魔力を込めます。

すると、ジヨアン君の身体を青白い光が包みます。この光こそが結界魔法です。普通の魔道具なら魔石の魔力を移さなければ再使用は出来ませんが、この魔道具は蓄光も付与してあるので、単独で繰り返し使うことが出来ます。

ちなみに。付与魔法は、一般的には属性とスキルしか付与できないということになっています。ですが、属性とは魔法陣無しで魔法が使えるスキルのようなもの。そこから考えると、普通の魔法も付与することは可能なように思えます。

実際、理屈としては可能です。しかし、その難易度は属性を付与するよりも遥かに高く、現実として魔法を付与することの可能な人間はごく一部の天才だけです。なので、一般には付与できないものとして扱われています。

しかし今回、この防護魔石には支援魔法の一種である結界魔法が付与されています。私が描いた魔法陣をシュリ君に確認してもらい、半分を修正、もう半分を完全に書き直してもらうことで完成した一品です。

要するに、ほぼシュリ君の力で完成したと言ってもいい魔道具です。

ちなみに、魔法陣にも著作権のようなものがあり、独自性の高い魔法陣は勝手に真似すると犯罪になってしまいます。が、今回の場合は私が元の魔法陣を作ったので、問題の無い形で使用することが出来ます。著作権と言うなら、シュリ君との共著というわけです。

一応、私が書いた部分も二割ぐらいは残っているので、共著という建前はなんとか満たしています。

「すごいよおっちゃん！ これ、魔法なんだよね？」

「はい、そうですよ」

「俺、はじめて魔法使ったよ！」

ジオアン君は防護魔石の魔法が気に入ったのか、満面の笑みを浮かべてそう言います。これから毎日のように使うのですから、気に入って頂けて何よりです。

さて、肝心のイザベラさんの反応はどうでしょうか。

「どうでしょう、イザベラさん。これだけの魔道具があれば、子どもだけでも安全に仕事が出来ると思いませんか？」

「そうですね。これだけの魔道具をもたせて頂けるのであれば、問題は無いかと思えます」

どうやら納得いただけたようです。これでイザベラさんにも認めて貰った上で、ジオアン君を教育できます。

プランとしては、まずは配送の仕事自体に慣れてもらいます。そして、仕事が増えてきたところで護身用の魔道具を増やし、ジオアン君以外の子ども達にも手伝ってもらいます。その時には、ジオアン君に指導役となってもらいましょう。

そうしてシンプルな仕事からまとめ役としてのノウハウを積んでもらい、将来的にはたくさんの人を動かせる現場指揮者になってもらいましょう。

少し気の長い話ですが、仕事の規模が大きくなるのも時間がかかります。じっくりと取り掛かっていきましょう。

06 新商品の数々

ジョアン君に配送の仕事を頼んだこともあり、新たな魔道具、つまり商品の開発は一層捗ることとなりました。

護身用に作った魔道具は既に商品として完成しているので、そのまま店頭に並べるつもりです。

護身用のローブに関しては、既に宣伝効果のお蔭で買う人が現れています。ボロ布のローブで作った分に関しては、全て試作品だから、ということでも複数の冒険者さんにタダで手渡しました。感想が知りたい、という建前を利用した口コミ狙いの宣伝です。

その甲斐もあって、今はローブが品薄の状態が続いています。

元々、品物の数は多くありません。しかし、一つ一つをかなり高額に設定してあります。C級以上の裕福な冒険者でないと手が出ない価格設定です。

それでも、買う人は続出します。強固な鎧より頑丈。身を守りつつ、ローブとしての役割もちゃんと果たす。量産品としては破格の性能です。

ダンジョンや遺跡から産出する魔道具の中には、このローブさえ凌ぐ性能の鎧があったりします。が、一般の冒険者が手に入れられるようなものではありません。国宝になったり、A級以上の冒険者の手に渡ったりします。

しかしこのロープは量産品。国宝になる心配や、格上の冒険者にかすめ取られるリスクはありません。お金のある冒険者さんは、こぞってこのロープを買おうとします。

若い冒険者さんの中にも、将来的にダンジョンや遺跡産の魔道具ではなく、このロープを入手することを目標としている者も現れ始めています。

防犯キャンディーについては、ついでに置いてあるだけなのであまり売れ行きは良くありません。特に宣伝もしていません。

が、時おり冒険者さんではなく一般のお客さんが買いにくることもあります。孤児院だけではなく、マリアさんにも支給している商品なので、奥様方の中で少し話題になっているようです。

むしろ、どちらかと言えば奥様方からの要望をマリアさんの伝手で聞き及んだからこそ、商品として置いている節があります。

比較的暇な時間帯、ピークを過ぎたぐらいの時間に子持ちの親が来店することが増えました。お蔭で客層に広がりが出ました。

予期せぬ影響ですが、良い兆候です。売れる商品の幅が広がり、利益も増えるでしょうからね。

そして防護魔石ですが、これは冒険者さんと一般の方のどちらにも売れています。ただ、うちの店ではロープに次ぐ高級商品なので、数はそれほど売れていません。

裕福な家庭が子どものに買う場合や、C級ほどの冒険者さんがいざという時の保険に買うことが多いです。

シュリ君が本気を出したら、こういった魔法を付与した道具をいくらでも作れるでしょう。宮廷魔術師とは恐ろしいものです。

まあ、そういった力を王家が独占するための肩書きが宮廷魔術師ですからね。

この魔道具に関しては、私が抜け穴のようなやり方でシュリ君の能力を活用させてもらっているだけです。実際には、こんな優れた魔道具が世間に出回ることは無いでしょう。

さて、防犯用に開発した魔道具の他にも、いくつか新商品が既に店に並んでいます。

一つは、冒険者さん向けの携行食料です。

食料自体は、他の店でも売っているものです。が、うちの店では治癒魔法の一種である浄化の魔法を使い、殺菌処理を施しているのが普通の携行食料よりも長持ちします。

また、付与魔法で『甘露』というスキルを付与しているので、美味しく食べることが出来ます。

スキル『甘露』とは甘い蜜を出して獲物を捕まえる魔物が持つスキルで、僅かな魔力と引き換えに甘みを感じる汁を出す効果があります。

このお蔭で、食べる人の身体から自然に発せられている魔力から僅かな汁を分泌し、甘みを加えます。

実はこの商品。私が冒険者としてまともに活動していた頃、試しにと作ったものを商品にしたのです。

ほどよい甘みと練って作った栄養食のコラボ。お蔭で携行食料というよりきなこ棒のような味わいになり、癖になる美味しさがありました。

商品名は『甘露餅』に決めました。

携行食料の他にも、サンドイッチやホットドックに似た屋台料理も商品として提供しています。

こうした食べ物は、冒険者さんが朝食や昼食としてよく利用するものです。というのも、ときには一日中冒険者としての活動に勤むこともあるため、ゆっくりと食事が出来ないからです。

私もよく、サンドイッチを片手に薬草を集めていました。

ただ、屋台の多くは早朝から営業はしていません。一方で、冒険者さんは時には朝早くから仕事に出ることもあります。

その為、忙しい朝は仕方なく朝食を抜く冒険者さんもいました。

そこで私の店で、早朝から屋台で出されているような食品も取り扱うことにしました。

日も昇らぬ時間に深夜勤務の担当が調理し、店頭に並べます。そうすることで、早朝から冒険者さんに食料を提供することができるわけです。

労力の割に利益は薄いですが、お蔭で多くの冒険者さんが定期的にこの店へ顔をだす理由が出来ました。

また、他の店にはない便利さを経験した冒険者さんが、私の店を特別に便利な店として認識してくれるようにもなりました。

ようするに、私の店の評判を高める為の一手というわけです。

現状は、深夜勤務は寝ずの労働が可能な私だけでこなしています。なので仕事自体も苦ではありません。

ラインナップはサンドイッチと数種類の揚げ物。仕入れも加工も簡単なため、この二つを選びました。朝早くにパンを切って食材を挟む。あるいは鶏肉や芋を揚げる。それだけの簡単な作業です。将来的には、深夜を誰かに任せることになっても問題無いでしょう。

そして、こうした食品と同時に、食品を保存する為の容器も販売することにしました。革袋タイプと木箱タイプの二種類です。

どちらも付与したスキルは同じ。それは『恒温』と『保湿』と『清浄化』の三つです。

恒温スキルは雪原に生息する一部の魔物が持つスキル。温度を一定に保ちます。これのお蔭で、温かいものは暖かく、冷たいものは冷たいままで保管できます。

元は体温を保持するスキルです。温度保持の効果が魔法瓶のような性能を発揮するわけです。

保湿スキルは砂漠の魔物が持つスキル。皮膚の水分が失われるのを防ぐスキルです。これを袋や木箱に付与すると、内側の湿気が外に逃げにくくなります。

お蔭で、保管している食品がパサパサになるのを防げます。

そして最後に清浄化のスキル。これは聖なる泉や森などに生息する精霊の持つスキルで、周辺環境を清浄に保ちます。水や空気を清らかにするので、内部の食品の腐敗をかなり遅らせることが出来ます。

これらのスキルを付与したお蔭で、食品保存の可能な時間が、従来よりも百倍近く伸びました。これは、同じサンドイッチを食品保存箱とそうでない箱に入れ、経過を見ることで確認しています。

最初は宣伝もしていないのにあまり売れませんでした。が、じわじわと実用的であることが口コミで広がっています。

最近は袋の方を冒険者さんが買っていきます。それに、一般のお客様さんも箱の方を買いに来ます。うちの店には主婦の方がよく来店するので、ちょうどニーズにもマッチしています。いずれ、この商品も流行するのではないかと踏んでいます。

お値段は、お求めやすくしています。家庭でも使われるような一般の魔道具と同等の価格です。こうした生活実用品を高額すぎる設定にするのはあまり良くありませんからね。

また、競合する商品も存在しません。

もしかしたら、蓄光魔石よりも人気の商品となるかもしれませんね。

07 店舗改築

食品保存の袋と箱を作ったことで、いよいよ私は店内にある設備を導入することを決定しました。

それは冷蔵庫。そして、ウォーマーです。

飲食物を取り扱うことにより、食べ物を目的に来店するお客さんが増えました。

となると、飲み物も欲しくなるのが人の常。

そこでもしも、この店でキンキンに冷えたジュースやお酒、温かいコーヒー等を販売したらどうなるでしょう？

きっと、大勢の人が有り難がるに違いありません。現代日本のコンビニ同様に、食品と合わせて飲み物を買っていくお客さんが増えるでしょう。

しかし、実際に販売する上で問題があります。

それは、ドリンクをどのような容器に入れて販売するか、という問題です。この世界にはペットボトルなど存在しません。ガラス瓶や陶器の瓶があります。が、私個人が量産するには少し高価すぎます。

ドリンク販売の利益、旨味が薄くなってしまうです。

しかし、この点は後々解決する予定です。

まずは瓶入りのお酒を販売して様子を見ましょう。お酒なら瓶を使っても、単価が高いので十分な利益を得られるはずですよ。

なので、まずは冷蔵庫から作ってしましましょう。ウォーマーに関しては、後々作るつもりですよ。

「というわけで、作業を手伝ってほしいのですが」

私は冷蔵庫導入の説明を、今日は非番であるはずの有咲さんに行きました。本来なら休日のはずですが、人手が足りません。また、冷蔵庫という存在を詳しく説明する必要が無いのは有咲さんだけです。手伝いをお願いする上で、一番楽な相手ですよ。

「まあいいよ。っていうか、休日つつつても暇だし。おっさんに言われた通り、数学の問題解く以外やることないしな」

有咲さんはそう言って、快く引き受けてくれました。

ちなみに、数学の問題とは私が課した宿題のようなものです。カルクキュレーターを成長させるための経験値として導入しました。自分のスキルが強くなると知ったからか、有咲さんは意欲的に取り組んでくれています。

まあ、この話は今は関係ありませんね。まずは冷蔵庫ですよ。

冷蔵庫を作るに当たって、まず必要なのはスペースですよ。

コンビニで使われているような大きな冷蔵施設は、後ろから商品を補充するような仕組みになっています。また、在庫も保管できるような空間に余裕をもたせている為、正面からの見た目以上のスペースを取ります。

そこで、今回は店舗の片隅を板で仕切り、工事中の札を掲げることになりました。その内側のほぼすべてを、冷蔵庫として利用する予定です。

ちなみに店舗はそれなりの広さがあるため、通常の商品を置くスペースにはまだ余裕があります。そもそも、商品がまだ少ないので全然余裕です。商品棚すら無く、机の上に籠を置いて、その中に商品を入れて分別してある状態です。

将来的には商品の種類は今より遥かに増えるでしょう。そうなれば、コンビニのように商品棚へ効率的かつ機能的に陳列する予定です。

ともかく、スペースについては問題ありません。空間を確保し、その内側で細かい作業をします。

「有咲さんには、これを取り付ける作業を行ってもらいます」

言って、私は無数の鉄板を指差します。

「これは？」

「はい。冷却板です。シュリ君の伝手で属性付与の技術を持つ鍛冶屋に依頼して作りました。弱い氷属性を付与してあるので、魔力を流すと周囲が冷えます」

ちなみに、この冷却板だけで我が店が今まで上げてきた利益の三

分の二が吹き飛びました。

「取り付けるったって、どうやってやるんだよ」

「はい、これを使って下さい」

私は、瓶に入った透明な液体と、その液体を板に塗る為の刷毛を取り出します。

「なあ、おっさん」

「なんでしよう」

「嫌な予感がするんだけど、この液体って何なんだ？」

「粘着液です。塗って乾くと、かなり頑丈に取り付けが可能です」

「やっぱテメーの唾液じゃねーか！」

有咲さんがキレました。まあ、予想はしていましたが。一応この粘着液はスキルで出したものなので唾液ではありません。が、私の口から出た以上は有咲さんにとって同じことなのでしょう。

「安心して下さい。手で触らなくてもいいように、刷毛を用意しましたから」

「そういう問題じゃねえから。ぶっ殺すぞ」

「さすがに殺されるのは少々困るので遠慮願えませんか？」

「やだよ。絶対殺す」

かなり高い殺意を抱かれたようですね。

その後、しばらく有咲さんを説得することによってどこにか粘着液の使用を承諾してくれました。セクハラだ何だと文句を言われましたが、仕方ありません。この粘着液が無料かつ極めて優秀なので、どれだけ嫌われても使わざるを得ません。将来的には、量産することさえ

考えているほどです。

もしも粘着液を量産したあかつきには、有咲さんには相当嫌われることになるでしょうね。

08 冷蔵庫、完成

有咲さんに冷却板の取り付けをお願いしたあと、私は店の屋根に登りました。これは、冷却板の動力源となるものを取り付けるためです。

私は、事前に加工を済ませたとある板をアイテム収納袋から取り出します。

片面に、魔石の粉末が塗布された金属板です。

魔石の粉は、蓄光魔石を粉末にしたものです。粉末にしても蓄光スキルは有効です。

蓄光は光に当たる面積が重要なので、体積が多くても無駄になるばかりです。そこで魔石を有効活用する為、粉末にして金属板の表面に接着しました。

接着に使ったのはもちろん粘着液のスキルです。塗布した粘着液の上に蓄光魔石の粉末を吹きかけました。

そしてこの金属板。これは導魔鋼と呼ばれる合金です。冒険者ギルドが、魔石の魔力を移動させる為に使っている金属でもあります。本来なら入手は難しいのですが、私の専属受付嬢であるシャーリーさんの計らいで入手することが出来ました。

ちなみにちゃんとお金と引き換えです。店の利益の三分の一近い額が吹き飛びました。つまり、冷却板と合わせてほぼ全てが吹き飛

んだことになります。

導魔鋼の性質は単純。至近距離にある魔力の高い場所から魔力を吸い上げ、魔力の少ない方向へと流し込み、平均化させる性質があります。

空気中にも魔力を流し込んでしまうので、魔力を流したくない部位には絶縁体のような性質のある塗料を塗ります。そうすることで狙った場所から魔力を吸い、流し込むことが可能になります。

つまり、魔力を電力のように扱える金属なのです。

さらに、魔力を流し込む先には魔石と複数の鉍石を混合して作った特殊なフィルターを用います。

このフィルターは、魔力を一方通行させる性質を持っています。なので、導魔鋼から流れてきた魔力をそのまま魔石に流し込んでしまいます。フィルター自体は魔力をほぼ持たない状態ですので、導魔鋼の性質により、魔力がずっと流れ込み続けます。

これのお蔭で導魔鋼は魔石が空になるまで魔力を吸い出すことが可能になります。

ちなみに導魔鋼とこのフィルターのセット。魔力の濃いダンジョンなどを利用し、無限に魔力を集める施設を作れないか、と研究されたことがあるそうです。

しかし、そう上手くはいかないのが現実でした。フィルターは魔力の濃い場所では、それ以上に濃い魔力でないと通過させることが出来ないのです。

そのため、ダンジョン内では魔石から魔力を取ることすらできなくなるという、真逆の結果となったそうです。

無限のエネルギーへの渴望は、どの世界にも存在するものなのでしょう。導魔鋼に限らず、あらゆる手段がかって試されたそうですが、上手く行ったことはありません。

それを考えると、蓄光魔石は正に革命的な存在ですね。

さて、導魔鋼の歴史はともかく。今回は導魔鋼に蓄光魔石の粉末を塗ったため、太陽光から作られた魔力が無尽蔵のエネルギーとなります。これを、店の屋根全体に取り付けます。

なお、雨風を凌ぐため、蓄光粉末の表面にはもう一度粘着液を塗ってあります。無色透明のコーティングなので、蓄光スキルへの影響はほぼありません。

そうして天井に導魔鋼の板を設置している姿は、多くの人の目に留まりました。洞窟ドワーフが屋根の上で変なことをしている、と噂になりました。

こうなると、冷蔵庫が完成した時の話題性も抜群でしょう。あの変な作業がこのためだったのか！ というような驚きとなり、話をより広めてくれるに違いありません。

全ての導魔鋼の板を設置したら、今度は導魔鋼の針金を繋げ、店の裏手に作る予定の魔力蓄積施設へと伸ばします。その後、絶縁塗料を表面に塗り、さらに上から粘着液でコーティングして完成です。

こうして、蓄光システムは完成しました。次は、溜めた魔力を任意の量だけ各所へ配分する施設を作らねばなりません。

冷蔵庫を動かすだけなら単純です。しかし、将来的には他の事にも魔力を使いたいと考えています。ですので、今の段階で汎用性の

高い設計をした方が後々で楽になります。

幸いにも、私は大学時代は工学系の学部に通っていました。また、導魔鋼で扱う魔力は、電流を扱うのに酷似しています。お蔭で、システム部分を作るのは簡単でした。

大雑把に説明すると、魔力絶縁体と導魔鋼をスライドさせることで、魔力の供給をスイッチ式にしました。流れる魔力量は、魔力抵抗性のある物質を間に挟むことで調整。そうした回路を複数作り、複数箇所で魔力を利用できるようにします。

言うなれば、コンセントとブレーカーを作ったような感じですよ。

こうして魔力供給システムは完成しました。後は配線を伸ばし、冷蔵庫につなげるだけです。

導魔鋼の板の設置、そして魔力蓄積と供給施設の建築で合わせて二日の時間が経ちました。十分な時間もあつたお蔭で、既に冷却板は有咲さんの手で設置済みです。

後は、恒温と保湿のスキルを壁面に付与。仕切りを設置し、店内側はガラス戸を使うことで商品を取り出せるようにします。当然、ガラス戸と仕切りにもスキル付与を施します。ガラス戸は簡単には壊れないように、形状記憶と衝撃吸収も付与しておきました。

そして配線を伸ばし、冷蔵庫内に繋がります。冷却板の効果をダイヤル式の仕組みで調整できるように操作盤を作り、完成です。

ガラス戸や仕切りの設置で一日。操作盤作りでさらに一日。通算四日の作業となりました。

後は商品棚と品物を中に運び込むことで、実際に販売も開始できるでしょう。

「すっげえ！ めっちゃ寒い！」

ちょうど配送で店を訪れていたジョアン君に冷蔵庫内に入ってもらいました。室内温度はおよそ二度ほどに設定しています。

冷却板は霜がつきやすいので定期的に掃除をしなければなりません。十分に冷蔵庫として機能しています。外に冷気も漏れ出ていません。

十分に実用可能なものが仕上がりました。満足のいく結果です。

「異世界まで来て、冷蔵庫なんか作るとか想像もしてなかったな」

有咲さんが、感慨深そうに言います。しっかり冷却された空間は、冷蔵庫というよりは冷房の効いた個室といった印象です。商品棚もまだ設置していないのでなおさらでしょう。

その後、販売開始した各種お酒は人気商品となりました。冷却された方が美味しいお酒を、冒険者さんがこぞって求めたからです。

一日のご褒美として冷えたお酒を買い、仲間と宴を交わす。そんな習慣が、王都の冒険者の中で徐々に出来ていく事となりました。

同種の常温のお酒よりもずっと高い値段をつけているのに、毎日

のように売れていきます。冷えたお酒というのは、それほどまでに魅力的なのでしょうね。

09 勇者来店

冷蔵庫を設置したことで売上がさらに伸び、雇い入れる従業員も増やしました。

お店は順調に利益を上げ続け、かつ冒険者さん以外の間でも話題になり始めました。

冷えたお酒は、冒険者以外の人々も魅了したわけです。一般の労働者もまた、仕事のあとはお酒を飲みたがります。

お蔭でお店は大繁盛。そう遠くない内に、冷蔵庫の為に支払った金額以上を取り返してくれることでしょう。

そんなある日のことです。日中の、ピークを過ぎて比較的店内が暇な時間帯。そこへ、思わぬ来客がありました。

「うわ、マジで冷蔵した酒が売ってる！ コンビニみてーだな！」

店内に入り、冷蔵庫を確認するなりそんな声を上げる少年が一人。そして、付き添いらしい少年が二人と少女が一人。

「ちょっと東堂くん。あんまり騒ぐと、他のお客さんに迷惑だよ」

少女がたしなめ、他二人の少年も頷いて同意します。

「でもさ、興奮するだろ？ 異世界に来てまで、日本っていうか現代っていうか、そんな感じのモノがあるとかさ。何ていうか、癒やされる？ みたいな？」

「だからって騒いでいいわけじゃないぞ、陽太」

「全くだ。僕が同類だと思われると恥ずかしいから、少し距離を取らせてもらおうよ」

「ちよっ、勇樹てめえ！」

楽しそうに会話をする少年たち。その傍らで微笑む少女。

私はこの四人のことを知っています。ちゃんと覚えています。

この世界に召喚された、六ツ賀谷高校の生徒たち。その中でも勇者称号と呼ばれる特別なスキルを手にした、四人の勇者。

騒いでいたのが『剣聖』の東堂陽太君。それを嗜めた少女が『聖女』の三森沙織さん。同様に嗜めた少年が『勇者』の金浜蛍一君。そして東堂君を批判した少年が『賢者』の松里家勇樹君です。

いずれ勇者の誰かが私の店の噂を聞けば、興味本位で来店するところがあるだろう、と考えていました。

が、想像よりかなり早いです。しかも、勇者称号の四人が来ました。召喚された子達を中心人物です。

好都合すぎる誤算です。四人と対話する準備が何も出来ていないのが良くありませんが。まあ、その辺りは今日のところは親交を深めるだけにしましょう。より深く勇者の皆さんと関わるのは、また後日ということまで。

「いらっしゃいませ、勇者の皆さん」

私はさっそく、四人に話しかけます。

「あれ？ どうして俺たちが勇者だってわかったんですか？」

「っていうか、このおっさん見たことあるぞ。王宮から追放されたおっさんじゃん！」

金浜君、そして東堂君が反応します。どうやら、私が追放された人間であることをご存知のようです。説明をする手間が省けて助かります。

「ご存知でしたか。確かに私は、幸いにも王宮から追放された召喚者。名を、乙木雄一と申します」

「ふふつ。幸い、ですか」

私の言葉に、松里家君が反応しました。

「羨ましい限りです。僕も戦争に加担し、良いように利用される身分を捨てられるなら、追放なり何なりしてほしいぐらいですよ」

「おい勇樹。そういう言い方は無いだろ？」

今度は松里家君の言葉に金浜君が反応します。

「言い方も何もないだろう。僕は以前から、国に利用されているだけだと説明してきたはずだぞ」

「だったら俺だって散々説明しただろ？ この国の人だって困ってるから勇者召喚なんてことをしたんだ。人助けだと思って、そこは受け入れてくれよ」

「ふん。本当に人助けなら良いけどな」

「疑いすぎだって、勇樹は」

二人は急に言い合いを始めます。が、お陰でそれぞれの考えと立場が理解できました。

やはり、私の見立て通りのようです。金浜君は善意からこの国に協力するつもり。そして松里家君は、自分たちが戦争の道具として利用されることを理解し、可能なら拒否したいと思っている。

深く関わるべき相手が決まりました。

今後は、松里家君との関係を重要視していきましょう。

10 勇者たちの求める物

「あまり暗い話をするのは控えましょう。せつかく同郷の人間が再会できたのですから。それよりもどうでしょう？ 当店自慢の、付与魔法を施したローブなんかは」

私は話題を切り替える為にも、商品の宣伝という形で会話に割り込みます。

「このローブは形状記憶、衝撃吸収のスキルを付与してあります。ですので、生半可な鎧より遥かに丈夫にできています。いかがでしょう？ 特に松里家君や三森さんのような後衛、身の守りと身軽さを両立したい方にはおすすりめですよ」

「そうなんですか？」

三森さんが不思議そうに言いながら、店に陳列してあるローブを物色します。が、どれも冒険者向けの実用品。見た目があまりお気に召さなかったのか、すぐに離れます。

松里家君は興味を持ったようです。が、すぐにはローブを物色しません。何度か視線を送るだけで済ませたようです。

「俺と蛭一は、国から貰った鎧があるから要らねえかな。羽根みたいに軽くて、魔法を反射してくれるんだぜ！」

東堂君が言って、自分と金浜君が今も身に着けている鎧を指差し

ます。魔法の反射までは私の技術では不可能なので、確かに鎧の方が装備としては上位互換でしょう。冒険者のように機能性を求めなければ、ローブなど使う理由もありませんし。

一方で、魔法を扱うならローブを着ることが多いです。多様な魔法を補助する魔道具を同時に持ち運ぶ必要があります。なので、ポケット等の機能性が高い羽織ものを羽織ることは多いのです。

しかもこのローブは防衛性能も両立しています。

「僕や三森さんが国から支給されたローブは、魔法の効果を補助、強化するものですね。なので、乙木さんの作ったローブを上から羽織るのは有効そうですね。」

「上から？ 下じゃダメ？」

三森さんが不満そうに訊き返します。

「当たり前だろう。頑丈なローブで魔法補助のローブを守ってこそ意味がある。下に着ても、守れるのは自分の身だけだ。魔法補助のローブが破壊されたら、攻撃力が落ちる」

「そっか。なるほどね。見た目が可愛くなかったから、ちょっと遠慮しようかなって思ってた」

松里家君の正論に、三森さんも納得した様子。

「でも、松里家くんが言うなら、買った方がいいかも」

「ああ。是非とも買ってくれ」

「じゃあ、乙木さん。このローブを、二枚貰えますか？」

言って、三森さんがお金を取り出します。どうやら、四人の金銭管理を三森さんが代表して行っているようです。冒険者でいうとこ

るの、パーティーを組んでいるような状態なのでしょう。

「有難うございます」

早速商品の購入という形で、勇者称号の四人との関わりが持てました。特に、松里家君に好印象である様子なのは幸先が良いです。

「他になんか、面白いものって無いのか？」

買いたいものが見当たらずに退屈なのか、東堂君が不満げに言いました。

「そうですね。勇者の皆さんは王宮から様々な装備を支給されているでしょうから。私の魔道具店で取り扱う商品では、ご満足頂けないかも知れません」

「そっか。まあ、しゃあねえよな。俺ら国宝とかフツーに使わせて貰ったりしてんだもん。おっさんの店が敵うわけねえよ」

「ですが、物によってはお気に召して頂けるかもしれせんよ」

そう言って、私は携行食料の『甘露餅』を詰めた袋を一つ手にします。

「こちらは、一般的な冒険者向けの携行食料を美味しく改良したものです。実は、ちょうど日本でいうきなこ棒のような味わいの商品になっております」

「きなこ棒？ 私、実はそういう駄菓子ってけっこう好きなんです！」

私の話に食いついてきたのは、まさかの三森さんでした。懐かしさをウリにこの商品売ろうと思っていたのですが。ちょうど個人

の嗜好にぴったり合致したようです。

「どうぞでしょう。お一つ、食べてみますか？」

言って、私は袋の口を開いて中身を見せます。これで、この商品はもう売り物になりません。あとでちゃんと、私個人の財布から支払いをしなければ。

ともかく、甘露餅の見た目はまるで丸薬です。元々が単なる量産品の携行食料ですから、見た目までは私が拘ることの出来ない部分です。

「じゃあ、一つだけ！」

三森さんはすぐさま甘露餅に手を伸ばします。そして口に含み、咀嚼。

「ほんと！ これ、きなこ棒みたいですね！」

驚きを顔に浮かべつつも、味に満足しているのか頬が緩んでいきます。

その反応を見て、他の三人も甘露餅に興味を示しました。各人に一つずつ、甘露餅を渡します。

「これ、懐かしい味ですね。子供の頃、俺も食べたことがありますよ」「マジで日本って感じだな。異世界で日本を感じるってのも変だけどさ。ちよつと嬉しいわ。おっさん、ありがとな！」

「ふむ。機能的かつ美味しいというのは良いですね。戦争に駆り出される時には、こういったものを自分で用意した方がいいのかもしれません」

三人それぞれに、好意的な反応を貰えました。
が、結局この甘露餅を購入してくれたのは三森さんだけでした。

「これからも、この駄菓子を買いに来ると思います。よろしくおね
がいたします、乙木さん」

満足気に、三森さんは笑顔を浮かべます。何はともあれ、気に入
って頂けたようで何よりです。

11 常連客

勇者称号の四人が来店してから、話が広まったのか。他の召喚された六ツ賀谷高校の生徒たちも、稀に私の店へ訪れるようになりました。

が、定期的に来店する人はほとんど居ません。多くの人が一度だけ、興味本位で見に来ただけの様子でした。

しかし、それでも問題ありません。重要な人間関係は築き上げることが出来ましたから。

実は勇者称号の四人のうち、二人が常連客となりました。

一人は宣言していたとおり、聖女の三森さん。そしてもう一人は、なんと私の狙い通り賢者の松里家君です。

松里家君は定期的に店へと来店し、特に何を買うわけでも無く私を訪ねてきます。

どうやら、王宮を信用していない、という点で私と意見が合ったのが嬉しかったらしいのです。戦争から距離を置くにはどうすればいいか。クラスメイトが乗り気になっていて困る。等といった話題で雑談をする為に来店します。

当然、雑談は他のお客さんの邪魔になってしまいます。なので、

来客がほぼ皆無となる深夜の時間帯に松里家君は来てくれます。

こちらとしても松里家君とは交流を持ちたいので、喜ばしいことです。深夜であればしっかりと対応出来ますし、私にとっても好都合。

そうして、松里家君とはある程度の親交を深めることが出来ました。

なのでいよいよ、目的通り松里家君にとあるお願いをすることにします。

「情報が欲しい、とはどういうことですか？」

松里家君が、私の提案を聞いて首を傾げます。今日はまだ日付も変わっていない時間なので、私と松里家君の他に、有咲さんもこの場に同席しています。

せっかくなので、詳しく説明してしましましょう。

「六ツ賀谷高校の皆さんの状況が知りたいのです。王宮からどのような扱いを受けているのか。不満は無いか。あるいは、妙な動きをしていないか。そして反対に、王宮の様子についても聞きたいと思っています。王宮側の人間にも知り合いが居るので、一応は様子を知ること可能なのですが。立場の違う、しかも冷静でよく物事を考える能力のある人にもお願いしたいのです」

シユリ君やマルクリーヌさんが時おり来店してくれるので、その時に会話をして、王宮の様子を探ってはいけません。が、二人は国の人

間です。召喚者側の立場で見た情報には、また異なつた価値があります。

それを説明すると、松里家君は快く引き受けてくれました。

「構いませんよ。むしろ、僕としても乙木さんとは今後も協力していきたいですから。戦争なんてまっぴらです。逃れるための手段があるなら、こちらとしても上手く利用したい」

面と向かつて、私を利用することを宣言する松里家君。なかなかの人物です。しかし大胆でいて、同時によく物事を考えた上で行動している様子です。協力者として、これほど心強い召喚者は松里家君だけでしょう。

「なあ、おっさん。それって良いのか？」

すると、何故かこのタイミングで有咲さんが口を開きます。

「良いのか、とは何のことですか？」

「いや、松里家君って特に強い勇者なんだろ？ そんなヤツが戦争を嫌がつてて、しかも戦争から逃げるのに協力するとかさ。戦争に勝つつもりなら、あんまし良くないんじゃないの？」

有咲さんは率直に、疑問を言葉にしてくれました。

確かに、戦争に勝つつもりであれば松里家君との協力関係は矛盾します。

しかし、矛盾してでも勇者の皆さんの情報は内側から手に入れておきたいぐらいの重要な情報です。その動向次第で、私も計画を変えなければなりませんから。

それに。そもそも、有咲さんは勘違いをしています。

「別に、私は戦争に勝つつもりはありませんよ。なので、松里家君に協力するのは何の問題もありません」

12 悪い大人

「はあ？ おっさん、前に宮廷魔術師のヤツが来た時に言ってたじやねえか！ 戦争を終わらせるために、この国を勝たせるってよお！」

納得いかないのか、有咲さんが声を荒げます。ここは、しっかりと説明しておきましょう。

というよりも。むしろ、今まで有咲さんにちゃんと説明していなかったのが良くありませんね。勘違いをさせたまま、放置していたわけですから。

「有咲さん。貴女は重大な勘違いをしています」

「は？ 何のことだよ」

「あの日の私は、シユリ君と戦争を勝つための手段について話をしました。戦争に勝つためには、どのような手段を取ればよいのかについて話をしました」

そこまで言って、少し間を置きます。再び口を開き、重要な点を言葉にしています。

「ですが、この国を戦争で勝利させる約束など一度もしていませんよ」

私の言葉に、有咲さんはポカンと呆けたような表情を浮かべます。もう少し、突っ込んだ説明をしておきましょうか。

「あの日した会話は、もしもこの国が戦争で勝つために、私が協力するとしたら、という仮定の話です。戦争に協力するつもりが無くても、協力する場合どうするかについて話すことは不可能ではありません。まあ、相手側にも勘違いさせてしまったのなら申し訳ない気持ちでいっぴいになりますよ」

「ははは！なるほど、乙木さんはそんなことをしていたわけですか！さすがです乙木さん」

どうやら話の流れを読み取ったのか、松里家君が笑い声を上げます。

「おい不良女。理解できていないようだから僕が教えてやろう。つまり乙木さんは、国側の人間を騙したんだよ。自分があたかも協力者であるかのように、言葉を選んだんだ。嘘を吐かずに、都合よく勘違いをさせたんだよ」

ようやく合点がいったのか。有咲さんは驚きの表情を浮かべます。

「おっさん！それって、ヤバイんじゃないか？ってか、戦争に勝たずに、どうやって平和とか安全とか実現するんだよ！」

新たな疑問を浮かべる有咲さん。それに、一つづつ答えていきましよう。

「有咲さん。大人というのは、建前と方便で自分に都合よく周りを動かそうとするものですよ。特に私のような人間は。自分の目的の

為に、人を騙して都合よく利用するなんて、普通のことですよ」

私の回答に、有咲さんは呆気にとられたような表情でため息を吐きます。

「そつか。つまりおっさんは、あのシユリヴァとかいうヤツのことも騙してるわけか」

「そうなりますね。有咲さんは悪い大人に騙されないよう、注意してくださいね？」

まあ、シユリ君に関しては分かった上で騙されているのかもしれませんが。悪い大人は、時に自分の都合の為にわざと愚かなふりをします。

愚かな失敗は避けられない。そういう建前が必要な場面も、社会には少なくありませんから。

「じゃあ、やっぱり戦争を終わらせるとか、平和とか安全とかいう話も全部ウソだったわけ？」

有咲さんは、今度は逆に私の全てを疑っているようです。まあ、一度騙されてしまうとこうなるのは仕方ありません。が、誤解されたままで困るので、当然弁明します。

「いいえ。それについては本心ですよ。間違いなく戦争を終わらせたいと思っていますし、最終目標は安全の確保。そしてついでに六ツ賀谷高校から召喚された皆さんを助けたいと思っています。まあ、第二目標については可能な限りと但書が付きますが」

例えば有咲さんのお友達だった不良君達は、場合によっては助けられない可能性もあります。根っからの悪人までは、例えば子どもであっ

ても救うつもりはありません。

「ああ、もう！ 何なんだよおっさん！ アタシ、おっさんのことがよく分かんなくなってきたよ」

有咲さんは、疲れたような声色でばやきます。

ふむ。意識共有が十分に成されないと、今後の計画に支障が出る可能性がります。ここは、私の目標について、しっかりと説明した方が良さそうです。

という理由で、私は有咲さんに自分語りをすると決めました。

夜は長いですし、今日は松里家君という新たな協力者もいます。

しっかりとじっくり、私の考えについて理解を深めてもらいましょう。

12 悪い大人（後書き）

明けましておめでとございます。

今年も出来る限り更新を続けていきます。
当作品をこれからも宜しくお願い致します。

13 おっさんの意識共有

「まずですね。私はあまり正確な計画は立てていないことを先に言っておきます」

私は、真つ先にその部分を宣言します。これは、前提として分かっ
つていて貰いたい部分ですからね。

「無計画ってことか？」

「いいえ、違いますよ」

有咲さんから、思ったとおりの反応が返ってきます。私は否定し、
説明を加えます。

「大雑把に、こうだったらこうしよう、みたいなことは考えていま
すよ。けれど、今後の行動を具体的に決めきつてはいません。良い
言い方をするなら、状況に応じて臨機応変。悪い言い方をするなら
行き当たりばったり。そんなところでしょうか」

私が言うと、有咲さんは困ったような表情を浮かべます。

「でも、さすがに方針ぐらいは決めてんだろ？ 結局、この国に味
方すんの？ それとも、この国と敵対すんの？」

「さあ？ それはどちらとも言えませんね」

私は、現在の自分の考えのまま答えます。すると、有咲さんは頭を掻きむしります。

「だああっ！ もう、わけわかんねえよ！ それって何にも考えて無いつてことじゃねえのかよ！」

「それは違います。きちんと考えれば、有咲さんのような問いに答えが出せないことが分かりますよ」

「意味分かん、どういうことだよ？」

有咲さんが理解できていないようなので、詳しく語りましょう。

「そもそも、私の目的は先程も言った通り。安全の確保と子ども達の保護です。それを優先する為、必要なことを考えてみてください」

私が言うと、有咲さんは腕組みして首を傾げながら考え始めます。

「えっと、まず安全は、敵が居なきゃいいんだろ？ 危なくない場所に行くとかでもいいんじゃないの？ で、うちの高校の奴らを保護するなら、めっちゃ強くないとダメじゃね？」

「そうですね。どちらもおおよそ正解です。もっと言えば、強くなれば安全を保証することも出来ます」

私はそう言って、その点について深く語ります。

「この世界で安全を脅かす大きな要因は三つ。一つが戦争。一つは魔物。そして最後の一つが治安。この内、魔物と治安に関しては単純な腕っぷしだけで解決出来ます。結局の所、難しい問題は戦争の一つだけということになります」

ここまでの説明に、有咲さんは納得した様子で頷きます。問題無

いようなので、このまま説明を続けましょう。

「戦争の危険を逃れる手段は主に二つ。戦争の影響が無い場所へ逃げる。戦争を終わらせる。このどちらかを満たせば、安全が保証されると考えて良いでしょう」

とまあ、二つの選択肢を提示しました。

「逃げる場合は、どう逃げれば良いのか考えねばなりません。どこへ逃げるのか。いつからいつまで逃げていられるのか。戦争が続くなら、逃げた先に戦火が広がる可能性もありますからね。逃げる手段も問題になります。状況によっては国境超えもありうるでしょうから、馬車で悠々と街道を進むわけにはいきません」

逃げるという口にしても、実際にするべきことは数多くあります。逃げ続けるにしても、その先々で不自由なく生活するための蓄えも必要です。六ツ賀谷高校の生徒の皆さんも一緒になる可能性も考えると、やるべきことは無数に増えます。

「つまり、世界の片隅に絶対安全な国でも存在しない限り、逃げるという選択は単純に選択することは出来ないのです」

逃げるという選択は行動の指針にはなり得ないわけです。考えを巡らせるからこそ、選択出来ないという事実に至ります。

そのこの所を有咲さんが理解してくれるといいのですが。表情からはそこまでの理解度を読み取ることは出来ません。話を続けましょう。

「次に、戦争を終わらせるという選択を取ったとしましょう。です

が、この場合も話は同じです。一度の勝ち負けで戦争が終わるとは限りません。そうなると、戦争の終結は難しい。全ては情勢、状況次第です。この国や魔王の都合、事情が変われば戦争終結の糸口も変わります。現時点でどうすれば戦争が終わるか、なんて考えても、それは想像の域を出ません」

つまり逃げるといふ選択同様、目標に設定するわけにはいきません。大雑把に戦争を終わらせたい、と思うことは出来ませんが、それまでです。具体的に戦争終結の為の策を現段階で張り巡らすのはリスクが高い。情勢次第で、全てが水泡に帰することになるわけですから。

「そう考えると、結局どちらの選択も現時点では選べない。もっと情報が必要ですし、状況が固まるまで大きくは動けません。この国に味方をするのか、しないのか。戦争を自分の手で止めるのか、それとも逃げるのか。何一つはつきりとは出来ません」

「なんつーか、それって詰んでねーか？」

有咲さんが眉を顰めて聞きます。私は、これに首を横に振ります。

「難しい状況ですが、詰みではありません。今はまだ選択できないだけ。それは要するに、そのうち情報があつまり、状況が変われば選択肢もはつきり決まってくるということでもあります。その時、どのような選択肢でも選べるよう、手札を増やす。それこそが、現時点で出来る最適解なんです」

「あー、つまりどういうこと？ この国で出世するってこと？」

「もっと大雑把な話ですよ。つまり最強になれば何でもできるので最強になりましょう。という話です」

「ふふっ」

私少し冗談めかして言うと、松里家君が笑いました。ジョークが通じたのは喜ばしいことです。どうやら、松里家君とはその辺りのセンスも合いそうですね。

14 選択の自由

「最強って、そんなん無理じゃね？」

有咲さんは率直な感想を口にします。「ごもつともな意見。なので、冗談めかした言い方ではなく、もつとはっきりした言い方で言い直します。」

「まあ、最強というのは極端な言い方ですよ。いざというときどんな選択肢でも選べるように準備しておく、というのが実際のところですね。逃げも隠れも出来るように、戦時中の国境超えを集団で可能な準備をしておく。この国を戦争で勝てるよう裏で進退のカギを握っておく。そして魔王側にも接触しておく。より都合の良い国の方でうまく活動できるよう、どちらの陣営にも根回ししておく。まあ、わかりやすい予定としてはそんなところでしょうか」

私は、さっと思いつく限り、今の段階で準備できることを言い連ねていきます。

すると、有咲さんが言い返してきます。

「そんな都合のいい立場になれんのか？　ってか、どうすりゃいいかわかんないし」

「やることは単純ですよ。私が強くなればいい。話は元に戻るわけです」

安全を脅かす三要素。全てに対処できるように強くなる。それは腕っぷしだけでなく、社会的、経済的な力も含みます。喧嘩で勝つ。情報戦で勝つ。資金力で、資産の差で勝つ。

結局は、思いつく限り全ての勝負に勝てる力を手に入れる。それ以上でも以下でも無いわけです。

「そして強くなるための過程は何でもいいんですよ。正解は無い、というよりは誰にも分からないでしょうね。だから、現時点で私の持てる知識、能力を総動員して力を付けていくわけです。その為にこうしてお店を開き、資本と人材を握る側へと進もうとしているわけです」

私が言い終わると、松里家君が満足げに頷きます。

「なるほど。納得です、乙木さん。何より、その考え方には個人的にとっても同意できます。さすがは、僕が見込んだ方ですね」

「どうやら、私の説明に納得、共感して頂けたようです。これは良い反応ですね。」

一方で、有咲さんは難しい顔をしています。

「そんなの、上手くいく保証無いだろ。失敗したらどうすんだよ？」なるほど。確かに失敗すると、少し困りますね」

有咲さんの心配も、理解できます。きちんと計画を立て、筋道立てた手順で物事を進行しないのでは不安にもなるでしょう。

「ですが、別にそれでもいいのです。失敗しても、上手く行かなくてもさほど困りませんよ」

そこで、失敗そのものの不安を取り除くような話をします。

「ここは日本とは違います。悪い意味も多いですが、良い部分も多い。幸い、私達は女神様に特別な力をもらってこの世界に生まれました。たとえ失敗して底辺に落ちたとしても、這い上がるのは日本よりも遥かに容易です」

この点こそ、私達がこの世界で有利に活かすべき部分です。たとえ失敗して、底辺に落ちたとしても。私達は冒険者として身を立て、再起するのは難しくありません。現代日本のような便利ささえ求めなければ、この世界でまあまあ豊かな部類に入る生活が出来ます。

「なので、失敗を恐れる必要はありません。チャンスがあるので、から、いくらでも挑戦してみるべきだと思います。まあ、安定して出世する、というルートと比べたら不安が多いのも事実ではあります」

私はそう言って、おおよそ失敗のリスクについて話し終えます。有咲さんは、ひとまず話の内容には納得できた様子でした。

「そっか。そういうことか」

呟く有咲さんを見て、もう一言だけ付け加えます。

「もしも、有咲さんが私の考えに賛同できないなら仕方ありません。挑戦を強制することは、さすがに出来ませんから。非常に口惜しくはありますが、今から有咲さんが私とは別の選択をしても、それは仕方のないことだと思います」

私が言うと、有咲さんは驚いたような顔でこちらを見ます。

「どうでしょうか。有咲さんの好きな方を選んでください」

私は、ここで始めて有咲さんに選択を委ねました。今さらのような気もしますが、ここまで話をした以上、有咲さんの意思も改めてしっかりと再確認しておかねばなりません。

少しの間、有咲さんは考え込むように俯いていました。それが顔を上げて、私の方を向き直った頃には、かなり表情が良くなっていました。

笑顔を向けてくれる有咲さんは、決断を語ります。

「アタシには、やっぱり難しいことは分かんないよ。アタシが困ってたときに、助けてくれたのはおっさんだ。今も、おっさんはアタシが困らないように、嫌がらないように気を使ってくれてる。だから、そんな心配してねえよ。たぶん、上手くいく。だからおっさんに付いていく。アタシにとっては、それだけ。それで十分」

そう言って、有咲さんは私と一緒にいることを選んでくれました。つい胸に、じんわりとこみ上げるものがあります。

「ありがとうございます、有咲さん」

しかし、言葉を尽くして語ったりはしません。

ただ気持ちのまま、感謝を口にしました。

14 選択の自由（後書き）

追記

長らくおまたせしております、申し訳ございません。

現在、書き溜めが無くなっている状態と、執筆に難航している影響で続きの投稿が出来ておりません。

数話分を書き溜めることは出来ましたが、この量ではまたすぐに更新が滞ってしまいます。

よって、もう少し書き溜めを作った後、毎日投稿を再開しようと思っております。

毎日の更新を楽しみにしてくださいたださっていた皆様には申し訳ありませんが、どうかご理解お願いいたします。

15 松里家君の告白

「いやあ、乙木さん。やはり貴方は素晴らしい！」

話が終わったところで、松里家君が興奮した様子で言います。

「さすが僕が見込んだ方です。状況を分析し、冷静に考えている。これだけ異常な状況下、結論を急いで何をするべきか、判断を誤る可能性も高い。それを警戒して、常に物事を観察し、考える姿勢を貫く。素晴らしいことだと思います！」

さつきから、何やら松里家君にはべた褒められています。照れてしまいますね。

「あまり褒められると、調子に乗らせていただきますが」
「どうぞどうぞ乗って下さい。いくらでも僕が持ち上げますので！」
「なにアホなこと言ってんだよ」

私と松里家君が和気藹々と冗談を言い合っていると、呆れた様子で有咲さんが文句を言います。

ひとまず、話を戻しましょう。

「さて。これでおおよそ、認識の共有は出来たと思います。何か、質問などはありませんか？」

「いや、アタシは大丈夫。ってか、もうごちゃごちゃ考えんのはや

めたから。おっさんのこと、とりあえず信用するよ」

「僕も問題ありません。乙木さんの考えについては全面的に肯定させてもらいます」

二人の了承も取れました。これで、認識は共有できたと判断して良いでしょう。

「では、今後についても軽く話をしておきましょう」

私はそう言つて、元々の話題に戻ります。

「松里家君には、既に話したとおりです。勇者の情報、王宮の情報を流して頂きたい。それを、今後私がどのように動くべきか、という判断材料にしていきますので」

「任せて下さい。むしろ、乙木さんには事情を知ってもらった方が都合が良い。外部の視点で僕の置かれている状況を見てくれる人、というのはありがたいですからね」

松里家君は、私が利点として考えている部分と同じことを指摘します。お互いに、お互いの状況を別視点から確認できる。これは極めて有意義です。

単一の視点では、思考の幅に限界があります。選択を間違えるリスクも高くなります。これを避けるためにも、立場の違う協力者というのは重要になってくるわけです。

「そして有咲さん。今までも繰り返しお願いしてきましたが、これからも同じです。貴女のスキル、カルキュレーターには高い可能性が秘められています。これからもスキルの成長を促す為、数学の問題を解いて下さい」

「おっけい！ まかせろ！」

有咲さんは元気良く返事をしてくれます。頼もしい限りです。

「あと もう一つ。成長性を確かめるためにも、将来的には実戦経験を積んでもらおうと思っっています。なので、冒険者としての活動のいろはについても少しずつ教えていきます」

カルキュレーターが単なる数字の計算以上のことが可能だという仮定。これに従えば、例えば冒険者としての活動中にも多種多様な問題に回答し、情報を分析してくれるはずだと推測できます。

計算以外の機能について調べるには、冒険者活動が最も都合が良
いはず
です。

数学的な要素はほぼ関わってきません。それに、私自身が冒険者活動の経験があります。なので、より安全かつ正確で確実な実験が可能になるわけです。

「まあ、なんかよく分かんないけど分かったよ。おっさんの為に、それとアタシの為になるんだったら文句は言わねーよ」
「ありがとうございます」

有咲さんは認識を共有した上で、協力してもらえると約束してくれました。これは今までの成り行き上の協力関係より、深いものです。

言わば一蓮托生。そんな関係を了承してくれた有咲さんには、本当に頭が上がりません。

協力関係についての話が終わった後。私たちは、何でもない雑談

をして過ごしました。

ただし、松里家君はさり気なく王宮、そして勇者の様子についての話題を織り交せてくれました。

お蔭で、状況の理解が進みます。私の予想通り、王宮は勇者を表面上は持ち上げ、戦争の道具として利用する心づもりでいる様子。かつ、六ツ賀谷高校の子たちはそれに気づいていない。

召喚に巻き込まれた教員　つまり大人については、軟禁されて面会できない状態になっているそうです。ここまで露骨に情報を遮断し、判断力を奪っているとなると、逆に疑われない方が難しいでしょう。

とはいえ、子供たちに冷静な判断を求めるのも酷です。騙されて、正義感のまま戦争の道具として利用されるのもまた酷い話。やはり助けてあげたい、という気持ちが強まります。

その後、話は弾み、夜も遅くなってきました。もう日付も変わっているほどの時刻になるでしょう。

普段どおりであれば、そろそろ松里家君の帰る時間です。

が、ここで有咲さんが一つ話題を投下します。

「ところでさ、松里家。お前ってさ、なんでおっさんに対してそんな媚びてんの？」

有咲さんの言葉に、松里家君が眉を顰めます。

「媚びてるとは心外だな不良女。僕は尊敬すべき人は尊敬する。それだけだ」

「いや、でもさ。こんなおっさんを尊敬するって、けっこうハードル高くない？ ビジユアル的に」

有咲さんは中々辛辣なことを言ってくれます。

確かに私の外見はキモいおっさんです。見た目が災いして、他人に悪い印象を与えるのは当たり前のことです。キモいというだけでマイナス査定が下れば、どれだけ能力の高さを証明してもプラマイゼロ。いいえ、むしろマイナスにさえなりかねません。

それでも尊敬の念をはっきり示してくれる松里家君は、とても良い子に違いありません。

「ふん、まだまだだな、不良女」

松里家君は不敵に笑います。きっと偏見や外見で人を判断しないよう、有咲さんに忠告してくれることでしょう。

「乙木さんはこの外見だからこそ良いんだ。くたびれたどこか冴えない年配の男性が、実は高い能力を持っている。素晴らしいじゃないか」

おや？ 何やら、私の想像とは違う方向に話が進むようです。

「いや、くたびれた冴えないおっさんって、ダメじゃん」

「ダメなものか。むしろそこがいい。くたびれて冴えない外見だからこそ、萌えるというものだ。分かるか？ ダメオヤジ、可愛いだろ」

「ダメオヤジはダメオヤジだろ。ダメだろ。可愛くねえよ」

「全く、これだから素人は」

言っで、松里家君はため息を吐きます。有咲さんは、馬鹿にされたいにも関わらず、怒るよりむしろ困惑しているようです。

正直、私も松里家君の発言を理解しかねています。

「いいか不良女。世の中にはおっさん萌えというジャンルがある。そしておっさん萌えというのは奥が深い。愛でる対象は美形に限らない。中には脂ぎった臭そうなデブオヤジを愛でる者もいる。世界は広い。お前ごときが乙木さんの魅力を理解できると思うなよ？」

「あー。なんだ？ よく分かんねえけど。つまり松里家はおっさんが好きだったってことか？」

有咲さんは面倒になってきたのか、雑に話をまとめようとします。しかし、それは失敗に終わるでしょう。何しろ私はキモいおっさんです。いくらなんでも好きだという言葉はふさわしくありません。

きつと松里家君も訂正するはずですよ。

「ああ、そうだ。僕は乙木さんのことが好きだ。人格面良し、知能レベルも問題無し。しかも外見まで僕の性癖にドンピシャだ。好きになって当然だろう？」

おや。訂正されませんでした。これは妙ですね。

「なあ。性癖ってさ、男同士で使うと変な意味に聞こえるから止めたほうがいいぞ？」

有咲さんが松里家君に忠告します。私も全くもって同じ意見なので、合わせて頷きます。

「何だ、そんなことか。それなら問題は無い」

そして松里家君は、なぜか自信満々に反論を繰り返します。

「そもそも、僕はホモだからな。実際に、そういう意味で言葉を使っている」

15 松里家君の告白（後書き）

久しぶりの投稿になります。お待たせしまして申し訳ありません。

そして、もう一つ申し訳ないお話なのですが、今後は当作品の更新を隔日投稿、二日に一回に変更しようと思っております。

そもそも、私はあまり筆が早い方ではなく、毎日投稿を維持するのは大変な作業でした。

このままですと、今回のように、ストックを作る為の期間を何度も設けるようなことになりかねません。

また、不定期に空白期間が続くよりも、隔日で一定の投稿ペースを維持する方が読者の皆様にとっては楽しみやすいのではないかと考えました。

ですので、今後は二日に一回の投稿というペース配分に変更させていただきます。

毎日の更新を維持できず、申し訳ありません。

せめて、隔日投稿には空白期間が生まれないうよう、努力していきま

す。

どうか今後共、当作品を宜しくお願い致します。

16 男同士は駄目ですか？

松里家君の衝撃発言に、有咲さんが硬直します。

私は有咲さんよりは余裕がありました。が、それでも反応に困ってしまいます。

「あの、松里家君。つまり君は、私を性的な目で見ているということでしょうか」

このまま黙っていても仕方ないので、本質的な部分について尋ねます。

「はい。もう完全にそういう目で見ています。尊敬と、恋愛感情が半々といった感じでしょうか。何にせよ、僕は乙木さんのことが好きですよ」

恥ずかしがりもせず、堂々と松里家君は言い放ちます。

つまり、まとめるところです。松里家君はホモで、私に恋愛感情を抱いている。

いや、そもそもまとめるまでもないですね。松里家君の言ったとおりの話でしかありません。

「もちろん、無理強いをするつもりはありませんのでご心配無く」
「なるほど。まあ、そこは当然守ってほしい部分ですが」

しかし、まさか自分のお尻の穴の心配をする羽目になるとは思ってもみませんでした。予想外にもほどがあります。

とはいえ、こうした予想外の事態にも対応せねばなりません。こは異世界。現代日本の常識は通用しません。協力関係にある男の子がホモで、突然恋愛感情があると暴露されるよりも不可思議な出来事だつて存在するはずです。

なので、この程度で狼狽えるわけにはいきません。

「しかし、申し訳ありません松里家君。私は君の思いには応えられません」

「そうですか。もしかして、男同士は駄目ですか？」

「もしかしくとも、男同士は駄目ですよ」

私は正直な自分の心境を伝えます。どうにか、私のことを諦めてもらいたいものです。

「それは妙ですね。乙木さんは既に男性同士の経験があると、宮廷魔術師のシュリヴァさんから訊いていたのですが」

おっと。これは厄介なことになりました。

私は確かに、シュリ君とは肉体関係を持ちました。しかしそれは、シュリ君が女の子のように可愛らしかったからに他なりません。

なので、男同士で恋愛感情を持つことはできません。シュリ君については、性欲に負けた例外であると言えます。

「シュリ君については、確かに行為に及んだことはあります」

「なら、僕もイケるのでは？」

「いえ。シュリ君は外見についてはどう見ても女の子です。私の本

能的一部分も、彼のことは女の子に近い存在として認識しています。なので、決して男同士で興奮できるわけではありません。同性愛者というわけでもないのです」

「そう、だったのですか」

松里家君は、残念そうに肩を落とします。可哀想ですが、こればかりは仕方ありません。

これで話は一件落着。と思いきや、不意に私の肩にぽんと手が置かれます。

「なあ、おっさん？」

有咲さんです。何やら、威圧的な声色ですね。

「何でしょうか」

「今言ったことはマジなのか？」

「ええ。同性愛者ではありませんよ」

「そこじゃねえよ！ シュリヴァってやつとヤツたとか何とかって話だっつうの！」

キレ気味になりながら有咲さんは言います。

「なるほど、その点ですか。確かに事実です。私はシュリ君と性行為に及びました」

「セックスしたってことだな？」

「はい」

「ケツの穴に突っ込んだのか？」

「はい」

「あの女の子みてーな奴にか」

「そうなりますね」

私が誠意を持ち、正直に回答していくと、次第に有咲さんの表情が呆れと嘆きに染まっていきます。

「はあ。おっさんがそこまで変態で下品な男だとは思ってなかった」

そして辛辣な評価を頂きました。いえ、確かに有咲さんの言う通

りなので、辛辣というよりは事実をありのまま突き立てただけに過ぎないのですが。

「まあ、おっさんが変態で下品だったのは分かったことだけだよ」

「そうなのですか？」

「だって、事あるごとに自分のツバをアタシに触らせようとしてくるじゃん」

「あれは粘着液なので変態でも下品でもないのですが」「うるせえ！ 言い訳すんな！」

有咲さんに怒られてしまいました。理屈については納得しかねますが、私はキモいおっさんなので理不尽に詰られてもそれは仕方のないことです。ここは素直に受け入れましょう。

「ありがとうございます」

「なんでそこで感謝すんだよ！」

有咲さんはキレて声を上げます。が、私に変態かつ下品であることを認めたからなのか、これ以上の追求をしてくる様子はありません。

「あの、乙木さん」

有咲さんとの話にも決着がついたところで、松里家君が口を開きます。

「本当に、乙木さんは男同士は駄目なのですか？」

「ええ、そうですね。少なくとも、女性的な魅力をどこかに感じなければ食指は動きません」

「なるほど」

松里家君は、何やら納得したような面持ちで頷きます。

「分かりました、乙木さん。確かに、乙木さんを振り向かせるのは難しそうですね。ここは一旦、諦めようと思います」

「そうですね」

理解していただけたようですね。ありがたい話です。

「しかし、将来的にはまだ分からない。そう言っても問題はありませんか？」

「はあ。まあ、未来は不確定ですからね。断言は出来ません」

松里家君の発言の意図が読めず、しかしひとまず話には頷いておきます。

「ならば僕は、その可能性に賭けます」

そして、松里家君が拳をぐっと握り、立ち上がります。

「こうしてはいられません。乙木さん、今日は有難うございます。

さっそく、王宮に帰ってから努力しようと思います！」

「そうですね、頑張ってください」

恐らく、協力関係についての話でしょう。しかし、王宮と勇者の情報を集めるだけに努力する、という表現はじっくり来ません。何か特別な意図でもあるのでしょうか。

「それでは乙木さん、またいずれ。新しい情報が入ったときは、必

ず顔を出します。定期的な報告としても顔をだすつもりです」

「はい、宜しくおねがいます」

「そして、いずれは必ず、乙木さんをこの僕に振り向かせてみせましょう！ 新たな魅力を会得することによって！」

どうやら、未だに私のことを諦めていない様子です。これは困りましたね、今までの説得が全て水の泡です。

しかし、これ以上の説得は難しいでしょう。となれば、後は好きなようにやらせておくしかありません。

「では、またお会いしましょう、乙木さん！」

「ええ」

「あとついでに不良女もな！」

「うるせーとつとと帰れホモ野郎！」

こうして、松里家君は最後に嵐のような騒動を巻き起こし、王宮へと帰っていくのでした。

それにしても、努力とは私を振り向かせる努力のことだったのですね。

一体、何をするつもりなのでしょうか。

「あいつ、女装でもするつもりなのかな」

有咲さんが、一言だけ呟きます。が、まさかそれは無いでしょう。ただでさえ、彼はおっさん趣味のホモという濃い人物。さらに女装癖なんて、いくらなんでも濃すぎます。可能性は低いと見ていいでしょう。

17 暴露と決断（後書き）

可能性は低い（確定という意味）。

女装少年も男の娘も好きです。
どちらも別物として好きです。

18 素材集めとレベリング

松里家君との協力を取り付け、王宮の事情についても詳しく調べられるようになりました。

そして聞く所によると、どうやら勇者を前線に送る準備を早めているそうです。勇者が召喚された、という情報が魔王軍に漏れ、その影響で攻撃が苛烈になっているのが原因だとか。

恐らく魔王軍は、勇者が戦線に出てくる前にある程度の打撃を与えておきたい、という考えなのでしょう。

となると、私も少し行動を起こさなければなりません。

王宮が急ぐというのなら、私も多少は行動を早めに実行していく方がいいでしょう。

また、戦争がこれから激化するなら、戦時特需というものがあります。より高い利益を上げるために、新商品の開発は必須と言えます。

という理由で、私は新たな商品を開発することを決定しました。

しかし、すぐさま新商品開発、とはいきません。というのも、手札がありません。

私は今まで、私が手に入れられる限りの資源、技術を駆使して商品開発をしてきました。逆に言うと、新たな資源、技術を取り入れ

なければ新商品の開発は困難ということにもなります。

どちらかと言えば、資源の方が深刻です。一介の魔道具店が仕入れられる素材では、作れるものに限度があります。

技術については、まだまだ検証しきれていない廃棄スキルの数々や、未知なる魔法についての知識などがあります。伸び代が分かっているのです、それほど不安はありません。

なので、まずは資源問題から解決することにしました。

「というわけで、ダンジョンへ潜ります」

私は、従業員の皆さんを呼び集めてそう宣言しました。

「勝手に一人で行けばいいじゃん？」

有咲さんに冷たいことを言われてしまいました。しかし、ここで引くわけにはいきません。

「いえ。ダンジョンへ潜ると、魔物との戦闘で経験値が得られますからね。私一人よりも、レベル上げを行いたい人を連れていった方が効率的です。つまり、私が魔物を倒すので、経験値だけ仲間に横流しする、というわけです」

「なるほど。いわゆるパワーレベリング、という行為ですわね、乙木様」

元A級冒険者の妻であり、現在肉食系未亡人のマリアさんが言います。さすが、元冒険者の妻ですね。知識があるようです。

「もちろん、危険が無いよう安全には配慮します。私一人で攻略可能な、簡単なダンジョンを探索するつもりです」

「それでしたら、是非うちのティアナとテイオをお連れ下さいな。資源豊富で難易度の低いダンジョンであれば、私の知っている場所もご紹介しますわ」

「おお、それはありがたいですね」

マリアさんの知識が、とても助けになります。

「ですが、お子さんお二人を連れて行っても大丈夫なのですか？」

「ええ。この子達はいずれ、冒険者になりたいと言っているんですもの。乙木様の庇護下で経験を積めるといっているのであれば、これ以上に良い機会はありません」

「なるほど。分かりました、責任を持って預からせて頂きます」

とまあ、流れるように同行者が二人決定しました。

「後は、有咲さんは強制です。理由は以前、お話したとおりです」

「ん？ ああ、分かったよ」

そして、有咲さんにも同行してもらいます。

カルキュレイターの成長性の程度について確認する為、実践経験を積む。これについては、以前話してあるので問題ないでしょう。

ついでにパワーレベリングをして、冒険者のノウハウについても教えます。自分の身を自分で守る術を身に付けておけば、後でいざという時に重宝するでしょうから。

「他には、誰かいませんか？」

「じゃあ、はいはい！ 俺も行きたい！」

そう言って、元気よく挙手したのはジョアン君でした。

「冒険者の活動って、ちょっと興味あったんだ。おっちゃんが教えてくれるなら、先生も許してくれるだろうし」
「なるほど」

ジョアン君は、将来現場指揮者として責任ある立場についてもらいます。そうになると、多少レベルが高く腕っぷしも強い方が便利でしょう。

「分かりました。同行を許可します」

「よっしゃ！ あとさ、おっちゃん。前にローサがおっちゃんとまた遊びたいって言ってたから、ローサも誘っちゃだめかな？」

「ローサさんですか？」

孤児院で、ロープ作りの指揮と裁縫技術の勉強をお願いしているローサさん。そういえば、最近はお仕事で顔を合わせる以外の時間は少なかったように思います。

そろそろもう一度交流を深め、繋がりを強化しておく必要があるでしょう。

「そうですね。イザベラさんの許可が出るのであれば、同行してもかまいませんよ」

「わかった！ ありがと、おっちゃん！」

ジョアン君は満面の笑みを浮かべて喜びます。こころも喜んでくれると、頑張りがあるというものです。

19 王都近郊のマルチダンジョン

後日。イザベラさんの許可も出て、無事ダンジョンにはローサさんも同行することとなりました。

さらに数日後、マリアさんから教えられたオススメダンジョンへ向かう準備も終え、私たちは王都近郊にある大型ダンジョン、通称『マルチダンジョン』へと訪れていました。

このマルチダンジョン、正確には中型規模の複数のダンジョンが内部で繋がって出来たものだそうです。

その関係で得られる資源の種類が幅広く、難易度も大型ダンジョンの割に極めて低い。冒険者はもちろん、国にとっても非常に都合の良いダンジョンです。

王都の側にこんな便利なダンジョンがあるというのも都合の良い話です。が、元を正せば恐らくは逆なのでしょう。こうした有用なダンジョンが存在する場所の近くだからこそ、王都のような大都市が発展した。つまりダンジョンに近いと便利なので街を作った、という話なのでしょう。

「では、行きましょうか」

マルチダンジョンの入り口に立ち、私は背後に居る皆さんに呼び

かけます。ジョアン君、ローサさん、ティアナさん、ティオ君。そして最後尾に有咲さんです。

「めっちゃ楽しみだ！ な、ローサ」

「うん。ちょっと怖いけど。でも、乙木のおじちゃんがいるなら平気」

ローサさんとジョアン君が楽しげに会話しています。

「わたしたち、簡単な魔法なら使えるから、魔物との戦闘にも混ぜてほしいです」

「僕もです。おじさま、よろしくお願いします」

ティオ君とティアナさんもやる気満々の様子。

「子供らがはぐれないよう、見といてやるからおっさんは魔物をきっちり倒してくれよな」

そして、有咲さんが殿を努めてくれます。

「任せて下さい。魔物は私が全部処理出来るはずなので、問題ありませんよ」

マリアさんからの情報によると、マルチダンジョンに出没する魔物はどれだけ強くてもステータスにCが並ぶ程度。それも階層主と言われる、ゲームで言うなればボスに当たる魔物でそのレベルです。

そして、人気のあるダンジョンであるため、罾等は解除され尽くして残っていません。通路は整備され、死角等もほとんどありません。ダンジョンから産出される資源を得るため、長年人の手が入り

続けた結果でしょう。

ちなみに、ダンジョンというのは魔物に近い存在だ、ということが研究で判明しています。言うなれば、魔物を生み出す魔物。内部に魔法で作られた広い空間を持ち、そこでダンジョン毎に決まった魔物を生み出し続けます。

そうした行動をダンジョンが行う理由は判明していません。が、そこに目的意識は無い、という説が最も有力です。

長い歴史の中で、子孫を残す機能の弱い生物が種として淘汰されてきました。それと同じように、ただ偶然、魔物を生み出す機能を持った魔物が淘汰されずに残った。これが、ダンジョンという存在についての有力説の一つです。

まあ、神様が人類に遺してくれた神代の遺産、等という眉唾ものな説もあつたりしますが。

と、無駄なことを考えてしまいました。今は、ダンジョン探索。資源集めとレベル上げの時間です。

「まずは、皆さんのステータスを見せて下さい。今回のパワーレベルリングで、どこまで成長するのか把握しておきたいので」

私は、連れ立つ五人にそう呼びかけます。すると、五人はそれぞれステータスプレートを開示してくれます。

【名前】 美樹本有咲

【レベル】 8

【筋力】 E
【魔力】 A
【体力】 E
【速力】 E

【属性】 なし

【スキル】 カルキュレイター

【名前】 ジョアン
【レベル】 4

【筋力】 F
【魔力】 G
【体力】 F
【速力】 F

【属性】 なし

【スキル】 不屈

【名前】 ローサ
【レベル】 2

【筋力】 G
【魔力】 E
【体力】 G
【速力】 G

【属性】土

【スキル】なし

【名前】ティアナ

【レベル】5

【筋力】F

【魔力】D

【体力】F

【速力】F

【属性】氷

【スキル】なし

【名前】ティオ

【レベル】5

【筋力】F

【魔力】D

【体力】F

【速力】F

【属性】風

【スキル】なし

おおよそ、予想した通りのステータスでした。ティアナさんとテイオ君は冒険者志望である為かステータスが少し高め。ローサさんが低めというのも予想通り。

ただ、全員がスキルか属性のどちらかを持っているのは予想外でした。特に、ローサさんとジョアン君。

もしかすると、この四人の子供たちは冒険者としての才能もあるのかもしれないね。

20 マルチダンジョン初戦

私たちは陣形を保ちながら、マルチダンジョンを進んでいきます。先頭が私。その後ろにテイオ君とティアナさん。さらに後ろにジオアン君とローサさん。最後尾を有咲さんという順番です。

最初の目的地は鉱物資源が得られるエリアです。ゴーレム系の魔物を生成するダンジョンでは、副産物として鉱床が数多く発見されます。

こうした鉱床は、ダンジョン内では何度も再生されます。これは、ゴーレム生成時の排泄物のようなものだ、という説が有力です。つまりゴーレムを造った時に生まれる廃棄物が堆積して鉱床になる、といった具合なのでしょう。

実際、出現するゴーレムの種類と鉱床で得られる鉱物の種類は常に一致します。

戦時特需で武器や防具は確実に売れるはずなので、目標としては良質な金属資源を回収できれば、と考えています。

実は、私の持つスキルの一つに『鉄血』というスキルがあります。血液の中に金属物質を溶かし込むというスキルです。これを使えば、アイテム収納袋を使うより遥かに多くの金属資源を回収できます。

難点は、回収と取り出しどちらも血液から、つまり傷口を作らなければ不可能であるという部分です。また、金属ではない鉱物、つ

まり宝石や石材等は収納出来ません。

元は身体から金属製の針山を生やす、ハリネズミのような魔物が持つスキルです。融通が効かないのは仕方ありません。

鉱物系エリアを進んでいくと、鉱床発見より先に魔物と出くわします。

ゴーレムです。見るからに金属製の身体をしていて、頑丈そうな相手です。が、実は大した相手ではありません。

序盤に出てくるゴーレムは、その名もアルミプレートゴーレム。アルミ製の薄い装甲で表面を覆っているだけの、ロックゴーレムに過ぎません。移動速度も遅く、パワーはありますが攻撃を食らう心配はまずありません。

適当に転がしてタコ殴りにすれば、新人冒険者でも楽に倒せる相手です。

但し、数が揃うと厄介です。耐久性は高い為、囲まれると突破は困難。無理に突っ込もうものなら、そのパワーの餌食になります。

そして今、正面に現れたゴーレムの数は八体。新人だと、即撤退が望ましい状況です。

「あの、おじさま。大丈夫でしょうか？」

不安に思ったのか、背後からティアナさんの声がかかります。

「平気です。この程度なら相手にもなりません。見ていて下さい」

私は安心できるよう、自信たっぷりな口調で言ってみせます。

そして私は、真っ直ぐにゴーレムの方へと突撃します。普通の冒険者なら悪手です。圧倒的な攻撃力が無い限り、後退しながら少数と接敵する状況を維持するのがセオリーでしょう。

しかし、幸いにも私には便利な廃棄スキルがあります。

私は躊躇なく、ゴーレムの群れのと真ん中に飛び込みます。遅い動きのゴーレムが、私を狙って集まってきます。

今にも攻撃を受けそうだと、いったところで、私はようやく、とあるスキルを発動させます。

ドオンツ！ と、爆発音が響きます。

その爆発は、なんと私を中心にして発生しました。私を巻き込みながら、爆発は周囲に集まったゴーレム達を破壊します。

一瞬で、ゴーレム八体はただの残骸に代わりました。

「ふう、よし」

「ちょっと待て！ 良しじゃねえだろ！」

有咲さんの文句を言う声が上がります。

「おっさん今さ、自分も巻き込んで爆破してなかったか？」

「ええ、そうですね。何しろ『自爆』というスキルを使いましたので」

そう、私が使ったスキルの名前は『自爆』というもの。自分自身

ごと、周囲を爆破するスキルです。生命力と魔力を混合して威力を発揮するので、うまく調整すると僅かな自傷ダメージと引き換えに周囲へ高破壊力攻撃を行える便利スキルです。

ただし、これが使えるようになったのは最近になってからの話。ステータスが低かった、冒険者初期の私では自傷ダメージで死んでいました。

今はステータスが上がったお陰で、自傷ダメージが気にならない程度まで小さくなりました。お蔭でどんどん自爆し放題です。

自爆しても治癒魔法で傷を治せば、最終的な消費は魔力だけと同じ。ですので、自爆はステータスさえ足りていればとても優秀な攻撃手段となります。

「いや、まあ。おっさんがどうかしてるのは前から知ってたけどさ。にしても自爆はねえよ」

とまあ、一通り説明すると有咲さんには呆れられてしまいました。

「乙木のおじさまは、特別なスキルをお持ちなんですね」

「やっぱり、一流の冒険者は違うんですね」

ティオ君とティアナさんは尊敬してくれます。

「おっちゃんおもしれー！」

ジョアン君は楽しそうに言ってくれます。

「おじちゃんが平気そうで、安心しました」

ローサさんは私に怪我が無いか心配してくれたようです。いい子ですねぇ。

「にしてもさあ。あんな爆発に巻き込まれて平気って、おっさん今どんだけステータス高いんだよ」

「そうですね。お見せした方がいいかもしれませんね」

有咲さんに言われ、私は自分のステータスを皆さんに開示していいないことに気付きました。

情報共有は重要です。それに、私だけステータスを秘密にするのも不公平で、不義理です。ここはちゃんと開示すべきでしょう。

21 おっさんの現在ステータス

私はステータスプレートを表示し、皆さんに見やすいように大きくして開示しました。

【名前】乙木雄一

【レベル】215

【筋力】A

【魔力】A

【体力】A

【速度】A

【属性】なし

【スキル】ERROR

「はっ、えっ？ にひゃくっ？」

私のレベルを見て、ティオ君が驚愕の声を漏らします。同様に、他の四人も驚きのあまり固まっています。

「お、おっちゃんってホントにすごかったんだ。すげえ。二百とか、

聞いたこともねえよ！」

そして、最初に気を取り直したのはジョアン君。目を輝かせて、私に尊敬の眼差しを送ってくれます。

「Sランクの冒険者でも、レベルは百を越えたぐらいだと聞いたことがあります。なのに乙木のおじさまは、その倍近いレベルだなんて。信じられません」

ティアナさんが、驚きながらも予備知識の解説を加えてくれます。そのお陰か、ジョアン君はいつそう私を尊敬してくれたようです。なにやら私の手を握ってぶんぶん振り回してくれます。相当興奮しているようです。

「まあ、信じられないのは私自身も同意です。二百にもなつて、ステータスが全てAというのはいくらなんでも低すぎますよね」

「いや、そこじゃねーから」

私の率直な感想は、有咲さんに否定されてしまいました。

「おっさん、どうやってレベル上げなんてしてたんだよ」

「前にも言ったかと思いますが、自動でレベルが上がるようなスキルを持っているのですよ」

「いや、それでもなけりゃこのレベルになんねえってのは分かるから。もっと詳しく教えるよ」

有咲さんに問い詰められてしまったので、ここは正直に詳細を話しておくことにします。話しても誰にも真似できませんし、問題ありませんからね。

まず、最初は『病魔』というスキルと『不眠症』というスキルの組み合わせでレベルを上げ続けていました。

が、四十程度まではすんなり上がったのですが、それ以降は上がり幅がかなり小さくなっていました。百を越えた頃には、ほとんど上がらなくなっていました。

それでも経験値が無いよりは良いと考えて、病魔スキルでのレベル上げは続けていました。

その結果、私が何よりも待ち望んでいたことが起きました。そう、スキルの成長です。

病魔スキルはさらに上位のスキル『疫病』へと変化しました。得られる経験値量の増加と、さらに特定対象に疾病状態を付与するという効果まで得られたのです。

疾病付与は劇的な効果を上げました。これまでと同様に、私は自分自身へ疾病を付与して経験値取得を狙いました。これにより、私は私自身にダメージを与えて経験値が得られるようになったのです。

私が経験値を得てレベルが上がれば、私を殴って得られる経験値も上がります。

つまり、疾病付与をし続ける限り、レベル上げは効率が落ちること無く続くことになるわけです。

ただ、日常生活に支障が出ない程度の疾病付与に留めている影響で、それほど大きな経験値が得られるわけではありません。

レベル自体は際限なく上がりますが、時間という制約から桁外れなレベルにまでは到達できません。

なので、ステータス的には未だにAという、人間ならありうる範囲に収まっているわけです。

可能なら、千や二千までレベルを上げてしまいたいものですが、残念ながら、そこまで都合よくはありませんでした。

とまあ、一通り説明を試みたところ。有咲さんも含め、全員がどこか呆れたような表情になっていました。

「おっさん、まさか寝てないだけじゃなくて、自傷癖まであるとは思ってなかったわ」

そして有咲さんが一言。これに、子供たち四人も頷きます。

「おっちゃん。さすがに自分を病気にしてまでレベル上げるのは変態だよ」

なんと、尊敬してくれていたはずのジョアン君にまでダメ出しされてしまいました。

おかしいですね。効率的にいつて、これが一番良かったはずなのですが。治癒魔法があれば疫病スキルによる疾病が引き起こす不調は抑え込むことが可能です。なので、魔道具店の経営をしながら何の負担も無くレベルが上がるも同然だったわけです。

極めて合理的であったはずなのに、責められるとは。これは心外です。

とは言え、私に何か至らぬ点があったのも事実なのでしょう。ここはちゃんと指摘してくれた皆さんに感謝しておかなければなりませんね。

「ありがとうございます」

「え、なんでおっちゃんそこで感謝すんの？」

マジで変態じゃん、とジヨアン君に小さく呟やかれてしまいました。

22 実戦経験と冒険のノウハウ

私のレベルに関しての一悶着が落ち着いたら、ようやく探索を再開出来ました。

ゴーレムの出現するエリアは、特に危険度が低いエリアでもありません。ゴーレムは知能の無い自動的な行動をする魔物ですので、畏を張ることや奇襲をすることがありません。なので、冒険の初心者にはこれ以上ない修練の場所となっています。

マルチダンジョンが人の手の入った難易度の低いダンジョンであることもあり、新人冒険者はまずここで経験を積む、というのがセオリーだそうです。

当然、私もそうした前例に習います。

まずは私がゴーレムを倒してパワーレベリング。新人冒険者並みのステータスになるまで五人を育てます。そして安全に配慮しながら、五人にダンジョン探索を任せてみます。細かい部分を指示しつつ、教えていきます。

そうすれば、五人ともレベルにふさわしい実力が得られることになるでしょう。

冒険者志望のティアナさんとティオ君はもちろん。有咲さんにもそうした自活能力は持って欲しいです。また、ジョアン君とロースさんも、冒険者として生きる術を選択肢として持てるのは将来

を考えると良い話でしょう。

もちろん、あくまでも冒険者は夢追い業。一攫千金が狙えるとは言え、職業としては理想的ではありません。四人には、もっといい将来を提示してあげるつもりですが。

何にせよ、最悪の場合に備えた保険というのはあって損はしません。

というわけで、一通りレベル上げが終われば五人に探索を任せてみることにしました。

というわけで、まずはレベル上げです。

およそ半日ほどダンジョンを探索すると、五人のレベルは見違えるほど高くなっていました。

【名前】 美樹本有咲

【レベル】 32

【筋力】 C

【魔力】 S

【体力】 C

【速度】 C

【属性】 なし

【スキル】 カルキュレイター

【名前】 ジョアン

【レベル】 25

【筋力】 D

【魔力】 E

【体力】 C

【速力】 D

【属性】 なし

【スキル】 不屈

【名前】 ローサ

【レベル】 24

【筋力】 F

【魔力】 C

【体力】 E

【速力】 F

【属性】 土

【スキル】 なし

【名前】 ティアナ

【レベル】 25

【筋力】 E

【魔力】 B

【体力】 E
【速力】 E

【属性】 氷

【スキル】 なし

【名前】 テイオ
【レベル】 25

【筋力】 E

【魔力】 B

【体力】 E

【速力】 E

【属性】 風

【スキル】 なし

おおよそ、予想通りの成長です。ジヨアン君の体力が高いのは、恐らく不屈というスキルの効果でしょう。

そして有咲さんのレベルの上昇だけ早いのは、勇者であることが関係しているのかもしれませんが。

「これだけのステータスがあれば、この辺りのゴーレム相手なら危険は無いでしょう。そろそろ皆さんに探索を任せてみましょうか」「よっしゃ！ まかせとけ、おっちゃん！」

ジョアン君が自信げに胸を張って言います。
将来的なことも鑑みると、実際にジョアン君に任せるのが良さそうですね。

「では、ジョアン君をパーティーのリーダーに任命しましょう」「リーダー?」

「はい。私以外の五人に指示を出しながら、冒険を先導する役割です。お願いできますか?」

「わかった! おっちゃんと言うなら、やってみる!」

これで、ジョアン君にリーダーとしての振る舞いを学ぶ機会を作ることができました。

続いて、他の皆さんのポジションも決めなければ。

「有咲さんは四人を守る形で、私と一緒に殿を務めて下さい」「おう、わかった」

有咲さんが隣に寄ってきます。

「テイオ君とティアナさんは属性持ちですから、魔法による援護を考えると後衛につくのが良いでしょう。ローサさんも同様です。と言っても、ローサさんはまだ魔法の使い方が分からないかと思えます。テイオ君とティアナさんから教えてもらって下さい」

「わかったよ、おじさま」

「まかせて、おじさま」

「が、がんばります!」

これで、全員の配置が決まりました。いよいよ、五人の冒険が始まります。

まあ、私という保護者付きですが。

23 戦闘と採取

ジョアン君を先頭に、探索を進めていきます。周辺警戒についてのノウハウを教えつつ、基本的にはジョアン君の判断に任せて行動します。

そうして探索を続けていると、幾つかの鉱床を発見。スキル『鉄血』で金属資源だけを回収し、すぐに次を求めて移動します。

やがて幾つか鉱床を見つけたところで、ようやく魔物と遭遇しました。

「おや、これは珍しいですね」

現れたのは、ミスリルプレートゴーレムと呼ばれる魔物です。この近辺ではごく稀にしか出没しないはずですが、運が良いのか出くわしました。

本来、この近辺はロックゴーレムやアルミプレートゴーレム、アイアンプレートゴーレムが出没する地域です。が、極稀にこうした例外的なゴーレムも出没します。中でも珍しいのがこのミスリルプレートゴーレム。ミスリルという希少な金属を表面装甲に使用した、頑丈かつ魔法耐久力も高いゴーレムです。

なお、中身は他と同じくロックゴーレム。なので、危険度は極めて低いと言えます。

言ってしまうえば、この魔物はボーナスのようなもの。希少なミスリルを入手できる上、弱い魔物ですからね。しかも上位魔物なので経験値も豊富。いいこと尽くめです。

「戦闘に入りましょう。ジオアン君、まずは君が指揮してみてください」

「分かった！」

私が指示すると、ジオアン君は武器を構えます。

ちなみに、武器は棍棒です。先端部分を金属で補強したもので、打撃力が高くなっています。ゴーレム相手に剣を使うのは刃こぼれして勿体無いですし、威力も通りづらい。なので、ジオアン君には棍棒を支給しました。

技術が無くとも扱える武器なので、冒険初心者であるジオアン君でも取り扱いに困らないという利点もあります。

「でやあああつ！」

ジオアン君は声を張り上げ、真っ先にミスリルプレートゴーレムへと飛びかかっています。棍棒を振り上げ、殴りかかります。

ガン、という音が響きます。一撃を食らわせたジオアン君は得意げにしています。

が、これは良くありません。

ミスリルプレートゴーレムは、頑丈さだけは飛び抜けています。

ジオアン君の一撃では、大したダメージになっていません。

油断したジオアン君は、ミスリルプレートゴーレムの体当たりによる反撃を食らってしまいます。

「ぐわっ！」

吹き飛ばすジョアン君。このままだと床や壁にぶつかってダメージを負ってしまうでしょう。見過ごす理由も無いので、私は素早く助けに入ります。

ジョアン君の飛んでいく方向へと駆け出し、壁に衝突するより先に抱き止めて保護します。

「大丈夫ですか、ジョアン君？」

「あ、おっちゃん」

ジョアン君は、恥ずかしそうにしながら顔をそらしてしまいます。恐らく、油断して反撃を受け、あげくフォローをされたことを恥じているのでしょう。

「私が守っています。だから安心して下さい。落ち着いて、よく見ればゴーレムの攻撃なんて簡単に回避できますよ」

「う、うんっ！ 分かったよおっちゃん！」

気を取り直したジョアン君は、再びミスリルプレートゴーレムへと向かっていきます。正面から攻撃する、と見せかけて側面に移動。そのまま足に棍棒を叩きつけます。

ゴーレムは攻撃態勢にあったこともあり、簡単にバランスを崩します。

「お返しだ！」

そして、追い打ちのジョアン君の体当たり。子供とはいえ、レベルとステータスのお蔭で成人男性を超える馬力があります。ゴーレムを転倒させるのは難しいことはありませんでした。

ひっくり返ったミスリルプレートゴーレムは、じたばたともがきます。起き上がるうとしますが、そこをジョアン君は棍棒でタコ殴りにします。このせいで上手く起き上がれず、ゴーレムはされるがままとなります。

やがて度重なる重い衝撃でプレートの内側にダメージが蓄積。所詮中身はロックゴーレムですから、数分もすれば活動停止してしまいます。

見事なジョアン君の勝利です。

「よく頑張りましたね、ジョアン君」

「えへへ、おっちゃんを守ってくれたお陰だぜ！」

鼻頭を擦りながら、照れくさそうにジョアン君は言います。そんなジョアン君の頭を撫でます。こうして褒めて伸ばすのが、私の基本的な教育方針です。

「いいなあ、ジョアン。おじさまに褒めてもらえるなんて」

「僕も撫でてほしいなあ」

「羨ましいです」

子供たち三人が、羨ましげに声を上げます。差をつけるのはよくありませんね。私は三人を手招きして呼び寄せます。

そして、三人の頭も順に撫でていきます。

「テイオ君、ティアナさん、ローサさんも偉いですよ。新人ですと、攻め気に逸って前衛が戦っているところへ魔法を打ち込み、味方ごと攻撃してしまうことも多いのです。しかし、皆さんはちゃんと状況を見て、攻撃を我慢していました。よくできましたね」

「うふふ」

「えへへ」

「わ、私はまだそこまで考えてなかったです」

私が褒めると、三人とも嬉しそうにします。ローサさんだけは謙遜しますが、しかし顔には笑みが隠せていません。

人間というのは単純です。良いことがあれば頑張る。嫌なことや辛いことがあれば逃げる。ですからこうして、何らかの形でご褒美をあげる必要があります。でなければ、ダンジョン探索という面倒で大変な仕事にはすぐ飽きてしまいます。

飽きてしまった子供に強制しても、覚えは悪く効率も悪いですからね。こうしてちゃんとスキンシップを取り、飴を与えるのは重要というわけです。

24 カルキュレイターの性能

ミスリルプレートゴーレムの撃破後。表面のミスリルだけは私が鉄血スキルで回収し、探索を続けます。

ミスリルプレートゴーレムの後は、また魔物との遭遇が無くなりました。運が良いのか、悪いのか。代わりに鉱床が沢山見つかります。

鉱床がこれだけあって、魔物がいない。鉱床はゴーレム生成の副産物ですから、極めて不自然です。

考えられる可能性は二つ。一つはどこか別の場所に、群れで集まっている可能性。もう一つは、鉱床の数にふさわしい巨大で強力な魔物がいる可能性。

どちらにせよ、子供たちや有咲さんでは危険な相手かもしれない。しっかり警戒して置かなければならないでしょう。

「お、おっちゃん」

私が考え事をしていたところで、先頭を歩くジョアン君が声を上げます。それに反応し、私は目を凝らします。

噂をすれば何とやら。進行方向に、大きなスチールプレートゴーレム。そして周囲に数十体ほどのスチールプレートゴーレムが集まっているのが見えます。

「どうやら、私の予想は両方正解だったようですね。」

「どうやら、強敵出現のようです。私が先頭に立つので、皆さんは安全な後方に控えてください。有咲さんはこのまま殿を。そして魔法攻撃が可能な方は、私に当たらないよう援護射撃をして下さい。相手は足の遅いゴーレムだけですから、私が抑える限り安全に援護射撃の練習ができますよ。」

私は指示を出しつつ、冗談めいた言い方で空気を軽くします。恐怖心や緊張を解きほぐす為です。

「ちゃんと効果があったのか、子供たちは笑みを浮かべながら頷きます。」

「そうして陣形を変え、私が先頭に立った所です。不意に有咲さんが口を開きます。」

「ちょっと待て、おっさん。なんか変だ。」

「言つて、敵の大将と思われるスチールプレートジャイアントゴーレムを睨みつけます。」

「多分、あれ中身も鉄だ。」

有咲さんの指摘に、私は目を見開いて驚きます。

「分かるのですか？」

「ああ。なんとなく、動きが違うっぽい。ほら、中身が石の奴も、動きに個体差があつたら？　そこから、もしも巨大になったら、ってパターンも想像できるんだ。」

「なるほど、そして想定とあの巨大ゴーレムの動きに食い違いがあ

ると」
「そういこと」

言われて観察してみますが、私にはまるで分かりません。ゴーレム毎の個体差はもちろん、巨大ゴーレムの違和感も。

恐らく、これこそがカルキュレイターというスキルの効果なのでしょう。正確な計算をするには、正確に情報を得なければなりません。数値計算にしても、目測が誤っているのでは答えが正しく得られません。

そして、観測された僅かな差異を解析し、さらにはシミュレートまで実行。普通の人間が咄嗟に出来ることではありません。ましてや、普通の女子高生であった有咲さんなら尚更。

それを踏まえると、カルキュレイターの効果の一部と考えて間違いないでしょう。

「有咲さん、今後も気付いたことがあれば、遠慮なく言って下さい」
「おっけ、任せろ！」

有咲さんに新たな役割を指示します。これで、戦闘準備は整いました。

「では、スチールゴーレムの群れへと接近しますよ」

私は先頭に立つと、そう言って皆さんを先導します。ある程度近づいたところで、今度は私が一人で接近します。ジヨアン君が付いてこようとしていましたが、手で制止します。

ゴーレムの群れの中に飛び込み、まずは自爆スキルを発動させます。ドゴオッ、という音と共に、私の周囲に居たスチールプレート

ゴーレムが活動停止します。その数、八体。

これが攻撃開始の合図となったのか。ティオ君、ティアナさん、ローサさんの魔法の援護が入ります。

「アイスシユート！」

「エアシユート！」

「えっと、ロックシユート！」

三人が、それぞれの持つ属性通りの魔法で攻撃を放ちます。威力は直撃したゴーレムを吹き飛ばす程度のもの。ゴーレムの耐久力が高い関係で、レベルで優位にある三人の攻撃は耐えられてしまいません。

ですがこの調子で魔法攻撃を繰り返せば、数発でゴーレムは沈黙するでしょう。物理攻撃とは違い、魔法攻撃への耐性はそこまで高くありませんからね。

魔法攻撃の援護もあるので、今のうちに巨大ゴーレムの方へと近づきましょう。

私は距離を詰め、様子見として巨大ゴーレムの胴体を殴ります。すると、中身が石とは思えないほど頑丈で重い手応えがありました。どうやら、本当にこのゴーレムは中身まで鉄でできているようです。つまり、このゴーレムはスチールジャイアントゴーレムだということになります。

なお、スチールゴーレムとアイアンゴーレムの違いは、鍛えた鉄かそうでないかという点です。その影響か、スチールゴーレムの方が色合いが暗くなっています。

言ってしまうえば、素材が鋼か鉄かという違いです。鋼の方が頑丈で、鉄は壊れやすい。その関係で、アイアンゴーレムはスチールゴーレムほどの頑強さはありません。プレートゴーレムの場合も例外

ではありません。

そして、逆を言えばスチールゴーレムは全身が鋼。非常に強固であるため、私の自爆だとかかなりの威力が必要になります。

ですが、高威力の自爆は周囲を巻き込み、味方まで傷つけてしまいます。なので、自爆はこのゴーレムを倒す上で使用できません。

では、どうするのか？

答えは単純です。

「さて、頂きます」

私は掌に浅い傷を付け、スチールジャイアントゴーレムに触れま
す。

そして鉄血スキルを発動。全身が完全に金属で出来ている為、このスキルがあれば全身を吸収可能。微粒子レベルまで分解されてしまえば、スチールジャイアントゴーレムと言えども耐えることは出来ません。即死です。

わずか数秒で、巨大ゴーレムの全身を吸収。
完全勝利ですね。

24 カルキュレーターの性能（後書き）

ご指摘があったので、アイアンとスチールの間違いを修正しました。
本気で勘違いしておりました。申し訳ありません。

25 緊急事態発覚

スチールジャイアントゴーレムを瞬殺したので、後は楽な戦闘でした。私が小規模な自爆で次々とゴーレムをまとめて撃破。後衛三人による魔法射撃で各個撃破。

そして数が少なくなってきたところで、演習です。せつかなので、前衛をジヨアン君と有咲さんに代わってもらい、後衛との連携訓練を行うことにしました。

二人は次々とゴーレムを棍棒で殴り、横転させていきます。そして横転したゴーレムには後衛組が魔法を集中砲火。その頃には前衛の二人が次のゴーレムを転倒させにかかっています。以下、無限ループです。

そうした作業的な戦闘の中で、一つ気付いたことがあります。有咲さんのスキル、カルキユレイターについてです。

どうやら高い演算能力が数式以外に使えることは間違いないようです。というのも、有咲さんはまるで未来予知でもしたかのような正確さでゴーレムの攻撃を回避し、合理的な手順でゴーレムを転倒させていきます。

目についた順、というわけではありません。逃げるゴーレム、攻め込むゴーレム。攻撃を振りかぶったゴーレム。そうした動きも含めて、次に最も転倒させやすく、かつ魔法射撃で狙いやすい個体を導き出しています。

元々戦闘経験の無かった有咲さんが、これだけの戦闘能力を発揮する。これは間違いなく、スキルの効果と言っていていいでしょう。

そして、それはつまりカルキュレイターには観察力の強化という効果も含まれることを意味します。単なる女子高生が、何の補助も無しに戦闘中の敵の情報を冷静に取得できるはずがありません。スキルによる補助があつて、初めて有咲さんは情報を得て、その情報を元に最適解を導き出しているわけです。

その証左とも言える現象も見受けられます。

ローサさんが魔法の発動に失敗し、ゴーレムを仕留めきるのに失敗するパターンがあります。この時、ゴーレムは立ち上がるか、あるいはそうでなくとも這いずって近距離の敵、つまり有咲さんを攻撃します。

有咲さんはゴーレムがある程度確実に撃破されることを信頼しているのでしょうか。その関係で、後ろから不意打ちを食らうことが稀に見かけられます。

もちろん不意打ちの可能性も気付いているのですが、その予兆を目で観測できていない以上、正確なタイミングは分かりません。なので、有咲さんは背後を気にしながら戦っています。そして、時折ゴーレムが背後から襲撃してきた時は、驚きながら対応しています。

そうした様子から察するに、やはりカルキュレイターは観測した情報を元に正確な演算をするスキル。そして観測されていない情報は演算不可能。その為、背後の攻撃は読み切れず、前方の攻撃は未知予知同然の動きで読み切っているのでしょう。

つまりカルキュレーターとは、得た情報を解析し、正解を導く能力。その範囲は、数字や単純な計算処理に留まらない。そう考えるのが妥当でしょう。

となれば、今後が楽しみですね。カルキュレーターの能力は、理想に限りなく近いものと言えます。これなら、計画していた様々なことが実現可能になるかもしれません。

等と考えていると、戦闘が終わってしまいました。すべてのスチールプレートゴーレムが活動を停止しています。その数、なんと六十八体。

既に鋼はかなりの量を確保していますが、あつて損するものではありません。私のステータスが高いおかげか、鉄血スキルの容量もまだまだ余裕があります。すべてのスチールプレートを回収してしましましょう。

「おい、おっさん」

有咲さんが、私に近寄ってきて小さな声で言います。

「ちょっとおかしいことに気付いた」

「ふむ、聞かせて下さい」

「見た感じ、アタシらが今まで見つけた鉱床の数と、生まれたゴーレムの数が釣り合わないんだよ」

言われて、私はなんとなく意図を察します。

「鉱床はゴーレム生成の副産物。それはつまり、鉱床が多いほどゴーレムは沢山、あるいは強気に生まれるということにもなります。」

そして、私たちが見つけた鉱床はあまりにも数が多かった。

私たちが偶然、鉱床を発見できたと考えるのは少し不自然です。なので、このダンジョン全体で私たちが発見したのと同程度の頻度で鉱床が発生していると考えられます。

となると、今度はゴーレムの数や質が不自然です。このダンジョン全体で膨大な鉱床が発生しているのであれば、スチールジャイアントゴーレム一体とスチールプレートゴーレム六十八体はあまりにも数が少なすぎます。

だとすれば、全体でゴーレムが大量発生、異常発達しているはずです。しかし、それにしては遭遇する頻度があまりにも少ない。

不自然な状況が重なり過ぎています。そしてこの不自然な状況を説明できる陰謀論を、私はたやすく想像出来てしまいます。

例えば、魔王軍の作業員の仕業とすればどうでしょうか。人類に打撃を与えるため、資源の源であるダンジョンに破壊工作を敢行。ダンジョンそのものを破壊するのは難しい為、使用不可能な状況を生み出す方針に話は進みます。ダンジョンの魔物を集め、管理し、過剰に成長させ、深部の人目のつかない場所に集め続ける。そして時が来れば、集めた魔物を開放する。

ダンジョンに鉱床が多すぎる。魔物が少なすぎること。ミスリルプレートゴーレムやスチールジャイアントゴーレムと遭遇したこと。すべてに説明がついてしまいます。

もちろん、安易な陰謀を想像通りに存在するのだと信じるわけはありません。ですが、現在の状況はそれだけおかしい何かがない程度には不自然なのです。

警戒をするに越したことはありません。

「念のために、これから帰還することにしてしましよう」

私が言うと、有咲さんは頷きます。さすがに子供たちをこれ以上、ダンジョン内で連れ回すわけにはいきません。

26 撤退道中

緊急事態により、私たちは撤退を余儀なくされました。しかし、問題は出口までの距離です。

実は今回、ダンジョン探索は一泊二日を予定していました。そのため、ダンジョンをかなり奥の方まで進んで来ていたのです。これから帰るとして、日付が変わる前に帰るのは不可能でしょう。

私一人ならなんとかありますが、子供連れです。そして子供たちは夜には眠くなってしまいます。寝ぼけて動きの悪いところでダンジョン内の魔物と遭遇、となれば結局危険に晒すことになります。

複数の危険要素を比較し鑑みた結果、やはり徹夜でダンジョン内を強行軍で進むのは良くないという判断に至りました。

というわけで、不安は残りますがダンジョンでの野営です。

子供たちを不安にさせないため、様子がおかしいので冒険者ギルドへ報告に帰ろう、という単純な話で方針は説明してあります。なので、子供たちは危険に怯えること無く、普通に野営の訓練だと思って行動しています。

というか、キャンプ感覚なのでしょう。楽しげに会話をしています。

「へえ、じゃあティアナとティオもダンジョンに来るのは初めてな

のか」

「うん。冒険者の経験なんて、ママの知り合いの手伝いって形で、ダンジョン以外のところに同行したことがあるぐらいかな」

「それにしても、とても慣れてる感じに見えました」

「そんなことないよ。わたしもテイオも、けっこういっぱいはいだった」

「でも僕たち、昔からなんだか、余裕があるとか度胸があるとか、よく言われるんだよね」

「そりゃ、二人ともすっげー美人だからだろ？ 顔が良いから何やっても様になるんだよ」

子供たちの会話に、さりげなく有咲さんも混ざっています。

現在は野営の準備も終えて、魔道具で作られた加熱器具と鍋を使って調理をしているところです。

洞窟のように閉鎖された空間で、移動もせずに大きな火を使うのはあまり良くありません。なので、調理には魔道具を使います。高価な品で、シユリ君から饞別に貰った冒険者セットに入っていたものです。

普通の冒険者はこうした道具は持っていないので、洞窟では保存食を食べることになります。あるいは、最初から日帰りでダンジョン探索に挑むか。

なので、こうして温かい食事が出るといのは稀なことなのです。もちろん私は皆さんに教える義務があるので、その辺りの説明も既に済ませてあります。

あとは鍋が煮えるのを待つばかり。乾燥野菜と干し肉と固形調味料を突っ込んで煮るだけの料理ですが、保存食そのままよりは遥かに美味しい代物です。

「そろそろ鍋も煮えたようですね。食事にしましょう」

私が呼びかけると、皆さん「はい」と声を上げて応えてくれます。私は小さな器に鍋からスープを注いで、順番に皆さんへと渡していきます。

食前の挨拶をするような状況でもないので、皆が受け取った時点で食事を始めてしまいます。

「はい、温まるな〜！」

ジョアン君が幸せそうに声を漏らします。

「疲れが吹き飛ぶみたいだね」

「うん。おじさまの作ったスープ、美味しいです」

ティアナさんとティオ君も、嬉しそうにスープを食べています。

「今日はいろいろあったから、その分おじちゃんのスープが美味しく感じますっ！」

ローサさんもスープを味わい、微笑みをこぼします。

こうして子供たちが喜んでくれると、作った甲斐があるというものです。

ちなみに、ローサさんが言っていたいろいろというのは、スチールジヤイアントゴーレムの件だけではありません。

実は撤退を決めたからの退路でも、何度か強力なゴーレムと遭遇しました。最も強力だったのは、ミスリルゴーレムの群れでした。

十数体のミスリルゴーレムと遭遇したときは、さすがに皆さん表情を強張らせていました。

まあ、ミスリルは私が鉄血スキルで吸収できるので、全部一瞬で無力化しましたが。

そうした撤退道中の戦いもあり、皆が疲れています。だからこそ、温かいスープは疲れた身体に染み渡り、癒しとなるのでしょうか。

ちなみに、そうした数々の戦闘のお蔭で私以外の全員のレベルが上がりました。今では子供たちは全員がレベル四十台。有咲さんに至っては七十台まで到達していたりします。

ここまで来ると、もう普通の冒険者よりも強いぐらいのステータスになります。最低限の知識さえ学べば、すぐにも冒険者になれるでしょう。

とはいえ、今はまだ知識的には素人。野営には危険が伴います。今日は異常事態も発生しているので、より私が周囲を警戒しなければならぬでしょうね。

こういうときは、不眠症スキルで眠らずに済むことが本当にありがたく思います。

27 添い寝するおっさん

スープを食べ終わったら、後は寝るだけです。大した荷物は持ち込んで居ないので、岩場の陰になるような場所に集まり、ロープに身を包んで眠ります。快適とは言えませんが、寝袋などに身を包むと緊急時に動けません。冒険者の野営は、こうしていつでも動けるような状態で眠るのが基本です。

しばらくは、私と有咲さんで見張りをします。子供たち四人が眠ろうと寝転がったまま、時間が過ぎていきます。

が、ちゃんと眠れなかったのでしょうか。子供たちは、もぞもぞと動きっぱなしです。

やがて、我慢できなくなったのかジョアン君が起き出してきました。そして私の方に歩いてきて、肩を預けるような格好で隣りに座ってきます。

「どうしたんですか、ジョアン君」

「岩が硬くて寝れないよ、おっちゃん」

「そうですか。しかし、今回は仕方ありませんからね。どうにか眠りやすい姿勢を見つけてるなりして下さい」

「じゃあ、おっちゃんが添い寝してくれよ!」

ジョアン君が、思わぬことを言い出します。

「おっちゃんが近くに居てくれたら、安心して眠れる気がするんだ」
「そうですね、なるほど」

確かに、安心感は眠る上で重要かもしれませんが、緊張しては、眠気も遠のくというものです。

「分かりました。一緒に寝ましょうか」
「うん！」

私はジョアン君と一緒に、他の子供たちが眠っているところへ寄っていきます。そして、適当なスペースにジョアン君と一緒に寝転がります。

「へへ、やっぱりおっちゃんと一緒にいると落ち着くなあ」
「そうですねか？」

正直、そこまで私の存在が影響するとは思っていませんでした。

「ほら、今日の最初の戦いでさ、俺が危なかった時におっちゃんが助けてくれただろ？」

「ええ、そうですね」
「その時に気付いたんだけどさ。おっちゃんが側にいると、すごく安心するっていうか、落ち着くっていうかさ。とにかく、なんかよくわかんないけど幸せなんだよな。だから、おっちゃんと一緒なら岩が硬くても眠れるかなって思って」

ふむ。原因はよく分かりませんが、きっかけは今日の戦闘でしたか。戦闘時の恐怖心が、私が助けに入ることによって反転し、私を頼りに思うようになった、といったところでしょうか。

何にせよ、私がいるだけで落ち着くというなら、一緒に居てあげ

ましよう。

「ジョアンだけ、ずるいですっ」

ローサさんが起き上がった、こちらに寄ってきます。

「私も、乙木のおじちゃんと一緒に寝たいです！」

「ローサさんですか」

思っていたより、子供たちに好かれているようです。ローサさんはジョアン君とは反対側の隣にするりと入り込んできます。そして、私の身体に抱きつき、ほっぺたをくっつけてきます。

「おじちゃん、やっぱり可愛いです」

「可愛いのですか？」

「はい。洞窟ドワーフみたいで、私、おじちゃんのこと好きです」

なるほど。おとぎ話に出てくるキャラクターそっくり、というのがここで効いてくるわけですか。

ローサさんからしてみれば、愛玩動物を愛でるような感覚なのでしょう。

「二人が良いなら、僕たちも」

「おじさまと添い寝したいです」

そして、ティオ君とティアナさんも起き上がり、こちらに寄ってきます。ジョアン君とローサさんの二人で左右が埋まっているからなのか、覆いかぶさるようにのしかかって来ます。

「お二人も、よく寝れないのですか？」

「うん。でも、ママにも言われたから」
「おじさまはロリコンかもしれないから、ちゃんと誘惑しておきなさいって」

なんと、下心ありきでしたか。しかし、誘惑の意味をちゃんと理解しているのでしょうか？

「誘惑と言いますが、何をするのか分かっていきますか？」

「うん。ママは、おじさまに任せておけば大丈夫だって言った」「わたしも分からないけど、おじさまのしたいようにして下さい」

困りましたね。さすがに、この年齢の子供に手を出すつもりはありません。それに、二人以外もいますし。誘惑に乗るわけにはいきません。

しかし、蔑ろにするのもかわいそうですね。

「では、ごうしましょうか」

私は、四人の子供たちをまとめて両腕で抱き寄せます。身を寄せ合って一緒に眠りましょう、というわけです。

「おやすみなさい、皆さん」

私の腕の中で、子供たちは安心したような顔をして、目を閉じました。

子供たちが寝静まったところで、私はゆっくりと抜け出します。そして自分のローブを子供たちに被せてから離れます。

「さて、有咲さん。お願いしたいことがあるのですが」「何だよ?」

「子供たちの面倒を見てほしいのです」

「おっさん、どっか行くのか?」

「はい。敵を退治しに」

私が言うと、有咲さんは緊張した表情になります。

「やっぱ、マズいのか?」

「ええ、マズいですね」

有咲さんの問いに、私は頷きます。

ここまで撤退する間、私たちは沢山のゴーレムを撃退してきました。もしも今回の異常事態が何者かの人為的なものであった場合、私たちの行動は既に敵に察知されていると考えたほうが良いでしょう。

そして、敵は私たちを探してダンジョン内を移動しているはず。一晩の間、ダンジョンに籠もるというのはリスクが高いのです。もちろん、これは徹夜でダンジョンを抜けようとしても話は同じ

です。眠気と疲れでボロボロになった子供たちを連れて、まだ見ぬ敵から逃げ続けるのは得策ではありません。

「ですので、私がここから離れて囷になります。可能ならば、敵を撃退してきます」

私が囷になり、単独で敵と接触します。撃退できたなら、安全は確保されます。撃退できなくても、皆さんは私と距離があり、姿を隠してもらいますので、目が覚めてから有咲さんの引率でダンジョンから抜け出すことが出来ます。

敵も私と接触することで、今回の侵入者が私だけだと勘違いするでしょう。

つまり、子供たちが安全に撤退するなら、ここで有咲さんに子供たちを任せるのが一番なのです。

ダンジョン内の異常についても、確実にギルドへ伝えなければなりません。二手に別れるのは、そうした面でも効果的です。

有咲さんは、そうした理由をなんとなく察しているのでしょうか。緊張した様子で頷きます。

「アタシが、責任持ってコイツらを守る。だからおっさんは、安心して行ってこいよ」

「はい、お任せします」

こうして、私は行動を開始しました。

まずは、子供たちと有咲さんが隠れる安全な場所を作らなければなりません。ミスリルゴーレムを撃退して入手した、大量のミスリルを使います。

鉄血スキルは、金属を取り出す時、自由な形で取り出すことが出来ます。元々、魔物のスキルです。取り込んだ金属を刃のようにして取り出す魔物のスキルなので、こうした効果があるのでしょうか。

で、私はこの力でミスリルをゴツゴツといびつに湾曲した板状に生成します。このミスリルの板で、子供たちの眠る岩陰を覆います。そして、次に粘着液をミスリルの表面に吐き出します。

「おっさん、汚い」

有咲さんが嫌そうな顔をしますが、これは必要なことです。止めるわけにはいきません。ミスリルの板の表面に、周囲の地面から砂を集め、まぶしていきます。粘着液のお蔭で表面に砂が付着し、まるで岩のような質感になります。

こうして、岩に擬態するミスリル製の仮拠点が完成しました。

きちんと探索しなければ、岩に擬態していることは分からないでしょう。そして、ミスリル製なので魔物の攻撃にもかなり耐えられます。

ここに籠もっていれば、少なくとも朝までは安全です。

「では、後はお願ひします」

「ああ。帰ってこいよ、おっさん。待つてるから」

「はい」

有咲さんのためにも、他のたくさんの人達のためにも、こんなところで命を落とすわけにはいきません。

心してかかります。そして、危なそうなら即座に撤退しましょう。

私は子供たちと有咲さんから離れ、少し広々とした空間に出ます。もしも本当に敵がいて、こちらを探しているとしたら。すぐに戦闘に入る可能性もあるので、こうした広い空間の方が都合が良いと言えます。接近する敵を発見するのも楽ですし、戦闘でも動きを阻害されません。

そしてしばらく、広い空間で待ち続けます。敵が来るとすれば、恐らくダンジョンの深部からです。なので、子供たちの隠れている場所より深部に近い、この空間で待っていれば先に遭遇するはずで

す。

小一時間ほど、じっと待ち続けました。すると、何やら騒々しい気配がダンジョンの奥の方から迫ってきます。

「ほう、待ち構えているとは、豪胆な奴だな」

そして、声が響きます。

現れたのは、数十体のゴーレムと、人間のような形をした一体のゴーレム。喋ったのは、人間型のゴーレムです。

「始めまして。私は乙木と申します。お名前をお伺いしても？」

「自分から名乗るとは、謙虚なことだ。いいだろう、この私の名を

その魂に刻むが良い」

人型ゴーレムが、やたらと大きな態度で話します。

「我が名はシューベリッヒ！ 魔王軍が四天王の一人、オリハルコンドールのシューベリッヒだ！」

「これはどうも、シューベリッヒさん。幾つかお尋ねしたいことがあるのですが」

私が訊くと、シューベリッヒさんは何やら呆れて困惑するような雰囲気を見せます。まあ、ゴーレムなので表情は分からないのですが。

「魔王軍の四天王だぞ？ 何故驚かん？」

「はあ。まあ、可能性はあるかな、と思っていましたので」

王都のマルチダンジョンを管理しているのは、王国の騎士たちです。そんなダンジョンの管理者の目を盗み、異常事態を発生させるそれは並大抵の存在には不可能なことです。

だからこそ、人為的な異変ではない可能性も考えました。が、実際はこのとおり。魔王軍の精鋭による、破壊工作であったわけです。

「それよりも、シューベリッヒさん。このダンジョンの異常事態を起こしたのは、貴方ですか？」

「察しのとおりだ。私がこのダンジョンの魔物を生み出すエネルギーを最深部に集め続け、高位のゴーレムを大量に生み出した」

「なぜ、このようなことを？」

「言うまでもない、貴様ら人間への復讐だ！」

復讐、と言ったシューベリッヒさん。魔王軍は、人間をかなり恨

んでいるでしょう。声から憎悪がありありと読み取れます。

「やがてこのダンジョンは強力な魔物で満たされ、ダンジョンの外へと溢れ出すだろう。そうなれば王国の壊滅は免れぬだろう。これこそが我が悲願！ 貴様ら人間共への復讐なのだ！」

「そのためには、目撃者が居るのはマズい、というわけですか」

十分な数の魔物を生み出す前に異常事態が発覚すれば、ダンジョン内は制圧されてしまうでしょう。シューベリツヒさんの目的を達成する為には、一連の流れが全て秘密裏のまま進む必要があります。

この計画に、どれだけの時間をかけるつもりかは分かりませんが、それほど長い時間のかかるものではないでしょう。

マルチダンジョンに入る冒険者は数多く居るのですから、今よりも大規模な異常が発生すれば、目撃者の数も増えます。そうなる計画の途中で騎士団に邪魔をされ、魔物は一掃されてしまうでしょう。

それでもこの計画を実行している以上は、成功する見込みがあるのです。つまり、騎士団が異常事態を把握するよりも早く、魔物を溢れさせる自信があるのです。

そう考えると、この異様な魔物の発生状況は、ここ数日のうちに起こったものとして考えて良さそうです。

さらに言えば、ここで私が倒された場合、異常事態は急速に進行。ダンジョンから溢れ出す可能性は極めて高いと言えます。

ここでシューベリツヒさんの企みを潰して置かなければ、王都は大変なことになるでしょう。

「となれば、戦いは避けられませんね」

私は、臨戦態勢を整えます。

30 おっさんの新技

「ほう、貴様がこの私を止めてみせるといつのか？」

シユーベリツヒさんもまた、言いながら戦闘に備えて身構えます。

「我が身体は伝説の金属、オリハルコンで出来ている。大した力も感じない、貴様のような下等な人間にこの守りを突破できるかな？」

「どうやら、自分の守りに相当な自信があるようです。見れば、シユーベリツヒさんやその周囲のゴーレムはみな同じ色の金属で出来ています。それらが全て、オリハルコンなのでしょう。」

オリハルコンは、この世界でも最上位クラスの性能を誇る金属です。非常に頑丈で熱や魔法にも高い耐性があり、生半可な攻撃力では破壊不可能。武器や防具に使われ、Sランク冒険者でさえ装備に使いたがる代物です。

そのオリハルコンで全身を構成しているなら、さぞかし頑丈なことでしょう。

ですが、だからこそ都合がいいと言えます。

「突破できるかどうか、試してみましようか」

私はそう言うってから、素早くシユーベリツヒさんへと向かって駆

け寄ります。スピードに関しては、さすがに相手が全身金属だからなのか、こちらの方が上です。シューベリッヒさんが完全に対応できない内に、私は蹴りを放ちます。

そして私の蹴りはシューベリッヒさんの脇腹に直撃して、そのま
まオリハルコンを切断します。

「なっ、なんだと!」

驚いた様子のシューベリッヒさん。慌てたように後退しつつ、腕を振り回して攻撃してきます。食らうとさすがに危険そうなので、私も後退して回避します。

まさか自分が傷つくとは思っていなかったのか、シューベリッヒさんは脇腹を押さえ、立ち尽くしています。

「貴様、どんな手品を使った?」

「大したことはしていませんよ」

「嘘を言うな! この私の、オリハルコン製の身体をこつもたやく傷つけるなど、同じオリハルコンであってもありえん!」

怒りに震える声で、シューベリッヒさんは言います。絶対的な防御力があると信じていた分、余計に腹が立つのでしよう。

しかし、私がオリハルコンを蹴りで切り裂いたのは事実。

いえ。正確に言えば、切り裂いたものではありません。

削り落としたのです。

私が数多く持つスキルの中の一つに『貧乏ゆすり』というものがあります。元々、日本に居た頃からの能力が引き継がれて生まれた

スキルの一つです。

この貧乏ゆすり、効果は足が細く震えるという一見すると意味の無さそうなもの。

ですが、スキルの効果には成長性があり、また物理や魔法の法則さえ超える超常性があります。

私が貧乏ゆすりに着目したのは、レベルが上がりが始めた頃、つまり冒険者活動を開始してからです。

戦闘能力、特に攻撃力を求めていた私は、どうにか威力のある攻撃を編み出そうと試行錯誤していました。その中の一つに自爆スキルも含まれていましたが、当然自爆は所詮自爆。自傷ダメージがある以上、限度があります。

そんなある日、私は貧乏ゆすりというスキルについて、ある発見をしました。

それは、足の震える速度、つまり周波数が固定ではない、という点です。ステータスが高まれば高まるほど、そして練度が上がれば上がるほど。貧乏ゆすりは速くなっていくことに気付いたのです。

超高速で振動する足。これがなにかに使えないか、と考えていました。

そして今日。私は大量の希少金属を手に入れました。そして、鉄血のスキルでこの金属を自在に取り出すことも可能です。

この二つのスキルを組み合わせることで、私は一つの技を編み出しました。

名付けるなら、高周波ブレードキック。足に鉄血で金属の微細な刃を生み出し、貧乏ゆすり超高速振動させます。この状態で蹴りを放てば、接触面を微細な刃が削り落とすこととなります。

その効果のほどは、シューベリツヒさんを相手に実証されました。オリハルコンはミスリルよりは堅いですが、桁違いに堅いというほどでは無かったようです。お蔭でミスリル製高周波ブレードキックは、オリハルコンを削り落とすことが出来ました。もっとも、ミスリルはそれ以上に消耗してしまったのですが。

「何にせよ、シューベリツヒさんの耐久力では私の攻撃を止めることは出来ませんよ」
「くっ、信じられんッ！」

狼狽するシューベリツヒさん。きつと、ここまであっさりと耐久力を突破された経験が無かったのでしょうね。混乱するのも頷けま

す。
ですが、すぐにシューベリツヒさんの混乱は収まります。脇腹を押さえたまま、落ち着きを取り戻します。そして、不敵な声色で語りだします。

「だが、残念だったな人間よ。私は既に、このダンジョンの魔物生成エネルギーを掌握している。この意味が、分かるかな？」

咄嗟に言われても何を言いたいのか意味がわからず、私は首を横に振ります。

「つまり、私はエネルギーの続く限り、このダンジョンで自在に魔物を生み出すことが出来るのだよ。それが例え、私自身であろうともなアッ！」

次の瞬間、シューベリツヒさんの身体に光が集まります。光は特に、脇腹の傷に向かって集まっていきます。

そして光が弱まっていくと、そこには失われたはずのオリハルコンがありました。削られた傷など無かったかのように、綺麗な胴体が覗いています。

「ふふふ、見たか人間よ。ダンジョンのエネルギーが続く限り、私はこうして無限に自分を再生させることが出来る。つまり、貴様には最初から勝ち目など無かったというわけだ！」

シューベリツヒさんは得意げに語りだします。どうやら、私の攻撃は最初から無意味だったようです。削って傷を付けたとしても、すぐに回復してしまう。これでは、いつまで経ってもシューベリツヒさんを倒すことは出来ません。

ですが、これはむしろ好機と言えます。

何しろ、私の攻撃手段は、一つではないのですから。

31 おっさん、ズルいと言われる

完全に傷が治ってしまったシューベリツヒさん。調子に乗っているのか、無防備な格好でこちらへと近づいてきます。

「さあ、攻撃してみるといい。貴様の攻撃でどれだけ傷つこうが、私はすぐに再生するぞ。そして貴様の攻撃、オリハルコンさえ破壊する威力であることを考えるに、相当な労力を要するのだろう。いつまでも放ち続けられる技では無いはずだ」

シューベリツヒさんは、的はずれな予想をしていますね。ただの貧乏ゆすりなので、餓死するまで無限に蹴れますよ。ミスリルの在庫もかなり残っているので、まだまだ戦えます。

ダンジョンのエネルギーと私の貯蔵する金属、どちらが尽きるのが先か勝負してもいいぐらいです。

しかし、今回はそんなことをするつもりはありません。

そもそも、相手がオリハルコンという時点で、私の勝ちが決まったも同然なのでから。

「そこまで自信がお有りなのでしたら、次の攻撃も当然受け止めてもらえますね？」

私は煽るように、シューベリツヒさんに問いかけます。

「ああ、構わんぞ？ どのような切り札があるうとも、私は耐え、そして再生してみせるからな」

そしてシューベリツヒさんは挑発に乗ります。自分が無限に再生できると気付いて、相当気分が良いのでしょね。調子に乗り過ぎと言えますが、その方が都合が良いです。

このまま、私の攻撃を受けてもらいましょう。

「それでは、失礼します」

私は言って、まず自分の掌に傷を付けます。

「む？」

シューベリツヒさんが訝しみますが、無視して続けます。

次に私は、傷のついた掌をシューベリツヒさんに当てます。そして、切り札であり必殺でもあり、収納にもなる便利なスキルの名を念じながら発動させます。

その名も、鉄血。金属を吸収するスキル。

オリハルコンだって金属なので、例外ではありません。

次の瞬間には、シューベリツヒさんの身体が分解され、私の身体へと吸収され始めます。

「なッ！ 何故、人間如きが『鉄血』スキルを使えるのだッ！ それは本来、魔獣の類にしか使えぬスキルのはずだッ！」

どうやら、鉄血についての知識は持っていたようですね。そして、やはりこのスキルは人間が本来は習得できないスキルのようです。

だからこそ、ここまで油断できたのでしょ。自分の弱点とも言えるスキルを使われるとは、夢にも思わなかったのでしょ。

「残念ですが、使える人間がここに一人います」

「いや、だとしてもありえぬッ！ 鉄血は、我々のようなゴーレムが相手であれば、吸収するには二倍以上のレベル差が必要なはずだ！ 魔王軍四天王たるこの私の二倍のレベルを持つなど、それこそ魔王様でもなければありえぬッ！」

身体を吸収されながらも、シューベリッヒさんは再生しつつ問いかけてきます。この間も、私は掌で轟々とすごい勢いでシューベリッヒさんを吸収していきます。

「ほうほう。ちなみに、シューベリッヒさんのレベルはおいくつですか？」

「九十八だッ！ 人間どころか、魔王軍でもここまでのレベルに到達している者はほとんど居ないッ！」

「おお、それならギリギリだったみたいですね。私、レベルは二百と少しあるものでして」

「そ、そんなわけがあるかッ！ 人間の最高レベルなど、歴史を鑑みても百を超えた程度が良いところだ！ 貴様のようなそこらのおっさんが二百を超えるわけがあるか！」

「いえ、実は私、勝手にレベルが上がるスキルみたいなものを持ってまして」

「ふざけるな！ズルいぞ！」

言い合いをしながらも、鉄血のスキルで吸収を続けます。ダンジョンのエネルギーで再生を続けるシューベリッヒさんは、強烈な光に包まれています。が、その身体が少しずつ失われ、今では胸より上しか残っていないのは見て取れます。

しかし、こちらも状況が良いわけではありません。鉄血スキルで吸収できる上限が近づいているのが、感覚的に分かります。再生のエネルギーが尽きる方が早いのか、それとも私の吸収する上限が早いのか。

その後、数十秒の間、状況は膠着しました。私が吸収し、シューベリッヒさんが再生する。

が、それも終わりが訪れます。私の吸収できる上限に到達してしまつたのです。しかし幸いなことに、シューベリッヒさんの再生も限界の様子。身体の半分以上が失われた状態から変化しません。

「くそ、私の負けだ」

悔しそうに声を漏らすシューベリッヒさん。身体が失われていては、もう戦闘を継続することは出来ません。周囲のゴーレム達は、所詮ただのゴーレム。私の攻撃力があれば、撃退するのにそう苦戦しません。

つまり、私の勝利です。

「魔王軍の四天王と聞いた時はどうなるかと思いましたが、スキルの相性が良くて助かりました」

私は一息吐きつつ、そんなことを呟きます。実際、私の戦闘能力はステータス面では人類の最高峰程度。それを超える勇者を必要とするほどの戦力を持つ、魔王軍相手では少々心許ない強さと言えます。

しかし、幸いなことに鉄血というスキルが味方してくれました。また、シューベリッヒさんが金属製の魔物ではなく、宝石や岩石類

の魔物であれば詰んでいた可能性もあります。

この勝利は運が味方してくれたものだ、と言えるでしょう。

「貴様のような異常者が我が計画を嗅ぎつけた時点で、負けは確定であったということか。もはや、逆らうまい。殺せ、人間よ」

シューベリツヒさんは、覚悟を決めたような声で言います。

生かすべきか、という選択も考えますが、ここは殺す他無いでしょう。王国に対するテロ行為を企んだ相手を生かしては、今後王国側に付くとなった場合に大きく不利です。魔王軍に恩を売るにしても、小さすぎる恩と言えます。

ここはシューベリツヒさんの望み通り、決着を付けましょう。

「それでは」

私はスキル『貧乏ゆすり』と『鉄血』を発動。先程吸収したばかりのオリハルコンを足に纏い、微小な刃を振動させます。

そして、シューベリツヒさんの頭部を蹴り抜きます。

ごりっ、という音を立てて、シューベリツヒさんの頭は削り落とされ、破壊されます。すると身体はビクリと一度震えた後、力を失ったように崩れ落ちます。

こうして、突如発生した魔王軍四天王との戦いは決着を迎えました。

32 おっさんの帰還

戦闘が終わり、子供たちと有咲さんが待つ場所へと戻ります。

戦闘後にミスリルゴーレムの群れの処理もしていたので、帰還は早朝頃になってしまいました。もしかしたら、子供たちが起き出しているかもしれませぬ。あるいは、有咲さんの判断で脱出に向けて動き出しているのもしれませぬ。

等と考えていましたが、それらは杞憂だったようです。子供たちはミスリル製の岩に擬態したプレートの下で眠ったままです。そして、有咲さんはじっと私の帰りを待っていたようです。

私が姿を見せるなり、こちらへと素早く身を寄せてきます。

「おっさんっ！」

そして、有咲さんは私に抱きついてきました。

「無事で、良かった」

少しだけ、震えるような声でした。

かなりの不安を感じさせてしまったようです。姪っ子を悲しませるとは、叔父さん失格ですね。

「すみません、有咲さん。遅くなりました」

「うっせ、ばーか。そんなの、いいんだよ」

有咲さんは、腕の力を強めて私にぎゅっとしがみつきます。きつと、こうして安全が戻ってきたことを実感しているのでしょうか。

「異常事態は、解決しました。犯人も倒しました。なので、もう安全ですよ」

私は、安全を示すように語ります。そして震える有咲さんを慰めるように、頭を撫でます。少々子供扱いが過ぎるかな、とも思いましたが。有咲さんは拒否せず、受け入れてくれます。

「安全とか、そういうのじゃねーだろ。分かれよ、ばか」

有咲さんはそう言って、私の方を睨んできます。

「どうやら、私の言葉は不適切だったようですな。」

理由は、もちろん分かりませんが。

「すみません、有咲さん」

「いいよ」

言って、有咲さんはずっ、と鼻をすすります。そして私から身体を離すと、手で目の周辺をゴシゴシと強く拭きます。

そしてニコリ、と笑ってこちらに向き直ります。

「んじゃ、そろそろこいつら起こした方がいいんじゃないか？ 危なく無いんだつつつても、早く帰るに越したことはねーだろ？」

確かに、有咲さんの言う通り。シューベリツヒさんが生み出したゴーレムを全て撃退したわけでもありません。子供たちを早めに王都へ帰還させるのは良い選択と言えるでしょう。

時間的にも、十分な睡眠時間は取れているはずです。そろそろ起床し、行動を開始してもいいでしょう。

「そうですね。では、子供たちを起こしましょうか」
「おう」

その後。私たちは子供たちと共に、難なくダンジョンを脱出しました。道中は強力なゴーレムと遭遇することもありませんでした。子供たちをそれぞれの帰るべき場所に送り届けた後は、ギルドへと報告に向かいました。ダンジョン内で、ゴーレムの発生に異常があった、と。

魔王軍の四天王によるものであったことは言いません。これは、今後の動きを考えると私だけの知る情報としていた方が有意義でしょうから。

しかし、今回のような異常が今後も起こるかもしれない、という話はしておきました。人為的なものかもしれない、ということも指摘しておきました。

これで、王国は魔王軍のテロという可能性を考え、マルチダンジョンの警備、警戒を強化するはずです。第二、第三の異常事態は防げるでしょう。

とまあ、なんだかんだとありましたが、結果的に見れば良いことばかりです。子供たちのレベルは急上昇。有咲さんのカルキュレイターにも期待が持てるかと判明。普通なら入手困難な、膨大な量のオリハルコンをこっそりと入手。魔王軍の動きについても、私だけの握る情報が増え、王国に対し一つ有利になりました。

危険こそありましたが、それ以上の成果があったと言えるでしょ

33 カルキュレーターとおっさん

ダンジョンから帰還した翌日。私は、いよいよカルキュレーターに関する『実験』を試みることにしました。

以前から、有咲さんのカルキュレーターというスキルには目をつけていました。ですが、その利用法に関しては、多岐にわたる為はつきりとは決まっていませんでした。

しかし、今回のダンジョン探索でスキルの性能についてかなり具体的な見解が得られました。なので、以前から考えていたとある方法を試してみようと思います。

「で、何するつもりだ？」

有咲さん呼び出し、店の裏手に来てもらいました。私は地面へ次々と魔法陣を書き込んでいきます。

作業を続けながら、今回の実験の概要について話します。

「単純で、自然な話です。以前から、私が付与魔法を学び続けていたことは、有咲さんもご存知ですね？」

「おう。それのお蔭で、おっさんは色々魔法道具を開発出来てんだろ？」

「はい。私が持つスキルを様々な物品に付与することで、普通の人には開発不可能な魔法道具を低コストで生み出す。そのお蔭で、私の店は現在かなりの利益と知名度を得ることに成功しています」

最初は照明魔石から始まり、今では多種多様な雑貨、冷蔵されたお酒を扱っています。いずれは今回手に入れたオリハルコン等を利用し、戦時の特需を狙った武器、防具の販売にも着手する予定です。が、今回はそうした商品開発とは別の視点で付与魔法を使います。

「で、そうした経緯からも自明な通り、付与魔法はスキルを付与することも可能なわけです」

「そりゃ、そうだろうけど。何が言いてえんだよ？」

「カルキュレイターは、スキルですよね？」

私が言うと、有咲さんはハツと気付いたような顔になります。

「おっさん、まさか！」

「はい、付与魔法で、有咲さんのカルキュレイターを私に付与してみようと思います」

単純かつ、自然な選択。私が付与魔法の魔法陣を描き、これを有咲さんに使用してもらおう。そうすることで、有咲さんのカルキュレイターを私は一時的に使用可能になります。

生物のような、代謝のある存在は付与したスキルが時間経過で剥がれてしまうという難点があります。が、それでも十分です。少しの時間でも、私がカルキュレイターというスキルを使用可能になればどうなるか。

無数の廃棄スキル。そして私がこの世界に来てからお世話になり続けている『完全記録』により蓄えた、膨大な情報。

私の知能では到底処理不可能な、膨大な情報です。これらを全て、カルキュレイターで処理出来るとしたら。

未だに私自身でさえ想像もしていないような、素晴らしい解が得られるでしょう。

「けど、おっさん。それって大丈夫なのかよ？ カルキュレイターって、女神から貰ったスキルだろ？ そんなのを付与して、危なくねーか？」

どうやら、有咲さんもその可能性に気付いたようですね。

「確かに、チートスキルを他人に付与する危険性というのはあります。あまりにも強すぎるスキルですから、持ち主自体が女神の力でスキルを使用可能なように魂、あるいは肉体を変質されているということも考えられます」

「じゃあ、止めといたほうがいいだろ！ 危ねえだろ、そんなもん！」

「はい。確かに危ないので、他の人には薦められません。ですが、リスクを考えても得られる利益があまりに大きい。それも、利益そのものは確定しているも同然です。それに比べ、チートスキルの付与でデメリットが発生するのは可能性に過ぎません。その程度について不明。まあ、即死しない限りは十分に元が取れますよ」

それに、即死の可能性は極めて低いでしょう。それほどの悪影響が人体にあるのだとすれば、女神様の力で魂や肉体を変質させるにしても、その影響がはつきりと現れると考えられます。

有咲さんを見る限り、そうした目に見えた変質は観測できません。つまり、即死するほどの大きな悪影響をチートスキルが及ぼす可能性は極めて低いと言えます。

「でもさ、おっさん。即死する可能性はゼロじゃねーんだろ？」

「まあ、それは事実ですね。しかし、それを言えば冒険者として活

動をするのも、先日のダンジョンでの異常事態も、命の危険はありました。そうした賭けに出る場面は、今後も数多くあるでしょう。今回だけ避けることに、大きな意味があるとは思えません」

私の理屈を聞いて、有咲さんは不満げな表情を浮かべながらも黙り込みます。一応は、納得していただいたと考えていいでしょう。

そうこう話しているうちに、魔法陣を描き終えました。あとは、これを有咲さんに起動して頂くだけです。

「では有咲さん、お願いします」

「けっ。分かったよ。やりゃいいんだろ、やりゃあ！」

やけくそといった感じで、有咲さんは引き受けてくれました。

私は所定の位置に立ち、有咲さんは魔法陣に手を触れ、魔力を流し込みます。

そして付与魔法が発動して、光が生まれます。魔法陣から滲み出た光は、やがて私を飲み込みます。身体が光に包まれて、そして。

私の意識は、プツンと途切れれました。

34 おっさん、理解する

気がつくと、私はベッドの上に眠っていました。風景から、ここは有咲さんの部屋だと分かります。窓の外を見ると、どうやら時刻は夜。

付与魔法による反動で、かなりの時間を眠っていたようです。

「ふむ」

周囲を見回すと、ベッドの傍らには有咲さんが居ました。椅子に座り、私を見守るような位置で、うたた寝をしています。きつと、私を看病してくれていたのでしょうか。

有咲さんの思いやりが嬉しくて、ついにんまりと笑みがこぼれてしまいます。

が、それよりも今は考えるべきことが沢山あります。

まず、付与魔法は成功でした。一瞬でしたが、確かに私はカルキユレイターらしい力を得て、膨大な情報を処理したことにより得られる解、つまり無数の知識を手に入れました。

それこそ一瞬のことだったので、完全記録スキルに保存してある全ての知識を検証できたわけではないはず。

しかし、それでも十分すぎるほどの素晴らしい解を得ることが出来ました。

まず、今まで私の考えて来なかったスキルの組み合わせを発見しました。これは期待していた効果ですし、さほど驚きはありません。やはり、私の知能では全てのスキル同士のシナジーを検証し尽くすのは難しかったのだと言えます。ほとんど把握もしていないスキル同士の組み合わせや、既に知っているスキル同士の思わぬ組み合わせなどもありました。

そして次に、魔法陣に関する知識が得られました。

こう言ってしまうと、非常に質素な結果のようにも思えますが、実際はとんでもない成果であると言えます。

そもそも、私はシユリ君から貰った本や、自分で入手した本などを読み、付与魔法を始めとするあらゆる魔法陣についての知識を蓄え続けてきました。

その情報も、もちろん完全記録スキルによって保存してあります。

そうした無数の魔法陣に関する知識の中には、いわゆる未解決問題、つまり研究による発展途上の情報や、未だ実現されていない空想の技術等が含まれていました。

カルキュレーターは、そうした無数の未解決問題を、あっさりと解決してしまいました。

これは、言うなれば私が魔法陣の専門家の最先端をゆくことになったのも同然です。未解決ということはつまり、シユリ君でさえ解決出来なかった問題ですからね。それら全てを理解できるようになった私は、この世界中の全ての魔法陣の専門家よりも深い知識を手に入れたようなものです。

そして、こうした魔法陣の知識は、今までの魔法陣が抱えていたあらゆる問題を解決します。エネルギー問題や、付与魔法言えば付与の難易度の問題。そうした問題が解決されたならば、自由度は

一気に広がります。

それこそ、私でさえ今まで不可能だった類の付与魔法が実現可能になります。

これにより、齎される利益は莫大です。間違いなく、私が今後の計画を進める上で有利に働くでしょう。

最後に。これは二つ目の知識、付与魔法の魔法陣とも関係のあることなのですが、別枠と言っていていいほど重要な解を得ました。

それは、正直に言うとも最強と言って差し支えない技術、知識です。その知識に従い、付与魔法を実行すれば。私はきつと、この世界において何者にも負けないほどの圧倒的な力を得ることが出来るでしょう。

しかし、それには一つ難点があります。

「あ、おっさんっ！ 起きてたのか！」

有咲さんが、不意に目を覚ましました。私は不穏な考えを振り払うように笑顔を浮かべます。

「よかった。マジ、倒れた時は焦ったんだからな。鼻と目と耳から血い出して倒れやがって。心配させんなよ。ふざけんなよ、おっさん」

言いながら有咲さんはポカポカ、と弱く肩を叩いてきます。

「それは、申し訳ありませんでした。今後は気をつけます」

「ホントだよ。もう、二度とこんな無理すんなよ。嫌だからな、こっついの」

「はい、気をつけます」

無理をしません、とは約束できません。だから曖昧な返答をするしかありません。が、有咲さんも私がそうした意図を持っていると気付いているのでしょうか。不満げに、口をへの字に曲げています。が、今はこれ以上追求してきません。

「とにかく、無事で良かった。マリアさんが、差し入れに晩飯作って置いてってくれてるからさ。それ持ってくる」
「はい、ありがとうございます」

有咲さんは言うと、部屋を出ていきます。恐らく一階のウォークインで冷蔵しているのでしょう。事務所にある調理器具で温めてから持ってきてくれるはずです。

やはり、私の姪っ子は、本当はとても優しい子です。
だからこそ。やはり私は、最強になる選択肢を取るべきでは無いでしょう。

なぜなら、他ならぬ有咲さんを犠牲にする必要がありますから。
私がカルキキュレーターを使用して導いた、私を最強にするための付与魔法。それは、有咲さんの命さえ危険に晒す、外道の技術です。助けてあげたいと思っている人を犠牲にしては、元も子もありませんからね。

やはり、この技術は使うべきではない。封印するべきでしょう。

私は記憶の奥底に、その技術に関する知識を押し込みます。
可能なら、こんな力を使わなくて済むように、と祈りながら。

01 土地を買ったおっさん

ダンジョンで一騒動を乗り越え、数日後。私はオリハルコンという交渉材料を得たので、マルクリーヌさんとシュリ君を呼び出しました。

以前から考えていた、十分な資金が得られたら付与魔法による魔法の工場についてです。今回、カルキュレーターによって付与魔法が効率化され、より小規模な工場でも採算が取れそうだ、という目処が立ちました。

なので、早めに土地を確保してしましましょう、という算段に至ったわけです。

そうした経緯でマルクリーヌさんとシュリ君を呼び出し、今はお店の事務所の方で三人顔を合わせて座っています。

「で、乙木殿。今回の要件は何かな？」

マルクリーヌさんが話を切り出します。

「はい。実は、こんなものを手に入れたのですが」

そう言って、私はテーブルの上にゴトリ、とオリハルコンを置きます。途端、驚いた様子でマルクリーヌさんが飛び上がります。

「おつ、オリハルコン！ そんなものを、どうして乙木殿がつ？」
「経緯については秘密です。しかし、こうしてここにオリハルコンが存在するのは事実です」

言つて、私はシュリ君の方に視線を向けます。

「ふむふむ。確かに、これは間違いなくオリハルコンだよ」

シュリ君の目利きでも、オリハルコンであることは保証されました。これで、マルクリーヌさんもオリハルコンがここにある事実を受け入れてくれるでしょう。

「しかし、そのような貴重な金属を私達に見せて、乙木殿は何をしたいのです？」

「ええ、実は欲しいものがありました。このオリハルコンと交換でどうでしょうか、という話なのですが」

オリハルコンを換金しようにも、大量過ぎると買い手がありません。なので、こうしてオリハルコンの実物を、需要がありそうな相手と直接交渉に出すのです。

具体的には、軍の人間と宮廷魔術師。どちらも、オリハルコンのような貴重で優秀な金属があれば、様々な場面で有効活用出来るでしょう。

「なるほど。オリハルコンで鎧でも作れば、前線での将兵の損耗を抑えることができるでしょう。剣であっても、今まで撃退困難であった魔物を屠るのが容易くなります」

「宮廷魔術師としては、研究材料としていくらでも欲しいところだね」

二人共、今回の交渉について前向きに検討してくれるようです。

「で、乙木殿はこのオリハルコンをどの程度用意できるのですか？
ここにあるだけで全部というなら、さほど魅力的な報酬は約束できませんが」

「そうですね。では、とりあえず十トンほど用意できますが、それだけあれば十分でしょうか？」

「オリハルコンを、十トンもっ？」

また、マルクリーヌさんは驚きの声を上げます。今度はシュリ君まで、表情を変えて驚いています。

オリハルコンは、重量に関しては鉄より軽く、一トんで一辺が六十センチメートル程度の立方体になります。

十トンですから、これが十個。縦に積めば六メートル。聳え立ちます。希少金属がこれだけの量、まとめて手に入るのは。驚くのも無理は無いでしょう。

まあ、私の鉄血スキルは、それより遥かに多い量のオリハルコンを吸収してあるのですが。重量に換算すれば、数百トンにはなるでしょう。

一気に出してしまわないのは、交渉の為です。個人的にも、オリハルコンは抱えておきたい希少金属です。可能なら、支払うオリハルコンは少ない方がいい。ですので、相手の出方を見て、こちらから提供するオリハルコンの量を変えます。

「十トンのオリハルコンと引き換えに、オトギンは何が欲しいのかな？」

シュリ君が、肝心な部分を訊いてきます。これに、私は予め用意してあった答えを返します。

「土地が欲しいですね。それも、ちょうど王都のスラム方面の、さ
らに向こう。外壁の外にある土地を頂きたいと思っています」

02 立地条件

私が土地について要求すると、二人は呆けたような顔になります。そして、先に疑問を口にしたのはマルクリーヌさんでした。

「何故、乙木殿はそのような土地がほしいのですか？ これだけのオリハルコンがあれば、貴族街の土地でも買えるでしょう。それに、王都を囲む外壁の外ともなれば、安全の保証が無い。何をするのに不都合すぎるのでは？」

「はい。普通ならそうでしょうね。しかし、私が土地を欲しい理由から逆算すれば、外壁の向こう側の方が都合が良いのです」

そう言って、私は事情を説明します。

まず、工場を建てるには大きな土地が必要です。王都の中は、どこも既に建物が建っています。多少の空き地はあるでしょうが、工場を建てるには不都合でしょう。

街の中に新しく工場を建てるのであれば、立ち退き交渉やその対価等で、余計な手間がかかります。

また、工場を建てるのであれば騒音、廃棄物、取水等の問題も考えなければなりません。

突然出来た工場から騒音が日夜響いていては、近隣住民はたまったものではないでしょう。

産業廃棄物は処理の問題もありますから、外に作れば解決という

話ではありません。ですが、あえて街の中に作っても公害となるリスクを抱えるだけです。

そして、スラム方面の外壁を少し離れたら、それほど大きくはありませんが川が流れています。そこから水を引けば、工業用水の問題は解決します。

こうした複数の理由がある為、私はスラム方面の土地を要求しました。少なくとも、王都の近くでこれ以上に良い条件の土地は存在しないでしょう。

「なるほど、事情はわかった」

マルクリーヌさんは頷きます。

「王都の外の土地であれば、こちらとしても安い支払いだ。是非、この交渉には乗らせてもらいたい」

そして、マルクリーヌさんが手を伸ばします。交渉成立の握手です。私はこれを受けて、がっしりと握り返します。

「ボクの方からも、上にお願ひしておくよ。ボクとマルマルの二人で要求すれば、まず間違いなく通るだろうからね。土地は手に入れたものだと思ってもらっつていいよ」

「おお、それは助かります。それで、頂く土地の範囲についてですが。できれば川沿いの土地が含まれるようお願いできませんか？」

「もちろん。そこは言い含めておくつもりだよ」

「ありがとうございます」

私とシュリ君は、そうして取引の細かい部分を話し合い詰めていきます。

すると、不意にマルクリーヌさんが笑みをこぼします。

「どうかしましたか？」

「いや。単に、感心していたんだ」

感心、と言われても、思い当たる節がありません。私は理由を問いたげな視線をマルクリーヌさんに注ぎます。

「初めて乙木殿と会った時、不思議な人だと思っていた。そして、この人は勇者の側ではなく、きつと私達騎士団が守るべき人間の一人なのだろう、と感じたよ」

確かに、言われてみればそういう扱いを受けていたような気がします。

「それが、気づけば城を出て独り立ちしていた。守るべき者から、騎士団の根底を支える市民の一人となった。そして今では、こうして対等な交渉事を持ちかけられるほどになっている。いろいろな意味で、今の乙木殿は私にとって対等な友人になった。目まぐるしく変わる状況と、それでいて着実に進歩していく乙木殿を、素晴らしい人だ、とふと思ったのだよ」

マルクリーヌさんは、感慨深げに言います。確かに、最初の出会いから今の状況を想像するのは難しいでしょう。

思えば、随分と私も変わったような気がします。

「ありがとうございます、マルクリーヌさん」

「ふふつ。なぜそこで感謝する。妙なところで感謝する癖は健在のようだな？」

私がふと思うまま言葉を零したところ、マルクリーヌさんは愉快げに笑いました。

笑いどころでは無かったのですが、まあいいでしょう。こうした良好な関係を、可能な限り続けていきたいものです。

「これからも、よろしく頼むぞ、乙木殿」

「はい。よろしくおねがいます」

私とマルクリーヌさんは、再び握手を交わしました。

03 新店長

さて、工場を作るための土地の目処は立ちました。次にやらなければならぬのは、魔道具店の新しい店長の任命です。

何しろ、私は当分の間工場にかかりつきりになります。その間、魔道具店の経営を私以外の誰かに任せなければなりません。

いくら私でも、身体は一つですからね。工場と魔道具店の両方を同時に管理するのは不可能なのです。

そこで新たな店長を任命する必要があるのですが、候補は二人います。

一人は有咲さん。初期からずっと一緒に店を回してきましたし、最近はカルキュレイターの成長もあって数字の管理は得意です。店の売上や在庫関連の計算を見事にこなしてくれてくれるでしょう。

もう一人はマリアさんです。この近辺の住人でもあり、A級冒険者の夫人であつたお陰で顔も効きます。ご近所の奥様から需要や評判などを聞き出すことも得意です。また、地頭も良く、店を経営する上で必要な知識をすんなり吸収し、今ではパトリリーダー的なポジションにあります。

経営判断を任せれば、見事に店を切り盛りしてくれるでしょう。どちらに任せるかは、まだ決めていません。これから二人と話を決めてようと思っています。

というわけで、まずは有咲さん呼び出しました。

これから工場を作ること。その関係で店を空けるから、新しい店長を探していること。それらを説明した上で、有咲さんに依頼します。

「アタシが、店長なんて出来ると思ってたの？」

「はい。最近の有咲さんは真面目に働いていますし、カルキュレイターのお蔭で計算にも強くなりました。お店を任せても大丈夫かな、と思ひまして」

私が言うと、有咲さんは眉を顰めます。

「出来るかもしれないけどさ。正直、アタシは自信無いよ。いきなり店を任されたって、どうすりゃいいのか想像できねーしな」

「ふむ、なるほど」

確かに、有咲さんに店の切り盛りまで任せるとなると、少々不安があるのは事実です。

有咲さんの方から拒否されたとなると、あとはマリアさんだけになりますね。

というわけで、次はマリアさんをお願いをしてみたのですが。

「私も、正直難しいと思いますわ」

困り顔で、そう断られてしまいます。

「ちなみに、理由をお聞きしても？」

「ええ。私では、経営判断がお客様寄りになりすぎると思いますが。店を任せられる立場としては、視点が偏っていますわ」

なるほど。マリアさんはご近所の奥様方や、顔見知りの冒険者と仲が良いわけですからね。そうした人たちに寄り添いすぎる判断をして、店としては理想的でない結果を呼ぶ可能性がある、ということでしょう。

確かにその可能性は存在します。が、気にしすぎても仕方のないことなので、ここはあまり深く考えなくても良いのですが。

「どうしても、駄目ですか？」

「はい。適任は、私以外に居ると思います」

「どうやら、意思は固いようです。」

「これは、どうにかして対策を考えなければなりませんね。」

04 引き抜き

魔道具店の新しい店長問題についての解決策を取る為、私はとある場所に顔を出しました。

時刻は早朝。冒険者ギルドです。

「暇すぎるう〜」

ギルドの中に入ると、受付嬢のシャーリーさんがぼやき声を上げていました。

「お久しぶりです、シャーリーさん」

「えっ？ お、乙木さん！」

相当驚いたのが、シャーリーさんはシャキッと姿勢を正します。

「本当に、お久しぶりですね。今日は何の御用ですか？」

「はい。実はシャーリーさんに良いお話を持ってきたのですが」

「良いお話？」

「ええ。と言っても、本当に良いお話かどうかは考えようによるのですが」

「えっと、そのお話というのは？」

勿体ぶる私を急かすように、シャーリーさんが問います。私は、今日ここに来た目的であり、新店長問題を解決する一手となる言葉

を口にします。

「貴女を引き抜きに来ました。シャーリーさん。私の店で、働いてみませんか？」

私がシャーリーさんの引き抜きという案を思いついたのには、幾つかの理由と経緯があります。

まず、新店長問題についてです。私が新店長に、と考えていた有咲さんとマリアさん。二人に断られたことで、新店長に相応しい人材が居なくなってしまう。

そして、二人がそれぞれ拒否する理由として挙げたのは、能力不足。つまり、それを補う何かさえあれば、二人は新店長を務めてくれるという意味でもあります。

ですが、それは単純に解決できる問題ではありません。

元々、私は二人のどちらかを店長に、そしてもう一人を補佐役として店の運営を任せるつもりでした。

しかし、有咲さんとマリアさんの組み合わせでは、肝心の問題点、つまり能力不足を補い合うことが出来ないのです。

有咲さんとマリアさんが不足していると感じているのは、店長としての経営判断力、そして視野の広さです。有咲さんをマリアさんが補佐すれば幾らか補うことが出来ますが、それでもマリアさんが必要と感じているレベルには達することが出来ません。

つまり、二人のどちらかに店長を任せても、結局同じ部分が不足するわけです。

そこで、私はその不足部分を補う人材を雇おう、という方針を固

めました。

店側の立場で、店舗経営に関する判断が可能な人材。そんな人を雇い入れることができれば、マリアさんの不足部分をフォローできます。

むしろ、マリアさんと二人に分権するのも良いかもしれませんが。そして二人の判断を、有咲さんが実際の数字等からカルキュレイターで取捨選択する。

つまり三人にそれぞれ別の役割と仕事を任せて、三人でお店を経営してもらおう、という形です。

いきなり店長という大きな役割を任せるよりは、私が居ない間の補佐、という名目で三人に役割を分担する方が気楽にできるかもしれません。

そうになると、新たに雇い入れる人材には即戦力性が求められます。そして、複数人数で仕事を共有し、役割分担して働く経験のある人だとなお良いでしょう。

これらの条件を踏まえ、ギルドの受付嬢であるシャーリーさんが適任だという判断に至りました。

ギルドの受付嬢は、普段から冒険者を相手に納品や依頼における折衝を行っています。冒険者側ではなく、ギルド側の都合を考慮した上で、です。

つまり、大前提となる『店の都合を考慮した経営判断』をする為の下地は十分にあると言えます。

また、普段から金銭のやり取りを任されている立場でもあるため、私の店での即戦力性もあります。少し仕事を教えるだけで、すぐにも一人前の従業員になれるでしょう。

そして同じ受付嬢同士で仕事を共有する経験もあるはずですから、

役割分担にも慣れているでしょう。

そうした理由から、私はギルドの受付嬢を、その中でもシャーリーさんを引き抜くことに決めました。

私が冒険者として活動していた頃からの、最も付き合いの深い受付嬢ですからね。人となりも把握しているので、声を掛けやすかったという理由もあります。

というような事情を、私はシャーリーさんに説明しました。

前提として私の店が今どういう状況にあるのか、ということから話さなければならなかったので、かなり長時間話し込んでしまいました。

が、おおよそ必要なことは全てお伝えしました。

「いかがでしょう。私のお店で、働いて頂けませんでしょうか？」

私が尋ねると、シャーリーさんは考え込むような仕草を見せます。そして数秒の沈黙の後、答えを口にします。

「実は、乙木さんの居なくなった冒険者ギルドが退屈だなあ、って思ってた部分もあるんです」

「ほうほう、なるほど」

確かに、かつての私は大量かつ多種多様な薬草を毎日納品していましたがからね。しかも専属受付嬢。仕事の密度で言えば、私が居た頃の方が濃いと言えるでしょう。

「なので、もしも乙木さんのお店であの頃みたいな充実した仕事が出来たら、そのお話に乗りたいです」

「そうですね、ありがとうございます」

やり甲斐を理由に、交渉するまでもなく一発で引き抜き成功です。断られた場合は、受付嬢という仕事が若い内しか成り立たない等の理由を挙げ、将来の保証等を交渉材料にするつもりでしたが。どうやらそうした小細工は不要だったようです。

「では、近日中に詳細を詰めていきましょう」

「はい！是非、よろしくおねがいします！」

どうにか話が纏まりそうで、ありがたいことです。これで、新店長問題も解決するでしょう。

シャーリーさんを引き抜き、私の魔道具店に来てもらうことが決まって約半月。つい先日、実際にシャーリーさんに働いてもらい、様子を見ていましたが、なかなか良好です。

マリアさんには売り場全般を、シャーリーさんには販売計画、企画を担当してもらうことになりました。

売り場については、既に顧客と顔なじみでもあり、ノウハウもあるマリアさんに任せました。一方で、あくまでも商品の売れ行きや利益率等から何を売りたい、何についてはコストを抑えたい、等といった部分はシャーリーさんに考えてもらうことにしました。

初日に一通り必要な知識をシャーリーさんに叩き込んだ後は、実際に店舗で平店員に混ざって現場を経験してもらいました。その上で、マリアさんとは違う視点から経営判断を下してもらいます。

予想もしていなかったことですが、シャーリーさんは恐ろしく飲み込みが早く、翌日には売り場に関する提案を出せるほどでした。

「実は私、情報処理系のスキル持ちなんです！」

と、自慢げに教えてくれたシャーリーさん。ステータス自体は見せてもらえませんでした。が、飲み込みの早さから言ってスキル持ちであることは間違いないでしょう。

考えてみれば、ギルドの受付嬢はなかなかの激務。多様な仕事を

こなしつつ、並行して冒険者を相手に接客もしていたのですから、それぐらいの能力があつて当然なのかもしれません。

思い返してみれば、シャーリーさんは専属受付嬢として大量の薬草納品を処理したあと、普段の受付嬢の業務もこなしていたわけですからね。そうした仕事に有利なスキルが無いと、むしろやっていけないレベルの激務だったでしょう。

逆に言えば、スキルに恵まれているからこそ、普段の受付嬢としての業務に不満足感を覚えたのかもしれない。

何にせよ、シャーリーさんは想像以上の早さで仕事を覚えてくれています。

さらに言えば、三人の連携についても非常に良い状態になっています。

シャーリーさんは自分自身がスキル持ちであり、マリアさんは元A級冒険者の妻。スキルの重要性をよく理解しているからこそ、有咲さんのチートスキル『カルキュレイター』による判断を尊重してくれます。

お蔭で、二人の意見が対立しても、有咲さんが最終判断を下すことで不和を起こすこと無く、しかも素早い取捨選択が出来ています。

実際に三人体制にしてみても分かりましたが、私の想像以上に上手く噛み合っています。

これは、私が工場の方に労力の全てを割ける日が来るのも近いでしょう。

とまあ、そんな話を三人それぞれに話してみました。これからも

この調子で頼みます、という意味を込めて。

すると、三人それぞれから思わぬ反応が帰ってきました。

「上手くいくかもしんねーけどさ。でも、たまにはちゃんと店の方に顔出せよ。アタシら二人で始めた店なんだからさ。おっさんが居なくなると、なんつーか、寂しいじゃん」

と、少しイジケたような様子で言ってきたのは有咲さん。どうやら、魔道具店に思い入れを持ってくれているようです。嬉しい限りですね。

しかも、私が居なくなると寂しいとまで言ってくれました。叔父冥利に尽きます。

「はい。もちろんです。私も、有咲さんの顔を見たいですからね。会いに帰ってきますよ」

「ばっ、ばーか！　そういうのじゃねーから！」

有咲さんは顔を赤くして、そっぽを向きます。

我が姪っ子は、やはり良い子で可愛らしいですね。ちゃんと幸せにしてあげたいとつくづく思います。

そして、有咲さんの次に話をしたのはシャーリーさんでした。

「あの、乙木さんは新しい仕事を始めても、魔道具店から手を引くわけじゃないんですよね？」

「ええ。工場の方が落ち着けば、またお店の方に戻ってきますよ。まだまだ店を大きくしたいですからね」

私が言つと、シャーリーさんは安堵したような表情を浮かべます。

「それを聞いて安心しました。なら、私は乙木さんがいつ帰ってきてもいいように、このお店を守り、育てていきますね！」

「はい、お願いします」

「待つてますから。ちゃんと」

そして意味ありげなウインクをしてみせた後、仕事に戻っていき
ました。

06 既成事実

最後にマリアさんに話をすると、少し難しい顔をしてこう訊かれました。

「その話、シャーリーさんにも同じようなことを言ったのですか？」

「ええ。それが何かしましたか？」

私が問うと、マリアさんは呆れたように息を吐いてから説明してくれません。

「はあ。乙木様は常識に欠けるところがあると思っていましたけれど。こればかりは少し良くありませんわね」

「それは、なんと。詳しく教えていただきたいですね」

「ええ。成功した冒険者が足を洗って個人の店を持つ時に、自分の専属受付嬢を引き抜く。それって、普通は恋人や愛人など、女性を囲う意味を持ちますの」

言われて、一瞬頭の中が真っ白になります。

そしてすぐに再起動して、ここ最近のシャーリーさんの様子を思い返します。

「ああ、なるほど。困っておきながら、仕事を任せたら自分はどこか別の場所へ出ていってしまうというのは、不誠実な男性に見えますね」

「見えると言いますか、実際不誠実ですわね。シャーリーさんは何と言っていましたか？」

「工場の方が落ち着いたら魔道具店に戻ってくる、と説明したら安心して頂けたようでしたね」

「間違いなく、嫁に貰われるつもりでいますわね」

なるほど、なるほど。ははあ、そういうことだったのですか。

「この問題は先送りにさせて頂きます」

「近い内に話し合っておかないと、ひどいことになりますわよ？」

「ええ。しかし、良い案を思いつくまでは藪蛇にならぬよう素知らぬフリをするのが無難かと」

マリアさんがジト目で、私を睨んでいます。

ええ、分かっています。どう考えてもクズの所業です。しかし、さすがに知らぬ内にプロポーズをしていたというのは、対処に困ってしまいます。

「ですので、しばらくこの話に関しては秘密、ということをお願いできませんでしょうか？」

「まあ、仕方ありませんわね。無駄に状況を掻き乱しても、混乱するだけですもの」

そう言って、マリアさんはまた溜息を吐きます。

「そもそも、乙木様ほどの甲斐性があれば、三人共を囲っても何も不自然ではありませんけれど。覚悟を決めてもらうのが、正直言って一番の解決策ですわ」

「あの、待って下さい。三人というのは何の話です？」

私が言つと、マリアさんのジト目がさらに鋭くなります。

「私と、シャーリーさん。それに有咲さんですわ」

「有咲さんまで、ですか？」

「世間的に見れば、乙木様はシャーリーさんを囲つたわけですもの。そのシャーリーさんと同格か、それ以上の立場で同じ店を任せているのですから。普通は、全員を愛人として囲っているものと見られますわよ。実際、私も今日つい先程までそう考えていましたわ」

なるほど。元冒険者という肩書きはそういう風に見られるものなのですか。流石に現代日本と感覚が違いすぎて、予想だにしていま
せんでした。

「中でも、有咲さんは私とシャーリーさんよりも付き合いが長いですし、スキルの関係とは言え最終決定権をお持ちですから、てつきり正妻としてお迎えするものかと思っていきましたもの。今日になって『工場に集中するので店は任せた』と、絶縁状のようなことを言われて、正直かなり動揺しましたわ」

「いや、本当になんといいますが、すみません」

とにかく、こればかりは謝るしかありませんね。

「まあでも、そんな乙木様を支えていこうと決めたのですから。こうして既成事実が出来たのは良いことだと思わせていただきますわ」

「え、あの、私はまだ結婚をするつもりは」

「これで私たちを愛人としても囲って頂けないとなれば、逆に私たちが問題のある女だと世間に思われてしまいますのよ？ その責任、とって頂けますよね？」

確かに、マリアさんの言うとおりです。私が私の都合で行動した

結果、三人の悪評を流すことになるのは良くありません。

下手をすれば、その悪評が原因で結婚出来ない、という状況だつてありえます。

まさか、このような形で問題が発生するとは。予想外の事態ですが、しかし対処しないわけにはいきません。

「すみません、この件については保留で」

「ええ。良いお返事、お待ちしておりますわ」

マリアさんは、最後だけニツコリと、満面の笑みを浮かべて言いました。

どこか威圧的な笑顔に見えるのは、私の気の所為では無いのでしよう。

マリアさんに指摘された問題に関しては、ひとまず保留しておいて。私は、とりあえず工場の話を進めることにしました。

後日、マルクリーヌさんから売る土地に関する手続き等がある為、王宮に来てもらいたい、と呼び出されました。

なんでも、ただ土地を売るだけですと体裁が悪いので、国へ莫大な利益をもたらしたことを賞して名誉貴族に叙爵すること。

爵位は一代限りのものですが、土地は爵位ではなく褒賞として国から与えられるので、個人資産として扱われるのだとか。まあ、つまり肩書だけ貴族になるというわけです。

その関連の手続きと、簡単な叙爵式を執り行うとかで、王宮に出頭することとなりました。

で、今日がその当日。今はマルクリーヌさんの執務室で、先程説明したとおりの話を聞かされたところです。

「なるほど。で、私は今日は何をすればよいのですか？」

「とりあえず、ここで書類関連の処理を済ませてしましましょう。午後に叙爵式があるのですが、それまで暇となってしまうでしょうし、応接室なり何なりで時間を潰していただければ。難しい式ではないので、始まる前にも手順を覚えてもらえば問題ありません」「なるほど」

つまり、王宮を比較的自由に見て回る時間がある、ということですね。

恐らく今でも勇者たちは王宮に居るはずですよ。全員を戦場に駆り出すとは思えませんから、少なくとも何人かは残っているはず。

そんな勇者たちに接触するチャンスとも言えますね。

「ところで乙木殿」

「はい？」

「ついに身を固めるつもりになったらしいな？」

何を言われたのか咄嗟に分からず、私は身動きをピタリと止めてしまいます。

身体を硬化させるスキルはあっただろうか、とか関係ないことを考えてしまうほどです。

身を固める、つまり結婚。

私が受付嬢のシャーリーさんを引き抜いた話は、どうやらマルクリー又さんにまで伝わっていたようです。

「どこでその話をお聞きに？」

「巷ではかなりの噂になっていらっしゃるらしいぞ。あの洞窟ドワーフが嫁を貰うらしい、とな」

自分の外見の話題性が高いという事実を、つい忘れがちになります。

なるほど、言われてみれば。町内で有名な変なおじさんがある日嫁を貰ってきた。それも三人も。こんなの、噂が立つに決まっています。

「しかし、それにしてもよく知っておいでですね。あまり街での噂などは気にしない方かと思っていたのですが」

「あまりにも話題になりすぎて、勝手に耳に入ってきたのだ。それで、よくよく聞いてみればその噂の主は乙木殿だというし。私もかなり驚いたぞ。比較的親しい友人のつもりだったが、そんな素振りを一度も見せて貰えなかったからな」

ええ。そもそも、そんなつもりはありませんでしたからね。

とは、さすがに言えません。

「はは、まあ、そうですね」

こういう時は曖昧に笑って曖昧に同意するのが一番です。何に同意したかをはつきりさせなければ、後でどうとでも言い逃れ出来るという寸法です。

「ふむ。まあ、乙木殿にとって私はそういう人に過ぎなかったという事かな？」

「あー、それは、どうなんでしょうかね？」

こうして曖昧に否定するのもまた、処世術の一つです。曖昧な肯定と曖昧な否定、この二つを相手が望む返答に合わせて使い分けることで、何の答えも返さずに会話をすることが可能になります。

「こうなってしまったから正直にいうが、実は私も乙木殿の事は狙っていたのだよ」

「は？」

急にマルクリーヌさんが、寂しげな表情を浮かべて爆弾発言を投下してきます。

今の話の流れで、なぜそれを暴露するつもりになったのでしょうか。そして、狙っていたとはどういうことでしょうか。マルクリー又さんもまた、私に嫁として貰われることを計画していたのでしょうか？

謎は尽きません。私は詳細を問いたげな視線をマルクリー又さんに向けます。

「そう困った顔をしないでくれ、乙木殿。単なる暴露話だ。今さらどうこうするつもりはない」

多分、マルクリー又さんの想定外の方向で私は困っているのですが。まあ、説明するわけにもいきません。流れに任せて詳しい話を聞いてしましましょう。

「いつからですか？」

「初めてお会いした日から。あの日、私の仕事を優しく労ってくれた。そんな経験は、初めてだったよ。讃えられることは数あれど、一国の騎士団長を前に初対面で労いの言葉をかける男などはいなかった。だから恐らく、一目惚れだったのだろう」

随分と、感慨深げに話し込むマルクリー又さん。重い。話が重い。そして責任が重いです。今の私には、手に余りすぎる問題です。

「あの日から、私はつい考えるようになってしまった。何のしがらみもなく、ただ帰るだけで労い、温かい言葉をかけてくれる家があればどれだけ幸せか、と。それを考えると、急に寂しいという気持ち膨れ上がったのだ。いわゆる結婚願望、というものを初めて意識した。そして同時に、思い浮かぶのは乙木殿。貴方の顔だった」

話を聞くほどに、マルクリー又さんの本気度が伝わってきます。

正直、私は彼女を攻略したつもりが無かったので、完全に寝耳に水です。

こうなると、嬉しさ半分、焦り半分といった気持ちになってしまいます。確かに好かれていることは嬉しいですが、どう対処して良いのか分からず焦りも湧き上がります。

「それに気付いて以来、私はずっと乙木殿を狙っていたよ。今回だって、名誉貴族となれば結婚まで一歩前進だな、と勝手に舞い上がっていたぐらいだからな」

「あの、それは何故でしょうか？」

「騎士団長ともなれば、貴族にも準ずる地位だ。名誉貴族やその子息でなければ、格が釣り合わない。そういう問題が解消されて、私に追い風が吹いてきた、と思っていたのだよ。まあ、気の所為だったわけだが」

はあ、とため息を吐くマルクリーヌさん。

いやいや。正直、こっちだって吐きたいぐらいですが。あまりにも話がこじれ過ぎて、悲鳴を上げたくありません。

08 曖昧な弁明と複雑な誤解

「あー、マルクリーヌさん。その件なのですが、思われているような状況ではありませんよ」

私はマルクリーヌさんの誤解を解くために、どうにか言葉を選びつつ、弁明します。

とは言え、シャーリーさんへの対処が決まって居ない状態であまり詳細な話を広めたくはないので、具体的なことは言えません。

結局、曖昧な言い訳を連ねることになってしまいます。

「実は結婚といいですか、まだそこまでの状況ではないと言いますか」

「は？ どういう意味だそれは？」

マルクリーヌさんが眉を顰めます。責められる前に、うまく責任を誤魔化しましょう。

「いえ。別に将来的に結婚するつもりが無いというわけではないんです。ただ、特定の女性を養う上で、まだ私は十分な立場を得てはいませんので。将来的なことを考えますと、状況はいくらでも変化するものですよ。そうした場合でも、きっちり養うべき人を養える財力、守るべき人を守る権力が得られるまでは、身を固めるつもりは無いんですよ」

私はどうか、具体的な事情には触れずに自分の状況を説明しました。要するに、この世界で安全を得て、勇者達を保護するまでは結婚できない、という意味です。

戦争の道具となる子供たちや有咲さんを安全に保護するのが優先すべき目標ですからね。だというのに、自分から結婚なり子作りなりをして、守るべき人を増やすのは負担が大きくなりすぎます。

もちろん、私を慕ってくれる方々に対して相応の責任を取るつもりではありますが。最優先ではなく、あくまでも状況が落ち着いてからの話になります。

マルクリーヌさんは私の目標についてある程度把握してくれていてるはずですから、そうした事情についても察してくれるはずですよ。

「なるほど、そういうことが」

マルクリーヌさんは何度も頷きます。どうやらご理解頂けたようです。

「つまり、三人に限らず奥方を増やすつもりであると。そこに誰がこれから名を連ねるかも分からない。名誉貴族程度では、例えば私のような貴族に準ずる地位の者を複数人娶るのは難しい。故に、これからさらなる地位向上を図っていく、というわけだな？」

全く理解して頂けませんでした。

困りましたね。こうなると、詳細を話さなければ勘違いを正すのは難しくなります。

私がついに全てを打ち明けようか、と迷っていたところ。マルクリーヌさんはさらに追い込みを掛けてきます。

「そういう事情であれば、仕方あるまい。乙木殿が私を貰ってくれるほどの名士になるまで、待つことにしよう」

何故か、マルクリー又さんの脳内では自分も嫁になることが確定しているようです。恐らく、私が嫁を増やすために地位向上を図っている、という勘違いが原因でしょう。

何故嫁を増やす為に地位向上する必要があるのか。それは相応に高い身分の女性を嫁に貰う為。そして私の交流関係から言って、一定以上に親しく、かつ高い身分の女性といえはマルクリー又さんぐらいなものです。

要するに、マルクリー又さんの解釈間違いは、そのままマルクリー又さんを嫁に貰うことを意味してしまうのです。

なんともまあ、ややこしい勘違いをしていらっしやいますね。この誤解を解くのは非常に難しいでしょう。

となれば。私にできることは一つだけです。

「もしもいつか、そういった大切な女性が出来た時は、私から必ず迎えに行きます」

「っ！ それは、楽しみだな！」

厄介事は全部後回し。

断言さえしていなければ、後で何とでも言い訳できます。

と、思い込むことで現実逃避をさせて頂きましょう。

「うーん、困りましたね」

私はボヤキながら、王宮内の中庭を歩きます。

シャーリーさんに引き続き、マルクリー又さんまで勘違いさせてしまいました。多くの女性に言い寄られるのは大変うれしいのですが、今は都合が悪い。身を固めるには早すぎます。

最低でも、まずは工場を成功させなければなりません。私自身が動かなくても、私自身が動くよりも大きな利益を生み続ける仕組みが必要です。

そうなれば、本当にシャーリーさんやマルクリー又さんを嫁に貰っても問題ないでしょう。自分の時間を持ちつつ、力を蓄え続けることが可能なはずです。

要するに、今のまま成長を続ければ問題ない、ということになります。

しかし、そう上手くいくのかどうかは分かりません。そもそも勘違いが始まりですから、どこでどう話がこじれるかも予想がつきません。

勘違いを真実に、つまり私が本当に皆さんを嫁に貰えば全て丸く収まるのですが。しかし今すぐに、というわけにもいきません。こ

の先、事態が急変しないとも限らないわけです。
となると、解決策として皆さんを娶る、というだけでは済まない
可能性もあるわけです。

「しかしまあ、考えても仕方ありませんね」

結局、そうした結論に落ち着きます。私は独り言を呟きながら、
何周目かも分からない中庭の徘徊を終えます。

そろそろ応接室に戻りましょう。叙爵式の打ち合わせをする場合
いです。

「おや？」

ふと、視界の隅でなにかが動くのが見えました。顔を向けると、
どうやら一人の少女がこちらの様子を伺っているようです。

「どうかなさったのですか？」

私は少女に近寄りながら、様子を観察します。表情が読み取りづ
らいほど、髪を長く伸ばした少女。見覚えがあります。召喚された
勇者たちの一人。確か、名前は七竈八色さん。ミステリアスな外見
と特徴的な名前の組み合わせで、よく記憶に残っています。

そんな少女が、何やら私と話をしたそうにしています。何かあつ
たのかは分かりませんが、これは好都合。勇者側の人間と繋がり
を作る良い機会です。

「何か言いたいことがあるのですか？」

「えっと、あの」

私が問うと、七竈さんはためらいがちになりながらも、口を開きます。

「ついに、迎えに来てくれたのですね！ 愛しの人！」
「は？」

そして、突拍子の無い発言についていけず、変な声を上げてしまいます。

「あの、どういうことですか？」

「ずっとお待ちしていたんです。お優しい貴方は、きっと罪を犯した私をいつか許し、迎えに来てくれると信じて！」

事情が全く読めませんね。罪がどうか、私にはさっぱり分かりません。

「ええと、よく分からないのですが。詳しく教えて貰えませんか？」

「はい！ 何なりとお聞きください、愛しの人！」

「まず、その愛しの人というのはなんですか？」

私が問うと、七竈さんは首を傾げます。

「言葉通りの意味です。私にとって愛しい人ですから、そう呼んでいます」

「私が、七竈さんに好かれていたのですか？」

「覚えて、いらっしやらないのですか？」

悲しげな顔をする七竈さん。しかし、何も知らない以上、この子の期待に答えてあげることが出来ません。

「そうですね、覚えていないのでしたら、全て包み隠さずお話ししましょう」

「はあ。お願いします」

どうやら、七竈さんの方から事情を話していただけるようです。

「あれは、私が中学三年生の頃でした」

ほうほう。となると、まだ現代日本に居て、この世界に召喚される前の話ですね。面識は無いはずなのですが、私の思い違いなのでしょう。

「根暗で友達の居なかった私は、ある日貴方様が働かれているコンビニでお弁当を買ったために立ち寄りました」

まあ、ありうる話です。そこで何かが起こったが為に、恐らく七竈さんに顔を覚えられたのでしょう。

「そして会計を通し、買い物を終えた時でした」

「ほうほう、それで？」

「貴方様は、この私に『ありがとうございます』と、笑顔で優しく言っして下さいました」

「まあ、店員ですからね」

「その日から、私は貴方様の優しさに心を奪われたのです」

「えー、さっぱり分からないのですが」

急に話が飛んだので、理解が追いつきませんでした。

「つまり、私はあの日の優しさに一目惚れしてしまったのです」

「そう、ですか」

なるほど。

つまりこの子は、どこかおかしい人なのでしょう。

10 ストーカー

七竈さんについて、すこし考えてみます。

会計時の私の一言で、私に一目惚れをした、とのこと。優しくされたのが嬉しかった、と。まあ、こちらとしては業務上やらなければならぬことをやったただけなのですが。

しかし、そうした言葉がふと心に沁みることもあるのでしょうか。世の中誰もが健全な日々を過ごせるわけではありませんからね。心が荒んでいる時であれば、たとえコンビニ店員の一言でもグツと来るのかもしれない。

と、考察してみました。どっちにしる違和感というか、不可解さは拭えません。

降って湧いたような不自然な好意というのは、正直嬉しさよりも不気味さの方が勝ってしまえます。こうして説明を受けても理解出来ない場合は、特に。

ここは、神経を逆撫でない方が良いでしょう。七竈さんを刺激しないように配慮しつつ、より詳しく話を聞き出します。

「では次の質問です。ずっとお待ちしていた、というのは何故ですか？ 私を王宮で待っていたのですか？」

「はい。貴方様を裏切った私は、もうお側にいる資格は無いと思いましたが。なので、貴方様が私を許し、迎えに来てくれるまでは近づ

かないと決めていたのです」

「ええと、その裏切りというのは？」

「召喚された日のことです。私は、口下手なあまりとっさに何も言えず、追放される貴方様をかばうことができませんでした」

確かに、あの日の私は公開処刑のようなことをされました。それを庇わなかったとなれば、罪悪感を覚えるのにも頷けます。

「しかし、だからと言って側にいる資格は無い、とはどういうことですか？ それに、迎えに来てくれるまで、というのもよく分からない理屈ですね」

「言葉通りの意味です。私はいつも貴方様の側にいました。でも、罪を犯した私はもう側にはいけなかったのです」

ほうほう、いつも側に。

急に背筋に寒気が走ります。

「その、いつも、というのはどの程度の話ですか？」

「っ！ ご、ごめんなさい愛しの人！ 本当なら、二十四時間いつでもどこでも貴方様の側にいたかったです！ でも、学校に通いながらだとお昼休みと放課後から日付が変わるまでが限界で、一日の半分も一緒に居ることは出来ていませんでした！」

申し訳なさそうな顔で、頭を下げる七竈さん。しかしまあ、申し訳ないと思うならむしろ放っておいて欲しいですね。

つまり話を要約すると、こうです。

七竈さんは、ある日突然レジで挨拶をしてくれた私に一目惚れした。

それ以来、お昼休みや放課後の間はずっと私の側にいた。

ですが、私は七竈さんの姿に見覚えがありません。
となると、七竈さんは私の近くに居ながら、私に見つからないよ
うに姿を隠しつつ、私を監視していたことになります。

ストーカー、というやつですね。

「正気ですか？」

「はい？ 私は、いつでも正気で、本気です！」

両手でグツとガッツポーズをする七竈さん。可愛らしい仕草です
が、そんなもので私は騙されませんよ。貴女は、紛れもなく犯罪者
です。

「四六時中私のことを見ていたということは、私のことをかなり知
っておりますが」

「はい。愛しの人のことについては、この世の誰よりも存じ上げて
いる自信があります！ 例えば、ご自宅の鍵の予備は封筒に入れて
ポストの裏に忍ばせて隠してあることとか、成人向け雑誌は生身の
女性よりも漫画の方が好みだとか、エアコンが壊れた時に室外機を
付け替えた位置が微妙に悪くて日の当たる場所だったから冷房の効
きが悪いこととか」

お詳しい。普通に怖いですね、これは。

全身から冷や汗が溢れてきますが、表情には出しません。なるだ
け友好的な、優しいな笑顔を浮かべるよう努めます。

少しでも機嫌を損ねてはいけません。こういうタイプの人間は、
何をしてもかわかりませんからね。

「これからも、陰ながら私の側に居続けるつもりですか？」

「いいえ。むしろ、迎えに来てくれたのですからもう離れません。

堂々と、愛しの人の隣に居続けるつもりです。もう二度と、離れませんが！」

いえいえ、離れて下さい。とは、さすがに言えませんね。

「なるほど。しかし、今日のところはこの辺りで。私もこの後、用事がありますので」

私はその場で回れ右をして、七竈さんに背中を向けて逃げ出します。

「お待ち下さい！」

しかし、その私の前に七竈さんは一瞬にして姿を現しました。

「は、速い！」

「ええ。私は女神様から『超加速』のスキルを頂いていますから。例え世界の果てに貴方様がいたとしても、一瞬で追いついてみせます！」

ストーカーに付けてはいけないスキルが付いているようです。

超加速し、逃れることも捕まえることも出来ないストーカー。正直言って、怖すぎます。

11 クズエピソード

逃げることもままならないとなれば、出来ることは一つしかありません。

それは、七竈さんの好意自体を無に返すという手段。私が嫌われてしまえば、もうストーリーカーされることもありません。万事解決です。

そして都合の良いことに、今日の私は女性に嫌われるには非常に便利なエピソードを抱えています。

そう、何人もの女性を勘違いさせ、嫁に貰う予定である件についてです。しかも私は、煮え切らない態度で全て保留しています。こんなことをバラしてしまえば、あっさり嫌われるに違いありません。

「残念ですが、七竈さん。隣に居てもらうわけにはいきません」「えっ、どうしてですか!」

シヨックを受けた様子の七竈さん。この調子で、七竈さんに現実を突きつけていきましょう。

「実はですね。私はすでに、結婚をする予定なのです」「っ!」

「しかも、四人も。なので、隣に七竈さんを連れて行くことは出来ないんですよ」

「そう、ですか」

目を見開く七竈さん。ショックを受けている、ようには見えませんね。何やら様子がおかしい。

「さすが、私の愛しい人。すでにそんなに多くの女性を幸せにしていたんですね！」

まさかの、肯定的な解釈。

「あの、四人と結婚するんですが。いいのですか？」

「はい？ 何がですか？」

「四股をかける上、七竈さんは嫁に含まれません。それでも、受け入れられますか？」

「はい。貴方様の優しさが、一人の女性だけで受け止めきれるものでは無いというだけです。それに、私は妻より上の立場ですよ？ だったら、嫉妬なんてするはずありません」

「な、なるほど」

妻より上とは何なのか。

理解に苦しみますが、しかし七竈さんとしては問題無いようです。こうなると、もはや理屈ではありませんね。そういう怪奇現象として七竈さんの存在を受け入れる他ありません。

しかし、引き下がるわけにもいきません。さらなるクスエピソードで、七竈さんに嫌われてみましょう。

「しかし、四股だけではありません。実は、そもそも私は妻と結婚するつもりすら無かったのです。ただの勘違いで、女性を四人も捕まえてしまったのです」

「さすがです！ それだけ魅力溢れる貴方様ですから当然ですね！」

「その上、私は勘違いについても黙ったままです。つまり、女性を騙して結婚しようとしているのも同然なのですよ」

「何を言うのですか！ 貴方様と結婚できるなら、騙された方が幸せというもの。嘘を吐く優しさも時には必要です！ さすが、私の愛しい人ですっ！」

ふむふむ、なるほど。

何を言っても、意味はなさそうですね。

私はしばらく言葉を失って、呆然としてしまいます。そして少し経ってから気を取り直し、ようやく一言。

「ふむ。なんとなく、七竈さんという人が理解できたような気がします」

「嬉しいです、愛しい人っ！」

感極まった様子で、七竈さんは私に抱きついてきます。

要するに、七竈さんは私の全てを全肯定する怪奇現象そのものです。

つまりそういう性質を逆に利用してやれば、物事を上手く運ぶことも可能なのです。

「しかし七竈さん。やはり貴女を隣に連れて行くことは出来ません」

「な、何故ですかっ！」

「愛ですよ」

「愛、ですか」

私が意味ありげに言ってみせると、七竈さんは真面目な顔で話を聞く体勢に入ります。このまま適当な理屈をでっちあげ、説得に入らしましょう。

「愛の形というのは、行動で表現されます。しかし、いつも隣に居ることだけが愛の形ではありません。何故なら七竈さん。貴女自身がそうなのですから」

「私が、ですか？」

「ええ。隣に居ることが愛の証だとすれば、今まで隣に居なかった七竈さんは、私を愛していなかったことになります」

「っ！」

何かに気付いたように、ハツとする七竈さん。私は意味ありげに頷いてみせます。もちろん、その頷きには実際のところ何の意味もありません。

「そして愛は障害があればあるほど燃え上がる。距離や恋敵を乗り越えた時こそ、その愛はより深い愛なのだ証明できるのです」

「つまり、私にもそうやって愛を示せ、ということですね？」

「私は、何も指示しません。選ぶのは、七竈さん自身ですよ」

最後は、責任逃れの言葉で締めます。しかし意味ありげな言葉と態度が功を奏したのか。七竈さんは、すっかり騙されてくれた様子です。

「わかりましたっ！ これからも、今までどおりでいきますっ！」

「はい、お願いします」

これで、七竈さんは今までどおり、王宮で私を待ち続けてくれることでしょうか。

と、思ったのもつかの間。

「今日から私は、貴方様の最愛の人に相応しく、陰ながら見守り続けますっ！」

見事に七竈さんは、私の予想を覆してくれます。

とは言え、ストーカーに隣を占拠されるよりはマシでしょう。実際、日本に居た頃もストーカーによる実害は無かったわけですし。常に監視されているという事実さえ忘れてしまえば、何の問題も無いと言えます。

つまり作戦は成功。私は見事、七竈さんを撃退したも同然なわけです。

「では、七竈さん。私はこれから用事があるので」
「はい、貴方様。私も陰ながら、見守っていますから」

こうして、私はこの場を離れます。

七竈さんは『超加速』のスキルで一瞬にして姿を消し、どこかに身を潜めたようです。すでに、どこにも見当たりません。

背筋に走る妙な寒気に気づかないフリをしながら、私は応接室へと戻っていきます。

12 勇者達との接触

叙爵式はつつがなく終わりました。全くトラブルも無く、本当に簡単な式でしたので、私とマルクリーヌさん以外に誰もいない状態でしたが。

たった二人の叙爵式を終え、私はまた王宮内を歩き回ります。

久しぶりの王宮なので、マルクリーヌさんにも少し見て回ってみてはどうか、と提案された為です。そして、シュリ君にも顔をみせてきてはどうか、という話にもなりました。

なので、今はフラフラと王宮内を見て回りながら、シュリ君の居る研究室を目指しているところです。

ついでに、勇者の誰かと交流できれば御の字です。

すでに勇者と出会ったような気がしなくもありませんが、気の所為でしょう。超加速するストーカーが今も私をどこかで見ているのかもしれない。が、やはり気の所為でしょう。

なので、そういったストーカーの類ではない勇者との邂逅を求め、歩き回ります。

時刻も少し日が傾いてきた頃ですし、日中はどこかに出かけていた勇者も戻ってきているかもしれない。

という偶然を狙い、散策していたところ。都合よく、見覚えのあ

る勇者達の姿を見かけました。

「あれ、乙木さんっ?」

ちょうど正面から歩いてきた三人組のうち、一人が声を上げます。その顔はよく見知った顔。勇者称号の中でも、聖女を冠する少女。我が魔道具店の携帯食料『甘露餅』がお気に入り、よく買いにいっらっしゃる常連勇者、三森沙織さんです。

三森さんはトタトタ、とこちらへ可愛らしい仕草で駆け寄ってきます。駆け寄る姿すら、様になるとは。これが女子力というものでしょうか。

「どうなさったんですか? 王宮にいらっしゃるなんて、珍しいですね」

「ええ、まあ。所用で。それも終わったので、顔見知り顔を出していいのかな、と王宮内をフラフラしていたところですよ」

「あ、そうだったんですか。なら、今はお急ぎですか?」

「いえいえ。特に決まった用件があるわけではないので」

「そうですね、良かったです。お急ぎのところを引き止めちゃったら悪いかな、と思ったんですけど、平気みたいですね」

「ええ、むしろ三森さんとお会いできたなら、こちらとしてもお話ぐらいはしていきたくったぐらいですよ」

とまあ、私が三森さんと親しげに話を盛り上げていきます。そこに、先程まで三森さんと一緒に居た二人の少年が追いつき、話に入ってきて来ます。

「お久しぶりです、乙木さん」

「ようおっさん! 久しぶりだな」

礼儀正しく『勇者』の金浜蚩一君が。気さくに『剣聖』の東堂陽太君が声を掛けてきます。このお二人とは、かなり久々の顔合わせですね。勇者称号の四人が揃って私の魔道具店に来た日以来、会っていないかったです。

まあ、そもそも定期的に交流のある王宮内の勇者というのが『聖女』の三森さんと『賢者』の松里家君ぐらいなのですが。

その松里家君も、何やら最近忙しいのか顔を出してくれていません。そうした事情もあり、王宮内の様子を知るのに都合の良い伝手を増やしておきたかったわけです。

これも良い機会でしょう。松里家君以外の勇者称号の三人が集まっているのですから、他の召喚された方々を仲介して貰いましょう。

「お久しぶりです。最近どうでしょう、お変わりありませんか？」

「はい。まあ、最近になって僕らは前線に送られることが増えましたが。特に危険も無いので、大きな変化はありませんね」

金浜君の答えに、私は頷きます。勇者の皆さんが前線に送られる頻度は、そのまま戦争の激化を示します。つまり武器や防具等の戦時特需は確実に発生するでしょう。

一つ良い話を聞きました。他にも何か情報が得られないか、と話題を変えます。

「ところで、皆さんはこれからどちらに？」

「晩メシだよ。今王宮に居る奴ら全員で集まって晩メシだ。一応、クラスの結果みてーなやつを維持すんのにそれだけは続けていこう、って話になったからな」

今度は東堂君が答えてくれました。それも、理由まで添えてです。そして、確かにこれは良い選択です。集団を維持しなければ、王宮に渦巻く魑魅魍魎、つまり政治力に対抗し辛い個人が狙われ、何らかの不都合な事態を招くリスクが増えます。

ということとは、勇者の皆さんも王宮側の人間に対して何らかの不信感を抱いている、ということになります。

「王宮に、何か不審な動き等はありませんでしたか？」

そこで、私は最も重要な部分を確認します。すると、予想とは異なる答えが帰ってきました。

「ああ、まあそれも多少はあります。でも、一番は身内というか、僕たち召喚された勇者の側に原因があつて」

「ほう、それは初耳ですね」

私が興味を示すと、金浜君はニコリと微笑み、こう言います。

「どうぞでしょう、乙木さん。せっかくですし、夕食を一緒にしませんか？」

この話の流れで、この誘い。単に夕食を一緒に食べたくて誘った、というわけではないでしょう。

「ぜひ、こちらこそ」

私も笑みを浮かべて、金浜君の提案を受け入れます。

「それは良かった。では、行きましょう」

1777年、私は勇者の皆さんと夕食を共にすることとなりました。

13 勇者対勇者

食堂に向かう道中で、金浜君は事態の概要を説明してくれました。

「異変に気付いたのは勇樹でした。クラスメイトの中から、義務訓練に出ない人が不自然に増え始めました」

義務訓練とは、召喚された勇者の皆さんに対して王宮が施す教育の一つ。戦闘訓練のことです。これに加え、座学や礼儀作法について叩き込まれながら、必要な時は勇者として国の各地に駆けつけるというのが、松里家君からも聞いていた勇者の一日の過ごし方です。

極論ですが、これは学校の仕組みと似通っている為、勇者の皆さんはすんなり受け入れることが出来たようです。日々の座学や礼儀作法が授業であり、義務訓練が体育。勇者としての派遣は季節ごとの学校行事に当てはまります。

そして、受け入れられたからこそ、多くの勇者は従っていました。なのに、ある日状況が変わった。

「そこで勇樹は、原因が何かあると考えて、探りはじめました。それで、もう一つの異変に気付いたんです」

「もう一つ、ですか」

「ええ。王宮の人間の中に、不自然に非協力的な態度を取る者が複数居たんですよ」

「不自然な、と言いますと。それはどの程度の？」

「露骨に顔を顰めたり、話題を突然明後日の方向に反らしたり。そして、それだけ露骨に何かを隠していながら、誰もが妙に堂々としていました」

なるほど、確かにそれは不自然ですね。

普通なら隠し事はもう少し上手く隠します。そして、上手く隠せないのならそれに怯え、態度に出ます。

しかし、不自然な王宮の人間は、堂々と、かつ不器用に隠し事をしているのです。肝が座っているか、あるいは馬鹿であればそういうこともあるでしょう。

ただ、ケースとしては極めて少ないはず。なのに、同じような態度の人間が何人も見つかった。この全員が馬鹿、あるいは肝の座った人間である、というのは考えづらい。

「当然、勇樹も誰か第三者の関与を疑い、情報を集めました。その結果、犯人の目星はあっさり付きました」

「それはどちらさまで？」

「うちのクラスメイト、召喚勇者の一人。内藤隆です」

と、名前を言われても咄嗟には思い出せません。

「見た目はかなり派手ですから、覚えてませんか？ 灰色の髪に、唇にピアスを付けた男です」

言われてみると、そんな男が居たような記憶があります。

「内藤のスキルは『洗脳調教』といって、目の合った人間を自分の支配下に置き、どのような命令でも聞く奴隷のようなものに変えてしまうスキルなんです」

スキルの性能まで聞くと、状況が飲み込めてきました。

「なるほど、その洗脳調教のスキルで王宮の人間が支配され、変わってしまっただけですね？」

「お察しのとおりです」

金浜君は頷き、さらに説明を続けます。

「勇樹が調べた結果、どうやら不自然に変化した王宮の人間、そして俺らのクラスメイトは、みんなここ最近になって急に内藤と親しげにしているらしいんです。元々、俺らのクラスでも爪弾き者だった不良の彼が、そんな交友関係をあっさり築けるわけがありません。間違いなくスキルを使っただろう、って勇樹は言っていました」

金浜君の語った推測は、確かに納得の出来るものです。嫌われ者が、ある日突然人々に好かれるというのはありえません。どれだけ功績を積み、心を入れ替えたとしても。それまでの日々の積み重ねが、壁となつて立ち足はだかります。

だというのに、内藤君という子は急に友達が増えた。そして洗脳調教というチートスキル持ち。状況証拠は真つ黒です。

「ただ、勇樹にもそれ以上のことは分からなかった。内藤が人を集めて、クラスメイトに義務訓練をサボらせて、何をするつもりなのか。危険性も、何一つ分かっていません」

まあ、こればかりは仕方ないでしょう。行動から推測できるものが何もありませんし、直接聞くわけにもいきません。明確に敵対する態度を取っていない以上、藪蛇になる可能性だってあります。

「なので、だからこそ勇樹は今現在洗脳を受けていないはずのクラスメイトを集めて、団結する必要があると考えたんです。最初は俺と陽太、それに沙織に話を打ち明けてくれました。そこからは、俺たち四人で人を集めて、对内藤グループを結成した感じですね」

「なるほど、経緯はおおよそ分かりました」

私は金浜君の話聞き、納得したように頷いてみせます。そして、追加で質問を。

「聞いておきたいのですが、現在の勢力図は、内藤君グループと金浜君グループの他には無いのですか？」

「ええ。内藤の方を俺らは内藤組、って呼んでいます」

「で、こっちが金浜組な！」

「おい、陽太。その呼び方はやめろって言ったろ」

東堂君が話に割って入ります。そんな東堂君を、金浜君は肘で小突いて牽制。東堂君は、素知らぬ顔をしてまた黙ります。

「で、他にもどちらの勢力にも加担していない人も何人が居ます。例えば、七竈さんなんかはどちらのグループでもないですね。声を掛けたんですが、普通に断られました」

金浜君がなんでもないことのように名前を口にしました。が、私は嫌な名前を聞いてしまい、少しドキリとしてしまいます。

恐らく私以外の誰かの下につくつもりは無い、とかそんな理由で断ったのでしょうか。

とまあ、話をしていたら食堂に到着しました。

「さあ、着きました」

言つて、金浜君がやはり先導するように食堂へと入ります。
私もその後を追います。勇者の皆さんを取り巻く事情を知り、
そして勇者の皆さんと繋がりを持つ為に。

14 勇者達との会食

食堂には、すでに金浜組のほぼ全員が集まっているようです。

「見た感じ、今日余裕があった人は勇樹以外全員居るかな。さあ、乙木さんも適当に座って下さい」

「ええ。今日はお招きいただき、ありがとうございます」

私は感謝を述べつつ、席に座ります。

ちなみに、勇者一同の食事は特別待遇。集まった人数分で用意されるので、私がここで一人増えたとしても許容範囲内なわけです。

私が席に座った後には、三森さんと東堂君も座ります。そして金浜君だけが、席につかず立ったまま話を始めます。

「みんな、集まってくれてありがとう。今日は普通に情報交換をするだけのつもりだったけど、偶然にも良い協力者を得たので紹介するよ。では、乙木さん」

場を仕切るようなことを言っておきながら。金浜君は、私に自己紹介をするよう促してきます。まあ、別に問題はありませんし、このまま金浜君の要求に応えましょうか。

「皆さん、初めまして。乙木雄一という者です。皆さんと共に召喚

された、しがなのおっさんです。今は街の方で魔道具店を経営しております」

簡潔に今の自分について説明し、自己紹介を終わります。これで十分だったのか、金浜君は満足げに頷きます。

「乙木さんのような、外部の協力者は貴重だからね。みんな、仲良くしてほしい」

金浜君の締めの一言に、皆さんそれぞれ小さく口々に返事をします。

「じゃあ、次はこっち側の自己紹介と行こうか。僕と勇樹、陽太に沙織は面識があるからこれでいいとして。じゃあ、仁科さんから順番にお願いします」

金浜君は、隣に座る東堂君の、さらに隣に居る少女に視線を飛ばしながら言います。少女は頷き、立ち上がります。

「私は仁科雪。女神に貰ったスキルは『魔法無効化』。で、あと沙織の幼馴染。沙織に変なことするつもりなら、私が容赦しないから」

威嚇するような視線を飛ばしつつ、仁科さんはまた席に座ります。三森さんに対して何かするつもりはありませんが、注意はしておきましょう。仁科さんの機嫌を損ねるようなことがあると面倒そうですからね。

続いて、仁科さんの隣に座る男子が自己紹介の為に立ち上がります。

「俺は真山正蔵！ チートスキルは『絶対鑑定』だ。よろしくな！」
気さくに調子よく名乗りを上げた真山君。しかし、喋り方や身振りに違和感があります。気さくな言動に不慣れなのか、無理をしているのか。そうした印象を受けます。

「コイツ、自分のスキルが凄いからって調子乗ってるから。おっさんも変に相手しない方がいいよ」

補足するように、仁科さんが言います。

「ちよっ！ おま、そりゃねーだろ。実際俺の『絶対鑑定』、マジ神だから！ 転生チートものの中でも定番のチートスキルだし！」

慌てて反論する真山君。なるほど、言動から推察するに、彼は自分のスキルの力を過信するあまり、気が大きくなって日頃の態度が豹変してしまったのでしょうか。周囲の不評を買うのも頷ける話です。

「まあまあ、喧嘩しないで。自己紹介も終わってないんだから」

金浜君が仲裁に入って、真山君と仁科さんの喧嘩は終わります。続いて、隣に座っていた女性が席を立ちます。

「私は鈴原歩美。元々は、高校の養護教諭だった者です。召喚時に貰ったスキルは『完全回復』です」

簡潔な自己紹介と共に、鈴原さんは席に座りました。確かに、外見からして学生には見えない年齢です。養護教諭だったのであれば頷けます。

続いて立ち上がった隣の女性も、恐らく同年代でしょう。という

か、見覚えがあります。少しふくよかな体型の、私好みの女性。前にも同じような感想を抱いた記憶があります。

「私は木下ともえ。この子達のクラス担任でした。スキルは『暗殺術』なんですけど、正直いまいち使い方が分からなくて。お役に立っていない状況なんです」

スキルの説明をした段階で、しょんぼりとした表情を浮かべる木下さん。そんな木下さんをフォローするように、東堂君が口を開きます。

「いやいや、ともちゃんはクラスみんなの為に頑張ってるじゃん！ 気にすんなって！」

「そうですね、先生。先生が居なければ、今頃クラスメイト全員、バラバラになっていたはずですから。心の支えになってくれた先生の存在は大きいです」

「うつつ。ありがとね、陽太くん、蛭一くん」

東堂君に続き金浜君のフォローも入り、木下さんは気を取り直したようです。

そして、自己紹介は木下さんで全員です。

「一応、ここに居る人たちで僕らの勢力は半分ぐらいでしょうか」

金浜くんが、勢力についての説明をします。

「半分、ですか。残りは全て、内藤組に？」

「いえ。内藤組はもつと少ないですよ。他は中立、というか孤立しています。王宮の誰かと繋がりを持って、そつちと深く関わってたり。どちらとの関わりも拒否したり。状況を見てから動くつもりだ

ったり。ほんと、色々です」

「なるほど」

「だからこそ、勇樹は急いで味方を作ろうとしたんでしょ。正直、乙木さんに声をかけたのも勇樹の指示です。あいつに言われなければ、外部の人を頼って味方につける、なんてこと思いもしなかったでしょうから」

さらなる補足説明で、おおそ状況が分かりました。松里家君が内藤君の不穏な動きに気付いた頃には、もうすでに勢力図が出来上がりつつあった。だからこそ、急いで味方を作り、勢力図を変え、自分たちのみを守るために有利な材料を欲した。

その為には外部の人間、私までも巻き込む必要があったのでしよう。金浜君が、面識の少なさにも関わらず妙に下手というか、丁寧な態度であることにも合点がいきました。

「で、その肝心の松里家君は今日は居ないのですか？」

「いえ。居るはずなんです。王宮に帰ってくるなり自分の部屋に引きこもっちゃって。もうすぐ来るとは思っんですが」

と、私と金浜君が話をしている時でした。

食堂の扉が勢いよく開き、バァンツ、と大きな音が響きます。

「遅れて済まなかったな！」

そして、聞き覚えのある声。松里家君の声です。全員が食堂の扉の方を向き、私も同じく向きを変えます。

で、意味が分からず首を傾げます。

「遅かったな、勇樹」

「ふん。化粧直しをされていて時間が掛かったんだ。仕方ないだろう？」

なんと、そこには見知らぬ女性が立っていたのです。

どう聞いても男の、それも松里冢君のものと思えない声を発する女性が。

15 ニューハーフ魔法

どう見ても女性の、声だけ松里家君の何者か。その人は、ごく自然なことのようにこちらへと歩いてきます。

「遅かったね、松里家くん。お化粧、そんなに崩れてたの？」

「ああ。ベースメイクからやり直したから時間がかかったぞ」

「ふふ。異世界まで来て、すっかりお化粧してるのが男の松里家くんだけってのも、面白い話だね」

そして、謎の人物と聖女の三森さんは自然に会話を交わします。しかも、あたかも松里家君が謎の人物の正体であるかのように。

「あの、金浜君」

「はい？」

「彼女は、いえ、彼ですか？ どちらにせよ、何者なんですか？」

「あれ、乙木さんは知らなかったんですか？ あれが勇樹ですよ。」

松里家勇樹。なんでも、ある目的があるからって、変身魔法に改良を重ねて、ニューハーフ魔法とかいうものを作ったんだとか。それ以来、普段はニューハーフの姿で生活してるんですよ」

衝撃の事実を知らされました。ニューハーフ魔法。まさか、そんな魔法があるとは。

いえ、松里家君が改良して作ったのですから、無かったのではありません。

存在しなかった魔法を編み出してまで、何故女性のような姿に。そう問いそうになり、すぐに口を噤みます。

何しろ、原因に心当たりがありましたから。

「おや？ 乙木さんもいらしてたんですか！ そうならもつと化粧に力を入れてきたんですか」

「そ、そうですか」

「この姿じゃわかりにくいかもしれませんが、僕です。松里家ですよ。ほら、目元なんか元の僕の名残りがあるでしょう？」

と言われて観察してみるものの。とっさには見分けが付きません。完全記録スキルを駆使してかつての松里家君の顔と比較し、かろうじて分かる程度。

どう見ても、女性の顔です。化粧をした男とは一線を画する女らしさがあります。

「これであの時の約束、果たしてもらえますね？」

「約束と言うと？」

「とぼけないで下さい。僕が女性らしくなればオーケーだと言ったのは乙木さんではないですか」

松里家君に言われ、確定します。やはり彼が魔法で姿を変えてまでやりたかった事とは、私との性行為。

いつだったか、松里家君に好意を告げられた時の話ですね。完全な男性相手では無理だ、という話になったはずです。

だからこそ、彼は逆転の発想で自分が女のようになればいい、と思ったのでしょう。その為に、ニューハーフ魔法なるものまで開発し、姿を変えた。

「約束、守っていただけますね？」

ずい、と松里家君の顔がこちらに迫ります。気づけば、松里家君は自然と私の隣の席に座っています。逃げられません。

そもそも約束をしたわけでは無かったような気がします。しかし、女らしければイケる、と言ってしまったのも事実。

「そ、それについては後ほど話しませんか。今はそういう話をする場ではありませんので」

「確かに。これは失礼しました」

ひとまず、話を反らして誤魔化します。

今のうちに考えておきましょう。実際のところ、松里家君と性行為に及べるかどうか。

声は完全に男ですが、体に関してはシュリ君以上に女性的です。裸になれば、イケなくもない気はしてきます。

しかし、声は完全に男なんですよ。

いざ行為に及ぼうとなった段階で、戦意喪失する可能性もあります。

となると、安易に松里家君と行為に及ぶわけにはいきません。せっかく努力してまで得た身体が受け入れてもらえないとなれば、相応なショックでしょう。

結果的に傷つけてしまうとすれば、行為に及ぶのは避けるべきでしょう。

「で、何の話をしていたんだ？」

「ちょうど、乙木さんにみんなの自己紹介が出来たところだよ。内藤のことも話した」

「そうか、それなら話は早い」

松里家君は頷き、金浜君から話の進行を引き継ぎます。

「さて、今日集まって貰った本来の目的は、今後について話し合う為だ。そこに乙木さんが居てくれるのは、非常に都合が良い」
「今後つて、何かすんのか？」

東堂君が訊くと、松里家君は首を横に振ります。

「こちらから大きな動きを取ることは無い。内藤組を刺激するのも、王宮を刺激するのもまずい。まずは僕たちの活動を支える何か、下地が必要だ」

「王宮つて、いつも言つてつけど、そんな警戒するもんかね？
良くしてくれてんじゃん。戦争には駆り出されるけどさ。俺らからしたら楽勝な相手ばっかだし」

「アホかお前は」

東堂君が反論しますが、それに松里家君は呆れたような声を漏らします。

「何度も言ってるが、今が良ければ後々も同じだ、とは限らんだろう。既にクラスメイトが何人も王宮側に付いている」

「そりゃ、良くしてくれる貴族さんのとくに居た方が色々いい思い出来るわけじゃん？」

「そしてお返しに、と多少の無理な願いでも聞いてしまっわけだ。

国の陣営に付く、というのはつまり使い潰されることでもある」

「そこまでするかね、この国が。今んとこ、常識的だし。変なことして、俺らと敵対するのも良くないって思うんじゃねーの？」

「だから僕らを孤立させているんだろう。個別の貴族に僕たち勇者を分離させれば、少なくとも団結することは出来ない。使い潰す為

の下準備が出来ていると言っても過言じゃないな」

「ふーん。ま、俺は疑いすぎだと思っけど」

納得しないながらも、東堂君は話を切り上げます。これについては、話し合っても埒が明きませんからね。結局は、信用するかしないか、という話に尽きますし。

「何にせよ、僕らは団結し、目下内藤組の脅威に備えなければならぬ。そのためにクラスメイト全員に当たったが、集まったのはこれだけ。王宮内でも味方となりうる勢力を求めてみたが、芳しくない」

「そりゃ全員敵だって思ってたらなあ」

「おい陽太」

松里家君に小言を言う東堂君と、それを制する金浜君。

見る限り、こちらの勢力も一枚岩というわけでは無さそうですね。内藤君の不審な動きに対する脅威ありきで集まった烏合の衆、と言ったところでしょうか。

そしてだからこそ、松里家君は動いたのでしょうか。こうでもしなければ、組織だった纏まりを作ることとは不可能そうですね。

「そこで、次にやるべきは外部、つまり王宮の外の勢力を頼ることだ。本来は、どこでどういう勢力と接触するかを話し合う予定だったが。幸い、今日は乙木さんが居る」

その言葉で、私へと皆さんの視線が集まります。

「どうぞでしょう、乙木さん。貴方がこれからやるうとしていてることについて、教えて頂けませんか？ その内容によっては、僕らも協力できる部分があるかと思えます」

なるほど、そういう流れですか。
ここは求められた通り、お話ししましょうか。私の近況について。

16 勇者達との協調

私は求められた通り、現在の計画について話しました。

まずは工場を建設予定であること。そちらに本腰を入れて、大きな利益を上げるつもりであること。その為に、今日ちょうど名誉男爵を叙爵したこと。知られても問題のない情報です。

逆に、私が工場を建て、名誉貴族にもなつて何をしようとしているのか。そこについては説明しません。

そういった内容を一つずつ話す毎に、皆さん驚いているようでした。

全てを話し終えると、すぐに松里家君が口を開きます。

「なるほど、おおよそ状況は理解できました。やはり、乙木さんと組んだのは正解でしょうね」

言いながら、悩むように頭を抑え、考えている様子の松里家君。何を言うつもりなのか、と少し待っていると、すぐに話が再開します。

「やはり、乙木さんと協力する体制が良いでしょう。が、商人あるいは工場主としての乙木さんに、こちらから支払えるものが無い。あまり不審に思われず、しっかりと協力体制を築くとなると、選択肢は少なくなります」

「少ねーつつつか、あんのかよ？」

東堂君が文句をつけますが、松里家君は迷わず頷きます。

「戦力の提供、という形が一番だろうな。僕らは幸いにして勇者であり、チートスキルを持ち、ステータスも優れている。その強さは、この世界で非常に貴重な域にある」

「そんなもの、気軽にどこかへ好き勝手提供させてくれるかしら？」

懸念を口にしたのは、元養護教諭の鈴原歩美さんです。

「ええ。普通ならば難しいでしょう。しかし、乙木さんの工場の場合には状況が異なります」

松里家君が自分の見解を述べていきます。

「まず、乙木さんの工場は王都の外　つまり野生の魔物から身を護る為の外壁が存在しない場所に建設される予定です。となると、そもそも施設を維持する為に相応の戦力が必要と考えられるでしょう」

正にその通り。工場の維持には、野生の魔物から施設を守る為の戦力が必要になります。

ちなみに、私は自身のスキル『加齢臭』がスキルとして成長した『広域加齢臭』を使ってどうにかするつもりでしたが。それを駆使して、隙を見ては王都を守る外壁のようなものを建築する予定でした。

「そして、工場では今後の戦争で有利に働くような武器、兵器を生産する予定でしたね。となれば、国としても工場には存続してもら

った方が良い。そして工場の防衛戦力に騎士を回すよりは、予備戦力として控えている僕たちのような勇者を利用するのが無駄が無くて良い」

「なるほど、国の需要と状況、人材が噛み合うわけね」

鈴原さんは納得したように頷きます。

私も、松里家君の意見には概ね賛成です。多分、王宮側の人間にも松里家君のような考えに至る人は多いでしょう。

ただ、反対する勢力も当然居るでしょう。なので、実現するかどうかは松里家君や私のロビー活動次第、ということになります。

「どうでしょう、乙木さん。この案について」

「私も、大筋では賛成です。ただ、事前に反対意見を潰すか、賛成してくれる人を増やしておく必要がありますが」

「ええ。ですので、それについてはこの後ちょっと考えがあります。お付き合い頂けますか？」

「そういうことなら、もちろん」

私の答えに、松里家君は安心したように頷きます。

「よし、これで決まりだ。勇者の中でも、僕ら金浜組は乙木さんの工場で防衛戦力として雇ってもらおう。これを外部のコネクションとして、王宮内での僕らの地位を高める為に利用させてもらおう。誰か、質問や意見があれば今のうちに教えてくれ」

松里家君は一同に呼びかけました。が、誰も特に意見は無い様子。ひとまず、勇者金浜組の方針は決まったようです。

「では、今日はこれにて解散！ 今後の動きが決まったら、また集まって詳細を詰めよう」

最後に、松里家君が締めて会合は終わります。勇者達はそれぞれ席を立つたり、そのまま会話を始めたりします。

そんな中、松里家君は僕の肩を叩き、話しかけてきます。

「乙木さん、今からお付き合い頂けますね？」

「はい。ちなみにどこへ？」

「僕の魔法の、いえ、色々な意味での師匠の居る場所です」

そう言って、松里家君はニヤリと笑いました。

16 勇者達との協調（後書き）

投稿に遅刻してしまいました。申し訳ありません。

17 ニューハーフ魔法の仕組み

私は先を進む松里家君に話しかけ、疑問を口にします。

「ところで、気になっていたことなのですが」

「なんででしょうか？」

「ニューハーフ魔法、というのは何なのですか？」

「ああ、そういえば説明していませんでしたね！」

松里家君は、嬉しそうにこちらを振り返り、話し始めます。私も松里家君が話しやすいよう、足を早めて隣に立ちます。

「まずそもそも、僕が最初に目指したのは一時的な女体化魔法。つまり、性別転換魔法です。これの一部を流用することで、男のまま女性的な肉体を手に入れることを可能にするつもりでした」

「ほうほう。それは成功したのですか？」

「ええ、大成功です。一時的な女体化はもちろん、永続的な女体化も可能です。宮廷魔術師の方、僕の師匠なんですけど、そちらの方と一緒に研究することで女体化魔法は完成しました」

なんと、どうやら女体化魔法なるものまで完成していたようです。どうやら、松里家君は魔法研究者として既に一人前の実力があるようですね。

もしかしたら、今後はそういう方面で協力を求めることがあるかもしれません。

と、考えがそれてしまいました。

「では、ニューハーフ魔法というのはその女体化魔法の一部を流用して完成したのですね？」

「いえ、それがそう上手くは行きませんでした」

残念そうに松里家君は首を横に振ります。

「といますか。そもそも、研究する過程で初めて明らかになった恐るべき事実といますか。簡潔に言うと、僕たち召喚された勇者達は人間ではないようなのです」

「は？」

突然の発言に、私はさすがに驚きを隠せませんでした。勇者は、人間ではない。これは私もまた、人ではない何かであるという意味になります。さすがに他人事では済みません。

「この事実に関しては、まだ一部の宮廷魔術師と僕しか知りませんが。どうやら、勇者とは人間によく似た形の、個別のユニークモンスターのような存在なんです。人間よりも、どちらかという妖魔に近いんですよ。なので、女体化魔法はそもそも人間の肉体構造を前提にしていますから、上手く働かず使えなかったわけです」

「あの、それよりも先に聞きたいのですが」

「はい何でしょう？」

私は女体化魔法についての説明を続ける松里家君を止め、先に訊きたいことを訊いておきます。

「勇者が、私たちが魔物のような存在というのは本当なのですか？」

「ええ。僕自身がサンプルを提供してまで調べましたからね。間違いないありません。わかりやすい証拠を挙げると、例えば髪型や顔です。召喚されてから、既に一年以上の時間が経過しましたが、髪が伸びた勇者は一人も居ません」

言われてみれば。確かに、私も髪が伸びてきて切った記憶がありません。これはてっきり、勇者の召喚ボーナスの一つかと思っていたのですが。

「魔物は基本的に、成長であまり姿が変わりません。決まった姿形を維持します。勇者の特徴と一致するんですよ。恐らく、何十年かすれば勇者が魔物同様に不老の存在だということがはっきりしますよ」

「そう、ですか。さすがに少し、驚きを禁じえませんか」

私は気分を落ち着かせようと、深く息を吸い、吐き出します。ともかく、勇者は人間と異なる種の生き物。それだけ分かっていたら、十分でしょう。変に意識する必要は無さそうですし。そもそも自分たちがこの世界の異物であることは、最初からの話です。

ステータスやスキルという異常。それと同様に、種も異常である。ただそれだけの話です。

「では、話を戻します」

松里家君が言って、本題に戻ります。

「女体化魔法が直接役に立たず、僕という固有の種の構造を変化させる魔法は難しかった。サンプルが取れると言っても、殺して解剖するわけにもいきませんからね。データが足りず、僕を女体化したり、肉体構造を変化させたりする魔法は完成しませんでした」

「なるほど。そうになると、ニューハーフ魔法とは何なのですか？」
「ええ。そこで逆に考えたんです。肉体構造そのものを魔法で弄る必要は無い。もっと古典的な方法でもいいんだ、と」

松里家君は、得意げな表情を浮かべながら語ります。

「古来、女性はコルセットを使って体型を矯正しました。他にも纏足等、圧力で身体を矯正し、形を変える手段というのは数多く用いられて来ました。ちなみに、この世界にも同様の文化が見られる地域はあるそうですよ」

その話を聞いて、私も少し察しが付きます。ニューハーフ魔法の仕組みについて。

ですが、ここは松里家君の話をしつかり聞いておきましょう。説明したがつている様子ですし。

「そこで、僕は肉体そのものに作用する魔法でなく、恒常的に肉体に圧力をかけ、構造を矯正する魔法を作ったんです。男性的な骨格を女性的な骨格に。骨盤や肩幅がわかりやすい部分でしょうか。他にもくびれを作る為に腹部を圧迫したりもしています」

「つまりニューハーフ魔法とは、骨格矯正魔法なのですね？」

「ええ。ただ矯正が効きやすいよう肉体に働きかけたり、他にも体脂肪の付き方のバランスを変えたりする効果もあります。これが無いと、体つきが男性的になりますからね。完全な構造変換の魔法は無理でも、その程度の働きかけなら可能だったので、ニューハーフ魔法に組み込みました」

つまりニューハーフ魔法とは、骨格矯正と軽度の変身魔法を組み合わせたものなのでしょう。

「今はまだ、魔法を発動し続けなければいけない状態です。しかし、もう数ヶ月ほどすれば矯正は完成して、魔法の発動も必要なくなります。そこまで時間は掛かりませんが、ともかくニューハーフ魔法はおおよそ完成したものと見ていい状態です」

「ふむ。ちなみに、松里家君の胸部には膨らみがあるように見えますが、それもニューハーフ魔法ですか？」

「あ、これですか。こっちは別の魔法です。胸板の上にパッドのようなものを生み出す偽乳魔法です。こっちは一日で完成したので、特に言及するようなものでもありませんが」

つまり、松里家君は現在二つの魔法を常時発動しているわけですか。男性が女性的に振る舞う、というのは大変だというのがよく分かります。

これに加えて、仕草等も女性らしさが求められるわけですからね、松里家君の苦勞が伺えます。

それほど、私との行為に及びたいのでしょうか。となれば、こちらも生半可な態度ではられませんね。

受け入れるにしても、断るにしても、かなり真剣に考えてあげる必要があります。

17 ニューハーフ魔法の仕組み（後書き）

突然ですが、18時の定期投稿を今後は21時に変更させて頂き
ます。

これは、現状を考えると18時ですと投稿に遅刻する場
合が増える
と考えられる為です。

何度も遅刻するよりは、定期投稿の時刻自体を遅ら
せた方が
良いか
と考え、このような対応に至りました。

投稿は少し遅い時刻になりますが、どうか今後共宜
しく
お願い
致します。

18 弟子二人と師匠一人（前書き）

後書きを追記しました。

18 弟子二人と師匠一人

ニューハーフ魔法について話をしている内に、気づけば目的地が近づいていたようです。

「そろそろ、師匠の部屋に到着します」

松里家君に言われて、改めて周囲を確認します。

見覚えのある風景。間違いなく、訪れたことがあります。

松里家君の師匠。ニューハーフ魔法や女体化魔法の開発に協力してくれるような変わり者。魔法の開発まで出来るレベルとなると、恐らくは宮廷魔術師なのでしょう。

それを考慮し、現在位置まで加えて考えると、松里家君の師匠の正体に察しが付いてしまいます。

「着きました。ここです」

言っ、松里家君が立ち止まった扉。

間違いなく、ここは宮廷魔術師シュリヴァ、つまりシュリ君の研究室です。

「師匠、僕です！ 松里家です！」

松里家君が扉に向かって呼びかけます。すると、扉は勝手に開き

ます。

部屋の中には、やはり予想通りシュリ君が居ました。こちらを見ず、背を向けたまま何かの実験に集中している様子。

「どうしたのかな？」

「乙木さんを連れてきました」

「え、ホント？」

松里家君の言葉を聞いて、ようやくシュリ君はこちらを振り向き
ます。

「オトギン！ いらっしやい、よく来たね！」

「はい。松里家君に呼ばれたので。シュリ君は、松里家君も弟子に
したんですね」

「そだよ。まあ、やる気はあったみたいだし。こっちとしても都
合が良かったし？」

シュリ君の都合、というものまでは分かりませんが。どうやら単
なる善意だけで松里家君を弟子にとったわけではないようです。

「で、今日は何の用件かな？ 確か、オトギンは今日ちようど叙爵
したんだよね？」

「はい。それも関係しているとも言えますが。詳細は松里家君の方
から」

言つて、私は松里家君の方に視線を向け、合図を送ります。松里
家君も頷き、説明の為に口を開きます。

そして、今日松里家君がシュリ君の所を訪れた理由が告げられま
す。勇者同士で派閥が生まれつつあること。現在不利な勢力である

金浜組が、後ろ盾を求めていること。そのために、私との繋がりを求めたこと。私の工場で、言わば警備業務のような形で働くつもりであること。

最後に、その為にシュリ君にも協力して欲しいことを伝えます。

全体の流れを伝え終わると、シュリ君はあっさりと頷きます。

「おっけー、いいよ。勇者同士で派閥ができちゃったなら、仕方ないしね。ここでダメだって言ったりすれば、バランスが崩れて国としても困る。オトギンは肩書きとしては名誉男爵になるわけだし。一応、問題は無いかな」

どこか含みのある言い方をしながらも、シュリ君は協力することを約束してくれました。それを見て、松里家君は安心したように息をつきます。

「感謝します、師匠」

「いやいや、別にまつつんの為じゃないからね？」

そう言い返しながら、シュリ君はなぜか私の方へと近寄ってきてきます。

「それよりも。ボクとしては、オトギンがどういつつもりなのかって方が気になるんだよねえ」

「はあ。それはどういう意味でしょう？」

シュリ君の目が、僅かに鋭く細められます。見定めるような視線を、私は可能な限り動じずに受け止めます。

「スキル付与を施した魔道具工場？ 莫大なエネルギーを生産し続

ける、蓄光魔石の工場？ そんなもの作って、何が目的なのかなあって」

言いながら、シユリ君は私の身体に抱きつくような姿勢で近寄ってきます。手足を絡め、どこか卑猥な身振りで。

その仕草について緊張してしまいましたが、なお私は平静を装います。

「単に利益を必要としているだけです。以前もお話したように、平和には力が必要ですから」

「そうだね。で、その先は？ 国に行く先を左右しかねないほどの力を求めて、オトギンはその後何をするつもりなのかな？」

シユリ君は、私の頬に手を当て、顔の向きを変え、強制的に向き合う形を作ります。

そして互いの目を見据えた状態で、言います。

「その答えによっては、国としては君を警戒しなきゃいけない。敵になるかもしれないなら、今は味方になれない。わかるよね？」

「ええ、もちろん」

「じゃあ、教えてくれるね？ どういうつもりなのかな？」

シユリ君は繰り返し、私の魂胆を聞き出そうとしてきます。しかし、話すわけにはいきません。シユリ君はあくまでも、協力者です。有咲さんのような、ある種の運命共同体ではないのですから。

迂闊なこととは言えません。例えば、場合によってはこの国を捨て、他国や魔王の側につく可能性もあるとは言えないのです。

だからこそ私はより強く、確かな力を求めているわけなのですが、そうした部分を説明できない以上は、語れるものが何もありません。

「特に、何も」

だから私は惚けてみせます。

「高い利益を生む技術者、商人、冒険者。そういった存在は、国にとっても不利に働くものではないでしょう」

「ふーん？」

シュリ君は、不満足げな表情を浮かべます。

そして、私から距離を取り、離れていきます。

「まあ、合格かな。ボク相手にあっさり全部話しちゃうようじゃあダメだしね。まあ、いいんじゃないかな？」

つまり、シュリ君はこれ以上の追求をするつもりは無いのでしよう。ひとまず、この件については心配は無さそうです。

「いい機会だから、オトギンにはちゃんと教えておこうかな。確かにボクは今、この国の宮廷魔術師だよ。でも昔は他の国で働いてた。その前は別の国。そのまた前は、っていう風にいくつでも遡ることが出来るぐらいなんだよね」

改めて話し始めたシュリ君の、今度の口調はどこか軽い調子でした。

「ボクにとって大事なものは、どれだけボクにとって都合がいい、利益のある条件で働かせてくれるかってこと。今はこの国が一番いい条件で雇ってくれてるから、こうして宮廷魔術師らしいことをしているに過ぎないわけ。おっけー？」

「ええ、まあ。なるほど」

つまり、シュリ君は元々はこの国の人間ではない。決まった国に帰属しない、根無し草のような存在なのでしょう。

「逆を言えば、僕は一番いい条件を出してくれる勢力のところ働いてるわけだね。そこんとこ、オトギンにはよく分かった上で、考えてほしいかなあ？」

シュリ君は、そう言ってどこか試すような、それでいて無邪気な笑顔を浮かべます。

話の意味を忖度するならば、つまり遠回しな引き抜き願望でしょう。いずれ私が、シュリ君を良い条件で雇うことが出来るほど力をつけたなら。その時は、国から引き抜きをしてくれ、と解釈できます。

「分かりました。また、いずれお伺いします」

なので、私も迂遠な表現で応えます。いずれ、時が来たらシュリ君を引き抜く、という意味を込めた返事をします。

これを聞いて、シュリ君は満足げに頷きます。

「うんうん。待ってるよ、オトギン！」

その様子を見るに、私の選択はそう間違っただものでは無さそうです。ね。

いきなりこちらを試すようなことをされた時は少し焦りましたが、どうにか切り抜けることが出来たようです。

18 弟子二人と師匠一人（後書き）

また、投稿時刻が少し遅れてしまいました。申し訳ありません。

ここから追記です

現在、隔日の投稿が遅れております。

楽しみにして下さっている読者の皆様、申し訳ありません。

現在、執筆の時間はあるのですが、続きの展開について悩んでおり、筆が止まっている状態です。

少しずつは書き進めているのですが、まだ本当に今書いている流れで行くかも完全には判断できていない状態です。

ですので、もう少し書き進めてみて、これでいいだろう、と納得できる段階になってから更新を再開したいと思います。

それまでは、少し投稿をお休みする形になってしまいます。申し訳ありません。

それでも続きをお待ち頂けるのであれば、ご期待に添えるものを必ず仕上げて参りますので、是非お楽しみにお待ち下さい。

19 弟子と弟子の約束（前書き）

長らくお待ちいたしました。投稿を再開いたします。

また、告知が一つありますので、後書きまでお付き合い下さるとありがたいです。

19 弟子と弟子の約束

「話が終わったなら、本題に入りましょう」

私とシュリ君の話が一段落ついたところで、松里家君が言います。

「本題、ですか？ 既にシュリ君には勇者と私の協調を支援してくれるようお願いしたはずですが」

「そうではありません！ 乙木さんは、以前に僕と約束してくれたではありませんか！」

約束、と言われて思い出します。

松里家君が女性的だと認識できるようになれば、やることをやってあげるといった内容の話をしました。

その話は食堂で一度遮ったのですが、どうやら忘れていなかったようです。

「さあ、乙木さん。今の僕は十分でしょう？ 魅力的でしょう？」

生半可な女性よりセクシーで美しいはずです。こんな女性であれば、抱きたくなくても仕方ないと思いませんか？」

「ええと、まあ確かにイケるかどうかで言えばイケるのですが」

私が言うと、松里家君は目を輝かせます。

「ですが、問題は声なんですよ。いざ行為の最中に声が原因で萎え

てしまったらと思うと、申し訳なくてですね」

「そ、それは確かに、僕もかなりショックを受けそうですが」

そして私が否定すると、今度は明らかに落胆する松里家君。

「よっし、それならボクがひと肌脱いじゃおうかな！」

そこで、シユリ君が口を挟んできます。

「おお、シユリ君。なにか良い案が？」

「ふっふっふ。単純なことだよ、オトギン。まっつんが魔法でオトギンの認識を誤認させてあげればいいのさ。まっつんの声だけ女性的に聞こえてしまうよう、聴覚を阻害するんだ。そうすれば、してる最中に声が気になることなんて無いに決まってるでしょ？」

「な、なるほど！ さすが師匠です！」

松里家君は、神でも崇めるような勢いでシユリ君を褒め称えます。

「では、その方向で行きましょう！ 魔法の習得等もありますので、また後日準備が出来た時に乙木さんをお迎えに上がります！」

「分かりました」

「その時は、是非僕を、僕の身体を好きにしてください！」

「た、楽しみにしておきます」

ここまで強く望まれてしまえば、やはり断れません。

そもそも、松里家君の身体はシユリ君とはまた違った女性的魅力にあふれています。腰のくびれ、大きなお尻。非常に抱き甲斐のある身体つきと言えます。

正直、私としても興味津々なのです。

「うむ、よきかなよきかな。弟子と弟子が仲良くしてくれるのはいいことだねえ」

シユリ君は何度も頷きながら、そう呟きます。

「あの、シユリ君。私としては、複数人と関係を持つのはあまり誠実ではない気がするのですが」

「そんなの今更じゃない？」

言われて思い出し、言葉を失います。そういえば、私は何人も女性をその気にさせ、三人を愛人として困っていたのです。世間的には、そういう男なのです。

「うむうむ。どうやら自分でよく分かっているようだねえ？」

「はい。お恥ずかしい限りです」

「いやいや、へーきだよ。だって、それぐらいの甲斐性が無きゃ、オトギンの方に付く気になんてなれないもん。ね、まっつん？」

「はい、師匠。乙木さんであれば、我々の帰るべき場所を用意してくれます。そうに違いありません！」

何やら私の想定以上に、松里家君から好かれ尊敬されているようです。

実際にはそこまでの能力は無いのですが。まあ、期待されている以上は全力で応えてみせましょう。

19 弟子と弟子の約束（後書き）

前書きにもありました通り、告知があります。

当作品『クラス転移に巻き込まれたコンビニ店員のおっさん、勇者には必要なかった余り物スキルを駆使して最強となるようです。』ですが、

10月5日にBKブックス様にて書籍化いたします。

<i407783—23830>

こちらが表紙イラストになります。

また、表紙イラストはイラストレーターの『鱈』様が担当してくださいました。

アニメイト様、とらのあな様、メロンブックス様ではそれぞれ特典SSが付く予定です。

また、その他の一部書店様でも共通特典SSがもらえる場合があります。

電子書籍には専用の特典SSが収録されています。

小説本文の方にも、新たな書き下ろしエピソードが追加されています。

より良くなるよう、細かい修正も全体的に加えてありますので、是非お手にとってくださいませ。

本文の更新の方も、無理をしない範囲で再開したいと思っております。

以前よりはペースが低下してしまうかと思いますが、どうかこれからもお付き合いお願いいたします。

シユリ君と松里家君との話が終わった後は、マルクリーヌさんの所へと向かいます。

というのも、せっかく会えるのですから、今のうちに私が工場で何を作り、どのように卸すのかについて話し合っておきたいのです。

「というわけで、相談に参りました」

「相変わらず突然なんだね、乙木殿は」

マルクリーヌさんは、自分の執務室で席に座ったまま、溜息を吐きます。

「で、何の相談かな？」

「はい。私の工場でどのようなものを作るのか、ということを考えておりました」

「そんなもの、乙木殿が自分で考えればいいだろう？」

眉を顰めるマルクリーヌさん。まあ、そういう反応も仕方ないでしょう。工場と直接関係があるわけではないのですから。

「ですが、どうせ軍に卸す武器を作るのですから、軍でより求められるものを作る方が合理的かと思ひまして」

「ふむ、まあ一理あるな」

言って、マルクリーヌさんは考えるような仕草を見せます。

「しかし、急に言われてもな。そもそも乙木殿がどの程度のを作れるのかさえ分からぬ状況だ。こちらとしても答えようが無い」
「はい、そう仰られるかと思ひまして、サンプルを幾つかお持ちしました」

行つて、私は収納袋から幾つかの魔道具を取り出します。

「まずはこちらの剣です」

「ふむ、見た所普通の剣だが」

「ええ。しかし魔力を流すと」

言つて、私は剣に魔力を流します。

すると、剣は微細な振動を開始します。

「このように、微細な高速振動をするようになります」

「それに何の意味が？」

「このような意味が」

そして私は指を少しだけ切り、傷口から『鉄血』スキルで鋼のインゴットを一つ生み出します。

これを空中に投げ上げ、落下の軌道上に振動する刃を差し出します。すると、落下してきたインゴットは刃に接触した途端、豆腐のように綺麗な真っ二つとなりました。

「なるほど、理屈は分からんが良い切れ味だな」

どうやら、マルクリーヌさんは意味を理解出来たようです。

この剣には、私のスキル『貧乏ゆすり』が付与されています。そ

の効果により、超高速振動する剣は最高の切れ味を発揮するようになります。

「しかし、騎士団では採用出来んな」

そう言うと、マルクリーヌさんは次の瞬間、姿を消します。そう勘違いするほどの高等技術と身体能力で席を立ち、私の正面に立ったのです。

そして高速振動する剣の根本を軽く叩きました。すると、途端に剣は根本からパキリと折れてしまいます。

「耐久性に難ありだ。騎士の剣がこうも容易く折れるようでは、文字通り『名折れ』というものだろう？」

マルクリーヌさんに言われ、私は頷きます。

「確かに、騎士団では採用できないでしょう。そこで、この剣は『兵士』に支給すると良いかと考えているのですが」

騎士と兵士。どちらも国の軍を構成する戦力ですが、それぞれ違いがあります。騎士は国が雇う常設軍であり、兵士は言わば民兵のようなもの。普段は普通の一般市民として生活していますが、国の要請に応じて徴兵される戦力です。

ですので、基本的には騎士の方が兵士より強く、王都や主要都市など、重要な土地を守る為に配置されます。

また、騎士と兵士では装備の質も違います。鎧も剣も騎士が装備するものの方が高価で、高性能です。

それ故に、剣に求められる性能も全てが高水準になります。高速振動する剣なら、切れ味という点では合格でしょう。しかし、耐久

面に問題があります。少し使っただけで壊れる剣には、継戦能力に大きな問題あり、と言えるでしょう。

刃を頑丈にすれば継戦能力も改善出来るでしょう。しかし、巨大化で耐久面を強化すれば重量が大きくなりすぎ、取り回しに問題が発生します。金属の質を高めて改善すれば、武器としては完成しますが、高価すぎて騎士団全体に支給することが不可能となります。

「何を言っているんだ？ 騎士にも支給できないものなら、兵士こそ支給することは不可能と言えるだろう」

「いえ、そうとも言えないんです」

そう言って、私はもう一つ魔道具を取り出します。

「それを説明するために用意した試作品が、こちらです」

21 高周波ブレード

「それが、その、武器なのか？」

マルクリー又さんは疑いの声を漏らします。

まあ、それも当然でしょう。私に取り出したのは、ただの金属板にも見える魔道具なのですから。

「この金属板は、薄い鋼で作っております。先ほどの剣と同じスキルを付与しており、刃もつけてあります」

言つて、金属板をマルクリー又さんに渡します。細長い平行四辺形の板で、三辺が研がれて刃になっています。刃のついていない側には、穴が複数空いています。

「ふむ。これに魔力を流せば、先ほどの剣と同等の切れ味を發揮するのだな？」

「ええ」

「このままでは使えないだろう？」

「はい、ですからこちらの柄に金属板を装着します」

私は収納袋から、さらに魔道具を取り出します。剣の柄のみ、という奇妙な魔道具で、鏢の付近には蓄光魔石が装着されています。

金属板をマルクリー又さんから返してもらうと、柄の魔道具に装着します。鏢にある隙間に金属板を差し込み、鏢の近くにあるトリ

ガーを引きます。すると、金属板の穴が鍔の内側で固定され、装着完了します。

「そしてこの柄の魔道具に付いている蓄光魔石から、魔力が供給されます。すると、金属板はスキルを発動して振動します。これなら、魔力が少ない兵士でも確実にこの武器を扱えます」

「なるほど。刃が壊れやすいなら、最初から壊れることを前提にすればいい。鋼の板に刃をつけるだけなら、剣を鍛えるより遥かに安価に製造出来る。一人の兵士に何枚も金属板を持たせることも可能だろう」

「どうやら、マルクリーヌさんはこの魔道具の有用性を理解して頂けたようです。」

「将来的には、この金属板、名前を『高周波ブレード』と言いますが、これを鞘の中に十枚程度収める形で携帯できるようにするつもりです。ブレードが折れたらトリガーを引いて刃を捨て、鞘に収めると新しい刃が自動で装着できる機構で再装着するよう設計します」

「そうすれば、素早い刃の付け替えが可能となります。特別な技術も必要ありません。兵士でも簡単に扱えるわけです。」

「ふむ。しかし問題はまだ幾つかあるぞ？」

「マルクリーヌさんは言って、高周波ブレードの欠点について指摘します。」

「まず、兵士の練度という問題がある。この剣は、正確に刃を立てなければ切れ味を発揮出来ないうちに折れてしまっただろう？ そのような繊細な武器は、訓練を徹底されていない兵士には不向きだ」

その指摘は、確かに納得のものです。兵士がみな剣士というわけではなく、むしろ農民や商人であることも少なくありません。だからこそ、兵士は分厚く頑丈な剣を支給される場合が多いのです。ですが、高周波ブレードについてはスキルを付与することで解決してあります。

「そこで、私はブレードに振動以外の機能を付けてあります」

言って、私はブレードの振動を止め、手を離して床に落とします。すると、摩訶不思議。ブレードは勝手に向きを修正し、刃を床に向けて真っ直ぐ落ちていきます。そして、サクリ、と床に刺さります。

「こ、これはどういうことだ？」

「はい。スキル『ランディング』を付与してあります」

ランディング。これは、兎型や鳥型、猫型の魔物が所持していることの多いスキルです。

簡単に言えば、体勢を整えて綺麗に着地するスキルです。本質は着地ではなく、姿勢制御の部分にあります。

衝突の負荷を可能な限り低減するよう姿勢を自動で制御する、というのが正確な効果です。これを薄く壊れやすい刃に付与した場合、どうなるか。

衝突の負荷、つまり斬撃の負荷が軽減されるよう、刃が勝手に角度を変えます。これにより、ちょうど刃が立つ形になるのです。

実は、私が冒険者として活動していた頃に使っていた各種刃物にも付与してあるスキルだったりします。

とまあ、そうした原理について説明すると、マルクリーヌさんは感心したように唸ります。

「うむう、これは画期的なスキルだな。騎士のように、剣を学んだ人間からすれば太刀筋を狂わせる結果になるだろう。しかし素人の兵士が使えば足りない技術力を補ってくれる。高周波ブレードに限らず、兵士が使う刃物には標準で付与して欲しいぐらいだ」

「どうやら、ご満足いただけたようですね」

ここまで絶賛されるとは思っていませんでした。想定以上の好感触です。

しかし。

「だが、それでもまだダメだ。兵士に支給するわけにはいかない」

マルクリーヌさんは、まだ認めてくれません。

「それは、何故でしょうか？」

「単純な話だ。刃が折れる、という大きな隙を戦場で晒すのはあまりに危険なのだよ、乙木殿」

なるほど。その理屈もまた、真つ当な指摘です。

戦場で兵士と兵士が対面している時。相手の剣が折れた瞬間、どんな素人でも隙が生まれたことを理解できます。

この分かりやすさは、練度の低い者同士の戦いだからこそ、影響は大きくなります。敵兵士は高周波ブレードが折れた瞬間、攻め込んでくるでしょう。その攻撃を裁きつつ、ブレードの付替えを行う。いくら簡単な機構とはいえ、兵士にこれを要求するのは酷でしょう。

「はい、私も理解しています」

だからこそ。私は、さらなる提案を持ってきたのですから。

22 オダ・スタイル

「マルクリーヌさん。もしもこの高周波ブレードを使用するのなら、これまでとは異なる用兵が必要になります。しかし、用兵のやり方によっては、折れたブレードを付け替える隙を埋めることも可能になります」

「ほう、それが本当でしたら、ぜひ教えてもらいたいものですが」

マルクリーヌさんが興味を示して下さったようなので、このまま一気に説明してしましましょう。

「簡単なことです。隙が生まれるのであれば、それを補えばいいのです」

「補う？ 高周波ブレードにはこれ以上のスキルが何か付与されていると？」

「いえ、そういう訳ではありません」

私は首を横に振ります。

「ではどうすると？」

「織田信長ですよ」

「はい？ オダノ？」

マルクリーヌさんが首を傾げます。まあ、さすがに地球の戦国武将の話を理解しろ、というのは酷でしょう。詳しく解説します。

「私の世界に存在する、有名な騎士の話です。彼は強力な兵器を戦場に導入しましたが、威力は高いものの使用後に大きな隙を晒すものでした。そこでその隙を埋めるために、ある戦法を用いました」
「その戦法とは？」
「三段撃ち、と呼ばれるものです」

織田信長が導入した火縄銃と、その運用法。それこそまさに私が今回の高周波ブレードに応用しようとしているものです。

「仕組みは単純で、三人で一連の動作を繰り返すだけです。まず一人目が兵器を使用します。そして、そのまま他二人の後方に下がります。この間に、後ろに控えていた二人目が前に出て、兵器を使用します。二人目が兵器を使用したら、また他二人の後方に下がります。そして三人目が前にでて、兵器を使用します。これまでの間に最初に後方へと下がっていた一人目が兵器の再使用の準備を済ませておきます。そうすると、三人目がまた後方へと下がる頃には、一人目がまた兵器を使用可能になっているわけです」

私の説明に、マルクリーヌさんは何度か頷き、そして答えます。

「なるほど。それと同じ運用方を、この高周波ブレードでも行えばよい、ということだな？」
「¹明察です」

本当に、理解が早くて助かります。

「高周波ブレードと織田信長の兵器では違いがありますから、完全に同じ運用ができるとは限りません。ですが、三人一組でブレードの付替えという隙をフオーという発想は悪くないのではない

かと思いますが、どうでしょう」

「ああ。そのオダ・スタイルで運用するなら兵士でも高周波ブレードを有効活用できるだろう。武器の威力、そして交代制による体力の温存を考えれば、なかなか実用的かもしれない」

言いながら、マルクリーヌさんは何かを考え込み、そして意を決したように頷きました。

「よし！ いいだろう、まずは試験運用から始めてみよう」

「ありがとうございます。では、武器についてはこの高周波ブレードを製造する方向で行かせてもらいます」

これで、一つ確実に売れるものが決定しました。

「ところで、乙木殿。今回持ち込んだサンプルはこの高周波ブレードだけなのか？」

「いえ、他にも幾つか用意させて頂きました。『形状記憶』に『衝撃吸収』、『耐刃』の三つのスキルを付与したローブは、既にご存じですね？」

「ああ、もちろんだ」

「こちらを大量生産して兵士の標準装備とすれば、剣と剣の戦いでほぼ敗北はありえなくなります」

私は言って、ボロ布ではない布で作ったローブを取り出します。

「このローブを、ひとまず耐刃ローブと呼びましょう。これに加えて私の魔道具店で売っている防護魔石と同じものも量産します。これら三点セットを標準装備とすれば、それだけで兵士の戦闘力は桁違いに跳ね上がります」

「なるほど。そうなれば、魔族との戦いにおいて、兵士達が受け持

つ戦線が大きく有利に傾くだろう。これまでは防戦、撤退戦ばかり
繰り返していたが、これからは違ってくるだろうな」

マルクリーヌさんは、嬉しそうに頷きながら言います。

「よし、乙木殿。是非その方向で工場での生産を進めてくれ」

これで、マルクリーヌさんとの擦り合せも出来ました。帰ったら、
早速工場の稼働目指して行動開始ですね。

23 工場建設、開始

マルクリーヌさんと会った翌日。私はさっそく、工場建設の為に貰った土地の方へと向かいます。

全体を見て回りましたが、やはり整備はされておらず、荒れ放題です。ただ、荒れ放題すぎて浮浪者のようなものやその住処らしい場所も見かけなかったので、そういう意味では幸運でした。

工場を建てるにしても、まずは整地をしなければなりません。が、それに関しては私一人では終わらない作業です。孤児院の子どもたちや冒険者の知り合いを雇おうと思っています。

が、それにはまず土地の安全を確保しなければなりません。

というわけで、私が最初に取り掛かるべきなのは、土地を守る為の防壁の建設です。

すぐさま作業に取り掛かりましょう。

まずは、スキル『鉄血』で蓄えた膨大な金属資源を使います。好きな形で金属を取り出せるので、最初から組み上がった状態の鉄骨を生み出していきます。

細かい部分に関しては知識が無いので、脆くならないように注意する必要があります。と言っても、高層建築をするわけでもありませんから、鉄骨同士を一つに繋げ、さらに鉄で補強するという力技しか使えないのですが。

そうして、土地をぐるりと一回りするよつに鉄骨を組み上げるのに三日間。かなりの手間でしたが、普通に鉄骨を組み上げるよりは遙かに楽でした。スキルを使えば目の前に一瞬で鉄骨が組み上がるのですから、当然と言えば当然の結果です。

次に、壁を構成する素材を用意します。

ちょうど、この土地には荒れ果て乾燥した大量の土があります。これにとあるスキルを使うことで、疑似コンクリートを用意します。その為に、大量の土を集めていきます。ドラム缶のようなものを鉄血スキルで生み出し、その中に土を詰めていきます。

この作業がけつこう大変でした。最初の二日間は自分だけでやっていましたが、いつまで経っても必要な量が集まら無さそうだったので、店の方から何人か協力を要請し、連れてきました。

そうして土を集めること十日間。今日は有咲さん、シャーリーさん、マリアさんの三人が手伝いに来ています。他にも数名の従業員を引っ張ってきているので、お店の方が大変なことになっていそうですね。

三人を一度に集めるつもりは無かったのですが、今日で土集め作業が終わりそうだと告げると、こうなってしまうました。

「おつかれ、おっさん！」

有咲さんが真つ先に私を労ってくれます。シャーリーさんとマリアさんも、こちらに歩み寄ってきて笑いかけてくれます。

「こんなに沢山の土を集めて、何を作るんですか？」

「それは、これからお見せしますよ」

シャーリーさんの疑問に答える為、私はドラム缶の一つに近寄り
ます。中には砂が四分の三ほど詰まっており、まだいくらか別の物
質を投入する余裕があります。

「もしかして、乙木様の持つ不思議なスキルでこの土を加工するの
でしょうか？」

「はい、正解です」

マリアさんの指摘は、見事に的中していました。

私はドラム缶の中を覗き込みながら、とあるスキルを発動させま
す。

そのスキルの名前は『粘着液』。

スキルを発動した途端、私の口から大量の粘着液が溢れます。さ
ながらマライオンのように、私は口から粘着液を吐き出し続けま
す。

そしてドラム缶が一杯になったところで、スキルを停止。粘着液
が口から吹き出すことはなくなります。

次に、私は素早く鉄血スキルで金属の棒を生み出します。粘着液
と土を混ぜ合わせるためです。混ぜれば混ぜるほど無色の粘着液が
濁り、ドロドロに変わっていきます。

そうして、少し黄色っぽい以外はまるでコンクリートそのもの、
と言える物体が完成します。

「よし」

「よし、じゃねーんだよ！ きめえんだよおっさんさあ！ 言った

よな、アタシ。それまじキモいからやめろって!」

達成感に浸り、つい零した一言が有咲さんの逆鱗に触れてしまったようです。

「あの、乙木様。今のはいったい、何だったのですか?」

「スキル『粘着液』です。唾液ではないので安心してください」

「は、はあ」

マリアさんも引き気味なようです。やはり口から出るという印象が良くないのでしょう。しかし、粘着液は粘膜がある場所からしか発生させることが出来ないのです。鼻の穴から吹き出すよりはマシですし、一度に吐き出せる量も多い。効率上、仕方のないことなのです。

「なるほど。アラクネモドキの粘着液と同じものですね、これ。確かに、それとこの辺りの粒子の細かい土を混ぜ合わせれば、乾いた時にかなり頑丈な壁が出来そうですね」

「おお、分かって頂けますか」

どうやらシャーリーさんは、粘着液のビジュアル面より、その性能と使用方法に興味を惹かれているようです。お蔭でキモがられなくて済みます。

「まあ、私も美樹本さんやマリアさんと同じくらいドン引きしてますけど。でも、元ギルドの受付嬢としては興味深いです」

おや。ダメだったみたいですね。

ちなみに、私の粘着液はシャーリーさんの言うアラクネモドキよ

りも上位の魔物が発動させるものと同じだけの効果があります。なので、強度については想像を絶するものになるでしょう。言わば強化コンクリのようなものです。

23 工場建設、開始（後書き）

発売日が近づいてまいりましたので、再び宣伝をさせて頂きます。

当作品『クラス転移に巻き込まれたコンビニ店員のおっさん、勇者には必要なかった余り物スキルを駆使して最強となるようです。』ですが、

10月5日にBKブックス様にて書籍化いたします。

<i411005—23830>

こちらが書影になります。

また、表紙イラストはイラストレーターの『鱈』様が担当してくださいました。

アニメイト様、とらのあな様、メロンブックス様ではそれぞれ特典SSが付く予定です。

また、その他の一部書店様でも共通特典SSがもらえる場合があります。

電子書籍には専用の特典SSが収録されています。

小説本文の方にも、新たな書き下ろしエピソードが追加されています。

24 コンクリ防壁、完成

女性陣から不評な強化コンクリですが、その性能は素晴らしいの一言に尽きます。どれぐらいかと言えば、高周波ブレードで切れないう程度です。硬すぎて、切る前にブレードが折れてしまうのです。これなら、生半可な魔物の爪や牙ぐらいなら容易く弾き返すことでしょう。

というわけで、強化コンクリートを鉄骨に流し込んでいきます。鉄血スキルで鉄骨の周囲に壁の型を作り、そこへ流し込んでいきます。完全に乾くまでは一日かかりますので、次々新しく型をとってはコンクリを流し込みます。

そうした単調作業と並行して、魔物除けの魔道具も設置していきます。防壁の外側に、蓄光魔石にスキル『加齢臭』を付与したものを埋め込みます。日光を浴びて貯めた魔力で異臭を放ち、魔物を追い払うという仕組みです。

なお、臭いに関してはひどすぎない程度に調整します。強すぎれば、魔物だけでなく従業員にもダメージがありますからね。鼻の効く魔物なら少し嫌がるだろう、という程度の臭いに設定してあります。

そうして防壁作りは順調に進みました。二週間ほどかけて、土地全体を覆う防壁は完成しました。と言っても、強化コンクリの壁にはところどころ隙間が存在します。型として置いてあった仕切りの

分の隙間です。それを撤去した今、壁には無数の隙間が等間隔で並んでいます。

この隙間にも強化コンクリートを流し込んで、ようやく完成です。

防壁の内側には階段をいくつか作り、壁の上に登れるような形にしてあります。そこから上に登り、壁の周囲を観察します。

見事に防壁は外部から魔物が侵入することを防いでくれています。加齢臭を放つ魔石の効果でそもそも魔物があまり近寄りません。そして、硬い壁があると分かった魔物はさすがごと引き返していきま

す。

「よし、これで計画通りですね」

私は結果に満足し、独り言を呟き何度も頷きます。

ここからの作業は、しばらくは単純なことばかりです。冒険者ギルドにも依頼を出して、まずは防壁の内側にいる魔物の駆除。そして荒れ放題の土地を整地していきます。岩や枯れ木、雑草を処分し、土地の凹凸を削ったり埋めたりで均していきます。

私は多くの力作業を冒険者の皆さんに頼んだまま、別の作業も続けていきます。

主に、高周波ブレードの開発です。魔道具としてはすでに仕上がっていますが、問題はライン作業で作り上げられるような構造を考えなければいけないという点です。

今の構造では、ほとんど手作業。スキルの付与だけが工業化という、工場を建ててまでやるようなことはありません。あまりにも非効率的です。

というわけで、連日連夜、高周波ブレードの構造を考案しては試作します。

柄をいくつかのパーツによる組み立て式にすることで、パーツを作る労働者、組み立ての労働者で仕事を分担する予定です。

仕事を工程ごとに小さく分けることで、一つ一つの作業の品質と速度を上げるのにはそれが最も手っ取り早く、合理的です。完全に機械化するのは今の段階では夢のまた夢ですし、何よりコストが高すぎます。

現代日本でも、手作業による組み立てを必要とする製品が同様の手順で大量生産されています。これは、機械化の難易度や維持費、取り扱いの難しさなどが関係しています。

そうした要素を考えれば、現代日本より技術力、教養レベルの低いこの世界で、完全機械化された工場を作るのは到底不可能と言えます。

といったことを考えながら、より合理的な高周波ブレードの製造ラインについて考察していたある日のことです。

私の元に、魔道具店の方から厄介な連絡が届きました。

それは、なんと。

孤児院の子供達が、ダンジョンに潜っているという話だったので

24 コンクリ防壁、完成（後書き）

少し遅れましたが、当作品が書籍化し、ついに先日、10月5日にBKブックス様から発売されました。

< i 4 1 1 0 0 5 — 2 3 8 3 0 >

こちらが書影になります。

また、表紙イラストはイラストレーターの『鱈』様が担当してくださいました。

25 最強の配送業者計画

私は一度工場の方での作業を切り上げ、孤児院の方へと向かいます。そしてイザベラさんから事情を伺います。

「というわけで、詳細について教えていただけると助かります」「えっと、何がというわけで、なのかわかりませんが。うちの子達がダンジョンに潜っていたことについてですね？」

私が頷いて肯定すると、イザベラさんは詳しい話を訊かせてくれました。

なんでも、切っ掛けは私の渡した魔道具だそうです。以前、ジョアン君たちをダンジョンに連れてゆき、レベル上げをしました。その時の危険度を鑑みて、私は配送を任せていた少年少女達には更に優秀な魔道具を装備として渡しておいたのです。

そもそも、実はマルクリー又さんに説明した兵士の装備は、子供達に持たせた魔道具の量産型に過ぎなかったりします。

つまり、子供達には兵士以上の装備をもたせているわけです。

高周波ブレードは希少金属で折れず擦り減らないよう作ってありますし、耐刃ローブは頑丈で軽い魔物の革を使った高級品。防護魔石も複数持たせてありますし、緊急時の攻撃用魔石も作り上げました。

これだけの装備があれば、ゴロツキはもちろん魔物に襲われても撃退が可能でしょう。

そして、それだけの装備を手にしたとあれば、好奇心旺盛な年頃の子供達が考えることは単純です。その武器を使ってみたい、と考えたわけです。

普通なら考えるだけで終わるわけですが、ここでジョアン君たちをダンジョンに連れて行ったことが影響します。ダンジョンという場所を経験した者がいたせいで、未知への恐怖が薄れてしまったのです。

こうして好奇心に負けた子供達が、こっそりとダンジョンに入り込むという事態に至ったのです。

「幸い、子供達は無事帰ってきましたけれど。でも、大怪我をしてからでは遅いのです。どうにか対応して頂けませんか？ もちろん、勝手に借りた仕事道具を使ってしまったことについては、申し訳なく思っていますが、私だけでは対処しきれないんです」

イザベラさんはうなだれ、謝罪混じりに相談を口にします。

「ひとまず、顔を上げてください。今回のことはむしろ私に責任があったといえます。子供達がそんな行動に出る可能性は十分に考えられました。なのに対策をしていなかった私こそ責められるべきですから。イザベラさんは何も悪くありません」

「そう、ですか。ありがとうございます」

私が言うと、イザベラさんは戸惑いながらも顔を上げてくれました。

「それよりも、子供達の対策を考えましょう。イザベラさんの方は、すでに忠告してあるのですよね？」

「はい。ですが、魔物を倒してレベルが上がることには味を占めた子かけっこういるみたいで。まだこっそりとダンジョンに通っている子がいるみたいなんです」

「なるほど、それは仕方ないですね」

レベルが上がる。それはこの世界において、重要な財産と言えます。レベルさえ上がれば肉体は強くなります。場合によっては、冒険者にもなれます。

孤児院の子供達が夢を見る上で、お金や権力よりもよほど身近な価値あるものなのです。

「となれば、無理に禁じるのは悪手ですね。押さえつけては、余計な反発を生み出しかねません」

むしろ、今ある子供達の好奇心、つまり意欲を有効利用する方が合理的と言えるでしょう。

「では、どうするんですか？」

「はい。むしろ、子供達にはダンジョンに潜ってもらいましょう」

「はい？」

私の言葉に、イザベラさんは首をかしげます。

「そうですね。名付けるならば、これは『最強の配送業者』計画とでもいうべきでしょうね」

そして私が言うと、イザベラさんは呆れたような溜息を吐きました。

「はあ。で、それはどうしてとなんですか？」

26 おっさん、子供達を鍛える

私がイザベラさんに説明した計画。それは、子供達を鍛えて最強の配送業者に育て上げるというものです。

とまあ、簡単に言ってしまうと少々意味不明な内容になりますが、しかし、これはある意味必要なことであつたと言えます。

何しろ、この世界は治安が悪いのです。配送業を営むなら、いち警備役として冒険者を雇うのは非効率です。どうせなら、配送業と一緒にうちの業者を守る警備会社のなものも作り上げた方が良いいと言えます。

私が管理する配送業者と警備会社で組ませることができれば、確実かつお手軽に信頼できる戦力で配送中の労働者を守ることが出来ます。

そして、今の配送は子供達の担当です。それに合わせて将来的に警備会社を設立するなら、警備担当も子供のうちから教育するほうが都合もつけやすいのです。配送業者、そして警備会社。二つの業者が完成する時期が重なる方が計画も立てやすいわけです。

そこで、現在の状況を鑑みてひらめいたのです。どうせなら、配送業者そのものが戦力を担っていれば、わざわざ二つの会社を別々で設立する必要も無くて合理的ではないか、と。

大前提として、配送業をする上で自己防衛戦力は必須です。となれば、そもそも配送業者自身が強いほうが遥かに合理的でしょう。

実際、冒険者が貴重な物品を都市間でやり取りするような仕事も受けていることがあります。これは、貴重品を守り切るだけの戦闘能力があるからこそ任せられる仕事です。

同様のことを、さらに大規模に、合理的に行う。それが、私の考える『最強の配送業者』計画なのです。

そのテストケースとして、子供達に戦闘のためのノウハウを教えます。そして、計画的にダンジョンに潜り、可能な限り安全に配慮したレベル上げを行います。

つまり、以前ジョアン君たちに行ったことを、大規模に、より計画的に実行するのです。

そうして鍛え上げられた子供達が配送業者の初期メンバーとなり、さらに新しいメンバーの教育係を務めてくれれば最高です。

まあ、今からそこまで望むのはさすがに高望みのしすぎでしょう。しかし子供達に配送を任せる以上は自衛力は必須です。護衛の冒険者を雇い続けるのが難しいという都合上、仕方ない選択なのです。

という説明をしたところ、イザベラさんも納得してくださいました。

「というわけで、しばらくは子供達を鍛え上げます。強くなれば武器に対する理解も深まり、好奇心も落ち着くでしょう。それに、ダンジョンで定期的にレベル上げをすれば、そちらへの興味も十分満たせるはずです」

「なるほど。ですが、その訓練やダンジョンでのレベル上げは乙木さんが全て監督するのですか？」

「いえ、ある程度は私が監督します。ですが、私だけでは手が足りませんからね。他の冒険者の方々に依頼を出して頼むつもりです」

こうした面倒で手のかかる依頼でも、冒険者の皆さんは受け取れます。特に、教育に関わるような依頼は教養が求められるので、自然とギルドの方で人格や素行の部分で篩いにかけてくれます。

また、私も冒険者たちの素行についてはしっかりと監視する予定です。

なので、子供達への教育は問題なく行えるはずですよ。

しばらくイザベラさんは考え込む様子で黙っていました。やがて口を開きます。

「そうですね、分かりました。乙木さんにおまかせします。そもそも、こうなつてはもう私では解決できませんからね。おまかせする他ありません」

「すみません、イザベラさん。心配されているような事態には決してなりません。させませんので、安心してください」

私が言うと、イザベラさんは頷いてくれました。

「はい。信頼させていただきますよ、乙木さん」

この信頼には、何が何でも応えなければなりませんね。イザベラさんと、そして子供達の為に。

27 子供達とダンジョン攻略

イザベラさんと話をした日から、私は行動を開始しました。

冒険者ギルドに依頼を出し、素行に問題の無い教育者向けの冒険者を集めました。そして、子供達に戦闘訓練を施していきます。

場所はちょうど、孤児院の遊ぶための広場で行うことにしました。

そして冒険者のノウハウを学んだ子供達を引き連れ、マルチダンジョンでレベル上げに向かいます。低層であれば、大人の冒険者の監視と私の魔道具だけで安全にレベル上げが出来ます。

レベルの低い子供達を優先し、時には私も共にダンジョンへと潜ります。

また、教育を担当した冒険者には、毎回私の方へと報告に来てもらいます。イザベラさんや子供達の報告と合わせて進捗を管理し、かつ冒険者の教育能力についても評価します。今の所、問題のある教育者などは居ないように安心していきます。

そうして、私の『最強の配送業者』計画が始動してから一ヶ月が経過しました。

この頃になると、すでに工場の方も整地が終わり、施設の建設に入っています。魔道具の設計についてもおおよそ完了しており、もう少して工場が稼働するはずです。

ここまで来ると、私にも少し時間の余裕が出来ます。おかげで子供達の教育により手をかけることが出来るようになりました。

今日は、配送の初期メンバー、ジョアン君を含む六人組のレベル上げをする予定です。

「よろしくな、おっちゃん！」

「はい、よろしくおねがいます」

ジョアン君が楽しげな声で挨拶をしてきました。私も出来る限りの笑顔で応えます。

そして、ダンジョンに突入しました。子供達の中では最高レベルの六人なので、他の子供達よりも深い階層でのレベル上げを実行します。

場所はマルチダンジョンの中の一つ、森林系のダンジョンです。多種多様な魔物と、見通しの悪い地形。自衛能力を高めるのに相応しい、過酷な環境下にあるダンジョンです。

このダンジョンでしっかりと生き残ることが出来れば、冒険者で言えばランク相当の実力があると言えます。そして、それだけの力があれば十分な自衛能力があると言えるでしょう。

「では、まずは皆さんの実力を確かめます。私のことは考えずに、行けるだけ深い階層まで進んでください。その後撤退まで安全にこなすことが出来れば、皆さんは合格です。一人前の配送業者と言えるでしょう」

「はい、分かりました！」

ジョアン君が元気よく返事します。

そうして、ダンジョン探索が開始します。先頭のジョアン君が進

路を考え、魔物を警戒しつつ進んでいきます。より魔物が少ない、安全な経路を的確に選んで進んでいきます。

それだけではありません。ジョアン君以外もしっかりと周囲を警戒し、ジョアン君の行動方針に従いつつ細部のフォローに入っています。また、ジョアン君の行動に不安がある場面ではしっかりと意見を出し、全体の安全性を高める為に協力しています。

かなり洗練された動きに、思わず感心してしまいます。これだけの能力があれば、もう半端なゴロツキや魔物では相手にもならないでしょう。私の考えた理想の配送業者の姿そのものと言えます。

やがて魔物の強さが高くなってきたところで、ジョアン君は足を止めます。先ほど倒した狼型の魔物に少々苦戦したところです。

「これ以上は危険だから、ここで引き返そう」

ジョアン君の提案に、全員が頷いて賛同します。安全マージンを十分にとった判断であり、かつ安全すぎる段階での撤退でもありません。的確な判断と言えます。

そこでようやく、私が口を出します。

「素晴らしい判断です、皆さん。ここでの撤退の判断は的確です。我々は冒険者ではなく配送業者。荷物を確実安全に運ぶのが仕事です。リスクを取らず、危険をさけ、確実な行動を心がける。それが徹底できていますね。偉いですよ」

「えへへ、おっちゃんに褒められちゃったなっ！」

嬉しそうにジョアン君が笑い、他の子達も安堵して笑みを零します。これまでの緊張が程よく解けたところで、新しい提案をします。

「今日は折角ですから、もう少し深く潜りましょう。私もついでいますので、より強い敵との戦闘を経験してみましょう」

「は、はいっ！」

子供達がしつかりと返事したところで、再びダンジョン攻略を開始します。今度はあえて魔物との戦闘を経験するため、あえてちよつどよい数の魔物が群れている場所を探して積極的に向かいます。

最初の魔物は昆虫型の魔物。セミとカマキリが融合したような魔物です。名前はデスインセクト。このダンジョンの、この階層ではほぼ最強の部類です。

「さて、まずはこれとの戦闘を経験してみましょう」

私が言うと、子供達は緊張した様子で武器を構えました。いよいよ、実践での戦闘訓練の開始です。

28 ジョアン君の告白

デスインセクトとの戦闘は、子供達優位で進んでいきます。耐刃ローブがあるので、腕の鎌はただの打撃武器にしかならず、そもそも全員が完璧に見きっています。

また、高周波ブレードはデスインセクトの硬い身体を容易く切り裂いてゆきます。この程度であれば、希少金属の合金製高周波ブレードは問題なく餌食にします。

とはいえ、デスインセクトの動きは機敏で、子供達もなかなか致命傷を与えることが出来ません。甲殻の表面を裂くばかりで、内臓までは傷つけることができません。ほぼダメージは通ってないと言えます。

状況的には子供達が優位にありますが、勝ちはまだ遠い状況。ここから子供達がどう動くかが重要です。

「俺が前に出る！」

そう言って飛び出したのはジョアン君です。それに合わせて、子供達はジョアンを守るような行動に出ます。

デスインセクトの攻撃をジョアン君以外の五人が防ぎ、ジョアン君は素早くデスインセクトの懐に潜り込みます。そして下腹部から頭部に向けて高周波ブレードで切り上げます。

「喰らええッ！」

ジョアン君の斬撃は、見事にデスインセクトの肉体を左右で真っ二つに分離させます。これで、一体目のデスインセクトは無力化されました。

ですが戦闘はまだ終わりではありません。

二体目、三体目のデスインセクトの攻撃は続きます。これを五人だけで防ぐのは至難の業です。さらに、一体が死んだことでその後控えていた最後の一体、四匹目のデスインセクトが飛び出します。

無理に一体を始末しようとしたことで、状況が悪化しました。魔物が三匹までなら有効な手段でしたが、四匹目がいると分かっている状況では悪手です。

子供達に怪我をさせるわけにはいけないので、私が助太刀に入ります。

まずは正面、四匹目のデスインセクトを始末します。貧乏ゆすりキックで、デスインセクトの鎌ごと胴体を削り落とします。

「あっ、おっちゃんっ！」

何やらジョアン君が顔を赤くしていますが、今はそれどころではありません。武器も失い、命も奪われたデスインセクトはこれでも力です。続いて左右の状況に対応します。

鉄血で金属の壁を素早く生み出し、子供達を庇います。デスインセクトの鎌では金属を切り裂くことは出来ず、弾かれて体勢が崩れます。

そこへ、私は貧乏ゆすり振動させた足を振り抜き、金属片を飛

ばします。高速振動する金属片は、飛翔する高周波ブレードとなつてデスインセクトを真つ二つに引き裂きます。一度の蹴りで二つの金属片を放ったので、残った二匹は同時に死亡。

こうして、三匹のデスインセクトは私の手で、ではなく足で撃退されたというわけです。

「ふう、どうにかかりましたね」

「お、おっちゃんっ。あ、ありがと！あのままおっちゃんに助けてもらえなかったら、たぶんヤバかったよ！」

私に飛びついてくるジョアン君。どうやら、ピンチを助けられたのが相当嬉しかった様子。

「いえいえ。おそらく耐刃ローブがあれば、多少の攻撃を受けても怪我なく四匹とも撃退できたはずですよ。私が手を出したのは、あくまで安全のため。皆さんに傷を負わせない為です」

言つて、私はジョアン君の頭をなでます。

「頑張りましたね、ジョアン君。一匹目を倒した時の行動は、なかなかの勇気がある行動でした。状況を見れば最善ではない選択ですが、それでもジョアン君の思い切りの良さは悪くありませんでしたよ」

「う、うんっ！おっちゃんがそうやって褒めてくれるなら、頑張つて良かったかな。へへっ！」

嬉しそうに微笑むジョアン君。この年頃の子供の笑顔は、やはり良いものです。心が暖かくなります。

「やっぱ、おっちゃんのこと、俺、大好きだ」

「そうですね、ありがとうございます」

ジョアン君は顔を赤らめながら、私の胸に頭をぐりぐりと擦り付けてきます。

こうして子供に好かれ、甘えられるのも嬉しいものです。

私はつい微笑みながら、ジョアン君の頭をなでます。すると、なぜかジョアン君は不満げな表情を浮かべます。

「もう、おっちゃん。全然分かってないだろ？」

「はい？ 好きなんですよね、分かっております」

「だから、そういう軽い感じじゃねーの！ 俺、本気でおっちゃんのこと好きなんだよ！」

ほう、本気とは。どういふことなのでしょう。

「本気ですか。それは、どういう意味で？」

「そ、それは、だから。えっと。俺はおっちゃんのことがつ！」

顔を真赤にしながら、叫ぶようにジョアン君は言います。

「結婚したいぐらい、おっちゃんのことを好きなんだよっ！」

その発言に、私は頭の中が真っ白になってしまいました。

29 少年にまでモテたおっさん

私が衝撃の告白に混乱している間にも、ジョアン君の言葉は続きます。

「最初は、普通におっちゃんのことすごいな、かつこいいなって思ってたんだ。それだけだったんだけど。おっちゃんがお仕事がんばっているのを見てるうちに、すごく気になって、見ると胸の中があったかくなつて。ドキドキして、目が離せなくなつてさ。そんできづいたんだ。俺、おっちゃんのが大好きだつて。おっちゃんに抱きしめてもらいたい、おっちゃんとキスしたい。一生おっちゃんと一緒にいたいって。本気で思うようになったんだっ！」

ジョアン君の告白を聞くほどに、私は理解させられます。どうやら、本当にジョアン君は私のことが好きなようです。恋愛的な意味で。

「あの、ジョアン君？」

「おっちゃんが駄目って言っても、俺の気持ちは変わらないからっ！好きだつて気持ちは、おっちゃんにだってどうにもできないんだからなっ！」

「えっと、まあ、それはここ最近つくづく思い知っておりますので」

ここ最近、妙に女性にモテているせいで、ジョアン君の言い分を違和感なく受け止めることが出来てしまいました。

しかし、思いを受け入れるわけにはいきません。

「よく聞いてください、ジョアン君。私は大人で、ジョアン君はまだ子供です。そして私達は男同士です。愛し合うには、あまりにもハードルが高いと言えます。分かりますか？」

「いいよ、大人になるまで待つし！ それに男同士がダメなら、女の子になるし！」

そこまでですか。女の子になるとまで言いますか。

しかしそれでも、私は受け入れるわけには行きません。さすがに明らかかな子供、しかも男の子と愛し合うのは問題があります。私自身の倫理観だけでなく、世間体としても難しい部分があります。

ですので、適当な理由をつけてジョアン君を説得します。

「まずですね、ジョアン君。男性が女性に性転換する技術など存在しません。ですので、ジョアン君を私が受け入れてあげることは根本的に不可能です」

女の子のような外見をしていればその限りではないのですが、今はそんなことを言うわけにはいきません。黙っておきましょう。

「それに、大人になるまでと言ってもこれから何年もあります。私のことを想ってくれるのは嬉しいですが、それだけを考えてはいけません。君にはまだまだたくさんの可能性、未来があります。私だけを想うというのは、その可能性を閉ざすことにもなるのです。そして私は、ジョアン君の可能性が閉ざされることを望んではいません」

私が言うと、ジョアン君は何やら考え込むような仕草を見せます。

「うーん、よく分かんない」

まあ、そうですね。子供にこねる屁理屈としては少々小難しい話でしたね。

「でも、おっちゃんが俺のためにそうしろって言うなら、頑張る。ようするに、今は頑張って強くなれってことだろ？　なら、俺頑張るよ！　そんで、強くなって大人になって、女の子になったらまたおっちゃんに好きって言うんだっ！」

「はい、そうしてください。その時はちゃんと真剣にお答えしますよ」

女の子になるなど不可能なので、私は安心してジオアン君と約束します。これでひとまず、一人の少年が私のようなおっさんの毒牙に自分からかかりに来るような事態は避けられるはずです。

その後は、さらに数回の魔物との戦闘をこなし、ダンジョンから撤退することになりました。その最中、ジオアン君は普段どおりの様子に戻ったように見えました。

安心して子供達を見守りながら、私達はマルチダンジョンから撤退しました。

撤退後、孤児院へ帰る道中。子供達を後ろで見守る私の方へと、ジオアン君が歩みを緩めて並びに来ます。

「おっちゃん、今日はありがと。俺、約束守るから。おっちゃんも約束守ってくれよな？」

「ええ、当然です。約束は約束ですからね」

まあ、まさかジョアン君が性転換するようなことはありませんからね。約束を守るような事態に陥ることが無いわけですから、何を言っても問題ありません。

最近、似たような思考回路で何度か失敗したような気もしますが、気がするだけですし問題は無いでしょう。

「それと、やっぱ大人になるまでって、ちょっと長いだろ？」

「はい、それは確かに」

「だから、ご褒美の前借りっ！　なあおっちゃん、ちょっとしゃがんでくれ」

「前借り、ですか？」

私はジョアン君に言われるがまま、しゃがんで頭の高さをジョアン君と同じぐらいまで下げます。

そして次の瞬間。

ちゅっ、と私の頬に柔らかい感触が伝わってきました。

「へへっ。今は俺、これだけでいーよ。でも大人になったら、もっとキスするもんねっ！　ぜったい、約束だからね、おっちゃんっ！」

それだけ言い残して、ジョアン君は先に行った子供達の方へと駆け寄っていきます。

私は啞然としながら、そんなジョアン君の背中をただ見送ることに出来ませんでした。

30 おっさん、パパになる

私が子供達を孤児院に送り届けると、イザベラさんは安堵した表情を見せました。子供達が無事帰ってくるかどうか、さぞ不安だったことでしょう。

「イザベラさん。子供達は、かなりの実力をつけています。冒険の恐ろしさや難しさを知り、戦いの厳しさも学んでいます。レベルも順調に上がっていますから、もう好奇心だけで自ら危険な場所に首を突っ込むようなことは無いはずですよ」

「はい。あの子供がかなり変わったのは理解しています。ですが、やはりダンジョンに行くというのがどうしても、慣れなくて」

まあ、イザベラさんの不安は最もなものです。私の都合で子供達を鍛え、強くしているわけですから。それを加味してイザベラさんの立場で考えれば、どれだけこちらが安全に配慮しても危機感は拭えないでしょう。

「申し訳ありません、本当に。ですが、必ずこれは、子供達の将来の役に立つことですから、どうか理解していただきたい」

「ええ。分かっています。孤児の将来を考えれば、乙木さんの言う最強の配送業者というのはとても理想的です。貸し与えて頂いている魔道具も、素晴らしい性能です。子供達のことを思えば、今の状況が非常に良いものだと言えるとも、理解はしているのです」

「しかし、不安なものは不安でしょう」

イザベラさんの立場を思い、あえて発言を否定します。

「子供達の将来の為とはいえ、何もしないよりはリスクがあるのは事実ですから。保護者であり、母でもあるイザベラさんが心配するのも当然です」

私が言うと、微笑みを浮かべるイザベラさん。

「ふふつ。それなら、子供達が成長するために試練をお与えになる乙木さんはパパになりますね？」

「なるほど、それは確かに。盲点でした」

私とイザベラさんはお互いに笑みを浮かべ合いました。

その後、私は子供達との面談に移ります。冒険者たちの教育内容についての報告を受けるためです。

今まで問題は起きていませんが、それでも油断は出来ません。冒険者が不適切な教育を施していないか、聞き取りで情報をあつめ、調査します。

その為には当事者からも話を聞く必要がありますが、第三者の声も重要です。

そこで冒険者からの教育を受けておらず、孤児院の中で様子をよく見ている人物からも話を聞く必要があります。

イザベラさんもそうですが、子供側の視点も必要です。

というわけで、現在はローブづくりを任せており『最強の配達業者』計画には参加していないローサさんに話を伺いに来ました。

「特に問題はありませんでしたっ！ 冒険者さんはみんな、ちゃんとおじちゃんが言ってたとおりにしてたと思います！」

「そうですか、それは良かったです」

私は言って、ローサさんの頭を撫でます。

「他には、何かおかしかったこととか、気になったこととかありませんか？」

「えっと、そういえば今日はジョアンの様子がおかしかったと思います」

ジョアン君の様子と聞いて、私はつい手を止めてしまいます。

「あれ、おじちゃん？ 何か知ってるんですか？」

「ええ、実はですね」

隠してもジョアン君に聞けばバレる話です。なので、正直に全てを話します。今日のダンジョン探索の最中、結婚してほしいと言われたこと。どうにか言いくるめて返答を大人になるまで引き伸ばしたこと。

そうした状況をローサさんに伝えたところ、どうやら怒らせてしまったようです。ローサさんは頬を膨らませ、不機嫌そうに眉を顰めます。

「ジョアン君、そんなこと言っただんですか？」

「はい、確かに言いましたね」

「そんなの、ずるいですー！」

おや。私の予想外の方向で怒っているようですね。

「私だって、乙木のおじちゃんはずっと一緒にいたいです！」

「そ、そうですか。ちなみに理由は？」

「だって、おじちゃんはなんていうか、パパみたいな匂いがしますから。一緒にいたら、安心できて、とつても温かい気持ちになるんです」

「なるほど」

「どうやら、ローサさんの場合は恋心とは別物のようですね。ひとまず安心です。」

「結婚はダメですけど、パパにならなつてあげますよ」

すでにイザベラさんからパパみたいだと太鼓判を押されていますからね。これぐらいなら許容範囲でしょう。

「ほ、ほんと？ 乙木のおじちゃん、あたしのパパになってくれるのっ？」

「ええ、かまいませんよ」

「やったっ！」

ローサさんは相当嬉しかったのでしよう。かなりの勢いをつけて私に抱きついてきます。父親代わりとなれば、こつした愛情表現も受け止めてあげるのが筋でしょう。

私はしっかりと抱きしめ返して、さらに抱っこをしてあげます。顔の高さを合わせると、ローサさんは首に腕を回してきます。

「えへへ。パパ、大好きっ！」

「ええ、私もローサさんのことは好きですよ」

「やったっ！ あたしもね、パパのこと大好きだよっ！ パパ、パパっ！」

父親が出来て、相当嬉しいのでしょう。ローサさんは頬ずりまでして愛情表現をしてくれます。私も同様に、頬ずりをしてあげると、ローサさんも喜んでくれます。

「きゃははっ！ パパ、チクチクするね！」

「はい。パパの顎はちくちくですよ」

そんな風に、私とローサさんは小一時間ほどスキンシップを続けました。工場での仕事に帰ろうとした時には、泣きそうな顔で引き止められてしまいました。どうにか説得して帰らせてもらいました。

それにしても、父親ですか。

少し今までは毛色の違う好意ですが、こついったものも良いものですね。

31 おっさん、すれ違っ

孤児院の子供たちの問題も片付き、私は久々に自分の店、洞窟ドワーフの魔道具やさんに戻ってきました。時刻はすっかり日もくれて、近隣の家々の明かりも減り始めた頃です。

つい甘えるローサさんをおかわいがっていたら、こんな時間になってしまいました。

「おかえり、おっさん」

夜の店番をしている有咲さんが、笑顔で言ってくれました。

「ただいま帰りました、有咲さん」

私が挨拶を返すと、有咲さんは満足そうに頷きました。

「工場とか、孤児院の用事とかはもう落ち着いたのでいいか？」

「はい。大分、以前よりは安定してきたかと思えます。とは言え、これからも開発はする必要があるのです、以前のように一日中魔道具店の方にいる、というわけにはいきませんが」

「そっか、まあ、それでも帰ってきてくれるなら、嬉しいよ」

はにかむような有咲さんの笑顔に、つい私はどきりとしてしまいます。

そういう邪な考えはいけません。すぐに頭の中からその気持ちを

追い払い、話題を変えます。

「ところで、私が居ない間に店のほうでなにか変わったことはありませんか？」

「うーん、まあ。変わったってどうか、ちょっと訊きたいことが出来たってどうか」

有咲さんは言いにくそうにしながら、私の方をちらちらと見てきます。正面から向き合わずに、何かを伺うような視線だけ送ってきます。

「どうかしたのですか？」

「ああ。訊きたいんだけどさ。おっさんと、アタシの噂のこと」

噂、と聞いて私はドキリとします。嫌な予感が脳裏をよぎります。そして、私の予感は的中しました。

「ご近所さんの間ではさあ。アタシとおっさんが、その、夫婦ってことになってるらしくて。従業員もみんなそうだと思ってるみたいでさ」

「そう、ですか」

懸念していたことはありませんが、ついに来てしまいました。私と有咲さんが、この世界の常識で言えば夫婦同然の関係下にあるという話です。

これは、どうにかせねばなりません。私はちゃんと、責任をとらなければ。

「それで、さあ。おっさんには訊いたときだけ。アタシと夫婦だって噂のさ。その、責任ってどうか、そういうやつ。ちゃんと

取ってくれるんだよね？」

「はい、もちろんです」

私が即答すると、有咲さんの表情は途端に晴れやかになります。しかし、その後が続く言葉を聞くほどに、今度は曇っていくことになりました。

「まずは、周囲に説明します。私と有咲さんは血縁関係にあって、そういう男女の間柄ではないということ。路頭に迷うところであった姪っ子を保護しただけに過ぎない、とご近所さんや従業員の皆さんに説明します」

「え？」

「私のような、年をとったおっさんなんかと夫婦になるなんて、あまりにも不幸ですからね。ちゃんと、周囲に勘違いをさせて、有咲さんの将来の不利益となるようなことになってしまった責任は取ります」

泣きそうな、今にも怒り出しそうな。そんな表情で、有咲さんは私にすがりついてきました。

「ち、違うって！ アタシ、おっさんにそういうことしてほしいわけじゃなくて！」

「気にする必要はありません。有咲さんはまだ若いんですから。探せばきっと、いい人が見つかります。素敵な男性と出会えるまで、私が必ず手助けをしますから。妙な噂のせいで異性が寄り付かなくなってしまった分も、私がフォローします。だから、有咲さんは安心して将来のことを考えて下さい。自分の伴侶をちゃんと選んで下さい」

「そんなの、もう決めてんだよっ！」

有咲さんは、怒鳴るような大声で言いました。

「もう、わかってんだろっ？ なあ、おっさん。アタシ、あんたのこと好きなんだよ。結婚したいのはあんたなんだよ。夫婦になりたいのも、一生一緒にいてほしいのも、アンタなんだよ！ 雄一お兄ちゃんが、好き、なんだよ」

最後の方は、涙をこらえきれず、震える声を絞り出すようでした。それだけ、本気の告白だったのでしよう。

ですが、ダメなのです。

私は叔父であり、有咲さんは姪っ子。結婚するわけには、いきません。有咲さんの未来を、こんな枯れたおっさんのために捧げて良いはずがないのです。

何よりも、そもそも私には、有咲さんと結ばれるような、そんな大層な権利などありませんから。

私が有咲さんと結ばれるようなことは、あつてはいけないのです。

気持ちなら、とっくに理解していました。

店を始めた頃とは、まるで違う有咲さんの態度。スキンシップは増え、柔らかく微笑みかけてくれるようになりました。

そして何より、その好意を行動や言葉の節々にはつきりと表していましたから。

有咲さんが、私に好意を抱いているというのは、とっくに分かっています。

ですが、だからこそ。

私は予め、そう答えると決めていた言葉を返します。

「ダメですよ、有咲さん。私のような人間では、有咲さんにはふさわしくない。きっと有咲さんには、私なんかよりもずっと素敵な男性と結ばれる時が来ます。だから、ダメなんです。私を選んではいけませんよ、有咲さん」

その言葉を言い切ると同時でした。

バチンッ！ と、私の頬をひっぱたく音。

「雄一お兄ちゃんの、バカッ！」

有咲さんは、泣きながら走り去ります。

階段を駆け上がり、店番を放棄してまで、自分の部屋へ向かって駆けていきます。

きっと、今日はもう引きこもって出てこないでしょう。

そして、きっと私は有咲さんに嫌われたことでしょう。

そう、これでいいのです。

こうでなければいけないのです。

例え、互いに想い合っていたのだとしても。

どれだけの後悔が押し寄せようとも。

有咲さんの幸せを思えば、これが最善なのですから。

31 おっさん、すれ違う（後書き）

すれ違いが発生してしまいました。

少しの間、有咲と乙木の関係がギクシャクします。

が、ちゃんと有咲はメインヒロインのままであり、仲直りもしつかりする予定なので安心して下さい。

32 名付けの意味

私と有咲さんの関係の始まりはいつだったか考えると、その答えは恐らく生まれる前からということになります。

あの日。姉に喚び出され、初の子供の名前を決めようとなった日。そこで私は有咲さんの、名付け親となりました。

そして、だからこそ私は、有咲さんに一つの負い目があります。

あの日。姉と、姉の旦那さん。そしてそれぞれの両親に、私。計七人で、生まれる前の女の子の名前を決めようということになりました。

私以外の六人は、無難な名前を選んでいました。

一方で、当時の私はまだ今とは違い、かなり捻くれていた頃です。自分こそが一番だと、根拠なく思い込んでいた頃でした。

そして、捻くれ屋だった私は、まるで中学生が患うような厭世観を拗らせていました。

そんな中、私が有咲さんの名付けに選んだのは、かの有名な平家物語の冒頭部分です。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響『あり』。『娑』羅双樹の花の色、精舎必衰の理をあらはす。

二つの分の末尾と始まりから言葉を借り、生まれる女の子に『有

娑』と名付けるつもりでした。

まあ、字については姉の可愛くないという苦情により、娑を咲に変えられてしまったのですが。

しかし、私が有咲さんの名前に込めようとした意味については変わりません。

その意味とは。

彼女が将来、どれだけの幸せを、どれほどの栄華を手にしようとも。それらはきつと脆く崩れ去り、いつか終わりを迎える。

人生など、所詮その程度の悲劇的なものであると。生きることに意味など無いのだと。

そんな、まるで『呪い』のような言葉を、私は生まれる前の彼女に与えようと思いました。

なんと最低な名付けをしたのだろうと、今でも後悔しています。

本当なら、生まれてくることで祝福されるべき命を、私個人のつまらない、病的な厭世観のせいで、言祝ぎを呪いに変えて、名前として与えてしまったのです。

そんな悪い意味を込めた名前だということも黙ったまま。ただ興味本位で、人生を憂うような名前を有咲さんに与えてしまったのです。

私はつまり、有咲さんが生まれてきたことを祝うどころか、むしろ呪ってしまった。

そんな、最低な奴なのです。

時々、考えてしまいます。

どうして有咲さんが不良のようになってしまったのか。どうして有咲さんが、こんな危険な世界へと召喚されてしまったのか。どう

して有咲さんに与えられたスキルが、誰にも分かりやすい力などでなく、追放にまで至ってしまったのか。

それぞれ、ちゃんとした理由はあるのでしょうか。
けれど私は、つい考えてしまいます。

もしも私が、名付け親でなかったなら。
もっとしっかりとした名前を与えてあげていれば。

有咲さんは不良にならず、よく学びよく成長し、模範的な学生の一人になっていたかもしれません。
こんな世界に召喚されず、今でも両親の愛につつまれ、ありふれた幸せの中にいたのかもしれませんが。

クラスメイトの多くと同じように、誰にでも理解できるような、分かりやすく強力なスキルを手にしていたかもしれません。

全て、無意味な妄想でしかありません。理解は出来ています。
けれど、名前で人生を呪っておきながら、自分は何の関係もなかった、などと言えるはずがありません。

きつとどこかに、私が有咲さんの名付け親であるせいで起こった不幸があるはずだと。そんな懸念が、いつまでも消えません。

そして何より、また同じことを繰り返さないとも限りません。
かつて私が興味本位で彼女の名を呪ったように。
また私は、何らかの方法で有咲さんを傷つけるかもしれません。

前科があるのですから、疑うのは当然のことです。
そしてこの世界で、もっとも有咲さんの将来の幸福を疑わしいものに変えてしまうのは、他ならぬ私です。

私こそが、有咲さんを不幸にしうる最大の不確定要素なのです。

だから、私は応えられません。

例え、既に同じ想いを抱いていようと。

既に叔父と姪だなんてこと、少しも気になつていなくとも。

有咲さんの幸福のためであれば、決してこの想いに応えてはいけないのです。

かなりの時間が立ちました。

どうやら私は、ずっと呆然としていたようです。

有咲さんの思いを拒絶するのは、想定以上のダメージとなつたようです。が、ここで立ち止まるわけにはいきません。

「よし！」

私は自分の顔を、パンツ、と両手で挟むように叩き、気合を入れ直します。

後悔などというものは、それこそ文字通り後です。

今は自分の選択を信じて、やるべきことをやるしかありません。

その日。結局夜の間、有咲さんは部屋に籠もつたままでした。

私は有咲さんの代わりに店番を務めながら、これからするべきことを一つ一つ、脳内で考えまとめ上げていきました。

そうしていれば。

有咲さんの泣き顔を考えず、思い出すことなく済みました。

3 2 名付けの意味（後書き）

これで四章は終了です。

五章はさらなる乙木の成長と、有咲との関係の変化、発展を描く予定です。

その過程で、今まで登場したヒロイン達も絡んでくる予定です。

先が気になる、という皆様は、どうかブックマークや評価ポイントという形での応援よろしくお願い致します。

続きの五章につきましては、投稿開始まで少々お時間をいただきます。

おまたせしてしまう形になってしまいますが、どうか気長にお待ちくださいませ。

追記

ミスで同一の内容を何度も投稿していましたが、修正しました。

01 工場のあるこれ

工場が、とうとう稼働開始しました。

蓄光魔石が蓄えた魔力で付与魔法を施すという、単純な仕組みの工場ですが、既にいくつもの魔道具用のラインが完成しています。

まず、一つが高周波ブレード用のラインです。といっても、流れは単純。規格に従って作られた金属板に、『貧乏ゆすり』と『ランディング』を順に付与するだけです。

付与を確実に成功させるために、付与装置は業務用の食器用洗浄機のような形をしています。蓄光魔石が蓄えた魔力が供給され、付与装置の天板に施された魔法陣が起動します。

そして天板の裏側には付与するスキルそのものを付与した『スキル板』が装着されています。『貧乏ゆすり』の場合は、それだけが付与された手のひらサイズの金属板です。

このスキル板に付与されているスキルを、天板の下側にある物体に付与する、というのが付与装置の仕組みとなっています。

この中に高周波ブレードの素材となる金属板を入れ、装置を起動すれば、十秒ほどで付与が完了します。

その次に不良品検査。ちゃんと振動するか確認する必要があるのですが、検査用の柄が高周波ブレードを差し込み、起動。振動しているなら、次の工程へとブレードを流していきます。

ちなみに、振動しないものは付与の工程に戻し、振動してすぐに

壊れたものは廃棄品となります。

振動の不良品検査が終われば、次はランディングの付与。別の付与装置でブレードにランディングを付与して、こちらも検査。

ブレードを水平な状態で落下させ、下のスポンジへ垂直な状態でぶつかるようなら問題なし。

これを三回ほど繰り返し、全て垂直に落下すれば問題なしとして次の工程に流します。ここでも、付与に失敗したものは再付与。壊れたものは廃棄という流れになっています。まあ、ここで廃棄になるブレードは皆無とっていいのですが。

ランディングの付与も問題なければ、ようやく刃付けです。誰でも簡単に砥げるように『貧乏ゆすり』によって程よい速さで振動する砥石設置台を用意してあります。この台に砥石を設置し、魔道具として起動すれば、振動を開始します。

そして振動する砥石で高周波ブレードを研ぎ、規格通りの位置に刃をつけて、完成です。

このような魔道具制作のラインが、今は工場内にいくつもありません。

高周波ブレードの場合は、柄と鞘も必要ですから、同じ建物のなかでそれぞれを作るラインもあるので、計三つのラインがあります。この建物を一号棟と呼んでいて、高周波ブレード用の作業のほとんどをここで済ませています。

次に、二号棟と呼ばれる場所についてです。こちらでは、何かと消耗の激しい蓄光魔石を製造しています。

魔力が空になったクス魔石を冒険者ギルド等から引き取り、ここで付与装置を使い蓄光魔石に生まれ変わらせています。

付与の終わった蓄光魔石は、一度屋外で陽に当て、魔力を補充し

てから不良検査を行います。というか、二号棟の敷地の三分の二ほどがこの魔力補充と不良検査の為に使われています。

そして、三号棟では私の魔道具店でも使う魔道具の製造を行っています。

まずは照明魔石。蓄光魔石に発光のスキルを付与するだけです。で、こちらは非常に小さなラインで製造出来るのが良いですね。

次に、耐刃ロープ。『形状記憶』に『衝撃吸収』、『耐刃』の三つを付与したものです。

最近はおーさん達ロープ作り組の子たちの技術が上がり、おしやれなロープが納品されてきます。一つ一つデザインや機能性にこだわりのあり、近頃の人気商品の一つです。

軍に納品する分は別口で納品されるロープがあり、そちらは規格が揃ったものになっています。

他には防護魔石や、携帯食料の保存容器も三号棟での生産品です。それほど数が必要なものではないので、どちらも手狭な範囲にラインがあり、付与装置のスキル板を差し替えて運用しています。

四号棟では、食料品の製造をしています。具体的には防犯キャンデーと甘露餅の二つです。どちらも作るのが難しい食料品ではないので、四号棟の中で一から作って最後に付与を施しています。

また、付与食品でない普通のお弁当もここで作っています。唐揚げ弁当やとんかつ弁当です。現状、お弁当の容器は店で回収して再利用する形になっていますので、数はそれほど多くありません。

ですが、将来的には実際のコンビニと同様に、安価に大量生産可能な保存容器を開発して、より大量のお弁当を安価に提供できるようにするつもりです。

そして、五号棟。ここで製造しているのは魔道具ではなく、高周波ブレード用の金属板です。

ここには、金属板を大量に、しかも私が手伝わなくても形成できるようにする為の巨大な装置があります。

具体的な仕組みとしては『鉄血』スキルの応用です。装置そのものがホムンクルスと呼ばれる魔法生物となっており、その内部を流れる疑似血液を介して鉄血スキルを使い、金属板を形成しています。

元々、ホムンクルスはゴーレムと似た存在で、その違いは魔物であるか、それとも魔法で人為的に生み出したものであるかという部分にあります。

そして、ホムンクルスは製造時に命令された通りの動作を繰り返す程度の知能しかありません。

現在の魔法技術では、ゴーレムのように戦闘が可能なレベルで稼働できるホムンクルスは製造不可能となっています。

しかし、簡単な動作の繰り返しであれば問題ありません。例えば、付与された『鉄血』のスキルを使い、金属を同じ形状で繰り返し生み出し続けることなどは造作もありません。

そんなホムンクルスを使用して作り上げたものが、この五号棟の金属形成装置です。

まず、冒険者ギルドに依頼を出して集めたアイアンゴーレムの素材を鉄血スキルで疑似血液に吸収します。これは、それ専用のホムンクルスが自動で行ってくれます。

次に、この疑似血液が次の工程を行うホムンクルスの方へと流れていきます。

この疑似血液を受け取った、形成担当のホムンクルスが、金属板

を形成していきます。

装置そのものをホムンクルス化しているからこそ、こうした疑似血液のやりとりが可能となっているわけです。

ちなみに仕組みを考えたのは私ですが、細かい技術的な問題点はすべてシュリ君任せで作っておりますので、もしも壊れた時は直すことが出来ません。

完全なブラックボックスなので、壊れないよう祈りながら日々運用しています。

さて。こうして金属板の形成も完全に自動化出来てしまったので、私が工場でやることがほぼなくなりました。

警備的な部分では、金浜組の勇者の誰かが毎日来てくれるので問題ありませんし。付与も鉄血スキルによる金属板の形成も自動化したとなれば、残るのは雇用や管理の問題のみ。

そうした部分も、工場運営の為に雇ったパートタイムのおばちゃん達で最低限は可能な為、私が担当する必要がある部分は本当に少なくなっています。

となれば、私はまた別のことに手を回すことが出来るわけです。まずはその為の準備をしましょう。

01 工場のあるこれ（後書き）

お久しぶりです。投稿を再開致します。
週二回程度のペースで投稿できるよう、頑張ります。

そして、投稿をお休みしている期間中に、当作品の書籍版の第二巻が発売されました。

< i 4 4 8 7 0 7 — 2 3 8 3 0 >

こちらが二巻の表紙となっております。

本編側での告知が遅くなってしまいました。よろしければお手にとって頂ければ幸いです。

02 不機嫌な姪っ子

私は魔道具店の方に顔を出します。

「おはようございます。有咲さんは居ますか？」

「あら、乙木様。有咲さんなら、今はバックにいるはずですよ」

店内にちょうど居合わせた、マリアさんが応えてくれます。

「最近、ずいぶん不機嫌そうにしていますけれど、何かありましたか？」

「ええ、まあ。すこし」

「ちゃんと仲直りしてくださいな」

「はい、そのつもりです」

今日ここに顔を出したのも、一つはそれが目的にあったからです。マリアさんに教えられた通り、私はバックへと向かいます。

「有咲さん」

バックでは、ちょうど有咲さんが今日のレジ締め作業をしているところでした。

商品の在庫の数と仕入れの数から売れたはずの品物の数を算出し、そこから出した売上と実際に手元にある金額の差異を確認する作業です。

私が呼びかけると、有咲さんは複雑そうな表情を浮かべてそっぽを向きます。

「すみませんでした。この間は、言い過ぎました」
「何のことだよ」

不機嫌そうにしながらも、有咲さんはどうにか私と対話する姿勢を見せてくれます。ここからが、誠意の見せ所でしょう。

「有咲さんの気持ちを考えず、一方的に私の考えを押し付けてしまいました。有咲さんが私に対して好意を抱いてくれていることを、否定するような真似をしてしまいました。本当に、無神経だったと思います」

「じゃあ、アタシと付き合ってくれるのか？」

有咲さんが一転して、嬉しそうな声で訊いてきます。ですが、ここは同意できません。私は首を横に振ります。

「私と有咲さんが、叔父と姪の関係にあることは変わりません」
「そんなの、関係ねーだろ。ここ日本じゃないんだし」
「はい、そういう考え方についても、理解はできます。ですが、同意までは出来ません」

そこまで言うてから、私は一度言葉を区切り、提案をします。

「ですので、間を取りましょう」

私が言うと、有咲さんは首を傾げます。

「間って、どっという意味だよ」

「有咲さんは、私と恋人になりたい。私は、有咲さんと恋人にはなれない。ですので、その中間をとります。有咲さんは、私の恋人のように振る舞ってもよい。ですが、恋人同士ではない。なので、例えばどちらかが別の誰かを好きになっても、何の問題ありません。恋人ではないのですから、別れるということもないわけです。逆に例えば、私の気が変われば、そのまま恋人同士になればいい。既に恋人同士のように振る舞っていたのですから、これもおかしい部分は何もない」

私の提案に、有咲さんは頷く。

「よーするに、アタシがおっさんのことを誘惑して、落とせばいいんだろ？」

「まあ、有咲さんの側からすればそうなります。そして、私は有咲さんの誘惑に負けないよう耐えるというわけです」

この提案により、有咲さんの欲求を部分的に満たすことが出来ます。こうすれば、有咲さんの願望を部分的ではありますが満たすことが出来ます。

そして、私が有咲さんを恋人にすることはありえませんが、後は有咲さんが諦めをつけるか、誰かもっと良い人、新しい恋を見つけるまで待てばいい。

といった考えから提案したのですが、どうやら有咲さんはこの提案に乗り気のようにです。

「分かった。その話、乗った！ ぜってーおっさんのこと、落としてみせるからな！」

「そう簡単にはいきませんが、乗ってもらえて何よりです」

これで、ひとまずわだかまりは解けました。
なので今日ここに来たもう一つの理由を告げます。

「さて。有咲さん、仲直りも出来たのでお仕事の話です」
「は？」

「一緒に、旅行に行きましょう」
「え、いや、なんで？」

03 視察旅行

突然の話題転換に、有咲さんは困惑している様子。なので、要点を順に説明していきます。

「工場も本格的に稼働を開始したので、そろそろ新しい事業を始めようと考えています。ですが、今は良いアイデアが浮かびませんし、出来ることも多くはありません。そこで、王都を離れて他の街を見て回ります。見聞を広めることで、新しく出来ることが増えるかもしれません」

「な、なるほど？」

少なくとも、王都に居るままで出来ることはほぼやり尽くしたと考えています。

「それに、王都でやっているのと同じ事業を、他の街にも広げていくことが出来るはずです。その下見という意味でも、街を巡って旅をする意味があります」

「まあ、確かに。それはなんとなく分かるけどさ」

新しい街で魔道具店や付与魔法の工場を作るなら、その街の様々な情報を仕入れる必要があります。

人づてに聞いて情報を集めることも出来ますが、やはり自分の目で見て回るのが一番でしょう。

「最後にもう一つ。旅のついでに、軍に卸している高周波ブレードを導入している部隊の視察も済ませておきたいのです。実際にどのような装備が運用されているのか。何が足りていて、何が足りないのか。それを自分の目で見てくることで、また新しい魔道具のアイディアが浮かぶかもしれません」

「そりゃそうだろうけどさ」

有咲さんは私の話に同意しながらも、納得していない様子で首を傾げます。

「で、なんでアタシも一緒に行くことになるんだよ。いや、おっさんと一緒なのは嬉しいんだけどさ」

尤もな疑問が、有咲さんから出てきました。その点についても、ちゃんと理由があります。

「一つは、レベル上げの為です。マルチダンジョンで可能な限りのレベリングは既に済ませてあるかと思いますが、今のレベルでは大きなトラブルに巻き込まれた時に困ります。ですので、単純な実力の向上の為に有咲さんには一緒に来て欲しいのです」

「それは、別に王都に居ても出来るだろう？」

「王都で魔道具店の経営の片手間に出来るレベリングでは、勝てない敵が出てくる可能性も十分にあります」

私が懸念しているのは、魔王軍についてです。既に私が四天王の一人を倒してしまっているのです、今後報復がある可能性は十分にあります。

そして、私が四天王を倒せたのはスキルの相性が良かったからに他なりません。今のレベル、今の実力では、正面から魔王軍の四天王級の相手と戦うには不安が残ります。

「それに、有咲さんのスキル『カルキュレイター』こそ、視察をする上で最も役に立つスキルだと考えています。視察の結果を最大限良いものにするには、有咲さんは必要不可欠なのです」

「でも、魔道具店をアタシが離れてまでするようなことが？ おっさん一人でも、十分に意味はあると思うけど」

「最後に、もう一つ理由があります」

私は、しっかりと有咲さんの方を向いて告げます。

「お詫び、です。有咲さんを傷つけた分、有咲さんの願いを叶えてあげるべきだと考えました。恋人になつてあげることは出来ませんですから、代わりに二人きりの旅行という形で、有咲さんに報いたと思います。どうでしょうか？」

「行く！ それなら絶対行くっ！」

有咲さんは食い気味に、身を乗り出して視察旅行に同行することを決めてくれました。

ちなみに、お詫びとは言いましたが、二人きりで旅行して、それでも脈なしと有咲さんに分からせることで、諦めてもらう意味もあります。

ですので、お詫びというのはかなり卑怯な言い方ですが、一応そういう意味も無きにしてもあらずなので、問題はありません。

「では有咲さん。早速ですが、視察旅行に向かうための調整をしましょう。魔道具店や工場の運営を当分の間、私たちが居なくても出来るようにしなければなりませんし。それに、旅のルートも決めなければなりません」

「そついうのは任せてくれよな。アタシのスキルで、最高の旅行プランを立ててやるよ！」

有咲さんは元気に、満面の笑みを浮かべてそう言います。
やはり、有咲さんが元気でいてくれるのが一番ですね。

04 旅支度

長期間、王都を離れることになるので、その旨を各所へと伝えなければなりません。特に、私が事業として仕事を任せている所は忘れずに。

私が居ない間の対応についても、しっかりと話し合っておかなければなりません。

工場の方は、私がいなくても上手く回っているので問題ありません。そして、魔道具店は有咲さんが抜けてしまう分の仕事の割り振りがあります。

これに関しては、有咲さんがカルキュレイターの力であっさりと振り分け終了。店の従業員の皆さんに挨拶をしている間に、全ての指示が終了していました。

その後は孤児院にも顔を出して話だけは伝えておきます。私が居ない間も今まで通りに仕事を回しておけばいいという旨を、ジヨアン君やローサさんにも伝えておきます。

何か問題があれば、イザベラさんの方の判断で子供たちの安全を優先して動いてもよいので、非常時は任せるということも伝えます。

そして最後に、マルクリーヌさんの下を訪ねます。

今回は高周波ブレードの視察も兼ねるつもりなので、その辺りの許可も含めた諸々の話をマルクリーヌさんにおこななければなりません。

許可が無くとも前線での戦闘の様子を観察ならいくらでも出来ませんが、可能なら軍の内側から様子を観察しておきたいと考えてのことです。

「とうわけで、見学の許可をいただきたいのですが」
「相変わらず、乙木殿は突然話を持ってくるのだな」

苦笑いを浮かべながら、マルクリーヌさんは言います。

「ともかく、話は分かった。こちらとしても、一度見ておいてもらいたいとは思っていたのだ」

「そうですね、それは好都合です。ところで、高周波ブレードの運用は上手く行っていますか？」

「ああ。さすがに前線全てに配備というわけにはコストの面や防衛力の面もあって不可能だったが、突破力のある部隊を一つ作るだけで、防戦一方だった戦況に攻めの一手を打つ余裕が生まれた。ジリ貧だった戦場が、いくつも状況が好転しているよ」

「それは良かったです」

高周波ブレードは、その性質的にも軍の標準装備とするには脆さが気になります。なので、突撃部隊の装備など攻撃力を重視する場面での運用が主となっているのが現状です。

そうした運用法を用いるという話は、事前にマルクリーヌさんから聞いてありましたが、どうやら上手く行っているようですね。

「それに、高周波ブレードだけではない。耐刃ローブや防護魔石も防衛時の生存確率を上げてくれる。お陰で継戦能力も高くなり、結果として後出しで勇者を始めとする突出した戦力を送り込んで間に合う機会が極めて多くなった」

耐刃ローブと防護魔石に関しては、前線で戦う兵士の標準の支給品として少しずつ普及しています。

今はまだ生産が追いついていないので全ての兵士が装備しているような状況ではありませんが、いずれは全ての兵士の命がこの二つの魔道具で守られるようになるはずですよ。

「本当に、乙木殿には感謝しているんだ。だからこそ、こちらからもお願いしたい。是非、乙木殿の力でさらに軍の助けとなる装備を生み出してくれ。それがあれば、また何百、何千人の命が救われるのだ」

「ええ、わかりました。そういうことなら、私も全力を尽くさせていただきます」

「どうやら、マルクリーヌさんの側からも、視察は望んでいたことのようにですね。」

「こちらとしてもさらなる軍需備品の開発は狙っていききたいので、渡りに船というやつです。」

その後、マルクリーヌさんと少しだけ協議をした結果、どの前線へと視察に向かうのかも決まり、この日の話は終わります。

「では、よろしくおねがいます」

「ああ。話は通しておくので、任せてくれ」

最後にマルクリーヌさんと握手を交わし、私は退室。このまま王城を離れ、帰路につきます。

王城から魔道具店の方へと戻る道の途中で、有咲さんが迎えにく

るところと鉢合います。

「おっさん、どうだった？」

「はい、許可はもらいました。これで、軍を正式に視察できます」

「へへ、そりゃあ良かった！」

有咲さんは、嬉そうに笑いながら私の腕に掴まります。

まるで恋人同士でやるような腕組みに、私はつい戸惑い、距離をとろうとしてしまいます。が、それを咎めるように有咲さんは力を込めます。

「なんだよ、おっさん。姪っ子は叔父さんと仲良くしちやダメなのかよ？」

「そういうわけではありませんが」

「じゃあいいだろ？」

確かに、あまり露骨に否定しすぎて、有咲さんを傷つけてしまうのも本望ではありません。

「そうですね、では、仕方ありません」

「だろ？ ほら、帰ろうぜ！」

こうして、私と有咲さんはまるで恋人同士のような格好で、帰路をゆっくりと歩きました。

04 旅支度（後書き）

週二回、と宣言していたのですが、先週の投稿を一回忘れておりました。

本日、もう一度投稿致します。

05 乗合馬車

旅に出る旨の挨拶を終わらせた後は、数日ほどかけて準備を済ませました。

そして一通りの荷物も纏まった今日。私と有咲さんはこれから、乗合馬車を利用するため、駐車場へと向かいます。

そんな私と有咲さんを、魔道具店の面々が見送ってくれます。

「乙木様。無事で戻ってきてくださいね」

「ええ、気をつけます」

「有咲さんも。魔道具店のことは気にせず、ゆっくり二人で楽しんできてくださいな」

「ん、ありがとな、マリアさん」

マリアさんは、私と有咲さんの両名に挨拶をした後、軽く握手を交わして店の方に戻ります。

最近は従業員も育ってきているとはいえ、有咲さんが抜ける分の負担は大きいはず。帰ってきたら、すぐに労ってあげなければいけませんね。

そして次に挨拶に来たのはシャーリーさんです。

「乙木さん！」

「はい」

「次は私とマリアさんも、必ず連れて行ってくださいね！」

「そう、ですね。約束します」
「必ずですからね！」

「どうやら、有咲さんだけと旅行に行くのが不服なようです。」

「とはいえ、ネガティブな感情を抱いているわけではない様子なので、帰ってきてからフォローすれば問題ないでしょう。」

「事実上として、世間からはシャーリーさんとマリアさんも私の妻のようなものだと思われるわけですから。その辺りの責任はしっかりとるべきでしょう。」

「と、シャーリーさんと約束をすく。二つの衝撃が同時に私の身体に襲いかかります。」

「おじさま、早く帰ってきてね」

「旅行のお話、いっぱい聞かせて欲しいな」

「はい。お土産も買ってきますから、楽しみにしてください」

ティアナさんとテイオ君が、寂しがるような表情を浮かべながら言います。私は、この二人には特別なお土産を買ってきてあげよう、と心の中で決め、それを約束として口に出します。

最後に二人の頭を撫でると、二人は嬉しそうにしながら離れていきます。

「では、行ってきます」

出立の挨拶も終え、私は有咲さんと共に駐車場へと向かいます。

駐車場には、乗合馬車の他にも個人や商人が所有する馬車が停まっています。その中でも、乗合馬車の場合は呼子や御者が呼び込み

をしているので、その声の方へと向かえば自然と見つかります。

「おっ、そこのご夫婦さん！」

ちょうど、近づいた乗合馬車の呼子らしい青年が私と有咲さんに向かつてそんな声をかけてきます。

「乗合馬車ならうちにしときな。格安だが、乗り心地は悪くないぜ」
「！」

「なるほど。どうですか、有咲さん」

私が有咲さんの方を向くと、顔を赤くして視線を逸らされてしま
います。

「どうしたのですか？」

「い、いや。夫婦って言われちゃった、って思ってさ」

つまり、照れているというわけでしょう。

「細かいことは気にしないでいきましょう」

「いや、細かくはねーだろー！」

私の言葉に、有咲さんはツッコミを入れてきます。どうやら、こ
れで本調子が戻ってきたようです。

「ああ、もう。なんか舞い上がって変になってたけど、やめた。普
通にするのが一番だわ、やっぱ」

「それが一番です」

私と有咲さんはそんな会話を交わしつつ、呼子の青年の方へと向

き直ります。

「料金は気にしないので、乗り心地と速さのある方が良いのですが、
そうだった乗合馬車はご紹介いただけませんか？」

「おっ、それならあっちにウチの馬車の上等な方のやつがあるぜ」
「そうですか、ご紹介感謝します」

こうして乗合馬車の目星もつき、指された方へと向かいます。

「なあおっさん」

「はい、なんでしよう」

「なんでおっさんは照れなかったんだよ」

その道すがら、有咲さんに問いたただかれてしまいます。どうやら、
夫婦と勘違いされた件についての話のようです。

「今回は二人旅ですし、今後もこういった勘違いは多くなるでしょう。
う。いちいち関係性を説明していてもキリがありませんから」

「うっ。まあ、そりゃあそうだけど」

それに、もう一つ。こうして私が全く有咲さんを意識していない
ような態度をとり続ければ、有咲さんが私のことを諦めてくれる可
能性は高まります。

なので、今後もこうして勘違いされるようなことがあっても、表
面上の平静は保ち続けるつもりです。

05 乗合馬車（後書き）

本日二本目です。

06 最初の道中

乗合馬車に乗り込み、出発時刻になったので王都を発ちます。一緒に乗ったのは上位の冒険者らしい男性と、老夫婦の三名。

それに私と有咲さん、御者の壮年の男性で合わせて計六名の旅路となります。

次の目的地は王都からさほど離れていない都市であるため、二日ほどの旅程を想定してあります。

向かう先は、ルーンガルド王国最大の穀倉地帯。ウェインスヴェール侯爵領の領都ウェインスヴェールです。

王都だけでなく、ルーンガルド王国の各地に向けて様々な作物を出荷しているそうです。

防衛上の視点でも重要な都市でもあるため、冒険者や兵士も多くが集まります。そして、彼らを対象にした商業も盛んとなっているわけです。

そうした理由から、ルーンガルド王国では王都と並ぶ大都市と呼ばれています。

そんな大都市ですから、当然私たちが視察をすることで得られるものも多いはずだ、と考えたわけです。

「お二人は、どうしてウェインスヴェールに？」

ぼんやりと馬車の外の景色を眺めていると、老夫婦のお婆さんが

そんな話を振ってきました。

「実は、私達は王都で魔道具店を経営しているのですが。そちらで何か新しいことを始めてみようとおもっております。そのためのアイデアを貰うためにいくつかの都市を回る予定なのです」
「あらまあ。それは立派なことですねえ」

お婆さんはニコニコと笑いながら頷きます。

「ご夫婦でお勉強に出るなんて、仕事熱心なのね。素敵なことだね」
「恐縮です」
「ほう、夫婦で魔道具店か」

冒険者の男性が会話に入ってきます。

「まさか、あんたら『洞窟ドワーフの魔道具店』の？」
「ええ、そうですね」

どうやら、この冒険者の男性は私たちの店のことを知っていたようです。

「あの店の魔道具のお陰で、俺の知り合いも助かってる。あんな高性能なローブを格安で売ってくれてるお陰で、ギリギリで命が助かったやつが何人もいるんだ。ありがとうな」
「いえいえ、こちらこそ、お買い上げいただけた上で、お役に立てたのでしたら何よりです」

思わぬ場面での感謝の言葉を受けたものの、素直に受け取っておきます。

この冒険者の男性の話が皮切りとなつて、馬車の中では雑談がつらつらと続くような状態が続きました。

そうして二時間ほど経過し、時刻が昼前に近づいた頃。前方から、勢い良く駆け抜ける馬車が走ってきます。

すれ違いざまに御者の表情を伺いましたが、何やら必死な形相で手綱を握っており、ただならぬ雰囲気が漂っていました。

これは、何か不穏なものを感じてしまいますね。

「有咲さん」

「分かつてる」

何か良くないことが起こるかもしれない。そう考えて、身構えておきます。有咲さんにも声を掛けましたが、既に気を引き締めていたらしく、真剣な表情を浮かべています。

「今の馬車、普通の様子じゃ無かったな。これは一騒動あるかもしれない」

冒険者の男性もそう言って、自分の武器らしい片手剣と盾を装備し始めます。

そんな私達の様子を見て、老夫婦の二人はおろおろと不安げに慌て始めます。お婆さんの肩をお爺さんが抱き寄せて、安心させるように撫でています。

が、お爺さんもその表情からして不安は拭えないようです。

やがて数分もしないうちに、異変の正体が判明します。

「オークだ！ オークが暴れてやがる！」

御者がそう叫び、馬車の中に状況を伝えてくれました。

私と有咲さん、そして冒険者の男性は窓から身を乗り出して進行方向を見ます。

すると、どうやら小規模な隊商を複数のオークの群れが襲っているらしく、前方では何人もの護衛らしい人間とオークが交戦していました。

「なんでこんなところにオークが出るのか知らんが、助けに入らせてもらっぞー！」

冒険者の男性は言うのと、馬車から飛び降りて加勢に向かいます。腕に自信があるのか、オークの群れを相手にしてもまったくためらう様子がありません。

対して、馬車の方は一時停止。そして安全のため、距離をとるために引き返そうとします。

「すみません、少し待ってもらえますか」

私は、そんな判断をした御者の方に待ったをかけます。

「なんだい、何かあるのか？」

「距離を取る必要はありません。オークは問題なく片付けることが出来ますから」

「いや、そうは言ってもな」

反論しようとした御者さんを制して、私は懐から取り出した防護魔石を渡します。

「これは防護魔石という魔道具で、万が一の時に攻撃から身を守ることが出来ます。魔力を流せば起動しますので、もし危なくなつた

ら使ってください」

「あ、ああ」

困惑する御者さんを置いておき、次に老夫婦の二人にも防護魔石を渡します。

「どうぞ、お二人もお使いくください」

「いいのかい？」

「ええ、大丈夫です。私も、彼女もオーク相手であれば安全に戦えますので」

私は言うてから、有咲さんに目配せします。有咲さんも頷いて応えます。私のステータスはもちろんのこと、有咲さんもレベルが十分に上がっているのでオーク程度を相手に遅れをとることはありません。

「では有咲さん、こちらはお願いできますか」

「ああ、分かった」

こうして馬車の安全を有咲さんに託した後、冒険者の男性を追ってオーク討伐に向かいます。

07 鉄血スキルの応用方法

私は素早く戦闘中の場所へと駆けつけます。既に冒険者の男性は加勢しており、数体のオークを仕留めているようです。

「あなた、戦えるのか！」

どうやら私の方に気付いたようで、声を掛けてきます。

「オーク程度なら問題ありませんよ」

「なら頼む！」

そう言って、冒険者の男性は別の場所へと加勢に向かいます。

この場にはまだ三体のオークが残されていますが、それを任せられたというわけです。

こちらは他に商隊の護衛が一名いますが、負傷していて十分な戦力とはいえません。どうやら、私の戦力はかなり大きく見積もられているようです。

まあ、実際はさらに大きく見積もる必要があるのですが。

「さて、手早く片付けましょう」

商隊に今のところは犠牲者らしい姿は見えませんが、時間の問題でもあります。素早くオークを始末してしまうに越したことはありません。

ません。

私は早速戦闘態勢に入ります。まずはスキル『疫病』で私の手の一部分に皮膚病を発症させます。すると、その部位のみが鬱血し、負傷します。血が出ることで、スキル『鉄血』の使用条件が満たされません。

今までも、戦闘で咄嗟に鉄血スキルを使う必要のある場面では、こうして疫病スキルを使い一瞬で血を流すことで対処してきました。今回もまた、素早い対応が求められるためこうして使っています。

戦闘態勢も整い、私はまず手近なオークに駆け寄ります。そして手をまるで鞭のように振り抜きながら鉄血スキルを発動。オリハルコンの刃を生み出しながらの一撃です。

単純に刃物を生み出しての攻撃も可能ですが、そこは工夫でさらに攻撃力を伸ばすことができます。今回、腕をしならせるのと同様に、生み出すオリハルコンの刃もしならせました。

鉄血スキルは自在に金属を吸収し、取り出しが可能なスキルです。この性質を生かして、金属の刃をしならせながら取り出す、という芸当をやったのけたわけです。

鞭打のような衝撃を伴った、オリハルコンの刃の一撃です。さらには斬撃の瞬間に鉄血スキルで刃を収納することで、ちょうど引き切りのような形になり、切れ味も増しています。

結果として、オークの身体は何の抵抗も無かったかのようにスパリと真つ二つになりました。

「なっ！」

私の背後で、商隊の護衛の方が驚いたような声を上げます。が、こちらとしては反応している時間も惜しいので次に取り掛かります。

仲間のオークが一瞬で殺されたのを見て、その場に居た残り二体のオークは激怒。間髪入れずに襲いかかってきます。

しかし、同時に襲われたとしても私の敵ではありません。片方をオリハルコンの刃で切り裂きつつ、もう片方はオリハルコンの大盾を生み出して攻撃を防ぎます。

ステータスに格差があるので、オークの一撃で私が体勢を崩すことはありません。そのまま大盾で押し返し、逆に体勢の崩れたオークをオリハルコンの刃で真っ二つにします。

「た、助かった」

「では、ここはよろしくおねがいします」

私は護衛の方の感謝の言葉も半ばに、次のオークを撃破するために駆け出します。

次々とオークを屠っていくと、一体の巨大なオークが姿を現します。

「群れのリーダー、でしょうか」

そう呟きながら、私は今までのオークと同様にオリハルコンの刃で攻撃を加えます。他のオークよりは良い反応で回避を試みたようですが、私の攻撃の方が早く、結局は真っ二つとなります。

「あ、あんだ。強かったんだな」

冒険者の男性が、こちらへ寄ってきます。見ると、既に周囲のオークは全滅しており、残ったオークは敗走を開始して散り散りに逃

げていきます。

既に勝敗は決したと思われるので、私は戦闘態勢を解除し、会話に応えます。

「ええまあ、一応は元冒険者ですので」

「そうだったのか。あの有名な魔道具店がなあ」

驚いた様子で冒険者の男性が呟きますが、一方で納得もしている様子でした。冒険者が稼ぎを元手に一般の職業へと転職するのは珍しくもないため、それを加味してのことでしょう。

「にしても、ジェネラルオークを一撃つてのは相当だぞ。Aランク冒険者でも上位に入るんじゃないか？」

「そうですね。自分でも、それぐらいの実力があるとは自負しています」

「それで魔道具店を？ 冒険者やった方が良かったんじゃないか？」

「いえいえ。Aランク冒険者よりも安全に、大金を稼いでますので」

「はあ、そういうもんか」

「ええ、そういうものです」

こうして、冒険者の男性と雑談をしながら自分達の馬車へと戻ります。

そのついでで、この男性は冒険者としてはBランク上位、Aランク目前の実力者だということが分かったりもしましたが、その後は引退後の選択肢についての話で盛り上がり、むしろ冒険者そのものに関する話題は出なかつたりもしました。

そうして馬車に戻り、隊列の乱れた商隊が再出発の準備をするのを待っていると、商隊の護衛の代表者らしき人がこちらにやってきて、お礼とその気持ちとして金貨を数枚渡しに来てくれました。

これを遠慮せず受け取りつつ、ついでに何故オークに襲われたのかについても話を聞いてみると、原因も判明しました。

どうやら魔物を引き寄せるような品物を、十分な処置を施さずに運んでいた商人が居たそうなのです。それが原因で、森近くの街道を通った際にオークが引き寄せられ、街道のど真ん中で襲われる形になったのだとか。

そして、その原因とも言える商人は自分が運んでいた品物が原因と分かると、即座に一人で逃げ出したそうです。

恐らく、ここに来る途中ですれ違ったのがその商人なのでしょう。その話を護衛の代表者の方に伝えると、王都に到着すれば必ず報告し、その商人を捕まえると意気込んでいました。

とまあ、色々ありましたが、最後は何事もなく商隊の準備も終わり、塞がっていた道も空いた為、私たちもウエインズヴェールへと再出発しました。

商隊の方々から別れ際に再びお礼を言われつつの出發です。なぜか鼻高々に、有咲さんが笑みを零していたりもしましたが。その後は特に問題も無く、一日目の旅程を終了しました。

08 領都ウェインズヴェール

オークの群れとの遭遇以後、旅に異変らしい異変はありませんでした。初日こそ若干の遅れは出たものの、最終的には予定通り二日でウェインズヴェールへと到着しました。

旅の共となった老夫婦、冒険者の男性、そして御者の男性とはここでお別れです。

しばらくは、このウェインズヴェールの街を見て回ります。

「では、有咲さん。さっそく繁華街を見て回りましょうか」

「おう、いこうぜ、おっさん！」

有咲さんは堂々と私と腕を組んで来ます。あまり拒否するということも可哀想な気がしてしまい、つい断れずに受け入れてしまいます。まあ、結局は私が有咲さんに靡かなければ良いのです。気にせず、仕事に集中していきましょう。

まずは、ここウェインズヴェールの特産品などをチェックしていきます。

繁華街に出ると、やはりいいいますか、かなり賑わっていました。穀倉地帯というだけあって、食材も豊富だからなのか、屋台や料理店も多く見受けられます。

酪農なども盛んなのか、乳製品の並ぶ店も多くあります。チーズ

やバターのような加工品が多く、乳そのものが売られている店は限られています。

「あ、おっさん。アレみてみるよ」

「はいはい、どれでしょう?」

有咲さんの指差す方向を見ると、確かに驚くべき商品が並んでいます。

藁のようなもので包装された、豆類を発酵させた食品、つまり納豆に似た商品が売られていたのです。

私は有咲さんと連れ立って、さっそくその店に近寄っていきます。

「らっしゃい! ご夫婦かい? うちのトーフは美容にも良いって評判だよ、奥さんにどうだい?」

「トーフ、ですか。初めて見る商品ですね」

「そりゃあそうさ。よそに運ぼうとしたら、匂いに釣られて魔物が寄ってくるからな。基本、作った街で消費するしかねえ代物さ」

なんと。旅の途中で起こったオーク襲撃事件の真犯人が見つかりました。

どうやら異世界の納豆は、名前は豆腐で、しかも匂いで魔物を寄せ付けてしまう危険食品だったようです。

「ちなみに、これってどんな匂いがあるんですか?」

「魔物が好む匂いだが、人間には若干臭みのあるナッツって感じだな。品種改良が進む前はそりゃあもうひどい匂いだったって話だが、最近のはだいぶマシだぜ」

異世界納豆はあまり臭くない様子。これなら、臭いが苦手な人でも食べられるかもしれません。

「有咲さん。食べてみませんか？」

「まー、ちょっと気になるかな」

「と、いうわけで。店主さん、一つお願いします」

「あいよ！」

こうして、ウェインズヴェール最初の買い物は異世界の納豆、トーフに決まりました。

トーフを買った後は、有咲さんと一緒に店を見て回りつつ、休憩できる場所を探します。噴水広場が見つかり、ベンチが沢山並んでいて休憩に適していたので、そこに腰を下ろします。

「さて、ではこのトーフとやらを実食しましょうか」

「えっ、おっさん、屋外で臭いもん食べるつもりなのか？」

有咲さんが、マナー的な部分を気にしているようですね。

しかし、私の場合は問題ありません。

「私は『加齢臭』のスキルがありますので、これを駆使すると異臭は纏めて消臭可能なので、恐らくはトーフの臭いも周囲に広がる前に消すことが出来ますよ」

「そ、そうか。いや、加齢臭ってスキルがあるのもアレだけど、なんでそのスキルで消臭できんのか意味不明なんだけど」

「まあ、出来るものは出来ますから。有効活用していきましょう」

そう言っつて、私は早速トーフの藁を開封します。すると、内側からは見慣れた納豆、よりも大粒のネバネバした豆が姿を現しました。確かに、若干納豆のような臭いもしますが、ナッツ類によくある香ばしさの方が強く感じられます。

「なるほど、これは思いのほか食べやすそうですね」
「じゃあ、ほら。おっさん、あーん」

私が豆に手を出す前に、有咲さんが指でつまんで差し出してきます。

「あの、有咲さん？」

「ほらおっさん。早く食べよ？」

「いえ、自分で食べられますので」

「ほら早く！」

ずい、と差し出してくる有咲さん。逃げ場がありません。

仕方ないので、有咲さんの指から直接トーフを頂きます。有咲さんの指を少しだけ啜え込むような形になってしまいました。仕方ありません。

「どう？ おいしい？」

「そうですね。これは、かなりイケますね」

旨味もあり、少し塩気のようなものもあります。香りも納豆と違い臭みがあるものではないので、誰でも食べやすいのではないのでしょうか。

「ご飯に合わせてもいいですし、何なら単品でもけっこうイケます。お酒のおつまみにもなるでしょうし、食卓を彩る付け合せの一品として、漬物のような形でも使えるかもしれません。」

「これだけの食品が、王都でさえ無名だったというのは意外ですね。正直、もっと有名であってもおかしくない代物です」

「ふーん、原因がありそーだな」

「ええ。有咲さんは、何か気づきました？」

「もし、昨日のオークのアレの原因がコイツだったとしたら、多分原因は二つかな」

有咲さんが、自分の考えを語り始めます。

近頃は魔道具店での経験や、カルキュレーターというチートスキルの成長もあり、前提となる情報さえあれば有咲さんの方がより正しい見解を出せることが多くなってきました。

なので、こういった機会があれば、しばしば有咲さんの意見を求めるようにしています。

今回も、有咲さんは何か気付いたようです。

有咲さんは、躊躇わずに自分の見解を述べていきます。

「まず、輸送コスト。これの臭いで魔物が寄ってくるんだから、ただ運ぶだけでも大変なはずだろ？」

「そうですね。梱包のコストもそうですし、万が一に備えて護衛も通常より多く雇う必要があります」

「で、冒険者に依頼を出すわけだ。でも、普通の魔物の討伐と違って護衛依頼は安くなるはずなんだよ。違うか？」

「確かに、商隊の護衛依頼は割りに合わない報酬しか出ないことが多かった印象ですね」

私は、かつて冒険者だった頃のことを思い出しつつ応えます。

「まず、普通の魔物討伐の場合は依頼者がマジで困ってることが多いだろ。だから、何が何でも魔物を倒して欲しいから報酬が値上がりしやすい。常設の魔物討伐も、国の事業としてお金が入ってるはずだから、報酬がいいはずなんだよ」

冒険者の仕事の一つが、常設依頼と呼ばれる街道周辺の魔物討伐の依頼です。これを冒険者と騎士団がこなすことで、街道周辺の安全が保たれ、都市間の移動が楽になっているのです。

まあ、先日のオークの件のような例外もあるので、ある程度の自衛手段は必要なのですが。

「ついでに言えば、自分から足を運んで魔物を倒す場合は準備が出来る。こういう魔物をこれこれこういうところで、こういう手段で殺す、って自分で決めて準備して、イレギュラーがなければ順調に終わる仕事だからな。魔物と戦う必要のある依頼の中では、楽な方のはずなんだよ」

「なるほど、それは確かに」

例えば、新人冒険者は野良の魔物よりも、王都のマルチダンジョンのような生息、出現する魔物が決まっている場所を好む傾向がありました。その理由は、有咲さんが言ったような魔物の強さ以外の難易度が関係しているでしょう。

「で、それに対して商隊の護衛はいつ魔物が襲ってくるかわからない。どんな魔物が襲ってくるかも分からない。めっちゃくちゃ大変なのに、商人側からすれば基本は座ってるだけの冒険者相手に普通の討伐以上の報酬を渡す気にはならない。だから、冒険者側の事情を考えてくれるヤツじゃなきゃ、討伐系の依頼よりも日当に換算すれば安くなるぐらいの報酬を提示するのが普通になる」

「商人が利益を追求すれば、確かにそうなりますね」

「で、結果としてそんな割りに合わない仕事でも受けなきゃいけないような、ロートルの冒険者が集まる。実力が低いわけだから、やっぱり報酬は低くて正解だっただけで感じになって、なおさら金を出し渋って、っていう悪循環になるわけ」

有咲さんの見解は、確かにおおよそ正しいような気がします。実際、護衛依頼を受けるのは特定の商隊に信用を貰った冒険者が指名で、受けるか、討伐依頼をバリバリこなすことのできない冒険者が集団で受けるものだという認識があります。

その背景には、有咲さんの言ったような事情があったのでしよう。

「で、そうなると輸送コストってのは金額以上にリスクが気になってくるんだよ。ロートルがいくら群れたところで、やべー魔物が襲ってきたら対処できないだろ？ だからトーフみたいなりスクの高い商品は、ちゃんとした冒険者を雇わなきゃいけない。でもそうすると余計に金がかかるわけ。っていうか、ちよつと金を積んだぐらいじゃ普通の冒険者は仕事を受けたりしない。ロートルが結局群がっておしまい。だから、そもそもの話、高ランクの冒険者とのコネがなきゃ輸送自体成立しない。以上、トーフがよその街に運ばねー理由の一つ目な」

「理解できました。で、二つ目は？」

私が話の続きを促すと、有咲さんは頷いて話を続けます。

「単純に利益の話だよ。ほら、そもそもトーフには原料になる豆があるわけじゃん？」

「ですね」

「別にトーフにしなくても、それ売ればよくね？ って話。わざわざ加工して嗜好品にしなくても、豆そのものがどこ行ったって売れるんだから。何ならトーフ用の豆が売れないとしても、ここならもつと色々な作物を育てられるはずだろ？ だからトーフをわざわざ作って売る理由自体が薄い。まあ、好きなやつは好きな感じの嗜好品だから、街の中で消費する分ぐらいはつくられるだろっけどさ。わざわざ外に輸出しようって思わないんじゃない？」

言われてみれば、全くのド正論。トーフでなくても、利益を出す手段はいくらでもあるわけですからね。

「わかりました。つまり有咲さんの意見は二つ。トーフそのものが商品として弱い。街の外で売るには輸送面での問題が大きい。とい

う感じですね?」

「そーゆうこと。で、おっさんはそんなとこ、なんか面白いアイデアはある?」

「ええ、まあ一応は」

言つと、有咲さんはニヤリと笑います。

「さすが。で、何をやるわけ?」

「そこはお楽しみ、ということ。まずは、そうですね」

私は少し考え込み、最初にするべきことを脳内で取捨選択していきます。

「この街と王都間での、輸送コストについて具体的に調べましょうか」

10 商人組合の輸送事情

まず私たちがやってきたのは、ウエインズヴェールの商人組合の役所です。通常は、組合への加入や商業活動の各種許可証の発行の為に来る場所です。

今回は、この街の商人がどのような流れで輸送業務を冒険者に委託しているかについて質問するために来ました。

建物に入ると、総合受付らしい窓口が端の方にあつたので、そちらに向かいます。

「すみません、少しいいでしょうか」

「はい。ご用件は？」

「実は、自分は王都の方で商業を営んでいるのですが、この度ウエインズヴェール産の農作物を仕入れたいと考えております。その為に冒険者さんに護衛依頼を出して王都まで輸送を、と考えているのですが。ウエインズヴェールでは普通、どのような形で輸送業務を行っているのか知りたくてですね。その辺りの説明をお聞かせいただきたく思つてこちらに伺つたのですが」

「畏まりました。詳しい者をお呼びしますので、少々お待ち下さい」

そう言つて、受付さんは一度後ろの方へと引つ込みます。そのまましばらく待っていると、壮年の男性が姿を現しました。

「輸送業務についての詳細を伺いたいとのことですが、お時間はよ

るしいでしょうか？」

「はい、問題ありません」

「では、別室の方でご説明しますので」

男性の案内に従い、私と有咲さんは別室へと向かいます。

部屋に入ると、そのまま席について男性が説明を始めます。

「まず、輸送業務全体の流れですが、ウェインズヴェールでは一律組合の方で管理しております。他の都市に輸出を希望する場合、あるいは他都市からの輸入を希望する場合、どちらでもまずは組合の方で簡単な手続きをして頂ければ、後は相場等を加味して商隊を組み、冒険者ギルドの方へと護衛の依頼を提出します」

「全て組合の方で決めているのですか？」

「ええ。そうしないと、あまりにも輸送に関連する護衛依頼が冒険者ギルドの方で乱立してしまい、特定の商会のみが独占するような形に落ちてしまっていますので。機会を均等に割り振る為に、商隊の編成も護衛依頼の提出も全て組合の方で行っております」

となると、依頼報酬についても組合が決めている、ということになるのでしょうか。

「ちなみに、冒険者さんの方への依頼報酬はどのような感じですか？ 金額についてや、支払いまでの流れについて」

「はい。金額につきましては、冒険者ギルドの方とも協議をした結果、最終的な冒険者様への支払金額を決定しております。冒険者様への支払金額が決定すれば、そこから逆算して、商隊に加わる商会の皆様から、輸送品の内容に応じて集金し、これを報酬として使用させていただきます」

そこまで話を聞いて、急に有咲さんが口を開きます？

「中抜きは？ 組合と冒険者ギルドでどれくらい抜いてんの？」

その有咲さんの言葉を受けて、説明をしていた男性の表情が僅かに強張ります。

「ええと、ですね。中抜きと言うと非常に悪いことをしているように聞こえるのですが。実際は組合の方で商隊の割り振り、輸送品の内容確認等を行っておりまして、そちらの事務手数料として、いくら頂く形になっております」

「へえ、なるほどね。取るんだ、事務手数料」

なるほど、有咲さんの意図がわかりました。別にこれは責めているわけではなく、事実の確認に過ぎないのでしよう。

そして、事務手数料を取っていることが言葉で確認できました。実際に中抜きのような結果になっているのは間違いないでしょう。

さらに言えば、冒険者ギルドの方も同様に手数料を取っているはずです。わざわざギルドが報酬の金額についての協議に一枚噛む辺り、間違いないと見ていいでしょう。

元々、冒険者ギルドは依頼の斡旋料として幾らか報酬から差し引かれたものを冒険者に支払っているのですが。そこからさらに事務手数料まで取っているとすれば、二重で手数料を徴収しているような形にもなりますね。

これはなかなか、無駄の多い形態ですね。

「質問等は以上で宜しかったでしょうか？」

「はい、知りたいことはおおよそ分かりました。ありがとうございます」

質問したいことはこれ以上ありません。なので、最後に席を立ち、礼をしてから部屋を出ます。

そのまま有咲さんと並んで組合の建物を離れてから、口を開きま
す。

「やはり、輸送業務周辺がポイントとなりそうですね」

「だな。おっさんが言ってたアレ、たしか、最強の輸送業者とか何
とかってやつ。マジでチャンスかもしれないな」

「ええ。それがはつきりしただけでも、かなりの収穫ですね」

魔道具店や工場では孤児院産のローブと、冒険者ギルドから依頼
を通して集めた資源、そして個別に王都内部で手に入るものだけを
仕入れていました。

なので、こうした輸送関連の穴については知る機会がありません
でした。

旅に出て、ウェインスヴェールを訪れたことで、偶然知ったトー
フという食品を切っ掛けに一つの知見が得られたわけです。

「さて。それではもう一つ、確かめておきたい場所がありますので、
そちらに向かいますよ」

「ん。やっぱ見ときたい感じ？」

「ええ」

どうやら、有咲さんは想像がついていたようですね。

「行きましよう、トーフの製造元へ」

11 老舗トーフ蔵

ウエインズヴェールの観光案内板や、道行く人々に訊きながら、小一時間ほどかけてとあるトーフの製造所に辿り着きました。

なんでもトーフを製造している施設は『トーフ蔵』と呼ばれているらしく、今回訪ねるのはそのトーフ蔵の中でも最も古くから続く老舗のトーフ蔵なのだろうか。

トーフの直売もしているらしいので、一般客として普通にトーフ蔵へと入ります。

「ごめんください」

「はいはい、いらっしやいませ」

お店に入ると、着物に近いデザインの服を着たお婆さんが接客に出てきました。

「あの、こちらはウエインズヴェールで最も古くから続いているトーフ蔵だと聞いたのですが、事実でしょうか？」

「ええ、そうですよ。およそ千年以上前から続いているとも言われているんです。まあ、お店は何度も改装されてますから、本当のところは分かりませんがねえ」

「ほづほづ、なるほど」

千年とは、これまた随分昔からトーフは存在していたようですね。

「トーフというものを、実はウエイズヴェールに来てから初めて知ったのですが。これはどういった食品なのですか？」

「ええ、トーフはですねえ。かつて異世界から召喚された勇者様が考案されたとされている食品なんですよ。栄養価も高く、健康、美容に良いとされているんですよ」

美容や健康に良く栄養価があるというのは、日本でよく知られている納豆そのものですね。

「で、実はこのトーフという名前ですがねえ。勇者様の世界の言葉で『腐った豆』という意味なんだそうですよ」

「ほう、腐った豆ですか」

つまり、字で書くと豆腐。トーフは納豆なのに豆腐が語源とは。もうめちやくちゃですね。

「名前のとおり、トーフはお酒を作る時と同じで、お豆さんをトーフ菌という菌で発酵させたものなんですよ。とってもネバネバしていて、臭いもちよつと変わっているんだけど、これはお豆さんを発酵させたからなんですねえ」

「なるほど、そうやって作っていたんですね」

お婆さんの説明は既知の知識でしたが、ここは話を合わせて頷いておきます。

「それにしても、こんなに美味しいトーフなのに、どうしてウエイズヴェールでしか売っていないのですか？ 他の街でも売れば間違いなく人気になると思うのですが」

私が話の流れでお婆さんに問いかけると、何やら悲しそうな表情

を浮かべて答えが返ってきます。

「それがねえ。トーフの臭いは魔物を惹き付けるらしくてねえ。街の外に運ぶにはちょっと大変過ぎるらしいんですよ」

ここまででは、既に知っている話です。が、さらにお婆さんは興味深い話を続けてくれます。

「最近では魔王軍とかいうのとずっと戦争をしているでしょう？ それでパン用の小麦の方が売れるからって、トーフ豆の農家さんも減ってきていますし。このご時世ですから、どうしてもトーフみたいな高価な食べ物には売れづらいです。このままですと、昔ながらの製法で良いトーフを作っているトーフ蔵はどんどん潰れていっちゃうかもしれませんねえ」

「それは、大変ですね」

「ええ。それを変えたいからって、どうにかよその街でもトーフを売ろうと頑張ってくれている商人さんもいらっしやるんですけど、どうにも上手くいっていないようです。もしかしたら、近い将来トーフは工場で作った大量生産品しか食べられなくなるかもしれないねえ」

どうやら、トーフ産業は戦時特需の反動で苦しんでいるようです。私のように魔道具を売って稼ぐ業者がいるのとは逆に、こうして戦時中だからこそ売れづらくなる商品もあるわけです。

知識として知っているのと、こうしてお婆さんから直接話を聞いて実感するのではまるで意味が違います。

改めて、戦争中だからこそ成り立つ商売、工夫できる商売というのがあるということを感じます。

と、そんな話をお婆さんとしていたところ、店内に居合わせた他のお客さんが反応しました。

「なんと！ そのようなことになっていたのですか、それは嘆かかしいことです！」

声を上げたのは、金髪のイケメン男性です。トーフ蔵のような店に来る客層とはまた違う雰囲気があり、どこかチグハグな印象を受けます。

ただ、トーフは納豆とは違い、お酒のツマミなどにも合いそうな味をしているので、恐らくはそちらの方向でトーフを好むお客さんなのでしょう。美容や健康を気にして食事を考えるような年齢のようには見受けられません。

「私に出来ることなら、ぜひこのトーフ蔵を支援したいぐらいなのですが。しかし、安易にお金さえあれば解決するという問題でもありませんし。ううむ、如何ともしがたいですね」

男性は一人で考え込み、唸りだします。

何者なのでしょうか、この男性は？

12 地上げ屋撃退

謎のイケメン男性がうんうんと唸っているところに、私は声をかけようか迷います。何やら立場のありそうな人物なので、話を聞いてみる方が良い気がします。

が、単なる変な一般男性という可能性もあります。その場合は無駄足です。

どうするべきか、と思索したところです。

「おう、邪魔するぜ」

トーフ蔵に、一人の荒くれ者が姿を現しました。見るからにガラが悪く、武器となる大きなバトルアックスを背中に背負った男です。お客さんかもしれないと思い、お婆さんの方を見ましたが、どうやら違う様子。お婆さんは顔を顰めています。

「またですか。今日はどういうご用件ですか？」

「ああ？ 寝ぼけてんじゃねえぞババア。店畳む気になったかって訊きに來たんだよ」

「何度も言っているでしょう。うちは歴史があるんです。畳むつもりはありません」

「だからあ、ババアの蔵あ潰して、代わりに新しいトーフの工場建てるだけだっつってんだろ。テメエでもうやってけねえようになっつてんだから、よそに経営譲ってやるのが筋つてもんだろうが。ええ、

「コラ？」

突如現れた男は、お婆さん相手に凄みます。明らかに、真つ当な輩ではありません。

「ちょっと、そこの方」

私は男の肩をとんとん、と叩きつつ呼びかけます。

「ああん？」

そして男が睨みを効かせながらこちらを振り返ったと同時に拳を振り上げ、顔面に叩き込みます。

「がベッ！」

男は悲鳴を上げつつ、背中から倒れます。さすがに手加減はしてあるので、死ぬようなことはありません。せいぜい目が眩んで立ち上がれない程度のダメージでしょう。

「ああ、よかった。綺麗なお顔にハエが集っていたんですが、無事なようですね」

言いながら、倒れたままの男の胸ぐらを掴んで無理やり立ち上げさせます。

「まだ何か、用事がありますか？」

「い、いや。今日はもういい！」

私が笑顔で凄むと、男は本能的な恐怖を感じたのでしょう。その

まま慌てて逃げ帰るようにして店から出ていきます。

あまりにも急展開について来れないのか、お婆さんはオロオロと私を、そして男の出ていった扉を交互に見回します。

「素晴らしい！」

そんな中、状況を静観していた金髪イケメンの男性が声を上げ、拍手喝采します。

「伝統あるトーフ蔵を守るため、武装した不審な輩に恐れることなく立ち向かうとは。お名前を伺ってもよろしいかな？」

「はあ。自分は乙木雄一という者ですが」

私が名乗ると、男性は何か気付いたように顎に手を当てつつ言います。

「オトギユウイチ……というと、もしかや近頃王都の方で話題の、魔道具店の方ですか？」

「ええ、まあ。話題かどうかは分かりませんが、王都の方で魔道具店を営む乙木雄一なら、恐らく私のことかと思えます」

「なんと！ これは素晴らしい！」

金髪イケメンの男性はポンと手を叩いた後、被っていたフードを下ろします。

「申し遅れたが、私の名前はルーズヴェルト・フォン・ウェインズヴェール。この領都ウェインズヴェール、及び近隣一帯を治めている者だ」

そして、男性はまさかの名前を名乗り上げました。

13 ルーズヴェルト侯爵

金髪イケメン改め、ルーズヴェルト侯爵の誘いにより、私と有咲さんは侯爵の屋敷に招待されることとなりました。

ちなみにトーフ蔵の騒動の件は、私が少々暴れたことに関してはお咎めなし。そして、今後同じようなことが起こらないよう、トーフ蔵周辺の警備に騎士団から人員を割いてくれるよう取り計らってくれることとなりました。

これでひとまず、トーフ蔵のお婆さんが地上げ屋の乱暴な行為に悩まされることはなくなるはずですよ。

さて、一方で私と有咲さんの方ですが。何故侯爵の屋敷に招待を受けたかという点、恐らくは何らかの商談の為でしょう。

特に、今回ルーズヴェルト侯爵はトーフ蔵の保護に興味を持っているようでした。そして私たちがトーフ蔵に興味をもって聞き込みをしている様はしっかりと見られていたわけですよ。

既に、私たちがトーフ蔵に関係する何らかの商機を見出していることは感づかれています。これは感づかれています。これは感づかれています。

そうして侯爵とは別の馬車で屋敷に招待され、案内された部屋で待つこと三十分ほど。服装を貴族らしい綺羅びやかなものに着替えた侯爵が姿を現しました。

「お待ちさせたね、乙木殿。改めて、私がルーズヴェルト・フォン・ウエインズヴェールだ。トーフ蔵の視察はお忍びだったのでね、騙

すような形になってしまつてすまない」

「いえいえ、お気になさらず。こうして侯爵様のお屋敷にお招き頂いて、光栄の極みです」

ルーズヴェルト侯爵が手を差し出して来たので、握手を交わします。

「さて、小難しい挨拶は抜きにしよう。早速本題に入るのだが、乙木殿はトーフ蔵からどのような商機を見出されたのかな？」

やはり、お見通しであつたようです。侯爵が率直に本題から入つてくれたので、こちらとしてもすぐに核心から話すことが出来ます。

「実はですね、輸送業を営もうと考えておりました」

私は、これまでに考えてきた輸送業についての話と、それがトーフの輸出に当たつてどれだけ有効な手段であるかを話します。

冒険者ギルドと商会で取られる手数料を省きつつ、輸送専門に業務を絞ることで事業の効率化を図ること。そして、このやり方であれば少なくとも王都に向けてトーフを輸出し、現実的な値段で売ることが可能になることを説明しました。

すると、ルーズヴェルト侯爵は感心したように頷きます。

「ふむ。なるほど、やはり乙木殿は噂通りの方のようだ」

どのような噂か少々気になりますが、今はそこを訊くべき時ではないでしょう。

ひとまず、私の計画に対しての侯爵の反応を待ちます。

「王都でトーフが売れる可能性は低くはない。だが、高くもないと思う。しかし、販路が広がるのはそれだけでこのウエインスヴェールにとって有益だ。出来るならば、私にもその計画、ぜひ協力させていただきたい」

「それはありがたいですね。もしもウエインスヴェールで何かあった時は、是非頼らせて頂きます」

どうやらなかなかの評価を貰えたようです。領主様のお墨付きともなれば、今後もしもトーフを王都で販売する際、箔も付きます。トランプルの回避に使える手札にもなりますし、一石二鳥と言えるでしょう。

「ところで、乙木殿はどこか有力な貴族からの支援は受けておられるのかな？」

「いえ、特には」

「ほう、それならば、私が支援者として名乗りを上げても構わないということだね？」

ルーズヴェルト侯爵が、さらに踏み入った話を始めます。

この場合、支援者という言い方はそのままの解釈では駄目でしょう。単に侯爵家から資金などの援助を受けるというだけではなく、逆に侯爵家の顔を建てるため融通を効かせる必要も出てくるはずす。

言い換えるなら、これは自分の派閥、傘下に入らないかという打診になるわけです。

「その場合は、こちらはどのような利益が得られるのでしょうか？」

返事については置いておき、まずは支援を受けた場合のこちらのメリットについて聞いておきます。ここを逃して漠然とした約束を

交わってしまうわけには行きません。

「まずは当然、資金面の援助を約束しよう。他にも私が治める領地の範囲内であれば、商売の内容に関わらず優遇する。要するに、商会の意向を伺う必要無く君の事業を進めてよいということだ」

「なるほど、それは魅力的な提案ですが。もちろん、こちらが頂くばかりでは済まないのでしょうか？」

「まあ、それは当然だな」

侯爵は頷くと、自分の要求について話し始めます。

「私としては、今後君の開発する特別な魔道具を優先的に回してもらいたい」

「魔道具、ですか」

「ああ。君が作る魔道具は、これまでに存在していた魔道具とは一線を画する性能を誇る。それを成立させているのは恐らく君のスキルにある。違うかな？」

なんと、侯爵は私の作る魔道具の秘密についても察しがついていたようです。

確かに魔道具の性能を詳しく調べれば、通常の手段では付与不可能なスキルが付与されているわけですから。しかもそれを実現しているのは私だけ。

宮廷魔術師など様々なプロフェッショナルを差し置いて、私のような冒険者上がりの男が作れる理由があるとすれば、それは特別なスキルを生まれ持った為だと考えるのが自然です。

まあ、実際は生まれ持ったというよりは廃棄スキルを押し付けられたわけですが。細かい違いでしかないので、本筋は合っています。つまり、侯爵がこうして私のスキルに秘密があると予想している

ということとは、事前に私のことについて十分に下調べをしていたという事になります。

となると、今日のトーフ蔵での出会いは偶然などではなく、最初から計算されていたことなのかもしれません。

私と有咲さんがウエインズヴェールへ向かって王都を出たことは、動向を伺っていればすぐに分かることです。

そして私との接触を図るために、あのトーフ蔵に正体を隠して来店した。

「否定しないということは、肯定として受け取らせてもらおう」

侯爵は、自身の予想をほぼ確信した様子で言います。

「つまり、私としては君の商才そのものよりも、その特別なスキルから製造される魔道具に価値を見出しているのだよ。恐らくその魔道具さえあれば、今後我が侯爵家が他のどの家よりも優位に立つことが可能だと思っ程度にはね」

「それは、随分と高く評価いただけたようで恐縮です」

「いやいや、決して高すぎる評価ではないさ。君の存在、そして噂については、特に上級貴族の話題を席卷しているぐらいだからね」

私の魔道具が軍で採用され、前線で使用されていることを考えると、これはリップサービスというわけでもなさそうです。

そうになると、私を誰が傘下に加えるかで上級貴族間での競争が起こっているとも考えられます。

なかなか、判断の難しい状況です。迂闊にルーズヴェルト侯爵の傘下に入ってしまうえば、想定しないトラブルを抱え込む可能性も大いにあるわけですから。

14 想定外の提案

侯爵家との付き合いによる利益は気になりますが、しかしこちらも既に軍部や宮廷魔術師、シュリ君との付き合いがあります。

まず、侯爵に自分の立場から釈明した上で話を進めましょう。

「一応、私は既に軍部と取引がありますし、宮廷魔術師の方とも関わりがあります。その上で、さらに侯爵家との付き合いが増えることとどの程度の意味があるのでしょうか」

「ふむ、そうだね」

ルーズヴェルト侯爵はアゴに手を当てながら考え込み、応えます。

「まず、我が国は貴族籍が無ければ扱えないものがいくらか存在する。例えばダンジョン産の高性能な魔道具等の取引は、貴族籍を持つものか、貴族籍を持つものに委任された者しかやってはならないことになっている。基本的に、こういった商売は利権の塊だからな新規参入は本来難しい所だが、私であればどうとでも融通出来る」

説明から逆説的に考えれば、つまり宮廷魔術師や軍部の高官では手の出せない領域だということなのでしょう。

確かに、最強の運送業者計画でもそういったややこしい商品を扱う場合はあるでしょう。そうなった時、侯爵家から委任されているという事実があると無いとでは話が変わります。

実際にダンジョン産の品物の取引に関わるかどうかはさておき、そうした選択肢の幅があるというのはメリットでしょう。

「次に、大口の顧客として貴族を相手に商売が出来るようになるだろう。侯爵家の傘下、ということとは同じ傘の下にある他の貴族家とも親しくなることを意味する。商機が増えることは間違いないだろう」

つまり、貴族というのはそれだけ閉鎖的な存在であり、ある程度の身内の保証がなければ取引に応じてくれることは少ないということでしょう。

ただ、私の場合は軍部の取引などで実績があり、有名ではあるらしいので、もしも傘下に加わらなかつたとしても取引が不可能になるというわけではないでしょう。あくまでも、侯爵家の保証が加わることでより多くの貴族と、より簡単に取引可能になるということです。

しかし、そこにはデメリットも存在します。

「ですが、違う傘の下に集う貴族家の方々との取引は難しくなるのではありませんか？」

そう、つまり侯爵家の保証がつくことで、逆に侯爵家との関係がよろしくない派閥から敬遠される可能性があるわけです。

「それは事実、起こりうるだろう。しかし、全ての派閥が敵対関係にあるわけではない。むしろ、我々は比較的友好的な関係にある他派閥が多いからな。貴族相手の商機を増やす為であれば、私の傘下に入るのが一番良いと言えるだろう」

もしもそれが事実であれば、デメリットはほぼ存在しないと言えます。友好的な態度の派閥とあえて敵対する派閥ともなれば、なんらかの厄介な問題を抱えている可能性が高いですからね。そういったグループとはむしろ、あまり関わり合いにならないほうが良いでしょう。

「なるほど、おおよそ理解できました。つまりウエインスヴェール侯爵家の傘下に入ること、私は貴族籍のある方との関わりが無ければ手を出せない領域の商売にも手が出せるようになる。その上で、資金援助やウエインスヴェール領内での優遇というメリットも享受可能となるわけですね」

「ああ、そのとおりだ」

「そして、そちらの要求は新たに開発した魔道具を優先的に利用する権利がほしいとのことですね？」

「ああ。それ以外に大きな要求は無い」

さて、メリットとデメリット、そして侯爵側の要求するものもはつきりしました。どうしたものでしょうか。

正直言つて、私の最終目標の都合を考えると、あまりこの国の貴族など、体制側の人間と深く関わるのは得策ではありません。

とはいえ、それを差し引いても侯爵家の傘下に入ることでも得られる利益は十分に大きいと言えます。

これは、ウエインスヴェール侯爵家が貴族社会でどのような立場にあるのか、詳しく調べた上でなければ回答が難しいですね。

後に回答する、という形にするとしても、この場で良い手応えかあるいは悪い手応えかについては示しておく必要があります。こちらの都合でどつちつかずのまま回答を引き伸ばす、というのは不信感に繋がりますからね。

結果的にウエインズヴェール侯爵家との関係が悪化するだけ、という形にしない為には、ここである程度の方針を示しておくべきでしょう。

とまあ、私が様々なことを考えていたところで、さらに侯爵から言葉が付け加えられます。

「そうだな。メリットとして提示するほどのものでもないが、君を我が侯爵家の客人待遇で迎え入れるつもりではある」

客人待遇。侯爵家に所属するわけではないものの、侯爵家とつながりがある人間として公式にこちらにも名乗ることが可能になるということです。

そのメリット自体は確かに、さほど大きくはないものの、あると嬉しい程度のおまけにはなります。

ただ、それに続けて侯爵が挙げた提案が問題でした。

「そして乙木殿の姪にあたる君、確か有咲殿だったかな？ 君を我が侯爵家の側室として迎え入れることも考えているよ」

それは、あまりにも想定から外れた提案でした。

15 提案の是非

突然の侯爵の発言に思考が一瞬停止してしまいます。

有咲さんを側室として迎える。それは確かに、この世界の常識で言えばメリットの提示になるのでしょうか。

まず単なる平民が貴族、それも上級貴族である侯爵の側室として迎え入れられることはほぼありません。

通常、貴族というものは血というものを大事にします。上級貴族ほど顕著であり、侯爵ほどの地位を持つ人が平民から側室を迎えられるということはほぼありません。

そして、この世界では側室に迎え入れられるということは貴族籍を持つということにもなります。正確には本人ではなくその子どもですが。

つまり、もしも有咲さんとルーズヴェルト侯爵の間に子どもが出た場合、私にとっても血縁者に貴族籍を持つ者が生まれるということになります。

それはすなわち自分自身もまた、特権階級の一員に加わることを意味します。客人待遇とは比べ物にならないほど、私個人の発言権が増すことにもなります。

また、回りくどい手段にはなりますが、貴族籍を持つ親戚が存在するなら、私もまた貴族籍を持っていても問題ないものと見なされ、階級は低いでしょうが貴族籍を手に入れる可能性さえ見えてきます。

つまり侯爵は、それだけの特権を得る可能性を報酬として提示しているわけです。

破格の報酬ですが、しかし、私はこれを受け取るわけにはいきません。

「すみません、それについては、受け入れられません」

「なに？」

私が拒否の姿勢を示すと、侯爵は驚いたような表情を浮かべます。

「なにか不満があるのかな？」

「有咲さんは、私の姪です。彼女を私の商売の為に利用するような形はとりたくないのです」

「ふむ、なるほど」

侯爵は、顎を触りながら何かを考え始めます。

これは都合がいいかもしれませんが。有咲さんを側室として迎え入れる、という発言を単なる報酬として提示出来なかった以上、侯爵側の交渉が失敗した形になります。つまり向こうのミスでケチがついたので、ここで一度話を持ち帰ったとしても、こちらの非は薄くなります。

「申し訳ありませんが、今日のお話はまた後日、返事をするという形にさせていただきませんか。まだこちらとしても、情報を整理しきれいていけませんので」

「そうか、仕方ない。今日のところはここまでにしよう。すまなかつたね、色よい返事を期待しておくよ」

「善処させていただきます」

侯爵の差し出した手を取り、握手を交わしてこの場はお開きとなりました。

侯爵との交渉への返事はまた後日ということになった為、その日は屋敷を後にして、ウェインズヴェールの適当な宿泊施設で一晩を過ごすことになりました。

おそらくあの場で交渉に色よい姿勢を示していれば歓迎する準備はあったでしょうが。今回はほぼ何の姿勢も示さずに話を切り上げたため、そうはならなかったようです。

宿を探して、街を歩いていると、有咲さんがふと口を開きました。

「おっさん、ありがとな」

「はい？」

「あの貴族のおっさんに、側室になれって言われたのに断ってくれただろ？」

有咲さんは、優しげに微笑みながら言います。

「かばってくれて、嬉しかった。アタシが拒否するよりも、何よりも先におっさんが断ってくれて、ちよつと感動しちゃった」

「ええ、当然です。有咲さんは、大切な姪っ子ですからね」

「ふふ。だよな」

なにか含みのある笑い方をする有咲さん。どこことなく、全てを見透かされているような気がして、少し焦ってしまいます。

侯爵に、有咲さんを側室に、という話をされた瞬間。予想外のことに一瞬固まってしまったのですが、直後に断りの言葉を発してい

ました。

有咲さんの意思確認をするまでもなく、私が独断で断ったのです。

そこには確かに、有咲さんを奪われたくないという気持ち働いていました。有咲さんを守る。そういう気持ちも当然ありましたが、それと同時に侯爵に有咲さんを渡したくないという気持ちも胸中に渦巻いていたのです。

それを、まさか有咲さんに見抜かれているのではないか、という気がしてしまいます。

有咲さんのスキル『カルキュレーター』であれば、そういった洞察力にも優れているはずですから、ありえなくはないでしょう。

そして、そうした洞察力が私の本心を見破った結果、あの含みのある笑みがこぼれたのだとしたら。

「どーしたんだよ、おっさん？」

私をからかうように、挑発的な表情で有咲さんが腕を絡めてきます。

「いえ、なんでもありませんよ」

できるだけ平常心を保ちながら、そう答えます。

16 前線での偶然（前書き）

前回と前々回の投稿をお休みしてしまい、申し訳ありません。
お詫びというわけではありませんが、本日は二本投稿しようと思
います。

16 前線での偶然

ウエインズヴェールでの視察が終わった後は、特に何事もなく領都を出発することとなりました。

侯爵からの接触もなく、ひとまずは問題なく切り抜けられたようです。

ただ、侯爵の話を私が突っぱねて以降、有咲さんがさらに積極的になつてしまつて困っています。

腕を組むぐらいならまだしも、行く先々の宿泊施設では同じ部屋に泊まるうなどと言い出すほどです。

しっかりと説得した上で別の部屋に泊まっても、有咲さんは諦めることなく勝手に私の部屋に入ってきます。その都度しっかりと追いついていくのですが、それでも有咲さんは諦めず、同じようなことを何度も繰り返しました。

そうこうしつつも、視察の旅は順調に進みました。ウエインズヴェールのような目新しい発見こそ無いものの、それぞれの土地でどのような特産品が消費され、どのような文化があるのかという見地が増えました。

この経験と知識は、今後私が事業を拡大していく上で、きっと役に立つことでしょう。

やがて旅も終盤に近づき、とうとう予定していた軍の視察、魔王軍との最前線へと到着しました。

「ここでの視察を終えれば、あとは王都へと引き返すだけとなります。」

「なんか面白いことが見つかるといいな」

「そうですね」

有咲さんと共に、視察の成果を期待しながら軍の基地へと向かいます。

基地への入場は、マルクリーヌさんから頂いていた書状のおかげですんなり行きました。むしろ、王都の騎士団長からの要望というのもあつてか、軍人とは思えないほど丁寧な態度で、しっかりと出迎えてくれました。

基地の設備や備品の保守運営を担当する部署、輜重部の軍曹さんが私と有咲さんを出迎えてくれた後、基地の総責任者である大佐の元へと案内されます。

「乙木殿の開発された高周波ブレードのお陰で、大きなステータス格差のある魔物相手でも撃破が可能になりましたので、結果的に防衛時の消耗が減っているんですよ。損耗が減っているお陰で兵站到割く予算にも余裕が生まれました。兵士の食事情も改善して、近頃の戦果も相まって士気がかなり向上していますね」

「ふむふむ、なるほど」

案内の道中、輜重部の軍曹さんから高周波ブレードの評判を聞いていきます。

「使い勝手などについては、不満などは出ていませんか？」

「そうですね。武器が脆いこともあつて、やはり刃の付け替えの手

間で不満が出ています。前線では混戦になることも少なくないので、刃が折れた時は引かざるをえなくなります。なので高周波ブレードを装備した部隊は小隊単位で各地に配備し、一般装備の兵士で対応できない魔物のみ優先的に撃破するという運用の域を出ないのが現状です。思っていたよりも攻撃力が上がった感じはしないな、というのが現場の人間の感想ですかね」

やはり、ブレード部分の脆さがネックとなっているようですね。陣形を組んでカバーするという運用法を提示はしましたが、残念ながらそこは上手く行っていないようです。

今後、高周波ブレードの改良をすればその辺りになってくるでしょう。

単純にブレードの頑丈さを上げるという可能性も考えられますし、刃の付け替え機構を工夫して改良するという手段も考えられます。

実際にどうやって問題を解決するかは、今後の課題でしょう。

そうして軍曹さんと話をしながら歩くこと数分。大佐さんが待機しているという天幕に到着しました。

「ガウエイン大佐殿！ 乙木雄一殿をお連れしました！」

「入りたまえ」

天幕の中から声が聞こえ、私と有咲さんは軍曹さんと共に天幕の中へと入ります。

すると、なんと中には思いもよらぬ先客が待っていました。

「あれ、乙木さん？」

声を上げたのは、金浜螢一君。召喚された勇者の一人であり、勇者称号を持つ少年です。

そして隣にはもう一人。

「偶然ですね。お久しぶりです、乙木さん」

聖女の勇者称号を持つ、三森沙織さんです。

17 戦況について(前書き)

こちら、本日二本目の投稿になります。

17 戦況について

思わぬ出会いに面食らいながらも、私は二人に質問します。

「お二人は、どうしてこちらに？」

「実は、この近くまで魔王軍の四天王の一人が攻め込んできているとかで。俺と沙織が派遣されてきたんです」

「なるほど、そうだったのですか」

確か、勇者称号を持つ四人はこうして各地の戦場にしばしば派遣されているというふうに聞き及んでいました。今回も、そういった事例の一つなのでしょう。

「勇者殿。乙木殿とお知り合いだったのですか？」

「はい。乙木さんには支援をして頂いているんですよ」

「ほう、そうだったのですか」

金浜君と話をする壮年の男性、恐らくガウエイン大佐と呼ばれた人物がこちらに向き直ります。

「ようこそいらっしやっただ、乙木殿。私がこの基地の総指揮官であるガウエイン・ボードウィン大佐だ」

そう言って、ガウエイン大佐は笑顔でこちらに握手を求めてきます。

「こちらこそ、視察を認めて頂いてありがとうございます。私が乙木雄一。で、こちらの女性が美樹本有咲。私の補佐をしてもらっています」

そう言うってから握手に答えます。がっしりと握手を交わした後、ガウエイン大佐が本題に入ります。

「ちょうど勇者殿とも作戦に関わる話をするところだったのだよ。できれば、乙木殿もこのまま出席していただけないかな？」

「私ですか？」

「ああ。乙木殿が開発した高周波ブレードを運用する突破部隊も関わってくるのでね。開発者からの意見も訊きたい。それに、こちらからの意見も実戦レベルの話をお伝えできるので一石二鳥だ」

確かに、手間は減るでしょう。が、作戦を私のような外部のような者に話してしまっても大丈夫なのでしょうか。

「おや。その顔は、自分が作戦の詳細を知ってしまったてもいいのか、と疑問に思っているのかな？」

「ええ、まあ。そんなところです」

「あのマルクリーヌ殿の推薦で来ていただいた方を疑う理由はありません。そもそも、我々は乙木殿の開発した魔道具に感謝しているのです。お陰で助かった命も少なくない。問者を疑うはずもないだろう？」

「しかし、情報が漏れるルートが増えるのは」

「ははは。漏れたところで、その問題のあるような複雑な作戦ではないよ。単純な、ごく常識的な動きの再確認。認識の共有をするだけに過ぎない」

どうにも納得いきませんが、ひとまずガウエイン大佐が良いというのなら良いということにしましょう。

ひとまず全員で席につき、まずはガウエイン大佐からの説明を待ちます。

「さて。まず今回勇者殿をお呼びした最大の理由についての話をしよう。当基地はつい最近までは魔王軍との小競り合いも少なく、比較的平穏な状況が続いていた。だが、およそ半月ほど前から状況が変わったのだ。散発的に国境を攻めていた魔王軍の一部が、徐々にこの基地周辺の地域へと集合しつつある。恐らくは、突破部隊の運用開始により戦況が変わった影響であると思われる。が、重要なのはそこではない」

言つて、大佐は大きなテーブルにまんべんなく広げられた地図のある地点を指差します。

「この地点に、魔王軍が集結しつつある。その種族はアンデッドや悪魔系統の魔物、スピリット系の魔物が中心となっている。このことからある可能性を危惧し、偵察部隊を出した所、そこに四天王の一人であるエルダーレイスのアヴァロンが来ていることが分かった。恐らく、今回の魔物の集結を指示しているのも奴だろう」

エルダーレイス、とはスピリット系の魔物の上位種と言われるレイスの、さらに上位種のことです。通常のレイスでさえ、都市一つを壊滅させる可能性があるほどの危険な魔物なのに、その上位種ともなれば脅威は計り知れませんか。

さらにそんな魔物が、無数の魔物を引き連れているのです。その危険度から言つて、早急な対応が必要なことは間違いないでしょう。

「なぜこの時期にこの基地を、という点については、いくつか可能性が上げられる。まず当基地は直近の戦闘経験が他の前線と比べて浅い。戦力が低いわけではないが、戦闘経験という意味では他の基地に劣るだろう。これを見越して、奴らはあえてここへの攻めを薄くしていた可能性がある」

「つまり、長期間に渡って続いてきた散発的な戦闘自体が、この基地を落とすための布石であったということですね？」

「そういうことです、勇者殿」

ガウエイン大佐は頷き、話を続けます。

「もしも当基地が陥落した場合、我が国最大の穀倉地帯ウエインズヴェールまで一気に攻め上がることも可能になる。もしもウエインズヴェールが戦火の被害を受けた場合、その損害は計り知れない」

輜重というものは極めて重要な要素です。そして補給される食料の多くを生産しているウエインズヴェールが被害を受ければ、必然的に軍の食糧事情が逼迫します。全体的な戦力ダウンは免れないでしょう。

「また、当基地から我が国の主要都市へ向かうには幾つかの山脈を迂回しなければならないのだが、奴ら魔王軍にはドラゴンやワイバーン部隊、ゴブリンやオークなど山林に生息する魔物の部隊も少なくない。それを考慮すると、本来ならば地形に守られているはずの各都市に向けて、最短で戦力を差し向けられる拠点として機能する」

「なるほど。魔王軍にとっては、どこに攻め入るにしても都合がいい拠点になるわけですね」

「そういうことだ。無論、それを警戒しているが故に当基地には他の前線基地と比べても倍以上の兵士が常駐しているし、近隣の都市

からも緊急時は騎士団が救援に来る手筈にはなっている。だが、さすがに四天王に加えて各地から集った無数の魔物の群れに一度に襲われて耐えきれるかどうかは分からん」

金浜君と大佐が話す内容から、どうやらこの基地は相当に緊張状態にあるようです。

さて、これでおおよその状況については把握できました。肝心の作戦については、どうするつもりなのでしょううか。

18 強襲作戦

ガウエイン大佐は、いよいよ作戦についての詳細を語り始めます。

「そこで今回、勇者殿にも協力してもらい、魔王軍に先手を打つことにした。今回の相手は勇者殿と聖女殿の力が有効打となるアンデッド、悪魔、スピリット系統の魔物が中心だ。奴らが攻め込んでくる前に四天王か、あるいは魔物の群れを統率している上位種の魔物を討伐する。奴ら魔王軍は上位種の魔物による恐怖統治により軍を動かしているのが常だ。故に、頭さえ潰せば壊走し、集団で組織的に基地を襲撃するということは不可能になる」

「なるほど、軍隊として成立しなければ、それは単なる魔物の群れ。防衛するならそう難しくはないというわけですね？」

「そういうことです、勇者殿」

「少しかまいませんか？」

私は拳手して、ガウエイン大佐に質問を投げかけます。

「壊走するとしても、相手は無数の魔物の群れです。それらが周辺に広がり、無作為に破壊活動を行うとすれば、それはそれで被害が大きくなるのでは？」

「それについては問題ない。既に周辺都市の騎士団に応援の打診はしており、作戦についても伝えてある。壊走する魔物の群れ程度であれば、問題なく処理してくれるだろう」

確かに、壊走する魔物の群れは遠くへ行くほどに密度が低くなります。この基地の周囲ならそれほど変化はありませんが、近隣の都市や集落に到達する頃には大きな脅威とはならないでしょう。しかし、それはつまり。

「騎士団は、応援には来ないということですか？」

「そうだ。魔物の群れが基地を襲撃するタイミングには、どちらにしろ間に合わないだろうからな。それならば、作戦で生じる周辺の被害への対処に動いてもらう方が合理的だ」

理屈で言えば、確かにそう言えるとは思いますが、どうにも引つかかる部分の多い作戦です。

とはいえ、話は途中なので、ひとまず続きを聞きましょう。

「で、その肝心の作戦とは具体的にどのようなものになるのでしょうか」

「ああ、そこで乙木殿が開発した高周波ブレードが役に立つのだよ」

ガウエイン大佐は、自信満々に語り始めます。

「基本としては、勇者殿と聖女殿は温存しつつ敵本陣に送り込むことを目標としていく。突破部隊が既存の展開している魔王軍を強襲し、空いた穴に後続の兵力を送り込んで維持、拡大していく。この強襲をそのまま敵本陣まで直通させ、到達した時点で勇者殿と聖女殿に出てもらう。お二人に本陣を叩いてもらいつつ、我々は兵力で空けた穴を退路として維持しつつ防衛に徹し、突破部隊は下げる。お二人が十分に敵本陣を蹂躪した後、軍と共に後退。基地に帰還する」

話を聞く限り、かなり強引な強襲作戦のように思います。

「防衛といますが、魔王軍に左右を挟まれた状態でそれが可能なのですか？」

「当基地の戦力の七割から八割ほどを送り込めば可能だと試算されている。しかも、これは乙木殿の耐刃ローブが無かったころのデータを元にしたものだ。勝算は高いと考えているよ」

確かに、一般兵が耐刃ローブを着ていればそこらの魔物相手に負傷する可能性は極めて低いでしょう。守るだけ、かつ長時間でなければ不可能では無いはずです。

「ですが、時間が経てば耐刃ローブなど役に立たないような強力な魔物が集まってくるはずですよ」

「その頃には突破部隊が後退しているはずだ。彼らを運用し、突出した敵戦力のみ撃退していく」

なるほど、理屈としては無駄の無い作戦と言えるでしょう。

しかし、それは全てが予定通り、何一つイレギュラーなど発生せず順当に事が進んだ場合の話です。

戦場で、そのようなことがありえるのでしょうか？

そして何より。そもそも最も重要で守るべきものはこの基地です。なのに、戦力の七割から八割を基地の外に、それも長く突出させ撤退に時間が掛かる形で出撃させ、勇者と聖女という貴重な戦力まで敵本陣のど真ん中に送り込んでしまうのは、どうも矛盾しているような気がしてなりません。

私なら、勇者という突出した戦力がある時点で防衛はほぼ確実に可能になったと考えます。

基地が陥落するとすれば、物量で長期間の攻めによるものか、四

天王というイレギュラーな戦力によるものの二択です。

物量の問題は周辺の都市からの応援で解決可能なはず。敵がどれだけ多くても、一度に基地を攻めることの出来る数は面の広さに準じますから。応援が来るまで耐えきることは、そもそも基地というものの存在意義からして可能なはず。

そして四天王に関しては、勇者と聖女という突出した戦力が二つも用意されているのですから問題になりません。エルダーレイスのような魔物には聖女の持つ神聖魔法が極めて有効ですし、勇者は魔物全般に大して特攻効果のあるスキルを持っているはず。

なので、二人が基地に到着した時点でこの防衛は成功したも同然のはずなのです。

故に、無理に攻め入る必要すらないはずですが。しかしこのガウエイン大佐という人は、何が何でも敵本陣の壊滅をさせたいご様子。確かに大きな脅威を叩いてしまいたいという気持ちは理解できません。しかし、それは無意味な強襲作戦になるのではないでしょうか。

私がそのようなことを考えていると、金浜君が笑顔を浮かべつつ口を開きます。

「安心してください、乙木さん。何かあれば、俺と沙織がすぐ戻りますから。四天王なら既に一人倒したこともありますし、ステータスだってこんな感じですよ」

そう言って、金浜君は自分のステータスボードを表示してこちらに見せてくれます。

【レベル】 85

【筋力】 SSS

【魔力】 SSS

【体力】 SSS

【速力】 SSS

【属性】 光 炎 治癒 闘気

【スキル】 勇者

「ほら。それに、沙織もなかなか強いんです」

「私も、けっこうやるんですよ?」

そう言っつて、三森さんも自分のステータスボードを表示します。

【名前】 三森沙織

【レベル】 76

【筋力】 SS

【魔力】 SSS

【体力】 SS

【速力】 SS

【属性】 光 水 治癒 支援 結界

【スキル】 聖女

「この通り、四天王程度なら問題にならないことは分かっています。もし基地になにかあったとしても、俺ら二人だけなら軍が戻るよりずっと速く戻れるはずですよ」

「そう、ですか」

勇者と聖女。この二人がすぐに戻ってくるのが可能だということなら、一応は安心なのでしょうが。

いえ、敵側の作戦が結局のところ分かっているのではありませんから、何とも言えませんね。

私と金浜君が議論を交わしていたところに、ガウエイン大佐が割り込みます。

「何にせよ、既に出撃の準備は整っているのだ。奴ら魔王軍が集結し終える前に、一刻も早く打撃を与える必要があることには変わらない。作戦の大筋を変更するつもりは無いよ」

そうガウエイン大佐が言うので、私もひとまず言葉を飲み込みます。不安要素はありますが、確かに敵を早めに叩かなければ大きな被害が出る可能性が高いのも事実です。魔王軍の体制が整った後は、少なからず犠牲が出ることは間違いありません。

ここで叩くことが出来れば、被害を最小限に抑えることが出来るのも事実です。

「そもそも、このような作戦を実行する判断を下したのは乙木殿の魔道具のお陰でもあるのだがね？」

「私の魔道具が、ですか？」

「ああ。高周波ブレードの突破力。そして耐刃ロープの防御力。これらが無ければ、いくら勇者殿という戦力があるとはいえ、このような作戦に出ることは無かった。つまり、乙木殿の装備があつたからこそ、こうして事前に魔王軍の大規模作戦を潰す為に動いているのだ。結果的に、どれほどの命が救われることになるか。そのことを思うと、私は感謝してもしきれないほどの恩を感じているよ」

言つて、ガウエイン大佐は私の方をしつかり見据えて言います。

「ありがとう、乙木殿。そして是非、今回の作戦にも協力して欲しい。突破部隊の具体的な運用についても意見を頂きたい。この後は、そちらに向かつて部隊長から詳しい話を聞いて頂く形になるのだが、問題ありませんでしたかな？」

「ええ、それについては大丈夫です。こちらとしても、是非協力をさせてください」

「感謝する」

むしろ協力しなければ、もしもなにかイレギュラーが起こったときに兵士の命を見捨てる形にもなってしまう。そんな寝覚めの悪いことは出来ませんからね。

「では、これにて作戦会議は終了だ。勇者殿と聖女殿は出撃の準備を。乙木殿は突破部隊の方に向かって頂いて、装備に関する具体的なアドバイスを頼む」

こうして、ガウエイン大佐によるどうも杜撰な部分が目立つ作戦会議は終了しました。

会議終了後、私と有咲さんは並んで突破部隊の待機する場所へと向かいます。場所は金浜君と三森さんが知っており、待機場所も近いため、二人に案内をしてもらつ形になりました。

「なあ、おっさん」

「はい？」

「たぶん、この基地やばい。なんもしないと落とされる」

有咲さんは、深刻そうな表情で言います。

「奇遇ですね。私も、そんな予感はしていました」

「アタシなら、もうひとり四天王を出して単独で基地を落とさせる。つてか、それだけでこの作戦つて崩壊すのに、なんで警戒してないのか意味分かんないんだけど」

確かに、有咲さんの言うとおりですね。見つかっているのがエルダーレイスだけだからといって、この基地に攻め込んでくる四天王が一人だけとは限りません。

「それは無いと思うよ、美樹本さん」

私と有咲さんの会話に、ふと前に行く金浜君が口をはさみます。

「魔王軍は一枚岩じゃないっていうか、バラバラなんだよ。四天王同士も仲が悪くつてさ。戦場で魔王軍同士が争ってることだったよ」

「協力するなんてありえない、つてわけ？」

「そうそう」

有咲さんは金浜君の言葉を受けて、ため息を吐きます。

「じゃあなに？ 魔王軍はそれぞれが別々の集まりで、向こうからすれば別の群れは敵同士とでも言いたいわけ？」

「そうだね。俺らが今まで見てきた魔王軍はそういう奴らばかりだったよ。協力なんてしないし、なんなら味方同士で殺し合う」

「じゃあさ、なんでここの魔王軍は違うんだよ」

有咲さんの反論に、金浜君は面食らった様子で言葉に詰まります。

「基地の外には、フツの魔物ばかり集まってるわけじゃん？ で、そっからずっと向こうまで行ったらおばけっぽい魔物ばかり集まってるでしょ？」

「そうだね」

「おかしいじゃん。敵同士だったら、フツの魔物が今のまま待機してるわけくない？ 逃げるでしょ。後ろも前も敵しかいないんだし。基地の周りで普段どおりにしてるはずないじゃん」

金浜君は、反論に困った様子でした。そして、なんとか言葉を絞り出します。

「でも、それは魔王軍が協力してるかもって可能性の話だよな？
今まではそんなこと無かったんだし、たぶんなにか別の理由がある
て」

「あるわけないし、あったから何？ ヤバそうってことに変わりない？」

金浜君は反論する手立てを思いつかなくなったのか、気まずそうに口を噤みます。

「ともかく、やることに変わりはありませんよ。基地が危険だから
とって、これから金浜君や三森さんが勝手な行動をすれば、今度
は前線で戦う兵士の皆さんの命が危険になりますからね」
「そう、ですね」

私が仲裁するように行って、金浜君は納得したように頷きます。
有咲さんはドヤ顔を浮かべてフン、と鼻で笑っています。やたら挑発的な態度ですが、何が気に入らないのでしょうか。

ともかく、今は二人の口論を眺めているべき場合でもありません。

「ひとまず、私と有咲さんが基地に残ります。なので、ある程度の事態には対処出来るはずですよ」

私がそう言ってみせると、金浜君は首をかしげます。

「乙木さんは、四天王が来たとしても対処できるんですか？」

「ええ、可能です」

「なるほど、なにかいい魔道具があるんですね。それなら納得です」

魔道具が理由ではないのですが、あえて訂正するようなことでもないので何も言わずにおきます。

ひとまず金浜君が作戦に集中できるようになったようなので良いとしましょう。

「では、乙木さん。俺たちはここで。この通路をこのまままっすぐ進んで、左に曲がれば部隊が整列している広場に出れるはずですよ。俺らは準備をしてから向かいますんで」

言って、金浜君は右手側にある扉に手を掛けます。

「また後でお会いしましょうね」

三森さんも、その隣の扉を開き、中に入っていきます。恐らくは、装備などを整え替えるつもりなのでしょう。

「けっ。勇者が何だよ、ただのバカじゃん」

「有咲さん。悪態についても状況は変わりませんよ」

「分かってるっ！」

有咲さんはそう言って、少々乱暴に私の腕を取ります。

「いくぞ、おっさん！」

「ええ」

二人で、すこし早足で目的地へと向かいます。

軍の兵士が整列する広場に出ると、既に話は伝わっていたようで、私と有咲さんは高周波ブレードを装備する突破部隊の方へと案内されます。

そして部隊長の方とも挨拶を終え、いよいよ本来の目的のために質問を開始します。

「それでは皆さん。まずは高周波ブレードについてなにか不満点や、目立ったトラブルなどはありませんか？」

私が問いかけると、まず一人の兵士が挙手して答えます。

「この高周波ブレードさあ、もうちょっと頑丈になんないの？ 戦場でポキポキ折れるからさあ、けっこうめんどくせえんだわ」

その兵士の言葉に、ほぼ一同全員が頷きます。やはり、強度の不安は大きいようですね。攻撃力の代わりに頑丈さを失った剣では、打ち合いで防御的な使い方をすることが出来ません。当てれば強力な攻撃になるとは言え、やはり不満や不安が大きいのでしょうか。

分かりきっていたことではありますが、やはりこの部分はどうか対処しなければならぬようです。

「強度に関しては、今後何らかの方法で対処する予定です。他にはなにかありますか？」

私が問いかけると、一人の気弱そうな兵士がおずおずと拳手します。

「あの。ちょっとこの剣、切れやすすぎて危ないっていうか。オレ、先輩の足にケガさせちゃったことがあって」

「そりやおめえが下手くそだったただけだろ、他に怪我したやつなんていねえっつーの！」

どこからか突っ込みが入り、それに反応して一同がどっと笑い声を上げます。

気弱そうな兵士は俯いてしまいましたが、これは重要な意見です。確かに、高周波ブレードは混雑する戦場での取り回しが想定されている武器です。切れ味が良すぎる為に、味方にちょっと掠るだけでも怪我を負わせてしまう可能性が高いというわけです。

使い手の技量でどうとでもなる問題ではありませんが、逆を言えば使い手のミス一つで味方が怪我をするような危険な武器でもあるということです。

これについても、早めに対処をしたほうがいいでしょう。

そして、その後もいくつか兵士から質問と意見が出てきました。が、それらは全て高周波ブレードの取り扱いに関する話題で、私が丁寧に説明をするだけで問題は解決しました。

とはいえ、正しい取り扱い方が伝わっていないのは問題です。取扱説明書のようなものも付属させるべきなのかもしれません。

「さて、では次です。耐刃ローブについての不満やトラブルはあり

ませんでしたか？」

私が聞くと、今度もすぐに手が上がりました。

「使いづらい！ 普通の武器ならいいんだけどよ。俺らの高周波ブレードだと刃に絡まったり、ローブの端を切り裂いちまったりして不便なんだよ」

「そうそう、もうちょっと動きやすいっていうか、ひらひらしてない方がいいよな！」

確かに、耐刃ローブは身体に密着するような装備ではありません。戦闘中に翻った裾が邪魔になることも多々あるのでしょう。

これが普通の剣なら、ただ布の表面を刃が撫でるだけで終わるのですが。こと高周波ブレードに限っては話が変わります。振動する刃がローブを巻き取ってしまうことも、端を切り裂いてしまいダメにしてしまうこともあるでしょう。

「わかりました。では、今後高周波ブレードを扱う部隊の耐刃ローブについては形状を考慮して制作していきましょう」

その後も幾つか質問をしていきましたが、目立った問題はありませんでした。一通りの聞き取りは終わったため、広場を離れます。

聞き取り終了直後に、軍は進軍を開始。私が質問を交わした高周波ブレードの突破部隊もまた、前線へと向かいました。

現在は、基地内部の一室にて有咲さんと共に待機中です。

「なあおっさん。高周波ブレードと耐刃ローブ、どう改良するつもりなんだよ」

退屈しのぎも兼ねてなのか、有咲さんが質問してきます。

「そうですね、まだアイディア段階でしかないのですが」

「うんうん」

「チエーンソーを作ろうと思っています」

私が言うと、有咲さんは一瞬の間を開けた後。

「は？」

それだけを呟きました。

21 貧乏ゆすりエンジン

私の言葉に疑問を抱いたのか、有咲さんはかなり訝しげに顔をしかめています。

「あのさ、おっさん。アタシは高周波ブレードの話してただけ。なんでチェーンソーの話になるわけ？」

「そうですね。では、一から説明していきましようか」

私はそう告げて、説明に本腰を入れます。

「まず、有咲さん。地球人類の発明の中で、最も偉大な発明品は何だと思えますか？」

「えーっと、なに急に。わかんない。スマホ？」

「そう、それは歯車です」

「話きいてねーな？」

スマホなどと言われては話の腰がバキバキに折れてしまうため、やむをえず強行的に説明を続けます。

「地球人類は回る板、ただそれだけのものをいくつも組み合わせ、様々な発明をしてきました。そうしたあらゆる発明の起源であり、必要不可欠な存在が歯車なんです」

「はいはい。で、それがチェーンソーと何の関係があるわけ？」

すっかり有咲さんは聞き流す姿勢に入っています。最近是我的気合の入った説明、ちょっとばかり余計なうんちく入りのものをこうして聞き流すようになってしまいました。

最初の頃は感心しながら聞いてくれていたというのに。少々悲しいですが、説明を続けていきます。

「歯車を偉大な発明たらしめるものは何か。それは回転です。そして回転とは、二つの軸の上下運動の組み合わせでもあります。要するに振動と歯車。この二つがあれば地球人類の歴史上存在してきたあらゆる発明品を作ることが出来ます」

「ほうほう。んで？」

「そこで私は、以前から考えていたのです。貧乏ゆすりのスキルを付与した物体を動力にすれば、歯車を使って機械的な仕組みを持つ魔道具を開発することだって出来るのではないかと」

「そっかそっか。で？」

あまりにも生返事なので、本当に悲しくなってきました。が、説明を続けます。

「そしてここに来て、耐刃ローブの問題も関わってきます。高周波ブレードが絡まってしまおう、という問題点が挙げられましたね？」

「だな」

「そこで私は逆に考えたのです。絡まってしまってもいいさ、と」

いよいよ説明は佳境に入ってきます。が、有咲さんは興味も無さそうにしています。

「まず、耐刃ローブの裾が邪魔になるとのことなので、そもそもの耐刃ローブを作業用のつなぎ服のような構造で仕立てます。これを

仮に、耐刃つなぎと呼びましょう。そうすれば、着用者の動きを邪魔するようなことはありません」

「はいはい」

「そして武器が耐刃つなぎに触れた時に絡まることで、武器の振動機構を停止します。ちょうど、地球にも存在する繊維入りの防護服と同じ仕組みになります」

「いや、そんなこと言われても見たこと無いし」

まあ、確かに一般の女子高生が繊維入りの防護服の仕組みを知っているということはそうそう無いでしょう。

「そして有咲さん。この繊維入りの防護服が、どのような構造の機械による負傷から身を守ってくれるのかについてですが。それがまさに、チェーンソー。最初の話に戻るわけです」

「あーそう」

「既存の高周波ブレードのような、直接的に貧乏ゆすりスキルを付与した物体で攻撃するのではなく、振動をエンジン部分に使い、機械的な仕組みで稼働する武器を作るのです。チェーンソーのような構造の武器であれば破壊力は申し分ありませんし、仮に耐刃つなぎに触れてしまったとしても、耐刃スキルの付与された繊維が刃に絡まって停止します。攻撃力を落とすこと無く、かつ既存のものより安全かつ頑丈な武器になるというわけです」

私が言い終わると、有咲さんはじとりとした目でこちらを睨みながら言います。

「要するに、貧乏ゆすりスキルをエンジンに使うってチェーンソーを作る。こいつを高周波ブレードの代わりに使う。耐刃ローブをつなぎっぱく仕立てる。そうすれば今日拳がった問題は全部解決するってことだろ？」

「まあ、簡単に言えばそうなりますね」

「だったら最初っからそう言え！」

バシン！ と有咲さんに肩を叩かれ、怒られてしまいます。

私としては退屈になりがちな説明を盛り上げるため、物語性を盛り込んだ解説をしたつもりだったのですが、それが逆効果だったということでしょう。

個人的には納得は出来ていませんが、とはいえ有咲さんは忠告をしてくれたわけですからね。お礼を言わなければなりません。

「ありがとうございます」

「なんで？　ねえ、なんで叩かれて感謝すんの？　きもいじゃん？」

ずいぶん久しぶりに、有咲さんにキモいと言われたような気がします。

21 貧乏ゆすりエンジン（後書き）

6 / 8 本文修正

作中でアラミド繊維入りの作業服、という表現をしておりましたが、これは作者の勘違いによるもので、実際の作業服にはアラミド繊維は含まれておりません。

その為、間違った記載をしていた部分を修正致しました。

22 案の定の襲撃

そうして、ちょうど有咲さんと改良案についての話を終えた時でした。

「襲撃だあ！ ドラゴンが攻め込んできたぞオ！」

と、遠くで兵士らしき者の叫び声が響きます。

私と有咲さんは顔を見合わせ、頷きます。

「やっぱ、予想通りの展開になったな」

「ええ。一刻も早く救援に向かいますよ」

そう言っつて、私と有咲さんは共に部屋を飛び出します。

騒ぎの大きな方へと駆けていくと、どうやら中心地は兵士達が集まっていたあの広場のようです。

既に作戦通り進軍を開始した後なので、あの広場も含め、既に基地はかなり手薄な状態。故に上空から攻め入るドラゴン相手に十分な迎撃が出来ず、そこまでの侵入を許してしまったのでしよう。

私と有咲さんが広場に駆けつけた頃には、既にドラゴンが基地内に着陸までしており、兵士達は抵抗する気力も失ったのか、手にした武器を構えることも無く頂垂れています。

「これは、どういう状況でしょうか」

「俺たちを捕虜にするつもりらしい」

私の呟きに、ちょうど近くに居た一人の兵士がぼやきます。
詳細を聞き出そうとした所で、ちょうど広場に着陸している巨大なドラゴンが口を開きます。

『我が名はアレスヴェルグ！ 魔王軍四天王が一柱、カイザードラゴンのアレスヴェルグである！ 諸君らの基地は我々が占領する！ 命が欲しくば即座に投降せよ！ 逆らうものは八つ裂きにしてくれよう！』

巨体から発せられる声は、奇妙なことにただの唸り声のような音にしか聞こえません。しかし、なぜか脳内に直接言葉が響くようにして意味が伝わります。

恐らくは、このドラゴンがテレパシー的な能力を持っているのでしょう。

ひとまず、ここはカイザードラゴン、アレスヴェルグの言いなりになるつもりはありません。私は一人、兵士たちの合間を抜けて彼の目の前まで歩み出ます。

『何者だ、貴様！』

「乙木雄一という、しがない魔道具店の店主です」

『何い？』

「捕虜になれという提案、受け入れかねます。ですので、私一人でも抵抗させていただけこうかと思ひまして」

『ほざくなよ、人間が！ やれツ！』

アレスヴェルグがそう命令した途端でした。上空を旋回するように飛んでいたドラゴン達が何匹も急降下してきます。

そして地面すれすれで減速し、滞空したまま口を開き、ドラゴンブレスと思わしき攻撃を繰り出してきました。

私は即座にスキルを使用。『疫病』により腕を鬱血させ、そこから『鉄血』にてオリハルコンの壁を展開。

いかにドラゴンブレスと言えども、最高峰の金属であるオリハルコンを焼き払うことは不可能だった様子。

とはいえ、熱によるダメージは存在するのですが。ただこれは、既に私のステータスが十分に高いお陰で無視できる程度のものです。

ドラゴンブレスが途切れると同時に、私はオリハルコンの壁を収納。即座に駆け出し、ドラゴン達に接近します。

そのまま鞭のようにオリハルコンの刃をふるいつつ、これらを『貧乏ゆすり』で高速振動させ、切れ味を上昇させます。

そうしてドラゴン達を襲った無数の刃は、まるで抵抗を感じることも無く、スパリとドラゴンの首や頭、胴体を切断。

一瞬のうちにして、下っ端らしきドラゴン達は全滅しました。

しかし親玉である四天王アレスヴェルグは、オリハルコンの刃であつてもダメージが入りませんでした。鱗に傷ぐらいは付いたように思いますが、切断するには至っていません。

『ほう。貴様、人間にしては少々やるようだな。だが、我にはその程度の攻撃は通じんぞ！』

アレスヴェルグはそう宣言すると同時に、私へめがけて巨体を振るい、尻尾による打撃を繰り出します。

これを私は腕にオリハルコンを纏いつつ防御します。

が、さすがに体重差もあり、威力も桁違いでした。私は踏ん張り

切れずに、そのまま吹き飛ばされてしまいます。

勢い良く広場の端まで飛ばされ、背中から壁に激突。轟音を経て壁は崩れ落ち、私は瓦礫の中へと埋もれてしまいます。

『ふん、他愛もないわッ！　グハハハハッ！』

自慢げなアレスヴェルグの笑い声がテレパシーで伝わってきます。同時に、勝利の雄叫びのような唸り声を天に向かって放っています。

まるで勝ったような空気を出しているところに悪いのですが、私は無事です。

ひとまず、瓦礫の中から脱出しましょう。

23 乙木雄一の本気

私は瓦礫の中からゆっくりと身体を起こし、服に付いた埃を払いつつ呟きます。

「さすがに四天王ですね。これまでに戦ったどの魔物よりも強い」
『なっ！ き、貴様、なぜ無事なのだ！』

「理由ですか？ 端的に言えば、ステータスが高いからですよ」

『ステータスだとオ？』

「気になりますか？」

『見せろ！』

まさか見たがるとは思っていませんでしたが。見せて減るものでもありませんし、見せてあげましょう。

恐らく、これが彼の最後の望みになるのですから。

「こちらが、私のステータスになります」

そう言っつて、私は自分のステータスボードを表示し、アレスヴェルグに合わせてサイズを大きく変えて見せつけます。

【名前】乙木雄一

【レベル】796

【筋力】 S S

【魔力】 S S

【体力】 S S

【速力】 S S

【属性】 なし

【スキル】 ERROR

『な、何だそのステータスは！ 勇者でもないのに、何故そのような力を手にしているのだ！』

私のステータスに驚いた様子のフレスヴェルグが問いかけてきます。
す。

せつかくですし教えてあげましょう。

「私は『疫病』というスキルを持っています。これは人を疫病で侵すことで経験値を得られるスキルです。私はこのスキルを使い、常に自分自身を疫病に侵し続けました。身体能力がCランク冒険者相当まで落ちる程度の、かなりキツめの疫病でしたので、順調にレベルは上がり続けていましたよ。お陰で今では、目標の千レベルまで視野に入ってきました」

『な、何故だ！ そのようなスキル、ただの人間が持ちうるはずが無い！』

アレスヴェルグの言う通り。私のこのスキルは、女神様の手違いで獲得することになったスキルですからね。

とはいえ、そこまで詳細を教えるつもりはありません。そろそろ終わりにしましょう。

せつかくですから、今まで相手が『弱すぎて』使うことの出来なかったスキル、戦法を試していきたいと思います。

「それでは、アレスヴェルグさん。冥途の土産はお楽しみいただけましたか？」

『クツ！ 調子に乗るなよ、人間！ 貴様が強いとは言え、そのステータスは我とほぼ同等！ ましてや我は筋力、魔力共にSSSに到達しているのだッ！ 貴様に敗北する道理など皆無！』

「そうですね、それは良かった」

私はニコリと笑います。

「それだけ強ければ『耐えて』くれますね？」

次の瞬間。私はこれまで一度も使わずに封印してあったスキルを使いました。

『は。へ？』

まるで糸が切れた人形のように。

アレスヴェルグの巨体が、力なく崩れ落ちます。

『な、なにが』

「なるほど、三割ほどの力でもこれだけの効果があるのですか。やはり、うかつに自分へ使わずにいて良かった」

『なにをほざいている！』

「スキルですよ。言いましたよね、私は『疫病』スキルを『ずっと

使い続けてきた』と。レベルが八百にも到達するほど使い込んでいくわけですから、当然スキルは進化しますよ」

私が『疫病』を使い続けることで得た、さらなる力。

そのスキルの名前は『災禍』。疾病だけでなく、根拠のない呪詛のような力も含め、他人に付与することが可能になったスキルです。その名前があまりにも禍々しいこと。そしてどれだけの効果を発揮するかその辺の雑魚魔物相手ではまるで計測出来なかったこと。例えばゴブリン程度ではコントロールの練習にもならず、一瞬にして朽ち果て死んでしまうことから、これまで使うことの無かったスキル。

レベルが六百台の中盤に差し掛かった頃に習得したのですが、いままで試しに使うことすらろくに出来ないでいました。

ですが、今日は都合がいい。

すぐに死なない上、ちょうど無抵抗になってくれるほどよい敵が目の前に居るのでから。

「さて、アレスヴェルグさん。せっかくですので、貴方を対象に色々試させていただきますね」

「ため、す?」

「ええ。今まで使えなかったスキル達。そしてスキル同士を組み合わせた戦法。とつくの昔に出来るとは分かっていたのですが、使う相手がいなかったものですから。今日はむしろ、お越し頂いてありがとうございます、と言いたいくらいですよ」

かつて有咲さんのカルキュレーターを使用した時。私は『災禍』も含め、数々の力を得る未来を予想することに成功しました。

しかし、得た所で使う相手がおらず、テストすら出来ずにいました。

今日はちょうどよく、魔王軍の四天王が来てくれたのです。基地を防御するついでに、一通りテストを済ませてしましましょう。

24 災禍の化身

私は崩れ落ちたままのアレスヴェルグに近寄りながら、どのスキルから試していくか考えます。

そうですね、まずは即死する可能性の低いものから試していきますよ。

「ではアレスヴェルグさん。まずは『災禍』と『加齢臭』のコンボから試させていただきますね」

私は言っ、二つのスキルを同時に、全力で発動します。

まずは『災禍』にて自分を呪います。呪詛と疫病の二重苦で自らを苦しめます。当然、肉体は負担から脂汗を流しますし、何より疫病を患った皮膚からは異臭が漂い始めます。

そうした臭いの微粒子を『加齢臭』のスキルで増幅します。

私の身体から漏れ出した呪詛と疫病の微粒子は、途端に黒い煙のようなものになって周囲に漂い始めます。

それと同時に、私は自分のスキルが確かにこの瞬間、次の段階を迎えたことを感じました。

「ふむふむ。なるほど、これがカルキュレイターの予想した、加齢臭の可能性ですか」

私が単なる体臭による魔物撃退手段として使っていたスキル。で

すが、カルキユレイターはこのスキルの先を見通していました。

こうして『災禍』により生まれた微粒子を増幅することで、加齢臭は単なる臭いから実際に他人を呪い病に侵すスキルへと変貌しました。

そのスキル名は『瘴気』。肉体から呪詛と疫病に満ちた煙を自在に発生させる力を持ったスキルです。

さっそく、私はこの『瘴気』を発動。『災禍』と『加齢臭』で生み出していたときよりもスムーズに、大量に黒い煙が発生します。そして煙は私の意思である程度操作出来るようです。アレスヴェルグの右腕に集まるよう念じた所、ある程度の煙が実際に集まり、包み込みます。

『グアアアアッ！』

痛みからか、アレスヴェルグが叫び声を上げます。

咄嗟に『瘴気』を解除してみると、一瞬で黒い煙は消え去ります。そこには、まるで酸か何かでも掛けたかのようにドロドロに崩れ落ちたアレスヴェルグの右腕がありました。

「スキル『瘴気』の威力がここまでとは。加齢臭もバカに出来ませんね」

想像以上の威力に満足しつつ、そんなことを呟いてから次のスキルのテストに入ります。

続いて試すのは『鉄血』のスキルです。

まずは腕から流れ出る血液を『災禍』で呪い、大量の『瘴気』を集めて濃縮。生み出されたのは、極めて濃い呪いと病魔が圧縮された赤黒い血液。

これが、私が求めていたさらなるスキル。習得したスキルの名前は『詛泥』。私自身の血液から、濃厚な呪いと病魔が宿る液体を生成するスキルです。

そしてこの『詛泥』ですが、呪いを凝縮した物体であるため『瘴気』と共に霧状に散布することも可能。また、素材が私の血液なのでから当然『鉄血』スキルの対象にもなるわけです。

「この『詛泥』を『瘴気』と共に拡散、漂う霧となり空間のあちこちに存在することが可能になった私の血液は、それでもまだ私の『鉄血』スキルの対象内です。ですので、こういうことが出来ます」

私は『詛泥』をアレスヴェルグの周囲に展開させます。彼自身を包み込んでしまうと、瘴気以上の呪いを持つ『詛泥』により即死してしまう可能性がありますので、注意が必要です。

そうして展開した『詛泥』から、瞬時に無数のオリハルコンの刃を生成します。

腕を振って鞭打を行った時よりも、さらに効率的に。無数のオリハルコンを糸状に生成し、これを『貧乏ゆすり』で振動させて切断力を高めます。

さらには『詛泥』を経由することでオリハルコンは変質し、呪われた金属へと変貌しています。触れるだけで人の皮膚を爛れさせるような力を発揮するようになった、無数のオリハルコンの糸。これがアレスヴェルグの鱗を上から斬りつけます。

結果として、最初にオリハルコンの一撃を防いだはずの鱗はいとも容易く切断され、アレスヴェルグの巨体のあちらこちらに切創を刻みます。

『ゴハッ！ な、なにが起こっているのだ？』

アレスヴェルグは血を吐きました。恐らくは切断されたことによるダメージに加え、オリハルコンの刃を介して『詛泥』の呪いを受けた為でしょう。

「そろそろお疲れでしょうから、楽にしてあげましょうか」

私は求めていた二つのスキルを習得し、その使用感のテストも済ませたため、決着を付けることにしました。

すでに身動きの取れていないアレスヴェルグです。このまま放置して詛泥と瘴気による呪いでゆっくり死んでいくのを待つことも可能ですが、念の為にいちおう手早く始末してしまうのが良いでしょう。

「では、お疲れさまでした、アレスヴェルグさん。お陰で私も、予定通りの力を得られていると確認することが出来ました。ありがとうございます」

そう告げて、次の瞬間には『詛泥』からオリハルコンの刃を生み出し、アレスヴェルグの首を切り落とします。

当然、これで死んだはずですが、油断はしません。死体はそのまま大量の汚泥で包み込み、腐らせ、溶かし、完全に消滅させます。

すると、幸いなことにアレスヴェルグの鱗は希少な金属を含む結晶構造をしていたようで、一部が『鉄血』スキルで収納可能でした。このまま溶かしてしまうのももったいないので、回収してしましましょう。

そうして十数秒ほどの時間をかけて、アレスヴェルグの死体は溶けてなくなりました。

驚くべきことに、アレスヴェルグは首を切り落としてもまだ意識があったのか、泥の中で何やらもごもごと喚いていました。

『恐るべき、忌まわしき力。災禍の化身め』

と、言われていたように聞こえました。

ともかく、これでアレスヴェルグとの戦いは終わりです。
無事、基地を守りきることは出来ました。

25 聖女陥落

戦闘、と呼べるかは怪しいですが、ともかくアレスヴェルグとの戦いは決着が着きました。上空にはまだそれなりの数のドラゴンが存在するようですが、どうやら指揮官を失ったことにより瓦解し始めているようです。一匹、また一匹と明後日の方向へと飛び去っていきます。

私はそれを確認すると、これで基地を守りきつたのだと判断し、一息ついてから有咲さんの方へと振り向きまます。

「これでおしまいのようですね」

「そうだな。いや、それよりおっさん。なんだよあの黒いやつ！」

有咲さんは、驚いたような表情を浮かべてそう訊いてきます。

「何だと言われると、そうですね、私が本気で戦闘する時のスキルでしょうか」

「なんだよそれ。それって、それってさあ」

有咲さんは俯いて、少し震えた後、がばっと私の肩に掴みかかっています。

「ちよーかつけえじゃん！」

そして、目を輝かせながらそんなことを言い始めました。

「なんか黒くて、やばくて、悪い感じがしてさあ！　ちよいワルつて感じでちょーイカしてんじゃない！　なにあれ、普段からもっと見せるよ！」

「いえ、普段から使うには少々強すぎる力ですのう」

「なんだよそれ、なんかもうその言い訳もなんかかけーし！」

どうやら私の新たなスキル達は、有咲さん的にはアリなようです。

と、そんな雑談をしていた時です。

突如、ドラゴン達が旋回する上空で強烈な光が炸裂。空がまばゆい光に包まれたと思った次の瞬間には、なんとドラゴンは一匹残らず全滅。

力なくドラゴン達が墜落していくのが見えます。

その一部は基地内部にも落ちてくるように見えたが、不思議なことに見えない壁のようなものがそれを阻み、ドラゴンの死体が基地の施設を破壊するようなことはありませんでした。

突然の事態に何事か、と思っていると、上空から声と共に人影が舞い降りてきます。

「乙木さん！　無事ですか！」

それは勇者、金浜君の声でした。

降りてくる人影は、金浜君と三森さん。どうやら何らかの魔法で空を飛んでいるらしく、ふわりと広場の中央に着地します。

恐らくはあのドラゴン達を瞬殺したのが金浜君の力であり、基地を守ったのは三森さんの力でしょう。

さすが勇者と聖女、規格外の力です。

「ええ、無事ですよ」

「こつちに四天王のアレスヴェルグが来たと思うんですが、どこに居ますか？」

「彼は私が既に倒してしまいましたが。何か問題がありましたか？」
「た、倒したっ？」

今度は金浜君が驚く番でした。どうやら私が四天王を倒せるとは思っていなかったようです。

「はい。問題なくアレスヴェルグは撃破しました。証拠といいますが、証言はこの広場に居る兵士の方々に聞けばよいかと」

「あ、いえ。倒せたと乙木さんが言うなら、実際そうなんでしょうね。いやあ、まさか乙木さんがそこまで強いとは思ってませんでしたよ！」

そして、どうやら私がアレスヴェルグを撃破したことを信用してくれる様子。

「乙木さんなら何か不思議な魔道具を使って四天王相手でも時間を稼げると信じていましたし、場合によっては倒せるとは思っていませんけど。さすがに無傷で、こんな短時間で倒してしまえるとは予想もしていませんでした」

「なるほど」

確かに、いくら私が強くとも、勇者である金浜君からすれば自分ほどには及ばないと考えるでしょう。そして金浜君にとって対四天王戦が楽勝だったとしても、私や有咲さんがそうとは限りません。

実際、金浜君と三森さんが駆け付けるのが今になる程度には時間がかかっているのですから。その予想は無理のない自然なものですよ。

「そういえば、例の四天王はどうなりました？ エルダレーイスの」
「ああ。奴は俺と沙織を闇の異空間に封じた後、すぐに逃げ出しましたよ。どうやら集めた魔物の軍隊は俺たちにぶつける戦力じゃなくて、俺と沙織を封じる闇の異空間を生み出す為の生贄だったようです」

「ほう、そういうことですか」

つまり魔王軍は勇者と聖女を異空間に封じて無力化しているうちに基地を占拠。人質を取ることで結果的に勇者と聖女を無力化。基地を拠点として奪取しようとしていたわけですね。

アレスヴェルグも基地の人間を積極的に殺そうとはせず、捕虜にすると言っていましたから、その点から考えても向こうの作戦は大筋ではそういう感じだったのでしょう。

しかし、基地には私が居た為に人質は取れなかった。

結果として時間を稼がれたにも関わらず、勇者と聖女を無力化するには至らなかったというわけですね。

「何にせよ、目立った被害は無かったようで良かったです」

「ええ。作戦で前線に出ていた兵士の皆さんも、今は撤退している最中です。負傷者ぐらいは出るとは思いますが、死者、重傷者は居ないと思いますよ」

「それは良かったです」

私は金浜君と話しながら、ふと三森さんの方に視線を向けます。

すると、なぜか三森さんは顔を俯向け、具合悪そうに身体をぶるぶると震わせています。

「三森さん、どうなさいましたか？」

「いえ、あの。大丈夫ですので」

そう答えた三森さんの声は、とても大丈夫そうには聞こえません。震えを抑え込みながら、どうにか絞り出したような声です。

「とてもそうは見えません。本当に大丈夫なのですか？」

「はい、平気です。なので、その」

「しかし、敵から何か呪いのようなものを受けた可能性もあります。ここは安静にしておいたほうが」

と、言いながら私が三森さんに歩み寄った時でした。

「んほお！」

奇声を上げ、白目を剥いた三森さんは、そのまま気を失って倒れ込んでしまいました。

「さ、沙織っ！」

「三森さん！」

慌てて私と金浜君で三森さんに駆け寄ります。どうやら本当に気を失っている様子で、しかも何かの影響により身体はびくびくと痙攣しています。

危険な状態だと判断した私は、すぐさま三森さんを抱え、救護室へと運び込みました。

26 聖女の秘密

救護室に三森さんを運び込んだ後は、私が看病を引き受けました。金浜君は勇者としての役割、仕事があります。それに、三森さんが倒れたのは私が近づいた瞬間のことでした。原因がはっきりしないにせよ、私が何らかのトリガーになった可能性は否めません。なので、責任を持って看病をすることにしました。

三森さんは気を失ったまま、半日以上ベッドの中で眠っていました。

そして深夜、誰もが寝静まった頃になってようやく目を覚ましました。

「あれ、ここは」

「目が覚めましたか。体調はどうですか？」

私が訊くと、三森さんは何かに気づいたようにハツとして、すぐにベッドから起き上がりました。

「すみませんでした、乙木さん！ 私、はしたない姿をお見せしてしまつて」

「いえいえ。しかし、何があつたのですか？ やはり敵から何らかの呪いの類を受けた可能性が」

「ち、違つんです！ これは、その、えっと」

三森さんは、何やら恥ずかしそうにもじもじしながら、言葉を選ぶように言います。

「私の、えっと、体質みたいなものが原因なんです」

「体質、ですか？」

「はい。あの、できればとても恥ずかしい話なので、誰にも話さないでいて欲しいんですけど」

どうやらデリケートな話になるようなので、私は頷きます。

「誰にも話さないと約束します。それで、本当に敵の攻撃などが原因では無いんですね？」

「はい。倒れた理由ははっきりしています」

頷いてから、三森さんは答えます。

「乙木さんの、体臭です」

「体臭」

思わぬ答えに、私はそのまま同じ言葉を繰り返してしまいます。

「話せば長くなるのですが、まず私は『聖女』というスキルを持っています。このスキルは複数のスキルが集まって出来ていて、その中には『慈愛』というスキルもあります。これは他人に対する嫌悪感を和らげる効果があって、例えば負傷した兵士の方がどれだけグロテスクな状態であっても、比較的冷静に治癒魔法を使えるといった利点があるんです」

勇者称号の一つ『聖女』。そのスキルの内容は私では判別できないのですが、当の本人があると言う以上は事実なのでしょう。

「そして、この『慈愛』なんです。効果は割り算じゃなくて足し算なんです」

「足し算、というのは？」

「例えば、ちよつとの嫌悪感を覚える程度のものなら、ちよつとだけ好感がスキルの効果で足されて、結果的に嫌悪感が緩和されます。これがかんりの嫌悪感を覚えるものなら、かんりの好感を足し算することで、嫌悪感を緩和しているんです」

「なるほど。つまり、仕組みとしては発生する嫌悪感をスキルの効果で直接低減しているのではなく、嫌悪感を反対の感情を生み出して緩和しているというわけですね？」

「そういうことです」

一度頷いてから、三森さんは話を続けます。

「で、この嫌悪感を覚えるものについてなのですが。実は基準が絶対的なんです」

「絶対的？」

「はい。私の感情を基準にしているわけではなくて、一般的な人がどう感じるか、というのを基準として嫌悪感の程度が測られるわけです」

「なるほど、それが絶対的、という言葉の意味ですか」

しかし、聞いた感じからすると、どうも欠陥を抱えているような気がしますね。

「そして、これが原因で不具合も起こります。その一つが、今回私が倒れてしまった理由です」

やはり、とつぶやくべきでしょうか。スキル『慈愛』による問題を、

三森さんは抱えている様子。

「私がどう思っただいようが、世間が嫌悪感を覚えるものなら『慈愛』の効果で好感を足し算されます。なので、世間がとてつもない嫌悪感を覚えるものに私が強い好感を抱いていた場合、さらに好感が足し算されてしまって、多幸感で気が狂いそうになってしまうんです」「なるほど。強すぎる好感が、逆にデメリットとして成立してしまう」と

まるで麻薬のような効果です。そう考えると、なかなか恐ろしい不具合だと言えます。

と、そこまで考えて気づきました。多幸感で気が狂いそうになる。それが原因で、今回は倒れてしまった。そして最初に言っていた、原因は私の体臭だという証言。

まさか。

私が気づいてしまったような視線を三森さんに向けると、恥ずかしがりながら秘密を明かしてくれます。

「えっと、つまり。その。私って、実はすごい匂いフェチなんです」「なんと行ってよいやら。

27 匂いフェチと誤解

かける言葉が見つからずに困惑していると、三森さんはさらに話を続けます。

「元々、私は父親がとても好きで、お父さんっ子だったんです。そしてお父さんの、つまり壮年男性の体臭とか、そういった匂いも気づいた頃には好きになっていました。元々、男の人の体臭を嗅いで、それでちよつと気持ちよくなっちゃう、そんな恥ずかしい性癖持ちだったんです」

「それは、なんと言いますか」

「はい。私も一応、年頃の女の子ですから。誰にもこんなことを言ったことはありません。この世界に来てからも、ずっと秘密にしていました。でも、慈愛というスキルのせいで、とても困ってたんです。日本に居た頃はこっそり楽しんでただけでしたが、この世界に来てからは正気を保つのに苦労するぐらいになってしまっ」

本当に困った様子で、三森さんはどんどんと話を続けます。それだけ、ずっと抱え続けていた悩みなのでしょう。ここは口出しせず、話を聞くことに集中します。

「そんなことがバレたら、悪い貴族の人に悪用されてしまうかもしれませんし。匂いからくる多幸感を、薬物によるものの代用が可能だとしたら、私は合法的に薬漬けにされて、誰かの言いなりになってしまうかもしれませぬ。そんなことも考えると、怖くて、ずっと

秘密にするしかありませんでした」

「なるほど。確かに、ありえない可能性ではありませんね」

「そんな時、私は救いを見つけました。それが、乙木さんの体臭です」

「私ですか？」

問い返すと、三森さんは深く頷きます。

「乙木さんの体臭が、一番好きなんです。一番気持ちよくて、一番嗅ぎたい匂いだったんです。それこそ、パパの体臭よりもずっとすごくて。だから買い物にいくフリをしながら、定期的に乙木さんの匂いを堪能しに行っていました。そうすることで、貴族の人たちの体臭に負けないよう、気を保っていたんです」

「そう、だったのですか」

まさか、私の体臭がそのような形で役に立っていたとは。世の中、何が役に立つかわからないものですね。

「とにかく、私にとって一番すごいのは乙木さんの体臭なんです。で、今回は乙木さんから今までに無いほど濃厚で、芳しくて、とにかくもう筆舌に尽くしがたい最高の匂いが漂っていたので、私、興奮しすぎて、その」

顔を赤らめながらも、三森さんは興奮した様子で、口走る言葉を止める様子はありません。どうも様子がおかしい。

私が制止するより先に、三森さんは暴走を始めます。

「達しちゃったんです。あの時、目の前が真っ白になって。気持ちよすぎて、もう、自分で自分が制御できなくなって。だから私、もう一度あれを感じたいんですっ!」

次の瞬間。三森さんは興奮した様子で、私に抱きついてきました。怪我をするといけないのでしっかりと受け止めました。結果として、抱き合うような姿勢になってしまいました。

「お願いです、乙木さん！ アレを下さいっ！ 私、もうあれがないとダメになっちゃったんです。乙木さんじゃなきゃダメなんです！」

「あの、三森さん落ち着いて」

「だったら下さいっ！ 早く私に匂いを下さい！」

このままでは埒が明かないので、仕方なく私は『瘴気』をうつすらと発動します。恐らく、あの時の三森さんの反応から察するに、私の身体から漂っていた『瘴気』の残り香が原因でこうなってしまったのでしよう。

元はスキル『加齢臭』なので、その上位スキルでもある『瘴気』が三森さんを快楽に狂わせてしまうのも無理のない話です。

「あああっ！ これ、これですう！ んはあっ！」

三森さんは私の胸元に顔をぐりぐりと押し付けながら、漂う『瘴気』をすうつと深呼吸で吸い込みます。

「好き、好きです。好き好き大好きっ！」

「あの、三森さん。ひとまずこれで満足でしょう、落ち着いて下さい」

「待って下さいっ！ もうちょっと、後少しだけでいいんですっ！」

誰かに見られたら、勘違いされてしまいそうな状況。三森さんの評判を下げかねません。とはいえ、狂わせてしまったのは私ですか

ら、どうにも拒否しきるつもりにもなれません。

どう対処すべきか。三森さんの妙な気迫に圧倒されながらも考えられていると、救護室に足音が近づいてきます。

「おっさん。さすがに疲れただろ。アタシが変わ、る、けど」

足音の主は、有咲さんでした。

「あの、有咲さん。これは」

「いや、いい。分かつてる。おっさんの嫁が今さら一人や二人増えたぐらいで、アタシはなんとも思わないし？」

「いえこれは」

「じゃあこれ差し入れな！ アタシ寝るから！」

そう言って、有咲さんは私に向かってリンゴを一つ投げて寄越します。そして、逃げるように足早で救護室から立ち去っていきます。

呆然とその背中を眺めながら、私はどう言い繕おうか考え、結局やめます。

「あの、乙木さん。いいんですか？」

心配するように、三森さんが私の胸元から顔を上げて訊いてきます。心配するぐらいならこの姿勢をやめてほしいのですが。まあ、瘴気中毒状態の彼女には酷な提案でしょう。

「いいんです。彼女には、嫌われたほうが」

そうすれば、私も有咲さんに未練を感じずに済みます。有咲さんだって、私を諦めて自分の幸せの為の道を選ぶようになるでしょ

う。

そんな、言い訳めいたことを考えながらも、私は有咲さんの立ち去っていった方を呆然と眺め続けました。

27 匂いフェチと誤解（後書き）

これにて五章は完結です。

次話から六章が開始します。

色々悩んだのですが、少々暗くもやもやとした展開が続くことになります。

ですので、六章に関しては書き溜めたものを一気に放出し、不快な展開のまま物語が長期間に渡り放置されるような事態を回避したいと考えています。

なので次話からは毎日、複数回投稿を六章完結まで一気に続けたいと考えています。

結果として書き溜めたものを一気に消費してしまいますので、六章完結後はまた少し期間を空けてから七章の投稿に入らせて頂きます。その旨、読者の皆様にも先にお伝えしておきます。

それでは、今後とも当作品を宜しくお願いいたします。

01 旅の終わり（前書き）

本日から連続投稿開始です。宜しくお願い致します。

01 旅の終わり

三森さんが無事、というべきかはともかく目覚め、翌日には体調が回復したのもあり、その後は何事もなく時間が過ぎてゆきます。

基地の兵士の方々に感謝されつつ、各所を視察して新たな魔道具の開発のためのアイデア収集。そしてガウエイン大佐から正式に感謝状を送られたり、といろいろありました。

その間、有咲さんはふさぎ込んでいるというわけでもなく、かといって元気でもなく。どこか遠い目をしながら、何かを考え込んでいる様子でした。

そして最近はずっと激しかったスキンシップが収まり、むしろ妙に距離を置くような素振りさえ見せ始めたのです。

少々寂しい気持ちになりつつも、元々の計画通りなのですからこれで良かったのだ、と自分に言い聞かせます。

そうして数日ほどを基地で過ごした後、いよいよ王都へと帰る日がやってきました。

せっかくだから、という話になり、帰路は金浜君と三森さんのお二人も加えた四人の旅となることに決まりました。

滞在最終日、基地を発つ前に、ガウエイン大佐と挨拶を交わします。

「では乙木殿、重ね重ねになるが本当に感謝する。貴方がいなければ、今頃この基地は無論、兵たちの多くの命が無事では済まなかつただろう」

「こちらこそ、分かっていて作戦を止めませんでしたから。その分やるべきことをやりましたですよ」

「何にせよ乙木殿に救われたという事実は揺るがぬよ。この恩は、いつか必ず返す。困ったことがあれば、いつでも頼ってくれたまえ」「ええ、そうさせて頂きます」

そうして私はガウエイン大佐と握手を交わしました。

後は何事も無く、四人で基地を出発。最寄りの都市までは、徒歩での旅になります。

基地を出発した直後、有咲さんがふと口を開きます。

「そつだ、おっさん」

「はい、何でしょう」

「帰りにさ、一回あそこに寄ってくんない？ ウエインズヴェールだつて、そこの領主さんのと」

「それは、別に構いませんが」

恐らく向こうは歓迎してくれるはずでしょう。が、何かやり離れた、伝え忘れたことなどあったでしょうか？

用件が思いつかず、つい首を傾げてしまいます。

「何かあったでしょうか？」

「いや、アタシ個人の話だから。おっさんは気にしなくていいよ」

そう言って、有咲さんは私の前まで駆け寄って来てから言います。

「よし、そうと決まれば急がないとな！ やりたいこと、やるべきことはいつぱいだからな。っしやあ、やる気出てきたぞお！」

どこかわざとらしくも感じる声色で、そんなことを言い始めます。そして有咲さんは早足になりながら、一人で道を先行していきます。

そんな様子を見て、私だけでなく同行者の金浜君と三森さんも訝しみます。

「乙木さん。彼女、何かあったんですか？」

「ええと。あつたと言えはあつたのですが」

「やっぱり、あの時の私のせいでしょうか？」

三森さんが、申し訳なさそうに俯きます。

「気にしないで下さい、三森さん。私もあの時はあれで問題ないと判断しました。それに、先程の有咲さんの態度の直接の原因とは考えづらいですし」

「そう、でしょうか」

三森さんは納得していない様子で、不安げに俯いたままです。

そんな様子を見かねてか、金浜君がパン、と手を叩いてから提案します。

「じゃあ、こうしましょう。一度、沙織は美樹本さんと話をしてくれる。謝った方がいいなら謝る。で、俺は乙木さんから詳しい話を聞かせてもらいます。何があつたのか、何が原因なのか。二人で考えた方が答えも分かりやすいはずですから」

「そう、だね。うん。分かった。私、有咲ちゃんに謝ってくる！」

金浜君の提案が効いたのか、三森さんは先行する有咲さんを追って、駆けていきました。

そして取り残された私と金浜君。

「さて、乙木さん。いろいろ聞かせてくれませんか？　そもそもの美樹本さんと乙木さんの関係から、全部」

核心を突くように、金浜君は言いました。

02 いい歳して情けない

正直言って、私には迷いがありました。有咲さんを傷つけるようなやり方には抵抗があったのです。

しかし、このままですると答えをうやむやにしたまま、近い距離感を維持するのには問題があるとも感じていました。

なので今日まで、有咲さんに対して強行的な手段で諦めてもらえるよう働きかけてきたのですが。先程の、どこか痛々しくも感じる有咲さんの様子を見て心が揺らいでしまいました。

それもあってか、私はつい、色々なことを金浜君に告白してしまいました。

有咲さんが、私に対して抱いている感情について。そして、今回の旅の目的について。私が有咲さんに諦めてもらえるよう働きかけてきたこと。さらには、三森さんの看病中に起こった勘違いについても。三森さんの性癖については伏せる形で告げました。

すると、金浜君は何かを考え込むような様子で、こちらに尋ねてきます。

「それで、結局のところ、乙木さんは美樹本さんをどう思ってるんですか？」

その質問に、私は顔を顰めます。

「どう思っているにしろ、答えは一緒です。私は叔父であり、有咲さんは姪です。結論は変わりません」
「そうですかねえ」

私が肝心な部分を誤魔化すように答えると、金浜君はあっさりと発言を否定しました。

「異世界まで来て、そんな地球の、それも日本の倫理観に縛られる必要は無いと思いますけど。結局、俺らってこの世界でうまく生きていくしかないわけじゃないですか。この世界でダメなことはダメだし、良いものは良い。その上で幸せになろうと思ったら、そういう日本の話を持ち出すのはちょっと違うと思うんです」

金浜君は、困ったように苦笑いを浮かべてから話を続けます。

「例えばですけど、俺って今は婚約者が三人も居るんですよ。これって日本だと良くないっていうか、ダメなことだと思うんです。けど、この世界では違う。俺も、そして婚約者のみんなも納得して、それで不幸にならないなら、これでいいと思うんですよ。といいますが、幸せになりたいと思ったら、むしろ受け入れるしかなくて、これで俺は一人としか結婚しません！ って意地を張ったほうが、何かと問題が多くなって、みんな不幸になるかなって考えてるんです。だから今は、こういう状況でも納得してるんですけど」

そこまで言うてから、金浜君は一度間を置いてから、私の方をしっかりと見据えて言います。

「最初は、僕も悩みました。でも、これが一番だって今は思ってます」

「それは、確かに納得が出来ます。が、重婚と近親婚では話が違い

ますよ。ましてや私と有咲さんには年齢差もあります。彼女の幸せを思えば、やはり姪っ子に手を出すような真似をしては行けないのですよ」

「そうですか？ 乙木さん、そもそもこんな異世界にまで来て、そこまで大人らしく振る舞う必要がありますか？」

金浜君の言葉に、私は一瞬だけ言葉に詰まります。ですが、しっかりと考えた上で頷きます。

「私は、有咲さんを幸せにしてあげたいのです。彼女を守りたい。それが本心であるのは間違いないですね。ですから私は、あの子の叔父として、責任を持たなければいけません」

「責任、ですか。でも、それこそちゃんと気持ちに伝えてあげる方がいい気がしますけど」

私は、首を横に振って否定します。

「私では、有咲さんの気持ちには応えられませんよ。幸せにしてあげることは出来ません」

「どうしてですか？」

「前科がありますから。私はたぶん、彼女を不幸にしている」

それこそ、彼女が生まれたその瞬間から。

私という存在は、有咲さんの隣に並び立つには不適切なのです。

「だから、私が有咲さんをどう思っていようと関係無いんです。私は有咲さんの気持ちには答えられない。有咲さんには諦めてもらう。その上で、有咲さんの幸せの為に、叔父として尽くせる限りの力を尽くしますよ」

「そう、ですか」

金浜君は、難しい顔をして考え込んでしまいます。しばらく、そのまま沈黙が続きました。が、やがて金浜君の方から口を開きます。

「ひとまず、乙木さんの考えは分かりました。理屈も、理解はできます。ただ、せめて美樹本さんの話も聞いてみてからにしませんか？ 結論を出すにしても、それから良い気がします」

つまり、私と有咲さんにお互いの意見をぶつけ合え、ということなのでしょう。

「今までに、そういつたことはしてきてないんですよ？」

「そうですね、確かに。じっくりと話し合ったことはありません」

言われてみれば、勢いや思いつき、一人で考えたことを一方的にぶつけたことはあっても、互いの意見を順に出し合い、対話して結論を出そうとした覚えはありません。

そういう意味では、確かに結論を出すには時期尚早なのでしょう。

「分かりました。ひとまず、有咲さんからも話を聞いてみます」

「そうしてください。多分、そのうち沙織が美樹本さんを連れて戻ってきますから。それから考えましょう」

こうして、男二人で話し合える限りのことを話し終えました。私と金浜君は、先に進んで会話を交わす二人が戻ってくるのをただ待つばかりとなりました。

「全く。いい歳して情けない限りです」

沈黙の最中、私はふと、そんな独り言をぼやいてしまいました。

「いえいえ。誰だつて、困っちゃいますよ。気持ちの問題ですから」

そんな風にフォローを入れてくれる金浜君は、私なんかよりも遙かに大人びて見えました。

03 有咲の涙

しばらくすると、三森さんだけが戻ってきました。有咲さんは、一人で先行したままです。

「あの、乙木さん。有咲ちゃんから話を聞いてきたんですが、少しいいですか？」

「ええ、どのような話をしてきたのですか？」

私が訊くと、三森さんは悲しげな目をして語ります。

「このあいだの夜のことは、もう誤解していなかったみたいです。後々考えたらおかしい、って気づいたらしくて。だから私には、特に怒ってないから気にしないでって言ってくれたんですけど」

「どうやら、先日の夜の誤解は既に解けていたようです。」

しかし、だとすればなぜ三森さんの表情は優れないのでしょうか。

「じゃあどうして、様子がおかしいのかを聞き出してみました。そうしたら、有咲ちゃんは自分が間違ってたんだ、って言いました」「間違っていた、と？」

「はい。ずっと一緒に居て、観察していたから乙木さんの気持ちはお見通しだったそうです。だから最初は舞い上がってたらしいんですけど、いくら努力しても乙木さんが自分を拒絶するから、それが余計に辛くなっていったらしくて」

言われて、心が痛みます。

やはり私の選択は、有咲さんを傷つけていたようです。

「で、乙木さんがそこまでするんだから、じゃあ正しいのは乙木さんだから、って言うてました。今までの自分が間違ってたんだって」「それは、そういうわけでは」

「ありません、と続けかけた言葉は飲み込みます。この場で言うても、仕方のない言葉です。」

決して有咲さんが間違っていたというわけではなく。ただ、私が有咲さんを受け入れるわけにはいかない。それだけのことなのです。有咲さんが、自分を責める必要はありません。」

「乙木さん。やっぱり、よく話し合ったほうがいいですよ」

金浜君が、諭すように言います。

「そうですね。このままではいけませんね」

私は急ぎ足で、先をゆく有咲さんの方へと駆け寄っていきます。

「有咲さん！」

私は追いつくと、すぐに有咲さんに呼びかけました。

「おっさん。なんだよ」

「いえ、その。話をしたいと思ってます」

「話すようなこと、あったっけ？」

どこか突き放すような有咲さんの言葉に、私は閉口してしまします。

「あー、ごめん。なんか、そういうんじゃないよ」

そして、有咲さんは私の様子を見て、すぐに訂正しました。

「なんていうかさ。今まで色々あったけどさ。いったん冷静になるうかなくて。んで、おっさんとはもう付き合わない。あ、いや、関係がなくなるとかじゃなくてさ。男と女っていうか、彼氏彼女みたいな、そういうやつは狙わないっていうか」

「それが、有咲さんの選択なのですか？」

私が問うと、有咲さんは頷きます。

「うん。正直、今でも好きだよ。おっさんのこと。でも、おっさんが望まないなら、それでいい。おっさんはおっさんの、アタシはアタシの幸せのために、出来ることを精一杯やる。それだけじゃん。それしか、ないじゃん」

どこか悔しそうに、言葉尻が震えていました。私は心配になって、有咲さんの顔を覗き込みます。

すると、その目からは一筋の涙が溢れていました。

「有咲さん！」

「あれ。あはは、おかしいな。なんか、そういうつもりじゃないんだけど。ヤバいね」

言うほどに、有咲さんの瞳から溢れる涙の量は増えていきます。

「違う、ごめん。ほんと、そういうんじゃないよ」

「有咲さん、私は」

「でも、今は来ないで。一人にしてくれよ」

有咲さんを慰めようと、つい手を伸ばしてしまいました。掛ける言葉も思いつかないのに伸びた手を、有咲さんは払い落として拒絶しました。

そしてそのまま、涙が止まなのまま、さらに先へと一人で走っていきます。

私は、悔しいですが、ただそんな有咲さんの背中を見送ることしか出来ませんでした。

拒絶されても、なおどんな言葉をかけるのか。どうするべきなのか。

それが分からずに、立ち尽くすばかりでした。

04 領都に到着

有咲さんとの話し合いが失敗に終わったまま、旅は続きました。妙に空気が悪い状態のまま、気不味そうにする金浜君と三森さん。私は状況を改善しようと、何度か有咲さんに話しかけてみたのですが、見事に避けられ、結局状況の改善にまでは至りませんでした。

そんな状態のまま旅は続き、とうとう目的地の一つである領都ウエインズヴェールに到着しました。

有咲さんがこのウエインズヴェールの領主、ルーズヴェルト侯爵に会いたいとこのことでしたので、到着次第連絡を出します。

その日のうちに侯爵からの使いが来て、すぐに会って話が出来るとのことでしたので、そのまま侯爵邸へと向かいました。

その道中、有咲さんに尋ねてみます。

「有咲さん、侯爵にはどういった用事があるのですか？」

「アタシに任せとけて。必要なことだからさ」

と言って、結局詳細は教えてもらえませんでした。とはいえ、有咲さんは信頼できる部下でもあります。その有咲さんが任せるというのですから、ここは大人しく任せておきましょう。

何より、有咲さんにはスキル『カルキュレイター』があります。そうそう間違いは起こさないはずですよ。

侯爵邸には何事もなく到着し、そして程なくして面会の時間になります。

「またお会いできて嬉しく思っているよ、乙木殿」

「こちらこそ。急な連絡でしたが、応じていただけで有り難く思っております」

私はルーズヴェルト侯爵と握手を交わします。この場には用事のある有咲さんと、付き添いとして金浜君に三森さんも同席しています。

「しかし、乙木殿が勇者様と友好関係にあったとは」

「ええ、仲良くさせて頂いています」

と、ルーズヴェルト侯爵は言っていますが、恐らくはその程度のこととは把握していたはずです。私の店が金浜君たち勇者の「グルー」の支援者に名乗りを上げたこと。そして実際に、店には三森さんや松里家君を筆頭に勇者の皆さんが訪れていたことも、調べるのはそう難しくないでしょう。

「聞けば、前線基地の方でも活躍したとか。今回は、それに関する用件かな？」

「いえ。今日は有咲さんの方が用件があるとのことでしたので、私の中継ぎをさせて頂いただけです」

「ほう、有咲さんとは、そちらの姪っ子さんでしたかな？」

ルーズヴェルト侯爵の視線を受けて、有咲さんは意を決したような表情を浮かべます。

「あの、侯爵様。実はお願いがあつて、アタシは今日ここに来ました」
「ほう、お願いか。内容にもよるが、どういったことをお願いするつもりかな？」

そう言つて、ルーズヴェルト侯爵は優しげに問い掛けます。
有咲さんは緊張した面持ちで、何やら随分と躊躇う素振りをみせた後、ようやく口を開きました。

「アタシを、侯爵様の側室に迎え入れて下さい」

その、予想もしていなかった言葉に。
私は頭が真っ白になってしまいました。

「ふむ。君、それがどういう意味か分かつて言っているのかね？」
「はい。よく調べて、よく考えて、その上で選びました。アタシはこうするのが一番だつて分かりました。だから、お願いします」
「それにしても、嬉しくなさそうに見えるけれども」

ルーズヴェルト侯爵は、言つてから私の方に鋭い視線を向けました。
これはどういふことだ、と責め立てるような視線でした。私は慌

てるようにして、有咲さんに問い掛けます。

「有咲さん！ 本当に、それでいいのですか？」

「いいつていつてんじやん。もう、おっさんこそなんで今さら慌てんだよ。こうなるのが一番だつて、おっさんも分かつてただろ？」
「それは」

確かに、そうです。考えたことはあります。有咲さんにとって、ウエイズヴェール侯爵家の側室に入るといふのは最も良い縁談なのではないか、と。

話した限り、ルーズヴェルト侯爵は悪い人には見えません。また、立場を悪用して有咲さんに無理を強いるようなことも出来ません。私という取引先が居るのですから、妙な真似は出来ないわけです。

極めつけには、ルーズヴェルト侯爵は金髪のイケメンで、私よりも若い。有咲さんよりは年上ですが、問題になるような年の差ではありません。

私のように、有咲さんの未来に影を落とすような、そんな男ではないはずです。

ですが、あまりにも突然すぎます。有咲さんは、私のことを今でも好きだと、そう言ってくれました。

未練を感じるわけではありませんが、つまり有咲さんはこの人、ルーズヴェルト侯爵を男性として好ましく思っているわけではないはずです。

なのに、なぜこんなにも急に。

様々な思考が脳裏に入り乱れ、ついで私の口から言葉が漏れることはありませんでした。

絶句している間にも、有咲さんは話をまとめていきます。

「侯爵様。それで返事は？」

「ふ、ふむ。まあ私としては問題はないのだが。その、君はそれでいいのかい？」

「はい。これがアタシにとって、一番の幸せですから」

その一言には、妙に重みと、実感が籠もっていました。それだけ有咲さんが本気で、本心から思っているからなのでしょう。

有咲さんが本気で、自分の幸せの為にこれが一番だと言うのなら、私には否定する材料が何もありません。

彼女の人生は、彼女が決めるべきですし。

私みたいな、人生を呪うような名付け親の考えなど信用に足りませんし。

そして有咲さんには、絶対に間違わないスキル『カルキュレイター』まであります。

何一つ、言うべき言葉が出てきません。

しばらく、侯爵は私の反応を伺っていた様子でした。しかし私が何も言わないと分かると、有咲さんに答えを返します。

「分かった。元より君を側室に迎える準備はあったのだ。その方向でまた話を進めさせてもらおうよ」

「ありがとうございます」

「詳細については、また追って連絡を王都の方へ寄越そう。それまでは今まで通りの生活を続けるといい」

「分かりました」

有咲さんとルーズヴェルト侯爵の、どこか事務的な会話が響きま

す。
私の耳はこれをまるで右から左に通り返けさせているかのように、全く聞き入れてくれません。

まるで意識が遠のくかのように、二人の会話が聞こえなくなっていきました。

05 婚約発表に向けて

ウエインズヴェールを発ち、王都へと帰還します。

その道中、私は有咲さんから決まったことを聞かされます。私の目の前で話していた内容だったそうですが、気が気でなくて一切耳に入っていなかったことから、改めて説明を受けたのです。

まず、正式に側室に入るには準備が必要とのこと。じゃあ今日から君は側室です、とはならないそうです。手続きもそうですが、慣習としてまずは婚約の発表。多くは披露宴という形で発表すること。そこから婚約者である有咲さんを連れて一年ほど貴族の社交界に顔を出し、名前と顔を覚えてもらいつつ横のつながりを作ります。

これは、貴族社会の外から正室、側室を娶る際に行われる慣習なのだとか。何でも、そうして社交界で十分に横の繋がりを作る機会を作らなければ、一部からは卑怯だと反発を受け、また有咲さん自身もいざという時に頼る相手が無くて困ることになるとのこと。

そうした慣習がある都合上、まずは婚約披露宴をしなければなりません。これから有咲さんとルーズヴェルト侯爵は、この婚約披露宴の準備に入ること。

そして、披露宴の様式は庶民的なものを取り入れて行うそうです。

というのも、例えば貴族同士の婚約ですと儀式的と言いますが、

そういつた複雑な手順、礼節を守りながらの披露宴になるそうです。しかし庶民間では婚約自体一般的ではないため、そうした送り出しの習慣も無く、当然有咲さんも作法を知っているはずありません。ですので、最低限民間で行われている結婚披露宴での作法を取り入れ、それを本来の婚約披露宴の儀式に替える予定なのだとか。

で、肝心の民間で行われている結婚披露宴での作法なのですが、まず、花嫁は母親から送られたドレスを着るとのこと。ドレスは庶民には高価すぎる衣装である為、結婚の都度に仕立てるのは厳しいですから、多くは親などから受け継いできた披露宴用のドレスを着用するのだとか。

当然、有咲さんはそのようなドレスの伝手などありませんから、保護者でもある私が用意することになるのが筋、だと言われました。

次に、娘を送り出す父親が何らかの装飾品を送るというもの。これは多くがネックレスになるらしいのですが、世の父親は結婚披露宴で娘を送り出す際に、その後の幸福を祈願して装飾品をプレゼントするそうです。

基本的には縁起の良いものを象ったものが良く、なおかつ壊れにくく失くしづらいものがベストだそうです。日頃着けていても邪魔にならず、指輪などと違い外しても些細な拍子に失くしづらいという理由でネックレスが選ばれることが多いのだとか。

当然、これも保護者である私が用意せねばなりません。

つまりまとめると、まず有咲さんは正式に側室となる前に、婚約者として一年間社交界で顔見せをしなければならぬ。その最初の段階として、婚約披露宴をしなければならぬ。

その婚約披露宴に必要なドレスとネックレスは、私が用意してあげなければならぬ。

ざっと、そういったところですよ。

そのような説明を、王都に向かう馬車の中で聞きました。空気を読んでくれたのか、金浜君と三森さんは別の馬車で王都に向かいましました。

ウェインスヴェールから王都までの道のりは、私と有咲さんの二人旅になりました。

一通りの説明も終わると、有咲さんは真剣な表情で語りました。

「ねえ、おっさん。アタシの、最後をお願い。わがまま。聞いてくれないかな」

「最後だなんて」

「それつきりだから。これが終わったら、もうアタシはおっさんのことが好きな有咲じゃない。おっさんの姪っ子で、侯爵様の嫁になる美樹本有咲にちゃんとなるから」

言われて、私は返す言葉を失いました。覚悟と、気迫。そういったもので切羽詰まったようになった声が、私に否定の句を躊躇わせました。

「アタシさ。最後は幸せな気持ちで嫁に行きたい。大好きな、雄一お兄ちゃんの準備してくれたドレスを着て、大好きな雄一お兄ちゃんからネックレスを受け取って、大好きな雄一お兄ちゃんに見送ってもらいたい」

悲痛な、今にも泣き出しそうな声で有咲さんは語ります。

「だからさ。おっさんも頑張つてよ。アタシの為に、一番のドレス。一番のネックレスを準備して欲しいんだ。それで、ちゃんと笑顔で

見送ってほしい。そしたらアタシ、ちゃんと幸せになれるって思うから」

「有咲、さん」

何と言う方が良いのか。どんな言葉で、返せばいいのか。

三十年以上生きてきたのに、そんな簡単なことさえ分からないまま、沈黙を貫くしかありませんでした。

ですが、心は決まりました。

有咲さんがそこまで言うのなら、私も覚悟を決めましょう。

有咲さんが一番美しく見えるような、そんなドレスを仕立ててあげましょう。

有咲さんの一生を祝福するような、そんなネックレスで飾ってあげましょう。

それぐらいしか、私には出来ないのですから。

有咲さんが選んだ幸せの為に出来ることなんて、それぐらいなのですから。

06 涙の冒険

王都に到着し、帰り着いた挨拶だけ済ませて、私はすぐさま引き返して冒険者ギルドへと向かいました。

店のことなど、一通りの指示、方針等については有咲さんに伝えてありますので、上手くやってくれるでしょう。

今は何より、誰とも話すこともなく、一心不乱にこの作業に没頭していたかったです。

冒険者ギルドに到着した私は、すぐさま依頼票の張り出された掲示板に目を通します。特に、討伐系の依頼を中心に。

そして、目当ての依頼票を発見し、それを剥ぎ取ります。

その内容は、魔物『ウルガス』の異常繁殖した森での討伐依頼。元々は森でビッグラットと呼ばれる魔物が異常繁殖していただけだったものが、対処が遅れた結果『キヤタクロウラー』という巨大な芋虫の魔物の餌となってこれまた大繁殖。さらにはこのキヤタクロウラーの討伐も間に合わず、ついには蛹となり、羽化して最終形態である蛾の魔物『ウルガス』の大量発生を許してしまったのです。

このウルガスが大量発生した森で、ウルガス及びキヤタクロウラーの間引きをしてほしい、という依頼票。

私の目的は、ウルガスの蛹が作る繭にありました。

ウルガスの繭から作られる糸は魔法触媒としても優れ、また加工を施せば革よりも強靱になり、うっすらと七色に輝く糸となります。

この糸を素材とする布は最高級のドレス用生地として使われており、非常に高価な値段で取引されています。

ですがウルガスは羽化した後、自らを守っていた繭を食し、これを栄養源として成長を促進させます。また、繭でいる期間は魔獣であるためか極めて短く、一日も掛かりません。

そのため、羽化前、あるいは直後のウルガスと遭遇するという幸運に恵まれなければそうそう手に入らない素材でもあります。

さらには、キャタクロウラーはそれほどでもありませんが、ウルガスは単独ではA級冒険者でなければ討伐不可能と言われる強力な魔物であることも手伝い、繭の希少性が跳ね上がっています。

しかし、ウルガスが大量発生している今なら。そして私の実力であれば。希少な繭をドレス一着に必要な分だけ手に入れることも難しくはありません。

ちなみに依頼については偶然見つけたわけではなく、ウェインズヴェールでは既にキャタクロウラーの大量発生が噂になっていたお陰です。もしもあの大量発生が解決されていなければ、というある意味悪い予想に掛けたのですが、大当たりです。

私は受付にて手早く依頼を受けると、そのまま冒険者ギルドを、そして王都を飛び出しました。

ウルガスの大量発生した森は王都からなら徒歩で七日間もかかる距離です。しかし、既に私の身体能力は人間の範疇にはありません。全力で、それこそ衝突すれば馬車だって跳ね飛ばしかねない勢いで目的地へと向かいました。

私が森に到着したのは、その日の夜でした。雲が掛かり月明かり

はほぼなく、深い闇に包まれた森は異様に静かで、不気味さすら感じます。

ですが、むしろ都合がいいかもしれません。

「うおおおおおッ！」

私は、叫び声を上げながら森に突入します。

直後、瘴気と詛泥を発生させ、自らの周囲に漂わせませす。また、詛泥の中から呪われたオリハルコン、無邪気に有咲さんに披露してやろうと意気込んで名付けたダークマターという名のその物質を剣の形にして取り出し、手に握ります。

私自身はスキルのお陰か、詛泥や瘴気の効果はもちろん、その他の一切の毒、疾病、呪いが無効化されます。なので、ダークマターを手にしても当然呪いにやられることはありません。

ともかく、私はダークマターの剣で道行く先の障害物を切り裂きながら、森の奥へと駆けてゆきます。

「ちくしょう」

自然と、その言葉が漏れました。

「ちくしょう、ちくしょう！　ちくしょおおおッ！」

私は、自分でも制御できない激情に支配されたまま、叫びます。知らぬうちに涙は流れ、身体は震えていました。頭は怒り狂った時のように熱く、けれど嫌に冷静で、今の自分の醜態を俯瞰するように感じていました。

やがて騒ぎを聞きつけたウルガス達が、私へと襲いかかってきます。

しかし、数が集まったところで私のステータスはオールSS。この程度の魔物など、相手にもなりません。

瘴気や詛泥に触れたそばから腐って崩れ落ち、壊死していくウルガス達。危険を感じ取った者は逃げるように背中を見せますが、私は逃しません。狙い撃つようにダークマターの槍を生み出して貫いたり、駆け寄って剣で一刀両断したりして処分してしまいます。

「あああああああああッ！」

言葉にもならない叫び声を上げながら、私は一心不乱にウルガス達を退治していきます。

殺して、殺して、ひたすらに殺して。八つ当たりのように無数のウルガスの命を刈り取って。

気がつくくと、広場らしき場所に出ました。

そこにはウルガスのものにしても巨大すぎる繭が一つと、それを取り囲むように無数のウルガスの繭がありました。

そして、巨大繭の隣にはゴブリンらしき姿が一つ。

「グハハハハ！ よく来たな人間よ、我こそは魔王軍七武将が一人、空席となった四天王の座に最も近いとされるジーニアスゴブリンの賢将メティドバン様だア！ とくと見るが良い、今こそこの私が無数のキヤタクロウラー同士に共食いさせることで生み出した最強のキヤタクロウラー、オメガキヤタクロウラーから進化することによって生まれる最強のウルガス、オメガウルガス誕生の時よ！」

次の瞬間、巨大繭の表面に罅が入ります。そして連動するように、周囲の繭にも罅が入り、中からウルガスが姿を見せます。

見るからに質の良い繭で、通常のウルガスの繭よりも色艶が良く、より深い七色の輝きを発しています。

「有咲、さん」

私は無意識のうちに、その名前を呟いていました。

そして貴重なウルガスの繭も含め、可能な限りをアイテム収納袋にしまい込み、その場を後にしました。

07 オメガウルガスシルク

森でひと暴れした、次の日。私は王都への帰路につきました。

自分でも想定していた以上にストレスが溜まっていたらしく、暴れた後もしばらくは興奮が収まりませんでした。その為、王都までの道のりは比較的ゆっくりと時間を駆けて進んでゆきます。

とは言っても、ずっと駆け足で進んでいるので、徒歩よりは遥かに進みが早いのですが。

三日ほどかけて、王都に帰り着いた頃には頭も随分冷えて、思考はしっかりと整理されていました。

有咲さんのことは、しっかりと覚悟を決めました。

彼女が自分で自分の道を選んだ以上、私はしっかりとその背中を見送る。

親代わりとして、やるべきことをやる。

改めて頭の中で自分の覚悟すべきことを思い返し、門を潜って王都に入ります。

帰り着いてみれば、どうやらすべての話は有咲さんが済ませていたらしく、従業員の皆さんやマリアさん、シャーリーさんにもどうということなのかと訊かれました。

とはいえ、今回の件は私ではなく有咲さんが決めたことです。全

ては有咲さんの説明したとおりだと答えると、皆さん納得はしていない様子でしたが引き下がってくれました。

そして私が仕入れてきたウルガスの繭ですが、こちらはマリアさんの人脈に頼り、知る限りで最も腕の良い生地の仕立て屋を紹介してもらいました。

貴族も利用することがあるという老舗を紹介してもらったので、マリアさんをお願いして繭を持ち込みで生地に仕立ててもらえるよう代理で交渉してもらいます。

その後は、いつもと変わらない日常が続きました。

工場の方では魔道具の各部品、材料の補充。そして新たに考えた魔道具の設計。魔道具店では深夜の接客にシフトを入れつつ、近況の確認。私が居ない間もつつがなく運営されていたようで、収益状況は旅への出発前とそう変わらず。ただ、在庫を私が補充できなかった分、仕入れにコストが掛かったようで支出が微増、最終的な収益額は微減という結果でした。

これについては私が戻ってきたことで改善されますし、そもそも大幅な黒字を出していることには変わりないので問題ないでしょう。

やがて一週間ほど経過すると、マリアさんの方から布が仕立て上がったという報告がありました。

さっそく出来上がったもの、オメガウルガスシルクを手にとつて見たのですが、素晴らしい出来でした。手触りはサラサラとしていて、安物にある妙なツルツル感も無く最高のものと言えるでしょう。しかも軽くて丈夫で、まるで宝石のように光を反射しキラキラと七色に輝いています。純白の生地の表面に煌く光は、有咲さんのこれからの祝福するに相応しいものと言えます。

出来上がった布を手に、私は孤児院の方へと向かいました。耐刃ローブの仕立てを任せているローサさんを訪ねるためです。

久しぶりに来てみると、ローブ作り等から得られる収益のお陰もあってか、孤児院はあちこちが修繕工事をされていて、以前来たときよりもかなり小綺麗になっていました。

そして、私が訪ねてきたと知ったローサさんは、すぐに会ってくれました。

「パパ！ おかえりなさいっ！」

ローサさんは私の姿を見つけるや否や、そう言って飛びついてきました。

一瞬驚きましたが、そういえばローサさんにはパパと呼ばれることになったのでしたね。

「ただいま戻りました。ローサさんはお変わりありませんか？」

「えっと、あたしは何も変わってないよ？」

つい私が難しい言い回しをしてしまったせいで、ローサさんは意味が分からなかったようで首を傾げます。

「何事も無さそうで何よりです。ところで、今日はローサさんにお願いがあって来たのです」

「お願い？」

「ええ。まずは、これを見て下さい」

私は言うと、収納袋からオメガウルガスシルクを取り出し、ローサさんに見せます。

「わあっ、きれい！」

「ローサさんには、この布を使って素敵なおドレスを作って欲しいのです」

「えっ！ あたしが、これを使って？」

「はい。お願いできますか？」

私が頼むと、ローサさんは少しだけ悩むような素振りを見せた後、応えます。

「少し不安だけど、やってみるね、パパ！」

「ありがとうございます。では、試作などはこちらの布を使って下さい」

そう言って、私はさらに収納袋から布を取り出します。オメガウルガスの繭のついでに回収し、ついでに布として仕立てた通常のウルガスシルクです。オメガウルガスのものには劣りますが、それでも元々が高級品です。試作用の布としてはかなり贅沢だと言えるでしょう。

「こちらの布も含め、余ったものはローサさんのものにして頂いてかまいません。そして、出来上がったドレスは適正価格で買い取るとお約束します。最後に、これが作って欲しいドレスのサイズの詳細です」

そうして、最後に渡したのは紙に書かれた有咲さんの身体の各部位のサイズ一覧。いつの間にか女性陣で測ってくれていたらしく、オメガウルガスシルクが仕上がる前から既に渡されていたものです。これを受け取ると、ローサさんは頼もしく頷き、応えてくれます。

「うん、がんばるね！」

この様子なら、ドレスに関しては問題ないでしょう。

最近では冒険者向けの耐刃ローブの仕立てがかなり凝ったものになっている場合も多かったのですが、こういったチャレンジもローサさんにはそろそろ必要だった頃でもありません。試行錯誤の為の試作用に大量のウルガスシルクも渡しました。きっと素晴らしいドレスを仕立ててくれるはずです。

「それでは、今日はこれで」

そう言って、私が別れの挨拶を始めたところでした。

不意に、ローサさんの手が私の手を上から包むように、ぎゅっと握り込んできました。

「ローサさん？」

「えっと、あのね。パパ、なんだか、今日」

少し言いづらそうにしてから、ローサさんは言います。

「悲しそうにしてたよ。パパ、どうしたの？」

見透かすような言葉に不意を突かれ、私は返す言葉を失いました。

08 笑顔でいてほしい

ローサさんにも分かるほど、私は有咲さんのことを気にしていたのでしよう。

覚悟を決めていたはずなのに、ダメですね。このままでは、ちゃんと有咲さんを送り出してあげることが出来ません。

「いえ、大丈夫ですよローサさん。私は何も」

「パパ、すぐくつらそうな顔してたもん。ずっと元気も無いし。あたし、パパの力になりたい！」

ローサさんの真つ直ぐな言葉にやられ、私は観念して事情を話してしまうことにしました。

とはいえ、どこからどこまで話すべきか。痴情のもつれとも言える私と有咲さんの関係まで詳しく話してしまうのは、さすがに憚られません。

ですので、有咲さんが結婚してしまうこと。そしてそれを未だに受け止めきれしていないことだけを伝えることにしましょう。

「実は、ですね」

私は、ローサさんにも分かるように状況を噛み砕いて説明しました。ずっと一緒にいた姪っ子、つまり娘のような子が急にお嫁に行ってしまうことになった。そして、私はその子が幸せになってほしいと思っただけながらも、まさか急にお嫁に行ってしまうとは思って

いなかった。だから気持ちがついてこない。幸せになってほしいのに、心の底からお祝いしてあげることが出来ない。そんな風に説明をしました。

「パパ、嬉しくないの？」

ローサさんは首を傾げます。

「あたしもパパの娘だけど、あたしならずとパパと一緒にいいな」「あはは。ローサさん、残念ですが娘と父親では結婚は出来ませんよ」

ローサさんの場合は呼び方だけの問題なので実際は結婚出来るのですが。この場合は有咲さんの話なので、そう否定しておきます。

「あたしは結婚するならパパがいい！」

にっこり笑ってローサさんは言います。

そうですね。確かに、有咲さんも私を選ぼうとしていました。だからこそ、急に翻るようにルーズヴェルト侯爵との婚約を決めたことが受け止めきれないのです。

心のどこかに、有咲さんに愛されていて幸せだと思っていた自分が居た証拠でしょうね、これは。

と、自虐的な思考を巡らせているところに、ローサさんがさらに言葉を投げかけて来ます。

「でも、もしどうしてもパパと結婚しちゃダメなんだったら、あたしはせめてパパには笑顔でいてほしいな」

「笑顔、ですか」

難しい課題ですね。

と思つているところに、ローサさんは顔を近づけてきます。まるで頬にキスをするような距離です。

「ローサさん？」

「ねえパパ、あれやって。おひげ攻撃！」

言われて、つい私は笑みを零しました。そういえば、ローサさんは顎で頬ずりをされるのが好きでしたね。

「ええ、分かりました。では、すりすり」

「あはは、かゆーい！」

私がおひげ攻撃を繰り返すと、ローサさんは途端に笑い出しました。それに釣られて、私も笑顔になります。

「よかった。パパ、笑ってくれた」

「そうですね、つい」

「パパ、おひげ攻撃好きだもんね！」

なるほど、ローサさんの方からすると、私がおひげ攻撃を好んでいるように見えるのですね。お互いに相手が望んでやっていることだと思い込んでいるとは、奇妙な状況ですね。

とはいえ、結果的に元気をもらったのは事実です。いちいち否定するような真似はしないでおきましょう。

「ええ。パパはおひげ攻撃が好きですからね。ローサさんのお陰で元気が出ました」

「うんっ！ つらくなったら、いつでもおひげ攻撃しに来ていいか

らね!」

「はい、よろしくお願いしますね、ローサさん」

そう言っで、私はさらにローサさんへおひげ攻撃を繰り返しまし
た。

09 心の中に答えがある

その後、十数分ほどローサさんと戯れた後。私はイザベラさんに会うため、彼女の部屋へと向かいます。

孤児院の近況などを聞いておきたいという気持ちもありますが、それだけではありません。

ローサさんに言われたこと。笑顔でいてほしいという願い。それをどうやれば叶えられるのか。自分はどうすれば、この思いを乗り越えられるのか。それを誰かに相談したくなったのです。

私一人でうだうだしていても、上手くいかないことはローサさんに教えられましたからね。さっそく、知人を頼ってみることにします。

急に訪ねてきたにも関わらず、イザベラさんは快く迎え入れてくれました。

「お久しぶりです、乙木さん。今日はどういったご用件でしょうか？」
「ええ。最近の子供たちの様子について、何か気づいたことがあれば聞いておきたいと思ひまして。それと、個人的な用事なのですが、相談事が一つ」

「まあ、そうですね。乙木さんにはいつもお世話になっていますが、相談事の二つや三つぐらい、お引き受けします」

それぐらいでお返しになるのであれば、とイザベラさんは少し冗談っぽく言ってみせます。こうした気さくさを見せることで、相談事をしやすい空気を作っていただけでした。

沢山の子供たちと接してきて培った経験によるものなのでしょう。

ともかく、まずは子供たちの様子についてです。

これについては、それほど大きな問題も無かったようで、小さなトラブルも私がない間に魔道具店の方々に相談して既に解決済みとのことでした。どうやら業務内容外の仕事をマリアさん、そしてシャーリーさんがこなしてくれていたようなので、後でお礼と、別途でボーナスを出すことにしましょう。

そうした事務的な、仕事の話が終わり、いよいよ本題。私の悩みについての相談です。

ローサさんに話したよりも詳しい話をイザベラさんに告げた後、さらにはローサさんから笑顔でいてほしい、元気になってほしいと言われたことも語ります。

一通りの事情を説明した後、私は纏めるように言います。

「ともかく、私としては今の状況をよく思っていないません。どうにかしたいのですが、その気持ちだけではどうにもならない。どうすれば、私はこの問題を吹っ切れるのでしょうか」

一部始終の話を、イザベラさんは聞きに徹してくれました。そして私が全て話し終わると、一度頷いてから答えてくれます。

「それは、とても難しい問題ですね。人の気持ち、それも自分以外の誰かの分まで考えなければいけませんから。どうすれば良いのか。あるいは、あの時どうしていれば良かったのか。その答えは、

簡単に出るものではないと思います」

イザベラさんは真剣な様子で、諭すような口調で語っていきます。

「ですが、一つ確かなことがあります。それは、乙木さんが何をすれば良いのかということですよ」

「私の、やるべきことですか」

「ええ。きつと、乙木さんの心の中には、私が考えたり、お話を聞いたりするだけでは伺いしれない何かがあるのだと思います。自分の内側にだけある何か大きな問題が、きつと乙木さんを迷わせているのです」

抽象的な話ではありますが、言いたいことは分かります。つまり私の迷いは私自身の心の問題であると。言われてみれば当たり前ですが、わざわざ意識まではしていない部分です。

「ですから、まずは自分の心と向き合ってみてください。貴方の中の何かが引っかかるから、貴方の心が貴方の思い通りにならないのです。ですから、まずは自分に素直に、正直になってください。そうやって自分と向き合うのが始まりですから」

「なるほど、それは確かに、納得のいく理屈ですね」

話の筋は通っていますし、確かに漠然と考えるよりは、私の心の中でなにが問題として意識されているのか。そこに焦点を当てた方が効率も良さそうに思えます。

「ですから、乙木さん。こちらへ」

イザベラさんがそう言って手招きをするので、真正面まで歩み寄ります。

「少しお辞儀をして、頭を低くしていただけますか？」
「ごう、でしょうか」

私が頭を下げると同時です。不意に、ふわり、と頭を何か包むような感覚が襲いました。どうやら、イザベラさんが私の頭を胸元に抱き締めるような形になっているようです。

「大丈夫です。きっと、乙木さんは大丈夫。心の中に答えがあるんですから、きつと見つけられます」

まるで幼子をあやすような、優しすぎるほどの声色でイザベラさんは言います。そして、私の頭を慰めるように撫でます。

不思議と、不快には思いません。むしろ、何か心のささくれた部分が癒やされるような、そんな気持ちになりました。

気がつくと、涙が溢れていました。

いい歳の男が、女性に頭を抱きしめられ、撫でられて泣いてしまふなどは。恥ずかしい限りなのですが、しかし涙を止めることは叶いません。

そのままの姿勢でしばらく、私は涙を流しました。イザベラさんは、まるで本当に幼子を相手にするように、辛抱強く大丈夫、大丈夫と私を慰めてくれました。

どれぐらいそうしていたでしょうか。ようやく涙の収まった私は、イザベラさんの胸元から離れます。

「ありがとうございます、もう、平気です」

「元気は出ましたか？」

「ええ、とても」

少し照れくさい気もしますが、既に醜態を晒した後です。気取る必要は無いでしょう。

「イザベラさんのお陰で、また少し頑張れるような気がしてきました」

「ええ。乙木さんのやるべきことが見つかる日が来るよう、私も祈っております」

そうして、何度かお礼と祝福の言葉を交互に言い合った後、私は孤児院を後にしました。

10 ドラゴンの鱗

ドレスの仕立ての準備が終わりました。なので、次は装飾品の制作に入ります。

私は『鉄血』スキルにより、様々な種類の金属を手に入れていきます。それこそ、最も希少かつ頑丈な金属であるオリハルコンまで。それに、先日のドラゴン、アレスヴェルグとの戦いで手に入れた謎の希少金属もあります。

日常的に付けるものですし、これら複数種類の希少金属を使ったネックレスを用意すれば、おそらくは十分な贈り物となるでしょう。その為に、現在私は宮廷魔術師のシュリ君のところへと向かっています。

理由は二つ。まずはアレスヴェルグから採れた希少金属の鑑定。性質的に装飾品に使っても問題ないものなのか調べてもらいます。

そしてもう一つ、あの戦いの中で生まれた新たな物体、呪われたオリハルコンであるダークマターの性質測定です。こちらはせつかどうかからついでに、といった感じの用件にはなりますが、調べておくことに意味はあるでしょう。現状、触れた者の皮膚が爛れ、腐る効果があること以上のことは何も分かっていますからね。

私が訪ねると、シュリ君は快く迎え入れてくれました。

「やあやあ、いらつしやいオトギン！ 久しぶりだねえ」

「ええ、お久しぶりです」

「今日は何かな？ 例の視察とやらで何か新しい発見でもしたのかな？」

「ええ、まさにちょうどその件についてなのですが」

言つて、私は例の金属、ダークマターとアレスヴェルグの鱗から採れた金属を取り出します。

「オトギン、これは？」

「こちらは、私が討伐した魔王軍四天王アレスヴェルグの鱗に成分として含まれていた金属を集め、インゴットにしたもの。そしてこちらは、オリハルコンが私の持つスキルによつて汚染され、かなり性質が変化してしまったものです。一応、私はダークマターと呼んでおります」

私が紹介を続けている間も、シュリ君は興味深そうに二つのインゴットを観察しています。

「これは、どちらも見たこと無い物質だね。こつちのダークマターつてやつは、常に魔力を、それもかなり濃い目で重たいのを周囲に発散させてる。で、逆にもう一つの物質は魔力を一切近づけない。隣から濃厚な魔力が流れてきてるのに、全部インゴットに触れる手前で弾かれるみたいに流れを変えてる」

「そうだったのですか、どおりで」

実は、アレスヴェルグから採取した金属は『詛泥』を介して収納していました。なのに、ダークマターと同様の変化を起こすことはありませんでした。

その他の様々な金属はオリハルコンと同様の変化をしましたが、

この物質だけが例外だったのです。

魔力を弾く性質から考えるに、詛泥からの影響もまた弾いていたのでしょうか。

「ともかく、両方とも未知の物質なのは間違いないね。詳しく調べなきゃいけないさそうだ。オトギン、もうちょっと詳しい話を聞かせてもらえるかな？」

「分かりました」

そうして、シュリ君による検査が開始しました。

シュリ君が二つの物質を様々な手法で解析していく様子を眺めながら、私はそれぞれの金属を入手した経緯を詳細に話します。これをシュリ君は、作業の手を止めずに聞き続けました。

私の新たなスキル『災禍』と、そこから派生した『瘴気』と『詛泥』のスキル。その性質と効果の程について。そして『詛泥』を介して出し入れした金属の性質が呪われて変化することや、アレスヴェルグの鱗に含まれていた金属だけは変化を起こさなかったことまで。

一通り私が思いつく話を済ませた後は、シュリ君から質問が飛んできます。もちろん、作業の手は止めないままに。

「じゃあ、オトギンはこっちの、えーっと、ややこしいからひとまずインシュレーターって名付けようか。インシュレーターは例の四天王のドラゴンの鱗から抽出したって認識でオーケー？」

「はい、そのとおりです」

「抽出した感じは、どんな感じだったか分かったりするかな？ 例えは一部分が欠けるような感じで採れたのか。それとも、鱗全体がインシュレーターだった感じ？」

「いえ、なんと言えればいいのか。感覚としては、鱗の中から何かを抜けていくような、布に染み込んだ水が抜けていくような、そんな

感じでしたね」

「ふむふむ。同じことを、普通のドラゴンには試した？」

「いえ。討伐したドラゴン全てを私が回収してしまうと、襲撃で破壊された基地の施設の修繕費用等に回す分が無くなってしまうだろうと考えましたので、一切手を付けていません」

「なるほど、じゃあドラゴンの鱗であれば同じ金属が含まれている可能性はゼロじゃない、と」

そう言つと、シユリ君は作業の手を一度止めて、何か別のものを探し始めます。

研究室のいくつかの引き出しを探した後、目的のものがあつたのか、それを取り出してこちらに持ってきます。

「ちょうど研究用に素材として仕入れたドラゴンの鱗の、欠片の余りがあつたんだよね」

そう言つて、シユリ君が差し出したのは小さな石ころのような形をした物体でした。

「色々使っちゃった後だからもう残りはこれっぽっちだけど、もしもドラゴンの鱗にもインシュレクターが含まれてるならここからだつて抽出できるはずなんだよね。オトギン、できそう？」

「はい、試してみます」

シユリ君に言われ、私はドラゴンの鱗の欠片を受け取ります。万が一、この素材を消し飛ばしてしまわないように使うスキルは『鉄血』にしておきます。

掌に傷を作り、そこに鱗を乗せます。そして集中すると、うつすらと何かが収納可能であるような感覚があります。アレスヴェルグの時のようなはっきりした感覚ではありませんが、確かにスキルは

反応しています。

その感覚に従い、スキルを発動すると、やはり当たりだったのか、何らかの金属が吸収されていくのがスキルを介して実感出来ます。

そして吸収が終わったら、鱗の欠片を机の上に置き、代わりに掌には吸収した金属の塊を生み出します。

生成されたのは小豆ぐらいの大きさの小さな金属片でした。

「やっぱりね。この金属片も魔力を弾いてる。仮説は正しそうだよ」

そう言って、シュリ君はニヤリと笑いながらこちらを向きました。

11 ゴブリンの生態

「恐らくだけど、この金属がドラゴンの鱗の性質を司っていたものの正体だよ。ドラゴンは自分の体内でこの物質を作り出し、鱗の中に満遍なく粒子状にして混ぜ込んでるんだ。だからドラゴンの鱗は魔法に対する耐性が高くて、武器や防具の素材として非常に優秀なものとして取引されてるわけだよ」

シユリ君の仮説に、一瞬だけ疑問を覚えましたけどひとまず置いておきます。体内で金属を生成、というのは地球の感覚で言えばありえないことです。しかし、ここは異世界。魔法まであるのですから、そういった器官を体内に備えている生物が存在していてもおかしくはありません。

あるいは核融合炉のような反応をする器官が体内にあるからこそ、ドラゴンは強力なプレスを吐くエネルギーを生成出来て、インシュレーターも生成することが出来るのかもしれない。

とまあ、妄想のような考えは一旦置いておきましょう。

「そのような器官を含む生物などというのは、ありえるものなのですか？」

結局はそこなのです。実際にありえるのか、ありえないのか。この世界での常識的な部分での判断こそが重要ですから。

「うーん、ありえるとは思つよ。魔物つてさ、けっこう普通の動物とは違って肉体の構造的に自由度が高いんだよ」

そう言ってから、不意にシュリ君はどこからともなくメガネを取り出し、装着します。

「ふふん、このボクが魔物の生態に詳しくないオトギンの為に、特別授業をしてあげよう！」

「はい、お願いします」

どうやら、解説モードに入るための雰囲気作り。そのためのメガネだったようです。

「まず、魔物の肉体の構造は普通の生物からかけ離れている。これはまあ、当たり前だね。それこそゴーレムとかスライムみたいな奴らまでいるんだからアレだけど、もっと身近な、生き物らしい生き物で例を挙げるならゴブリンが分かりやすいかな」

「ゴブリン、ですか」

人型の、生態系的にも能力的にもそれほど通常の生物の範疇から逸脱していない魔物です。そんな魔物が、なぜ例に挙がるのでしょうか。

「有名な話だけど、ゴブリンの肉はかなり不味い。ゲロマズ。腐った肉でも食ったほうがマシってぐらいなんだけど、それは知ってるよね？」

「ええ、まあ」

「実は、その肉の不味さはゴブリンが進化の過程で獲得した能力だつていう説があるんだよ。どんなところにもゴブリンは居るんだけど、こんなに弱くて、逃げる能力も姿を隠す能力も低い生き物が

世界中で繁殖してるなんてそもそもおかしいよね？ 普通なら絶滅してるよ。でも、そうやってない。理由の一つとして、ゴブリンの肉が不味いからだ、ってというのが挙げられるんだよ」

言いつつ、シュリ君はメガネを一度だけクイツと持ち上げ、気合を入れて話し続けます。

「現在、世界中で確認されてるあらゆる魔物、動物の中で、ゴブリンの肉を積極的に食する可能性のある種は数えるほどしかない。悪食で知られるあのキャタクロウラーでさえ、ゴブリンの肉は食べないんだよ。有機物ならなんでも溶かすスライム系統を除けば、本当に数えるほどしかゴブリンの肉は食べない。中には、食べることで死んでしまう種も存在するぐらいなんだ」

「そこまでの不味さだったのですか。いえ、死ぬ可能性もあるというのなら、それは不味さというより、肉に含まれる成分がそもそも毒なのでしょうね」

「そのとおり！」

ビシッ、とシュリ君は私を指差します。

「ゴブリンの肉に含まれる成分は、かなり複雑なんだ。人間には無害だけど、一部の生き物にとっては毒になることもある。お腹を壊したり、中には即死するぐらいの拒絶反応が出る場合もあるぐらいなんだ。それが天敵相手であればまだ納得できるんだけど、ゴブリンの場合は世界中のあらゆる魔物に対応してるわけ。あまりにも種類と、そして量が多すぎる。そんなの、本来なら筋肉として機能するはずが無いレベルだよ」

筋肉全体がそれだけの多種多様な毒として機能するのであれば、逆に筋肉として機能するのはおかしい、という発想は確かに納得で

きます。

「なのに、ゴブリンはちゃんと生きてる。不味すぎる肉を持っていながら、まあ確かに力は弱いけど人間よりもちよつと弱いぐらいで済んでる。そんな不自然な筋肉を持っていても、ちゃんと生物として成り立っている。それが魔物っていうものなんだよ」

シュリ君はゴブリンの生態についての話を締めます。

「あと、これは余談なんだけど、今から三百年ぐらい前にはキャンディゴブリンっていう種類の不思議なゴブリンが居たんだ。知能も戦闘能力も高く、皮膚が人間以上に色白で、肉もキレイなピンク色をしていて、しかも食べると美味しいっていうゴブリン。彼らは地中海周辺に独自の集落を作って生活していたんだけど、当時のある国の王様がキャンディゴブリンの肉の味に魅了されちゃってね。結局絶滅するまで狩り尽くされちゃったって話」

ちなみに、シュリ君の言う地中海とは地球のものとは全く違い、この世界、この大陸に存在する陸地のご真ん中にある巨大な湖のことです。海のように塩っぱく広大であることから、この世界では地中海と呼ばれているのです。

「で、その事件がきっかけになって、もしかしてゴブリンの肉が不味いんじゃないかって、不味い肉を進化の過程で獲得したゴブリンだけが狩り尽くされることなく生き残っただけなんじゃないかっていう説が唱えられるようになったんだ」

「なるほど、確かに理屈としては納得できますね」

「まあ、まだ仮説に過ぎないし、そこまで有名でもない説なんだけどね。あ、ちなみにキャンディゴブリンの話はお伽噺にもなっていて、洞窟ドワーフと同じぐらい有名だったりするよ」

「そうなのですか？」

「うんうん。最後はキャンディゴブリンの集落生まれなお陰で賢さだけは受け継ぐことの出来た普通の緑色のゴブリンが王様に復讐を成し遂げて終わるんだよね。実際、その国の王様はキャンディゴブリンの集落を潰した数年後に暗殺されて亡くなってから、やりすぎは良くないよってという教訓としてこのお話が有名になった感じかな」

なるほど。一口にゴブリンと言っても、様々な学説や物語があるわけですね。弱い魔物だからといって、その存在を軽んじて良いわけでは無いということでしょう。

12 ドラゴンの生態（仮説）

「とまあ、話は逸れちゃったけど一旦ドラゴンの話に戻ろっか」

シユリ君はそう言って、話の軌道を修正します。

「結論から言うと、ドラゴンが体内に未知の金属を生成する器官を持っている可能性は高いね。理由としては、まずこの金属が今まで世界中のどこからも発見されていないこと。ミスリルは魔法に対する抵抗力の強い金属として有名だけど、ここまで露骨に魔力を弾くような性質は持っていない。他の魔法抵抗力の強い金属も同様だよ。つまりインシュレイターはドラゴンの鱗からしか発見されていない。っていうか、オトギンが世界初。ってことはインシュレイターはドラゴンの鱗にしか存在しない金属ってわけで、なら出どころはドラゴンの体内しか無いよね、っていうシンプルな理論だね」

確かに、世界中のどこにも存在しない金属だといっているのであれば、ドラゴンの体内で作られている可能性は高まります。

これが他の手段で抽出されたものであれば合金による物性の変化を疑いますが、私の場合はスキルで抽出したわけですからね。インシュレイターは純度百パーセントの、紛れもない単一の金属で構成された物質です。

「で、もう一つ理由があるんだけど、ちょっとオトギン、例の四天王から採れた金属の方も、この小さいインシュレイターと同じぐら

いの大きさを取り出してくれない？」

「了解です。こんな感じでしょうか」

「うんうん、オッケー！」

私は言われたとおり、小豆程度のサイズにしてアレスヴェルグから採れたインシュレイターを取り出します。

これをシュリ君は受け取り、二つのインシュレイターを机の上に並べます。

「じゃあ、ちょっと見ててね。今からボクが魔力を可視化して発生させるから」

言って、シュリ君は目をつぶり、集中した様子で掌を二つのインシュレイターにかざします。

すると、シュリ君の掌からまるで煙のように微発光する魔力が流れ出します。これが重力に従うように降りかかり、インシュレイターを包み込みます。

「おや？」

そして、私は気づきました。

二つのインシュレイターの魔力を弾く強さが、まるで違うのです。

シュリ君に渡されたドラゴンの鱗から抽出した方は、確かに魔力を弾いているのですが、どちらかと言うと流れが何かに阻害され、逸れていくような印象を受けます。

一方でアレスヴェルグから採取したインシュレイターは、本当に文字通り弾くような勢いで魔力の流れと反発しており、そもそも反発する領域も広く、魔力が存在しない空間が二倍から三倍ほどの大きさになっています。

「これは、妙ですね」

「分かったかな？　つまりオトギンの持ってきたものと、今ここで作ったものでインシュレクターに性能の違いがあるってことなんだよ。何か特別な処理をしたわけじゃないから、この違いの原因は単純に抽出元、つまりドラゴンの種類によるものだと推測できる。つまり、種類によってドラゴンは性質の違うインシュレクターを保有してるってわけ」

そこまで説明すると、シュリ君は魔力の放出を中断します。インシュレクターを包むように漂っていた魔力の光は次第に霧散し、消えました。

「どうしてドラゴンごとに性質の違うインシュレクターが抽出出来るのか。食べ物や環境によるものである可能性もあるけど、それらはドラゴンの鱗以外からインシュレクターが見つかっていない現状を踏まえれば低い可能性、影響度だと予想できる。となれば、やっぱりドラゴン毎に違う器官が体内に備わっていて、そこで異なるインシュレクターが生成されていると考えればスッキリするよね。予想としては、まあまず最初に検証したい大本命ってわけ」

ドラゴンの体内で異なるインシュレクターが生成される。だから、インシュレクターの性質もドラゴン毎に異なる。その理屈は単純ながら、現状分かっていることを纏めると最初に予想される仮説になります。

そしてその仮説が予想されるからこそ、ドラゴンの体内にインシュレクターを生成する器官が存在するという仮説もまた、より強い期待を持って予想出来るわけです。

「もしもこれが事実なら、ドラゴンの素材に革命が起きるよ。まず

は価値の変化。ドラゴンの鱗が魔法を弾くというのは有名な話だけど、素材ごとの程度の差が出るのはドラゴンの強さ、つまりどう成長したかに依存していると思われるたわけだよ。そこから可能性として低級のドラゴンの素材でも、処理次第で上位のドラゴンの素材に匹敵する性能を発揮できる、という議論もされてきたんだけど、それが根本から覆るだろうね」

処理をどうやったところで、そもそも鱗に含まれるインシュレクターの性能からして差があるのですからね。そこに焦点を当てて考えない限り、既存のアプローチが成功することは無いでしょう。

「希少なドラゴンの鱗の価値は跳ね上がって、そうでないものは下がる。数よりも質ってのは既にそうなんだけど、それが今まで以上に強くなるはずだよ」

「誰でも、使うならより質のいいものを求めますからね。そして、その質が他の手段で埋めることの出来ない差によるものであったなら。質の良いものの価値、需要は自然と高まるというわけですか」「そうそう、そういうこと」

シユリ君は私の見解に頷き、さらに話を続けます。

「それに、魔法の分野にも影響が大きい。今までドラゴンの鱗は他の部位とは違って魔法の触媒にするには不適切だとされてきたんだ。でも、その原因が成分として含まれているインシュレーターにあるなら話が変わる。インシュレーターを抽出した後のドラゴンの鱗が、どんな魔法でどのように生かされるのか。研究すべきことが山程あるね」

今まで、ドラゴンの鱗は魔法を弾く物体だと考えられていたわけですからね。それが鱗そのものではなくインシュレーターによるも

のだと判明すれば、逆に鱗単独の利用方法にまで話が広がるわけです。

「なかなか、大きな話になりそうですね」

「そうだよ、オトギン。だからこの偉大な発見をしたオトギンには、インシュレイターに名前を付ける権利がある」

「名前、ですか」

「ドラゴン毎に違うインシュレイターが作られているわけだからね。それらを総称する言葉はインシュレイターでも良いとして、ここで見つかった二つの物質に関してはオトギンが命名しちゃって良いと思うよ?」

「なるほど」

新しい元素を発見した時の命名権のようなものなのでしょう。少しだけ考え、すぐに決定します。

「こちらの、普通のドラゴンの鱗から採取した方のインシュレイターはドラシウム。私が持ち込んだ方の物質は、四天王の名前にちなんでアレシウムと名付けましょう」

「ドラシウムとアレシウム、ね。おっけー了解！」

言って、シュリ君は近くの黒板に二つの物質の名前をメモしました。

「で、最初の話に戻るけどさ。オトギンはボクに、このアレシウムともう一つ、ダークマターだったっけ? これらの検査をお願いしたいんだよね?」

「はい。どのような性質を持つ金属なのか、より詳細に知っておきたいので」

「おっけー、わかったよ。とりあえずドラシウムも含め、色々実験

して確かめてみるよ」

シュリ君は言いながら、私が用意した二つのインゴット、アレシウムとダークマターの二つを容器の中に入れ、密封して片付けます。ダークマターの呪いを受けないよう細心の注意を払いながら。

そうして二つのインゴットを片付けた後、こちらを向いたシュリ君が問い掛けてきます。

「で、こんなもの調べさせておいて、何に使うつもりなのかな？」

13 なかなかのワル

にっこりと、無邪気そうに見えてどこか含みのある笑みを浮かべ、シュリ君は私に問い掛けます。

「なにか作るつもりってだけなら、オトギンはいちいちボクに検査してくれ、なんて言いに来ないよね？ どういうつもりかなあ？」

シュリ君は、どうやら私がまた新しいことを企んでいると予想しているようです。

しかし、今回は事情が違います。あくまでも、有咲さんに贈る装飾品の素材に相応しいかどうか、何か危険な性質が無いかどうか。それを調べてもらうために持ってきたのですから。

ですので、私は一部始終の事情をシュリ君に話しました。

最初こそシュリ君は驚いたような表情を浮かべたものの、その後は特に口を挟むこと無く、話を聞いていました。

そして全ての事情を話し終えて一言。

「ふふ。オトギンってば、なかなかのワルだねえ」

ニヤリと笑みを浮かべ、シュリ君は語ります。

「確かに侯爵家と繋がりが出来れば、自分の商売にはプラスになるだろうけどさ。でも、気持ちを抑え込んでまで、自分の姪にそんな

ことさせるなんて。いやー、想像以上のワルだねえオトギンは！」

シュリ君の言葉が胸に突き刺さるようでした。咄嗟に、まるで防御反応のように私は言葉を返します。

「そのつもりでは、ないのですが」

「でも結果的にそうなってるよね？」

事実が、突き立てられます。

「だったら、ワルだよねえ？」

シュリ君の声が、妙に頭に響くようでした。

その後、私はシュリ君の研究室を離れ、帰路につきました。シュリ君に言われた言葉がショックとなり、どこか茫然自失としたまま歩きます。

その結果、何度も訪れた場所だというのに、迷子になってしまいました。

王城は広く、足を運んだことのない場所も多いため、変な道に入れば迷ってしまうこともあるでしょう。しかし、何度も通った道を間違えるというのはあまりにも集中力に欠けています。

自分でも、自分を間抜けだと思いつながら元の道に戻ろうと歩くと十数分。

「おや、乙木殿。どうされたのかな？」

マルクリーヌさんが、ちょうど正面から歩いて来ます。

「実は、道を一本間違つて迷子になってしまいました」

「ああ、城内は広く複雑だからな。歩き慣れていなければ、迷うこともあるだろう。案内した方が良いかな？」

「お時間の都合が良ければ、そうして頂けるとありがたいです」

「承知した。では、こちらに」

マルクリーヌさんは、私を先導するように歩き始めます。私は、その後ろを付いていきます。

そうして歩き始めてまもなく、世間話をする様子でマルクリーヌさんが口を開きます。

「そういえば乙木殿。噂を聞いたぞ？ 姪っ子の、美樹本有咲殿だったか。彼女がルーズヴェルト侯爵殿と婚約するのだとか」

「ああ、ええ、まあ」

私は歯切れ悪く頷きます。その様子に気づいていないのか、マルクリーヌさんは普段どおりの調子で話を続けます。

「確かに、嫁ぎ先としてルーズヴェルト侯爵殿は悪くない。良いお方だし、派閥としても最大派閥で、私の実家もあの方の派閥だ。乙木殿の親類があなたの方との縁を持ったとなれば、乙木殿が名誉貴族ではなく、れっきとした貴族籍を持つことも視野の内に入ってくるだろう」

「そう、ですね」

「私はてっきり、あの子は乙木殿の第一夫人となるのかと思っていたのだが、とは言え政略結婚など上流階級の間では珍しいことでもない。ルーズヴェルト侯爵殿であれば、その辺りも踏まえた上で婚約の話を持ちかけてくださったのだらうから、愛人として乙木殿の元に通う道も無くはない。無論、面子には十分配慮した上でだが」

その言葉に、一瞬私は想像してしまいます。有咲さんが侯爵家に嫁いだ後も、私のところに来てくれる。戻ってくれる可能性を。

期待してしまっただかのような、というより実際に期待しているからこそその妄想に、私は嫌気が差しました。

自分は、こんなにも醜く、汚い感情の持ち主だったのかと。自分の都合で有咲さんを政治的に利用し、あげく有咲さんには自分のものでいて欲しいなどと思っている。

あまりにも、ひどい。そう思うと、もう堪えてはいられませんでした。

「すみません、マルクリーヌさん。少々用事を思い出しました」

「ん？ 何かあるなら、そこまで案内しよう」

「いえ、大丈夫です。それでは」

私は一方的に、かつ逃げるようにマルクリーヌさんから離れます。一度どこかで、一人で、心を落ち着けたい気分でした。

14 本望ですから

私はどうすればいいかも分からぬままに王城内部を歩き回り、最終的には中庭らしい空間まで辿り着きました。

木々や花々を眺めながら、呆然と歩いてまわります。そうして何もかも一度空っぽにして、気分を落ち着けるためです。

しばらくそうしていると、ふと気づいた時には私の真正面に一人の少女が立っていました。

「あの、愛しの我が君。大丈夫でしょうか？」

姿を表したのは、七竈八色さん。私をストーカーする、勇者として召喚された子達の中の一人です。

七竈さんは私の前に姿を現さない、という約束だったはず。ですから、こうして私の前に現れたのには意味があるはずです。

「どうしましたか、七竈さん」

「それは、あの、私が言いたいことでしたっ！ 愛しの人が、なぜ最近になって悲しそうにしているのかわかるのか、その、どうしても知りたくて、あとは心配もあって」

あの、その、と口籠りながらも、七竈さんは私を心配するような様子を見せてくれます。

それだけ、私の様子がおかしかったということなのでしょう。姿

を見せない約束を破ってしまうほど不安になる、そんな姿を晒していた自分が情けなくなりします。

「ご心配をおかけしましたね。もう、大丈夫です」

「えっと、それって本当ですか？ 美樹本さんのことを気にしているんですよね？」

ずばり、七竈さんはこの本質に切り込んできます。思えば、この子は私のストーカーです。恐らくは私以外で全ての事情を事細かに知っているのはこの子だけなのでしょう。

むしろ、第三者であるが故に、私以上に私の状況に詳しいかもしれません。

「確かに、その通りです。私は、有咲さんの気持ちを無視した。有咲さんを自分の為に利用するような真似をした。それなのに、まだ有咲さんがまるで自分のもののような気持ちでいるんです。こんな、どうしようもないことを考えてしまう自分が情けなくて、最低だと感じています」

私は正直な気持ちをつい漏らしてしまいながら、はあ、とため息を吐きます。

すると、七竈さんは怖いぐらいに爽やかな笑顔を浮かべて言い始めます。

「大丈夫ですっ！ 愛しの人！」

何が大丈夫なのか分からず、私は首を傾げます。七竈さんはそのまま勢いよく話を続けました。

「私なら、貴方様の為になれるのならどんなことだってします！」

貴方様の幸せが私の幸せ。ですから、貴方様がどこの馬の骨とも知らない男のところ嫁げと言え、私なら喜んで嫁ぎます！」

常軌を逸する七竈さんの発言に、私は呆気にとられてしまいました。が、構わず七竈さんは一方的に話を続けます。

「なので、きつと大丈夫です！ 貴方様を愛する私だって本望です。から、きつと同じように美樹本さんだって本望のはずです！ だから、愛しの人心配したり、気に病んだりする必要なんて一切無いんですっ！」

七竈さんは、一生懸命に私を励まそうと言葉を尽くします。しかし、その言葉が続けば続くほどに、私の中にはある疑念が育ってきます。

まさか、とは思うのですが。もしかすると、有咲さんもまた、七竈さんと近い心理状況にあったとすれば。

私の事業をより円滑に、大きく成功させる為、侯爵家との縁作りは極めて有用です。つまり有咲さんと侯爵の婚約は、考えようによつては私の幸せにつながると言えます。

もしも、有咲さんがそう考えているのなら。七竈さんのように、私の為に、という理由でルーズヴェルト侯爵との婚約を決めたのなら。

突然、一人でルーズヴェルト侯爵に婚約を申し込んだことにも説明がついてしまいます。

そして、この説の信憑性もある程度は高いと言えます。

何しろほかならぬ私自身が、同じようなことをしているわけですから。有咲さんが幸せになるためであれば、私はあの子を、一人の

女性として見るわけにはいけません。誰か私以外の立派な男性と結ばれて、何の不安も無い人生を送るべきなのです。

そんな選択を、私自身がしているのですから。有咲さんもまた、自分よりも大切な人のことを優先して、本来選び得なかった選択をする可能性があるわけです。

それに気づいてしまうと、途端に足元が、全ての前提が崩れるような気がしてきます。私は有咲さんの幸せにつながると思って、今まで行動してきました。ですが、もしも有咲さんがやってきたことが私の為の選択だったとすれば。

私は今まで、ずっと私だけの為に行動していたのだと、そう言う他ありません。

途端、目の前が真っ暗になります。不快感と焦燥感を混ぜ込んだような、訳の分からない情動が脳裏を支配します。何も考えられない。ただ絶望が押し寄せてきます。

ともかく、出来ることがあるとすれば、一つ。
有咲さんの、真意を確認することです。

「ありがとうございます。七竈さん」

私は、まだ話している途中であった七竈さんを遮り、そう呟きます。

「お陰で、気付くことができました」

「え、あの、えっ？ どうされたんですか、愛しの人っ！」

一方的な感謝の言葉を告げ、私はその場を離れます。困惑する七竈さんを置いて、私は駆け出しました。

15 自分にとって一番

駆け足で魔道具店の方まで帰り、私は有咲さんを探します。

「有咲さんは、いますか？」

「有咲さんなら、今は自分の部屋にいらっしやいますよ」

ちょうど店に出ていたシャーリーさんが答えてくれました。私は有咲さんの部屋のある二階まで早足で向かい、扉をノックします。

「有咲さん。私です。少し、話したいことがあるのですが」

ノックの後、少しの間を置いてから返事が返ってきます。

「いいよ。入って」

許可も出たので、ドアを開いて有咲さんの部屋に入ります。中では有咲さんが待ち構えていたみたいに、椅子に座っていました。

「どうしたんだよ、おっさん。急にさ」

優しげに有咲さんは微笑んでいます。しかし、それがどこか悲しげにも見えます。

「質問がありました。有咲さんは、何故ルーズヴェルト侯爵と婚約

することに決めたのですか？」

「そんなの、そうしたいって思ったから」

「ですから、何故そう思ったのですか。理由を聞きたいのです」

私がしつこく問い詰めると、有咲さんは困ったように顔を顰めま
す。

それでもなお、私は理由を求めて質問を続けます。

「身勝手に自惚れ気味な予想にはなりますが、有咲さんは私の役に
立つからと、それだけの理由でルーズヴェルト侯爵と婚約すること
にしたのではありませんか？」

「そうじゃないし！」

「では、何故なのですか。突然、有咲さんが脈絡無く覚悟を決めた
ように私は思っています。ですから、その理由が知りたいのです。

何も分からないままでは、納得が、出来ません」

未練たらたら女々しい質問攻めですが、それでも確認しておか
なければなりません。その理由の部分が最も大事なことで、そして
今までなあなあで済ませてしまっていたことですから。

「アタシはただ、これが自分にとって一番だっと思って思ったから。理解
できたからやってんだよ。もう、ほっといてよ！」

幾らか悩むような表情を見せた後、有咲さんは悲痛な声で言い返
してきます。

「今さら何だよ。そんなこと聞いて何になるんだよ。じゃあおっさ
んは、アタシのことどうするつもりなんだよ。もしアタシが、嫌々
侯爵様と婚約してるんだったら、おっさんは何をしてくれるんだよ
！」

「それは」

「なんもしてくんないじゃん！ だったらなんも聞かないでよッ！」

ヒステリックに叫ぶ有咲さん。ですが、その言葉はもつともだと思いません。

今さら何を言おうが、どう思おうが何も変わりません。有咲さんは侯爵との婚約を選んだ。私は有咲さんを送り出すことを選んだ。

それでも、という思いと、同時に理性的なこれ以上の詮索はやめるべき、という考えが闘ぎ合い、言葉に悩み私は口を噤みます。

そこに被せるように、有咲さんは言います。

「ちゃんとさ、見送ってよ。アタシ、ちゃんとおっさんに大切にされてるんだって思いたいからさ。そうでなきゃ、さすがに、ちょっと嫌だよ」

ちょっと嫌だ、という言葉が出てきたことに私は驚きます。自分の気持ちを隠すみたいに、秘密主義的であった有咲さんが、そこだけは感情面をはっきりと口にしたのです。

それはつまり、言葉通り以上の気持ちが籠もっていることにもなります。

私は、自分の未練で有咲さんを質問攻めにして、挙げ句こうして悲しませている。

その事実を突きつけられたような気がして、一気に冷静になります。

「わかり、ました。それなら、もう何も聞きません」

「うん」

「私は、有咲さんの保護者です。保護者として、ちゃんと貴女を侯

爵の元に送り出します」
「うん」

みっともない真似をしている場合にはありません。そんな、自分本位の考えで有咲さんを傷つけている場合ではないんです。

やはり、私では駄目なのでしょう。この有様なのでですから、きつとどのようにあがいたところで有咲さんを傷つける。不幸にする。

だったら、大人しく見送りましょう。

心の内がどれだけ荒れていようと、平静を装いましょう。

それが、保護者としての私の努めです。

16 ありがとう

覚悟を決めてからの日々は、まるで古いフィルムを早回しで見ているかのようになり、どこか現実感の無いまま素早く通り過ぎていきました。

私はあくまでも親代わり。保護者なのだから。であれば、何をやるのか。

推測される、理屈で導き出される私の取るべき行動を、常に意識して行動し続けました。

何の未練も見せないように。どんな不満も明かさぬように。

異様な穏やかさを保ったまま過ぎ去る日々の中で、有咲さんもまたどこか演技めいた態度を徹底していました。

あくまでも、父親に甘える娘のように。これからの幸せな日々に期待する少女のように。

そんな有咲さんと、私は、お互いにお互いの心の内を見せないように、細心の注意を払いながら過ごしていました。

やがて、一ヶ月ほどの日々を過ごした頃には、私が保護者として用意すべき、婚約披露宴で有咲さんが身につける二つの贈り物が完成しました。

ローサさんに頼んだドレスは、華美な装飾こそ無いものの、決して地味というわけではなく、むしろ生地そのものが持つ真珠のよう

な七色の光を活かした素晴らしい出来のドレスでした。

そして、装飾品としてはアレスヴェルグの鱗から抽出された金属、アレシウムを加工して作り上げたエンブレムを首から下げないようにしたネックレスを用意しました。

シュリ君の検査の結果、アレシウムが人体には無害であると分かりました。魔力を弾く効果が発動する領域は水をはじめとする一部の物質により遮断されるそうです。なので、人体の内側の魔力に悪影響を及ぼすことはありません。

むしろ、咄嗟に飛んできた攻撃魔法等を弾く効果があり、護身用としての効果を発揮するぐらいだとか。

そんなアレシウムを、鎖の部分までふんだんに使ったネックレス。肝心のエンブレム部分は、沙羅の樹の花を模したデザインにしました。

沙羅の樹は仏教では若返りや復活を意味する樹とも伝えられており、何より平家物語の一節における沙羅双樹、つまり日本で沙羅の樹の代わりに植えられていた夏椿とは別物です。

私が有咲さんの名前に込めてしまった呪いを否定し反転させるような意味合いと、有咲さんの今後の壮健を願うての意匠として相応しいと思い、制作しました。

そして、さらに一ヶ月後。

ルーズヴェルト侯爵からのやりとりをした結果決まっていた、婚約披露宴の当日がやってきました。

貴族の披露宴としては急ピッチが過ぎるのですが、有咲さんが庶民であることを考えると、過度に準備をし過ぎて立派なものにするのも角が立つ為、ほどほどの準備期間と披露宴の内容を考えたと結果、

決まった日取りです。

わたしはそわそわ『しなから』、有咲さんの準備が済むのを待っていました。ドレスを着て、ネックレスを首に下げて、髪型までセツトし、化粧も施します。

一通りの身支度は侯爵が都合をつけてくださった、その道のプロが済ませてくれます。

なので私がやることは無く、有咲さんの部屋の前でうろつろと歩きながら待っているわけです。

やがて準備が終わったのか、有咲さんの部屋のドアが開きます。

「どうぞ、お入り下さい」

その道のプロの方がそう言って、有咲さんの部屋に招き入れてくれます。

私は部屋に入るとまず見えた、有咲さんの後ろ姿の時点で既に驚きました。美しいドレスと、髪を編み込みアップにした結果見える項。清楚さと、女性の魅力のどちらも引き立てるような姿に、つい息を飲みます。さすが、その道のプロの方です。

そして有咲さんがこちらを振り向くと、さらに驚き、言葉を失います。

編み込んだ髪を飾るようなヘッドドレスは、恐らくプロの方が準備してくれたものでしょう。それがネックレスやドレスともマッチしていて、違和感がありません。

そして化粧を施された有咲さんの顔立ちは、いつもよりも凛々しく、かつ愛らしく見えて、彼女自身の魅力が何倍にもなって引き出されているように感じます。

「どう、かな」

有咲さんが、緊張した面持ちでそう聞いてきます。私は慌てて、
答えを返します。

「綺麗ですよ。恐らく、今は貴女が世界で一番の美人です」

「あはは、さすがに褒めすぎだし」

そう言って、有咲さんは微笑みます。

「でも、ありがと。このドレスと、ネックレス。どちらも最高のプレゼントだよ。アタシ、今日のこと絶対に忘れない。一生大切に
するからね、雄一お兄ちゃん」

「そう言ってもらえると、頑張って用意した甲斐があるという
ものです」

私はそう言って、満足したように頷きます。

「じゃあ、行ってくるから」

「はい」

「見に来てね」

「はい」

そうして、有咲さんはその道のプロの方に手を引かれ、侯爵の用意した披露宴会場へと向かいます。店の前には侯爵が用意した馬車が停まってあり、それに乗って先に向かいます。

披露宴の招待状を受け取っている者は、また後で会場へと向かうこととなります。

それは昼過ぎ頃になるはず。なので、そろそろ私も準備をするべきでしょう。披露宴なのですから普段どおりの服装で向かうわけにはいかず、きちんとした礼服に身を包む必要があります。

当然、既に見て用意は済ませています。

なのに私はその後しばらく、ただ呆然と誰も使わなくなる部屋の中、立ち尽くすばかりでした。

そろそろ、披露宴会場の入場が始まる頃でしょうか。

私はそれでもまだ準備もせず、有咲さんの部屋にいました。これからもう必要なくなるであろう椅子に座って、部屋の中を呆然と眺めます。

思えば色々ありました。始まりは異世界に飛ばされてからでしょうか。いえ、正確にはもっと前。それこそ有咲さんが生まれた時からです。

姉に呼び出され、生まれた娘の名前を決めようという話になって。その頃の私はどうしようもなく捻くれた最低の男でした。

平家物語の一節から文字を取り、小さな命の灯火に有咲という名前をつけました。

その後は姪っ子と叔父として、有咲さんが小学生になった頃までは縁があったでしょうか。何のきっかけだったかまでは忘れましたが、確か私が大学を中退して、アルバイトを転々と始めた頃には姉の家を訪ねることは無くなりました。

まだ自分は若いとっていて。まだ自分には何か出来ると思っていて。そう考えているうちに日々は過ぎ、歳を取り、身体は部位毎にみつともなく萎れ膨れ、皮膚は栄養の偏りからか汚い色に変わっていききました。

もう自分が何者でもない存在なのだ、と気付くには、あまりにも

十分な変化でした。

いつしか自惚れは反転して、自分がどこまでも惨めに思えて、せめて小さなことでもいいから誰かの為になって死んでいきたいと、そんな思いを抱くようになって。

そしてあの日。夜勤明けのコンビニ前で、有咲さんと再会し、異世界へと飛ばされたのです。

今にして思えば、随分とあの時の自分は興奮していたように思います。何者でもなかったはずの自分にも出来ることが見え始めて、やれることをやると結果が付いてくる日々を過ごして。

自信を取り戻し始めた頃に、路頭に迷いかけていた有咲さんを保護して。

目まぐるしく変化する日々の中で、私を頼りにしてくれて、ずっと身近で親身になってくれた有咲さんを好ましく思い始めて。

そこから状況が拗れて、今に至るわけです。

冷静に考えれば、これで良かったのです。そもそも、私と有咲さんが男女の関係になるなどありえませんが、姪と叔父なのですから。そんなものは一時の気の迷いです。

私には有咲さんを幸せにできる甲斐性もありませんし。

これで、良かったのです。

「こんなところで何をしているのですか？」

不意に、声がかかりました。

部屋の入り口の方を見ると、そこにはマリアさんが立っていました

た。

「情けない話なのですが。有咲さんの晴れ姿を見るのが怖くて。足が動く気がしないんです」

「そのような有様で、保護者を気取ってきたつもりですか。情けないですね」

マリアさんは、やたら辛辣な言葉で私を攻め立ててきます。しかし、言われても仕方ないような状態であるのも確かです。

「仰るとおりです。自分が情けなくて、嫌になりますよ」

「だったら、どうにかするべきではありませんか？ 理由は考えましたか？ 原因は、私にははつきりしているように思えますけど」

「そう、ですね。理由は、確かに。誰に言われるまでもなく」

「有咲さんのことが好きなんでしょう？」

言われて、明確になります。

私は有咲さんが好きだ。愛しています。

多分、自分が理屈で理解している以上に、心で惹かれています。否定する気も置かないほどの、凶星でした。

「ですね。倫理的には、少々問題がありますが」

「そうですね。貴族であれば近親婚も普通にあることですし、大商人や高位の冒険者等も、稀ですが同じような話があります。一般的ではありませんけど、不自然ではありませんよ？」

「私の故郷では、ありえないことだったんです」

それを聞いたマリアさんはため息を吐きます。

「王都生まれでもないのに、王都に住みながら故郷の話をしますか

？ 思い出に浸るのも良いですが、今は現実的なことを考えて下さい。乙木様。貴方は今、王都の常識で言えば単なる裏切り者ですよ。自分の女を貴族に売った外道です」

「あはは。そうかもしれませんね」

「だったら、どうしてこんなところにいるのですか！」

マリアさんの怒鳴り声にも、私は強く言い返す気力は湧きませんでした。静かに、自分の中で整理した事実を語ってゆきます。

「これが一番、有咲さんの幸せの為ですから。ルーズヴェルト侯爵であれば、悪いようにはしないでしょうし。対して私はこの通り、格好良くもなければ甲斐性もありません。お金の問題は貴族であれば不満などありえないでしょうし、生活の安全面でも危険に首を突っ込んでいく可能性のある私の隣よりは断然いい。有咲さんの幸せを思えば、必然的にそうなります」

この発言に、マリアさんはため息を吐きます。

「はあ、何をそんなにいじけているのか知りませんが。女の子の幸せは、いつだって一番好きな人の隣にすることです。何故、それを叶えてあげないのですか」

「別にいじけているわけでは」

「いじけています。誰がどう見ても」

私の反論はピシヤリ、と言葉を重ねられて封じられてしまいました。

「何が気に入らないんですか。何がそんなに、怖いんですか。どうして、そんなにも当たり前前のことから顔をそむけて、逃げようとするんですか！」

言い返す、合理的な言葉が見つかりません。

「逃げているわけでは、ないのですが」

そう言いつつと、マリアさんはやねやね、といった風に首を振ります。

「有咲さんに、私は聞きました。どうしてこんなことをするのかと」

マリアさんは私に呆れた様子のまま、語り続けます。

「自分のスキルが教えてくれるから、と言っていましたよ」

「スキル、ですか。カルキュレーターですね」

「恐らくはそれでしょうね」

どうやら、有咲さんの選択はカルキュレーターの保証まであるようです。尚の事、私の出る幕は無いような気がしてきます。

「基地の視察の時に、有咲さんは乙木様と聖女様が互いに抱きあう姿を見たそうです。その時、全てが理解できたのだと」

言われて、気づきます。それは正に、何かがおかしくなった始まりの日のことでした。

「自分が居なくても、貴方にはいくらでも女性がいる。相手には困らない。そして自分が侯爵様のところへ嫁げば、貴方にとって最大の利益が得られる。だったら、自分は侯爵様を選ぶべきだと。それがベストであると言っていました」

「なぜですか。なぜ有咲さんは、私の利益なんかを」

「愛しているからでしょう」

マリアさんは私の言葉を聞いていられなかったのか、途中で呆れと僅かな怒りが滲む声で言い返してきました。

「有咲さんは、乙木様のことを愛していると。だから、乙木様が一番幸せでいることが自分にとっての一番の幸せなんだと。そう言っていましたよ」

ああ、なるほど。確かにそれは、納得できる理屈です。私自身がそんなことを言っただけで自分よりも有咲さんの幸せを考えようとしているのですから。

「ずっと、同じ答えが頭から離れなかったそうですよ。自分で自分を使って、貴方の夢を、目標を手伝う。そうやって貴方のためになることが、貴方のことを愛している自分にとっての一番の幸せなんだと。そうスキルが教えてくれると言っていましたよ」

「そう、ですか。カルキュレーターが導き出した答えなら、間違いはありませんね」

そう言った瞬間でした。

パァン！ と、私の頬がマリアさんの平手打ちで叩かれました。

「ふざけないでください。スキルによる幸せが、その人の一番の幸せになるとは限らないでしょう！ そんなこと、あるはずないでしょうが！」

「しかしカルキュレーターとはそういうスキルで」

「では、何ですか？ スキルを持たない人たちは幸せになれないのですか？ 答えを教えてもらえない人たちはいつも間違えて、いつも不幸で、いつも失敗ばかりしているのですか？ 違うでしょう。」

そんなものが無かったって、人は自分の幸せぐらい自分で考えて選ぶ

ことが出来ます」

理屈は分かります。しかしカルキュレイターとは女神に与えられた必ず答えを導く、スキルです。

と、そこまで考えて私は気づきません。

確かにカルキュレイターとは答えを導くスキルです。しかし、機能はあくまでもそれだけ。見たもの、聞いたものから推測される可能性、最も合理的な結論を導くものです。

なので、導き出された答えと自身の幸福の間で齟齬が生まれる可能性は十分にあるでしょう。見たもの、聞いたものから得た情報、つまりインプットが膨大で、自分で自分の気持ちを押し殺し、感情面でのインプットが最小限であったとしたら。

そこから導かれる答えが、自身の感情面での幸福を小さく見積もる可能性は否定できません。

そして、私にはその心当たりがあります。

有咲さんに好意を伝えられたあの日から。私は明らかに自分の気持ちに嘘を吐いてきました。そして有咲さんを拒絶して、拒絶し続けて、どこまでも彼女を受け入れはしないという態度を取り続けました。つまり、異常なインプットをカルキュレイターに入力し続けたのです。

旅の間もそれは続いて、それでもまだ有咲さんは諦めなかった。私のことが好きだと、ずっと伝え続けた。それも私は、否定し続けた。

そして最後に、三森さんとの一件を目撃し、とうとうカルキュレイターが導き出す答えも変わってしまった。

異常なインプットが続いた結果、とうとうカルキュレーターが導く答えも異常なものになってしまった。

そう考えれば。

もしもそうだとすれば、全ての状況に説明がつきます。突然有咲さんが態度を変えた理由も。有咲さんが自分の幸せよりも私の利益なんかを優先する理由も。全ては私が有咲さんを拒絶し続けたことから導かれた、最も合理的な結論に過ぎなかつたのです。

「ご理解いただけみたいですね」

安心した様子でマリアさんが呟きます。ずっと黙り込み、考え込む私を見てそう思ったのでしょう。実際、カルキュレーターというスキルを持つ欠点と、それにより発生する状況については理解できたので、その外れな見解ではありません。

「さて。では乙木様。最後に訊きます。貴方は、どうしますか？」

マリアさんは、いよいよ本題、と言った様子で切り出しました。

「愛する男性を幸せにしたいと本気で願って、全てを投げ売ってまで尽くしてくれる女の子が居ます。乙木様。貴方は彼女を幸せにしてあげますか。それとも不幸にするつもりですか。どっちなんです！」

突き付けるような、マリアさんの問い掛け。これに私は、まだ拭いきれない躊躇いを顔にして答えます。

「しかし私では、きっと間違えます。今回みたいに、これから何度でも」

「だったら、その都度反省して、やり直しましょう。それこそ今回みたいに、これから何度でも」

返す言葉もありません。正論そのもので、私の言葉が所詮逃げの科白に過ぎないのだと自覚させられます。

しかしそれでも、やはり私は自分を信じ切ることができません。

「ですが私には、その資格がありません。私は、あの子の名付け親なんです。あの子の名前に、到底まともな大人が思いつくとは思えない酷い意味を込めてしまったんです。そんな私には、あの子の隣に立つ権利があるとは思えないんです」

「名前、ですか。確かにそれが事実なら酷いことをしたのでしょうけれど。だったらなおさら、責任をとるべきではありませんか？」

悪いことをしたと思うなら、その分有咲さんを幸せにしてあげるべきでしょう?。」

確かに。理屈としては明らかにそちらの方が筋が通っています。有咲さんに悪いと思いつながら、私が選んだのは責任を取る道ではなく、責任から逃れる道だった。その負債を、誰か見知らぬ他人の力で帳消しにしようとしていました。

とうとう、理屈として私が逃げる理由の一切が潰されてしまいました。

私は静かに立ち上がり、呟きます。

「全く、その通りですね。私は有咲さんを、幸せにしてやりたい」「ええ。それが出来るのは貴方だけですよ、乙木様」

マリアさんは、私を慰めるように抱き締めてくれます。

「つらく当たるような言い方をして、ごめんなさいね。でも、このままで良いとは思えませんでしたもの。それに、乙木様が迷っているのは明らかでしたから」

「迷い、ですか」

「ええ。貴方は、自信に溢れる男性のような振る舞いこそしていますが、どこか違和感がありました。自信というよりは、やけっぱち。そんな貴方が、旅から帰ってきて萎縮している姿を見て、確信しました」

マリアさんは、私が自分でさえ意識していなかった私の内面について言い当ててきます。

「乙木様。貴方は自分のことを、何の価値も無いと思っている。そうですね?」

頷くほかありません。

「はい」

全くもってそのとおり。反論の言葉など思いつく気すらしません。

「自分に価値が無いと思うから、失敗が怖くない。だから、何でも挑戦できる。命の危険がある冒険者だって、成功するかどうか分からない魔道具店だってできる。でも、そこにあるのは自信じゃない。まったく逆で、自分に何にも価値がなくて、自分が空っぽで、だから失うものが無いから何でもできる。そして何でもできる気になっているからこそ、自分に価値が無いことが認められない。証明したくて、あがいて、誰かに認められたくて、やけっぱちの出たとこ勝負で生きている」

「あはは。言われてみると、とても当てはまっっていてびっくりします」

「でしょう? 貴方のような人は、昔、よく見ていましたもの」

そこまで言うと、マリアさんは私から離れ、背後にまわります。

そしてバン、と背中を叩いて押してきました。

「ですから、どうすればその気になってもらえるのかもよく分かっています。重々承知しておりますとも」

そう言った後、マリアさんは優しい声色で、私の背中を撫でながら告げます。

「価値があるとか無いとか、そんなことは私には分かりません。貴方の悩みに対して、私が答えてあげることなんて出来ません」

どこか突き放すような言葉。ですが、それはすんなりと私の心に染み入ってきます。

「ですが、私が貴方のやること全てを受け止めます。どんなことをする貴方でも、どんなに間違えたり、失敗したりする貴方でも、私がここで待っています」

私の中の不安が、マリアさんの言葉を聞くほどに薄れていくのを感じます。

「だから、行ってらっしゃい。まずは貴方がやりたいと思うことを、全力でやってきなさい」

そこまで言ってもらえたことで、ようやく覚悟が決まりました。

「ありがとうございます、ございます。マリアさんのお陰で決心ができました」「どうするおつもりですか？」

「有咲さんのところへ。後は、まあ、出たところ勝負です。何にも考えなくてもいいです」

「ふふっ。それでいいんです。行ってらっしゃい」

バン、とまた背中を叩かれました。今度は気付けというよりも、送り出すようなニュアンスでしょうか。

ここまでしてもらったのですから、行かないわけにもいきません。

「では、行ってきます」

「ええ」

私はマリアさんに背中を押され、そのまま咲さんの部屋を抜け出します。

そして、婚約披露宴の会場へと向かって駆け出しました。

会場に向かう道中、私は走りながら考えます。

どうして自分が、こんな馬鹿なことをしたのか。

どうして自分は、誰がどう考えても二人揃って不幸になるだけの道を選んでしまったのか。

それは恐らく、自分を支配してきた無力感が原因なのでしょう。

若い頃の私は、自分を特別だと思っていました。人より優れていて、まわりの奴らはみんな馬鹿で。自分だけが何かすごいことに気づいているような、そんな気がしていました。

けれどそれは間違いだった。勘違いに過ぎず、気がつくとも何も成し遂げることなく歳を重ねていました。

あの頃馬鹿だともっていたクラスメイト達は結婚して家庭を持ち、平凡だと思っていた大学時代の友人は大手企業や地元で就職して。

一方で私は、何でもない、誰にでも出来るアルバイトでその日暮らしを続けていて。

いつしか正体の無い無敵感は裏返し、漠然とした無力感を抱くようになって。

自分は所詮こんなものだ、と自分で自分を諦めてきました。

そうやって私は、今の自分の価値観を形成してきました。

けれどそんなものはもう、捨ててしましましょう。

有咲さんを幸せにするためなら。最後まで間違え続けたり、諦め続けたりしないためなら。この身体を支配する無力感から卒業して、少年時代に戻りましょう。

いつからか抱くようになった、自分こそ特別だと思うようになるよりもっと前に。毎日が冒険で、驚きと発見に満ちあふれていたあの時代に。

そして何より、自分が一番素直で、気持ちに正直で、間違えば反省して、学んで、成長していたあの頃に。

私は駆けながら、周囲に視線を向けます。ちらり、ちらりと道の脇に立ち並ぶ家々や店の数々、人々の表情に視線を向けます。

彼らに負けているわけでもなく。彼らを馬鹿にするわけでもなく。笑っている人はなぜ笑っているのか気になって。見たこと無いものを並べる店には入ってみたくて。どんな人が住んでいるんだろうと。玄関先から想像して。

そんなことをしていた頃を思い出しながら、少しずつ、進んでいきます。

とはいえ、私の身体能力はステータスの影響によりかなり高くなっているのです。婚約披露宴の会場までは一度も足を止めることなく到着しました。

披露宴の会場は、王都内にある大聖堂、国教となっている宗教団体の施設を使わせてもらうことになっているようです。

そこで司祭様に祝福の言葉を賜り、婚約したことを神に宣誓するわけです。

出来るなら、私はその前に割り込まなければなりません。

大聖堂の入り口は、複数の騎士らしき姿の人たちが囲み、警護していました。装備がマルクリー又さん等王国の騎士のものとは違うので、恐らくは教会に所属する騎士なのでしょう。

無理やり入ろうとすれば、彼らと戦いになってしまいます。しかし、罪のない騎士を傷つけるのは本意ではありません。

そしてどこか他に入り口は無いか、と大聖堂を観察していると、三階か四階ぐらいの高さにある採光用の窓が開いていることに気づきます。

ここから侵入することにしましょう。

「あ、おい！ 貴様なにをしている！」

私が窓まで飛び上がり、侵入しようとしていることに騎士達は気が付き、声を上げます。

しかし、もう手遅れ。私は窓を潜って大聖堂の内部への侵入に成功します。

タイミング的には、ちょうど司祭様が祝福の言葉をつらつらと述べ始めたところの様子です。一冊の本を手に、何やら唱えるように朗々と語っています。

私は、一刻も早く割り込みたいという気持ちが勝っていました。

「有咲アアアアアッ！」

窓から侵入してすぐの、手すりから身を乗り出して叫びます。

次の瞬間、披露宴の参加者全員の顔がこちらを向きます。見知った顔以上に、見知らぬ顔が立ち並んでいます。

彼らは様々な感情を顔に浮かべていました。驚き、喜び、疑い、嫌悪、と様々な感情を向けられながらも、私はもう一度叫びます！

「有咲！」

その呼びかけに、有咲は混乱している様子でした。隣にはルーズヴェルト侯爵が立っています。何を考えているのかは読めませんが、少なくとも怒りのような感情は読み取れません。

やがて有咲は何度か周囲の人々の様子を確認したあと、こちらに向かって叫び返してきます。

「雄一お兄ちゃああああんツ！」

「有咲ア！」

私は呼びかけに答えるようにまた名前を呼んで、そして聖堂のど真ん中に飛び降ります。披露宴参加者のざわつく声が、私から逃げような悲鳴混じりになり、そしてすぐに静かになります。

まるで私の様子を伺うように、周囲の人々が距離を空けます。

そして対称的に、ルーズヴェルト侯爵だけが前に歩み出て、私と有咲の間に立ちます。

「これはどういつつもりかな、乙木殿」

「この婚約に、異議を唱えに来ました」

その言葉を発した瞬間、周囲がまたざわつきはじめます。

21 決闘に勝てば

「乙木殿は、どのような理由があつて異議を申し立てるつもりなのかな？」

「有咲は、俺の女です」

その言葉を、躊躇うことなく口にしました。

すると途端に有咲は感極まった様子で涙を流します。

一方で、怒るか苦言を呈するかと思われたルーズヴェルト侯爵は、なぜかニヤリと笑います。

「そうかそうか、それは困ってしまつた。どうすれば良いかな？」

どこか演技めいた仕草をしながら、周囲の披露宴出席者に視線を送ります。

そして、その直後です。

「この物言い、俺が預かりましょう！」

人々の中から手を挙げ、名乗り出た人物がいました。

そちらに視線を向けると、なんとそこには金浜君が居ました。

「侯爵の婚約に口出しするなどという暴挙、これは前代未聞の事件です。普通なら上手くいくはありますがありません。しかし！」

金浜君もまた、ルーズヴェルト侯爵と同様に演技めいた仕草で周囲に語りかけます。

「こちらの男性、乙木雄一さんはそれでも愛する女性の為に現れた！ その勇氣に敬意を表して、ルーンガルド王国の勇者として一つの提案があります！」

そして、金浜君は腰に下げていた剣を抜いて掲げます。

「この俺、勇者金浜蚩一は貴方に決闘を申し込む！」

宣言と同時に、周囲から今までと色の違った声が湧き上がり、ざわめきだします。

「もしも俺との決闘に勝てば、この婚約への物言いを勇者金浜蚩一、そして彼女、教会も認める聖女である三森沙織、二人の名で認めましょう！」

その言葉と同時に、人の壁の合間から三森さんまで姿を表し、金浜君の隣に立ちます。

「どうぞしよう、ルーズヴェルトさん。この提案を受けていただけますか？」

「ふむ。我が国が誇る勇者殿、そして聖女殿まで言うのであればしかたない！」

仕方ない、といいつつも、ルーズヴェルト侯爵は全く悔しがる様子も無く言います。

そしてパン、と一度手を叩き、人々に向けて語りかけます。

「それでは皆さん。婚約披露宴は一時中断。これから勇者殿の決闘を行う！ 場所は既に教会騎士団の訓練場を借りてあるので、こちらに移動となる。案内の者も準備してあるので、速やかに移動して頂きたい！」

そして、ルーズヴェルト侯爵の言葉が続く毎に、周囲の人々は安心した様子で口々に会話を繰り広げます。これはそもそも、こういう催事であったのだ、と。私が登場した時とは一転して、緩い雰囲気です。全員が大聖堂から移動していきます。

取り残されたのは、私と、ルーズヴェルト侯爵、金浜君に三森さん、そして有咲の五人だけです。

私と有咲の二人が啞然としていると、ルーズヴェルト侯爵が私に向かって話しかけてきます。

「これは貸しだぞ、乙木殿？」

「あの、事情が飲み込みめないのですが」

「それは、俺が説明しますよ」

そう言って、侯爵に説明を代わってくれたのは金浜君です。

「お二人が無理をしていたというか、変に意地を張っていたのは見てはつきりと分かったんで、ルーズヴェルトさんに相談したんですよ。もしたら、ルーズヴェルトさんとしてもちよっと困ってみたいで」

「正直、あのまま婚約の話が進んだとしても厄介事を抱え込む気しかなかったのですね。元々は私から提案した話である以上は無下にも出来ない。乙木殿との関係も悪化しかねない。そうなれば、そも

その婚約の提案をした理由が無意味になってしまっただろう？　だから勇者殿の提案に乗ることにしたのだよ」

そう言って、ルーズヴェルト侯爵は少しだけ楽しげに語ります。

「ざつくりと言えば、乙木さんの知り合いに当たって、乙木さんに発破をかけてもらいました。で、今日ここに乱入してもらえるよう誘導したんですよ。とは言っても、上手くいくかはわかりませんでしたから、どっちに転んでもいいように準備してたんですが」

「ははは！　まあこの通り、万事うまく行ったというわけだ！」

楽しげな笑い声を挙げ、ルーズヴェルト侯爵がさらに続けます。

「お陰で婚約もしなくて済むし、乙木殿には貸しを作れた。勇者殿に聖女殿との縁も作れた上に、この催事で私の派閥がどれだけの力を持っているか他の派閥の奴らに見せつけることも出来る。良いことづくめで笑いが止まらないな！　ふははは！」

その言葉から察するに、どうやら侯爵は本気でこの婚約に乗り気ではなかったということですね。

ようやく状況が理解できてきたので、私は口を開きます。

「つまり、すべて掌の上であったということですか」

「まあ、そうとも言えますね。でも、あくまでも俺たちがやったこととはここまでですから。この後、もしも乙木さんが決闘で負けるようなことがあれば元の木阿弥ってやつですよ」

金浜君は、そう言ってからどこか挑戦的な視線をこちらに向けてきます。

「とうわけなんで、乙木さん。全力で戦って下さいね。俺も、殺さない程度には全力でやるので」

「なるほど。高い障害を乗り越えてみせろ、と」

「あはは。まあ、これは半分は俺の楽しみみたいなものですけどね。最近陽太以外でまともにやりあえる人も居なかつたんで。四天王を短時間で撃退した乙木さんの実力、見せてもらいますよ」

言って、金浜君は手を差し出してきます。

「それじゃあ、お互いにベストを尽くしましょう！」

私は差し出された手を握り返し、頷きます。

「ええ。どうやら、私が有咲を手に入れる為に必要なことのようにですの」

そうして握手を交わします。

22 勇者対おっさん

私は侯爵の用意してくださった案内役の方に従って大聖堂から移動し、教会騎士団の訓練場に向かいます。一応、体裁として私は乱入者なので四人とは引き離されたわけです。

そして暫くの待機時間を訓練場で待った後、いよいよ金浜君も入場してきます。

先程までは普段どおりのお人好しな好青年、といった印象でしたが、今は違います。これから行われる戦いに集中しているのか、雑念の無さそうな研ぎ澄まされた表情を浮かべています。

「あー、あー。長らくお待ちでした。これから勇者金浜蚩一殿と乙木雄一殿の決闘を執り行う！」

そして、ルーズヴェルト侯爵の声が何らかの魔法で拡声されて訓練場に響き渡ります。

「ルールは簡単。相手にこれは負けた、と思わせるような攻撃をすれば勝ちだ。ただし、殺生は禁ずる。全ては寸止めか、武器破壊等による無力化の範疇に収めてもらおう」

このルールだと、お互いに制御が難しいスキルや魔法を使うわけにはいきませんので、使える手札は限られてきます。

とはいえ条件が同じである以上、ルールとしては公平と言えるで

しょう。

「そして、決闘は聖女殿による結界の範囲内で行ってもらおう。万が一、二人の攻撃が逸れたとしても、それが観客の皆さんを襲うようなことは無いので安心して頂きたい」

侯爵に紹介され、三森さんは一度お辞儀をしてみせます。

清楚な仕草ではありますが、一方で鼻にワインコルクのような栓を詰めているため格好がつきません。おそらくは私の体臭で気をやっつけてしまわないための対策なのでしょうが、それを知らない人々が口々に、なぜ聖女様は鼻栓を？ と話を繰り広げています。

「最後に！ 今回の決闘はあくまでも婚約への異議申し立てを認める為のものである。乙木殿が勝利した場合はそれが認められ、勇者殿が勝利した場合は認められない。それ以上の意味は持たないため、どのような決着に落ち着いたとしても、妙は勘ぐりなどしないようにして頂きたい」

これは、恐らく多種多様な懸念への保険の言葉でしょう。この宣言により、この決闘が勇者、つまり金浜君による私の査定的な意味合いを持つことになります。例えば私が勝ったから勇者の実力が低いというわけにはならず、逆に私が負けたとしても、それは侯爵側の想定の内であり、後に尾を引くような怨恨などは生まれないと明言したことにもなります。

つまりは、これはイベントの一貫であると。そう告げることでよって、どこまでも話を軽くしたわけです。

これが無いと、後日私がルーズヴェルト侯爵の派閥に属する貴族に因縁をつけられかねませんからね。後腐れなくするためには必要な宣言です。

「それでは、始めえッ！」

そしていよいよ、侯爵により決闘の開始の合図が出ました。

既に臨戦態勢にあつた金浜君は、剣を構えたまま駆け寄ってきてます。

私はそれに応じて、あるスキルを発動します。

すると、金浜君は距離を詰める途中で足を止めます。

「これは、とんでもないですね。一応、耐性系スキルは勇者スキルの内に沢山含まれているんで、デバフの類はほとんど効かないはずなんです」

「ゴブリンなら一割でも即死する威力のデバフですので」

私と金浜君は、そのような言葉の応酬をします。

私が使ったスキルは『災禍』であり、四天王のアレスヴェルグでさえ一瞬で無効化したものです。

今回はその時を超える、ほぼ全開で金浜君に効果を及ぼしたのですが、どうやら身動きが取れないということは無い様子。改めて、勇者という存在のチートぶりが伺い知れます。

一応、殺すようなことが無いように身体能力の低下に絞って少しずつ効果を発動したのですが、もしも殺す方向性で呪いと疫病を付与したところで抵抗されて無意味となる気しありません。

むしろ、いくらか身体能力を削れている様子なので、効果をデバフの方向性に絞って発動させた今の状況の方が結果的に良かったのかも知れません。

ちなみに、ゴブリンに使った場合は心臓を動かす筋力すら維持できないほどのデバフになるのでどちらにせよ即死です。

「さて、こちらも獲物を用意しなければいけませんね」

私は金浜君が足を止めたこのタイミングで、戦う準備をする為に『瘴気』と『詛泥』のスキルを発動します。

そして周囲を漂う黒い霧の中から、武器となるものを取り出します。ダークマターで構築された、カランビットと呼ばれる種類のナイフです。

ただし、刃の部分をTの字に近い鎌のような形にしてあり、通常のナイフとは違い複数方向に振りかぶってそのまま突き刺したり、切り裂いたりすることが出来るようにしてあります。

正直、私は剣術などの戦闘技術を学んできたわけではありませんので、こういった合理的な形をした武器を使うことでその辺りの差を埋める必要があります。

一応、こういった特殊な形状の武器の練習は多少ならしてあるのですが。本格的に王城で剣術などの戦闘技術を学んだ金浜君にどこまで通用するかは分かりません。

「では、次は私から行きましょう！」

そして、今度は私が金浜君に攻撃する番です。

23 変幻自在のおっさん

私は生み出したばかりのナイフを構えます。それを見て、金浜君もまた警戒するように剣を構えます。

「ナイフですか。悪いとまでは言いませんが、おすすめはしませんよ」
「それは、戦ってみれば分かるかと」

不敵な発言をする金浜君と、それに誤魔化すような言葉を返す私。次の瞬間、私は攻撃を開始します。

周囲に展開した詛泥と瘴気の霧の中に、ダークマター製の小さな筒を生成。片方が閉じて、もう片方は開放されている形のもので。そして更に、このなかにびっちり詛泥を詰め、さらに先端部分には針状に形成したダークマターを生成し、筒を完全に密閉します。

そして密閉された筒の中で、隙間なく詰まった詛泥の中に、密閉された空間と同じ大きさの円柱状のダークマターを急速的に生成。瞬間的に内部の圧力が増し、水鉄砲や吹き矢に近い要領で先端の針状ダークマターが射出されます。

当然、その矛先は金浜君の方向を向いています。命まではとらないよう、足を狙ったの射撃です。

霧の中からの、ほぼ不可視の攻撃です。まともな相手であれば、

発射されたことにも気づかずに足をやられているはずですよ。
しかし私の攻撃は、発動すると同時に金浜君に回避されてしまいました。

「不意打ちですか。怖いことしますね」

「避けておきながら言いますか」

「ええ。俺のスキルには、未来予知みたいなものも含まれてるんで」

つくづく、勇者のスキルは桁外れな性能を持っているのだと実感してしまいます。

「では、これならどうでしょう？」

続いて、私が攻撃します。

詛泥の中に生み出した、名付けるならばダークマターフレッシュト。これを無数に並べ、金浜君を取り囲むように配置します。そして次々と射撃しては収納、そしてまた形成しては射撃、と飽和攻撃に入ります。

「これは、なかなかの破壊力だ！」

言いながら、しかし金浜君は無事です。

地に剣を突き立て、魔力を流しているのか、光の膜のようなものが発生しています。それがダークマターの針を弾くことで、全ての攻撃が無効化されています。

しかし、威力的に厳しいものもあるのか、金浜君は苦笑いを浮かべています。

「では、お返しです！」

そして、次は金浜君の攻撃です。右手は剣を握り、地面に突き立てたまま、左手をこちらに向けまます。

「シャイニングレイツ！」

それが、勇者が持つ光属性の魔法であると、直感的に理解できませんでした。

私が咄嗟にその場を横に飛び退くと、ちょうど私を狙った軌道で光が通り過ぎていきます。横から見える、ということはレーザーというよりはビームに近い魔法なのでしょう。

どちらにせよ、発射を見てから回避することは不可能な速度です。手を向けられた時点で回避しなければ、直撃必至でしょう。

状況的に、このままだと私だけがリスクを背負って金浜君の攻撃を回避し続けなければなりません。なので、光の膜を破壊するなり何なりで、どうにか金浜君に攻撃を届かせる必要があります。

そこで私が選んだのは、前進です。剣を突き立てたままの金浜君に向かって、ナイフを構えたまま攻撃に向かいます。

「なるほどー！」

金浜君は焦る様子も無く、私を待ち構えています。むしろ、望むところといった様子でしょうか。

とはいえ攻めに出るべきであるのは変わりません。私はナイフを振りかぶり、金浜君へと接近します。

寸止めするつもりで振るったナイフは、しかし金浜君には当たりません。すつと自然な動きで身を振り、軌道から回避する金浜君。さらには、そのまま空いている方の手で私の手首を掴んできます。

そして、まるで柔道の技でも掛けられたみたいに、私は投げ飛ば

されます。

どうやら金浜君は体術も習得しているようです。

とまあ、やられたい放題に見えますが、そういうわけでもありません。

「くっ、搦め手ばかり、もう！」

金浜君は言って、顔を歪めます。

実は攻撃に使った方の手は、しっかりと災禍、瘴気、詛泥のスキルを駆使して毒手のような状態にしております。

いくら耐性があるとは言え、辛いでしょう。触れるだけでダメージを負ったのか、手は赤く腫れています。

そして、この一連の流れで金浜君の未来予知系スキルのおおよその性能にも見当がつかしました。

おそらくは、己の身に危険が及ぶ可能性のあるシーンだけが見えるようなスキルなのでしょう。

明確にどのような手段でどのような攻撃を受けるのか分かっていたら、私の手首を持って投げるようなことはしなかったはずです。

恐らくは私がナイフを振りかぶって攻撃する姿だけを事前に知ることが出来た。だから投げ飛ばして回避したものの、実際の危険はナイフではなく手首そのものにあった為、未来予知でダメージを回避すること自体は出来なかった。

つまり、上手く攻撃手段を偽装することが出来れば、金浜君にダメージを与えることは可能だというわけです。

24 決着？

私は勝利を得る為に、いよいよ決着をつける為の攻撃に入ります。手の腫れ、痛みによる怯みを金浜君が見せたため、一気に勝負を決めにかかります。金浜君も当然それに気づいて、即座に対応。守り、受けの体勢から攻めに転換。搦め手により徐々にダメージを受けていく前に勝負を決するつもりなのでしょう。

地面に刺していた剣を抜き、構えた金浜君が間合いを詰めてきます。当然、光の膜による防御が無くなったのでダークマターフレシエットは金浜君に当たり始めます。が、金浜君自身もまた光のようなものを纏っている為、それに阻害されて針が刺さる様子はありません。

とは言えダメージがあるのか消耗が激しいのか、金浜君は苦々しい表情を一瞬浮かべました。

ここが攻め時だ、と私は考え、さらにスキルを発動します。

それは、今まで幾度となくお世話になってきた『加齢臭』のスキルです。複数のスキルの効果により発展した『瘴気』とは異なり、これは単なる異臭を発するスキル。

しかし、戦闘中に突如異常なレベルの臭気を感じた場合、人はどう反応するのか。

その答えが、現在の金浜君です。違和感の余り、一瞬動きが鈍ります。冴えた剣技も、異臭によって反射的に身体が硬直してしまえ

ば普段どおりとはいきません。

そしてこの『加齢臭』は毒でもなければ呪いでもない。ただびっくりするほど臭いだけのスキルです。

その為、恐らくですが金浜君の未来予知系スキルに把握されることも無かったと考えられます。

予知により感知できない、何らかの攻撃としか思えないほどの異臭。そんな事態に陥った金浜君は、あまりにも大きすぎる隙を晒しました。

当然、それを見逃す私ではありません。

ダークマター製のカラビットナイフに唾を吐き、付着させてから金浜君に攻撃します。当然、反応して金浜君は攻撃を剣で受け止めます。

それと同時に、私は複数のスキルを発動。

最初に発動したスキルは『発光』。眼球から魔力を込めて強い光を放ちます。これもまた攻撃性のあるものでは無いため、金浜君の未来予知系スキルでは反応出来なかったことでしょう。

次に発動したのは『保湿』。私がナイフにつけた唾の周囲の空気を強烈に保湿することで、水分を確保しようとする反応が働き、唾が乾燥します。

そして、この唾が実はそもそも『粘着液』のスキルによって発生させた、乾燥すると強固に固まる唾だったわけです。

特に意識しなければ、せいぜいコンクリ程度の堅さにしかありませんが、今回は出来る限り頑丈に固まってくれするように意識して吐き出した唾です。

これが固まることによって、完全に金浜君の剣と私のナイフが接着してしまいます。

当然、金浜君は発光により目を潰されているため、また未来予知系スキルによる感知も唾が乾いただけのことなど対象外でしょう。そんな状態で、私がナイフを力強く引くとどうなるか。

本来、金浜君は私のナイフを受け止める為に剣を構えたわけですから、金浜君の側から私に向かって腕や踏み込みの力が働いていません。

そこから虚を突かれる為、一瞬姿勢を崩されます。

当然、反射的に金浜君は体勢が崩れないように踏ん張ろうとするわけですが、ここで剣とナイフが接着されている為に、予想外の方向に力が加わります。

予想外が二重に重なった結果、金浜君は体勢を崩し、私の胸の内に向かって倒れ込んでいきます。

ここでようやく私は、攻撃に使うためのスキルを発動。当然、金浜君は未来予知スキルで何が起こるか察知した様子ですが、もう手遅れ。既に体勢が崩れきり、距離も詰まっている為、せいぜい防御の為に身体強化系の魔法等を発動するぐらいしか出来ません。

そんな状況下で、私が発動したスキル。

その名前は『自爆』です。

ここが正念場であると考えた私は、私に耐えられる限りの最大限の威力で『自爆』スキルを発動します。

それこそ、この自傷ダメージによりこれ以上の戦闘など不可能なぐらいの威力です。

私のステータスが高いからこそ、その威力は必然的に高まり、強烈な爆破の衝撃が私と、金浜君を同時に襲います。

また、爆発により地面の砂が巻き上がり、煙が立ち込め、三森さ

んが張つてくれている結界内部は完全に視界が通らない状態へと陥ってしまいました。

そんな中、既に自爆による自傷ダメージであちこち傷だらけ、血を流している状態の私の首に。

ぴとり。鋭い刃物が触れる感覚がありました。

「これで俺の勝ちです」

そう呟いたのは、金浜君です。

25 まるで将棋

私の首に剣を添えたまま、金浜君は言います。

「どうします？ さすがに本当に俺が勝っちゃつと問題があるので、ヤラセとかで決着を付けるのもアリかと思っんですが」
「そうですね。そうしてくれるとありがたいとおもっていますが、うーん」

私はそんなことを言いながら、露骨なぐらいわざと時間を稼ぎます。

「しかし、金浜君。少し勘違いをしていませんか？」
「え？」

「これは殺し合いではなく決闘です。見届人、そして観客の皆さんが見えていない今、決着はまだついていませんよ」

「まあ、それはそうですね、土煙が収まったらさすがに俺の勝ちですよ」

「ええ。このまま何事も無く終わるのであれば」

そこまで言って、ようやく私の最後の一手の準備が終わりました。次の瞬間、私は最後のスキルを発動します。

私の自傷ダメージによる負傷。それにより飛び散った血液。これらの中にほんの一滴混ぜた詛泥。場を球状に覆う三森さんの結界。

そこにまで付着した、私の血液たち。

これらの要素。そして土煙の中を辛うじて真っ直ぐ進むことの出
来た、わずかな光のみを見逃さず見ることの出来る非常によく成長
した『夜目』のスキル。それにより完全に把握できた位置関係。金
浜君の立ち位置。私の立ち位置。そして血液の付着した場所。

全てを把握することで出来る、最後の一手。

私は、それらの血液を対象に『鉄血』を発動。わずかに含まれる
詛泥のお陰で、飛び散った後の血液まで私の身体の一部と接触して
いると判定され、鉄血スキルが発動可能に。

そして生み出したのは、ダークマターフレッシュトとほぼ同じ構
造の物体。ただし素材はオリハルコン製。血液の一部を包むように
して筒を生成。筒の後端は杭のような構造にして、土や結界に突き
刺さって抜けないように。筒の開放された前端を塞ぐ針と血液の間
を直接オリハルコンの糸でつないだ状態に。

そして、筒に包まれた血液を『自爆』スキルで爆発させます。

オリハルコンフレッシュトから針が飛び出し、金浜君に当たらな
いギリギリの範囲を無数に飛び交います。金浜君には危険が迫って
いないので、感知は出来ていないはずです。

そして、オリハルコンの針にはオリハルコンの糸がつながってお
り、これは筒の内部に付着した血液から伸びています。

結果、金浜君の身体は無数の糸によって包囲されてしまう結果と
なりました。

「これは、何をしたんですか？」

「大したことは。金浜君を傷つけることなど到底できないような、
ただの頑丈な糸で周囲を包囲させていただきました」

その結果、どうなるか。

私は次の瞬間、素早く後方に飛び退きつつ小規模な『自爆』を腹部で発動し、その衝撃も利用して距離をとります。

当然、これを追いかけるために金浜君は勢いよく、強く踏み込んで前に出ます。

すると張り詰めたオリハルコンの糸が引っ張られ、結果として杭のように周囲に突き刺さっていた筒と針、それぞれもまた引っ張られます。

張力が限界に達すると、針や筒は地面や結界から引っっこ抜けます。

そして無数の糸は金浜君の身体を支点に引っ張られた結果、両端の重りとなつているオリハルコン製の針と筒が、別々の方向に回転するように動き、糸と糸が次々と絡まっていきます。

結果、金浜君は自身を傷つけるはずもないオリハルコンの糸により、身体をあちこちを絡め取られてしまいます。

「くっ、でもッ！」

「させません！」

金浜君は瞬時に状況を悟り、オリハルコンの糸を切断しようと不自由な身体を上手く使い剣を振り上げます。

ですが、当然これもまた予想済みです。

瞬時に私は『詛泥』と『瘴気』を発動。金浜君の周囲を包むことでオリハルコンの糸は汚染され、ダークマターに変貌。そして詛泥と触れ合うことにより『鉄血』スキルの効果で形状を変化。よりたく頑丈な糸にすることで、金浜君の剣では切断することが難しくなります。

当然、一太刀で数本の糸は切断されてしまいますが、それはご愛嬌。残った糸が太くなり、スキルの効果で端から収納していくことで張力も強めて、より強く雁字搦めにします。

結果、金浜君は完全にダークマター製の鉄線により拘束されることとなってしまいました。

「なるほど、この状況をずっと作ろうとしていたわけですか」

金浜君は納得したように呟きます。

「どうでしょう。逃げられますか？」

「正直に言えば、どうとでも。ですが、余波で沙織の結界まで破壊するか、国から貰った希少な魔道具を使い潰す必要があります。どちらも決闘でやれる手段じゃありませんね」

「でしょうね。常識のある、善意に溢れ性格の良い金浜君なら、そう判断してくれると踏んでいました。なりふりかまわず勝ちにくる可能性は低かった。ですから、こうして状況、決闘の動機まで計算した搦め手を使わせていただいたわけですよ」

私かなぜこうしたのかを説明すると、金浜君は愉快そうに笑いしました。

「はは、それはまた、すごいですね。まるで将棋やチェスみたいだ。使える駒を使って、攻め手一つ一つで相手をコントロールして、盤面を支配して最後の最後に自分の勝ちまで持っていく。最初から、乙木さんはこういう勝ち方をするつもりでいたわけですか」

「ええ、まあ一応」

私と金浜君がそうこう言っているうちに、次第に土煙は収まって

いきます。

結界内部の様子が、誰の目にも明らかになっていきます。

私は体中傷だらけながら立っていて、そして金浜君は無傷ながらダークマターの鉄線に絡め取られ、身動きが取れないでいる。

そんな金浜君に近寄りながら、新たにもう一本のカラーンビットナイフを生成し、金浜君に突きつけます。

「これで、私の勝ちです」

「はは、参りました」

私と金浜君が宣言すると、見届人であるルーズヴェルト侯爵の聲が響きます。

「勝者は、この決闘の勝者はッ！ まさかの事態！ 我が国の勇者を拘束し、ボロボロになりながらも一本を取った男！ 乙木雄一殿だああああああッ！」

魔法で拡声された声が訓練場全体に響き渡り、その後に観客の皆さんの歓声が湧き上がります。

それを聞いて、私は無事決闘に勝つただ、と自覚することが出来ました。

26 本当の決着

決闘の結果が侯爵により宣言されたため、三森さんの結界が解除されます。

そして侯爵が私の方に歩み寄ってきました。

「どうだったかな、乙木殿。勇者殿と戦った感想は」
「ええ、手強い相手でした」

恐らく勝者インタビューのようなものなのでしょう。これをパフォーマンスの一環だと周囲にアピールするために。また、私がわざわざこの状況で決着させた目的を果たすために、感想を語っていきます。

「どうしても勝ちたい。勝つ必要がある試合でしたので、私が使え
るものの全てを使って、この通り全力でもって挑ませていただきま
した。あくまで決闘、試合に近い形式ということですので、その形
で勇者殿に参ったと言わせる。それだけを狙って、どうにか実現で
きた形ですね」

私が語るほどに、言葉は拡声の魔法で周囲に伝達されます。これ
により、観客の皆さんが驚きと感心の声を次々と挙げていきます。

実際は、私は見た目ほど消耗はしていません。自爆による自傷な
ので、そもそも回復魔法さえあればすぐに治ります。そして魔力も
体力も潤沢に残っている為、まだまだ戦えます。

一方で金浜君は光の膜による防御、毒手による手のダメージ、そして無数のダークマターフレシエットを防ぎ続けた身体の光。これらによる消耗があるので、見た目上の負傷が無いながらも無傷というわけではありません。

とはいえ、金浜君はこの国の勇者なのです。あくまで試合形式だからこそ意表を突かれて負けてしまった、という格好にする方が良いので、わざわざそうした事実を説明したりはしません。

「さて。次は負けてしまった勇者殿に訊きたいのだが、この状況をどう分析なさるのかな？」

「いやー、負けちゃいましたね。正に試合のルールを駆使した、完璧な勝ち筋です。拘束を解こうと魔法を使えば結界まで破る威力になるので、皆さんを巻き込んでしまいますし。転移の魔道具は希少かつ消耗品なので、こうした場面で使うべきものではありません。状況まで利用して俺の手札を潰してきた乙木さんの作戦勝ちですね」

金浜君もまた、私がこうした勝ち方をした理由に感じているのでしょうか。わざわざ自分が本気を出せばまだまだ戦えることをアピールしてくれませぬ。

あるいは、半分ぐらいは本気なのかもしれませんが。彼も男の子より強くなりたい、という気持ちがあるのも、プライドがあるのも当然ですからね。

ルーズヴェルト侯爵は金浜君の話も聞き終え、満足したのか再び私の方へと近寄ってきます。

「さて乙木殿。君は決闘に勝った。つまり、有咲殿との婚約への物言いは、勇者殿と聖女殿により肯定される正当な主張となったわけだ。こうなってしまうとは、私も無理に婚約をすることは出来ない。

ああ、非常に納得がいつていないが、勇者殿と聖女殿が言う以上はまったくもって仕方がないのだよ、本当に！」

改めて、そんなことを観客の皆さんに主張するルーズヴェルト侯爵。このわざとらしさにより、私とルーズヴェルト侯爵の間にわだかまりが無いことが明確に主張されます。

「というわけで、乙木殿。これからどうなされるつもりかな？」
「そうですね」

私は少しだけ、考えると、すぐに口にします。

「当初の予定通り、愛する人を攫っていこうかと思えます！」

宣言すると同時に。私は訓練場の片隅で、三森さんの近くで私の戦いを見てくれていた有咲の方へと駆け寄ります。

「愛してるぞ、有咲！」

その言葉に応えるように、有咲もこちらに向かって駆け寄ってきます。

「アタシも！ 愛してる、雄一っ！」

そして私と有咲は互いに手を伸ばし、取り合い、そのまま勢いに乗って互いを抱きしめます。

くるくるとその場で回転するような格好になって、私は有咲を離さないように、そして怪我をさせないように抱き上げます。ちょうど、お姫様抱っこと呼ばれるような格好です。

「で、どうすんの？」

ニヤリ、と笑みを浮かべる有咲。その表情は、私にもはっきりと分かるぐらい幸せ一色に染まっています。

「逃げましょう。私は今、誘拐犯ですし」

そう告げると同時に。私は強く跳び上がります。

そして訓練場の壁を超え、決闘の舞台となった広場から一瞬で離脱。

突然の出来事に騒然とする観客の声を後方に聞きながら、私はそのまま再び跳び上がり、訓練場の外へと着地。

「アハハ！ アタシ、今めっちゃ幸せ！ それに、すっげー楽しい！」

「良かった。俺は、君のその顔が見たかったから」

そう、本心を呟くと、有咲は顔を真赤に染め上げます。

「うう、なにそれ、めっちゃ恥ずいんだけど！」

「でも事実だよ」

言いながら、私は有咲を抱えたまま、街の中を走り抜けます。

花嫁衣装を着た女性と、傷だらけにボロボロの中年男性。組み合わせの珍妙さもあり、通り過ぎる人々が例外なくぎょっとしています。

そんな反応もまた、今は楽しく思えてしまいます。

「それでさ。雄一はどこまで逃げるつもり？」

「さあ？ どこまででも。有咲と一緒になら、俺はそれだけでいいよ」

「っ、もう！　そういうクサイセリフ禁止！」

　ぽかぽか、と有咲は俺の胸を叩いてきます。

「でも、意見には賛成。アタシも、雄一とならどこへだって行ける
「じゃあ行こう。どこまでも！」

　そう言って、私はさらに加速し、王都を走り抜けます。

27 迷路の中でつかまえて

私と有咲は王都を出て、それでもまだ駆け抜け続けました。気の向くまま、思うままに走り抜けていくと、気がつけば王都周辺の森の、どことも知れない泉のほとりまで到達していました。

誰の目も無い場所まで来たので、ようやく私は立ち止まります。

そのまま有咲を降ろして、二人で手をつないだまま泉のすぐ側まで歩み寄ります。

「アタシ、ずっと迷ってたんだ」

有咲は、感慨深そうにしながら語り始めます。

「どうすればいいのか、分かんなかった。初恋の雄一お兄ちゃんと一緒に生活して、このまま結婚までいくのかな、って漠然と思つて。でも拒絶されて、なにも分かんなくなつてさ。迷路の中に居るみたいな気分だった」

どうやら、有咲は自分がどういう心境だったのかを語ってくれる様子。私は、その言葉を一字一句聞き逃さないよう、耳を傾けます。

「自分じゃ自分の幸せを見つけれなくって。雄一が見つ付けてくれた、アタシのスキルの使い方に頼つて、ずっとどうすればいいのか決めて、決めて、決め続けて。それで、最後に選んだのがルーズヴ

エルト侯爵様と結婚するっていう道だった」

今なら分かります。有咲がそのような選択肢を選んだ理由。私が愚かだったから。有咲のスキルまで巻き込んで、大きな間違いを侵すことになったのです。

「きっとそつちにゴールがあるんだって。アタシの幸せはきっと、雄一の為になることだって。そう思って、ずっと進んできた。今日まで、婚約披露宴まで頑張ってた。でも、結局迷路の終わりなんか見えなくてさ。アタシは、迷ってるままだった」

「有咲」

私はただ聞いているだけのことができず、つい言葉の途中で割り込むように名前を呼んでしまいます。そして有咲の背中側に周って、肩から抱きしめます。

そんな私の手に、有咲は優しく手を重ね、語り続けます。

「そんな時にさ。雄一は来てくれた。どっちに行けばいいのか分からなかったアタシを、迷路の中でつかまえてくれた」

有咲がそう言ってくれる。その事実が、私の胸に今こうしていて良かったのだ、という安心感と幸福感を生みます。

「急にさ。光が見えたような気がしたんだ。もしかしたら間違った道かもしれない。出口まで行けないのかもしれない。でも、アタシ、幸せだよ。雄一が隣で、手をつないでいてくれるから。迷路の中でも、温かい光が胸の中にある。だから怖くない。もう迷わない。アタシは、アタシの為に、ずっと雄一と一緒にいる。雄一のことを愛してる」

ぎゅっ、と有咲の手が、私の手を強く握りました。
それに応えるように、私も語ります。

「俺も。有咲を愛してる。ずっと言い訳ばかりしてきた。屁理屈ばかり言ってきた。正直じゃなかった。でももう嫌だ。有咲は俺のものだよ。俺が世界で一番、有咲を愛してるよ。誰にも渡したくない。ずっと一緒にいたい。だから攫いに来たんだ。俺は、俺の為にもう迷わない。有咲の手を引いて、死ぬまで一緒に歩いていきたい」

「うん、うんっ！」

有咲は頷き、震える声で相槌を打ちます。恐らくは、泣いているのでしょう。

私もまた、無意識のうちに涙を流していました。

「ごめんな、有咲。俺が馬鹿だったから、すごく悲しませたよな。

多分、これからも有咲のこと悲しませると思う。でも、俺は馬鹿だから、それでも有咲とずっと一緒にいたいよ」

「いや、そんなの許してあげる。雄一が世界で一番格好悪くて、世界で一番ダサかったって、アタシは雄一の隣がいい。わがままだって言うよ。今までみたいに、めちゃくちゃなこと言って雄一のと困らせちゃうよ。でも、アタシだって馬鹿だから、それでも雄一と一緒にいいんだよ」

互いの気持ちを確認しあうと、自然と次にしたいこと、するべきことは理解できました。

私と有咲は一度離れ、向き直り、そして互いに見つめ合います。

「有咲」

「雄一」

愛してる。

その言葉を同時に言った後は、最早言葉など不要でした。

私は有咲を、有咲は私を強く抱きしめ、そして互いの唇を近づけてゆきます。

堰を切ったように、勢いよく、二人揃って貪るような深い口付けを交わします。

やがて口付けだけでは我慢の効かなくなった私は、有咲を抱きしめたまま、優しく二人で倒れ込みます。

そのまま転がって姿勢を変え、私が有咲に覆いかぶさるような格好になります。

何をするつもりなのか。自分がどうなってしまっただのか。有咲は理解している様子で、むしろ早く、と急かすような、悩ましげな表情でこちらを見つめてきます。

「きて、雄一」

それが、合図となりました。

そうして私と有咲は、名も知らぬ泉のほとりにて。

互いを深く理解し、愛し合い。

消えない愛の証を刻み込むようにして、繋がりました。

27 迷路の中でつかまえて（後書き）

これにて、第六章は完結です。

ここまでお読み頂き、本当に有難うございます。読者の皆様には感謝してもしきれないと本心から思っております。

少しだけ裏話のような話になりますが、当初はこの作品はここで完結させるつもりで書き始めました。

しかし読者の皆様が様々な反応を下さり、私が想定していた以上のものをこの作品から読み取り、そして数字という形も伴い期待していただけたお陰で、それに応えたいという気持ちを抱くようになりました。

ですので、ここでヒロインの有咲とは無事ゴールを迎えましたが、乙木雄一の物語はまだまだ続けていきます。

そのためにも、様々な設定や、今後の物語に繋げるための布石を用意してきました。

既に作中で、かなり後の展開に影響する設定も登場しております。

これから乙木雄一が進む道を、そして当作品が紡ぐ物語をどうか楽しみにお待ち頂けると幸いです。

続きがいつごろからの投稿になるのかは分かりませんが、プロットはかなり先の展開まで用意が済んでありますので、あとは書くだけです。

継続的に投稿が可能な程度の文章量が仕上がりましたら、また投稿を再開致します。

それでは、最後にもう一度。

ここまで物語を書き続けることが出来たのは、読者の皆様の応援があつてこそです。

本当に感謝しております。ありがとうございました。

あれから私と有咲は、王都に帰ってから魔道具店のご近所さんに挨拶へと向かいました。私と有咲が結婚することになった、と。

どうやら、色々な人が根回しをしてくれていたようで、上手く行ってよかった、などと安堵する人が多く居ました。

その後は、助けてくれた人たち全員にお礼に向かいました。特に、色々と面倒をかけてしまったルーズヴェルト侯爵、金浜君、三森さんには何度も頭を下げました。

そうして一通りの後始末が終わった後、ようやく私と有咲は、役所に向かい、手続きを済ませ籍を入れることになりました。

それがちょうど、今日のお昼過ぎのことです。

現在の時刻は夜。私は有咲の部屋で、有咲と二人きりで互いに向かい合い、椅子に座っています。

「有咲。今日から俺と君は夫婦になる」

「う、うん。そうだね。なんか、えーっと、照れるね？」

髪の毛を弄りながら、有咲は可愛らしい仕草で視線を逸しながら言います。何やら緊張している様子ですが、これから予定しているのは、恐らく有咲が想像しているようなことではありません。

「夫婦になる以上、大事なことが一つある」

「うん。アレ、だよな？」

「ああ。まずは、話し合いの時間が必要だな」

「へ？」

私の言葉に意表を突かれたのか、有咲は間の抜けた表情を浮かべて声を上げます。

「どうしたんだ、有咲？」

「い、いや！ なんでもないっ！ うん、大事だよな、話し合い！ うんうんっ！」

そうして誤魔化すように言う有咲。どんな勘違いをしたのか、想像は難しく有りません。しかし、ここは黙っておいてあげましょう。

「俺たちは、ちゃんとお互いの考えとか、どう思っているだとか、どうしたいだとか。そういう話を全然してこなかった。最低限の、事務的なことしか共有できていなかった。だから、あやうく取り返しつかないことになるどころだった」

「うん、そうだな」

有咲も理解はしているのか、しっかりと頷いてくれます。

「だからこそ、これからはそんなことにならないよう、ちゃんと気をつけていきたいと思う。何をしたいか。どんなことを目標にしていくか。とにかくなんでも、自分が考えていることはお互いに伝え合って、共有していきたいと思っているんだ。どうかな、有咲？」

私が訊くと、有咲は頷いてから肯定してくれます。

「うん、いいと思う。アタシも、雄一がどんなことを考えてるか知りたいし、アタシのことでも雄一にもっとちゃんと知っておいて欲しい」
「有咲」

可愛らしいことを言う有咲のことが愛おしくて、私はつい抱き寄せてしまいます。

「うひゃっ！ ゆ、雄一っ？」

「本当に、可愛いやつだなあ、有咲は」

「ちよっ、まって、恥ずいし！ 今そういう感じじゃなかっただろっ？」

有咲が照れているのか必死に抵抗するので、私も仕方なく手を離します。

「まあともかく、俺と有咲でよく話し合いたっていうのは本当のことだから。今日のうちに、今まで話せなかった色々なことを話しておきたいんだ」
「うん、分かった」

そうして、この日の夜は私と有咲がお互いの好きなどころや、直して欲しいところなど、様々な気持ちを言葉にして伝え合うこととなりました。

01 未来予想図（後書き）

お久しぶりです。投稿再開致します。

当分は隔日投稿を維持していけるよう頑張っていきたいと思っております。
宜しくおねがいます。

02 1の期に及んで

互いに思いを共有し合って、二時間近くは経過したような気がします。

話はお互いの個人的な事柄から、魔道具店など私が展開している事業の今後の展開についてのことにまで広がってきました。

「じゃあ、雄一はまだまだ新しい事業に手を出すのは辞めないつもりなんだな？」

「ああ。この世界が、俺たちにとって厳しい世界だってことは変わらない。二人の幸せを第一に考えるなら、やっぱりどんな力でも欲しいし、あって困るようなことは無いはずだよ」

「まあ、それにはアタシも同意するけどさ。でも、最近みたいに、アタシのことほったらかして仕事ばかりになるんだったら、それは嫌だからな？」

有咲はいじけるような口調で、これまでの私の行動に対して苦言を呈しました。確かに、仕事が忙しかつたというのもありますが、いくらなんでも有咲のことを放置していた時間は長すぎます。

正式に夫婦になったのですから、これからはそんなことは起こらないように気をつけなければいけないでしょう。

「分かった、気をつける」

「うん、それでよしっ！」

「それに何なら、有咲も一緒に仕事をするか？ 俺と同じ仕事をす

るんだったら、二人でいつも一緒に居られるけど」

「え、でも、アタシが役に立つのかな？」

不安げに言う有咲ですが、むしろ私からすれば大歓迎です。

「むしろ、有咲のスキルがあれば大助かりだよ。前に付与魔法を使って、俺がカルキュレーターを借りて使った時も、かなり色々なことが進展したからな。有咲は間違いなく役立つってくれるはずだよ」
「そっか」

有咲は満足げに頷いてから、さらに訊いてきます。

「ところでさ。その、雄一がアタシのカルキュレーターを使った時って、色々なことが計算できて、理解できたんでしょ？ それって具体的に、どんなことが分かったの？」

ちょっとこの質問は、答えに困ってしまいますね。

「えっと、それはまあ色々」

つい、話を濁してしまいます。

「それより、具体的な仕事の話をしよう」

「いやいや、露骨に話そらしてんじゃねーよっ！」

とまあ、さすがに有咲からツッコミを入れられてしまいました。

「で、どんなことが分かったんだよ？ 正直に吐きな？ 楽になるから」

有咲が私の頭をグリグリと拳で撫でるようにしながら、自白を求めてきます。

こうして隠し事をしていることがバレてしまった以上、話す他無いでしょう。隠し事をせずに話をしよう、と提案したのは私の方なのですから。

「実は、あの時カルキュレイターが導き出した答えの一つに、俺が最強になるための手段が示されてたんだ」

「へえ、それは良いことじゃないの？」

「ああ。デメリットさえ無ければ、だけど」

私の言葉に、有咲は眉をしかめました。

「デメリットって、どんな？」

「簡単に言うと、有咲の命を危険に晒すようなものだよ」

「うやむやにしないで。ちゃんと説明して」

この期に及んで、私はまだ隠し事をしようとしてしまっていたようです。

はあ、と一度ため息を吐いてから、ようやく全てを正直に吐く覚悟を決めます。

「実は、俺が有咲のスキル、カルキュレイターを自在に扱う方法が見つかったんだよ」

そう言うってから、私はかつてカルキュレイターが示した可能性、半永久的なスキル共有の魔法陣についての話を始めました。

03 魂の永続付与

「まず前提として、俺はあの時、付与魔法の新たな使い方を発見した。人の身体に直接魔法陣を刻むことで、魂に付与魔法陣が作用して、半永久的に付与魔法が持続するっていう使い方だ」

「へえ、そんな使い方があるんだ。でも、それって危なくないの？直接身体に魔法陣を書くんでしょ？」

有咲の疑いはもつともなものでした。

「魔法陣そのものには、副作用は無いんだ。元々、付与魔法で人にスキルを付与する時点で、魔法が人に作用しているからな。魔法そのものが身体に悪影響を及ぼす可能性はほぼ皆無だよ」

「そうなんだ。じゃあ、どうしてアタシの命が危険になるわけ？」

「問題は魔法そのものじゃない。付与魔法によって、魂レベルで二人が繋がることでリスクが生まれるんだよ」

私の説明の意味が理解できなかったのか、有咲は首を傾げます。

私は理解してもらえよう、より詳しく説明を続けます。

「具体的には、二人の人間の間でスキルを共有する魔法陣を、お互いの身体に刻む。そうすると、二人の間にパスが出来る。このパスを通じて、たとえばAとBの二人がスキルを共有したら、Aの意思でBのスキルをBに使ってもらうことが出来るようになる。そして、その効果もパスを通じてAの側で発動することが可能になる。これ

が、俺の発見したスキル共有の付与魔法陣の詳細だ」

「で、その何が危険なわけ？」

「そのパスを通じて、お互いの魂、のようなものにも繋がりが生まれる可能性が高いんだ」

私が言うと、有咲はようやく理解したように頷きます。

「そっか、要するに、スキル以外の何でも共有しちゃうわけね」

「ああ。基本的には、お互いの思っていることが伝わりやすくなるとか、そういうメリットにも取れる効果が多い。だけど、例えば片方が命に関わるような傷を負うと、もう片方にもその痛み、苦しみが共有される。そして片方が死ねば、恐らくもう片方も死んでしまう」

大まかに言うならば、二人の魂が一つに繋がってしまうから、一人の魂が壊れたらもう一人の魂も壊れて、共倒れになってしまうといった感じでしょうか。

ともかく、自分の負傷が自分だけの問題で終わらなくなるのは間違いないことです。

「そっか、そういうことね」

「ああ。だから俺は、この魔法は使わないことにした。もし俺に何かがあったら、って考えると、それに有咲まで巻き込んで傷つけて、最悪殺してしまうなんてとてもじゃないけど耐えられない」

「うん、ようやく話が理解できた」

私の話をすっかり理解してくれたようで、有咲は頷きます。

そして、予想外の言葉を口にします。

「でも、それさ、やった方がいいと思う」

その言葉に、私はつい啞然としてしまいます。

「ほ、本気か？」

「当たり前じゃん。そうすれば、雄一は最強になるんでしょ？ それで怪我したり、死んだりするなら、何もして無かったら尚更危険ってことになるじゃん。それに、アタシが一人だけ生き残るなんてのも嫌。最後まで雄一と一緒にいい」

理屈としては、有咲の言う通りです。命を共有することでより強い力が得られるなら、その方が外敵に脅かされるリスクも下がります。結果的に、二人共より安全に生きてゆくことが出来るはずです。それでも、私に何かがあった時に、有咲まで犠牲にしてしまうのは嫌でした。

「それでも、俺は認めたくない。何か事故があった時、有咲まで巻き込みたくないんだ」

「アタシ、一人だけ残されるぐらいなら雄一と一緒にがいいんだけど。それでも？」

「ああ、それでもだ」

私と有咲は、互いに見つめ合います。しばらくそうしていると、有咲がふと口を開きます。

「じゃあ離婚するもんね！」

「えっ？ いや、それは困る！」

「うっさい！ 雄一がまだ何にも分かってくれてないから仕方ないでしょ！」

怒った有咲が、一気にまくし立てて来ます。

「ちゃんと話し合って決めようって言ったじゃんっ！ それなのに、もう約束破るの？ 雄一が、勝手にアタシの幸せを決めて、アタシの未来はこうなるほうがいいって思い込んで、アタシの言うことなんか何にも聞いてくれないじゃん！ こんなの、前と一緒じゃんっ！ 雄一が結婚してくれる前と、なんも変わってないっ！」

そこまで言われて、ようやく私は有咲の気持ちを理解しました。なるほど、たしかに私は、自分の考えを有咲に押し付けているだけなのかもしれません。

「雄一が強くなれなくて、なんかの拍子に死んじゃって、アタシが一人だけ残されてさ。そんなの、何が幸せなんだよっ！ ふざけんなよ！ アタシのこと、幸せにしてくれるんじゃないのかよっ！ そんなことにならない為に、アタシと雄一、二人で頑張るんじゃないのかよっ！」

一方的に責められている内に、だんだんと私も考えが変わってきます。

また、私は考え違いをするところだったのかもしれない。有咲を巻き込みたくない。犠牲にたくない、というのは私の一人よがりな考えでしかないのです。

有咲にとって一番なのは、きつとリスクの無い人生じゃない。私と有咲、二人で力を合わせて、二人で幸せになろうと頑張ってゆく。

そんな、二人三脚のような未来を有咲は望んでいるのでしょう。なのに、その有咲の望みを、私がただ有咲を巻き込みたくない、という独りよがりな理由で潰してしまうところでした。

これでは、まるで何も変わっていませんね。有咲を傷つけ、自分だけが納得できる選択ばかり選んで、逃げ続けていた時から、何も

「有咲。本当に、いいのか？」

私は、有咲の覚悟を改めて問います。

「いいに決まってるんじゃない。ちゃんと雄一が守ってくれるし、アタシのスキルが雄一のことを守ってくれる。その方が、絶対二人とも幸せになれる。そう信じて、力を合わせようよ。そんなことすら信じられないなら、アタシ達、夫婦になれないよ」

「そう、か。確かに、そうかもな」

有咲の言葉に、私もまた覚悟が決まります。

これから私は、二人で幸せになる道を探します。一番大切な人を傷つけるかもしれない。見ないふりをするよりは、しっかりとその可能性を受け入れた上で、そうならない為の最前を尽くしたい。

「分かった。やろう、スキル共有」

「うんっ！」

私は有咲を肩から抱き寄せ、有咲も私に体重を預けてきます。

そうしてお互いの体温を感じることで、心を落ち着かせます。少し、話し合いが過熱してしまいましたからね。

しばらく有咲と抱き締め合っていると、だんだん心も落ち着いてきました。頭も冷静に回るようになってきたので、いよいよスキル共有の魔法陣を書き始めようかと思えます。

「よし、有咲。準備するか」

「うん。魔法陣はどこに描くの？」

「この魔法陣は、俺と有咲の身体に、同じ魔法陣を同じ場所へ描くことで成立するんだ。だから、一番いいのはお腹だと思う」

「そっか。じゃあ、雄一お願い」

有咲は躊躇う様子も無く、服をたくし上げてお腹を見せてきます。
「瞬どきりとしてしまいますが、すぐに気を取り直し、言います。」

「いや、まだ塗料も何も用意してないから、ちょっと待ってくれ」
「そ、そっか。気が早かったな！」

有咲は慌てて服を着直します。

その後、私が普段から魔法陣を描く時に使っている道具を用意し、改めて向かい合います。

「じゃあ有咲。お腹を見せてくれ」
「うん、ほら、どうぞ」

先程と同様、有咲は服をたくし上げてお腹を見せてくれます。腰周りに、水着の日焼け跡がチラチラと見えて、つい視線が吸い寄せられます。

が、ここは集中です。間違わないように、有咲のお腹へと筆を使って魔法陣を書いてゆきます。

「んっ、雄一っ！ くすぐったいよお」
「悪い、有咲。少し我慢してくれ」
「わ、分かったけど、早く終わらせてくれよな」

顔を赤らめ、筆の走る感触に耐える有咲。ですが、早く終わらせようとして魔法陣を間違えてしまえば元も子もありません。慎重に書いてゆきましょう。

「あっ、んうっ！ もう、雄一っ！ わざとでしょっ！ ひゃうんっ！」

決してわざとではないのですが。今はとにかく、正確に魔法陣を描くのを優先します。

05 最強のおっさんとギャル

有咲のお腹に魔法陣を書き終われば、次は私の番です。鏡を見ながら慎重に書き上げます。

それも終わると、いよいよ魔法陣の起動です。

「後は、お互いの魔法陣に触れて、魔力を流すだけだ。そうすれば、魂に魔法陣が焼き付き、俺と有咲の間で常に付与魔法が発動し続けているような状態になる」

「うん、分かった。この魔法陣は、終わったら消していいんだよね？」

「ああ。魔法陣はちゃんと魂の方に焼き付いて残る。肌を書いたインクは洗い流しても問題ないよ」

説明も終わり、私と有咲は顔を見合わせ、頷き合います。

「よし、始めよう」

「うん」

私と有咲は、互いのお腹に描かれた魔法陣に手を添えます。そして魔力を流し込み始めます。

すると、魔法陣が光を放ち始めます。互いのお腹が光を放ち、その光は少しずつ、身体の中に浸透していくように消えてゆきます。

そうして、光が完全に消えると、スキル共有は完了しました。

「すごい」

有咲が、まず最初に呟きます。

「雄一のこと、すごく近くに感じる。雄一が、分かる。触ってないのに、触ってるみたいなの、胸の内側が温かいみたいなの、不思議な感じだ」

幸せそうに、微笑みながら言います。実際、私も有咲と同じような感覚を覚えています。どうやら、無事スキル共有は成功したようです。

「成功したみたいだな」

「うん。これで、雄一もアタシと同じスキル、カルキュレーターが使えるようになったんだよな？」

「ああ。それに、有咲も俺の持っているスキルを使えるようになったはずだ」

「え、それマジっ?」

有咲は途端に目を輝かせ、興奮した様子で聞き返してきます。

「じゃあ、雄一がこないだの決闘とかでも使ってた、あの黒くてやべー感じのやつとかもアタシが使えるようになったのかっ?」

「あー、それは使えるとは思っけど、ただあのスキルは自分自身にも悪影響があるからな。有咲は自分自身に耐性がついているわけじゃないから、使つと自分を傷つけることになるはずだよ。だから、使っちゃ駄目だ」

「えー、そっかあ、使えないかあ」

心底残念そうに、有咲は頂垂れます。どうやら、本当に私のスキル『詛泥』やその他諸々のスキルを格好いいと思っているようですね。

本人に自覚は無いようですが、有咲には若干ですが厨二病のきら

いがあるのかもしれませんが。

「なら、なに使おっかな。えっと、そんなじゃあ『保湿』！」

有咲がスキル『保湿』を使った途端、お肌がぷるぷるしっとりした艶のある肌になりました。

「うわ、これ最強じゃん。女子が無敵になれるスキルだ」

どうやら喜んでいる様子なので、無事私のスキルの共有は成功したものと考えて良いでしょう。

さて、次は有咲のスキル『カルキュレーター』を私が使う番です。

「それじゃあ有咲、次は俺がカルキュレーターを使うから、もしも何かあった時の為に、構えていてくれないか？」

「あ、おっけ。分かった。任せな！」

有咲は自信たっぷり、力こぶをつくるようなポーズを取っています。

「よし、じゃあ早速」

そして、私はカルキュレーターを発動するよう意識します。

すると、途端に、情報が一気に流れ込んできます。

かつて付与魔法を使った時のような負担もありません。ちゃんと私の脳が、カルキュレイターの導き出した解を受け止めて記憶してくれます。

そして同時に、私は有咲の方を見ます。

有咲もまた、私の方を見ていました。

二人して、かなり驚いたような表情をしています。

「まさか、こんなことになるとは」

「うん」

私と有咲は、そう言い合って頷きます。

なぜなら。

カルキュレイターを使用したと同時に、私の考えていたこと、私の導き出した解が有咲の方にも流れ込んだから。

そして同様に、有咲の考えや導き出した解も、私の方へと流れ込んできました。

つまり、スキル共有をした状態でカルキュレイターを発動すると、お互いの思考もまた、ダイレクトに共有可能だったのです。

06 嬉し恥ずかし

なんと言いますか、これは不味いと言うか、すこし刺激が強すぎますね。

有咲がどれだけ私のことを愛しているのか、その感情が激流のように流れ込んできて、果てしない幸福感を覚えてしまいます。

そして有咲にもまた、私が有咲をどれだけ愛しているのかが伝わっているでしょう。

となると、この気持ちの共有で愛情が膨らんで、それがお互いの思考にフィードバックされて、と繰り返され、無限に大きくなっていてしまいます。

「やば、まだドキドキしてる」

有咲は、胸を抑えながら呟きました。それだけ、感情の暴走の刺激が強すぎたのでしょうか。

「これは、気をつけて使わないと大変なことになってしまいそうですね」

私が言うと、有咲もまた同意して頷きます。

「少しずつ慣らしていこう。そうしないと、反動で心が壊れちゃいそう」

「そうだな。今は、二秒か三秒ぐらいが限度つてところか」

とは言え、それだけの時間があれば、様々な事柄をカルキュレイターで解決出来ました。

そのお陰で、私も有咲もこれからやりたいこと、やるべきことがはっきりとしました。

「でもまあ、今日のところはとりあえずもう休もう」
「うん。流石にいろいろあったしな」

有咲も、少し疲れを顔に出して頷きます。

「じゃあ、どうする？ 雄一は」

有咲が言つて、私の方へ探るような視線を向けてきます。
何を望んでいるのか。今となつては、先程のカルキュレイターのお陰もあつて丸わかりです。

「もちろん、有咲と一緒に寝るよ」

そう答えると、有咲は満足げに頷きます。

「そつか。そうだよな、だってもう、アタシと雄一の心は、繋がつてるんだもんな」

「そつだよ。俺はもう、有咲の願いを間違えることは無いし、有咲がしてほしいことは何でも出来る」

言つと、私は有咲を抱き締め、そのまま部屋のベッドへと押し倒すようにして一緒に寝転がります。

「愛してるよ、有咲」

そして、有咲の額に、頬にキスをします。

「やば、超好き。マジでして欲しかったとおりじゃん」

「でも、俺もして欲しいことがあるからな。こっから先は、有咲次第だよ」

私が言つと、有咲はこくり、と小さく頷きます。そして口を開きます。

「雄一、大好き」

そう言つて、有咲の方から唇を重ねてくれます。そのまま私の身体を抱き締め、密着した状態でキスを続けます。

そのキスに私も応え、互いに互いのキスを楽しみながら、数分はそのまま過ごしました。

そして唇を離すと、有咲はいたずらっぽく笑って言います。

「ふふつ。雄一のえっち。すけべ。でも、いいよ。今日は、っていつか今日も、雄一の好きなようにして」

その言葉に、私の心の中の何かが決壊します。

「有咲っ！」

そのまま有咲を強く抱きしめて、さらに深い愛情表現をする為、服に手を掛けます。

そうして、この日の夜は更けていくのでした。

07 オブジェクト指向

「で、あつあつほやほやの新婚さんになったオトギンは、ボクに何の用なのかな？」

シュリ君が言って、私の顔を覗きます。

有咲とスキル共有をした翌日、私はシュリ君を訪ねてきました。理由は、カルキュレイターを使ったことにより判明した事実をシュリ君に伝える為です。

「実は、シュリ君に聞いて欲しい大発見がありました」「ほうほう、オトギンがそこまで言うなら、相当な大発見みたいだね？」

シュリ君は期待するように言って、にっこり笑います。

「それで、どんなことを発見したのかな？」

「はい。実は、他人のスキルを付与魔法で付与可能になりそうなのです」

「はい？」

私の言った言葉があまりに簡潔すぎたのか、さすがにシュリ君は首を傾げます。

「ちょっとまってよオトギン。さすがに話が急すぎるから、順番に説明してもらえろ？」

「はい、分かりました」

そして、私は昨日カルキュレーターを使って導き出した答えについて話していきます。

「まず、既存の付与魔法の魔法陣についてです。既存の付与魔法ですと、付与したスキルがその内容に関係なく、私の世界の言葉で言えば『手続き型』と言うべき形で実装されています」

「手続き型？」

「あることを実行しようとした時に、一から十の手順を一つ一つ、順番に処理していく形式のことですね。付与魔法の場合は、一から十まである手続きを一つ一つ、付与対象に実装します。そして、スキルを実際に使うと、一から十までの処理を順番に実行して、最後まで処理が終わるとスキルが発動します。これが、既存の付与魔法の仕組みです」

私の説明に、シュリ君は特に口を挟みません。まあ、ここまでは既存の知識でもありますから、当然でしょうね。

「ですが、このやり方だといくつかの不具合が発生します。まず、手続きは完全に同じものを使えません。AのスキルをBに付与した時、手続きの中で使っているAという情報が全てBに変わるのですから、そのままではスキルが発動しないのです。だから、その部分を修正するために魔力が必要になります」

「そうだね。そして、他人のスキル付与のコストが高くなるのもそこに原因がある。CさんがAさんのスキルをBさんに付与、となるとさらに変換が複雑になって、膨大な魔力を消費してしまう。不可能ではないけど、かなり馬鹿げた魔力を消費することになっちゃう

んだよね」

シユリ君が、私が言おうとしていた部分を先に説明してくれます。

「そこで、今回私が発見した、というか参考にしたのが、私の世界における『オブジェクト指向』と呼ばれる形式です」

私の話が本題に入ったのを悟り、シユリ君の目が少しだけ鋭くなります。

「これがどういうものかと言いますと、手続き型で一から十まで律儀に全部しっかり処理していたものを、役割分担して処理しようという考え方ですね。一から十までの処理をする上で、必要な道具を用意するんです。その道具、つまりオブジェクトの組み合わせで、一から十までの処理を進めていくのが、オブジェクト指向です」

と、説明こそしましたが、私はプログラミング言語に関しては素人ですから、正確な理解であるかどうかはわかりません。

が、今回重要なのはあくまでもアイデアの部分。プログラミング言語を参考に、付与魔法の魔法陣が最適化出来ればそれでいいので、多少間違いがあろうが問題はありません。

「そして、付与魔法を手続き型からオブジェクト指向に変えることで、大きなメリットが一つ生まれます。それは、スキルを付与する時に変換しなければいけないものが非常に少なくなるのです」

言っと、私は懐から一つの紙を取り出し、広げます。

「例としてこちら、蓄光魔石の場合の魔法陣をご用意しておきました」

「なっ！」

私が広げた紙に書かれた魔法陣を見て、シユリ君は驚愕の声をあげます。

それも当然でしょう。何しろ、そこに描かれているのは、既存の魔法陣と比べると十倍以上の情報量が書き込まれた、巨大な魔法陣だったのですから。

「では、この魔法陣を例に詳細を説明していきます」

私が言うと、シユリ君はゴクリ、と飲み込みました。

「まず、蓄光魔石のスキル『蓄光』が発動する為に必要な処理ですが、とりあえずAとBの二つの処理で出来ている、と仮定しましょう。まあ、実際はもっと複雑なのですが、今回は概要の説明ですので」

そう前置きをしてから、さらに説明を続けます。

「このAの処理が、どのような存在が『蓄光』を使うとしても、変わらない部分です。なので、Aは変換せず、そのまま付与しています。具体的には、付与魔法陣にAの処理を変換しないように記述するんです。こうすれば、Aの部分を付与する上で必要な魔力はほとんどありません。Aを複製するために必要な魔力だけになります」

「な、なるほど！ そういうことかっ！」

シユリ君は驚き、気付いた様子で声を上げます。それに私は頷いてから、さらに続きを話します。

「そして残るBの部分。ここは、スキルを発動する人によって内容

が変わります。なので、この部分はスキルの所有者から付与対象に合わせて変換を行う、既存の魔法陣と同じ記述を使います。こうすれば、変換に必要な魔力はかなり抑えられます」

「そうだね、たしかに、そうすればいいわけだ。全く、ボクとしたことが、なんでこんな簡単なことに気づかなかったんだらう！」

シュリ君は悔しそうに、頭を抱えながら言います。

「このやり方のデメリットは、全体を一括で変換するわけではないので、かなり具体的に『蓄光』というスキルの発動手順を理解して、詳細に記述しなければいけません。こうなると、魔法陣は既存のものとは比べ物にならないほど複雑化します」

「そうだね、それはボクも分かってた。だから多分、そんな魔法陣を作ることはほとんど不可能だと思ってた！ けど、それは複雑な効果を持つスキルの場合の話だよ！ オトギンの蓄光魔石みたいに、単純なスキルの使い方を工夫することで価値を生み出しているなら、話は変わってくる！」

シュリ君は興奮した様子で、どんどん私の言葉を奪うように語っていきます。

「もちろん、それでも魔法陣を作り上げる難易度は跳ね上がるだろうね。でも、不可能なわけじゃない。現に、オトギンが実現しちゃってるし！ そして一度実現してしまえば、そのスキルに関しては以後永遠に、超低コストでのスキル付与が出来る！」

「ええ、そういうことです。これなら、他人のスキルを付与することも不可能では無いはずですよ」

「うんうんっ！ すごいっ！ これは本当にすごいよオトギンっ！」

言って、私の手を握ってぶんぶん振り回すように握手をしてく

るシュリ君。

「もうこれは、今すぐ論文にしよう！ 全世界の研究者に向けて発表すべきだよ！ そうすれば、世界中で魔法革命が起こるよっ！ ボクが保証する、それだけこの発想は、既存の付与魔法のあり方を塗り替えるだけのポテンシャルがあるんだよ！」

「はい。ですが、少し待ってください」

私が制止すると、シュリ君はキョトンとした表情を浮かべます。そして、おろおろとしながら私に向かって問いただしてきます。

「なんでさっ？ こんな大発見、発表しない理由が無いよ！ 今すぐ発表しよう！ そうしよう！ オトギンの力で革命を起こすんだよ！」

「ええ、それには異存はないのですが、実はもうちょっとだけ改良したい部分がありました」

私は、今日ここに来た理由の『二つ目』についても、ようやく話し始めます。

「実は、この蓄光魔石の魔法陣ですが、既存の付与魔法で自分のスキルを付与する場合の、半分ぐらいの魔力で付与が可能になっているんです」

「それはすごいよ！ やっぱり今すぐ発表を」
「ですが、また削減できると私は思っています」

私の言葉に、シュリ君は固まります。

「今、なんて？」

そして、耳を疑っているのか、聞き直してきます。

「さらに削減できると言いました。理由も、ちゃんとあります」

私は言って、次の話題の核心部分を口にします。

「実は、既存の魔法陣も、この新しい魔法陣も、とある部分がブラックボックスになっていて、ちょっと具体性というか、詳細さに欠ける記述になっているんですよ」

「ブラックボックスって、何のこと？」

「魔力です」

そう、魔力。当然のように、この世界に存在する力。

それは、さながら地球でもはるか昔から、人々が当然存在することを疑っていなかった、けれど詳細を理解していなかった『空気』と同様に。

「魔力とは、どんなものなのか。何で出来ているのか。どういう性質があるのか。そこが曖昧だから、どうしても魔法陣の記述が曖昧になってしまっているんです」

この言葉にもまた、シュリ君は呆気にとられたように、ポカンとするのでした。

09 魔力の定義

「確かに、そこは未だに解明されていない部分だけとき。でも、研究は昔からされてきている。ある程度のことは分かってきているはずだよ?」

シユリ君が、私の言葉を否定するようなことを言ってきました。ですが、私は首を横に振ってから答えます。

「それが、実は微妙なんですよ。どういうことが起こるか、という結果の部分は観測事実として分かっているんです。しかし、どうしてそんなことが起こるのか、という原因、根拠の部分は未だにほとんど解明されていません」

「た、確かにそれはそうだけど」

シユリ君は、納得半分、疑い半分と言った様子で言います。

「でも、じゃあオトギンは、その原因、根拠の部分が分かるとも言うのかな?」

「はい、当たりは付けています」

「だよ、分かるわけが、って、ええっ? 分かっちゃうのっ?」

「ええ、あくまでも仮説ですが」

私は言って、また新しい話についての詳しい説明を始めます。これも、昨日のカルキユレイターのお陰で解が得られて、考えが纏ま

った話だったりします。

「まず、魔力は高い魔力の集まっている場所から、魔力の低い方へと流れ、均一になるうとする性質がある。これは、既存の研究でわかっています」

「うん、そうだね。それぐらいは常識の範疇だよ」

シュリ君が頷き、私の認識を肯定してくれます。

「そこで私は、私の世界の学問を参考にして、魔力の素になっている存在、名付けて『魔素』についての予測を立てました」

「魔力の素、で魔素か。単純だけど分かりやすいね」

まあ、最初に名付けたのは私ではなく、どこかのファンタジー作家さんなのでしょうが。しかし、便利な言葉なのでそのまま使わせてもらいます。

「そして、魔力についての仮の定義をしました。第一、魔力とは、魔力の元となる最小単位の存在、魔素の集まりが持つエネルギーのことである」

「ふむ、ふむ」

「第二、魔素が無い状態をゼロとした時、魔素一つが持つエネルギーの高さを魔力圧とする」

「なるほど？」

「第三、魔素が無い状態をゼロとした時、その場にある魔素の数を魔素量とする」

「うん、まあ当たり前だね」

「第四。魔力とはその場にある魔素の平均魔力圧掛ける、その場の魔素量によって求められる」

「ちよっと待った！」

「ここで、シュリ君が口を挟みます。

「つまり、魔力は魔素の数という要素と、魔素一つ一つがもつポテンシャルという要素、二つによってその大きさが決まっているってことかな？」

「ええ、そうですね」

「じゃあ、魔素ってどんな存在なのさ」

シュリ君が、鋭い点を指摘します。

「魔力とは何か。それは昔からももちろん議論されてきたよ。主流なのは二つあって、一つはエーテル理論。世界は魔力を伝える存在、エーテルで満たされていて、そのエーテルを伝える波の大きさが魔力の大きさになるっていう理論。もう一つが元素理論。魔力というもの、それ以上に分割できない最小単位の小さな粒の集合で成り立っていて、魔力の大きさはその粒の数で決まるっていう理論」

シュリ君は、すらすらと既存の理論についての知識を解説していきます。

「オトギンの仮説だと、この二つの理論の両方に当てはまる部分がある。魔素のエネルギーの大きさはエーテル理論に近くて、魔素の数っていうのは最小の粒、元素理論に近い。でも、この二つの理論は同時には成立しないんだよ」

「そうですね」

「だったら、オトギンの言う魔素はどっちなのさ？ というか、どっちにしても、結局矛盾すると思うんだけど」

「いえ、矛盾はしませんよ」

私はシュリ君の疑問に、とある物理学の概念を借りてきて答え
ます。

「魔素がどちらなのか、という問いについては、ある意味では
どちらでもなくて、またある意味では両方であると言えます」

「ん？ どういうこと？」

「つまり、魔素というのは波と粒子、両方の性質を持った存在なん
です。私のいた世界では、こうした性質を持つものを『量子』
と呼んでいました」

「量子。波と粒子、二つの性質を同時にもつもの」

啞然とした表情を浮かべ、シュリ君は繰り返すような言葉を呟き
ます。

10 魔素抵抗と魔力圧抵抗

シュリ君の思考が追いついていないようにも思えますが、先に全て説明を終えたほうが整理しやすいようにも思います。

なので、このまま解説を続けていきましょう。

「魔素は、この量子のようなものであると私は仮定しています。そうすれば、これまでただ不思議な性質であるとしか説明できなかった様々な物質について、一気に説明が付くんです」

私はそう言つて、さらに魔素の存在が確かに思えるような実例を上げていきます。

「まず、魔力は高い方から低い方へと流れる性質がありますよね？これは、魔力圧と魔素量、どちらでも適用されるものであると、私は定義しています。つまり、魔力圧も高い部分は低い部分へとエネルギーを譲渡し、均一化する傾向があるんです。魔素もまた、密な部分から疎な部分へと移動し均一化する傾向があります」

「えっと、それについてはまあ、そうだろうとは思っけど」

「そして、この二つの均一化についてですが、私は『起こりやすさ』があると考えています。

言つて、私は重要な部分を話すため、一呼吸置きます。

「まず、魔力圧の均一化のしやすさについて。これは、魔素が存在

している場所によって違うと考えられます。そして、あらゆる物質には、魔力圧の伝播を邪魔するような性質があつて、これを私は魔力圧抵抗と呼ぶことにしました」

「つまり、何の物質もない、真空状態で魔力圧の均一化は最もスムーズに起こる、つてことだね？」

さすがシユリ君、説明から本質をすぐに見抜いてくれるので、話が早くて助かります。

「はい、そうです。そして、魔素量についても同様です。あらゆる物質は、魔素の移動を邪魔する性質を持っており、これを魔素抵抗と呼びます。こちらにも、真空状態なら何の邪魔も入らないので、魔素はスムーズに移動出来ます」

「うん、そういう定義なんだね。それで、そうすれば説明できるようになるっていう物は何かかな？」

シユリ君の問いに、私はすぐさま答えます。

「最も分かりやすいのは、導魔鋼ですね。これは魔素抵抗、魔力圧抵抗の両方が極めて低い物質です。空気中よりも遥かに低い為、魔力はこの物質の中を伝播し、流れるのです」

「なるほどね、それは確かに説明がついたことにはなるね。でも、それだけじゃだめだよ？ わざわざ魔素抵抗と魔力抵抗を分けたのなら、残り三つの物質についても推測は付いてるんだよね？」

「ええ、もちろんです」

私は頷き、さらに例を上げていきます。

「次に挙げるのは、魔力絶縁体。これはもちろん、魔素抵抗と魔力圧抵抗の両方が極めて高い物質のことです。だからまるで、魔力を

通さないような性質があるように見えるのです」

「ふむふむ。で、次は？」

「はい、魔力フィルターです。魔石に魔力を移す際に使われるこの物質ですが。私の推測では、魔素抵抗が高く、魔力圧抵抗が低い物質で、かつ魔力圧抵抗が方向によって異なる物質だと考えられます」

魔力フィルターは、ちょうど私の魔道具店のウォークイン、冷房装置にも使われており、自分でも扱った経験があります。

「こういった物質は、魔素の流れはせき止めつつ魔力圧は伝播します。なので、大量の魔素が流れてくると、その波同士が干渉し合っていて、一時的に高いエネルギー量を持つ魔素が生まれます。そしてこの魔力圧が一方通行で、かつ魔力圧の低い方向へと伝播するお陰で、反対側に魔力圧が抜けてゆき、見かけ上では魔力が一方通行しているように見えるんです」

「確かに、それなら理屈は成り立つね。じゃあ、最後の一つは？」

シユリ君の問いに、私は実物を懐から取り出しながら答えます。

「それはこれ、魔石です。魔素抵抗が低く、魔力圧抵抗が高いのが、この魔石という物質です。魔力圧を伝播させるのは簡単ではありませんが、一度内部の魔力圧が高まれば、抵抗が高い為に外へ逃さなくなります。つまり、魔力圧を蓄えておくのに適した物質なんです。そして、魔素抵抗が低いという性質も、魔石から魔力を取り出すのに都合よく働きます。大量の魔素を流し込めば、その数だけ内部の魔力圧が高い魔素と干渉し合います。つまり、流し込んだ魔素量によって、取り出せる魔力圧の量も増えるのです」

魔石に魔力を補充するのも、取り出しの手順と同様です。魔力フ

イルターを介する事で、魔力圧の高い魔素が、内部の魔力圧の低い魔素と干渉し、素通りします。そうすることで、魔石内部の魔力圧が高まっていく、という仕組みになっているわけです。

「うーん、そういうことかあ。なるほど、確かに説明は全部筋が通ってる。しかも、今まで解明されてこなかった部分が明らかになってる。もちろん、この仮説が正しいのなら、だけど」

シュリ君は難しい顔をしながら言いました。

私の話を受け、考え込むシュリ君に、さらに次の話を振ります。

「そこで、今日はシュリ君にお願いがあつて来たのです」

「ふむふむ、なるほど。そこで話が戻るわけなんだね、オトギン？」
「はい」

私は頷き、ようやくシュリ君に今日の本題を伝えます。

「私が語ったのは、あくまで仮説に過ぎません。この仮説を証明するための実験を、おまかせしてもいいでしょうか？ そして可能なら、具体的な数値、数式についても定義していただけると助かります。そうすれば、付与魔法の魔法陣がさらに効率的になりますので」
「そういうことか。なるほどね。でも、それはボクにタダ働きをしるってことかな？」

「いいえ、違いますよ」

シュリ君のからかうような言葉に、私は首を横に振ります。

「今回の発見、仮説に関する研究、そして論文ですが。私とシュリ君の共同研究ということで発表しましょう」

その言葉に、シュリ君は目を点にして驚きました。

共同研究。つまり、実験を任せた、というだけではなく、この革命的な発見をしたのが、私だけでなくシュリ君の手柄にもなるということです。

「オトギン、それ、本当にいいの？　ボクも発見者の一人、なんてことになったら、オトギンが手に入れるはずだった利益、名声、あらゆるものをボクに譲り渡すことにもなるんだけど」

「そう言ってくれるシュリ君だからこそ、共同研究にしたいのです」

私は正直に、感謝の言葉を伝えます。

「今まで『師匠』には、色々とお世話になってきましたから。これぐらいで恩返しになるのなら、安いものです」

「お、おとぎんっ！」

瞳をうるうるさせながら、シュリ君は私に抱きついてきました。

「ボクは、ボクは本当に、君みたいな優秀で優しい弟子を持って幸せものだよっ！」

「あはは、そう言っていたらと弟子冥利に尽きます」

「しかも冴えないおっさん顔でボクの性癖どストライクでちんちんも馬並みだしっ！」

「あの、それは関係ありますか？」

どうも話が突然それ始めたので、ツッコミを入れて軌道修正します。

「ともかく、話は分かったよ！　実験なら、オトギンよりもボクの方が経験もアイディアも勝っている自信があるからね。ドンと任せちゃーだいな！」

「はい、信頼していますよ、シュリ君」

こうして、無事私はシュリ君に『魔素』についての研究を任せることが出来ました。

そしてこの魔素についての研究、理論については、今後は『魔素力学』と名前を付け、呼ぶことに決まりました。

カルキュレイターはあくまでも知識の中から解を得るスキルですからね。私の知識にない、仮説を証明するような実験の組み方、やり方なんてものはどれだけ考えてもわかりません。

だからこそ、こういう時はシュリ君のような専門家に任せるのが一番なのです。

その後、この日はシュリ君とさらにいろいろなことを話してから、魔道具店の方へと帰りました。

特に、魔素力学の証明が完了した時の展望について。魔素力学が正しかった場合、私がこれから何をするつもりなのか。

そんな話をシュリ君として、しっかりと今後のプランについての意識を共有しておきました。

12 魔導回路

シュリ君に魔素力学の証明実験を任せた翌日。私は、証明実験が成功した時に備えて、先に進められる作業をやっておくことにしました。

それは、今後の計画の中で最も重要なもの、名付けて『魔導回路』というものです。

地球における電子回路のようなものを、魔素や魔力を使って作り出そう、というのがこの『魔導回路』の始まりの発想です。

もしも魔導回路の発明に成功したら、技術レベルは飛躍的に上昇します。これまで私の工場で使っていたのは、言うなれば歯車の組み合わせだけで成り立つ機械のようなものばかりでした。それでも最先端技術なのですが、地球の技術レベルと比べるとどうしても物足りません。

そこで、電子回路の代用となるものを開発するのです。そうすれば、地球でいうデジタル回路を利用した高度な機能をもつ機械を作ることも可能となるはずですよ。

もっと端的に言えば、電子の代わりに魔素を使ったコンピュータ、『魔導コンピュータ』とも言わべき装置を開発したいと考えているわけです。

そのためには、まずは地球におけるアナログ回路を魔素や魔力を

使って模倣、再現しなければなりません。

現在、魔素についてはシュリ君の証明実験待ちという状態です。しかし、大まかにどのような形で作り上げればよいか、という設計の触り部分なら現段階でも作れるはずです。

ですので、魔素力学の証明実験が完了するよりも先に、魔導回路の設計を開始しました。

再現において、簡単に出来るものとそうでないものの差は激しいものとなるのが予想出来ました。

例えば、回路に使う導線は、特に難しい工夫もなく再現出来るでしょう。

一方で、魔力には電磁気学にあるような性質が無い為に、コイルのようなものも作れません。ですので、コイルを使うような回路もまた、再現が難しくなるわけです。

ただ、魔力と電磁気の違いは、プラスに働く場合もありました。

例えば、ダイオードを作るのは簡単でした。電子におけるダイオードとは違い、そもそも魔素には抵抗に指向性のある物質があるからです。

電子におけるダイオードは半導体の性質を利用して、電流を一方向にのみ流れるようにしたものです。魔素の場合は、そもそもこの性質を持った物質が存在しているわけです。

なおこの魔素におけるダイオード、つまり『魔導ダイオード』の場合は、電子におけるダイオードとは違い、電圧制御等の性質は持ちません。専門用語で言うと、降伏電圧が発生することが無いので

す。

なので、この部分もコイルを使う回路と同様、工夫して再現しなければなりません。

ただ、幸いにも私が扱っているのは物理学ではなく、魔法です。再現が難しい部分も、魔法陣を扱うことで多くが解決可能となりました。

このように、魔素と魔力、そしてこの世界の物質特有の性質を扱い、魔導回路の設計を進めていきました。

そうして作業を進めていく内に、シュリ君から連絡がありました。無事『魔素力学』の証明実験が終了。魔素力学が正しい理論であることが判明したのです。

さらには、実験に伴い判明した様々なデータも一緒に送って頂けました。

これで、いよいよ本格的に『魔導回路』の設計、開発が可能になります。

「よかったな、雄一」

私がシュリ君が送ってくれた資料を読んでいると、有咲がそう呼びかけてくれました。

「ああ。これでようやく、魔導回路の開発に取り掛かることができそうだ」

「うん、頑張つてよね。アタシのやりたいことも、その辺りの開発

が終わらないと進まないんだし」

言うてから、有咲はいつの間にか用意してくれていたお茶を差し出してくれました。

「でもまあ、少し休憩したほうがいいですよ。昨日資料が届いてからずっとにらめっこしてるんだし」

「それもそうだな。そろそろ一息つくろうか」

私は有咲の提案に乗って、一度資料を片付けます。そして有咲の用意してくれたお茶と、軽食を楽しむことにしました。

13 アナログ回路

そうして、魔導回路の開発に着手してからおよそ半月。私が当初予定していた部品の、全てが完成しました。

しばしばカルキュレイターの力に頼ることもなりました。お陰で感情が増幅される副作用にも少し慣れて、今では十分近く発動し続けられるようになりました。

ちなみに、私が大学で機械工学系の知識を学んでいたからこそ、カルキュレイターを使って解を得ることが出来ました。なので、この部分は有咲には任せることは出来ませんでした。自分一人で開発しなければならず、なかなか大変な作業では有りました。

ともかく、そうした経緯にて、無事魔導回路は完成しました。

まあ、正確に言えば、魔導回路に使うような主要な素子の開発が完了したというだけなのですが。

これからも、必要に応じて新しく素子を開発することはあるでしょう。

そして現在、完成した素子のお披露目会です。

「さて有咲。完成した魔導回路の素子がこいつらだ！」

有咲にも、完成品について知ってもらわなければならない。こうして、お披露目会をする必要もあるわけです。

「結構たくさんあるんだな。一つずつ、説明してくんない？」

「ああ。まずはこいつ、回路に使う魔素導線だ。導魔鋼だと高価すぎるから、安価な金属を使って代用した。表面に魔力絶縁体のコーティングをしてある」

言つて、私は魔素導線を持ち上げて見せます。

「ちなみに、こういったコーティングが可能な導線には安価な金属を使つんだが、難しいもの、例えば微細導線なんかは導魔鋼を使うことで対処するつもりだ」

「なるほどね。導線の種類を、用途に合わせて変えるってことね」

ふむふむ、と有咲は頷きながら魔素導線を見つめます。

「次にこれが『魔力抵抗器』だ。基本的には、魔素と反発する性質のある金属『ドラグナイト』を含む物質で作つてある」

かつて私が発見した、ドラグナイトと名付けられた金属。これが抵抗器を作る上で都合が良い物質でしたので、使わせていただきました。

基本的には、ドラグナイトの含有量によつて抵抗も上がつてゆきます。

そして、抵抗の高さによつて違う色の線を表面に描いており、ひと目見て抵抗の高さが分かるようになっています。

「で、こっちにいくつかあるのが、コンデンサー。魔力圧コンデンサーと、魔素コンデンサー、そして両方を蓄積する魔力コンデンサ

「の三種類がある」

「三つ以上あるけど、何の違いがあるわけ？」

「それは構造や素材の違いだな。それぞれ微妙に異なる性質を持っていて、用途によって使い分ける。あとは魔力容量にも違いがあるな」

「へえ、なるほど」

納得した様子で頷きながら、有咲はコンデンサーを次々と確認してゆきます。まあ、この辺りは実際に使わなければ違いが分からない部分です。一つずつ詳しく説明するとキリがないですし、これぐらゐの説明で一旦は十分でしょう。

「そして、これが魔素ダイオードと魔力圧ダイオード」

私が次に手に持ったのは、比較的大きめの二つの素子です。

「なんか、他よりも大きいね」

「ああ。ダイオードの持つ性質を再現するために、幾つかの構造と魔法陣を内蔵してあるからな。どうしても大きくなってしまった。今後は小型化や、用途に合わせて機能の削減、分離をしたものも作るつもりだよ」

ダイオードに関しては、言った通り再現に手間がかかりました。整流作用の再現は簡単に済みましたが、他の作用を再現する為に工夫が必要となったのです。

結果、ダイオードはどうしても巨大化してしまいました。今後、実際に回路を組む時は、目的に沿って必要な機能だけを分離して使うことになるでしょう。

14 そしてデジタルへ

私はダイオードの詳細について、有咲に説明をしてゆきます。内部にどのような構造があつて、どのような機能を有しているのか。これを一通り説明し終わると、次の素子の紹介に入ります。

「さて、次にいこう。こつちに色々を用意してあるのが、電子回路におけるコイル、インダクターの持つ機能を再現した素子だ」
「なんか、いつぱいあるじゃん？」

有咲の言う通り、私は形も様々な素子をいくつも提示しました。

「どうしても、コイルそのものを魔導回路で再現するのは難しかった。だから、ちよつと工夫をさせてもらつて、コイルが持つ機能ごとに代用となる素子を用意したんだ。例えば、これが共振回路に使う為の素子で、こつちがフィルタ回路の為の素子。基本的には、幾つかの素材と構造、それに魔法陣で成り立っているから他の素子よりも一つ一つが大きめだ」

「ふーん、でもダイオードよりはちっちゃいんだな」

有咲は、私が提示した素子を観察しながら呟きます。

「そうだな。ダイオードの場合は、こういった代用素子が幾つも組み合わさつたものだからな。正確には、ダイオードの機能を持つ魔導回路だとも言えるんだよ。だからダイオードはどうしても大型化

してしまっただ」

この辺りの、サイズの問題は後々解決していくこととされています。今はひとまず、素子を完成させることが第一でしたから。

「そしてこいつが最後で、一番の目玉。『魔導トランジスタ』だ」

最後に私は、一つの小さな部品を手にして説明をします。

「作るのに一番難航して、実は開発時間の半分ぐらいは費やすことになった。けど、その甲斐もあって満足行くものが仕上がったよ」

本来のトランジスタの機能は、大きく分けて二つ。スイッチングと、電流制御です。これを魔導回路で再現するのは、どちらも簡単ではありませんでした。

特にスイッチングの機能は、とある理由から微細なサイズでも再現可能にしなければなりませんでした。

そこで考えたのが、付与魔法によりスキルを付与した素材を組み合わせるという方法です。

スイッチングの為に必要なのは、一方の回路に流れる微細な魔力のオンオフで、もう片方の回路に流れる魔力のオンオフを切り替えるような性質です。

その為には、魔力に応じて魔素抵抗、魔力圧抵抗が変化するような性質をスキル付与にて生み出さなければなりません。

「最も重要なスイッチング機能は、ドラグナイトの性質がスキル化したもの、『魔力反射』を応用したんだ。これを素材に付与して、十分な魔力が流れる時にスキルが『機能しない』ようにした。逆に、

魔力が流れていないときはスキルが発動して、魔力反射が発動する」

この付与を成立させるための魔法陣と、必要なスキルの組み合わせ、そして素材の選定に大半の時間を費やす結果となりました。

ですが、その甲斐もあって、将来的に加工技術が発展することでナノメートル単位まで小型化することも可能なものとなりました。

「じゃあ、これがあれば『アレ』が作れるってわけ？」

有咲が、興味深そうにしながら尋ねます。私は頷き、答えます。

「ああ。この魔導トランジスタがあれば、アナログ回路からデジタル回路へ。論理演算も可能な電子機器、じゃなくて『魔導機器』の開発が可能になる」

その答えを受けて、有咲も頷きます。

「なら、もう少しだね。雄一的目標達成まで」

「そうだな、カルキュレイターの力があれば、きっと上手くいくはずだよ」

そうして、私はようやく目的のもの名前を口にします。

「ずっと作りたいと思っていた『魔導コンピューター』。その完成まで、この調子で頑張っていこう」

「応援してるからな、雄一」

有咲は微笑み、私の手を握ってくれました。その手を握り返し、私はより一層、この目標を達成させたいと強く思いました。

私と有咲の未来の為に、そして私の諸々の事業の為に。魔導

コンピューターの完成に向けて、頑張っていきたいと思います。

15 同時進行

地球で使われている、コンピューターの部品の一つ『CPU』。これは、非常に小さなトランジスタで出来ている代物です。

なので、魔素を利用してトランジスタと同様のパーツを設計することに成功すれば、CPUの再現も可能になる、というわけです。

ただし、その為にはいくつか課題があります。

特に大きな課題として、実際に小型化する上での技術力の限界、というものがあります。CPUとして使われているものはマイクロプロセッサと呼ばれる、本当に微小のトランジスタが何億という単位で集まっているものなのですから。

現在のこの世界の技術力では、到底実現不可能です。

そこで私は、段階的なCPUの作成、という形でこの問題を解消することにしました。

現代の技術で製作可能なCPUを作り上げ、それを用いて工業技術を刷新。高まった技術力を応用し、さらに高度なCPUを作り上げる。

といった手順で、少しずつ技術力を高めながら、より高度なCPUを作り上げていくのです。

幸い、私は大学時代に学んだ知識のお陰もあり、大雑把ではありますがどのような歴史を経てマイクロプロセッサというものが進化していったのかを知っています。

それに倣うことで、一歩ずつ着実に進んでいくことが可能になります。

そうした理由もあり、魔導トランジスタの完成後は、ひたすらマイクロプロセッサを制作する為に奔走する日々が続きました。

魔道具店や商品を作る工場についてはすっかり他の人に任せつきりとなり、私自身はマイクロプロセッサ制作の為に新たな施設を作り、そこに籠もる日々が続きました。

時には必要な素材を集めるために出張することも、人手が必要な為に従業員を増やすこともありました。

この日も同様で、新しく稼働させる工場の為に新しい従業員を雇おうと奔走していました。

その際、工場内をあちこち見て回っていたのですが、一角でよく見知った三人が集まっているのが見当たりました。

「有咲。マリアさん、シャーリーさん。三人集まって、何をなさっているんですか？」

そう。ちょうどそこに集まっていたのは有咲、マリアさん、シャーリーさんの三人です。普段はそれぞれの仕事の為に工場よりも魔道具店の方で見かけることの多い三人です。

それが工場で、三人同時に集まっているというのはかなり珍しい光景でした。

「あ、雄一。今ね、シャーリーさんとマリアさんに手伝ってもらいながら、新しい商品のアイデア出しをやっているよ」

「へえ、そうなのか。ちなみに、どんなものを作るつもりなんだ？」

「それはまだ秘密」

言って、有咲はいたずらっぽく笑いしました。

「まだアイディアを出し始めたばかりですからね。形になったら、乙木さんにもお見せしますよ!」

「なるほど、それでは楽しみに待っておきますね」

楽しげに言ってみせたのはシャーリーさん。様子から察するに、どうやらかなり良いアイディアがまとまっているようです。

「一応、この商品が完成すれば、魔道具店だけではなくて工場の方でも業務効率を上げる為に使える予定ですから。楽しみにしていてくださいな」

「ほう、そうなのですか」

マリアさんの発言から、どのような商品を考えているのか想像してみます。

が、到底思いつきません。商品になり、かつ工場の業務効率まで向上させる代物。そして、三人が協力して開発するようなもの。

まるで想像がつかず、つい苦笑してしまいます。

「まるで分かりませんね。これは、完成を楽しみにする他無いようです」

こうして、私が魔導コンピューターの開発を進める傍らで、有咲、マリアさん、シャーリーさんの三人による新たな魔道具の開発も同時進行していくことになるのです。

15 同時進行（後書き）

投稿期間が空いてしまい、申し訳ありません。

これからもこうして本文の見直し、修正等で投稿の間隔が長くなる場合があるかと思いますが、なにとぞ宜しくお願いいたします。

16 魔導車

三人が新たな商品の開発を初めてから、半年後。とうとう、その全貌が明らかとなりました。

その商品の名前は『魔導車』なんと、魔力で走る自動車のようなものでした。

ただし、現代日本で見るような鋼鉄製の自動車ではありません。既存の馬車を改良し、馬を繋がずとも自走するように開発した車両です。

実は、これと似たような構造の魔道具はすでに存在しているそうです。馬の代わりにゴーレムを牽引に利用したゴーレム車というのがあるのだとか。

しかし、これにはいくつかの問題があり、一般には使われていません。

まず、必要な魔力が膨大であること。かなりの魔力の持ち主でなければ、ゴーレムを一時間動かす程度で精一杯。到底、馬の代理品とはなりえません。

また、非常に高額です。ゴーレムは人造品ではなく、ダンジョンから捕獲し無力化したものを改造して利用している為、量産にも向いていません。

こうした理由から、ゴーレム車は一部貴族の趣味程度でしか扱われていないものだったそうです。

また、一部の高ランク冒険者も、このゴーレム車を実際に所有しています。優れた魔力の持ち主がパーティに所属している為、長距離移動に利用していることもあるそうですが。

ともかく、そうした理由から普及しなかったゴーレム車。ただ、馬を使わず人間が操作するだけで動く馬車、という発想はすでに存在していました。

そうした知識を持っていたシャーリーさんとマリアさん。この二人が、有咲が新たに得た魔導機器の知識についての話を聞き、アイデアを思いつくことになりました。

それが魔導車です。ゴーレムを使わず、そもそも馬車自体を自走させるような構造にしてしまえばよいのでは、という単純な発想。

しかし、馬車は馬が引くもの。車は誰かが牽引するもの、という固定概念があつたこの世界の人には、なかなか出しづらいアイデアです。

一方で、マリアさんとシャーリーさんは有利な立場に居ました。有咲や私の話を通して、現代日本の文化、知識について僅かながらも聞き覚えがあつたからです。

その中には高速で自走する鋼鉄の車、要するに自動車についての話もありました。

そうした僅かな聞き覚えの知識をきっかけに、ゴーレム車の知識と繋げて、魔力で自走する馬車というアイデアに思い至つたそうです。

有咲も当然、自動車の有用性については理解しており、三人はすぐさまこのアイデアの実現に向けて行動を開始しました。人脈やツテを使い、馬車の本体を製造している人を集め、制御部の魔導回路は有咲が設計。

そうして何人もの人間を巻き込み、魔導車のプロジェクトは進んでいったそうです。

有咲も回路については素人であった為、時には手探りで、時には私に教わりながら、少しずつ魔導車の回路部分を完成させていきました。

この学習過程でも、どうやらカルキュレーターが役立つたようです。知識さえ手に入れてしまえば、答えを理解するのは難しくはなかったようで、有咲はみるみるうちに知識を吸収。簡単な回路ならすぐに自分で設計できるレベルまで到達しました。

そうした好条件がいくつも揃った結果。魔導車という新たな製品は、無事完成することになったのです。

「これが、その完成した魔導車ですか」

私は有咲、マリアさん、シャーリーさんの三人に連れられ、工場の敷地内にある倉庫の一つへと案内されました。

そこにあつたのは、すでに魔導車の完成品。塗装などはまだなもの、実際に乗って動かすことの出来るレベルまでは仕上がっているのだとか。

外見は、ごく普通の四輪馬車と同様のものでした。ただ、馬を繋ぐための機構は付いておらず、操縦席にも屋根と扉がついています。また、底部に機械的な構造が集まっている様子で、通常の馬車よりは分厚く大型の下半身になっています。

「動力は二つあって、人間由来の魔力と、蓄光魔石由来の魔力のハイブリット型になってるんだよね。だから天井には蓄光魔石の板が

張つてある。操縦席にも屋根がついてるのはそれが理由の一つかな」

言つて、有咲はぼん、と軽く魔導車の車体を叩きます。

「一般的な魔力の持ち主だと、自分の魔力だけで三時間ぐらいは走らせることができる。で、蓄光魔石が蓄えてくれる分で、晴れてると十五時間。雨天なら八時間ぐらいになるね」

その説明に頷き、私も魔導車に近づいて構造を確認します。

「なるほど。蓄光魔石も組み合わせで、動力問題はカバーしてるんだな」

「うん。こいつつてさ、太陽光発電みたいに天気悪いからって発電出来ない、みたいなことにならないからさ。動力源としてやっぱり便利だった」

有咲の言う通り、蓄光魔石は太陽光発電とは違い、太陽光そのものが変換されているわけではない為、雨天時でも魔力を集める効率はそのままで落ちません。

ですので、恒常的なエネルギー補給源としては正直言って選択の余地が無かったですよね。

「で、魔力の蓄積量は最大で五十時間分ぐらい。万が一、魔力が切れて、夜に走らないと行けない状況になっても、操縦者の魔力で走れるようになってる」

「夜に魔物が襲ってくることも少くないからな。それなら安全だ」

言いながら、私は他にも魔導車の様々な部分を観察し、確認していきます。よく設計されており、汎用性も高く、車両の形を変えれば貨物輸送車としても使えそうです。

だからこそ、工場の業務効率も上がるといっわけですね。

17 宣伝旅行

私が魔導車の構造を確認していると、マリアさんが口を開きます。

「操縦席の方は、有咲さんが本当に頑張って作っているんですよ。確認してあげてくださいな」

「そうですね。見てみましようか」

確かに、そこが有咲の最も苦勞した部分でしょうからね。ちゃんと見てあげるべきでしょう。

私は操縦席の扉を開き、中に入ります。

操縦席には簡単なハンドルと、速度や残魔力の計器。動力源の選択に使うバーなど、様々なものが配置されていました。

どれも直感的に使いやすい位置に配置されており、デザイン面でもしっかり工夫が凝らされているのが分かります。

「有咲。制御はどういう仕組みでやってるんだ？」

「ハンドルからの制御は油圧？　っていうのを使って、回路は使っていないよ。で、計器系とか、動力源制御とか、あとはアクセルとブレーキにも回路が入ってるかな」

「動力源の制御が、トランジスタだとして。アクセルとブレーキも回路制御なのか」

「まあね。結局、動かすのに使うエネルギーが魔力だからさ。アクセルはトランジスタと抵抗器で動力源からの出力制御して、ブレーキ

キはその逆って感じ」

回路の知識など皆無であった有咲が設計したものだ考えると、なかなか高度なものを仕上げているようです。

「よく頑張ったな、有咲。すごいぞ」

「へへ。まあ、雄一にいろいろ教えてもらったお陰だけだね」

言いながら、照れた様子の有咲は頬を掻くような仕草をみせます。そんな有咲の頭を、私はつい反射的に撫でました。

「はいはい！ 確認と惚気はこれぐらいでストップにしましょうね
」！
」

そこで、シャーリーさんが声を上げました。私は有咲の頭から手を話し、シャーリーさんの方を向き直ります。

「それで、この魔導車はいつ頃商品化する予定なのですか？」

「近日中には、と言いたいところなんですけど。実はその前に、宣伝計画がありました」

「宣伝計画？」

「はい！」

楽しみに頷き、シャーリーさんはより詳細を説明してくれます。

「簡単に言えば、この魔導車を使って近くの都市などを訪れたりして、うちでこういう商品を新しく開発した、ということを実際に目に見える形で宣伝してまわるんです。そうすれば自然と噂になって、欲しがる人が続出するはずですよ」

「なるほど、それは確かに必要なことですね」

私はシャーリーさんの説得に頷きます。

「そして、宣伝をするのは実際にこの魔道具を販売する人、つまり魔道具店のトップでもある乙木さんが一番適任であるはずです！」

「そう、でしょうか？」

「そうですねっ！　そして、サポート役として、この魔導車の開発の責任者であり私たち三人が同行するのも適切ははずです！」

「そう、ですか？」

「はい！　適切なんです！」

何やらシャーリーさんの押しが強く、少し気後れしてしまいました。

そんな私の様子を見てなのか、マリアさんがクスクス、と笑います。

「乙木様。つまりシャーリーさんは、一緒に旅行をしたいと言っているんですよ？」

「旅行ですか、なるほど」

「ああっ！　マリアさん、そんな直接言わないでっていう約束だったじゃないですかあ！」

マリアさんに言われ、ようやく私も納得します。

有咲との結婚前。いろいろありました、私は有咲を連れて出張言い換えれば旅行のようなものに出ていました。

そうして二人きりの時間をかなり多く取ることが出来たのですが、シャーリーさんとマリアさんとはそうした時間を取っていません。

もちろん、仕事中に二人きりになるという機会は多々あります。

しかし、仕事ではなくプライベートで二人きり、という状況は無か

ったように思います。

つまり、シャーリーさんはそんな状況にあった有咲のことを羨ましく思っていたのでしょう。

その為、こうして今回の魔導車の宣伝という理由を付け、私に仕事という大義名分を与えながら旅行の提案をした、というわけでしょう。

確かに魔導車の宣伝という仕事があるのですから。断る理由もなくなるわけです。

こんな回りくどい形での提案をさせてしまった、という事実を申し訳なく思いながらも。その反省の意味も込めて、ここはシャーリーさんの提案に乗ることにしましょうか。

「分かりました。行きましようか、宣伝旅行」

「いいんですか？」

提案した張本人のシャーリーさんが、何故か聞き返してきます。

「もちろんです。有咲だけでなく、お二人も私にとって大切な人ですからね。むしろ、今までそういった部分に気遣いが出来なかったこと、申し訳なく思っていますよ」

「いえいえっ！ むしろ、私は乙木さんの、そういう仕事に没頭してる、真面目すぎるぐらい真面目なところが、その、なんというか、好ましいな、と思っっていますので」

改めて、好意の詳細を説明されると、どうにも気恥ずかしいですね。

気付くと、マリアさんだけでなく有咲も笑っています。どうやら、この宣伝旅行の計画は当初からあったのでしょう。

なるほど、思い返してみればシャーリーさんのやる気の高さは不思議なぐらいでした。きっと、このご褒美があったからこそなのでしょうね。

「では 今日のもう、次の仕事に入ってしまいませんか？」

「仕事ですか？」

「はい。宣伝旅行の具体的なプランを立てましょう。どの都市に行きたいか、ちゃんと二人で相談しなければいけませんから」

「っ、はいっ！」

こうして、私はシャーリーさん、マリアさん、そして最後に有咲という順番で、魔導車の宣伝旅行という名目の二人旅になることとなりました。

と言っても日程はそれぞれ二週間程度。近隣の都市へ二、三箇所立ち寄るか、少し離れた都市に行って帰る程度のことしか出来ませんでした。

ただ、そんな小旅行程度の二人旅でも、三人ともそれぞれ満足していただけな様子でした。

そうして宣伝旅行を終えた後。魔導車の本格的な販売が始まり、案の定、高額にも関わらず予約注文が殺到し、人気商品となるのでした。

魔導車の完成、販売開始から、さらに半年後。

かつて国から頂いた工場用の土地も手狭となり、更に新しく土地を買い、魔導車専用の工場まで立ち上げました。

そして、貨物輸送用の魔導車も多数導入したことにより、物資の輸送効率が劇的に向上。

私の魔道具店は、王都から離れた都市にも、次々と支店を展開していくことが可能となりました。

そうしてわずか半年の間に、事業が急成長し、さすがに私がすべてを管理し、把握するというのが難しくなってきました。

すでに工場のことはもちろん、魔道具店のことも自分が手を出す余裕が無い状態です。これに加えて遠方の支店のこともなると、さすがにキャパシティーオーバーです。

そうした理由から、私はある決断をしました。

それは、事業の子会社化です。

例えば、工場と魔道具店それぞれ子会社の所有するものとします。そして、子会社の代表者にそれぞれを管理してもらい、その報告だけを上である私の方へと送ってもらいます。

そうして管理を効率化することで、事業全体を管理しながらも、さらに巨大化させることが可能となるわけです。

そして、それぞれの子会社を管理する、大本の事業。つまり私が代表者となる親会社の立ち上げもすることになりました。

名前は『乙木商事』です。単純ですが、こういったものは分かりやすさが大事ですからね。

そして工場の方は『乙木工業』、魔道具店の方は『乙木商会』という名前の子会社にしました。

乙木工業の方はシャーリーさんに、工場の方はマリアさんに経営を任せます。

そして店長の座が空いた魔道具店の本店では、ティアナさんとテイオ君を店長に任命しました。

と言っても、店長の業務を任せるのは魔道具店でこれまで働いてきた店員さんです。お二人は冒険者としての活動がしたいということなので、本店の看板役として大いに活躍してもらおう予定です。

ただ、経営の知識も学びたいとのことでしたので、一応は店頭としての業務もいくらか経験していく形になりそうです。

そして魔導車も使った輸送業、そして警備業の会社も子会社化します。孤児院の子たちも、ずいぶん成長しました。背も伸びて、一人前になった男の子も多いです。

冒険者を引退した方や、元騎士団の方なども雇っていました。が、中枢メンバーは孤児院出身の子たちで構成しようと思っています。

子会社の名前は『乙木運輸』。社長はジョアン君に任せ、経営のサポート役として魔道具店の本店の方から何人かの大人を引き抜く予定です。

が、ここで問題が発生しました。

なんと、ジョアン君と連絡が付かないのです。

どうやらここ最近、長期休暇を取得してどこかへ行っているらしく、誰も姿を見ていないというのです。

別に休暇明けに話をする形でもいいのですが、こうした連絡は早いほうがいいですからね。迷惑でなさそうなら、こちらから出向いて詳しい話をお伝えしておきたいものです。

というわけで、ジョアン君がどこに行っているのか、聞き込み調査を開始しました。

孤児院の子達によると、どうやら最近では松里家君と随分仲良くなり、交流していたのだとか。もしかすると、その松里家君であればジョアン君がどこへ向かったのか詳細を知っているかもしれません。

また、金浜組に所属する召喚勇者の皆さんにも色々と用事があります。なににせよ、王宮の方には一度足を運ぼうかと思っていたところです。

そうした理由で、私は王宮に向かい、まずは松里家君を訪ねるところとなりました。

19 約束どおりに

松里家君の部屋に向かう途中、ある噂話を偶然耳にしました。

王宮の兵士同士が雑談していたのですが、その内容がちょうど、松里家君に関わる話だったのです。

「おい、知ってるか？」

「何をだよ」

「最近さ、賢者様の部屋で、なんつーか、見たことのない美少女と一緒に生活してるそうだぞ？」

「マジかよ！ 賢者様って、その、男色家じゃなかったっけか？」

「ああ、そうらしいんだけどな。でも、賢者様の部屋からその美少女が出てきたって話はいろんな奴が目撃してるんだよ。日中だけじゃなく、夜も朝もだ」

「そうか、それなら間違いないな」

「ああ。賢者様も、女に興味を持つようになったんだな」

そんな噂話を聞いて、私は首を傾げました。

松里家君の恋愛対象は男性だけのはずです。女性を対象外で、そうした本能的な部分というのは簡単には変わらないものです。

だというのに、松里家君に彼女が出来た、というのは奇妙ですね。

不思議に思いながらも、何にせよ真相はすぐに分かるのだ、と納得し、松里家君の部屋へと急ぎました。

程なくして到着し、部屋のドアを数回ノックし、呼びかけます。

「松里家君。いらつしやいますか？ 乙木です。ちょっとした要件
があります、お伺いしました」

「乙木さん！ ちょうど良かったです！ ぜひ入ってください！」

許可が出ました。部屋に入ると、そこには松里家君と、どこか見
覚えがあるような、しかし間違いなく初対面の美少女が立っていま
した。

「おや、松里家君のお客様ですか？」

「そうですね。まあ、お客様というよりは、同志といえますか」

「はあ、なるほど。これは私が出直した方がいいでしょうか？」

「いえいえ！ むしろ、乙木さんが来てくださってちょうどよかつ
たぐらいです！ 正に今、施術が完璧に完了したところですからね
！」

施術、という言葉に疑問を覚えます。が、今はそこを追求する時
ではありません。

「そうですね。では、私の要件の方に入っても？」

「ええ、構いませんよ」

「では、お言葉に甘えて。実は、とある要件がありまして、ジヨア
ン君を探しているのです」

「ほうほう、なるほど！ これはまた奇遇ですね！」

「はあ。まあともかく、最近のジヨアン君は松里家君と随分仲良く
していたらしいと聞きました。ジヨアン君が長期休暇を利用して、
どこに行つたのかご存知であつたりしませんか？」

そう尋ねると、松里家君がニヤリ、と笑います。そして野獣のよ
うな眼光でこちらを見つつ、言いました。

「もちろんです。ジョアンの居場所ならすぐにお教えできますよ」
「本当ですか？ それならば、教えて頂けませんか？」
「ええ。では、その前に」

言つと、松里家君は傍らに立つ美少女の背中を押ししました。

「わわっ！」

美少女は、慌てたような声を上げ、私の前に押し出されます。そして、何が恥ずかしいのか、照れたように顔を赤らめ、視線を逸します。

「さあ。勇気を出すんだ。そのために、今日まで頑張ってきたんだろっ？」

「うん、わかった」

躊躇いながらも、美少女は頷きます。そしてしっかりと私の顔を見据え、言いました。

「ねえ『おっちゃん』。俺のこと、分かるかな」

呼ばれた途端、私の頭の中に、まさか、と思わず言いたくなるような推測が浮かび上がります。

「俺さ、おっちゃんが言ってくれたことを信じて、頑張つて、勇樹ねえちゃんの力も借りて、こんなに可愛くなつたんだよ」

そんなまさか。そんなことがあるはずない、と思いながらも。目の前の美少女の発する言葉が、私の推測の正しさを証明してゆきま

す。

そしてついに、美少女は決定的な言葉を口にしました。

「だからさ。約束どおり、俺のこと。シヨアンっていう一人の『女の子』を、お嫁さんにしてほしいんだっ！」

20 観念するしかない

正に、衝撃の告白。

まさか、目の前の美少女が、あのジョアン君だったとは。見た目には、どう見ても女性であるようにしか見えません。

なるほど、そのために松里家君と交流をしていたのですね、と納得する部分はあるものの。しかし、混乱というか、シヨックが収まりません。

「えっと、松里家君」

「どうしましたか？」

「ジョアン君は、その、松里家君と同様に、女装をしているという認識であっていますか？」

「ふふふ。そう思うでしょう。しかし！ 実は違うのです！」

松里家君は自信満々に、堂々と今回の『施術』について語ります。

「私がこの身体を手に入れるために試行錯誤した様々な技術をベースにして、さらに新たな魔法陣も無数に考案し、組み合わせた結果！ なんと！ 男性を完全な女性へと性転換する魔法が完成したのです！」

自信満々に、松里家君は言いました。

しかし、その内容は、私にとってはトドメの一撃となりました。

要するに。ジヨアン君は私と結婚する為に、性転換までしてしまったのです。男としての人生を捨て、女として生きる道を選んだのです。

それは、私のためにジヨアン君の人生を歪めてしまった、とも言えます。

「ちなみに、ジヨアン君を元の性別に戻すことは？」

「残念ながら、男性から女性への性転換魔法は完成しているのですが、女性から男性への性転換魔法は未完成です」

「な、なるほど」

つまり、ジヨアン君は男性に戻ることにすら出来ない、と。

これは、取り返しのつかないことになってしまいました。

「ねえおっちゃん。それで、どうかな？ 俺、ちゃんと可愛くなっただと思うんだ。今の俺なら、おっちゃんと結婚出来るよね？」

不安そうに言うジヨアン君。その真剣な、切実に私との結婚を願う声色に、心が痛みます。

「少し待ってください、ジヨアン君。その返事は、今すぐするわけにはいきません」

「結婚、してくれないの？」

「いえ、そういうわけではないのです」

と、いいいますか。ここまでジヨアン君の人生を歪めてしまった以上、何らかの形で責任を取るしかありません。

まさか本当に性転換をするとは思っておらず、過去の私は迂闊なことを言ってしまったようです。そのせいで、ジヨアン君は性転換

してしまつた。

そもそも、この状況下でジョアン君を拒否してしまえば、彼の、いえ、彼女の人生は、選択は全くの無駄であつたということになりかねません。

それは私としても望むところではありませんからね。どうにか落とし所を考えなければなりません。

混乱が収まりませんが、一度深呼吸をしてから、改めてジョアン君に語りかけます。

「いいですか、ジョアン君。私はですね、ジョアン君の他にも、責任を取つて結婚しなければならぬ女性が何人もいます」

「それは知ってるよ。勇樹ねえちゃんから聞いたもん」

「でしたら、話は早いですね。その方々を放つておいて、ジョアン君とだけ結婚する、というわけにはいかないのです。理由は、優しいジョアン君であれば、分かつて頂けますね？」

私が言つと、ジョアン君は悲しそうな表情を浮かべて頷きます。

「うん。もし俺が、おっちゃんに結婚してもらえなくて、なのに他の女の人と結婚してるのを知つたら悲しいよ」

「ええ。そういう意味では、私はすでに有咲と先に籍を入れています。すでに、皆さんに悲しい思いをさせてしまつて居るのです。これ以上、悲しませるといふのは本意ではありません」

「じゃあ、おっちゃんは どうするの？」

そう言われて、私はいよいよ覚悟を決めます。今まで先延ばしにしてきた問題を、ようやく片付ける時が来たのです。

「全員と、結婚します。ジヨアン君も含めて」

21 重婚

私が娶らねばならない、責任を取るべき女性は数多くいます。

マリアさんとシャーリーさんは、これまでの私の行動から、世間的には私の嫁になるものだと思われています。

もし結婚をしなかった場合、お二人は行き遅れた、捨てられた女性という評価を受け、社会的な立場が悪くなり、次の縁談にまで響いてくるでしょう。

マルクリーヌさんもまた、私が責任を取るべき女性の一人です。本人が完全にそのつもりであり、おそらくは結婚を前提にしているからこそその協力が得られた場面も多々あったはずです。ここに来て裏切るわけにはいきません。

それに、おそらくはマルクリーヌさんもまた、王宮内ではマリアさんやシャーリーさんと同様、私と籍を入れるものだと認識されているはずです。そういった面でも、見捨てるわけには行きません。

そして、ジョアン君です。私と結婚するためだけに、女性に性転換してしまった少年。ジョアン君自身が女性になりたかったわけではない、というのが非常に大きく、重い部分です。男性である、という自分自身のアイデンティティを捨てているのですから。

そこまでの選択をさせておいて、見捨てるというのはあまりにも無慈悲です。となれば、籍を入れるという形で報いてあげるべきでしょう。

他にも私に対して好意を寄せる女性は居るかと思いますが、現状で責任を持つべき女性はこの四人になるでしょう。

そうした事情を、ジョアン君に説明し、ジョアン君とだけ結婚するわけにはいかないことを納得してもらいました。

「わかったよ、おっちゃん。俺のこと、大切にしてくれるなら、四番目でも五番目でもいいよ。お嫁さんにしてくれるんだよね？」

「はい。こうなれば、責任を取る他ありませんからね」

「うれしいっ！」

かなり消極的というか、前向きとは言い難い形での結婚にはなりません。それでもジョアン君には十分らしく、喜んで私に飛び付き、抱き着いてきます。

「よかったな、ジョアン」

「うんっ！　ありがとう、勇樹ねえちゃん！」

「僕の方まで、幸せになるんだぞ」

優しげに微笑む松里家君。その笑みの中には、どこか寂しさも含まれているように感じました。

松里家君も含め、召喚勇者は人間ではありません。なので、人間を対象にした性転換魔法では女性にはなれません。

それはつまり、松里家君がどれだけ頑張っても、私と入籍する、という未来はありえないということになります。

そういった面を考えると、松里家君の心情もそれとなく察しが付きます。

恐らくは、自分と似た悩みを抱え、しかし自分とは違い解決可能であったジョアン君。だからこそ共感し、同情し、助けてあげたい

と思ったのでしよう。

「さて、乙木さん。ジョアンの性転換については理解していただけたようですが。そもそも、何の要件でこちらにいらしたんですか？」
「ああ、そうでした。実はですね」

松里家君に促され、私はそもそもの目的について話し始めます。
乙木商事という名の会社を立ち上げたこと。事業ごとに子会社を作り、それぞれ別の責任者に管理してもらったことにしたこと。

そして運送業、警備業についてはジョアン君に任せようと考えていることも話しました。

「わかったよ、おっちゃん！ 俺、一生懸命頑張るっ！」

ぐっ、とガッツポーズをしながらジョアン君は提案を受け入れてくれました。

「ありがとうございます、ジョアン君。では、また近い内に詳細が決まれば、連絡に伺いますね」

「うんっ！」

「なるほど、子会社化でしたら乙木さん。僕の方からも提案があるのですが」

「提案ですか。それはどのような内容でしょうか？」

松里家君の提案は、ちょうど私も考えていたことでした。

「よろしければ、金浜組のクラスメイト達全員、正式に乙木商事やその子会社で役職に付けてみませんか？」

「話が早いですね。正にその為もあって、松里家君を訪ねたのです」
「なるほど、さすが乙木さんですね！」

「いれならば、順調に話が進められそうですね。」

22 事情説明

私は松里家君に直近の私の状況と、今後の計画について話をしました。

そして、金浜組の子たち全員を、乙木商事で役員として雇うつもりがあるということも話しました。

最近の私は、乙木商事という大規模な企業のトップであり、ルーナルド王国の中でも有数の實力を持つ組織となっています。

それは国内の有力貴族にも匹敵するほどであり、随分と状況が変わりました。

今ならば、金浜組に所属する子ならば全員王国から引き抜くことも不可能ではありません。

「では、乙木さん。クラスメイト達については、私が話を通しておきましょう。また後日、全員を招集してそちらにお伺いしますよ」

「それは助かります。では松里家君に、この件はお願いしても構いませんか？」

「ええ、任せてください！」

ということとで、この件に関しては一旦松里家君に任せることとなりました。

「では、今日はこの辺りで失礼します」

「そうですね。では乙木さん、また後日」

「ええ。それと、ジョアン君は連れて行っても構いませんか？」
「えっ、俺？」

急に名前を出されて、驚いた様子のジョアン君。

「結婚することになりますからね。事情の説明に行かなければなりませんから。できれば、ジョアン君も一緒に来て欲しいのです」

「なるほど。そういうことでしたら大丈夫ですよ。すでに施術は終了していますので、問題なく日常生活に戻れるはずですよ」

「では、ジョアン君。一緒に来てくれますか？」

「わかった！」

と、いうことで。ジョアン君を連れて、私は王宮を後にしました。その後は、まずは真っ先に有咲のところへと向かいました。最初に筋を通すべき相手は、間違いなくすでに妻となっている有咲でしょうから。

そうして、有咲にはジョアン君の事情についてと、私の考えについて。そして他にもマリアさん、シャーリーさん、マルクリーヌさんとも結婚をするつもりであるということも話しました。

すると、有咲は頭を抱えて頂垂れました。

「はあ、頭痛くなるな、これ」

「悪い。本当は有咲を優先したいんだけど、こればかりは」

「いや、重婚のことじゃなくなつてさ。そっちは前からそのつもりだったからいいんだけど。まあ一人予定外の子が増えたわけだけども、それも別によくして」

言つと、有咲は私の方を睨むように見つめてきます。

「どうしてこーなるまで放っておいたんだよおッ！ 性転換するほど思い詰めちゃってんじゃん！ なにしてんのほんと！ バカじゃないのっ？」

「あ、そっちか。いや、うん。悪かったと思ってる。だからこそ、責任を取らなきゃいけないと思ってるわけで」

「まあ、それは分かったけど。でも、ちょっと衝撃的すぎて頭がついていかない」

「はあ、とため息を吐く有咲。そして、ジヨアン君の方を見て言います。

「まあ、アタシは大丈夫だよ。認めてあげる。重婚もそうだし、ジヨアンのこともオツケー」

「ほんとか？ ありがと、有咲ねーちゃんっ！」

ジヨアン君は目を輝かせながら、喜びの笑みを零します。

「でもジヨアン、本当に雄一でいいの？ 後悔しない？」

「うん！ 大丈夫！」

「雄一はスケベだから、もっとお嫁さんが増えて、ジヨアンのことほったらかしになるかもよ？」

「でも、結婚してないよりずっとそっちのがいいよ」

「それに雄一のちんちんはでっかいから、初めては死ぬほど痛いよ？」

「うっ。それは、えっと、頑張るよ！」

「それならよし！ アタシが直々に認めてあげるから、胸張りな！」

「何やら私の身体的な秘密がバラされたりもしましたが、有咲とジヨアン君は上手くやっていけそうな様子ですね。」

この調子で、あと三人にも事情を説明していきましょつか。

23 引き続き事情説明

有咲に事情を説明した後は、マリアさん、そしてシャーリーさんへと説明に向かいました。

お二人ともジョアン君の件については驚いていたようですが、特に拒否感も無く受け入れてくれました。

これで無事、ジョアン君も含めての結婚が出来そうです。

そして最後に、マルクリーヌさんへと事情説明に向かいます。

この日、マルクリーヌさんは非番だとのことで、王都にある自分の屋敷にいらつしやるようです。

なので、私はジョアン君も連れてそちらに向かいました。

マルクリーヌさんは騎士団長という役職もあり、給与も十分なものを得ている為、それなりの大きさのお屋敷に住んでいます。

マルクリーヌさん個人の家であり、住んでいるのはマルクリーヌさん一人だけです。が、屋敷の管理や家事業務を任せる数名のメイドさんを雇っているそうです。

屋敷に向かい、門をくぐると、ちょうど庭の手入れをしていたらしいメイドさんがいたので声を掛けます。

「すみませんが、マルクリーヌさんはご在宅ですか？ 自分は乙木という者なのですが、少々お話したいことがあります。伺いました」
「乙木様ですね。少々お待ち下さい、ご主人様にお伝えしてきます」

そう言つて、メイドさんは屋敷の中へと入つてゆきます。
その数分後、勢いよく屋敷の扉を開け、マルクリーヌさんが姿を見せました。

「乙木殿！　こちらに来てくれたのは初めてだな！　訪ねてきてくれて嬉しいよ！」

「ええ。私もマルクリーヌさんの、騎士姿でない服装を見て嬉しいですよ」

さすがに普段から騎士の格好をしているわけではないようです。一般的な女性が着るものと同様の服装をしています。が、やはり給料が良いお陰なのか、飾りの刺繍等があちらこちらにあしらわれており、高価そうに見えます。

髪飾りも同様に、まるで貴族の女性が身につけるような派手なものを使つており、良いところのお嬢様のようにしか見えません。
騎士団長だと言われなければ、到底気付くことが出来ないでしょう。

「ん？　ところで乙木殿。そちらの女性は？」

「ええ。実は、彼女のことについても話さなければならぬことがあります。ありまして。ゆっくり話をしたいのですが」

「ああ、分かった。それなら来客室で話を聞こう。ついてきてくれ」
言つて、マルクリーヌさんが先導してくれます。私はジョアン君と共に後ろをついて歩きます。

そうして来客室へと案内され、腰を下ろし、よつやく話をする体勢が整いました。

「実はですね」

と言ってから、私は事情説明を開始しました。

ジョアン君の事情から説明すると、マルクリーヌさんはこめかみを押さえ、一言漏らします。

「そういえば、シユリヴァと賢者殿が何やら怪しい研究をしていると噂を聞いていたな。まさか、こんなことをしていたとは」

呆れたような声色で言って、マルクリーヌさんはため息を吐きました。

私は話を続け、いよいよ本題の結婚について。そしてジョアン君のことも認めて欲しいという件についても語りました。

すべてを聞き終えると、マルクリーヌさんは真剣な表情で一度頷き、口を開きます。

「状況は理解した。そして、乙木殿が私や他の内縁の奥方にも筋を通そうとしていることも理解できる。重婚についても問題は無い。

だが、一つだけ、いやいくつか気になる点がある」

「気になる点、ですか。それは何でしょうか」

私が訊くと、マルクリーヌさんはとても真剣な表情で答えます。

「拳式は、どのようにして拳げるのだ？」

24 乙女の祈り

挙式、という思わぬ角度からの問いに、私は想定していた内容を正直に答えます。

「挙式ですか。実は有咲ともやっていないので、今回もささやかな披露宴を身内だけを集めてやるつもりですが」

「そんなっ！ それでは私の夢はっ！ 華やかな結婚式を、花嫁衣装を着て、乙木殿と大聖堂で上げるとい夢はどうなるのだっ！」

「そ、そんな夢があつたのですね」

困りました。有咲はもちろん、マリアさんにシャーリーさん、そしてジョアン君もかなり現実主義的です。式は最低限、お世話になった人への感謝を伝える程度のものでいいという考えで一致していません。

まさか、マルクリー又さんが誰よりも花嫁らしい花嫁にあこがれていたとは。

「それに、住む場所はどうするのだっ！ まさか今までどおりとは言うまいっ？」

「あの、今までどおりの場所に住むつもりでしたが」

「そんなバカな話があるかっ！ 夫婦になったのなら、広い庭園と大きなお屋敷に沢山の使用人っ！ 人目も憚らずにイチヤイチャできる環境っ！ 何より夫婦の営みをするためのロマンチックなベッドルームッ！ そういったものが必要だろうっ！」

「あー、そうですね。言われてみればそんな気がしてきました」

マルクリー又さんの迫力に押され、つい同意してしまいます。

「全く、乙木殿は女心というのが分かっていないなっ！ ふんっ！」

「すみません。でしたらこの際ですから聞いておきたいのですが、他にマルクリー又さんからの要望はありますか？」

「他に、か。そうだな、うーん」

考え込むマルクリー又さん。そして、私の方をちらちらと見ながら、恥ずかしそうに言います。

「そういえば、一度も、その、乙木殿にしてもらったことが無いなと思って。せめて結婚するよりも先に、そういうことぐらいは経験しておきたいな、という気持ちか」

「えっと、何をですか？」

「き、きききっ、キッスだっ！ 乙木殿からキスをしてほしいっ！」

なるほど、そういうことでしたか。

考えてみれば、そういう行爲は有咲以外とは一切やっていません。

婚前交渉は控えるような感覚だったので、たしかにキスぐらいは愛情表現としてあるべきだったかもしれませ

「分かりました。それでは」

「えっ？」

私は席を立ち、マルクリー又さんの隣へと歩み寄り、そして抱き上げます。

「ひゃっ！」

ちょうど、お姫様抱っこと呼ばれるような姿勢です。マルクリー又さんは小さな悲鳴を上げ、顔を赤くします。

「今まで、すみませんでした。これからは、不満に思わせないように気をつけていきますから」

言うと、私はゆっくりとマルクリー又さんに顔を近づけ、そしてキスをしました。

触る程度の優しいキスで、時間も短くすぐに離れます。が、それでも刺激が十分に強かったのでしょうか。マルクリー又さんは、茹で上がったかのように顔を真っ赤にして恥ずかしくっています。

「うつつ、その、乙木殿」

「はい」

「いきなり、ちょっと無理やりっぽいのは、その。嫌いではない、かもしれない」

声色に喜びが隠せていないので、どうやら満足はしていただけた様子ですね。

とりあえず、これでマルクリー又さんも無事納得してくれたはずです。

無事、全員に話を通し、了解を得たのもあり。私は四人と正式に入籍し、夫婦関係となりました。

マリアさん、シャーリーさん。そしてマルクリーヌさんに、ジョアン君。

ジョアン君の戸籍を女性に変更するなど、予想外の手続きもありましたが。無事、全員と入籍することが出来ました。

その後は大規模な披露宴の計画を立て、夫婦生活を営むための屋敷の購入に踏み出しました。

金銭的には問題ない為、五人の妻の要望を可能な限り実現できるようにしました。

あらゆる夢の詰まった、理想のお屋敷。その発注も無事終わり、完成は来年になる予定です。

披露宴はそのお屋敷が完成したら、広い庭をつかってやることに決まりました。

王都の大聖堂よりも、そちらでやった方が思い出深いものになるだろう、という意見が過半数を占めたためです。

マルクリーヌさんは大聖堂での挙式を望んでいましたが、話が進むに連れてお屋敷の庭での披露宴も良いものだど理解したのか、納得してくれましたようです。

そうして五人との結婚生活についてのあれこれを進めていたある

日。ようやく松里家君から連絡がありました。

金浜組の全員と、他にも私のところで働きたいというクラスメイ
トが見つかったそうです。

全員を連れて話を伺いに向かう、とのことで、それが今日です。

乙木商事の本社代わりとして借りている建物の、会議室として使
っている部屋にて。私は有咲、マリアさん、シャーリーさんと一緒
に、松里家君達が来るのを待つこととなりました。

「お久しぶりです、乙木さん！ 全員あちらこちらに散らばってい
たので、少し時間がかかってしまいましたが。どうにか集まりまし
たよ」

言いながら、会議室には松里家君が最初に入ってきます。その後
から、そろそろと少年少女達、そして大人二人が入ってきます。

「いえいえ、全て任せると言ったのはこちらですから。問題ありま
せんよ」

「そう言っていたけると助かります」

安心したような笑みを浮かべ、松里家君は席に着きます。他の面
子も、続々と会議室内の好きな席へと座っていきます。

金浜組の全員が揃い踏みとなりました。

「では、すでに要件についてはご存知かとは思いますが、今一度説
明させていただきますね」

言って、私は皆さんに向かって話し始めます。

「私は乙木商事という企業を立ち上げ、今やルーンガルド王国の各

地に支店を展開するほどの大企業へと成長させることが出来ました。資産力や、国内での影響力を鑑みて、すでに各有力貴族と比べて勝るとも劣らないほどになったと自負しています」

少々自慢のような話から入ってしまうことになりましたが、本題の前提知識から共有しておかないと、都度説明する羽目になりますからね。先に話してしましましょう。

「乙木工業、乙木商会、乙木運輸。この三つの子会社を筆頭に、各事業は順調に成長しています。これは我が社で導入した『魔導車』による大量、かつ高速での運送が可能になったこと、この技術を独占していることを理由にしています。なので、将来的にも成長し続ける見込みです」

まさか、そこまでのことになっているとは思っていなかったのでしょうか。驚いている子達もいるようです。

「また、ウエインズヴェールとの大口契約を交わしていますので、食品関係、そして農業関係の事業にも今後手を伸ばしていく予定です。すでにある程度の食品生産、販売事業には手を出していますが、これを乙木商会の管轄ではなく、個別の子会社の事業へと分離していく予定です」

例えば、すでにウエインズヴェールの名産品として、トーフの輸出には手を出しています。王都を始めとした各地で流行しており、かなりの売上になっています。

やはり食品関連の需要は大きいのでしょうか。なので、今後はそういった方面にも力を入れていきたいのです。

「ですが、一つだけ難しい問題があります。事業を広げていく上で、

どうしても避けられない問題。管理職以上の従業員の不足です」

そう、その点が最大の懸念点なのです。

26 現代日本人は優秀

「新しい事業に手を付けるよりも。施設を作るよりも。商品開発をするよりも。管理職を任せられる人材を育てることの方が、ずっと難しく、時間がかかります。すでに乙木商事の従業員のうち、優秀な人材は各地で店長を努めていたりします。これ以上子会社を増やすとなると、最近入ったばかりの新人を管理職を任せられるまでに育て上げなければなりません」

そうならば、実際に子会社を設立するまでに一年や二年では足りないほどの時間が必要となるでしょう。

「そこで、今回のお話に繋がります。皆さんを、我が乙木商事の役員、あるいは管理職以上を務める職員として雇いたいのです」

「あの、質問があるんですが」

手を上げ、声を出したのは仁科雪さんです。

「私たちは、日本では普通の学生でした。急に仕事をしてくれって言われても、出来るかどうか分からないんですけど」

「そこはご安心ください。現代日本で義務教育を受けた皆さんなら、間違いなくすぐに管理職として通用しますから」

私は安心させるように言ってから、より詳しく解説します。

「まず、この世界の一般的な労働者のレベルは高くありません。三桁以上の四則演算が出来ない人も少なくありません。中には、文字の読み書きも怪しい人だっています。そんな状況下で、義務教育を終え、複雑な四則演算をすることも可能な皆さんは労働者としても優秀な部類に入ります」

言つと、仁科さんは納得したような表情を浮かべます。

「それに、日本人ですからね。言われたことを、言われたとおりに正直にこなす。それが出来るというだけでも、十分に優秀です。残念ながら、この世界の人達はかなり適当ですから。これから管理職になる以上、皆さんも苦勞することになると思いますよ」

私が冗談っぽく言ってみせると、ちらほらと苦笑を浮かべる子が見当たりました。どんな苦勞をするのか、想像がついたのでしょうね。

「では、質問は他にありませんか？」

私が尋ねると、特に誰も挙手することはありませんでした。ひとまず、ここまででは了解したということでしょう。

「それでは。ここからは、皆さん一人一人に適切な役職を割り振っていきましょう」

こうして、各自へと様々な役職の割り振りが始まりました。中でも、食品事業についてはクラス担任であった木下ともえさんに任せることに。養護教諭であった鈴原歩美さんには、乙木運輸にて治療業務を統括してもらうことにしました。

他にも様々な役職に、少年少女達を割り振っていきます。私の見

覚えのない子達も新しく金浜組に入っていたので、そういった子についてはよく話し合ってから役職を決めます。

ただ、残念なことに松里家君はどの役職も割り振ることが出来ませんでした。さすがに賢者スキル持ちともなると、王国が手放してはくれないようです。同様の理由で勇者の金浜君、聖女の三森さん、剣聖の東堂君は引き抜き出来ません。

そうしておよそ二時間ほどかけて、この場集った全員に役職を割り振り、引き抜きについての詳細をまとめ、本題は終了しました。

「さて。これで全員に役職を割り振りましたね。以上で今日は終わろうと思っておりますが」

「すみません、乙木さん。少し待ってもらえますか」

ここで、松里家君が声を上げます。

「実は、もう一人だけお願いしたい奴がいるんです。遅刻で、今はここに来ていないのですが」

「ほう、遅刻ですか」

となると、二時間も遅刻していることになりますね。

松里家君は心底申し訳無さげな表情を浮かべています。どうやら、相当な問題児なのでしょう。事実、この場に居ないというやらかしをしているわけです。

「分かりました。その子についてはまた後日」

「ちいっす！遅れてごめんねっ」

私が松里家君へと了解の旨を告げようとした時。突如会議室の扉を開け、軽い調子の声が響きました。

まるで反省していない様子で入ってきたのは、一人の少女。派手な金髪にピンク色のメッシュが入っており、それをポニーテールに纏めているのが特徴的に見えます。

「おい涼野ッ！ お前が参加したいって言ったんだろっ！ なんてこんな時間になるまで来なかったッ！」

「え〜？ いや、朝ダルかったし。起きらんなかったんだからしょうがないじゃん？」

悪びれない少女は、松里家君の苦言も半笑いで受け流します。私の隣に座っている有咲が、その様子を見て声を漏らします。

「え、美沙じゃん。なんで？」

どうやら、有咲とも関係がある人物のようですね。

27 問題児、涼野美沙

松里家君に涼野、有咲に美沙と呼ばれた少女。どうやら声に気づいたのか、驚いたような表情を浮かべ、有咲さんの方を向き直ります。

「あれ？ 有咲じゃん、久しぶりい」

「うん、久しぶりだな、美沙」

旧友に再会したかのような、涼野さんの反応。けれど一方で、有咲さんはどこか気まずそうにしています。

ここは空気を読んで、私が会話に入りましょう。

「涼野さん、と言いましたね。話は松里家君から聞いているんですよ？」

「あ？ なに、このおっさん。誰？」

「バカかお前は！ この人が雇用主の乙木さんだッ！」

「あー、そなんだ」

叱りつける松里家君。それで納得したのか、涼野さんは頷きます。が、どこか気怠げな態度については改める様子がありません。

「そんじゃあ、このおっさんがウチのこと雇ってくれんだ？」

「そうなる。だから態度を改める涼野！」

「は？ 知らねーし。オカマは黙ってるよキモいな」

松里家君に向かって失礼なことを言いながら、涼野さんは私の方へと近寄ってきます。

そしてすぐ横まで歩み寄ってから、行動に出ます。

「そんじゃあ、宜しくねえ」

ニンマリ笑う涼野さんは、何かのスキルを発動した様子でした。その力が発動したのか、魔力が私に向かって流れ込んできます。身体の中に入り込み、良くない働きをしようとしていたので、私も魔力を高めるような意識をして抵抗します。

すると、涼野さんに送り込まれた魔力は霧散し、消失しました。

「それじゃー、おっさん。後はよろしくう」

「何をですか。それよりも、何をしたのですか？」

私が何事もなかったかのように冷静につぶやくと、涼野さんは驚きます。

「え、マジ？ おっさんに抵抗出来たんだ。めんどくさ」

「涼野ツ！ お前、スキルを使ったのかッ！」

「いーじゃん、別に。そんなんウチの勝手でしょ」

「やめると言っておいたはずだぞッ！」

「事情が読めないのですが。松里家君。これはどういづことですか？」

涼野さんと争う松里家君に、私は説明を求めます。すると、松里家君はここで冷静さを取り戻し、一息ついてから口を開きます。

「すみません、乙木さん。つい冷静さを欠いてしまいました。では、

この涼野美沙がどういう経緯でここに来たのかからご説明いたします」

そうして、松里家君から説明されたのは、予想だにしない内容でした。

まず、この涼野美沙という少女ですが、最近まではとある貴族の子飼いの勇者として活動していたのだとか。

そして、女神から与えられたチートスキルは『魅了魔法』。異性を魅了の魔力で支配、洗脳し、自分の思うがままに動くように変えてしまう魔法だったのです。

ただ、この魅了魔法。使い所は非常に難しいものでした。まず、支配できない相手が普通に存在します。

一つは、魔力で自分より勝る相手。つまり自分よりも強い相手は基本的に支配できません。

また、何らかの精神汚染に対する耐性があるスキルがある場合も支配不可能となります。

しかし、状況によっては例外もあります。それが性行為やキスなど、性的な身体接触を伴いながらの魅了魔法の行使です。

長時間、濃厚に性的接触を行うことで、相手の耐性や魔力のギャップを無視しての支配が可能となります。時間が長く、性的接触がより濃厚であればあるほどその程度は強くなります。

その性質を利用し、涼野さんはとある貴族の下で『接待』役として働いていたのだとか。

お陰でその貴族は多数の商会の有力者を自身に都合よく支配し、急激に勢力を拡大してきたのだそうです。

ただ、涼野さんはやりすぎました。支配により得た権力を私利私欲の為に使い、やりたい放題に遊びたい放題。結果として損失があまりにも大きすぎると判断され、最終的には放逐。再び王宮で身分を預かることになったそうです。

そうして王宮内にてほぼ軟禁状態で生活していた所で、松里家君がこちらの勢力に組み込めないかと考え、声をかけた。

そして呼びかけに応じ、涼野さんはこちらに顔をだした、という流れだったのですが。

その後のことはすでに起こったとおり。なんと、涼野さんの魂胆は私を魅了魔法で支配し、その資産で好き放題遊び呆けることだったというわけです。

28 侮辱と怒り

すべての説明を終えた後、松里家君は頭を下げます。

「すみません、乙木さん。問題のある人物だとはわかっていたんですが、最初から私の判断で無視するのもどうかと思い、誘っていました」

「いえ、大丈夫ですよ。私も、同様にチャンスは与えてあげようと考えていますから」

「は？ チャンス？ 何様だよオッサン」

私の言葉が気に食わなかったのか、涼野さんは苛立った様子で声を上げます。

「失言でしたね。申し訳ありません。ともかく、貴女を雇うこと自体については問題ありません」

「あつそ。で、どんぐらいお金くれるの？」

「最初は研修から始まりますからね。一般的な労働者の、新人に支払う程度のものになりますよ」

「そんなん絶対遊べないじゃん。無理無理。ふざけてんの？」

「能力を示せば、それに応じて給料も上がりますよ」

「ちっ、めんどくせーな。わかった分かった」

了承しながら、涼野さんが僅かに怪しい笑みを零します。それを私は見逃さず、念押ししておきます。

「ちなみに、ですが。当然、貴女のスキル『魅了魔法』を使うことは禁止します」

「はあ？ ふざけんなし。意味分かんないんだけど」

「そもそも、他人に精神汚染系の魔法を使うのは違法行為ですからね。もう貴女は特権階級ではありませんから。そんなことをすれば、すぐに捕まって牢屋行きですよ」

「くそかよ。死ねバーカ！」

今度こそ、本気で嫌がっている様子で表情を歪める涼野さん。それを見て、有咲が真剣な表情で口を開きます。

「ねえ美沙。悪いことは言わないから、真面目に働いた方がいいよ」

「は？ 有咲、あんた何言ってるの？」

「世の中、美沙が思ってるほど甘くないからな。魅了魔法なんて使ったら逮捕されるのも本当だし、真面目に働かないと生きていけない。もう昔みたいになんて遊んでばっかいられないんだよ」

「なにそれ、ウケる。有咲、あんたバカになっただんじゃない？」

残念なことに、有咲の忠告は涼野さんには全く響いていない様子。それどころか、有咲に向かって侮辱するような言葉を口にします。

「そもそもさ、何様のつもりでウチに口出ししてるわけ？」

「それでも、アタシは乙木商事の会長補佐だから。雄一の次に偉いし、その分責任もある。注意ぐらいはするよ」

「は？ なにそれ。意味分かんない」

呆れたような表情を浮かべた後、すぐに涼野さんは何かに気づいたような表情を浮かべます。

「あー、そういうこと。おっけ、分かったわ」
「何がだよ」

「有咲さ、そのオッサンと寝たんじゃ？ それでいい思いして、調子こいてるわけだ」

「美沙。ふざけたこと言ってるよ、怒るよ」

「怒んなし。ホントのことじゃん？」

「まるで有咲が枕営業で今の地位に居るような言い草ですね。それは違いますよ」

私も、さすがに有咲をここまで馬鹿にされて黙っているわけにはいきません。二人の口論に口を挟みません。

「有咲は自分で努力して、勉強して、仕事をして。貴女が嫌がつているようなことを地道に、真面目に続けて、そして実力を証明した結果ここに居ます。決して不埒な手段で会長補佐の座に就いたわけではありません」

「あっそ」

私の反論を信じていない様子で、涼野さんはニヤニヤ笑いを止めません。

「じゃあさ、オッサン。有咲からウチに乗り換えたい？ ウチの方が経験豊富だし、絶対めっちゃ気持ちいいよ？」

その言葉で、ついに堪忍袋の緒が切れたのでしょうか。

有咲が席を立ち、そして涼野さんの前まで迫ってから。

「パァンッ！ と、甲高い音を立てながらビンタを叩き込みました。

「ふざけんじゃねーよ」

怒りに震える有咲。その感情の強さが、声色からもはつきりと分かります。

ビンタを受けた涼野さんの方は、信じられないような表情を浮かべた後、すぐに有咲の方へと睨み返します。

「ちっ、なんだよ。マジになってんじゃねーよ。こんなキモいおっさん、こっちだって抱かれたくねーんだよ」

「雄一のこと、馬鹿にすんな」

「はあ？ 何、アンタ、こんなおっさんにマジになってんの？ キモっ、趣味悪いわ」

吐き捨てるように言うと、涼野さんは有咲へとビンタをやり返します。

しかし、残念ながら有咲の方がステータスが優れており、身体能力に格差があります。たやすく受け止められ、ビンタは失敗しました。しかも、腕はそのまま有咲によって掴まれ、拘束されてしまいます。

「クソッ」

「もうやめな。とりあえず、謝れよ」

「あー、そうですね。ウチが悪かったよ、これでいいんだろっ！」

完全に、形だけですが、涼野さんの口から謝罪の言葉が出ました。それを認めて、有咲は手を離します。

すると、涼野さんはイライラした様子を隠そうともせず、早足で会議室から出ていきます。

その様子を見送った後、私は有咲を後ろから抱きしめ、声を掛けます。

「ごめんな、有咲。つらい思いをさせた」

「うん。アタシこそ、我慢できなくてごめんね」

「いいよ。むしろ、俺の代わりに怒ってくれてありがとう」

「うん、雄一のこと、馬鹿にされて、許せなかったから」

そうして、波乱もあったものの。有咲を慰めつつ、この日の話し合いはここで終了することとなりました。

騒動もありましたが、結局私は涼野さんを雇うことに決めました。問題は多いですが、チャンスを与えずに放り出す、というのも良くありませんからね。

まずは乙木工業の工場の中でも、特に簡単なライン作業を任せてみることにしました。

涼野さん以外の引き抜いた人材は、全員が配属先で順調に仕事を覚えていきます。半年もすれば十分に役員として仕事ができる程度まで育つだろう、と見込んでいます。

しかし、残念ながら涼野さんはまるで役に立っていません。簡単なライン作業でさえ遅く、ミスが目立ちます。

そこで、製品の組み立て機械の監視を任せることにしました。資材の投入さえしていれば、仕事は機械が勝手にやってくれます。

機械がエラーで止まった場合は、状況に応じた対応をする必要がありますが、他の職員を呼んでもらい、対応してもらおう予定です。そして少しずつ対応方法を学んでいき、長い目で見ていけば良いだろう、と見立てたのです。

しかし、これもダメでした。涼野さんはまるで仕事を覚える様子すら有りませんでした。教えたことを一切覚えなるところか、機械が勝手に動いてくれるからと、勝手にどこかへ抜け出してサボり出すほどでした。

監視の目が無ければダメな様子だったので、乙木商会の方で接客員として雇ってもみました。

しかし残念ながらこれも失敗。仕事は他人に押し付けてばかりで、接客の態度も悪い。」

最終的には、なんとレジからお金を抜いて、勝手に遊びに使っていることが判明。

さすがに問題が大きすぎる為、涼野さん呼び出し、私が直接面談をすることになりました。

「涼野さん。なぜ呼ばれたのか、分かっていますね？」

「は？ 知らんし。意味分かんない」

「仕事を真面目にしないことまでは、まあ許容しましょう。他にもそういう人はいます。普通ならそういった人はすぐにクビになりますが、貴女は地球出身の元高校生ですからね。特別に、長い目で見て、少しずつでもいいから成長してくればと考えていました」

「じゃあ別にいいじゃん。帰っていい？」

私の説教を鬱陶しそうにしながら、涼野さんは帰宅の要求をします。が、当然これは認めません。

「駄目です。まだ話は終わっていません」

「じゃあ早く話せよカス。ダルいんだよ」

「では単刀直入に言いましょう。涼野さん。貴女は魔道具店のレジにあつたお金を盗み、自分の遊びの為に使い込みましたね？」

「は？ そんなんやってないし。証拠でもあんの？」

ニヤニヤと、笑いながら涼野さんは言います。確かに、言う通り明確な証拠はありません。この世界には監視カメラなどありません

から。誰も見ていない時にお金を抜いてしまえば、犯人の特定は不可能になります。

しかし、そういう世界だからこそ、特定など不要なのです。

「勘違いしているようなので、先に言っておきましょう。この世界は、現代日本ではありません。誰の目にも明らかな動かぬ証拠、なんてものは要らないんですよ。私や、乙木商会の魔道具店には信用があります。そんな私たちが、レジの中のお金の計算が合わないと言っている。その原因は貴女にあるとしか思えないと言っている。だったら、貴女が犯人なんですよ。証拠など無くても」

「はあ？ ふざけんなよッ！」

涼野さんは怒りに任せて、私の胸ぐらを掴んできます。が、さすがにステータスの格差が大きすぎますからね。簡単に回避し、涼野さんの腕を掴んで拘束します。

「そうやって、すぐ暴力を振るう。大きな声で相手を威圧しようとする。それでどうにかなると、本気で思っているんですか？」

「うっせえなアッ！ ゴチャゴチャ言っでんじゃねえよ！ 冤罪だろ、取り消せよクソジジイッ！」

「確かに、証拠が無いのも事実です。現代日本に生きていた者としては、それで貴女を牢屋送りにしてしまうのは心苦しいとも思っています」

「は？ なんだよ、じゃあ最初っからそう言えよバーカ」

私の言葉に安堵したのか、涼野さんの態度が軟化します。

ですが、残念ながら安心するのはまだ早い。本題はここからなのですから。

「ですから、残された解決案はただ一つです。涼野さん、貴女を我が乙木商事から解雇します」

解雇、という言葉が信じられないのか、涼野さんは一瞬だけ呆気にとられていました。

が、すぐに怒りが再燃。私に向かって猛抗議を始めます。

「ふざけんなよッ！ オツサンてめえ、ウチらみたいな奴らを保護したかったんじゃないのかよッ！」

「それは事実です。が、最優先目標ではありません。あくまでも、転移者の保護は可能な限り、という条件付きの目標に過ぎません」「だったらウチのこともちゃんと保護しろよッ！ 金持ちなんだからそんなくらい出来るだろーがよオ！」

納得のいつていない様子の涼野さんを、私はさらに追い詰めるように拒絶していきます。

「確かに、不可能か可能か、で言えば可能です。貴女が仕事をしなくても、遊ぶ金を十分に渡しつつ保護し続けることも出来ます」

「じゃあそうしろよ！」

「したい。と、本当に思ってもらえるつもりだったんですか？」

私はより視線を鋭くして、一つずつ涼野さんの悪行を本人に告げてゆきます。

「工場では一番簡単なライン作業すら上手に出来ない。機械を見る

だけの仕事も出来ない。仕事を覚えるつもりもない。すぐにサボってどこかに行く。だから人の目のある場所に配属すれば、今度は他人に仕事を押し付ける。ここでも仕事を覚えれない。接客をする気も無い。あげくの果てには、レジの計算すら合わなくなる」

「関係ねえだろ！　ウチが苦手なことばっかやらせといて、ふざけんなし！」

「ええ、苦手なことは誰にだってあるでしょう」

私は一瞬だけ肯定し、すぐに否定の言葉を連ねます。

「しかし、普通は努力します。出来なければ、出来るようになるだろうと考えます。それでも出来なければ、申し訳ないという気持ちが高き上がってくるでしょう。普通なら」

「だから何だよッ！」

「気づいていますか、涼野さん。貴女はここまで、一度も謝罪の言葉や、努力する意欲を示す言葉を口にしていないんですよ」

「はあ？　それが何だっていうんだよッ！」

言われて、涼野さんはまともな反論もせず、ただ声を荒げるだけになりました。

「そうですね。涼野さんは、保護してもらいたい。お金をもらいたい。でも自分は働きたくない。大変な思いをしたくない。そう考えているようにしか、こちらからは見えません」

「そんなことねえよ！」

「実際にどうかは関係ありません。私から見ても、涼野さんは自分勝手に、迷惑千万です」

そう、涼野さんの心の内など関係ないのです。実際に何をしても、こちらから見てどのように映るか。それ以外に、他人の価値を判断

する手段など無いのですから。

「つまり、私から見ても、不愉快なんですよ。涼野さんは」

「ざけんなッ！」

「そして不愉快な人間を、わざわざ保護したい、なんて思いません。少なくとも、私はそうです。だから貴女を保護しない。当たり前の話です」

「うるせえ！ 死ねよカス！」

もはや、涼野さんの口からはまともな反論の言葉が出てくる様子すらありませんでした。

暴言を好き放題に吐き捨て、十分に喚き散らした後。ようやく落ち着いたので、一度口を噤みます。

そこで私は、拘束していた腕を開放してやります。

しばらく、涼野さんと私は睨み合いのような状態を続けました。

が、痺れを切らしたように涼野さんの方が口を開きます。

「知らねーからな。ウチのこと放り出して、後悔してもおせえぞ」

「そうですか。では、もう貴女は従業員でも何でもありません。出ていって下さい」

「言われなくても出てくに決まってるんだろ！ こんな所、二度とこねえよッ！」

吐き捨てるように言って、涼野さんは退室。

こうして涼野さんは、我が乙木商事から解雇されることになったのです。

本人はたかが解雇、と思っていることでしょうか。

残念ながら、これで終わりではないのです。

解雇された後、涼野さんは低ランクの冒険者を魅了魔法で支配し、金銭を受け取って生活していたようです。

そんな噂が聞こえてきたのは、解雇から一ヶ月後。当然、魅了魔法のような精神汚染系のスキルや魔法を人間に使うのは違法行為です。涼野さんは逮捕され、その噂は王都中に広まることとなりました。

通常なら、涼野さんのやったことは重罪です。規模が大きかったので、三十年以下の懲役刑もあり得たとか。

しかし、それでも王国にとっては貴重な召喚勇者の一人です。また、魅了魔法を悪用していた貴族も自身の悪事が広まることを恐れた為か、涼野さんを庇いました。

結果、牢屋行きになることだけは回避されました。

その後は、さすがに魅了魔法を使うことはマズイと理解したのでしょう。涼野さんは冒険者を支配することなど無く、普通に働くようになりました。

しかし、何箇所かをクビになった後は、悪評が広まりきってどこも雇ってくれるようなことは無くなりました。

結果、冒険者登録をして、冒険者として生計を立てることになつたようですが、以後の噂は一切聞かなくなりました。

姿は見かけられているようなので、死んではいない様子。しかし、

かなり見窄らしい格好をしているらしく、かなり苦しい生活を送っているようです。

まあ、そうなるように追い込んだのは、私でもあるのですが。

違法なことは何もしていません。ただ、うちの従業員に『このよ
うな元従業員がいるので注意するように』という通達をしただけで
す。

そう、我が乙木商事全体に向けて、です。

そうになると、涼野さんがどれだけ厄介で、危険で、不利益を生む
存在であるかが広まります。

その噂はやがて外部にも行き渡ります。

そして噂が広まった結果、涼野さんは『あの乙木商事でも問題行
動を起こした犯罪者』として王都中の誰もが認知することになった
わけです。

当然、普通の事業者であれば、涼野さんのような人間を雇うこと
はありません。

前科がある、などを直接の理由にはしないでしよう。しかし前科
持ちの悪名高い人間というのは、それだけで厳しい目で見られるこ
とになります。

すると、どんな些細な問題も大きなものに捉えられてしまいます。

たとえば、態度が悪い、やる気が見られない、など。

いくらでも、彼女を不採用にする正当な理由が見つかります。

そうなれば、もうお終いです。どこにも雇ってもらえない涼野さ
んは、冒険者として登録する他なくなります。

そして彼女のスキルでは、冒険者としてはやっていけないでしょ

う。

効果対象が異性に限られる以上は、同性の魔物には何の意味もありません。

ちよつと他人より成長しやすいだけの少女では、とてもじゃありませんが冒険者など続けられません。

優秀な、屈強な成人男性が、さまざまな経験を通して得た知識を活用し、それでも時には命を落とす業界ですからね。

安全な、王都内で完結するような仕事は最底辺故に薄給であり、ギルドの中抜きもあつて本人に渡る金額は雀の涙ほどになります。

とてもではありませんが、つい最近まで贅沢ばかりしていた少女に耐えられる環境ではないでしょう。

そうして、涼野さんを解雇してから約三ヶ月後。

涼野さんが、私に会いたいと言って、魔道具店で暴れる事件が発生しました。

すぐに駆けつけた衛兵が捕縛。涼野さんは、牢屋に入れられることになりました。

ここまで、私が予想していた通りの展開となりました。

では、最後のひと手間を掛けにいきましょうか。

逮捕された涼野さんの、面会に向かいます。

32 後悔先に立たず

衛兵の詰め所の、面会室にて。私が涼野さんとの面会を希望し、待機していると、やがて拘束された状態の涼野さんが二名の衛兵に連れられ、入室してきました。

その様子を見て私はひとまず安心しました。

というのも、涼野さんはかなり憔悴してこそいましたが、怒りや恨みといった負の感情は一切見られなかったからです。

ここまで彼女を追い込んだのは、理由があります。それは、社会というものは自分が好き放題出来るほど甘いものではない、という事実を思い知ってもらうこと。

これが出来なければ、涼野さんはいずれ魅了魔法を使った犯罪を理由に、投獄、あるいは死刑となる可能性があります。

ですので、かなりの劇薬でしたが、彼女の思い上がりを社会に、世間の目によって叩きのめしてもらいました。

ただ、これにはリスクもありました。追い込まれることで、その責任を社会、ないしは私に向けて転嫁する可能性があったのです。

しかし現在の様子から察するに、そういった感情があるようには見られません。少なくとも、私に対して恨みや怒りがあったから暴れた、というわけでは無さそうです。

その場合は一切の更生の目が無くなるわけですから、獄中で残りの人生を過ごしてもらおうことになっていたでしょう。

今の乙木商事の力であれば、そういった形で彼女を『保護』することも可能になりますからね。

席に座り、私と向かい合う涼野さん。左右を衛兵に挟まれた状態で、面談は開始されます。

「ごめん、なさい」

第一声は、涼野さんの謝罪の言葉でした。

「ウチが、間違っていました」

「そうですね」

しかし、私は冷たい声で突き放すように言います。

「私の店で暴れた理由を、教えてもらえますか？」

問いかけると、涼野さんは少し悩んだあと、ぽつぽつと事情を話し始めます。

「ウチは、最初は魅了魔法でいろんな人を操って、成り上がって、おっさんに復讐しようとしてた。でも、バレて、捕まって、魅了魔法使ったらやばいって分かって、なんもできなくなっただけ」

泣きそうになりながら語る涼野さん。申し訳なくも思いますが、ここで優しくするわけにはいきません。まだ、彼女は最も重要なことを理解していないはずですから。

「それで、冒険者になって。ゴブリンに囲まれて、殺されそうになっただけ、マジで怖くてっ！」

涙も、ついに溢れます。それでも、私は冷たい視線を向けたままです。

「もう、外で冒険者の仕事とか絶対やりたくなくて。それで、色んな所で雇ってもらおうとしても、おっさんのとこクビになった出来損ないなんか雇いたくないって言われて。もう、生活も出来なくなつて」

「聞いていないことを話さずに、要点だけ話してくれませんか」

あえて、厳しい言い方をします。涼野さんは、怯えたようにビクリ、と身体を跳ねさせますが、すぐに落ち着き、話を続けます。

「えっと、それでとにかく、おっさんに謝って、許してもらわないと、どこでも働けそうにないから、おっさんに会わせてくれて頼みに行つて。でも、拒否されて、それでパニックになって、ウチ、店の人に」

「そうですか、事情は分かりました」

私が言うと、涼野さんは安堵した様子です。しかし残念ながら、安心するのはまだ早いでしょう。

「それで？ 私に会って、何をするつもりだったんですか？ 今、ここでやってもらってもいいですよ」

私が言うと、涼野さんは意を決したような表情をして、口を開きます。

「ごめんなさいっ！ ウチが、全部間違っていました。調子乗ってましたっ！ ウチ一人じゃ、生きていけないんです！ だから、どう

か、許して下さい！ もっかい、雇って下さいっ！ どんな仕事でも、ちゃんと頑張るから！」

その言葉を聞き、私は涼野さんが本当に反省しているのだと理解しました。口調や表情からも、嘘を吐いて騙そうとしている様子は見られません。

恐らくは、本気で悪かったと思い、次からは心を入れ替えて頑張るつもりなのでしょう。

しかし、今更もう遅い。

「そうですね。要件はそれだけですか？ なら、私は帰らせてもらいます」

無慈悲に言い放ちます。

涼野さんの表情には、絶望が浮かんでいました。

33 信用と挽回

「だめ、ですか」

沈んだ表情を浮かべた涼野さん。そこに、私は無慈悲な言葉を投げ掛け続けます。

「どうやら勘違いをなさっているようなので、訂正しておきますが。私は、別に涼野さんのこれまでの行為に対し許せない、といった感情を抱いたことはありません」

その言葉には、何かを期待するような表情を見せる涼野さん。

「そもそも、事業者というのは個人の感情で従業員をクビにしたり、あるいは雇用したりするようなことはありません。たとえ私個人が涼野さんを心底憎んでいても、涼野さんが望むなら雇用するしかありません」

「だったらっ！」
「ですが、それは涼野さんが被雇用者として十分な能力がある場合です」

手の平を返すような言葉に、涼野さんの表情が凍りつきます。

「誰でもいい、というわけではありませんからね。従業員を雇うなら少しでも優れている方が良い。涼野さんの場合は、仕事を真つ当

にこなせなかったという結果がすでにあります。ですから、雇うこととはありえないと言っていていいでしょう」

「それなら、ウチ、頑張りますっ！ これからは、ちゃんと仕事を覚えますから」

「そうですね。頑張ってください。我が社以外のどこかで」

言われた涼野さんは泣きそうな表情を浮かべますが、それでも私は容赦せずに言葉を続けます。

「謝罪も、意欲の表明も自由です。しかし、それは貴女的能力を保証するものではありません。すでに下った評価は変わりませんから。涼野さんは、どれだけ謝罪したところで、真面目に働くことのない人間という評価のまま変わりません」

「なら、どうすれば、雇ってもらえますか？」

その問いは、最後の希望だったのでしよう。

が、私はそれも打ち砕きます。

「涼野さんが優秀であると証明して下さい。ちゃんと仕事ができる人間であると、誰にでも客観的に分かるようにして下さい。そうすれば、雇うこともあるでしょう」

「それは、どうすれば」

「さあ。少なくとも、自分で考え、自分でやるべきことでしょう。

こちらには、わざわざ無能な人間を観察する義務などありませんからね」

つまり、行動で示すことすら不可能だということです。誰にも見てもらえなければ、どれだけ努力しても理解されない。

一度信用を失った以上、彼女の努力は誰にも見向きされないのです。

それがようやく理解できたのか、涼野さんは諦めたような表情を浮かべます。

そして、涙を流し、嗚咽を漏らし、さめざめと泣くだけのことしか出来なくなりました。

恐らくは、これで自分の信用というものがどれだけ大切か理解したはずです。

この段階になって、ようやく解決策を話すことが出来ます。

「一つだけ、解決策があります」

私が提案の言葉を口にすると、涼野さんは顔を上げ、こちらを見ます。

「貴女の信用は、すでに取り返しがつかないほど失われています。ですが、それはこの王都とその近辺の街に限ります。遠い領地の、かつ大きな街であれば話は変わります。涼野さんのやる気次第では、雇ってもらえる場合もあるでしょう」

そこまで言うと、涼野さんは再び暗い表情を浮かべます。何しろ、彼女は今ほとんどお金を持っていない状態です。遠くの街へと向かうにも、乗合馬車などを使わなければなりません。その料金を払うことが出来ない以上は、実行不可能な解決策でしかありません。

「ですが、私としては問題のある人間を他社に送りつけるような行為はしたくありません」

言って、私は一つの封筒を取り出し、涼野さんの前に差し出します。

「あの、これは？」

「ここに、紹介状といくらかのお金が入っています」

「っー」

驚きに、目を見開く涼野さん。構わず、私は話を続けます。

「今、乙木商事では新しく農業関連の事業にも手を出していく予定があります。その関係で、ウェインズヴェール領の方で新しく子会社を立ち上げました。そちらの責任者は貴女の元担任教師でもある、木下ともえさんですから、話もしやすいでしょう」

「えっと、つまり」

「ええ。そちらで、いち従業員として最初からやり直して下さい。くれぐれも、同じ失敗を繰り返さないように」

話は、これで終わりです。涼野さんは、とても大事そうに封筒を受け取り、頭を下げました。

「ありがとうございますっ」

34 かつての自分

翌日、涼野さんはウエインズヴェールに向かって出発することになりました。乗合馬車は使わず、乙木運輸の配送車に同乗する予定です。

さすがに、今の涼野さんはかなり見容らしい外見をしていますからね。そのまま乗合馬車に乗ってしまうと、何かしらのトラブルに巻き込まれる可能性もあります。

ウエインズヴェールで再就職が叶うまでは、きつちりとフォローしてあげましょう。

そして、以上の経緯を私は有咲に伝えました。

かつての友人でもあったはずですから、一応は気に留めていたのでしょうか。話が上手くまとまったことを知って、安堵しているようでした。

「美沙、ちゃんとやり直せるんだね。良かった」

「やっぱり、友達のことは気になってたのか？」

「うん、まあそれもあるけどさ」

言っと、有咲は複雑そうな表情を浮かべて話します。

「もしかしたら、アタシも美沙みたいなことになってたかもって思ってたさ」

「有咲が？」

「うん。アタシにさ、もし雄一が居なかったら。雄一があの時、アタシのことを助けてくれなかったらって思うと、やっぱり他人事には思えなかったから」

確かに、有咲もまた、たった一人で放り出されていました。あの時、私が有咲を偶然見かけていなければ、かなり苦しい境遇に追い込まれたはずです。

「だから、美沙のやること、駄目なところがさ。かつての自分にダブって見えて、ずっと気になってたんだよね」

「そうだったんだな。ならやっぱり、助けたのは正解だったかな」

「そだね。さすがにあのまま美沙が貧乏で苦しんで死んじゃったりしてたら、後味悪いし」

結果として、有咲の懸念もまた解消出来たのですから。一石二鳥といったところでしょう。

「それと、改めてアタシ、恵まれてるなって思った」

「そうなのか？」

「だって、雄一にずっと守られて、大切にされて。今は、まあ、ちよっとアタシ以外のお嫁さんが多すぎるけど、ちゃんと愛してくれてるって分かるし」

「でもそれは、有咲が自分で頑張ったから手に入ったものだよ」

私が言うと、有咲は首を横に振ります。

「アタシが頑張るきっかけを作ってくれたのが雄一だから。ずっと昔、アタシが小さい頃に雄一と出会えたから。それが巡り巡って、アタシのダメな所を直すきっかけになった。雄一と一緒にいたいから、頑張れた」

そこまで言うと、有咲は私の方へと近寄り、頬にキスをします。

「ありがと、雄一。それと、これからもよろしくね」

私は、微笑みながら返事をします。

「ああ。こちらこそ」

そして有咲を抱きしめて、キスを返します。

有咲の言う通り、たしかに有咲は恵まれていたのでしょうか。

偶然とは言え、私と出会えた。そして変わるきっかけを手に入れ、実際に変わることが出来た。

ですが、その偶然を加味しても、やはり有咲の今は有咲自身が頑張ったからこそそのものだと思います。

そして有咲が恵まれているのと同時に、私も恵まれています。

有咲と出会えたからこそ、今こうして、愛する人を腕の中に抱きしめていられます。今日に至るまでのあらゆる困難が、有咲と出会えたからこそ乗り越えられたのだとも思っています。

もしも出会うことがなかったら。私も、有咲も、涼野さんのように、取り返しのつかない失敗をどこかで犯していたかもしれませんが、だからこそ、彼女を見捨てる気にはならなかった。どこかで何かの歯車が違えば、きっと涼野さんもああはならなかっただろう、とどこかで思っていたのですから。

そして涼野さんが今日、やり直そうと足を踏み出したように。私

と有咲は出会い、様々なめぐり合わせの結果、二人一組で歩き始めました。

それはとても奇跡的で、かつかけがえのないものなのだと、改めて思います。

これからも、有咲と共に。

未来に向かって、二人三脚で歩いて行こう。と、強く思います。

35 時代は進む

事業を幅広く展開することとなった乙木商事は、急速に成長していきました。

資金面もさることながら、技術面でも大幅に躍如。潤沢な資金、資源、人材を活用し、当初の目標であった魔導コンピューターの開発も進んでいきました。

そうして、乙木商事の設立から約三年の時が経過して。ついに、実用的な魔導コンピューターが完成しました。

さらには、魔導コンピューター同士をネットワーク化することにも成功しました。

電波塔ならぬ魔力波塔を建設し、基地局化することでルーンガルド王国全土のあらゆる場所と通信可能に。

これにより、乙木商事のあらゆる子会社、店舗が、魔導ネットワークを通じて繋がります。

おかげで、これまでは乙木運輸を介して出していた各地への指示を、魔導コンピューターを介しての方式に変更できました。

どのような場所であっても、ほぼタイムラグ無しで即座に指示ができ、逆にこちらへの報告も可能となりました。

そうして形成した魔導ネットワークを利用し、外敵に対して警戒するシステムも構築しました。

高い魔力を持つ存在の座標を検知する、レーダーのようなシステムをすべての基地局に設置。これにより、ルーンガルド王国内であれば、高い魔力を持つ存在を常に検知可能となりました。

つまり、危険度の高い外敵がルーンガルド王国内に侵入した場合、その存在を即座に発見出来るわけです。

そして、その外敵がどのような経路で、どのような場所を目指しているのかについても把握できます。

このシステムがあれば、例えば魔王軍の幹部がルーンガルド王国を目指して潜入してきたとしても、漏れなく発見可能です。

よって、乙木商事に所属する召喚勇者の皆さん、そして私自身と有咲の安全を確保することが、より容易になります。

そんな状況下にて。私は有咲と共に、王都近郊に新たに建設された『とある建築物』を目指し、魔導車に乗って進んでいます。

すでに魔導車の道路も整備されており、王都からは多少離れているものの、交通の便は悪くありません。

「それにしても、ようやくここまで来れた」

私は魔導車を運転しながら、隣の座席に座る有咲に話しかけます。

「資金も得た。権力も得た。戦力も十分に揃えた。これで、ようやく当初の目標が達成できそうだ」

「それってアレでしょ、雄一とアタシの安全確保ってやつ」

「ああ」

有咲の言葉に頷き、話を続けます。

「でも、これで終わりじゃない。まだ外敵、潜在的な危険はいくらでもある。むしろ、乙木商事をここまで大きくした以上、その分敵対する可能性のある相手も増えたとも言えるからな」

「それって、終わりが無いってことにならない？」

「まあ、そうだな。でも、ある程度で区切りをつける必要はあると思ってる」

そう言っつて、私は今後の計画についても話していきます。

「これまでは、守る為の力をつけるために頑張ってきた。それは逆を言えば、敵そのものについてはずっと放置してきた、ってことにもなる」

「ってことは？」

「これからは違っつてことだよ」

そこまで話し終えたところで、目的地に到着します。

魔導車から降りて、そして、目の前に聳え立つ『巨大ビル』を見上げます。

「ここからだ。この俺たちの城、『乙木商事本社ビル』を中心に、次の戦いが始まるんだ」

そう。この巨大ビルこそが、私が資金力にものを言わせ、建設した『乙木商事本社ビル』です。

新たな拠点、様々な機能を持った要塞とも言うべき本社ビルを得て、いよいよ私は次の段階に踏み出していくのです。

現在存在する明確な敵や、今後敵を生み出すようなリスクの排除。そのための一歩を、踏み出します。

35 時代は進む（後書き）

ここまでお読み頂き有難うございます。

今回の章は、少々駆け足気味になってしまいました。開の無い乙木商事の発展成長を冗長に続けすぎるのもどうかと思い、本社ビル建設まで一息で進める形となりました。

次章からは、本社ビルを舞台にした戦い、そして登場人物たちの成長や交流等が描かれる予定となっております。

もしよろしければ、ブックマーク、そしてページ下部の をクリックして、評価ポイントの方を頂けると幸いです。

01 魔王登場（前書き）

お久しぶりの投稿再開です。宜しくおねがいます。

01 魔王登場

乙木ビル、防衛対策本部。
アラームの鳴り響くその部屋に、私は入室してすぐに状況確認をします。

「何があつたのですか？」

「未知の莫大な魔力反応が検知されました！」

報告を上げてくれたのは、我が乙木商事の防衛対策部門で雇用している職員の一人です。

タッチパネル操作の可能な無数の魔導コンピューターを操作しながら、状況の把握に努めているようです。

「規模は魔力圧、魔素量共にSクラス以上！ 過去に無い規模の反応です！」

「なるほど、だとすると恐らくは」

「会長ッ！」

私が推測を口にしようとしたところで、また別の職員が報告を上げます。

「魔力反応ですが、非常に高速で移動を続けています！ 進路予測は、七十パーセント以上の確率で乙木ビル本社と重なります！」

「では、もうほぼ確定ですね」

私はついに、革新的な言葉をはっきりと口にします。

「ついに、来たようですね。我々の最大の敵、魔王が」

その言葉を受けて、職員たちの間に一気に緊張が走ります。

「では、既に決めてあるとおりのオペレーションを実行します。各自、速やかに行動を開始してください」

私の指示を受け、職員たちは行動を開始します。

いよいよ始まるのです。私と、魔王の戦いが。

様々なシミュレーション、予測とプランニングの上で、これからは行動していきます。

今回の作戦、何が何でも成功させなければなりません。

私は魔王の到着予想地点、乙木ビル本社前にて一人待ちます。

今回の作戦、魔王と正面からの衝突を避けることに最大の意味があります。

もし仮に乙木商事と魔王が直接の戦闘を繰り広げた場合、その被害は計り知れないものになるでしょう。

ですからこうして、交渉と取引の為にまず私が矢面に立つ必要があるのです。

「来ましたね」

少し待っていると、遠くから複数の人影が空を飛びつつ接近して

くるのが見えました。

その接近速度はかなりのもので、みるみるうちに距離は縮まり、すぐに姿の詳細が確認できるくらいになりました。

「ほう、妾の接近を事前に把握しておったとは。中々にやりおるのう?。」

その声を上げたのは、接近してきた集団の先頭に立つ人物。長く輝くような美しい銀髪に、真っ赤な瞳を持つ少女。いえ、少女と呼んでも差し支えないほどの幼い外見をしています。

ただ、人間の少女と異なるのはその頭部。まるでオーガなどの魔物のような、大きな角が左右に一本ずつ生えています。

「魔王様、お気をつけください。魔王様の隠蔽を見破る程ともなれば、相応の術士のはずです」

次に口を開いたのは、魔王と呼ばれた少女に続いて地面に降り立った女性。まるで天使のような翼を持った背の高い美女です。

「ほう、術士ならば吾輩の出番では無いな。つまらぬ小細工をされずは興醒めだからな」

そう語りながら続いて降り立ったのは、獅子のような姿を持つ、恐らくは獣人と呼ばれる人種の男性です。

今回訪れた一同の中で最も体格が優れており、二メートルを軽く超える身長に、丸太のような太さの筋肉に包まれた手足を持っています。

そして、三人に続いて十数人の男女が降り立ちます。その姿は二番目に降り立った美女と同じく、天使のような翼を持つ者ばかりで

す。

さて、いよいよ交渉開始といきましょうか。

「ようこそいらっしやいました。私がこの乙木ビルの代表者であり、乙木商事の会長を務めております、乙木雄一という者です」

「ほう？　本丸が自ら顔を見せるとは、随分と余裕があるようじゃのうっ。」

私の名乗りを受けて、魔王と呼ばれた幼女がニヤリと笑います。

ひとまず、すぐさま戦いが始まる、といった雰囲気ではなさそう
で安心しました。

01 魔王登場（後書き）

いくつか告知をさせて頂きます。

まず、当作品『クラス転移に巻き込まれたコンビニ店員のおっさん、勇者には必要なかった余り物スキルを駆使して最強となるようです。』のコミカライズが決定致しました。

<i576173—23830>

漫画担当は結城焰先生です。

続いてですが、今回コミカライズを記念しまして、Narrative Worksの方で一挙連続投稿を開催致します。

当作品に加えて、Narrative Worksの他著者による作品を含めた毎日の連続投稿が9日間続きます。

ページ下部には各作品へのリンクも用意してありますので、是非そちらから今回の一挙連続投稿をお楽しみください。

02 自己紹介

「名乗りを上げられたのであれば、こちらも返すのが道理というもののじゃのう?」

そう言って、魔王と呼ばれた少女は私に名乗りを返してくれます。

「妾こそが、魔王領七州の元首にして今代の魔王。天上下唯我無双の存在っ！ ヴラドガリア・フォン・エルドラントであるッ！」

名乗りと同時に、魔王、ヴラドガリアさんは包み隠していたらしき魔力を開放します。

その魔力量は、これまで私が見てきたどのような相手よりも膨大で、さすが魔王といったところででしょうか。

「ほれ、おぬしらも名乗らんか」

魔王に促され、続いて天使のような美女が名乗りを上げます。

「私は魔王様の補佐、側近を務めさせて頂いているサティーラという者だ。天使族の代表でもあり、後ろに並んでいるのはその縁で集めた親衛隊だ」

美女、サティーラさんは言って、後方に控える十数名についても説明してくれます。ここまで詳しく教えて下さるとは、親切ですね。

かなり生真面目な性格と見えます。

「吾輩は魔王軍四天王の一人にして、四天王最強の男！ レオニスという者だ！」

最後に威勢よく名乗りを上げたのは獣人の男、レオニスさんでした。

四天王の中で最強、ということは、これまでに私が撃破してきた魔王軍四天王よりは遥かに強い、ということなのでしょう。

それぐらいの力量差が無ければ、わざわざ最強などと名乗るはずがありませんからね。

「ご丁寧に、ご紹介いただきありがとうございます。ではヴラドガリアさん、まずは今回の来訪の理由についてお教えいただけませんか？」

「ふむ。語るまでもないかと思っただが、尋ねられたなら答えよう」

ヴラドガリアさんはそう言って、頷いてから詳細を語り始めます。

「切っ掛けは、人間共が妙に強力な武装を一般兵にまで装備させ始めたことであった。妾は戦場のことには基本的に関わらぬのじゃが、さすがに我が軍の被害が増えすぎておつてのう。原因を探った所、乙木商事なる企業が原因であると判明したのじゃ」

「確かに、この国の兵士が装備する魔道具の数々は、私たちが開発したものですな」

私はヴラドガリアさんの発言を肯定します。

「じゃから、妾は考えたのじゃ。その乙木商事なる企業を潰してしまえば、我が魔王軍が恐れるものは無くなるであろう、とな」

「なるほど。となると、今回の来訪は？」

「うむ。汝ら、乙木商事の壊滅が妾の目的じゃ」

やはり、魔王軍としては乙木商事の活動は見過ごすわけにはいかなかったようですね。

これまでも、魔王軍と思われる組織による破壊工作は幾度となくありましたが、それらは全て失敗しています。

だからこそ、こうして今回は魔王が自ら出てくることになったのでしょうか。

「事情は理解致しました。それではヴラドガリアさん。こちらから一つ、提案がございます」

「ほう、提案とな？ 良かろう、言ってみせよ」

どうやらヴラドガリアさんは相当な自信があるらしく、余裕の様子で私の発言を許してくれています。

これは、私が唯一人だけで姿を現したことも影響しているでしょうね。おっさん一人ぐらい、問題なく始末出来ると考えているのでしょうか。

「この度の戦いですが、ルールを設けてみませんか？」

「ルール、とな？」

「はい。分かりやすく言えば、ゲームをしましょう」

「うむ、面白い事を言うのではないか。続きを申せ」

どうやらヴラドガリアさんの反応は悪くない様子。このままこちらの要求を全て伝えてしましましょう。

03 防衛ゲーム

「我々、乙木商事は皆さんを迎える準備があります。ですが、殺しは無しでいきましょう」

「何故じゃ？」

「重要なのは勝ち負けであり、相手を屈服させること。お互いに相手を殺すことが目的ではないでしょうか？ であれば、勝敗が決まれば殺し合うまで戦う必要は無いはずですよ」

「じゃが、殺さねば言うことを聞かぬ可能性もあるじゃろう？」

「ええ。ですから、ゲームにルールを設定するのです」

私は、考えてあったルールの詳細を告げます。

「この乙木ビルには、地下最深部に最も重要なサーバー、言うなれば乙木商事の心臓とも言える施設があります」

「それを言っても良いのか？」

「構いません。皆さんには、そのサーバールームを目指して乙木ビルの地下を侵攻していただきます」

「自ら明け渡すつもりかえ？」

「いいえ。これで終わりではありませんよ」

ここからが、今回の提案、ゲームの本質的な部分です。

「サーバールームまでの道のりには、七つの関門を用意してあります。それぞれの関門にて、我が乙木商事自慢の戦力を携えた戦士た

「ちが皆さんの妨害を致します」

「ほうほう、つまり妾たちはその関門とやらを倒し、突破せねばならぬ、と?」

「そういうことです」

納得がいった、という様子でヴラドガリアは頷きます。

「そして、皆さんをサーバルームまで到達させずに撃退出来れば我々の勝利。そちらがサーバルームに到達すれば、ヴラドガリアさんの勝利ということになります。そして敗北した側は、勝利した側の要求に従わなければならない」

「なるほど。そのような状況であれば、もし汝らが約束を反故にしようものなら、その場で暴れてお主らに大きな損害を出すことが可能となる、ということじゃな?」

「はい。それが、我々が約束を守ることを保証する要素になるかと」

私の提案に、ヴラドガリアさんは考え込むような仕草を見せます。ですが、次に返答をしたのはヴラドガリアさんではなく、サティーラさんでした。

「魔王様。このような提案、受ける必要はありません。カづくで全てを蹂躪し、破壊し尽くしてやれば良いのです」

サティーラさんの主張は、私が最も恐れていたものでした。

仕方有りませんね。ここは一つ、脅しにかかるしかないようです。

「本当に、それで良いのですか?」

「なんだと?」

私に言われて、不機嫌そうにサティーラさんが睨み返してきます。

「人間風情が調子に乗るなよ」

「そうですか。しかし、私としましては、そちらにとっても良い提案が出来たと思っていますのですが。何しろ」

そこまで言って、私はこれまで隠していた私の魔力も、それこそヴラドガリアさんがやったように開放し、堂々と見せつけてやります。

「な、なんだとッ！」

「ヴラドガリアさん以外の皆さんとは、これだけの力の差があるのですから。正面から戦うともなれば、勝ち負けがどうなるにせよお互い少なくない犠牲を出すことになってしまおうでしょう」

私の魔力量に驚いているのか、サティーラさん、そして後ろの天使族の皆さんが焦り、緊張した様子を見せています。

レオニスさんは表面にこそ出していないものの、無闇に争うべきでは無いと理解できたのでしょう。黙って事の行く末を見守っていません。

そして、私の魔力も見て決断出来たのでしょうか。ようやくヴラドガリアさんが口を開きます。

「分かったのじゃ。汝の提案を受け入れよう」

「魔王様ッ！」

「黙るのじゃ、サティーラ。ここで戦えば、お主らは間違いなく死ぬぞ」

「それぐらいは、覚悟の上ですッ！」

「それが無意味じゃと言っておるのじゃ」

「どうやら、ヴラドガリアさんはこちらの提案を受け入れて下さるようです。」

「もしもこれが畏だとしても、妾の力であれば畏ごと食い破ることも出来よう。しかし、力だけではお主らを守ることは出来ぬ。そして国を動かすには、お主らの力も必要じゃ」

「魔王様っ」

「ふむ。所詮は人間、と侮って配下を連れてきたのは失敗であったな」

「どうやら、無事作戦は成功したようです。」

「こうして圧倒的な実力差を見せつけることで、配下の命を実質的な人質に取る。そうすることで、お互いの損害を最小限に抑える戦いがようやく成立しました。」

「さて、人間よ。乙木、と言ったかえ？ お主の提案、受け入れよう」

「ありがとうございます。それでは、ご案内しましょう。まずは、第一関門の方に挑戦していただきます」

ヴラドガリアさん達を先導し、乙木ビルの中へと招き入れます。

これで作戦の第一段階は無事成功しました。

「この調子で、残りの作戦も無事成功するよう尽くしていきましょう。」

04 第一関門

乙木ビル地下へと通じる階段を下り、さらに進むと真っ白な廊下が続く空間に出ました。

「ここからが、乙木ビル地下の戦闘を想定したエリアです」

私が言うと、ヴラドガリアさんは感心したように周囲を眺めながら語ります。

「ほう、ここがそうなのじゃな？ 白く美しい、見たことの無い素材じゃが」

「ええ。我が乙木商事が開発した、新素材セラミックスです」

「せらみ、なんちゃらというものは分からぬが。汝らが生み出したというのじゃな？」

「そうですね」

私は頷き、さらに説明します。

「ここで使われているセラミックスは、魔素を分散させながら浸透させる効果を持っています。簡単に言えば、魔法の無効化ですね」

「ほう、無効化とな？」

「ええ。容量に制限があるので、無限にはいきませんが。この先にある、関門エリアでは私が全力で攻撃をしても平気な程度には容量を確保してあります」

質量に応じて魔素を分散吸収する素材なので、鎧などには使用できない素材です。しかし、この地下エリアのような、激しい戦闘を想定した空間では、魔法に対する高い破壊耐性を持つ優れた建材となります。

「なるほど。では、試しても問題は無いのじゃな？」

「ええ。ヴラドガリアさんの攻撃は、さすがに廊下では遠慮いただきたいのですが。他の方であれば」

「では、サティーラよ」

「はっ！」

ヴラドガリアさんの指示を受け、サティーラさんが壁に向かって手をかざします。

そのまま光の魔法が掌の前に収束してゆき、十分なエネルギーが集まったところでレーザーのように放射されます。

が、その魔法のエネルギーは壁面と衝突した段階で見事に霧散し、無効化されてしまいます。

「くっ」

「ほうほう、サティーラでも無理であれば、我が軍では妾以外には破壊不可能じゃろうな」

悔しそうな表情を浮かべるサティーラさんと、面白そうに壁を眺めるヴラドガリアさん。

また、サティーラさんの攻撃すら無効化されたことを見て、後ろに続く兵士達も驚きの表情を見せていました。

ちなみに、壁面に吸収された魔素はそのまま外部へと抽出し、別の場所にある魔素貯蓄施設へと送る仕組みとなっています。

太陽光やその他の手段でも集められた魔素は、全てこの魔素貯蓄施設に一度集められ、各施設で利用する為に再度送り出されます。言わば、現代日本における発電所のような役割ですね。

そうした仕組みがあるため、この空間で吸収された魔素は再利用されますし、時間で飽和状態が解消される為、素材の張替えなどにも必要ありません。

このように非常に都合が良い構造をしている為、普段は戦闘訓練を行う為の施設としても利用しています。

「さて、そろそろ第一関門です」

私は、前にある大きな扉を見据えながら言いました。取っ手などの付いていない、恐らくはヴラドガリアさん等には見慣れない形状の扉です。

「ほう、これが扉なのじゃな？」

「ええ、見ていてください」

私は扉に近づくと、その脇に設置されている認証装置に掌を翳します。

すると、装置が私の魔素の特徴を読み取り、データベースと照合。一致している場合ロックが解除され、扉が左右にスライドして開きます。

「さあ、開きますよ」

そして認証が完了し、いよいよ第一関門の扉が開きます。

「ほう、これはなんと、面妖な」

スライドして開く扉を見て、その奇妙さに驚く皆さん。
ですが、本番はここからです。

「さて、お入りください。その後、第一関門の説明を致します」

私に促され、ヴラドガリアさん達はそろそろと第一関門の部屋へ
と入ってゆきます。

それにつき、私も入ります。

「では、第一関門についてですが。対戦相手は我が乙木商事とも契
約を結んでいる冒険者パーティとの戦闘となります」

そう言つて、私は部屋で先に待っていた冒険者パーティの皆さん
に視線を送ります。

そこに待っていたのは、今となつては見慣れたメンツ。

「待ちくたびれるところだったわ」

そう呟いたのは、召喚された勇者達の一人であり、今回協力して
もらう冒険者パーティのリーダーでもある仁科雪さん。

そしてその後ろには、同様に召喚勇者の皆さんが並んでいました。

04 第一関門（後書き）

一挙連続投稿、一日目終了です。

もし宜しければ、ブックマークと評価ポイントの方を頂けると助かります。

また、ページ下部には今回の一挙連続投稿作品へのリンクも用意してありますので、是非そちらからお楽しみください。

05 冒険者パーティ、勇なる翼

その冒険者パーティの名前は『勇なる翼』。我が乙木商事で働く召喚勇者の中でも、高い実力を持つ方々が集い結成された冒険者パーティです。

元々は趣味のような形で始まったパーティなのですが、今では活動も本格化しており、乙木商事と直接契約して素材採集の依頼を受ける場合もあっていっています。

そして肝心のパーティメンバーですが、まずはリーダーであり『魔法無効化』のスキルを持つ仁科雪さん。

次に副リーダーであり、発起人でもある『絶対鑑定』の真山正蔵君。

お目付け役として、元教師でもある『完全回復』の鈴原歩美さんと、『暗殺術』の木下ともえさん。

最後に、なんとかつて我が乙木商事で数々の問題行動を起こした『魅了魔法』の涼野美沙さん。

この五人が勇なる翼の中心メンバーとなります。

「ほう、ただの冒険者ごときが我々を相手出来るとでも？」

何やら癪に障った様子で、サティーラさんが声を上げます。

「そうですね。私は、この五人であれば後ろの兵士の皆さんを相手

にすれば十分に戦えると思いますよ」

「彼らは我が魔王軍のエリート達だ。一般兵などではないぞ？」

「ええ、それも把握していますよ」

むしろ、ちゃんと魔素量等を測定済みですからね。

その数値からどの順番で戦うかを決めてありますので、むしろ当然のこととも言えます。

そもそも、言ってしまうえばこちらこそただの冒険者ではなく、召喚勇者ですしね。

「では、第一関門では冒険者パーティ『勇なる翼』対、魔王軍エリート兵士の皆さん、という構図で構いませんか？」

「ふん、望むところだ。人数差を理由に後から文句を付けるなよ？」
「もちろんです」

挑発的なサテイヤさんの態度も、私は軽く流しながら答えます。

「では 双方、構えてください」

私が宣言すると、勇なる翼の皆さんが前に出てきます。

「ここで終わらせるぐらいのつもりで、やらせてもらおうわ！」

自信ありげに語りながら、一番前に出たのは仁科さん。大きな盾と片手剣を構えており、パーティではタンクの役割を担っています。

「会長！ 勝てば約束どおり、アレをよろしくおねがいますっ！」

続いて前に出たのが真山君。装備はカッコいいから、と本人が言っていた理由により二丁拳銃。魔力を弾丸にして打ち出す特別製の

魔道具です。

ちなみにアレとは、真山君用の新しい銃の制作です。彼は時折、こうして取引によって専用装備を手に入れていきます。現在装備している二丁拳銃も同様の手段で手に入れたものです。

「それよりも貴方たち、怪我しないように注意しなさい」

盛り上がる二人に忠告したのは、ヒーラーを担う鈴原さん。治癒の魔法を使うらしく、その系統の魔法を強化する杖を装備しています。

「まあ、私が後ろから守りますから。鈴原先生も安心して下さい」

そう言つて、短剣を構え鈴原さんの前に出たのは木下さん。短剣の他にも複数の隠し武器を装備しており、パーティでは斥候や遊撃を務めています。

「いいとこ、見せるもんね！」

そして最後に言つて杖を構えたのが、涼野さん。攻撃魔法を扱う後衛の攻撃力の要となっており、鈴原さんと同様にパーティの後方に立っています。

勇なる翼の五人が構え終わり、戦闘準備が完了したのと同様に、魔王軍側のエリート兵士達も準備を終えた様子。

前衛と後衛に分かれ、それぞれが装備を取り出し、臨戦態勢となっています。

双方の準備が整いました。いよいよ、第一関門開始です。

「それでは、勝負を開始して下さい」

私がそう宣言することで、いよいよ戦いが始まります。

06 真山正蔵

最初に動き始めたのは真山君でした。

「ハハハハッ！ 喰らえ、撃滅のクリムゾンバレットオ！」

ノリノリで宣言しながら二丁拳銃を構え、連射していきます。

横に駆け抜けながらの制圧射撃で、エリート兵士の前衛が一斉に突撃するのを防ぎます。

かつ、弾丸が当たった兵士には確実にダメージも与えます。

なお、真山君の宣言していた撃滅のなんたら、というのは彼が趣味で名付けているだけの技名です。

魔力の弾丸が赤いのも、特に効果があるわけでもなく彼の趣味で赤くなるよう拳銃に細工されています。

そんな真山君ですが、実力は確かなもの。現在のステータスはこうだった状態です。

【名前】 真山正蔵

【レベル】 43

【筋力】 B

【魔力】 A

【体力】C

【速力】B

【属性】土

【スキル】絶対鑑定

冒険者としてはAランクにも相当する実力であり、実際に活動期間がもう少し長ければAランクの評価が貰える状態です。

そんな真山君の属性は土であり、魔力の弾丸を硬質化させ、さらに威力を上昇させる為に役立っています。

そして、真山君の真骨頂はここからです。

「くそ、あのわけのわからん武器を使う男を狙えッ！」

エリート兵たちのリーダーらしき天使が指示を出し、これに後衛の天使が対応。

真山君を狙い、魔法攻撃を放とうと構えます。

しかし、これに真山君は、まるで全てが分かっていたかのように反応します。

「無駄だね！ 我がアブソリュート・ヴィジョンの力の前には無力うっ！」

ノリノリで語りながら、天使たちが魔法を発動させようとした瞬間に弾丸を撃ち、妨害します。

そのタイミングは、どれも正にジャスト。誰もがあと少しでも時

間があれば攻撃魔法を発動していたのに、というタイミングで妨害を受けています。

これこそ真山君の真骨頂である『絶対鑑定』を利用した攻撃です。スキル『絶対鑑定』の効果は、あらゆるものを必ず鑑定するといふもの。これを利用し、真山君は常に攻撃の予兆を『鑑定』すること、さながら未来視でもしているかのように行動出来るのです。

二丁拳銃という装備も、的確、かつ素早く相手の攻撃の予兆に先制攻撃を加えるのに適しています。

アブソなんちゃらという技名こそ彼が趣味で名付けただけのものであり、少しふざけた調子に見えますが、実力は本物です。

やがて、後衛にも弾丸が分散したことで、一部の前衛が真山君へと近づきます。

「くらえッ！」

「無駄無駄あ！」

当然、これも予兆を見切り、簡単に回避してしまいます。

こうして『絶対鑑定』に頼り切っている為に、体力のステータスが伸びていないのが玉に瑕ですが、それ以上の恩恵がある為、接近戦でも真山君の戦闘能力は衰えません。

攻撃を回避した直後、真山君は拳銃を持ったまま相手の剣を弾き、腕を絡めとり、投げて転がしてからその顔面に魔力の弾丸を連射します。

いわゆるガン・カタである、と真山君が称していたこの動き。これがあるので、真山君は拳銃装備でありながら、勇なる翼というパ―ティの前衛戦力を務めているのです。

しかし、さすがに多勢に無勢。真山君一人では、相手に囲まれ、逃げ場がなくなった段階で『絶対鑑定』の恩恵も無意味なものとなります。

そうした真山君の弱点を補う役割も担っているのが、パーティのタンク役でもある仁科さんです。

真山君が格闘戦を繰り広げた隙を突き、後衛が一斉に魔法攻撃を放ちます。

これを見た真山君は、即座に後退

「仁科、スイッチだッ！」

そして仁科さん呼び、入れ替わるように仁科さんが前に出ます。ここからが、仁科さんの独壇場となります。

飽和攻撃、と呼べるほどの数の魔法が、仁科さんへと向かって飛んでゆきます。

しかし、仁科さんは一切慌てていません。

「『魔法無効化』ッ！」

そう宣言すると同時に、盾を構えます。

そして仁科さんへと集中し、直撃する寸前になって、無数の魔法攻撃はまるで煙のように霧散して消滅しました。

「な、なんだッ？」

エリート兵達は見事に意表を突かれ、驚いていますね。

しかしすぐに気を取り直し、前衛の兵士達が一斉に仁科さんへと近寄ります。

この間も、当然真山君の射撃による援護があるので、これを潜り抜けられた数名だけが仁科さんへと接近出来ました。

通常、タンク役というのは体力が高い場合は魔法攻撃の耐性は高くないのが一般的です。

そして魔法攻撃に強い場合はその逆。つまり、魔法が物理、どちらかが弱点となる場合が多いのです。

そして仁科さんの場合は明らかに魔法に強かった為、常識的に言

えば物理攻撃に弱いはず。

だから、エリート兵達は前衛が接近出来た時点で、勝ちを確信していました。

しかし、残念ながらそうはなりません。

「くらえッ！」

「ふんっ！ 『魔法無効化』ッ！」

一人の兵士が攻撃を繰り返し、これを仁科さんが盾で防ぎます。また、同時に『魔法無効化』を発動。

「なっ！ ち、力が」

「ハアッ！」

突如、力が抜けたようにガクリ、と身体を揺らした兵士を、仁科さんは盾越しに体当たりをして吹き飛ばします。

これこそが、仁科さんの真骨頂。『魔法無効化』を、相手に掛けることによるバフの無効化です。

通常、ある程度の魔力を持つ者は無意識のうちに戦闘時は魔力による身体強化を多かれ少なかれ発動させています。

これもまた魔法効果の一種であると考えれば、当然『魔法無効化』の対象となります。

そして突如身体強化のバフを失った相手は力が抜けたような感覚に陥り、バランスを崩すことで簡単に弾き飛ばされてしまう、というわけです。

「くそがッ！」

「これでも喰らえッ！」

「オラアッ！」

続いて、三人が同時に仁科さんを狙います。一斉に攻撃すること
で、その圧力で仁科さんを倒そうという魂胆でしょう。

しかし、残念ながら仁科さんはこの程度ではびくともしません。

「甘いわよッ！」

ガキンツ、と音を立てて、仁科さんの盾が三人の同時攻撃をあつ
さりを受け止めます。

想定以上の仁科さんの防御能力に、目を見開く三人のエリート兵
士達。

それも当然。仁科さんのステータスはこのようになっているので
すから。

【名前】 仁科雪

【レベル】 48

【筋力】 A

【魔力】 C

【体力】 A

【速力】 C

【属性】 氷

【スキル】 魔法無効化

そう、ステータス的には完全に物理型のタンクなのです。

むしろ魔法攻撃をスキルで無効化している為、魔力の伸びの方が悪いぐらいです。

どうしてここまで筋力と体力が伸びたのか。その理由を以前聞いたことがあります。

その時の答えは『沙織に抱きついて、最近はずぐに剥がされるから。そうならないように努力したのよ』とのことでした。

確かに聖女である三森沙織さんのステータスはSに届いています。そんな相手に抱きついて剥がされない、という訓練をしていれば体力と筋力が伸びるのも当然でしょう。

ただ、なぜそんな形式で訓練をしているのかは謎ですが。

「吹き飛ばす！ 『魔法無効化』 ツ！」

仁科さんは再び『魔法無効化』を発動し、三人のエリート兵を同時に吹き飛ばします。

「くそっ！」

「まだまだ！ 凍れッ！」

さらに追撃として氷の魔法を発動。破壊力よりも、相手の動きを阻害することを目的とした魔法です。

広範囲の敵の身体を凍らせ、凍えさせて身動きを取りづらくする魔法。これにより、ただでさえ真山君に制圧されていた前衛がさらに動きを制限されてしまいます。

前衛が制圧されたことで、真山君の射撃は後衛の魔法を阻害するのに集中出来るようになりました。

もはや、攻撃を受けるばかりのエリート兵士達。攻める余裕すら

無
い
と
い
う
の
が
。

08 涼野美沙と木下ともえ

相手の動きが止まった今こそ、魔法攻撃の要である涼野さんの出番となります。

「いくよっ!」

タイミングを見計らい、涼野さんは攻撃魔法を放ちます。

同時に真山君と仁科さんは後退。巻き込まれないように下がります。

涼野さんが放ったのは、風の魔法。刃のように鋭くなった風が竜巻のように荒れ狂う攻撃魔法です。

が、今回は殺しは無しの勝負ですので、刃ではなく風の礫が舞っているようです。

巨大な竜巻が、身動きの取れない前衛を巻き込み、さらには後衛にまで及んで荒れ狂います。

「ぐわあああッ!」

「ぼ、防御をッ!」

「駄目だ、間に合わない!」

それぞれが異なる悲鳴を上げながら、風の暴力に巻き込まれ、次々と吹き飛ばされてゆきます。

無数の風の礫に身体中を打たれて、巻き込まれた者たちの殆どがダウンしてしまいます。

それでも立ち上がる余裕のある者も居ましたが、涼野さんはさらに追撃を仕掛けます。

「『動くな』っ！」

涼野さんがそう宣言した瞬間。魔法を受けたにも関わらず立ち上がろうとしていた者たちが、例外なく身動きを止めてしまいます。

「な、何が」

意思に反して身体が止まってしまう奇妙な現象に、エリート兵達は困惑します。

これこそが、涼野さんのスキル『魅了魔法』を戦闘に生かした結果です。

魅了魔法は、ある程度の魔力を持つ相手には途端に掛かりにくくなります。

だから、そこを解消する為に攻撃魔法と共に魅了魔法を解き放ち、相手の身体に無理やり叩き込むのです。

そうすることで、一時的ではあるものの相手に『魅了魔法』の効果が及ぶようになります。

今は、まさにその『魅了魔法』を使い『動くな』と命令を与えた結果、エリート兵達が立ち上がれなくなったというわけです。

そんな涼野さんの、現在のステータスは以下のとおり。

【名前】 涼野美沙

【レベル】 39

【筋力】 C

【魔力】 B

【体力】 C

【速度】 C

【属性】 風

【スキル】 魅了魔法

ステータス的には、Bランクの冒険者相当ですが、魅了魔法を攻撃魔法に込めて放つという特殊技能が評価され、真山君や仁科さんと同様にAランク冒険者としてギルドから評価されています。

「ぐうっ、まさかここまでとはッ！」

エリート兵達の指揮官、リーダーらしき天使がそう呟き、悔しさを表情に顕にします。

そんな彼の背後に近づく影が一つ。

「そのとおり、『ここまで』ですよ」

そう言っつて、鋭い短剣をリーダーの首筋に当て、命を取る寸前で動きを止めたのは勇なる翼の遊撃役。『暗殺者』スキルを持つ木下さんです。

この『暗殺者』というスキルは、『隠密』や『隠蔽』、『気配遮

断』などと言った、複数のスキルが複合されている複合スキルです。一つ一つは一般的に存在するスキルであるため、チートスキルの複合スキルである『勇者』や『聖女』等には劣りますが、高い汎用性と性能を誇るスキルであるのは事実です。

今回の動きも、涼野さんの攻撃魔法に全員の意識が向いた瞬間に、複数のスキルを使い気配を消し、相手の背後に回りました。

そして気配を消したまま大将であるリーダー格の天使へと近づき、『暗殺者』という名にふさわしい動きで相手を制したのです。

そんな木下さんのステータスは以下のとおり。

【名前】 木下ともえ

【レベル】 46

【筋力】 B

【魔力】 C

【体力】 B

【速度】 A

【属性】 闇

【スキル】 暗殺術

闇属性の魔法には姿を隠したり、気配を誤魔化したりするような補助的な魔法がたくさん存在するため、スキル『暗殺術』との相性も非常に良いと言えます。

ステータスも含めて、正にアサシンとも呼ぶべき素晴らしい適正の持ち主です。

「どうなさいますか？ このまま続けます？」

「い、いや。参った」

木下さんに問われて、リーダー格の天使は両手を上げて降参します。

こうして無事、勇なる翼による第一関門の戦闘は終了。勝利という形で終わりました。

08 涼野美沙と木下ともえ（後書き）

一挙連続投稿、二日目終了です。

もし宜しければ、ブックマークと評価ポイントの方を頂けると助かります。

また、ページ下部には今回の一挙連続投稿作品へのリンクも用意してありますので、是非そちらからお楽しみください。

自慢のエリート兵士達があっけなくやられてしまったのを見て、サテイーラさんが悔しそうにしています。

いえ、むしろこれはブチギレている、とでも言っべき状態でしょう。

「今すぐ戻りなさいッ！ この恥晒し共ッ！」

サテイーラさんに感情的に怒鳴りつけられ、満身創痍の兵士達は必死に戻ろうと動き始めます。

ボロボロのまま動くこうとする兵士達を見て、鈴原さんが動きます。

「ああ、ちよつと待ってください。今回復しますから」

そう言っつて、鈴原さんは負傷した兵士たち全体にスキル『完全回復』を発動しました。

すると、肉体的なダメージはもちろんのこと、武器や防具の損傷までもが戦う前の状態まで戻ってゆきます。

これが『完全回復』スキルの効果です。体力だけではなく、武器や防具の損傷までも回復する効果があります。

さらには、肉体の治癒に関しては欠損した状態からでも治癒が可能です。

その分、魔力の消費も激しいスキルなのですが、現在の鈴原さん

のステータスは以下のとおり。

【名前】 鈴原歩美

【レベル】 44

【筋力】 B

【魔力】 A

【体力】 B

【速力】 C

【属性】 治癒

【スキル】 完全回復

表記上はAであるものの、かなりSに近いAらしく、鈴原さんの魔力はまだ余裕があります。

そして、鈴原さんは自身に『完全回復』を使うことで高負荷の体カトレーニングを続けられるので、その恩恵もあり筋力と体力も高めです。

実際、敵に接近された場合は杖を使つての肉弾戦もこなすようです。

そうこうしているうちに、兵士たちの治療も終わります。兵士たちは気まずい表情を浮かべながら、サティーラさんの方へと戻っていきます。

そして戻ってきた一同に鋭い視線を向けながら、サティーラさんは言います。

「貴様らが、こんなにも出来ない奴らだとは思わなかった。次は私が出る、ここで見ていなさいッ！」

そうやって怒鳴りつけた後、サティーラさんが前へ出ます。どうやら、第一関門の第二回戦はサティーラさんが挑戦するようです。

「悪いが、貴様らが調子に乗っていられるのはここまでだ」

サティーラさんは挑発するかのようになり、勇なる翼に向けて言い放ちます。

「そうかしら？ 私はこのまま、全員倒しちゃうぐらいのつもりだけれど？」

「フフ、我が愛銃のブラッディソウルも十分に銃身を休ませた。今すぐにでも戦えるぜ」

挑発に受け応えたのは仁科さんで、それに便乗して調子に乗っているのは真山君。

ちなみに、真山君の銃は魔法の弾丸を放つものなので熱を放つことはありません。なので銃身が熱で歪むことを警戒する必要は無いのですが、彼は趣味で銃身を休ませています。

それと、前回は銃の名前は右がフェンリル、左がケルベロスだったはずなのですが。どうやら改名したようですね。

「では、続けて第二回戦を始めてもよろしいでしょうか？」

「こつちはいつでもかまわん」

「私たちもオーケーよ」

私が訊くと、双方共に準備完了していました。

「それでは、続けて第二回戦、開始して下さい！」

そうして私が開始の宣言をします。

すると、まず動き出したのはサティーラさん。勇なる翼の五人に向けて手を翳し、魔法を放ちます。

「魔法なら私が！」

これを見て、前に出たのは仁科さん。盾を構え、サティーラさんの魔法を防ごうとします。

しかし、これを見てサティーラさんは、嘲笑するような笑みを零しました。

「ふん、無駄だ」

そう呟いて、サティーラさんは集中させた魔力を一気に解き放ち、光の玉を放ちます。

「『魔法無効』」

仁科さんは『魔法無効化』スキルを放とうとします。

が、しかし。その直前で、光の玉は爆発します。

「っきゃあー！」

その魔法の爆発により生まれた『衝撃』は、魔法そのものではない為に無効化出来ません。体勢を崩し、仁科さんは倒れます。

そして、サティーラさんの攻撃はこれで終わりではありませんでした。

「降り注げッ！」

なんと、爆発した光の玉は、さらに小さな無数の光の玉に分裂していたのです。

それらは高く舞い上がった後、まるで光の雨のように降り注ぎます。

「うわああっ！」

全く警戒していなかった真山君も含め、勇なる翼は全員がこの攻撃に巻き込まれ、ダメージを受けます。

いえ、正確には四人だけです。

木下さんだけは、最初の光の玉の爆発の段階で離脱していました。そして静かにサティーラさんの背後へと周り、短剣を振るいます。

「下らん」

ですが、サティーラさんはこれにも反応してみせません。あっさりと短剣を素手で弾き飛ばしてしまいました。

虚しくカラン、と落下音を立てる短剣と、驚愕の表情を浮かべる木下さん。

「そ、そんな」

「この程度の暗殺術、防げずして魔王様の側近など務まるわけが無かるっ」

そう自慢げに語ると、サティーラさんは木下さんの腕を掴み、投げ飛ばしつつ蹴りを加えます。

「うぐっ！」

吹き飛ばされながらも、木下さんは空中で体勢を整え、着地。

結果として、攻撃を受けてボロボロの状態の勇なる翼の五人に対し、サティーラさんは全くの無傷、といった状態になってしまいました。

「ここが潮時でしょう。」

「そこまでです！ 勝者、サティーラさん！」

私が宣言することで、第一関門の第二回戦は魔王軍側の勝利で終わることとなりました。

勇なる翼の五人は、残念そうに肩を落とします。

「あーあ、負けちゃったわ」

「まさか、ここまで強いとは思ってなかった」

仁科さんと真山君が反省した様子で言葉を交わします。

「ほら、二人とも。反省より先に回復よ」

そして、鈴原さんはすぐに気持ちを切り替え、『完全回復』で受けたダメージの回復を始めます。

「ごめんなさい、接近までは出来ただけど」

肩を落としたまま、四人の方へと戻ってくる木下さん。

「ううん、ともちゃんセンサーは悪くない、ウチなんか、なんにも出来なかったし」

そして涼野さんが、悔しそうに言いながら木下さんをフォローします。

そんな五人に私は近づき、励ましの言葉を送ります。

「落ち込む必要はありませんよ。戦力的に、あちらの幹部クラスの相手は厳しいと最初から分かっていたいました。むしろ、魔王軍のエリート兵士を相手にあれだけ圧倒したのですから。素晴らしい結果です」

「そっかな。えへへ、アリガト、かいちょー」

照れた様子で微笑む涼野さん。かつての不良だった頃とは似ても似つかぬ、すっかり更生しきった様子に感心します。

「さて。五人とも、素晴らしい戦いを見せて下さったので、約束のご褒美はもちろん差し上げます」

「よっしゃあつ！」

ガッツポーズをして声まで上げて喜んだのは真山君。そして、小さくガッツポーズをして喜んだのは仁科さん。

ちなみに、真山君は新しい銃。仁科さんは温泉旅行のペアチケットがご褒美です。なお、仁科さんは三森さんを誘うつもり、とのこと。

一方で、不安げな表情を浮かべたのは鈴原さんと木下さん。

「あの、本当にいいんでしょうか？」

「ええ、構いませんよ」

「今さらですけど、随分大胆にお願いしてしまった気がするのですが」

この二人の願いは、それぞれが乙木商事で担当する部署へのボーナス的な予算の増額です。かなりの額を要求されましたが、おそらくこの二人であれば有効活用してくれるはずですから、問題ないはずです。

「むしろ、個人的なお願いでなかったことにこちらが申し訳ないぐらいですよ」

「そうですか？ では遠慮なくいただきますね」

私の本心を告げると、安心したように鈴原さんが言います。同様に木下さんも安心した様子。

四人分のご褒美は確定しました。ですが、最後の一人、涼野さんのご褒美は未だに決まっていません。

「では、涼野さん。ご褒美には、何を求めになりますか？」

「えっと、そんじゃあ、かいちよーに、その。えっと」

もじもじしながら、涼野さんは願望を口にします。

「頭を、撫でてほしいなあ、って。頑張ったねって言ってほしい、ってどうか」

「なるほど。それだけでいいのですか？」

「うんっ！」

それぐらいならお安い御用です。私は涼野さんの頭に手を置き、優しく撫でながら言います。

「よく頑張りましたね、涼野さん。素敵でしたよ」

「う、うん！」

「貴方が今の貴方になるまでどれだけ努力したのか。私は、よく知っています。それも含めて、涼野さんの頑張りはとても尊いものだと思います」

「えっと」

「本当に、よく頑張りましたね」
「うんっ。ありがと、かいちよー」

涼野さんは、涙目になりながら笑顔を浮かべました。
その後しばらく、涼野さんを撫で続けましたが、やがて涼野さんの方からこれぐらいで、と言って離れます。

これで、五人分のご褒美は無事確定しました。

さて。それでは今日の本題に戻りましょう。

私は勇なる翼の五人から離れ、ヴラドガリアさん達の方へと近づきます。

「おめでとunggございます、無事第一関門突破ですね」

「うむ。妾の配下は強いのじゃ。サティーラ、よくやったのじゃ」

「魔王様にご満足頂けて光栄です」

満足そうにしているお二人ですが、申し訳ないのですが事実を突き立てて行きましょう。

「この第一関門が、我が乙木商事の所有する戦力の中では、一般兵の中でも最高クラスのものとなります。さすが魔王様の側近ですね。一般兵では相手にならない、といったところでしょうか」

「ほう、一般兵とな？」

ヴラドガリアさんの視線が鋭くなります。

事実、勇なる翼は召喚勇者である為ポテンシャルは高いのですが、普段から戦いに身を置いているメンツではありません。

ですので、日頃から訓練を受け、鍛え上げられた乙木商事の警備部門に所属する社員とほぼ同格となります。

さすがにチートスキルもある分、勇なる翼の方が有利ですが。それでも、警備部門の平社員であれば良い勝負をしてくれるでしょう。

「くっ、いい気になるなよ！ 次の関門に案内しろ！」

一般兵相手に自慢げな態度を取っていたことを恥じたのか、サテイーラさんは顔を赤くしながら怒りの声を上げます。

「ええ、もちろんです。それでは第二関門に向かしましょう」

「ふふ、これはなかなかに楽しめそうじゃのう」

ただ一人、楽しそうに笑うヴラドガリアさん。

そんな魔王軍の皆さんを引き連れ、私は次の部屋、第二関門へと向かって歩き出しました。

11 双子のSランク冒険者

ぞろぞろと大人数の魔王軍を引き連れ、私たちは第二関門まで到達します。

扉を魔素認証で開き、部屋に入ると、そこに待っていたのは二人の冒険者。

「次の相手は、我が乙木商事と契約しているSランク冒険者の二人です」

私がそう紹介すると、二人がこちらへ近寄ってきます。

そして私の横に並び、自己紹介を始めました。

「わたしがSランク冒険者。『氷結姫』のティアナ。あと、ゆういちパパの義理の娘」

「そして僕がSランク冒険者。『風帝』のティオ。あと、ゆういちパパの義理の息子」

それぞれが名乗り終わると、私の左右を挟み込むように腕を絡めてきます。

今では MARIA さんとも籍を入れているので、二人が私の義理の子供であるのは事実です。が、それにしても妙に妖艶な仕草で腕を絡めてくるので、つい照れてしまいます。

「ティオ君。ティアナさん。今はじゃれている場合ではありません

「よ」

「はい」

「わかった」

納得してくれたようで、二人共大人しく離れてくれます。

成長した二人とも、すっかり美人に育ってくれたので、こうして腕を絡められると妙に緊張してしまうんですね。困ったものです。テイオ君に至っては、男のはずなのにむしろどちらかと言えば女性に見えるという、元々の中性的な外見がさらに極まっています。

「さて。それでは第二関門の相手はどなたがやって頂けますか？」

「私が出る」

そう言って威勢よく前に出たのは、サティーラさん。第一関門突破時に少しばかり恥をかいているので、それを払拭しようと思っっているでしょう。

それに、ここからは魔王軍のエリート兵士達では相手にもならない、時間の無駄レベルの戦いになっていきます。最初からサティーラさんが出るのが妥当と言えます。

「では、双方準備をして下さい」

私が言つと、まずテイアナさんとテイオ君が離れてゆき、程よく距離を取った段階で武器を構えます。

この武器こそ、乙木商事で警備部門の社員も使っている『魔導セイバー』の特注品。二人に合わせて様々な部分を高性能化、チューンナップしてあります。

この魔導セイバーという武器がどんな武器かと言えば、分かりやすく言えばライトセイバーのようなものです。高い魔力圧を持つ魔

素を使い、魔法の刃を実体化。刃物としての高い切断力はもちろん、魔法を斬ったり、弾き返したりすることも出来る優れたものです。

さらに二人の場合は、それぞれのステータスにも合わせたチュートリアルをします。

肝心の二人のステータスは以下の通り。

【名前】 ティアナ

【レベル】 69

【筋力】 B

【魔力】 S

【体力】 A

【速度】 A

【属性】 氷

【スキル】 なし

【名前】 テイオ

【レベル】 71

【筋力】 A

【魔力】 S

【体力】 A

【速度】 B

【属性】 風

【スキル】なし

ティアナさんは属性の氷に、ティオ君は風に合わせ、それぞれの魔力セイバーがその属性と同じ魔力を纏うようにしてあります。

また、ティアナさんの方が出力よりも軽さと取り回しの良さを優先した細剣タイプ。ティオ君が出力を優先した肉厚の刀身を持つバスタードソードタイプになっています。

そんな二人の武器を見て、サティーラさんも含め、魔王軍の皆さんは目を見開き驚きます。

「ほう、これはまた面妖な武器じゃのう」

「我が乙木商事の技術力あってこそその武器です」

ブラドガリアが感心したように呟いたので、便乗して乙木商事の技術力をアピールしておきます。

そうこうしているうちに、ティアナさんとティオ君、そしてサティーラさんの準備が終わりました。

今にも戦いが始まりそうなほど、張り詰めた緊張感が漂っています。

「それでは、第二関門、開始してください」

この宣言により、いよいよ第二関門の戦闘が開始されました。

12 風帝と氷結姫

先に動いたのはサティーラでした。

「一瞬で終わらせるッ！」

そう宣言すると同時に、両手をティアナさんとティオ君へと翳します。

そして発動させたのは、無数の光の攻撃魔法。まるでレーザーか何かのように、光の筋が幾つも発射されます。

ですが、これにも慌てず、二人は冷静に対処します。

「そんなの」

「効かない」

二人は言って、魔導セイバーを握っていない方の手を攻撃魔法に向けて翳します。

すると不思議なことに、光の攻撃魔法は明後日の方向へと逸れていきます。

「何ッ！」

驚きを隠せないサティーラさん。それもそうでしょう、この技術もまた、乙木商事が開発した装備あってこそのものですからね。

ティアナさんとテイオ君が手に装備していたのは、大きな魔石をセツトしてある手甲です。この魔石を通して魔力を流すことで、防御フィールドのようなものが展開されます。

このフィールドは、単に魔法を打ち消すような効果ではありません。相手の魔力に干渉することで、その軌道を逸らしてしまうという効果があります。

打ち消しても障壁でもなく、単に軌道を逸らすだけなので、非常に低コストながら高い効果を発揮します。

実際に、サティーラさんの魔法すらあっさりと曲げてしまいました。

驚くサティーラさんに向かって、ティアナさんがまず迫ります。

その後ろに続いてテイオ君。

まずはティアナさんがサティーラさんに接近し、剣を一閃します。

「こおって」

「この程度ッ！」

鋭いティアナさんの剣閃を、サティーラさんは魔力を集めた手甲で弾いて防ぎます。

しかし、接触さえすればティアナさんの剣閃は効果を発揮します。

「なっ！」

なんと、サティーラさんの手甲がたちまち凍りついていきます。

ティアナさんの魔導セイバーは氷属性。非常に高い魔力圧のお陰で、属性の特徴がよりはつきりと発現しています。

その結果、斬りつけた相手を氷の魔法で凍らせるという効果が発揮されるようになっていきます。

ティアナさん自身も同様の効果の魔法を発動させているので、相乗効果により強烈な氷結効果を発揮します。

この相手を斬りつけた途端に凍らせていく魔法があるからこそ、ティアナさんには『氷結姫』という二つ名が付いたのです。

「面妖なッ！」

片腕の凍ってしまったサティーラさんは、即座にティアナさんの斬撃の効果を理解したようです。

二度、三度と続くティアナさんの攻撃を、受けることなく確実に回避していきます。

しかし、凍ってしまった腕と受け流しが出来ないという制限の為、サティーラさんの方が不利。どんどん追い込まれてゆきます。

そうして十回程度の剣閃を回避した段階で、不意にティアナさんが後退します。

「ここで前に出てきたのがティオ君。」

「ぶきとべ」

ティアナさんとは違い、風属性の魔導セイバーを振るうティオ君。その剣閃もまた、もちろんサティーラさんは回避します。即座に後退し、軌道から逃れます。

ですが、それでは不十分。

「ぐうッ！」

攻撃をたしかに回避したはずのサティーラさんは、なぜか身体中に浅い切り傷を負います。

これこそが、テイオ君の魔導セイバーの効果。剣閃と同時に風の攻撃魔法を放ち、相手をかまいたちで切り刻みます。

これもまた、魔導セイバーから放たれるものと、テイオ君自身が放つ魔法の相乗効果により、強力なかまいたちが放たれています。

ただ、それにも関わらずサティーラさんが負ったのは浅い切り傷のみ。それだけサティーラさんの魔力が高く、魔法攻撃に対する抵抗力が優れているのでしょう。

とはいえ、ダメージを負っているのは事実。続けて二度、三度とテイオ君が魔導セイバーを振るう度に、サティーラさんは傷を負い続けます。

このかまいたちを飛ばすことによる制圧力から、テイオ君は『風帝』という二つ名で知られる冒険者となったのです。

12 風帝と氷結姫（後書き）

一挙連続投稿、三日目終了です。

もし宜しければ、ブックマークと評価ポイントの方を頂けると助かります。

また、ページ下部には今回の一挙連続投稿作品へのリンクも用意してありますので、是非そちらからお楽しみください。

13 黒翼の天使

追い込まれているサティーラさんですが、やられるばかりではない様子。

「この、程度でエッ！」

叫ぶと同時に、サティーラさんは全方位へと光の魔法を放ちます。魔力をそのままぶつけるような、単純な攻撃。

ですが、だからこそティオ君とティアナさんの魔道具では攻撃を逸らしきるのが難しい。

「くっ」

「邪魔」

魔法の圧力で防御を突破されるのを避けるため、二人は咄嗟に後方へ跳んで下がります。

全方位攻撃であるからこそ、サティーラさんの光の魔法は距離が離れるほどに加速度的に威力が減衰します。

バックステッパー一回だけで、威力の低減は十分。ティオ君とティアナさんは手甲の魔道具で防御フィールドを展開。魔法を弾き、逸らすことで防御します。

ですが、これこそがサティーラさんの狙いだったのでしょう。こうして距離を空けたことで、サティーラさんには余裕と時間が生ま

れました。

「まさか、この程度の相手に私の真の力を見せることになるとはなアツ！」

言いながら、サティーラさんはその指に装備している、一つのリングを外します。

すると、途端にサティーラさんの身体を黒い魔力、闇の魔力が覆い始めます。また、魔力が侵食するようにして、サティーラさんの白い翼が黒く染め上げられます。

「これは？」

「変身した？」

サティーラさんの変化に、二人は警戒して近寄りません。そしてサティーラさんは、悠然とした態度で二人に語りかけます。

「この、光の民たる天使族にあるまじき、忌まわしい黒翼こそが私の真の姿。魔王様のお心遣いによって普段は闇の力を封じてはいるが、今はその枷も外しているツ！ つまり私は、天使族の光の力と、忌まわしき闇の力が合わさっているのだツ！」

「これは、かっこいい」

「最強に見える」

光と闇の合わさったサティーラさんを見て、恐怖よりもむしろ興奮した様子の子ティオ君とティアナさん。

ここからが、戦いの第二フェーズのようです。

「ゆくぞツ！」

サテイーラさんは宣言すると、即座に二人へ目掛けて急接近します。

倍以上に素早くなったサテイーラさんの動きに、二人は咄嗟に反応が出来ていませんでした。

闇の魔力で手足を包み、黒い手甲のようなものを生み出したサテイーラさんが二人へと殴りかかります。

「くっ！」

「つよいっ」

二人は咄嗟に防御したものの、その上からでも強い衝撃によって十分すぎるダメージを受けてしまった様子。

魔導セイバーを使い、即座に切り返しますが、それもサテイーラさんの闇の手甲により弾かれ、まったくダメージを与えられず、追加効果すら発生しません。

闇属性の魔力は他の魔力を侵食し、魔法の発動を阻害するような効果を発揮させることも可能ですからね。恐らくは、そのせいで魔導セイバーの効果が出ていないのでしょうか。

「フハハハッ！ 所詮はこの程度かアッ！」

調子に乗った様子で、サテイーラさんが二人を煽ります。二人は悔しそうな表情を浮かべますが、反論はせずに攻めの手を休めず攻撃し続けます。

ですが、さすがに実力差が大きいのでしょうか。決定打を与えられず、じりじりと追い込まれていきます。

「では、そろそろお終いでしょうか！」

サテイーラさんは言うところ、一際強く打撃を二人へと叩き込みます。

その衝撃に、吹き飛ばされる二人。そして距離が空いたのを利用し、サティーラさんが魔法を発動させます。

「喰らえッ！ カオスインパクトッ！」

サティーラさんは、発動させる魔法の名を叫びます。

右手には光の、左手には闇の魔力を集め、それを合掌するようにして一つに合わせます。そして二つの相反する魔力が無理に重ね合わされたことで反発し、荒ぶり始めます。

そうして生まれたエネルギーも含めて、サティーラさんは手を前に突き出し、同時に開放します。

すると、光と闇の魔力は蛇のように荒れ狂いながらティオ君とテイアナさんへと向かって突き進んでゆきます。

恐らく、この攻撃を受ければ二人は小さくないダメージを負うことになるでしょう。勝負はサティーラさんの勝ちと見てよさそうです。

「そこまでです！」

私はそう宣言し、戦いの場に割って入ります。

ティオ君とテイアナさんへと目掛けて飛んできた魔法の前に立ちふさがり、私の魔力を正面に展開。

すると、光と闇の荒れ狂う魔力が、まるで霧にでもなったかのようになり、消滅します。

「何をッ！」

「この勝負、サティーラさんの勝利です。第二関門突破、おめでとございます！」

私が言つと、
渋々納得したようにサティーラさんは頷きます。

14 二人の要望

戦闘が終わり、サティーラさんは外した指輪を付け直します。すると、翼を黒く染めていた魔力が霧散し、元通りの白い翼に変わりました。

「ふん、言っておくが、殺生は無しというルールを忘れたわけではない。死ぬほどでは無い程度に威力は押さえてあった」

「ええ、分かっていますよ」

つまり、自分の魔法が無効化されたのは本気ではなかったからだ、と言いたいのでしょう。

そうやってサティーラさんがある種の負け惜しみのような言葉を漏らしていると、テイオ君とティアナさんが私の方へと近づいてきます。

「ごめんなさい、パパ」

「負けちゃった」

悲しげな表情を浮かべ、二人は謝ります。

「二人とも、大丈夫ですよ。むしろ、二人は頑張っていました。サティーラさんを相手に最初は圧倒していたんですから。隠した実力を引き出すほどだったんですから、十分すぎる結果です」

考えようにもありますが、今回は第二関門を圧倒する実力で突破されたというよりも、まだ第二関門なのに相手の一人に切り札を切らせたと考えた方がいいでしょう。

それだけ私たち乙木商事側の戦力が優れているという証明にもなっています。目的を考えれば、勝負には負けたもののトータルで見れば悪くない結果です。

「じゃあ、ごほうび」

「ちょうだい？」

「そうですね。二人は何が欲しいのですか？」

問いかけると、二人は頬を赤く染めて、熱い瞳をこちらに向けながら言います。

「キス、してほしい」

「ママにしているとおんなじくらい、パパに愛してほしい」

と、二人は無茶な要求をってきます。

「ええと、それは」

「だめ？」

「わたしたち、頑張ったのに？」

うるうると、泣きそうな顔をして問いかけてくる二人。私としては、二人とはちゃんと親子の関係でありたいと思っているので、こういう要望は困ってしまいます。

恐らくは出会った当初のマリアさんからの入れ知恵による、三人のうち誰か一人でも籍を入れることが出来れば、という計画が尾を引いた結果なのでしょう。

しかし、だからと言って頭ごなしに拒否しても二人を傷つけたり、むしろ頑なな態度を取られたりしてしまう原因になりかねません。

悩みに悩んだ末、私は妥協点となる解決案に思い至り、実行します。

「二人とも、こっちへ」

「わっ」

「パパ？」

私は二人を抱き寄せると、その頬にキスをします。いやらしい意味ではなく、家族に対する親愛の意味を持って。

「これで、勘弁してくれますか？」

「うーん、まあ、許す」

「ママも、パパは少しずつ籠絡すればいけるって言ってたし」

と、何やら物騒な発言が聞こえたりもしましたが、どうにかこの場は切り抜けられたようです。

まさかとは思いますが、二人のこうした態度がマリアさん公認であるとかいうことは無いですよね。

恐ろしくて二人には聞けないので、そんなことあるはずが無いと思っておくことにしておきましょう。

15 第三関門

第二関門を突破した魔王軍の皆さんを連れ、私は続く第三関門へと向かいます。

「しかし、乙木殿よ。汝らの使う魔道具は面妖ながら面白いものが多いのう」

「我が乙木商事の技術の粋を集めて作った魔道具です。第二関門で二人が使っていた魔導セイバーや対魔法バリアは、量産型のもを指揮官クラスの者には装備させています」

「ほう、ではお主らの軍は指揮官クラスであればどの実力があろう？」

「あの二人は特別ですから。もう二段か三段は劣る程度と考えていただく方が正確ですね」

私は道中、ヴラドガリアさんと魔道具や乙木商事の兵力についての話をしながら歩いていきます。

サテイーラさんはそんな私を不服そうに睨みながらも、第二関門を圧倒できたことで機嫌がいいのか、文句は言わない様子。

そしてレオニスさんは仏頂面で、何を考えているのか読み取れません。退屈そうにしている、という程度のこととは分かるのですが。

さらに後ろに続くエリート兵であったはずの天使たちは、顔を真っ青にして緊張した様子でついてきます。

殺さずの契約があるとはいえ、ここは彼らをあっさり殺せるほど

の実力者が数多く存在する敵地のご真ん中ですからね。こういった反応になるのも当然でしょう。

そうこうしているうちに、やがて第三関門に到着します。
第三関門で待ち構えていたのは、私の妻たちの中の一人。

「おまたせしましたね、ジョアンさん」

「うっん、大丈夫だよ」

やる気満々といった様子のジョアンさんが、真紅の大剣を抱えた状態で待ち構えていました。

「では魔王軍の皆さんにご紹介します。こちらが第三関門を担当する、ジョアンさん。私の妻たちの中の一人でもあります」

私が後方へ振り返り、魔王軍の皆さんにジョアンさんを紹介すると、首をかしげてヴラドガリアさんが質問をってきます。

「ふむ。妻というからには女性なのであるう？　なら、何故その者は男性のような名前をしておるのじゃ？」

「いろいろ事情があるのですよ」

「ふむ、そうか。いや、関係のない質問であったな」

恐らく、ヴラドガリアさんはジョアンさんが訳あって男性の名前を付けられた女性なのだろう、と考えているのでしょう。

実際は逆で、訳あって男性であったジョアン君がジョアンさんに変ったのですが。

「それよりも、今度の関門は一人で大丈夫なのか？」

次に質問をしてきたのは、自信満々の様子のサティーラさん。テイアナさんとテイオ君を突破出来て気分がいいのでしょうか。

「問題有りませんよ。彼女は、我が乙木商事の中でも屈指の実力者。警備部門の総括でもあり、軍で言うならば將軍、総大将のような立ち位置の人物です」

ちなみに、テイオ君とテイアナさんは乙木商事が契約している冒険者達の総括をしています。実力的には、二人が合わさってようやくジョアン君と戦える程度。

さらに、今回はジョアン君専用の特別な乙木商事製の魔剣を渡してあります。サティーラさんの本気と比べてどちらが勝つのかは分かりませんが、すぐに負けるようなことはありませんでしょう。

「ふん。何にせよ、今回も瞬殺してくれる」

言つて、サティーラさんは指輪を外します。途端に闇の魔力が翼を包み、黒翼へと変貌します。

そんなサティーラさんを見て、準備が整ったことを悟ったのでしよう。ジョアンさんはニヤリと好戦的な笑みを浮かべて、真紅の魔剣を構えます。

「そんじゃあ、いい勝負しようぜ！」

「出来るものなら、な」

挑発するようなサティーラさんの態度にも、ジョアンさんは何も気にした様子がありません。これから起こる戦いに集中しきっているのでしょうか。

「それでは、第三関門、開始ッ！」

私の宣言と同時に、いよいよ二人の戦いが始まります。

16 炎の英雄

初手は、両者共に全力の一撃。正面からのぶつかり合いでした。

「ハアアアアッ！」

「負けるかアッ！」

サテイーラさんは闇の手甲を、ジオアンさんは真紅の魔剣を互いに振るい、ぶつけ合います。

その結果、一撃の威力で勝っていたのはジオアンさん。威力の差によって、サテイーラさんだけが大きく吹き飛ばされます。

「クソッ！」

「一気に決めるッ！」

ジオアンさんは、更に前へ出ます。

真紅の魔剣を構え、なんと『魔力』を流しこみます。

すると、魔剣は赤い光を放ち、同時に魔法の炎を生み出し、纏うようになります。

「これが、俺の力だアッ！」

宣言し、炎を纏った大剣を、横から薙ぎ払うように振ります。

その威力を警戒してか、さすがのサテイーラさんも手甲で直接受けるようなことは無く、先に闇の魔力で壁を生み出してこれを受け

止めます。

しかし、ジョアンさんの方が一枚上手。その威力は闇の壁すらも
のともせず、あっさり打ち砕き、防御の構えをしたサティーラさん
をあっさり吹き飛ばします。

「グアアアツ！ ま、まさかこんなツ！」

警戒していた以上の威力に、サティーラさんは驚きを隠せない様
子。

それも当然でしょう。今やジョアンさんの能力は、召喚勇者すら
も圧倒するほどに成長しているのですから。

そのステータスは、以下の通り。

【名前】 ジョアン

【レベル】 87

【筋力】 S

【魔力】 A

【体力】 S

【速力】 S

【属性】 炎

【スキル】 不屈 逆境 一点突破

そう、ジョアンさんの成長度合いは、私の知る限りの範囲では群
を抜いて高いのです。

中でも、属性の部分。元々は属性を持っていなかったジョアンさ

んですが、成長と訓練の過程で属性を後天的に獲得。

これは記録にこそ残っているものの、歴史上でも非常に稀有なパターンです。

さらには、ジョアンさんのスキル。元々持っていたスキル『不屈』に加え、『逆境』は自身の体力が少なくなるほどに能力が上昇するスキル。そして『一点突破』は、防御系の魔法やスキルに対する特攻効果と、攻撃力の超上昇効果を併せ持つスキルです。

これら全て、ジョアンさんの修行の成果。

私の妻としてふさわしい実力を、と求めたジョアンさんの頑張りが実を結んだのです。

そんなジョアンさんのことを、乙木商事の警備部門に所属する従業員たちは『炎の英雄』なんて呼び方をすることもあります。

それだけジョアンさんが成し遂げたこと、大幅な成長と属性の後天的発現、スキルの習得というのは難しいことなのです。

「ならばッ！ 出し惜しみはしないッ！」

覚悟を決めた様子で、サティーラさんが構えます。

「最大出力の我が奥義、カオスインパクトで貴様を迎え撃つッ！」

「望む所だ！ 俺は、そんなアンタの最大の技を打ち破って、勝利を掴み取るッ！」

サティーラさんに応えるようにして、ジョアンさんも大剣を構えます。大剣に込められた魔力が、まるで竜巻のように刃の周りを渦巻き始めます。

対するサティーラさんも、前回よりも数倍は大きな光と闇の魔力

を生み出し、力技、といった様子で混ぜ合わせ、一つの場所に押し込んでいきます。

やがて双方準備が終わったのか、自然に、同時に攻撃を繰り出します。

「喰らえエエツッ！」

「受けて立つッ！」

ジョアンさんに向けて放たれる、サティーラさんの魔法。これを迎え撃つように、ジョアンさんは前に出て、魔法に向かって大剣を振り下ろします。

二人の攻撃は衝突し、バチバチの魔力の弾ける音を響かせながら、拮抗した状態を保ちます。

ですが、それでも不利なのはジョアンさんの方。サティーラさんが魔法による遠距離攻撃であるのに対して、ジョアンさんは大剣を使った直接攻撃。魔法との衝突の余波を、その身で直に受けているのですから。

「くっ、それでも、俺は勝つんだ！」

ダメージを受けながらも、ジョアンさんは大剣を構えたまま一歩、また一歩と前へ進んでいきます。

「そんな馬鹿なッ！」

驚くサティーラさん。しかし、ジョアンさんが魔法を弾きながら、前へと進んでいるのは事実です。

「俺の辞書には、諦めるなんて言葉は無いんだアツ！」

そしてとうとう、ジヨアンさんの大剣がしっかりと振り下ろされます。サテイーラさんの魔法に打ち勝ったのです。

16 炎の英雄（後書き）

一挙連続投稿、四日目終了です。

もし宜しければ、ブックマークと評価ポイントの方を頂けると助かります。

また、ページ下部には今回の一挙連続投稿作品へのリンクも用意してありますので、是非そちらからお楽しみください。

17 掴み取った勝利

大剣がサテイーラさんの魔法を切り裂き、消し飛ばします、そして渦巻いていた炎の魔力が解き放たれ、サテイーラさんを取り囲みます。

「くそ、これはッ！」

炎の渦はサテイーラさんに熱のダメージを与えるだけでなく、サテイーラさんを拘束し、身動きを取りづらくする効果がありました。必殺技も破れ、拘束までされたサテイーラさんに、ジョアンさんが迫ります。

「俺は負けないッ！」

「そんな未来は、来ないッ！」

サテイーラさんは足掻くように、闇の魔力を一気に開放。まるで触手のような魔力が黒翼から滲み出て、ジョアンさんの大剣を迎え撃ちます。

一本の大剣に、二本の触手。ジョアンさんは、最後の最後で攻めきれていないように見えました。が、しかし。

「それでも、俺はこの手で未来を掴むッ！」

ジョアンさんは諦めず、真紅の魔剣が持つ能力を開放します。

「行くぞッ！ 『パージ』ッ！」

その宣言と同時に、魔剣は光を放ち、その光が迸った部分から分解されて、合計五つの大小様々な剣へと分かれます。

「何だとッ！」

サテイーラさんが驚くのも無理はありません。何を隠そう、この分離機能こそが、ジョアンさんの持つ大剣の最大のギミック。

真紅の大剣は、我が乙木商事の技術の粋を集めて作られた『五本の魔剣』を合体させた姿だったのですから。

私が『機構剣』と名付けたこの魔剣。五つで一つの状態の時は、五つの魔剣が持つ効果全てを発揮する合算モード。ただし、合体状態ということもあり、五つの効果は全体に分散していることよって平均され、単独の剣のみで発揮できる効果よりも低くなっています。

この状態から、パージというキーワードを唱え魔力を流すことによって五つの魔剣に分離。分散モードと呼ばれるこの状態なら、魔剣一つごとの効果が最大限まで高められ、発揮されます。

まず第一の魔剣『アロンダイト』。合算モードのベースとなる剣で、大剣の軸とも呼ぶべき魔剣です。付与されている効果は『破壊耐性』などを中心に、頑強さを補強するものばかり。

今もジョアンさんの手に握られており、二本の触手と衝突しながらも、軋む様子すらない最も硬い剣です。

ジョアンさんは、このアロンダイトを囿にするつもりようです。

触手がしっかりとアロンダイトの刃を受け止め、絡まったのを見ると、すぐに手を離して次の魔剣を手に取りに向かいます。

「攻めるッ！」

次にジョアンさんが手にしたのは、第二と第三の魔剣。片刃の幅広なショートソードという形状の『ウインドミル』。これは二本で一つの魔剣であり、その効果は使用者の身体能力、剣閃の速度上昇に特化したもの。

この二本の魔剣を握ったジョアンさんは、目にも留まらぬ速さでサテイーラさんへと接近。即座に連続攻撃を叩き込みます。

「グウッ！」

咄嗟に腕を交差させ、闇の手甲でガードを固めるサテイーラさんですが、ジョアンさんはこれも見越していたのかさらに魔剣を持ち替えます。

「碎けるッ！」

次に手に取ったのは第四の魔剣。まるで斧のように分厚く幅広い刃を持つ片刃の剣。その名は『バスターブレイド』。破壊力に特化した効果が付与されており、その単純な攻撃力は五本の魔剣の中でも最大のもの。

ジョアンさんはこのバスターブレイドを力強く振り下ろし、サテイーラさんの守りを力づくで破壊します。

闇の手甲は攻撃の威力に耐えきれず、碎け、サテイーラさん自身も衝撃に吹き飛ばされます。

「ガッ！」

その重い一撃に怯んだ隙を見て、ジョアンさんは最後の一撃の為にさらに魔剣を持ち替えます。

「これで、終わりだアッ！」

第五の魔剣『フランヴェルジュ』。ごく普通のロングソードのよくな見た目をしているこの魔剣ですが、その効果は特殊です。注いだ魔力に応じて自在に炎の魔法を発動し、威力を高めるのです。

そうして生み出された炎の揺らめく姿から名付けられたこの魔剣が、魔力を込めることも含めるならば五本の魔剣で最大の破壊力を発揮します。

そんなフランヴェルジュをジョアンさんは構えて、魔力を流し、揺らめく炎の魔法と共に勢いよく振り下ろしました。

「グワアアアアッ！」

ジョアンさんに取って最大最高の一撃を受けて、サティーラさんは絶叫します。闇の触手も消して防御に専念しているものの、それすらも破壊し、ジョアンさんの炎がダメージを与えます。

やがてフランヴェルジュの一撃が、炎の魔力が収まった後には、ダメージを受けて倒れ伏したサティーラさんの姿がありました。

「勝負あり！ 勝者、ジョアンさん！」

文句無しの決着でしょう。私はジョアンさんの勝利を宣言します。

「俺の、勝ちだ！」

勝利をその手に掴み、満足した様子で、ジョアンさんは言いました。そして力を使い果たしたのか、その場に倒れ込みました。

18 ジョアンの「褒美

第三関門は、ひとまずジョアンさんの勝利で終わりました。

しかし、様子を見る限りでは、ジョアンさんにこれ以上戦う余裕は無さそうに見えます。

それこそ、この後にサティーラさんよりも格上であるはずのレオニスさんと戦うのは酷でしょう。

私は観戦していた魔王軍の皆さんへと近寄り、提案します。

「皆さん。第三関門はひとまずジョアンさんの勝利という形で終わりました。ですが、次の勝負をしても勝敗は分かりきっています。ですので、ここは魔王軍側の不戦勝という形で第三関門を突破したということにして頂けないでしょうか？」

「ふむ。悪くない提案ではあるがの？」

私の提案にヴラドガリアさんは肯定的な言葉を発して、すぐにレオニスさんの方へと視線を向けます。

「しかし、次はレオニスの番であろう？ 妾はともかく、レオニスは強者を相手に戦いたいんじゃないだろうか？」

「うむ、魔王様の仰るとおりだ」

レオニスさんは頷いて肯定し、しかしすぐに言葉を続けます。

「だが、弱りきった相手を叩くのもつまらぬ。ここは提案を飲ませてもらおう」

「と、いうことじゃ乙木殿」

「ええ、ありがとうございます」

話もまとまり、続いて私はジョアンさんとサティーラさんの方へと向かいます。

「お疲れさまです、ジョアンさん」

「俺頑張ったよ、ダーリン！」

疲れ切っていたはずなのに、ジョアンさんは飛び上がるような勢いで私へと抱きついて来ます。

「へへ。俺、ちゃんと勝ったんだから、とびっきりのご褒美をお願いしてもいいんだよね？」

「そうですね。出来る範囲でなら、なんでも構いませんよ」

「それじゃあ、えつとね」

もじもじ、と恥ずかしそうにしながら、ジョアンさんは望むご褒美の内容を言います。

「そろそろ、子どもが欲しいかな、って」

ジョアンさんの言葉に、私は一瞬固まってしまいます。

現在、私は妻たち全員と関係を持っています。ですが、妊娠はしないように避妊はしっかりとしています。

未だに私のやらなければいけない仕事は多く、情勢も安定していません。この状況で子どもを作ってしまうと、育児に参加できない

ばかりか、何らかの危険にさらされる可能性も否定できません。

ただ、少なくとも魔王軍との関係に決着が付いた後であれば、話は変わってくるでしょう。

とは言え、避妊に使っている魔法薬は男性側が飲んで作用するタイプのものです。服用をやめしまうと、ジョアンさん以外の妻全員にも影響があります。

「わかりました。その件については、前向きに考えますので。また後で、みんなで話しましょう」

「うん、分かったよ。待つてるからな、ダーリン！」

幸せそうな笑みを零しながら、ジョアンさんは私の頬にキスをしました。

そんなこんなをしていると、意識を失っていた様子のサティーラさんの身体がぴくりと動くのが見えました。

「ぐ、この状況は」

呻きながら身体を起こし、周囲の状況を確認するサティーラさん。

「そうか、私が負けたのだな」

「ええ。ですが、ほぼ互角の勝負でした。結果的に第三関門を突破していますよ」

私が慰めるように言うと、サティーラさんは鼻を鳴らして言い返してきます。

「ふん。貴様にフォローしてもらおう必要は無い。私は魔王様の為に全力を尽くす、それだけだ」

なにはともあれ、これで第三関門は終了です。

19 第四関門

魔王軍の皆さんを引き連れ、第四関門へと進みます。

サテイーラさんは、最初こそエリート兵の天使の肩を借りて歩いていましたが、次第に体力も回復してきたのか、気づけば一人ですっかりと立って歩けるようになっていました。

高いステータスを持つものは、自然治癒力も高いですからね。目に見えて傷が塞がるほどでは無いでしょうが、歩くだけなら支障が無い程度には回復出来たようです。

やがて第四関門に到着すると、そこで待っていたのは全身鎧に身を包んだ何者か。

ただ、全身鎧と言っても中世の騎士のような鎧では有りません。乙木商事の技術の粋を集めて作られた、最高傑作とも言える強化外骨格的なパワードスーツです。

デザインも近未来的であり、鎧と言うよりもヒーローアニメのキャラクターが装備していそうに見えます。

そして、そんな鎧を装備しているのは、これまた私の妻の一人。

「おまたせしました」

私が呼びかけると、鎧の人物は兜、というよりもヘルメットを脱いで顔を顕にします。

「それでもないさ。今用意が出来たばかりだよ、雄一殿」

そう言って、私に微笑みかけてくれたのは、妻の一人であり、現在は『元』王国騎士団長という肩書きとなったマルクリーヌさんです。

マルクリーヌさんは私と籍を入れてマルクリーヌ・オトギとなり、王国騎士の身分は持ったまま騎士団長の座からは退きました。

今は乙木商事と国の折衝役、というポジションで仕事をこなしながら、時折元騎士団長としての縁から騎士団の方へと出向いて教官として指導をしています。

そんなマルクリーヌさんが着ている鎧が、乙木商事が作り上げた最高傑作。全身を魔道具の鎧で包む、強化外骨格型パワードスーツ。その名も『トランセンドアーマー』です。

身体能力の強化。ダメージを軽減し、魔法を逸らし弾くバリア。アーマーそのものの強度を補強する効果や魔法の威力を増幅し、発動を補助する効果はもちろんのこと。あらゆる特殊な作戦を想定した補助機能も盛り沢山。

さらには強化パーツと合体することで、目的に合わせた方向性に更なる強化も可能です。

ただ、欠点として量産が極めて難しいこと。そして整備や維持の手間もかかることが上げられます。

そうした理由から、今マルクリーヌさんが装備している一着だけしか存在せず、未だに開発途上にある装備でもあります。

なお、現在マルクリーヌさんが装備しているトランセンドアーマ

「、通称TAは一对一の戦闘能力に特化した状態であり、その為の整備や調整に時間がかかった為、用意が出来たばかりだと言っていたのでしよう。」

「ほう、次の相手はその一風変わった鎧姿の者が相手なのじゃな？」

ヴラドガリアさんが、興味深そうにTAを眺め、呟きます。

「はい。この強化外骨格型パワードスーツ、その名もトランセンドアーマーこそが我が乙木商事の最高傑作であり、兵器としては最高戦力に該当します」

「ほう、これが最高戦力、と？」

「ええ。ただ、現在の技術力ではトランセンドアーマー、通称TAでも『耐えられない』程の負荷が発生する程度の実力者は存在します。乙木商事全体での最高戦力、というわけではありません」

私はヴラドガリアさんに説明しつつ、次の挑戦者であるはずのレオニスさんの方に視線を向けます。

「さて、次はレオニスさんの番でしたね？」

「ああ、その通りだ」

どうやらレオニスさんはかなりのやる気になっているらしく、キラキラとした表情を浮かべています。

サティーラさんもかなりの実力者でしたが、レオニスさんはさらにその上に行く実力者のはずです。

何しろ彼は魔王軍四天王で最強だと名乗っていましたからね。ステータス換算で言えば最大でSS相当の実力を持っていると考えていいでしょう。

とは言え、対するマルクリーヌさんのステータスも以下の通りであり、負けてはいません。

【名前】マルクリーヌ

【レベル】92

【筋力】S

【魔力】S

【体力】S

【速度】SS

【属性】雷

【スキル】疾風迅雷

スキル『疾風迅雷』は速力を上昇させるパッシブスキルであり、このお陰もあってマルクリーヌさんは速力がSSに達しています。さらにはTAによる補助もあるので、他のステータスもSSにギリギリ届く程度はあるはずです。

その圧倒的な速さと、振るう剣と共に放つ雷の魔法の光から『雷光』という異名で恐れられたものだ、と語って聞かされたこともあるはずです。

それだけマルクリーヌさんの戦闘能力、技術は高く、経験も豊富。決してレオニスさんにも負けてはいないはずです。

20 トランセンドアーマー

いよいよ第四関門の開始です。マルクリーヌさんとレオニスさんが位置につき、構えます。

レオニスさんは肉弾戦を得意としているのか拳を構え、マルクリーヌさんはT Aとケーブルで接続された魔導セイバーを構えます。

T Aの補助により、テイオ君やティアナさんの特注品よりもさらに高出力、高性能となった魔導セイバー。その属性はマルクリーヌさんの雷であり、バチバチと青白い電撃が弾けています。

見るだけで威圧されるような、そんな魔導セイバーですが、対するレオニスさんは全く動じず。平常心で、しかし溢れる闘志は隠せない様子で構えています。

二人の準備が整ったと判断し、私は開始の宣言をします。

「それでは。第四関門、始めッ！」

私が言った瞬間から、戦闘は開始されました。

マルクリーヌさんは速度を生かして猛ダッシュ。T Aの補助による足元からのジェット効果で、滑るように高速で踏み込みます。

これをレオニスさんは、カウンターするつもりなのかどっしりと待ち構えています。

「ハッ！」
「ぬんッ！」

マルクリー又さんの魔導セイバーが一閃し、その軌道からレオニスさんが身を振って回避。そしてレオニスさんは回避しながら、マルクリー又さんの足元を狙って足払いをかけます。

咄嗟にマルクリー又さんは軽く飛び上がって回避。これで空中で身動きが取れないと判断したのか、レオニスさんが拳を繰り出します。

速く重い拳でしたが、マルクリー又さんはこれを足元のジェット効果で空中にありながら後退しつつ受け止めます。

威力を十分に軽減し、マルクリー又さんはまるでダメージが入っていない様子で飛び下がり、打撃による衝撃をもとせずつ着地します。

自分の拳が入りきっていなかったことをレオニスさんも分かっていたのか、動揺することもなくマルクリー又さんを見据えています。

「ふむ。その雷の魔法に、光の筋と見紛うほどの素早い剣閃。お前がかの『雷光』と呼ばれた将兵だったか」

「さあ？ そんな名前で呼ばれたことも、あつた気がしなくもないな」

じりじりと睨み合いながら、二人は互いに攻め込む機会を伺っています。

私の見立てでは、マルクリー又さんの方が速力では上。しかしレオニスさんが体力と筋力では上というように見えます。

マルクリー又さんが速度で圧倒し、レオニスさんを削り切るか。

それともレオニスさんがマルクリー又さんを捉え、T Aの防御を貫けるほどの一撃を決めることが出来るか。そういった勝負になりそうです。

膠着状態に入ったかと思いましたが、マルクリー又さんが先に動き出します。

「ゆくぞッ!」

前方へのダッシュによる、高速移動。先程と同じ展開で、レオニスさんもまた正面からの攻撃に身構えます。

ですが、それは悪手でした。

「何ッ!」

正面からくる、というレオニスさんの想定とは裏腹に、マルクリー又さんは直前で直角に、減速すらほぼ無しで横に回り込みます。

これこそがT Aによる移動補助の真骨頂。足元のジェットによる移動補助に加え、魔力を扱うことによる運動ベクトルの変化。これが合わさることにより、人間では到底不可能な機動が可能となるのです。

想定外の移動により、想定外の方向から攻撃を繰り出すマルクリー又さん。その魔導セイバーの雷光が、レオニスさんの腕を捕らえます。

「ぐっッ!」

咄嗟に回避を試みたレオニスさんですが、それでも浅くない傷を腕に負い、さらには雷の魔法によるダメージも重なり、片腕の自由

が利かない程度の負傷をしてしまします。

ここを好機と見て、マルクリーヌさんがさらに攻めを継続します。負傷した腕を盾にするように、横に回り込みながら剣閃を繰り返すマルクリーヌさん。反撃がほぼありえないからこそその、大胆な攻めです。

これにはレオニスさんも対応に苦勞しているのか、やはり反撃らしい反撃も出来ず防戦一方。回避をするしかなく、時折魔導セイバーが身体を掠め、地道に雷撃によるダメージを蓄積していきます。

さて、このままの展開が続くなら、マルクリーヌさんが勝つでしょうが。

とはいえ、レオニスさんにもサティーラさんのような切り札があるかもしれません。勝負はここから、といったところでしょうか。

20 トランゼンドアーマー（後書き）

一挙連続投稿、五日目終了です。

もし宜しければ、ブックマークと評価ポイントの方を頂けると助かります。

また、ページ下部には今回の一挙連続投稿作品へのリンクも用意してありますので、是非そちらからお楽しみください。

21 獣王の誇り

このままの状況が続けば、自分が負けるということも分かっているでしょう。レオニスさんは、いよいよ思い切った行動に出ます。

「そう上手くいくと、思うなよッ！」

そう叫ぶと、なんとレオニスさんは自らマルクリー又さんの方へと突っ込んでゆきます。それも、すでに負傷し役に立たない片腕を盾にするようにして。

「その程度ッ！」

とは言え、この程度の行動であればマルクリー又さんも想定済みだった様子。さほど慌てた様子も無く、剣でレオニスさんを振り払うようにしながら後退し、距離を取ります。

「ぬうんッ！」

ただ、レオニスさんも距離を詰めるのが目的では無かった様子。マルクリー又さんに当たるはずも無い位置で、拳を勢いよく振り下ろします。

そのまま拳は床を強く叩き、それと同時に拳に込められた魔力が爆発を起こします。強い衝撃が全方向に向かって発生し、マルクリー又さんも、レオニスさんも押されて距離を離されます。

そして、この距離と、時間的な猶予を作るのが狙いだっただけでしょう。レオニスさんは即座に腕をクロスさせ、魔力を高めてゆきま

す。
「見よ、これが獣王の誇りよッ！」

そう叫ぶレオニスさんの肉体が、みるみるうちに変化してゆきま

す。より巨大に、より動物的に。
やがて獅子の頭を持つ人間、といったシルエットを持っていたレオニスさんは、二足歩行する獅子と呼んだ方が良い姿に変化してしま

まいます。
「させんッ！」

当然、マルクリーヌさんも黙って見ていたわけではありません。

衝撃に崩された体勢を咄嗟に整え、変化するレオニスさんの姿を見た途端に突撃します。

が、その剣閃を、なんとレオニスさんの尻尾が前に出てきて、あっさり

と払い落としてしま

います。
「なにッ！」
「これぞ我が奥義！ 一族の秘技、獣王降ろしよッ！ 人間よ、貴様を戦士として認め、我が最大の奥義で決着を付けてやるうッ！」

「くっ！」

悠々と宣言するレオニスさん。それもそのはず。マルクリーヌさんの剣閃は、何

度も尻尾だけで防がれているのですから。
それだけの実力差が生まれている状況に、マルクリーヌさんも焦りを隠せない様子。

ただ、これだけの自己強化効果がある技ですから、必ずデメリットがあるはず。例えば制限時間があるとか、自らの体力を大きく削るとか。あるいは、巨大化で速度が低下している可能性もありますが、尻尾の器用さ、素早さから考えてそれは無いでしょう。そう考えると、マルクリーヌさんの勝ち筋はレオニスさんの変化が終わるまで耐え抜くことにあります。

当然、マルクリーヌさんもそれにすぐに気づいたのでしょう。尻尾に迎撃されてしまう剣閃を止め、素早く後退します。

「させぬッ！」

レオニスさんはそんなマルクリーヌさんを猛追。速度でもマルクリーヌさんに追いついたのか、後退するマルクリーヌさんに肉薄し、拳を繰り出します。

「くっ！　これほどとはッ！」

苦い表情を浮かべながらも、マルクリーヌさんは魔導セイバーで拳を迎え撃ちます。打ち合った拳と魔導セイバーですが、あっさり魔導セイバーが弾かれ、マルクリーヌさんが体勢を崩します。

「貰ったッ！」

「まだだアッ！」

当然この機会を逃すはずが無く、レオニスさんは拳を振ります。そしてマルクリーヌさんはまだ諦めていない様子で、TAに搭載された『とある機能』を起動します。

次の瞬間、なんとマルクリーヌさんの全身を覆っていたはずのほぼ全てのパーツが弾けるようにパージされたのです。

22 獣王と雷光

マルクリーヌさんの意志に従い、分離し弾け飛ぶTAのパーツ達。これこそがTAの最後の頼みの綱。スピードに関する機能を持つパーツ以外を全てパージすることで、速度だけを最大限に高める緊急回避モード。

ただし、欠点として速度以外の全てを削ぎ落としている為、防御力はもちろん、魔導セイバーの出力も通常形態に劣ります。

唯一使えるのは速度に使う出力も全て攻撃に回すことで、一度だけ放つことの出来る兵装ただ一つだけ。

「ぬっッ！」

当然、それだけのリスクを代価に得た速度は今までよりもさらに一段階上がったものになります。レオニスさんの拳はギリギリで空を切り、マルクリーヌさんの回避が成功します。

「そこだアアアッ！」

そして、マルクリーヌさんはここで逃走ではなく、攻めることを選びました。

魔導セイバーを握る右手、ではなく。

緊急回避モードでも、唯一十分な出力を確保出来る兵装、左手に仕込まれた、雷の魔法を杭のような形に圧縮して打ち出す機構、

いわゆるパイルバンカーを発動します。

「グオオオオオツッ！」

マルクリーヌさんの攻撃は見事に決まり、レオニスさんの腹部に直撃します。

雷の杭がレオニスさんの分厚い腹筋すら貫き、衝撃と雷の魔法による二重のダメージを与えます。

このダメージでレオニスさんが倒れてくれば、マルクリーヌさんの勝利です。

しかし、現実是非情でした。

「吾輩は、負けぬウツッ！」

レオニスさんは全身を駆け巡った雷のダメージすら耐えきり、さらなる追撃の拳をマルクリーヌさんに振るいました。

パイルバンカーに出力を回したため、速力強化の効果が落ちたマルクリーヌさんには、回避する術がありませんでした。

「がふッ！」

直撃を受けたマルクリーヌさんは吹き飛ばされ、何度も地面を跳ね、転がり、壁際まで行ってようやく止まります。

行動不能になるほどのダメージを受けたのか、マルクリーヌさんは起き上がることが出来ませんでした。

「勝者、レオニスさんッ！」

私は第四関門の決着を宣言すると、すぐにマルクリー又さんへと駆け寄ります。

「うぐつ、雄一殿。すまない、負けてしまった」

「いいえ、マルクリー又さんはよくやってくれました。素晴らしい戦いでしたよ」

「そう言ってもらえると、嬉しいな。ふふ」

痛みをこらえながら、マルクリー又さんはなんとか笑みを浮かべます。

そんなマルクリー又さんと私の方へと、レオニスさんが歩み寄ってきます。すでに変化は解け、本来のレオニスさんの姿に戻っています。

「雷光よ。人間の戦士とは思えぬ程の、良い戦いぶりであった」

と、レオニスさんはマルクリー又さんを称えるような言葉を口にします。

「あの鎧を脱ぎ捨てた時、お前の速さは獣王降ろしをした吾輩を上回っていた。あそこでお前が逃げに徹していれば、獣王降ろしの時間切れで吾輩が負けていただろう。だが、あの場面でお前は勝利を求め、前に出た。その心意気こそ、戦士の証。吾輩は、強き戦士を尊敬する。それがたとえ、人間であつてもな」

その言葉が意外なものだったので、私はつい驚きの表情を見せてしまいます。まさか、魔王軍の方から人間へと歩み寄るような言葉が聞けるとは思っていませんでした。

そんなレオニスさんの言葉を受けて、マルクリー又さんは私の肩を借りながら、なんとか立ち上がります。

「貴方ほどの力を持った相手に評価してもらえるのは、騎士として
光栄だよ。いい勝負だった」

そう言って、マルクリーヌさんは右手を差し出し、レオニスさん
に握手を求めます。

「うむ」

そしてレオニスさんはマルクリーヌさんに応え、右手で握手を返
しました。

23 第五関門

第四関門も突破され、私は魔王軍の皆さんを引き連れ第五関門へと進んでゆきます。

ちなみにマルクリーヌさんには、二人っきりでデートがしたい、というご褒美をねだられたので、後日要望に応える予定です。

第四関門までは乙木商事の持つ技術力を見せることが最大の目的だったのですが、この第五関門からは趣旨が変わってきます。

技術よりも、純粋な戦力の誇示。それが第五関門以降の目的です。なので、ここからは目新しい技術こそはありませんが、それこそ戦力としては今までとは比較にならない程の人物が控えています。

「さて、いよいよ後半戦ですね」

私は第五関門の扉の前に、後ろの魔王軍の皆さんに声をかけます。

「次も吾輩が突破してみせよう」

「うむ、頼むぞレオニスよ。妾の出番は、後になればなるほど有利になるからの」

意気込みを語るレオニスさんに対して、ヴラドガリアさんは気楽に語ります。

「では行きましょう」

そう言うてから、私はいよいよ第五関門の扉を開きました。

中に待っていたのは、とある人物。私にとっては、この世界で唯一師匠と呼べる人。

「いやあ、ようこそようこそ。待ってたよ魔王軍の皆さん？ ボクがこの第五関門を担当する、元宮廷魔術師のシュリヴァだよ。それにしても、ずいぶんボロボロになっちゃってるねえ？」

ニコニコと笑みを浮かべながら煽りの言葉を発したのは、第五関門を担当する小さな魔術師。我が師匠にして、今や乙木商事にて魔導技術顧問という役職を担っているシュリ君です。

「ほっ」

するとここで、急にヴラドガリアさんの視線が鋭くなります。

「こやつ。相当な魔力の持ち主じゃな」

「あ、やっぱり魔王たんには分かっちゃう感じ？」

シュリ君は言うて、笑みを押さえて鋭い視線をヴラドガリアさんに返します。

「ボクとしては、魔王たんの力を見てみたいなー、って思うんだけどね？ まあ順番だし？ そっちのいちおう強そうな獅子のお兄さんから、さっさと始めたいな」

「吾輩は強い。侮るような言葉は侮辱と見なすぞ」

シュリ君の煽りが気に障ったらしく、レオニスさんが前に出ます。どうやら、お二人とも早く戦いたい様子。

ならば望み通り、手早く始めてしましましょう。

「それでは、第五関門、始めて下さい」

私が何の準備も整っていないような状態で開始を宣言したことに驚いたのか、レオニスさんはこちらを向いて疑問を投げ掛けてきます。

「いいのか？」

「ええ、かまいませんよ」

いつでも始めてくれてかまいませんし、何なら不意打ちでもかまいません。

それこそ、マルクリーヌさんを相手にいい勝負をしていた『程度』の相手であれば何の問題もありません。

何しろ今のシュリ君は、それこそマルクリーヌさんが百回戦つて一度たりとも勝てない程の実力があるのですから。

私の考えを知ってか知らずか、レオニスさんは何の構えもしていない様子のシュリ君に目掛けて全力で突撃し、拳を振るいます。

その一撃は確実にシュリ君を捉える、ように見えました。

ですが、次の瞬間にはガキンツという音と共に、拳が受け止められてしまいます。

「なんだとッ！」

驚くレオニスさんの拳は、突如現れた『光る魔法陣』によって防がれてしまいました。

「あーあ。つまんないなあ」

その言葉を漏らしたシュリ君の手には、ペン先の『光る羽ペン』が握られています。

「真正面からの突撃。力押しのカチ直な攻撃。そんなの『断絶』を意味する魔法陣が一つあればあっさり防げちゃうよ」

そう語るシュリ君の瞳は、興味を失った様子で、それこそまるで路端の石でも見るような視線をレオニスさんに向けていました。

「さっさと退いてくんないかな」

そして、そう言った次の瞬間には。

シュリ君は光る羽ペンを使い、空中へと無数の魔法陣を一瞬にして書き上げます。

「『爆ぜろ』」

そして一言。鍵となる一言と共に。

レオニスさんの周囲を囲むように、無数の爆発が発生します。

24 執念の賜物

膨大な魔力を持つシユリ君が放った、魔法陣から放たれる爆発の魔法。

属性などを介さない、魔法陣により細かに指定される魔法。通常は使いにくく、実戦的でないはずの魔法。

そのはずなのに、シユリ君は一瞬にして魔法陣を書き上げ、そしてレオニスさんを爆風で吹き飛ばしました。

それこそあまりにも一瞬の出来事であった為に、何の反応も出来ずに攻撃を受け、吹き飛ばされてしまったレオニスさん。

「ガフッ！」

壁にぶつかってようやく止まり、そして驚愕を隠せない表情でシユリ君の方を見ます。

「な、なにが起こったのだ」

「はい？ そんなの見ての通りでしょ。ボクが魔法陣を書いて、魔法を発動した。それでそっちが吹き飛ばされた」

「ありえぬッ！ 魔法陣を瞬時に描くなど、荒唐無稽だッ！」

レオニスさんの反応も当然でしょう。魔法陣は属性による魔法とは異なり、あらゆる情報を指定して初めて発動する魔法です。

それこそ爆発するだけの魔法ですら、例えばどの座標をどの程度の威力で、といった情報までの確に書き込んでようやく発動します。

そんな複雑な情報を、瞬時に魔法陣に書き込み、そして発動する。たとえ素早く魔法陣を描く能力があるとしても、書くべき内容を瞬時に判断し、正確に理解できなければ不可能な芸当なのです。

まあ、それをやってのけるのがシュリ君なんですけどね。ただ、それを可能にする秘密の一つが、スキルにあります。

【名前】 シュリヴァ

【レベル】 48

【筋力】 B

【魔力】 SSS+

【体力】 B

【速力】 A

【属性】 なし

【スキル】 速記術

圧倒的に高い魔力と、それに比べれば遙かに低いその他のステータス。

そして属性を持たず、スキルは唯一つ『速記術』のみ。

シュリ君は元からこの『速記術』を使い、常人ではありえない速度で魔法陣を完成させる能力を持っていました。

そしてこの能力を戦闘に活かせるよう、我が乙木商事が開発した魔道具が光る羽ペン、その名も『スリーディーペン』です。

その名の通り、立体的に字を書くことが出来るのがこのスリーディーペンの効果。魔力を使い、光の線を空中に描けるのです。

これと『速記術』を合わせること、シュリ君は瞬時に空中へと魔法陣を描き、魔法を発動可能になっているのです。

そんな常人離れた技術を目の当たりにして、驚いているのはレオニスさんだけではありません。

「まさか、そのようなことがありえるのか？」

声を漏らしたのは魔王、ヴラドガリアさん。

「ありえるから目の前で現実になってるんだし。ありえなかったらボクはここに居ないよ」

「そうか。つまりお主は、瞬時にその場で、適切な魔法陣を描く能力がある、と」

「そういうことだね」

シュリ君が肯定すると、ヴラドガリアさんが納得したように頷きます。

「ふむ。となると、そのようなことが可能な人物を、妾は一人しか知らぬ」

おや？ 何やらヴラドガリアさんが妙なことを言い始めましたね。

「魔法の才に恵まれず無能と呼ばれたものの、瞬時に魔法陣を描き、

状況に応じた適切な大魔法を行使し、戦場にて無数の敵を屠ったと言われている古代の賢者。千年前に存在したとされる『エレメンタルマスター』にして『魔導の父』でもある『無能の大賢者』。レイモンド・シュリーヴァリウス・マクスウェル。汝が、その本人であるな？」

聞き覚えのない名前が、突然ヴラドガリアさんの口から出てきました。

そして、シュリ君は楽しそうな笑みを浮かべます。

「へえ。これだけの情報から、しかもそんな化石みたいな話から、よく気付けたね？ その通り。ボクがその『無能の大賢者』と呼ばれた張本人だよ」

しかも、まさかの肯定とは。

私も知らなかった新事実が、ここで判明してしまいました。

24 執念の賜物（後書き）

一挙連続投稿、六日目終了です。

もし宜しければ、ブックマークと評価ポイントの方を頂けると助かります。

また、ページ下部には今回の一挙連続投稿作品へのリンクも用意してありますので、是非そちらからお楽しみください。

25 無能の大賢者

「千年前の偉人が、まさか今も生きていようとはな」

ヴラドガリアさんが、シュリ君を警戒するような視線のまま呟きます。

これにシュリ君は、困ったような表情を浮かべて返します。

「千年前、とか言われちゃうとボクがそんなとんでもないおじいちゃんみたいで嫌なんだけど？」

「じゃが、事実であろう？」

ヴラドガリアさんの問いかけに、シュリ君は首を横に振ります。

「言つとくけど、『この身体』で目覚めてからはたったの百五十年ぼつちしか生きてないんだから。まるで千年ずっと生き続けたヨボヨボのおじいちゃんみたいない方はこまっちゃうなあ」

「ほう。やはり汝のその身体は『人ならざる者』であつたか」

周囲を置いてきぼりにしたまま、二人は話を続けています。

私も内容こそ理解は出来ていますが、正直驚きは隠せていません。

「アハハ、その通りッ！ ボクの身体は失敗作も含めてこれだ『三休目』の『ホムンクルス』だよ！ 試行錯誤して、ようやく理想の肉体を手に入れたのがこの身体さ。まあ、そのお陰でこんなことも

出来るんだけどね？」

シュリ君はそう言った瞬間、魔法陣を描きます。

「ぐっッ！」

そして瞬時に発動した魔法が、レオニスさんの身体を光の輪で拘束します。

「駄目だよ君、人が話してる時に割り込もうとしちゃあね？」

「な、なぜ」

「分かるよ。この身体は特製だからね。目も普通じゃ見えないものが色々見えるんだよ」

言いながらシュリ君はレオニスさんへと近づいていきます。

「へびって知ってるかな？ 彼らは人間の持つ視力とは、また異なる感覚器官を持っているんだよ。その器官は温度の高低を感知できる。羨ましいよね？ だからボクはそうなるようにこの目を『作った』んだよ」

恐ろしいものでも見るかのように、レオニスさんの表情が変化します。そして、シュリ君から視線を逸らします。

「もちろん温度だけじゃない。魔力の濃淡に透視的な視界。電磁気の強弱から、微視的な視覚、遙か遠くを見通す視力。そういった色々な要素を持ち合わせているから簡単に分かるんだよ」

「な、何を」

「キミが、ボクを狙って動こうとしていたことが。筋肉が緊張して力んで、こっちへと走ってこようとしているのが手にとるように分

かったよ。だからボクは魔法陣を書いて、キミの邪魔をさせてもらった。シンプルな話でしょ？」

シュリ君に事細かな説明を受けて、それがどれだけの差になっているのか。自身が勝てる可能性がどの程度なのか、ということをしオニスさんに考えさせたのでしよう。

「吾輩の、負けだ」

レオニスさんは、自然と項垂れ、自身の敗北を認めました。

「第五関門、勝者、シュリ君」

なんとも言えない決着の付き方に、私は声を張り上げる気にもならず、咳くように宣言しました。

するとシュリ君はこちらに駆け寄ってきます。

「へっへっくん、勝ったよオトギンっ！」

そして私に抱きついてきます。

「さすがシュリ君ですね。期待通りでした」

「そう？　むしろボク的には期待外れ的な感じ？　魔王たんには負けるだろうけど、他の子たちにはもうちょっと善戦してくれないかな？　って思ってたんだけど。スリーディーペンで戦う機会なんて滅多に無いんだし」

言って、シュリ君はスリーディーペンを掲げてみせます。

「まあ、こうして戦えるのはオトギンがこれを作ってくれたお陰だ

ね。ありがと、オトギン！

「どづいたしまして」

「うおっほんッ！」

私とシュリ君がイチャイチャしていると、後ろから大きく咳き込む声が聞こえてきます。

「汝ら、いちやついておる場合ではないじゃろうが。次は妾が戦う番であるうっ？」

そう言って、ヴラドガリアさんが前に出てきます。

26 相性問題

ヴラドガリアさんの言う通り、今はシュリ君とイチヤイチャしている場合ではありませんね。

色々と確認したいこともあったのですが、それも後回しでいいでしょう。

今は、ひとまず第五関門の続きといきましょう。

「えーっと、正直ボクとしてはもう負けでいいんじゃない？ って思ってるんだけど」

「何を言っておるのじゃ。戦う前から諦めてどうする」

まさかの、シュリ君からの敗北宣言。そしてそれをヴラドガリアさんが諫めるという奇妙な状況に。

「だってさあ。ボクには『視えてる』からね？ だから分かるんだけど」

「なんのことが分からんな？」

それこそ私にはなんのことが分からない会話を繰り返している二人。どうやら、シュリ君には私にも分からない何かが見えている様子。それでヴラドガリアさんを相手にして勝ち目が無い、と言っているのでしょう。

「じゃあもう、ちやちやつとやつちやつて、ちやちやつと終わろう！ ほらオトギン、合図！」

「えー、はい。では第五関門二回戦、開始」

シュリ君に急かされて、私はそのまま合図を出します。

すると、途端にシュリ君は魔法陣を書き上げ、そのまま発動。巨大な火球がヴラドガリアさんへと目掛けて飛んでいきます。

「ふむ」

ですが、なぜかヴラドガリアさんが視線を向けた瞬間。

一瞬にして、巨大な火球が消滅してしまいます。

「悪くは無いの。じゃが、妾には相性が最悪じゃ」

「ほらね？」

こうなるのが分かっていたかのように、シュリ君がこちらを見ってきます。

「あの、シュリ君。これは？」

「魔王さんの能力だよ、多分ね。魔法無効化とか、そういう感じの効果かな？」

「惜しいのう。正確には魔力を吸収する魔眼の力、じゃ。『吸魔の魔眼』というスキルじゃよ」

自慢するかのように、ヴラドガリアさんは自身の能力を語ります。

「それは、言ってしまったていいのですか？」

「構わぬよ。対策など不可能であるからの。それに、妾の力はこんなものではない」

「とは言え、魔法ぐらいしか攻撃手段の無いボクには相性最悪だけどねえ」

なるほど、それでシュリ君は戦う前から負けたようなことを言っていたのでしょうかね。

シュリ君いわく、特別な目で色々なものが見えるらしいですから、それでヴラドガリアさんの魔法無効化とも言える能力に察しがついていたのでしょうか。

「では、これで第五関門は突破、ということだ」

「そういうこと。それじゃあ、オトギン行こっか!」

私が第五関門の終了を告げると、シュリ君が私の腕を取って引っぱります。

「行くとは？ シュリ君も第六関門に？」

「途中まで、ね。オトギンにはボクのこと、もう少し説明しておきたいしね？」

なるほど。第六関門へと向かいながら、今回ヴラドガリアさんによって明かされたシュリ君の秘密について話してくれるということでしょう。

「分かりました。では、行きましょうか」

「うんうんっ!」

シュリ君に手を引かれるがままに、私は進んでゆきます。振り返れば、後ろから呆れたような表情のヴラドガリアさん達が付いてきていました。

「なんと云うか、緊張感の無いヤツじゃの、汝らは」

27 第六関門

第六関門へと向かう道中、私はシュリ君から色々な話を聞きました。

まずはシュリ君が千年前の大賢者であったということ。魔法を極めるために、自分で作った人間そっくりのホムンクルスの肉体に魂を移し替えて長く生きてきたこと。

ちなみに、この技術を応用したことによって、松里家君の肉体改造やジョアンさんの性転換が可能になったのだとか。

そんなこんなでシュリ君の事情についてもあっさり説明を受けたところで、いよいよ第六関門に到着しました。

今までの関門よりも、更に広く頑丈な、より激しい戦闘に耐えるエリア。ここで待っていたのは、四人の少年少女でした。

「いよいよですね、乙木さん」

最初に声を上げたのは、四人の中でもリーダー的な存在である『勇者』の金浜君。

そして、金浜君と共に並ぶ男性一人、女性一人、そして女性にしか見えない男性が一人。それぞれ『剣聖』の東堂君、『聖女』の三森さん、『賢者』の松里家君です。

「ええ、おまたせしました」

私は一度金浜君に領いて応えた後、後ろを振り返って魔王軍の皆さんに語りかけます。

「それでは、皆さん。彼らが第六関門を担当する四人であり、我が乙木商事の協力者の中でも最大の戦力を持つ方たちでもあります」
「始めまして皆さん、俺は金浜蚩一。ルーンガルド王国では『勇者』をやらせて貰っています」

金浜君が自己紹介をした途端、ヴラドガリアさんを除いた魔王軍の全員がざわつき始めます。

ですがこれで終わりではありません。

「俺は東堂陽太！ 蚩一と同じくルーンガルド王国で『剣聖』をやつてるぜ！」

「私は『聖女』の三森沙織です」

「僕は『賢者』の松里家勇樹だ」

三人が名乗った途端、ざわつきがより大きくなります。

そしてただ一人、冷静な様子のヴラドガリアさんだけが声を上げます。

「なるほど、当代の勇者パーティを揃えた、というわけかの。面白いではないか！」

笑みを浮かべて、ヴラドガリアさんが前に出ます。

「妾の目算が間違っておらぬなら、お主ら全員が我が魔王軍四天王を遙かに凌ぐ実力者であるう？ であれば、妾も楽しめようぞ」

このヴラドガリアさんの予想は正解で、四人は全員がステータス

SSSSに到達している実力者です。
四人のステータスは以下のとおり。

【名前】金浜蛍一

【レベル】121

【筋力】SSSS

【魔力】SSSS

【体力】SSSS

【速力】SSSS

【属性】光 炎 治癒 闘気

【スキル】勇者

【名前】三森沙織

【レベル】108

【筋力】SSS

【魔力】SSSS

【体力】SSS

【速力】SSS

【属性】光 水 治癒 支援 結界

【スキル】聖女

【名前】 東堂陽太
【レベル】 116

【筋力】 SSSS
【魔力】 SS
【体力】 SSSS
【速力】 SSSS

【属性】 闘気

【スキル】 剣聖

【名前】 松里家勇樹
【レベル】 109

【筋力】 SSS
【魔力】 SSSS
【体力】 SSS
【速力】 SSS

【属性】 炎 雷 大地 冷気 風

【スキル】 賢者

全員が、得意とするステータスに関してはSSSSを達成。 金浜

君に至っては全てのステータスがSSSSという化け物っぷりです。

「退屈はさせませんよ」

言つて、金浜君が剣を構えます。それに合わせて、他三人もまた武器を構え、戦いに備えます。

双方やる気は十分、第六関門を始めても良いでしょう。

「それでは、第六関門、開始！」

28 勇者VS魔王

私の掛け声と同時に、金浜君と東堂君が前に駆け出します。

「援護します！」

その二人へと目掛けて、三森さんが支援の魔法を放ちます。これにより、二人の高い身体能力がさらに上昇します。

「ふむ」

駆け寄る金浜君と東堂君を前に、ヴラドガリアさんは余裕の表情を見せます。

そして最初に近寄った金浜君が剣を振りますが、ヴラドガリアさんはこれをなんと片手で受け止めてしまいます。

「なっ！」

「妾に支援魔法は無意味じゃ」

金浜君の剣は光の魔力を纏っており、さらに支援魔法による強化も入っていたのですが、それをヴラドガリアさんはあっさりと解除。結果、何の変哲も無い剣の一撃となり、ヴラドガリアさんの魔力と体力を貫くほどの攻撃にはならなかったのでしょうか。

「だったら俺がッ！」

金浜君とヴラドガリアさんが向かい合うその横から、東堂君が切り込んでゆきます。支援魔法はすでに金浜君と同様に解除されていますが、彼は魔力に頼らない剣の一撃でヴラドガリアさんを攻撃します。

しかし、これもヴラドガリアさんには通じません。

「まだまだじゃ！」

東堂君の剣の一撃を、ヴラドガリアさんは空いた片方の手で払い除けるだけで防いでしまいます。ヴラドガリアさんには傷一つ付いていない様子。それだけ高い魔力で自身の身を守っているのです。う。

ヴラドガリアさんもそうですが、魔王軍の方々は魔力で身体を覆い鎧の代わりにする戦い方をすることが多いようですね。レオニスさんも、サティーラさんもそうでした。

私達人間の勢力は、たしかにそういう戦い方をする人も居ますが、基本は守りは防具頼り。魔力も自然と身体から溢れる分で防御する以上の防御はしません。

種族か、あるいは文化の違いか。何にせよ、こうして戦い方の違いが出るというのは興味深いですね。

私がそういう考えているうちに、戦いは次の局面を迎えていました。

金浜君と東堂君の二人がかりでヴラドガリアさんに攻め込み、これをヴラドガリアさんが余裕そうに捌いていました。が、そうして作られた時間を使い、松里家君と三森さんが大規模な魔法を発動させます。

「これでも、喰らいなさいッ！」

まず、松里家君が大規模な攻撃魔法を放ちます。炎、雷、風、冷気の魔法をかけ合わせた、複雑かつ威力の高い魔法。

全く異なる属性を一つに集めた結果、魔力の爆弾のような状態になった塊が、ヴラドガリアさんへ目掛けて飛翔します。

「ぬう、中々よッ！」

さすがにこれだけの威力の魔法を消すのは一筋縄では行かないでしょう。ヴラドガリアさんは金浜君と東堂君から距離を取りながら、松里家君の魔法を消す為に集中します。

「今です！」

そこで続いたのが三森さん。発動させたのは結界の魔法。味方の力を高めるのではなく、相手の力を削ぐ為の結界。

これにヴラドガリアさんを閉じ込めることで、魔力による身体の守りを弱体化させます。

つまり、これまで通らなかった攻撃が通るようになった、という意味でもあります。

「はあッ！」

「喰らえッ！」

金浜君、そして東堂君が同時に攻め込みます。松里家君の魔法を消す為に集中しているのもあって、今は二人の攻撃に宿る魔力を消し飛ばす余裕の無いヴラドガリアさん。

「ぐぬっ」

悔しそうに表情を歪めると、次の瞬間には二人の攻撃が直撃。続いて攻撃を受けたことにより集中力が途切れたのか、消し切れなかった松里家君の魔法も直撃。

大爆発を起こし、辺りが見えなくなります。

「やったか？」

煙越しにヴラドガリアさんの方を睨みながら、迂闊とも言える発言をする東堂君。

それがフラグとなったのか、次の瞬間に爆発の余波の煙が吹き飛ばされます。

「なかなかやるではないか！ 妾が魔眼の力による『手加減』を止め、魔法に集中しなければ防ぎきれぬ攻撃であったぞッ！」

どこか楽しそうにも聞こえる声を上げながら、煙を吹き飛ばしつつ姿を表したのはヴラドガリアさん。

その類には、一筋の傷が付いていました。

「なんて、相手だ」

これは困ったな、とでも言いたげに、金浜君が苦笑します。

28 勇者VS魔王（後書き）

一挙連続投稿、七日目終了です。

もし宜しければ、ブックマークと評価ポイントの方を頂けると助かります。

また、ページ下部には今回の一挙連続投稿作品へのリンクも用意してありますので、是非そちらからお楽しみください。

まさか、一筋の傷を付けるだけで終わるとまでは思っていなかったでしょう。四人は驚愕を隠せない表情でヴラドガリアさんを見ている。

「これだけ妾を楽しませてくれたのじゃ！ 汝らには褒美として、妾の圧倒的なステータスを教えてやるうではないか！」

ヴラドガリアさんは仰々しく言ってみせます。

「見よ！ これが妾のステータスじゃ！」

そう言った瞬間、ヴラドガリアさんのステータスボードが誰にもはつきり見えるようデカデカと表示されました。

【名前】ヴラドガリア・フォン・エルドラント

【レベル】285

【筋力】SSSS

【魔力】SSSS+

【体力】SSSS

【速力】SSSS

【属性】闇 深淵 空間 闘気

【スキル】吸魔の魔眼

なんと、勇者である金浜君すら超えるステータス。

魔力に至ってはSSSS+。これは更に上の段階、伝説上の存在とも言われるファイブエスの直前であるという証拠の表示です。

ステータスというのは、評価が上がるごとに指数関数的に実際の強さが上昇していきます。

さらに、高い評価になればなるほど、次の評価に到達するまでの幅が広がっていきます。

つまりSSSSとSSSS+では、数倍では利かないほどの格差があるのです。

「せっかくじゃから、種明かしをしてやろう。妾が使っていたのは『吸魔の魔眼』というスキルじゃ。書いて字の如く、瞳に映る全ての魔力を『経験値』に変えてしまう。つまり、妾は魔力のあるモノを見ているだけで勝手にレベルが上っていく能力を持っているといえるのう」

なんと。まさか、自動レベルアップ系のスキルを、私以外の人物が所有しているとは。

「そしてお主らの魔法を解除して見せたのは、あくまでもこの吸魔の魔眼を利用する過程での副産物に過ぎぬ。このスキルの真の力は、魔力を見ただけで経験値に変えることにある。つまり、それ以外の効果に注目したならば、真に燃費の悪いスキルなのじゃよ」

「そ、それはつまり」

ヴラドガリアさんの言うところが理解できたのか、金浜君が引きつった表情で言います。これにヴラドガリアさんが頷き、答えを返します。

「そうじゃ。つまり妾は、レベリングのスキルをあえて戦闘に使うことによって手加減をしていたのじゃ。そしてこのスキルに費やしていた魔力を戻した状態こそが、妾が最も強い状態。闇を極めし先にある属性、深淵の魔法を闘気と共に纏い戦う、深淵魔闘術こそが、妾の真骨頂よ」

言つとヴラドガリアさんは、自身の身体に纏った闘気という属性の魔力に加えて、さらに別の属性の魔力を重ねて纏います。

闇にも似た、より深い黒。恐らくヴラドガリアさんの言っていた、深淵という属性の魔力なのでしょう。

「では！ いざ尋常に勝負ッ！ これより妾、ヴラドガリア・フォン・エルドラントが深淵の魔王と呼ばれたその力を披露してくれよう！」

宣言と同時に、ヴラドガリアさんが駆け出します。

そのスピードはあまりにも早く、金浜君と東堂君でさえ反応できていませんでした。

当然、その後方に控えていた、後衛の二人については言わずもがな。

「なっ！」

「えっ」

二人が驚きの声を上げた頃には、すでにヴラドガリアさんが拳を

振り上げていました。

「ほっ」

軽い声と同時に、その拳が振り下ろされました。床を強烈に叩きつけた拳は、その衝撃波だけでも想像を絶する威力となっていました。

次の瞬間には二人共吹き飛ばされ、壁へと背中から打ち付けられていました。ダメージも大きく、二人は戦闘不能と見なしていいでしょう。

しかも、衝撃にも魔法にも強いはずの素材で出来た床が、あっさり大きく陥没しています。こんな破壊状況には、私が全力で攻撃してようやく至る、といったところですよ。

それだけ、ヴラドガリアさんの能力が隔絶したものであるという証拠でしょう。

「次はお主らじゃな」

二人を倒してすぐに、ヴラドガリアさんは金浜君と東堂君の方へ振り返ります。

「陽太頼むッ！」

「おっッ！」

金浜君に言われ、東堂君だけが駆け出します。

「うおおおおッ！」

「未熟！」

東堂君の剣による一撃を、なんとヴラドガリアさんは二本の指で挟んで止め、さらに力を込めて二つにへし折ってしまいます。

さらに追撃とばかりに、もう片方の手で東堂君の鳩尾へ一撃。

「がふッ！」

「安心せよ、寸止めじゃ」

ヴラドガリアさんが寸止めたにも関わらず、東堂君は吹き飛んでいきます。あまりにも破壊力の差に呆れる他ありません。

ですが、こうして東堂君が時間を稼いでくれたお陰で金浜君が切り札となるスキルを発動させることが出来ました。

「『限界突破』ッ！」

それは、『勇者』スキルに含まれるスキルの一つ。莫大な魔力の

消耗と引き換えに、ステータスを大きく引き上げるスキルです。

「ハアアアアアッ！」

「くはは！ やるではないか！」

金浜君はSSSSからさらにステータスを数倍に引き上げ、ヴラドガリアさんに向かってゆきます。

金浜君が何度も剣を振り、それをヴラドガリアさんが受け止め、払い落とす。そんな応酬が、目にも留まらぬ速さで続きます。

しかし、それでもヴラドガリアさんと打ち合うことが出来る程度。素の近接戦の能力が同程度であっても、身体能力を強化する魔法の素質が少なくとも十数倍は違うのですから。

例えば金浜君がチートスキルで身体能力を強化したとしても、ヴラドガリアさんの魔力SSSS+という莫大な数値の暴力には敵いませんでした。

やがて、限界突破に費やす魔力も途切れようかというところで、ヴラドガリアさんが動きます。

「良い勝負であったぞ、当代の勇者よッ！」

そう言い放つと同時に、掌底が金浜君の鳩尾へと叩き込まれます。

「がッ！」

その攻撃は、金浜を吹き飛ばす事無く、衝撃の全てを身体に通す一撃でした。

あまりにも強烈な一撃に、金浜君は短く息を漏らした後、ズルズルと倒れ込んでしまいます。

決着が、つきました。

「勝者、ヴラドガリアさん！」

これでとうとう、残すは第七、最終関門のみとなってしまうました。

その後、しばらくの休憩を挟みます。ヴラドガリアさんはほぼ消耗もなかった為、すぐに最終関門へと向かっても問題ないと言っていました。が、それよりも私が四人の治療の為に残る必要があったのです。

それに、ヴラドガリアさんも実際のところは多少の魔力の消費をしています。限界突破をした金浜君を相手にした分を、多少でも回復してもらいましょう。

私が魔法陣を描き、四人に治癒の魔法を掛けることで、治療はすぐに終わります。そして起き上がった四人は、悔しそうな表情を浮かべていました。

「すみません、乙木さん。もつと戦えるつもりだったんですが」「仕方ありませんよ。ヴラドガリアさんの戦闘能力は、計算以上のものがありましたから」

しかも、手札の一つかと思われていた『吸魔の魔眼』が、まさか手加減の為の手札だったとは。予想も出来なかったでしょう。

「なので、本気のヴラドガリアさんを引き出せた、という意味では十分に良い結果です」

「あはは。むしろ勝つつもりでいたぐらいなんですけどね。いちおう、勇者ですし」

残念そうに言う金浜君含め、落ち込む四人を慰めるため、私はあの言葉を口にします。

「安心して下さい。ちゃんとご褒美はありますから」
「ホントですかっ!」

身を乗り出して食いついてきたのは、三森さんでした。報酬で釣って気分転換をさせようかと思ったのですが、想像以上の食いつきですね。

「ええ。それぞれ、何が良いのか考えておいて下さいね」

「はい! なら、私はもう思いついてますっ!」

「そうなんですか?」

「その、私は乙木さんの、香玉がほしいですっ!」

思わぬ三森さんの要求に、つい私は固まってしまいます。

「お前は何を言っているんだ?」

「松里家くんは黙ってて」

「あっ、はい」

ただ一人、ツッコミを入れてくれた松里家君でしたが、振り返って松里家君に睨みを利かせた三森さんによって口を封じられています。

「ええと。三森さん。私の香玉とは？」

「はい。普通のお花の匂いがあるものと同じような感じで、乙木さんの匂いがあるのが欲しいんですっ！」

「そ、そうですか。そんなに私の匂いが？」

「はい！ もう我慢できませんっ！」

はあはあ、と荒い息を漏らしながら、ヤバい目つきで私に迫ってくる三森さん。匂いフェチもここまで来ると一種の狂気ですね。

「わかりました、後日作ってお渡します」

「やったっ！ ありがとうございますっ！」

こうして私はよく分からない内に、知り合いの女性に自分の匂いがする香玉を送るという未知の体験をすることになってしまいました。

31 最終関門

別れ際に匂いを嗅がせてくれ、とせがんで来た三森さんの「んほお」という声を背にして、私達はいよいよ最終関門へと向かいます。ここが突破されてしまえば勝負は負け。乙木商事は、壊滅と言つていいほどの被害を受けてしまいます。

逆に、ここで勝てば私の当初の予定通りに話を進めることも可能となります。

予想はしていましたが、やはり最終関門が勝負の分かれ目となるようです。

そうして最終関門の扉を開くと、中で待っていたのは一人の女性。

「待ってたよ、雄一」

そう。私の愛する妻たちの一人。有咲です。

「待たせたな、有咲」

「ううん。こっちはモニターでも色々見てたから。カルキユレイターもバッチリだよ」

「ありがとう」

言つて、私は有咲の頬にキスをします。

呆れた様子で私と有咲の方を伺っている魔王軍の皆さんへと振り返り、話をします。

「では皆さん。ここが最終関門です」

「その者が、最終関門の相手かえ?」

「いいえ。彼女は有咲。私の妻です。ここでは、あくまでも勝負の見届人に過ぎませんよ」

私が言うと、有咲も頷きます。

「その通り。アタシが見届人で、アンタらの相手は別にいる」

「それは誰じゃ?」

「アンタらの目の前にいるでしょ。アタシの旦那様。乙木雄一だよ」

有咲に言われ、私は一度魔王軍の皆さんに向かってお辞儀します。

「ご紹介に預かりました、最終関門担当の乙木雄一です」

「ふむ、やはり汝が最後の相手か」

納得したようにヴラドガリアさんは頷きます。

「最初に汝が見せた魔力は、妾には及ばずとも先ほどの勇者らには匹敵する程であったように思う。それだけの実力があれば、関門を務めるのも頷けるのじゃが」

そこまで言って、鋭い視線をヴラドガリアさんは私に投げ掛けます。

「しかし、所詮その程度とも言える。勇者らと同程度の力しか持たぬお主が、本当に妾を相手に出来るのかえ?」

ヴラドガリアさんの指摘はごもつとも。実際に、私のステータスは以下の通りでしかありません。

【名前】乙木雄一

【レベル】2385

【筋力】SSSS

【魔力】SSSS

【体力】SSSS

【速力】SSSS

【属性】なし

【スキル】ERROR

表記上では金浜君と同程度ですが、彼をSSSSの中位程度だとすれば、私はSSSSの下位。どうにかSSSSに届いた程度、という数値に過ぎません。

「ナメてんじゃねーぞ、ちびっ子」

ヴラドガリアさんの疑うような発言に返したのは有咲でした。ちびっ子、と言われて嫌そうに眉をしかめるヴラドガリアさんに、さらに有咲が言葉を浴びせす。

「むしろ覚悟しときな。アタシの見立てでは、雄一はアンタにほぼ確実に勝てる。言い訳も出来ねえぐらいボコボコにしてやるよ」

「ほう、それは面白い冗談じゃのう?」

不敵な笑みを浮かべ、有咲の挑発に言い返すヴラドガリアさん。
戦う張本人である私を差し置き、なぜかヴラドガリアさんと有咲
の間で盛り上がっていますね。

「ともかく、始めましょう。全ては戦えば分かることですから」

私が言うと、ヴラドガリアさんと有咲が同時に頷きます。

「そうじゃな。結果が全てじゃろう」

「雄一。全力でね。『アレ』も使っていいから」

「分かったよ」

有咲の言葉に応え、頷きます。

やがてヴラドガリアさんも構え、互いに準備が完了すると、有咲
が宣言します。

「そんじゃあ、最終関門、開始っ!」

いよいよ当代の魔王と、余り物スキルを押し付けられた召喚者に
よる戦いが始まります。

32 災禍の化身現る

「小手調べなどせぬッ！ 全力でゆくぞッ！」

ヴラドガリアさんは即座に闘気と深淵の魔力を纏い、全力で戦う体勢を整えます。

「ええ。同感です」

そして私も同様に、全力で戦う為のスキルを発動させます。スキル『災禍』を始めとする、忌まわしきスキル達。相手に著しいデバフを掛け、私は待ち構えます。

「なんじゃ、これはッ？」

困惑するヴラドガリアさん。しかし、攻撃の手を緩めるわけにもいかないのか、私にそのまま突撃してきます。

さすが魔王とも言うべきでしょうか。デバフを食らってもまだなお、その身体能力は高く、限界突破前の金浜君すら上回っています。

しかし残念ながら、その攻撃を私が受けることはありません。

「いらっしゃいませ」

「なっ」

私はヴラドガリアさんの攻撃を、流れるような自然な流れで受け流し、その勢いすらも利用して追撃を加えます。

予想すらしていない、高度な格闘術に翻弄され、ヴラドガリアさんは驚きの表情を浮かべたまま吹き飛んでゆきます。

実は、この技術には単純な種があつて、私に特別な格闘術の才能があるわけではありません。

何を隠そう、私は現在進行系で有咲のチートスキル『カルキュレーター』を発動させているのです。

あらゆる情報を受けとり、そこから正解を導くカルキュレーター。その効果を近接格闘戦に言えば、相手の攻撃を受け流し、利用して反撃を加える、ある種の合気道のような高度な技に見える動きを再現可能になるのです。

有咲と共に訓練を続け、今では私がカルキュレーターを発動し続けることが可能な時間は十分程度にまで伸びました。

つまり、私は今から三十分の間、近接格闘戦を挑んでくる、正にヴラドガリアさんのような相手に対して無敵にも近い戦闘能力を維持可能なのです。

「まさか、斯様な達人であつたとはのうッ！」

「いえいえ、自分は達人などでは」

「ぬけぬけとッ！」

ヴラドガリアさんは次々と攻撃を繰り返しますが、私はその全てをいなし、かつ的確に反撃を加えていきます。

さほど大きなダメージではないでしょうが、それでも無視できるものでも無いはず。状況は、ヴラドガリアさんにとって著しく悪い

と言えるでしょう。

「それにしても、いいのですか？」

「なにがじゃ？」

「こんな私の手に、触れられてしまって」

私に言われ、ようやく気づいたかのようにヴラドガリアさんはハッとして、距離を取ります。

「そうじゃったか。妙に力を奪われてゆくとっておったが、まさかお主が毒手の使い手であったとは」

「まあ、毒手というよりは呪いの手なんです。おおよそ当たりです」

私の血は『災禍』により汚染された『詛泥』という存在に変わっています。なので私の手は無論、全身が呪いの塊であると言えるので、接触するだけでダメージ、デバフを叩き込めるわけです。

「さらに、ですが。すでにお気づきかと思いますが、周囲にはヴラドガリアさんを蝕むデバフの元凶をたっぷりばら撒いてあります。もう逃れる術はありませんよ」

「この黒い霧のようなものがそうじゃな？」

ヴラドガリアさんは、辺りにうっすらと漂っている黒い物体、私が『瘴気』スキルで生成し、辺りに散布した『詛泥』と『災禍』の混合物に目を向けます。

「この霧が濃くなるほどに、ヴラドガリアさんの能力は低下していき、常時ダメージを負い続ける。すでに、ヴラドガリアさんに勝ち目はありませんよ」

「なるほどのつ。じゃが、それは妾が格闘一辺倒であるならば、じやろっツ！」

言って、ヴラドガリアさんは深淵の魔力を解除します。

「この程度の『魔法』であれば、妾の『吸魔の魔眼』であれば問題なく蹴散らせるのじゃツ！」

そして、ヴラドガリアさんは吸魔の魔眼を発動させました。

ここまで、正に私の『計算通り』の展開です。

つまり、これでチェックメイト。

吸魔の魔眼を発動したはずのヴラドガリアさんは、途端に顔を青ざめさせます。

「な、なんじゃ。これは、こんな、斯様なものがあるはずが無いのじゃツ！」

恐れのような感情を顔に浮かべ、ヴラドガリアさんは叫びます。

「ありえぬ。こんなもの、見たことが無いツ！ 魔法でも、ましてやこれは、ある意味では『スキル』でも無いツ！ 全くの、未知の力じゃツ！」

ヴラドガリアさんの言葉に、私はにっこりと笑みを浮かべて応えます。

「ご明察。私のスキル『災禍』は、魔法でも、物理現象でもない『第三のエネルギー』を生み出すスキルです」

「そうか、それがお主の力か」

ヴラドガリアさんは諦めたように頂垂れます。

「そうか。お主こそが、かつて我が配下からの報告にあった『災禍の化身』、その人であったのじゃな。まさかこれほどとは」

そして、悔しそうに一言。

「妾の、負けじゃ」

こうして、一方的とも言える展開のまま、最終関門の決着は付き
ました。

32 災禍の化身現る（後書き）

一挙連続投稿、八日目終了です。

もし宜しければ、ブックマークと評価ポイントの方を頂けると助かります。

また、ページ下部には今回の一挙連続投稿作品へのリンクも用意してありますので、是非そちらからお楽しみください。

33 交渉タイム

「この地に訪れた時点で、勝負は決まっておった。妾に出来たのは、どれだけ身内の被害を抑えるか、という戦いだけであつたのじゃない」

観念した、といった様子で項垂れたまま語るヴラドガリアさん。

「勝負は、汝らの勝ちじゃ。約束通り、どのような条件にも従おう。この首も捧げよう。じゃが、だからどうか、妾以外の者の命だけは、見逃してくれぬじやろうか？」

決死の覚悟で言ったのでしよう。ヴラドガリアさんは深く、頭を下げて私に要求、というよりも懇願をしました。

ですが、私は首を横に振ります。

「残念ながら」

「そう、か」

「そもそも誰の命も奪うつもりはありませんので、ヴラドガリアさんの首は要りません。なのでその要求は飲めませんよ」

「なぬ？」

ぼかん、とした顔になるヴラドガリアさんに、私はさらに畳み掛けます。

「そもそも今回のゲームは、私達乙木商事の戦力を見せることで、

容易くない相手であると理解してもらおうこと。高い技術があると知ってもらうこと。そして、交渉にふさわしい相手であると思ってもらうことにあります」

「っ、つまり？」

「私からの要求は一つ。魔王軍の皆さんと、交渉がしたいのです」

交渉、という言葉に希望が見えてきたのか、ヴラドガリアさんの表情が少しだけ明るくなってきます。

「交渉、とは？ その内容によつては、この場で約束を反故にしても抵抗せねばならなくなるが」

「安心して下さい。そんな、一方的に負担を押し付けるようなことはしませんよ」

私は、元より考えていた言葉を口にします。

「魔王軍の皆さんに、私から求めるのは唯一つ。私達乙木商事の人間と、魔王軍。お互いの利益のために、協力関係になりませんか？」

その要求が思わぬものであったからなのか、ヴラドガリアさんは少しだけ間をおいてから返事をします。

「協力、とはどういうことじゃ？ ほ、本当に言葉どおりの意味かえ？」

「もちろんですよ。裏の意味など何も無く、本当にお互いの利益になるよう協力したいと思っています」

「じゃが、汝らはその、この国の人間であろうっ？」

ヴラドガリアさんの言いたいことは、つまり魔王軍と戦争をしている国の人間が、そんなことを言っただけなのか、という意味でしょ

う。

「それも含めて、何の問題もありません。自分たちの利益のためなら、わざわざどちらか片方だけに味方する、と決めつける理由はありませんから」

あくまで利益の為、という打算的な言葉を提示することで、逆にこちらの主張に真実味をもたせていきます。

狙い通り、ヴラドガリアさんもこちらの言葉がある程度信用してくれているようです。

「そうか。ならば、分かった。まずは話を聞こうではないか」

「魔王様っ!」

「よい、サティーラ。そもそも妾らは選択権を持たぬのだ。自惚れの代価と思つて、ここは大人しくせよ」

サティーラさんが口を挟もうとしましたが、それもヴラドガリアさんが制します。

「では、交渉に入りましょうか。とは言つても、この場所では何かと不都合です。ゆっくりと話が出る部屋へのご案内しましょう」

私はそう言つて、部屋の一角にある壁に向かい、そこに手を翳します。

すると、壁に隠蔽して埋め込まれている魔導機器が反応し、私の魔力を識別。それによりロックが解除され、壁が左右に開きます。

隠し扉の向こうには、広々としたエレベーターが現れました。

「それでは皆さん、付いてきて下さい」

私がエレベーターに先んじて入ることで、他の皆さんも不安げにしながらも入ってきてくれました。

34 魔王軍の事情

エレベーターに全員が入ると、すぐに目的の階層へと向かって動き出します。

向かうは乙木ビル最上階。私個人のオフィスルームがある階層です。

この階には私のオフィスだけでなく、生活空間も最低限用意されており、忙しい時期は快適に寝泊まりが可能となっています。

また、会議室も複数用意されており、今回はそのうちの一つを利用して、魔王軍の皆さんと話をする予定です。

なお、自宅については乙木ビル本社敷地内に別建てであるので、普段はそちらとこの最上階を行き来する生活をしています。

最上階に到着すると、まずは私が先に出て、案内を努めます。

「さて、到着しました。ここが乙木ビル最上階になります。こちらに会議室がありますので、付いてきて下さい」

私の案内に従い、そろそろと魔王軍の皆さんが付いてきます。また、有咲も私の隣に立って一緒に会議室へと向かいます。

「雄一。アタシも行った方がいい？」

「そうだな。有咲が居てくれたほうが、間違いが少なくて済む」

カルキュレイターを自然と常時発動している有咲がいれば、私人で判断ミスを起こすようなことも無くなります。なので、居てくれた方が助かります。

「じゃあ、アタシも交渉に参加するね」

「ああ。頼む」

そうこうしている内に、会議室前へと到着しました。

「では、こちらに」

私が扉を開き、魔王軍の皆さんに入るように促します。

会議室へと入った皆さんは、口々に驚きの声を漏らします。何しろ、最上階の会議室ですからね。一面はガラス張りとなっており、中々の景色が広がっています。

想像以上に高い場所まで来ていたことに気づいたのもあるのでしょう。魔王軍の皆さんは一気に騒がしくなりました。

が、やがて全員が入室し、私も会議室に入って奥の席についたことで、騒ぎは収まります。

「皆さん、お好きな席にどうぞ」

私が促すことで、ようやく全員が席につきました。

「では、交渉を始める前に大事なことが一つあります。それを、魔王軍の皆さんの方から教えていただきたい」

私が言うと、全体が気を引き締めたような表情を浮かべます。

「何しろ、我々は皆さんのことを、魔王軍の事情を何一つ知らない。この国にいる限り、入ってくるのは偏った情報ばかりです。これでは、皆さんと対等な協力関係を築くことも出来ません。なので、まずは皆さんから魔王軍の事情、そちらの国の情勢、体制など、前提となる基礎知識を共有しておきたいのです」

私が言うと、ヴラドガリアさんが頷きます。

「そういうことであれば、妾らの中ではサティーラが適任であろうな」

「では、サティーラさん。ご説明して頂けませんでしょうか？」

「わかりました」

一瞬だけ嫌そうな表情を浮かべながらも、サティーラさんは了承してくれます。

「とは言いまでも、私も何から話せば良いのか分かりませんので。まずは、この国ルーンガルド王国と我ら魔王軍、及び魔王領全体との戦争の発端について話していきましよう」

こうして、魔王軍との初めての交渉が開始しました。

35 支店拡大

サティーラさんから様々な話を聞き、様々なことが分かりました。

まず、現代のルーンガルド王国との戦争は、ある意味では魔王軍の方から仕掛けたとも言えるということ。

それには、魔王領の特別な政治体制が影響してきます。

まず、我々ルーンガルド王国の人間が魔国という国として認識している場所は、実は一つの国ではありません。

実際には七つの州と三つの自治区から成り立っており、これらがそれぞれ我々の認識における国のような体制をしています。

ちなみに、各州と自治区の名前、及び特徴は以下の通りになっています。

鬼州：鬼族が主に集まる州。

竜州：竜族、竜人族が主に集まる州。

鋼州：ゴーレム等の無機物系が集まる州。不毛な山岳地帯で他の生物には住みづらい。

亜州：亜人族が主たる州。獣人やエルフ、ドワーフがこれに該当。七つの州の中でも最も多くの種族が生活する州。

人州：人類が主たる州。現地人の他、人間との争いの中で捕虜になった者や、その子孫達が暮らしている。様々な理由で土地を追われた民族なども居る。

真州：魔族が治める州。至高の種は魔族であるとして、魔族こそが王となるべきと考える偏った思想を持つ。魔族を崇める他種族もまあまあ居る。邪悪な思想故に邪悪な種族が多い。

天州：天使族など、有翼種が治める州。

大森林自治区：ルーンガルド王国とも接している広大な森林地帯。知能が低く、文明レベルが著しく低い魔物が群雄割拠する地域。

腐海自治区：不毛の大地に存在する自治区。この地域の魔物はこの環境でしか生きられず、外にも行けないし、外の生物も逆に入ってこない。

伝統派自治区：エルフとドワーフ、それぞれの伝統的な生活を守るための自治区。エルフは森で自給自足をし、ドワーフは鉱山に穴を掘って暮らす。

そして魔王とは、これらの州と自治区が互いに争わぬよう、協力しあえるように監視、管理する役目を持った存在なのです。

七つの州から一人ずつ代表が選ばれ、そのうちの一人が魔王になり、残り六人が『魔王軍四天王』、『宰相』、『側近』という役職に付きます。

更にこの七人の下に各州から兵士が集められ、これらが魔王軍というものになります。そして魔王軍は、魔王が役目を全うする為の軍事力を担っています。

管理する側に魔王軍という戦力があることによって、七つの州は勝手なことをすることが出来ず、ある程度の協調をする必要が出てきます。

各州から代表者が出ていることで公平性を保ち、かつ内政には干渉せず、あくまでも州同士あるいは魔王領の外部からの問題に関し

てのみ権力を持つ。それが魔王軍、そして魔王という存在だそうです。

こうした理由から、魔王軍はルーンガルド王国との戦争に駆り出されているわけですね。

そして、ある意味では魔王軍の方から仕掛けた、という点についてですが、これは正確な表現ではありません。

実際は魔王領にある七つの州と三つの自治区のうちの一つ、『大森林自治区』が戦争の火種となったのです。

この自治区というものが厄介で、それぞれが何かしらの理由で魔王軍というある種の同盟に参加していません。

腐海自治区は生存可能な環境が限られる為に魔王軍へと参加出来ません。伝統派自治区は、伝統的な生活を維持すると魔王軍のルーンを守れない為、参加していません。

そして大森林自治区は、住まう魔物の文明レベルが低すぎる為、法を守らせることすら困難な為に魔王軍には参加させられません。

そしてこの大森林自治区が問題で、知能が低いあまり、勝手にルーンガルド王国へと攻め込んでしまうことがあるのです。

当然ルーンガルド王国も黙ってはいない為、攻め返されます。放置していれば大森林自治区の魔物たちはあっさり攻め滅ぼされるでしょう。そうなると潜在的敵国がすぐ隣となってしまう為、多くの州が困ってしまいます。だから防衛の為に魔王軍が駆り出されま

す。

そうした経緯から、魔王軍とルーンガルド王国の争いは古来より絶えず繰り返されてきた、というわけです。

ルーンガルド王国が防衛に徹してくれるなら魔王軍も出る幕は無いのですが、残念ながらついでとばかりの侵略行為がある為、放置

も出来ません。

また、大森林自治区との貿易を行っている州や、故郷が大森林自治区にあるという種族も存在する為、そういった面でも無視できません。

といったように、複雑な理由が絡み合い、魔王軍は選択の余地なく戦わなければならない状況にあるそうです。

「なるほど、大体の状況は分かりました。中々に、複雑な立場だったのですね」

「うむ、妾としても、どうにか戦争自体を避けたいとは思っておるのじゃがのう。そうした政治的な判断を下す権力は魔王軍は持たぬ故に州の求めに応じて戦う他無いのじゃ」

「州の方では戦争を避けようという動きは無いのですか？」

私が尋ねると、ヴラドガリアさんは首を横に振ります。

「長い歴史の中で、幾度となく魔王が討たれてきたのじゃ。誰もがやり返してやる、という気概にあふれておるでな。それにどの州も新たな領地を求めておる。例え防衛に成功したところで、次はこちらが侵略をするだけ。結局、妾が死ぬ時まで戦争は続くほか無いのじゃ」

どこか疲れたような表情で、ヴラドガリアさんは諦めたような声で言いました。

つまり魔王という象徴を失う形で、ルーンガルド王国の攻め込む正当性が無くなることでしか、戦争が終結する方法は無い、ということなのでしょう。

人類の側は魔物の長として魔王を認識しており、魔王を倒すこと

で侵略を防げると考えています。そして人類側から見た限りでは、その考えは一見正しいように見えます。

なので人類が魔物の侵攻は魔王の指示であるという判断を下すのも無理の無い話でしょう。そしてこれを防ぐためには、魔王をどうにかして倒そうとする。

そして事実、魔王が倒れば魔王軍という七つの州を守る為の軍が機能不全に陥るため、動きは鈍るでしょう。反撃としての侵略行為をする余裕も失われるはずです。

そうして魔王軍の再編が始まり、またいずれ大森林自治区の民族が勝手な侵略行為を始めるまでは、人類から見た平和が続きます。

おそらくは、そうした流れが繰り返されることによって、魔王を勇者が倒して平和を守る、という話が出来上がっていったのでしよう。

やはり、この戦争はどこかで止める必要がありますね。

どちらも侵略という目的を持ってしまっている上、魔王軍に決定権が無い。そのせいで、ルーンガルド王国が戦争を続ければ続けただけ被害が出続けてしまいます。

「分かりました。事情も把握出来ましたので、本題に入りましょう。我々の要求は、ただ一つです」

私は状況を打破するための一手を口にします。

「魔王領に、我が乙木商事の支店を出させていたいただきたい」

36 乙木商事の戦略

ヴラドガリアさんは私の意図が掴めないのか、首をかしげます。

「ふむ、支店とな？ それにはどのような意味があるのじゃ？」

「まず前提から話しますが、我々の目的はより利益を得ることの他に、従業員の安全を確保するというものがあります。つまり今回の場合は、戦争という危機的状況の打破。これが我々、乙木商事の求めるものです」

私の口から思わぬ言葉が出たのでしよう。ヴラドガリアさんだけではなく、他の魔王軍の皆さんも驚きの表情を浮かべています。

「元々は、今回の勝負の結果を引き合いに出して、魔王軍の皆さんに鉾を収めてもらうつもりでした。が、決定権が無いのであればこの手は使えません。なので、ここは搦め手でいかせてもらいます」

ちなみに、カルキユレイターも利用して導き出した作戦ですので、かなり有効な手段となるはずです。

「まず、ルーンガルド王国から見た我々の動きから説明しましょう。あくまでも名目上の動きですので、部分的に皆さんにとっては不愉快な表現が含まれるかもしれませんが、そこはご容赦いただきたい」「うむ、わかったのじゃ。続きを申せ」

「はい。ではまず、我々は王国に領地と爵位を申請します。と言っ

ても、ルーンガルド王国に空いた土地はありませんので、魔王軍を撃退し、その功績も合わせて新しく得た土地を領地として頂きます」

私の言葉に、魔王軍の皆さんが眉を顰めます。

「それはつまり、妾らと戦う、ということかえ？」

「いいえ。あくまでも表面上の話です。大森林自治区の一部を、ルーンガルド王国から見て自然に我々の土地として扱う為の演技のよ
うなものです」

この策には、ルーンガルド王国から見て、乙木商事が魔王領の一部の土地を正式に所有している、と認識してもらうことが肝心ですからね。

「そして、肝心の魔王軍の皆さんから見た場合の我々の動きですが、まず、我々は大森林自治区に『移住』します」

「ほう」

それでヴラドガリアさんが気づいたような表情を浮かべます。

「確かに、魔王領の中で大森林自治区は唯一法の下に治められてはおらぬ。お主らが勝手に住み着くことを、咎める者はおらぬじゃろうな。その地に住まう魔物を除けば」

「はい。その辺りは、多少力づくにはなるでしょうが。文明レベルの低い相手であれば、力を示して利益を提示することでどうにか出来ると思っています」

知能の低い魔物とは言え、魔王領の他の州との貿易をする程度の文明レベルがあるのですから。力の差と、こちらの下に付くことで得られる利益を理解することぐらいは出来るでしょう。

「そうして得た土地に、まずは乙木商事の『魔王領本店』を建てます。ここを拠点に、大森林自治区の支配域を広めつつ、ルーンガルド王国から見た『領地』の拡大に努めます。そうすれば、自然と魔王軍と接する戦線が我々の領地だけに限られていきます」

これで私の言いたいことが全て伝わったのか、魔王軍の皆さんがようやく納得がいったような表情を浮かべます。

「そうなれば、妾らと関係のあるお主らは戦う必要が無い。被害を抑えられる、というわけじゃな？」

「ええ。まあ、ルーンガルド王国からの干渉を完全に防ぐのは難しいでしょうが、少なく見積もっても魔王軍の被害を大きく軽減可能になるはずです。また、商売を通じて我々が魔王軍の事情に『詳しく』なれば、結果的にルーンガルド王国も魔王領の事情を理解することになる」

「不要な争いを避けることが可能になる、というわけじゃな？」

「はい」

私は頷き、さらに今回の提案のメリットについて話を続けます。

「そして魔王領の人々、具体的には七つの州に住まう方々にもメリットがあります。我々が大森林自治区を統治し、貿易に絡むことで、乙木商事の優れた技術力、資源が流れることにもなります。これまでの大森林自治区から得られた分とは、比べ物にならないほどの利益になるでしょうね」

ヴラドガリアさんも頷き、私の言いたいことを代弁してくれます。

「うむ。魔王軍があるから、どの州も勝手なことは出来ぬ。そして

魔王軍があるにも関わらず、内政に干渉してはならぬ為、大森林自治区を攻めることも出来ぬ。故に大森林自治区は今まで放置されておった。じゃが、外部から新たに移住してくるお主達であれば、そういった柵にとらわれることも無い。問題の多い大森林自治区という地域を、新たにお主らの『州』として再編することが可能になるわけじゃな」

そうならば、今までにあった問題は全て解決されるでしょう。

これが、私の考える策、支店を魔王領に出すという手段の全容になります。

「まあ、とは言っても細部にはまだまだ問題はあるでしょうし、現時点ではそういった方向性であれば問題が解決出来そうだ、という程度で考えていただければ。詳細は追々、話し合いを通じて詰めていければ良いかと」

現段階では、魔王軍を追い払ったというポーズを取ることで、ルーンガルド王国と魔王領どちらから見ても自然な形で大森林自治区の土地を獲得すること。そして得た土地を起点にして、領地を広げつつ人類側と魔物側の認識、前提の違い、間違いを解消していくこと。

これらが支店を展開することによって可能となることこそが、大事なポイントです。

「うむ、わかったのじゃ。しかし、現段階ではすぐさま頷くことは出来ぬ。今はこの話を持ち帰り、後日詳細を固める、という形では駄目じゃろうか？」

「ええ、かまいませんよ」

「そうか。では、また後日、こうした話が得意な魔王軍の人材を連れてくるのじゃ」

こうして、ひとまず魔王軍との交渉は一段落を迎えました。
これでどうにか、戦争の終結も現実的なものになってきましたね。

36 乙木商事の戦略（後書き）

一挙連続投稿、最終日終了です。

明日からは、この章が終わるまで毎日一回の投稿を続けさせていただきます。

もし宜しければ、ブックマークと評価ポイントの方を頂けると助かります。

また、ページ下部には今回の一挙連続投稿作品へのリンクも用意しておりますので、是非そちらからお楽しみください。

37 お呼び出し

で、どうにか魔王軍との交渉については終了し、皆さん魔王領へとお帰りになった後。

私は深刻な表情を浮かべた、妻たちに呼び出されてしまいました。

「あの、皆さん。何かあったのですか？」

「雄一さん。これから話すことを、冷静に聞いてくださいね？」

シャーリーさんが真剣な表情で話し始めます。

「今回の、対魔王軍オペレーションの為に、本社周辺と本社内の全域を高精度な魔素感知レーダーで監視していたことはもちろん知っていますよね」

「ええ。必要だから、私が指示したことです」

「その結果、正体不明の存在が雄一さんの周囲につきまとっていることが判明したんです」

まるで恐るべき敵を発見したかのように、シャーリーさんは語ります。

「高精度な魔素感知レーダーを使ったから発見できたんですけれど、通常のレーダーでは到底発見不可能でした。しかも、この対象、仮に敵性オブジェクトとしますが、なんと雄一さんはもちろん、周囲の誰にも見つかからないよう常に徹底した完璧な立ち回りで尾行を

続けているんです。この技術から考えると、相手は相当な技術力を持った隠密なのではないかと予測できます。つまり、雄一さんは何者かによって監視されています」

「そ、そうですか」

監視、という言葉に心当たりがありすぎる為、つい返事が生返事になってしまいます。

「雄一様。もつと危機感を持って下さいな」

呆れたようにマリアさんが言います。

「ダーリン、俺、怖いよ。ダーリンが誰かに狙われてるなんて」

ジオアンさんは不安げに言います。

また、有咲も私の様子を伺いながらも、心配をしているのは間違いない様子。マルクリーヌさんは、いつでも私を守るように、といった風に身構えています。

どうやら、これは事情を説明しなければならぬようですね。

まさかこれまで何故かリーダーにすら映らなかった謎の技術でストーカーを続けてきた『彼女』が、ここで見つかるとは思っても見ませんでした。

「分かりました。全てを説明します」

そして、私は一度息を大きく吸い、声を張り上げて『彼女』を呼びます。

「七竈さん！ 出てきて下さい」

「はいっ！」

私が名前を呼んだ瞬間、どこからともなく『彼女』、七竈八色さんが姿を表しました。

当然、あまりにも突然のことなので、妻たちは全員が驚いています。

「ええと、彼女がおそらく、例の に該当する人物であり、日本にいた頃から私をストーキングしていた七竈八色さんです」

「は、はじめましてっ！」

ペこり、とお辞儀をする七竈さん。そんな七竈さんを、妻たちは微笑ましいものでも見るような目で見た後、すぐに鋭い視線で私を貫いて来ました。

「で？ どういうワケ？ 説明してくれるんだよな、雄一？」

「あ、ああ。もちろん」

有咲にドスの利いた声で言われ、私は七竈さんとの出会いから、現在までの関係について説明をします。

しばらくは全員で私の話を普通に聞いてくれていたのですが、話が進むごとに呆れたような表情で私が見られるようになっていきます。

そして全てを話し終えたら、七竈さんに同情するような視線すら感じるようになりました。

「つまり、だ」

有咲が私から聞いた話を纏めようとします。

「雄一は自分に好意を持つてる女の子をあの手この手で騙して、都合のいいように利用しながら追い払って、それを今の今まで放置してた、と。そーいうことだよな？」

「ええと、まあ、うん。そーいう解釈もできるかもしれない」

「サイテー」

「ぐっ」

有咲の一言が、私の胸に突き刺さります。このダメージ、ヴラドガリアさんとの戦い以上のものです。

38 責任、再び

「雄一様。私もさすがに擁護できません。難儀な相手だったとはいえ、ちゃんと真摯に話し合うべきだったのでは？」

「おっしゃるとおりです」

マリアさんに言われ、何の反論も出来ずに頂垂れます。

「ねえ、八色ねえちゃんはダーリンとずっと昔から知り合いだったんだろ？」

「え、はい、そうです」

「それってどれぐらい前から？」

「えっとそれは、私たちのクラスが勇者として召喚される前からです。召喚された後も、できるだけ早く自由な時間を作って愛しの人へ会いに行きました」

「そっか。じゃあ、俺たちよりも八色ねえちゃんの方が、ダーリンとの付き合いは長いんだな」

子。
ジョアンさんは、どうやら七竈さんと打ち解けようとしている様子。

「はあ。まったく、心配して損しました。こういう人が居るのなら先に言っておいて欲しかったです」

「すみませんでした」

シャーリーさんも、少し怒っている様子。本気で怒っているわけではないように見えるのが、せめてもの救いです。

「しかし、こうなれば雄一殿の安全とはまた別の問題が出てきたぞ」
「ん。マルクリーヌさんもそう思う？」

有咲とマルクリーヌさんが、意見を交わし合います。

「ああ。結局雄一殿は、八色殿をどのように扱うつもりなのだ？
それが定まらないことには、私達の立場も定まらない」

「そうだよな。排除するべきなのか、それとも受け入れてあげるべきなのか。それを決めるのはアタシらじゃなくて雄一だから」

言って、有咲は私の方を睨みます。

「で。そこんとこどうすんの？」

「どうする、とは」

「あー、もうっ！ 責任取るつもりあるのかって言うてんの！」

有咲は言って、七竈さんを抱きしめます。

「だって、可哀想でしょ！ 今まで都合のいいように使われて、放置されてさ。そんなのアタシだったら泣くだけじゃ収まんないしっ
！」

「あの、いえ、別に私は、どのように使い捨てられても、愛しの人
の判断であれば幸せですから」

「ほらっ！ こんなこと言っちゃつぐらい尽くしてくれてんだよ！
責任感じゃないの？」

「そ、それは」

言われるほどに、罪悪感が湧き上がってきます。

「時に八色殿。近年は雄一殿の為に、どのような活動をしていたのだ？」

「ええと、基本は愛しの人を眺める毎日でしたけど。時々、愛しの人を狙う何者かが現れたりしていたので、そういうのの対処をしました」

「やはりな。となると、相応の危険もあったのでは？」

「いえ、その、何度か毒で身動きが取れなくなったことがあつたぐらいで、死ぬようなことは」

「いや、それは十分死に直結する危険なのだが」

マルクリーヌさんが、七竈さんがどのような献身を続けてきたのか、具体的に聞き出します。その結果、私にはさらに強く罪悪感が湧き上がってきます。

確かに言われてみれば、私の持つ権力の割に、そうした暗部から狙われることが極めて少ないとは思っていましたが。

まさか、七竈さんが対処してくれていたからだとは思ってもみませんでした。

「ほらね。八色ちゃんは雄一にこんだけ尽くしてくれてるんだよ。

なのに雄一は、ストーカーされてたっただけで責任取らないつもり？」

「いや、あの。ストーカーされていたというのはけっこう大きな要因だと思っただが」

「八色ちゃんが尽くしてくれた分と相殺出来るほど？」

「うっ」

命がけで私を守ってくれていたことを鑑みれば、ストーカー被害

など些細、とは言えませんが大きな問題ではないでしょう。

「さあ。どうするのだ、雄一殿？」

「ねえダーリン。八色ねえちゃん、可哀想だよ」

「そうですね。雄一様、ここは男を見せて下さい」

「雄一さんがスケベなのは、今に始まった話じゃないですしね」

「うん。だからこそ、アタシたちはこうして仲良く手を取り合っていていられるんだし。今さら嫁が増えることに、アタシらが文句を言うたりはしないよ」

五人の妻たちが、それぞれ私に向かって詰め寄ってきます。

「で、雄一。結局どうするの？」

「ずっと、と有咲が私の眼前まで詰め寄ってきます。

これは、観念すべきでしょう。

「責任を、取らせていただきます」

こうして魔王軍との戦いをきっかけに、なぜか六人目の妻を迎えることとなるのです。

39 宰相イチロースズキ

七竈さん、いえ、今は乙木八色なので八色さんと呼ぶべきなのですが、彼女との結婚が魔王軍との交渉と同時に決まり、何かと忙しい数日を過ごすこととなりました。

そうして慌ただしい日々を過ごしている内に、ヴラドガリアさんが約束の人物を連れて乙木商事へと訪れました。

「約束の人物を連れてきたのじゃ！」

「初めまして。私は魔王軍にて『宰相』を務めさせていただいている、イチロースズキという者です」

そう言ってお辞儀をしたのは、なんと黒髪黒目の、まるで日本人のような見た目の中年男性でした。

「ずばり、日本でよく見かけられるようなごく普通のおじさんです。」

「ええと、イチローさんと呼びすれば良いのでしょうか？」

「いえ、名前がイチロースズキですので。イチロースズキ、あるいはイツチと呼んでいただければ」

そして、まさかの名前がイチロースズキ。名字などではなく、イチロースズキ全てが名前なのだとか。

何でも、昔の勇者が黒髪黒目の人間を見て『イチロースズキ』と呼んだという伝説から、魔王領では黒髪黒目の人間が生まれた時はイチロースズキと名付けることが多々あるそうなの。

とまあ、名前の話題はともかく。まずは今回の交渉、大森林自治区への移住及び魔王領本店の建設の話から始めましょう。

イチロースズキさんとヴラドガリアさんを連れ、私個人のオフィスルームへと案内します。

「事前に魔王様から概要については伺っておりますが、まずは認識のズレ等が無いか確認したいので、ひとまず今回のお話について最初からご説明頂けますか？」

「はい、分かりました。まず、話の発端についてですが」

と言ったように、私とイチロースズキさんの二人で話を詰めていきます。

時折、イチロースズキさんから魔王軍や各州の事情を考慮しての指摘が入り、その都度細かい部分を修正していきます。

そうして小一時間ほど話を続けて、話はかなり纏まってきました。

「では、我々魔王軍とは密な連携を取りつつ、問題が発生した場合は都度修正しながら進めていきましょう」

「ええ。今回の話し合いで、かなり具体的に計画を立てることが出来ましたからね。お陰で、魔王軍の皆さんとの連携もスムーズになりそうです」

私はイチロースズキさんと握手を交わし、今回の話し合いが成功に終わったことをはっきりと示しました。

その様子を見ていたヴラドガリアさんが、ようやくか、といった様子で口を開きます。

「話は纏まったかえ？」

「はい、魔王様。我々魔王軍にとっても、理想的な形で纏まりました」

「そうかそうか。では、次は妾が話をする番じゃのう！」

そう言つて、今まで話に全く関わつてこなかったヴラドガリアさんが身を乗り出します。

「乙木殿よ！ 妾は今回、汝に一つ要望を持ってきたのじゃ！」

「要望、ですか？」

「そうじゃ！ 今回の作戦をより円滑に進める上で極めて有用な話じゃ！」

そう言われると、気になってしまいますね。

「具体的には、どのような？」

「うむ。話は簡単。乙木殿よ、汝、妾を娶れ！」

「はい？」

「じゃから、結婚するのじゃ！ そうすれば万事うまく運ぶじゃろうて！」

予想しなかつた角度からの求婚を受け、私は一瞬固まってしまいます。

ですが、たしかに政略としては魔王という肩書を持つヴラドガリアさんと私が夫婦という縁で繋がることには、強い効果があると思われまます。

「これは、イチロースズキも納得しておることなのじゃぞ？」

「はい。私も、魔王様と乙木さんが婚姻を結ぶことで、より確実に魔王軍の動きをコントロール出来るものと考えています」

私が黙っているうちに、二人して次々と畳み掛けてきます。

「それにのう、乙木殿よ。妾にとって、己よりも強きオスに出会うというのは初めての経験なのじゃ。今は、汝の力の庇護下に収まり、そこらの弱いメスと同様、守られる立場に甘んじるのも悪くないと思つておる」

「で、ですが。さすがにいきなり過ぎて。妻たちにも話を通さない」と

「分かつておるわい。もちろん今回は提案だけじゃ。また後日、正式に婚姻を結ぶよう求めに来るつもりじゃ。答えはその時で良い」

「は、はあ。ありがとございます?」

とりあえず、この場ですぐ返事をする必要は無さそうで助かりました。

「では、以上が妾からの要望じゃ。よく考えてくれよ、乙木殿よ」

「は、はい。それはもちろん」

「それではまた後日、魔王様と共に参りますので。今日はこの辺りで失礼いたします」

こうして、魔王軍の宰相イチロースズキさんを伴う、具体的な今後の交渉は終了しました。

まさかのヴラドガリアさんからの求婚という予想外の展開はあったものの、内容自体は悪くありませんでした。

なお、今回の件を嘘偽り無く妻たちに報告したところ、有咲からはロリコンサイターと罵られたものの、誰もヴラドガリアさんとの婚姻には反対しませんでした。

妻たちの懐が広くて助かります。

そうして次のヴラドガリアさんの来訪を待ち続けて、なんと一ヶ月が経過してしまいました。

予想では、数日もすれば返事を聞きに来るだろうと思っていたのですが、結局ヴラドガリアさんが来ることはありませんでした。

そうして、ようやく訪れた魔王軍の使者から私達が聞かされたのは。

なんと、魔王軍が二つに分裂。

反乱軍が結成されてしまい、ヴラドガリアさんはこれを鎮圧するために忙しく、こちらに来れないとのこと。

可能性なら予想はしていたものの、中々に厄介な事態になってしまっています。

こうして私はしばらく、厄介な問題に頭を悩ませることになるのです。

39 宰相イチロースズキ（後書き）

今回で第八章は終了となります。

次回、第九章から、より深く本格的に魔族側の陣営と関わってゆくこととなります。書き溜めが出来ましたらまた毎日投稿を開始しますので、是非お楽しみにお待ち下さい。

もし宜しければ、ブックマークと評価ポイントの方を頂けると助かります。

また、ページ下部には今回の一挙連続投稿作品へのリンクも用意しておりますので、是非そちらからお楽しみください。

01 反乱軍の戦況

「お久しぶりです、乙木さん。今回は、魔王軍の現状についてご説明に上がりました」

そう言って、頭を下げるのは魔王軍宰相のイチロースズキさんです。

先日、魔王軍の内部で反乱軍が結成され、二分割されている状態であると報告を受けてから、すぐに駆けつけてくれました。

「ありがとうございます、イチロースズキさん。こちらとしても、魔王軍の現状が掴めずにいたので助かります」

「それは良かったです。それに、こちらとしても乙木さんにはご助力願いたいと思っております。そういう意味でも、一刻も早く詳細についてご報告に上がりたいと思っております」

なるほど。それはつまり、それだけ魔王軍の現状がよろしくない、ということでもあるのでしょうか。

私はイチロースズキさんを応接室に通し、詳細な報告を受けます。

「まず、反乱軍の詳細についてです。魔王軍には四天王の下部組織のようなものとして、七武将というものが存在するのですが、今回はその七武将が一人、賢将メティドバン殿が反乱軍を蜂起したので
す」

メテイドバン、という名前に、私は首を傾げます。
はて、どこかで聞いたような。はつきりとは思いませんが。

「そのメテイドバン、という方はどのような人物なのですか？」

「ジーニアスゴブリンを名乗る、普通のゴブリンです。が、彼は極めて優れた錬金術と死霊魔術の知識を持っており、賢将と呼ぶに相応しい知能をお持ちです。その知識を活かして、本人は魔王城にいなながら、ホムンクルスを使って最前線で様々な活動をしておられました」

「そうなのですか。具体的には、どのような活動を？」

「彼が行った最も大きな作戦は、ルーンガルド王国内でウルガスを繁殖させ、品種改良した上位種を生み出し、王都を強襲する作戦ですね。まあ、どうやら襲撃直前で謎の冒険者に全滅させられてしまったらしいですが」

それを聞いて思い出します。そういえば、かつて私がやけくそになってウルガスを狩りに行った時、何かごちゃごちゃと言っていたゴブリンがいました。

なるほど、あの時のゴブリンがメテイドバンさんなのですね。思わぬところで縁がつながっているものです。

「そのメテイドバンさんは、どうして反乱軍を？」

「はい。実は彼は、過去にあつた出来事から人類を極めて深く恨んでおりました。魔王軍の人類にさえ攻撃的な態度に出るほどの人間嫌いなのです。だから人間と手を組む、と魔王様が宣言した結果、怒り狂い、反乱軍を結成するに至った、というわけです」

「なるほど。つまり人類に対する過激派筆頭のような人物なのですね」

「ええ、まさしく」

私の言葉を肯定するように、イチロースズキさんは頷きます。

「魔王軍にも対人類の過激派、と呼べる派閥は以前からありました。そのほぼ全てがメティドバン殿に賛成しており、現状では魔王軍の五分の一程度が反乱軍に加わっております」

「それは、相当な数ですね」

一つの組織の二割相当が敵対している、となれば魔王軍が機能しなくなるのも同然です。

となれば、私達との同盟関係についても話を進められなくなって当然でしょう。

「数も厄介ですが、相手が完全な敵ではなく身内である、というのも厄介な部分です。彼らも魔王軍の一員ですから、暴力で一方的に鎮圧、殺して終わりというわけにもいきません。現状、魔王様も可能な限り死者を出さずに鎮圧しようと動いていますが、メティドバン殿もそれを理解していますので、中々嫌らしい動きを取って苦戦しているというわけです」

それだけの厄介な条件が揃っているなら、たしかに戦力差が四倍であっても鎮圧は難しいのでしょうか。

「なるほど。それで、イチロースズキさん。魔王軍としては、我々にどのような要求を？」

私が本題を振ると、頷いてからイチロースズキさんが語ります。

「はい。はっきり言ってしまうえば、鎮圧を手伝って欲しいのです。犠牲を最小限に彼らを鎮圧するには、戦力が十倍は必要になります。

それに、最悪彼らを『殺してしまっても問題ない』勢力が手札に加わるだけで、メティドバン殿も動きづらくなるはずです」

つまり、我々乙木商事の戦力であれば、メティドバンさん率いる反乱軍を殺して鎮圧することに問題が無い。たとえ、こちらにその気が無くとも、そういった選択を取ることが可能である、という点が大きく響きます。

殺されないからこそ、大胆な戦略をいくらでも取りうるのです。うから。安心を一つ取っ払うだけで、反乱軍の動きをかなり制限出来るようになるはずです。

「どうでしょう、乙木さん。ご協力頂けませんか？」

イチロースズキさんは不安げに聞いてきます。これに、私はすぐに頷いて応えます。

「もちろん、乙木商事としても是非協力させて下さい。せつかく魔王軍との同盟関係が成立しそうですね。反乱軍によって反故にされてしまったのはたまりませんからね」

「おお！ ありがとうございます！」

「いえいえ。さっそく、今日にでも幹部を集め、計画を立てさせてもらいます」

そう言って、私はイチロースズキさんと握手を交わし、協力を約束しました。

01 反乱軍の戦況（後書き）

お久しぶりです。本日から九章の投降を開始致します。

九章完結まで毎日投降していきますので、宜しくお願いいたします。

そしてもう一つ、宣伝があります。

実は先日、当作品『クラス転移に巻き込まれたコンビニ店員のおっさん、勇者には必要なかった余り物スキルを駆使して最強となるようです。』のコミカライズ作品が連載開始いたしました！
掲載サイトは『マンガよもんが』様となっております。

コミカライズ担当は『結城焰』先生です。

とても面白い仕上がりとなっておりますので、ぜひお読みくださいませ。

02 対反乱軍会議

協力を約束してすぐに、私は乙木商事の幹部たる面子を呼び出しました。

正確には幹部ではなく、外部協力者や、単に私と縁深いだけの人物も含まれてはいますが。しかし、全員が乙木商事の運営に深く影響する人物であることは間違いありません。

「お集まり頂き、ありがとうございます。今回は、魔王軍内部で起こったトラブル。反乱軍に関して新たな情報が判明しましたので、その共有。そして今後の我々の対応についての話し合いをしたいと思います」と

私は、集まった全員を順番に眺めながら語ります。

面子は、まずは私の妻達。全員が現在は役職持ちですので、出席は当然の権利です。

次に、乙木商事で働く召喚勇者の皆さん。彼らも少々特殊な立場であるため、乙木商事で大きな動きがある時は詳細を伝えるようにしています。

そして金浜君、三森さんの二人。本当は東堂君や松里家君にも来てほしかったのですが、忙しかった様子。

同様に、シュリ君も忙しさからこちらには来れませんでした。ですので、金浜君に話の伝達をお願いします。

「まず、乙木商事としては反乱軍の鎮圧に協力したいと思っています。ですが、それで不要な犠牲を出してしまえば元も子もありません。なので、魔王軍に出向してもらおう戦力は上位から順に選ばせていただきます。当然、私も魔王軍の方に出向します」

私が言つと、一人が手を上げて発言します。

「雄一さんが出向するなら、その間の乙木商事の業務はどうするんですか？」

妻の一人、シャーリーさんが当然の疑問を口にします。

「申し訳ないですが、非戦闘員の皆さん中心になって回すしかありませんね。一応、しばらくは私がいなくても問題なく回るようになっていくはずなので」

私が言つと、妻達が互いに顔を見合わせ、そして代表するかのようになつて有咲が口を開きます。

「分かった。アタシらも、ここが踏ん張りどころってことね？ 任せよ」

「ああ。出来るだけ、早く帰ってくるから頼むよ」

「うん。ホントに早めに片付けて帰ってきてね」

「全力を尽くすよ」

ひとまず、これで私が居ない間の乙木商事は問題なく回るはずで、妻達は日頃から様々な業務に携わっているの、頼もしい味方となりますから。

「次に、乙木商事から反乱軍鎮圧の為に外向する戦力についてです。向こうの要請に正直に従うなら、ウチの戦力の十数パーセントを外向させる必要があります」

十数パーセント、という数字に、皆さん驚きの表情を浮かべています。今の乙木商事は、ルーングルド王国全域に展開していますから。その十数パーセントとなると、相当な人数になってしまいます。

なので、その点をフォローするように私は話しを続けます。

「ただ、これでは人数が多すぎますし、実力の足りない末端の警備部門の社員を連れて行っても被害が広がるだけです。なので、末端の社員の数を減らし、代わりに幹部待遇の社員を中心に最高戦力の半数以上連れていきます。数字で言えば、ウチの戦力の十パーセント未満に人数を抑えるつもりです」

そこまで言うのと、次に私は金浜君と三森さんの方に視線を向け、続きを話します。

「そして、可能であれば金浜君のパーティーメンバー四名、そしてシユリ君にも協力をお願いしたいです。五人の力があれば、反乱軍の鎮圧も順調に進むはずですよ」

私はこの場で直接、金浜君に打診します。

すると、金浜君は私の想定外の答えを口にしました。

「申し訳ありません、乙木さん。今回ばかりは、協力出来そうにありません」

「ほう。それはどのような事情が？」

金浜君の表情から、何か問題が発生していることを察し、訪ねます。

すると、金浜君は重要な情報を口にします。

「実は、間が悪いことに、ついに内藤組が動き出したんです」

その言葉で、私も含め、この場集った多くの人間に緊張が走ります。

特に、召喚勇者の皆さんは厳しい表情を浮かべていました。

03 内藤組、蜂起

内藤組とは、召喚勇者の皆さんのクラスメイトの一人であり、スキル『洗脳調教』を所有する内藤隆君をリーダーとするグループのことです。

以前から不穏な動きをしていたようなのですが、それがとうとう、よりもよってこのタイミングで動き出したとのこと。

「なるほど。具体的には、どのような？」

「はい。内藤は、俺たちの監視をくぐり抜けてルーンガルド王国から出て、周辺諸国に向かったみたいです。そして、奴は例に漏れず、スキルを使って周辺諸国の政府に食い込み、不穏な動きを続けます。国境に騎士団を派遣する、等といった威嚇行為が現状だと精一杯のようですが、いずれ本当に武力蜂起する可能性が高いと見て、ルーンガルド王国も警戒態勢に入っているんです」

「どうやら、私が想像していた以上に大きな事態になっている様子ですね。」

「となると、シュリ君が今日来ていないのも？」

「はい。それに、俺たちもこの会議が終われば、すぐにでも国境の防衛に向かつて欲しい、と言われていきます。俺としても、内藤に洗脳されて、連れ去られたクラスメイトをどうにかして開放したいです。だから、申し訳ないんですが」

再び謝罪をしようとする金浜君を、私は手で制止します。

「気にしないで下さい。むしろ、私達と金浜君が協力関係にあるのは、本来は内藤組に対抗する戦力の確保の為だったはずですからね。直接協力出来なくて、こちらが申し訳ないぐらいです」

「いえ。魔王軍の方も、重要な問題だと思えますので」

ともかく、金浜君のパーティーメンバー、そしてシユリ君。さらにマルクリーヌさんのコネから騎士団の力を借りる、というのは難しいようです。

「物資の支援などはやらせて頂きますので、何か困ったことがあれば、乙木商事の方に連絡を下さい。可能な限り対応します」

「はい、ありがとうございます」

こうして、金浜君が今回の反乱軍鎮圧には参加出来ないことが正式に決まりました。

となると、予定した戦力が僅かに足りないことになりましたが。

「では、少し戦力に関しては想定よりも少なくなってしまうかもしれませんが、これ以上をどこかから借りることも出来ませんし、まずは現状の戦力だけで反乱軍の鎮圧に当たりますよ」

私はそう宣言すると、次は具体的な話に入ります。

「さて。次は具体的な鎮圧部隊の内訳になりますが」

私はまず、鎮圧部隊に参加する幹部待遇の面子について告げていきます。

私は確定として、妻達からは八色さんとジョアンさんの二人を連れていきます。マルクリーヌさんには乙木商事に残ってもらい、こちらに残る妻達と共に運営に加わってもらいます。

妻達の安全を確保する意味でも、一人は戦える人間がいた方が間違いない良いですからね。

有咲もステータスはかなり高いですが、戦いの経験はほぼありません。実際に戦闘が起これば、守られる側となるでしょう。

その他、連れて行く戦力としてはティアナさんとティオ君の二人。召喚勇者の皆さんは、むしろ内藤組の対策に回りたい、とのことでしたので、今回の反乱軍鎮圧には連れていきません。

となると、実際に連れて行く戦力は想定よりもかなり少なくなっています。

これは、最高戦力である私の踏ん張りどころのようですね。

「では、以上の皆さんは今日から反乱軍鎮圧部隊のメンバーです。明日にも出発しますので、そのつもりで準備を進めて下さい」

私が言うと、それぞれのメンバーが口々に声を上げます。

「ダーリン、安心してよ！ 俺がその分、いっぱい頑張るからさ！」

「ジョアンさん。頼もしいですが、今回は討伐ではなく鎮圧が目的ですからね？」

「あ、そっか。うん、でも大丈夫！」

根拠の無い自信ですが、こういう明るさもジョアンさんの魅力の一つですね。気張りすぎていた心が、幾らか緩んで楽になります。

「旦那様っ！ 私も、旦那様の望みのままに頑張ります！」

ジョアン君に対抗するかのように、声を上げたのは八色さん。つい先日、書類を提出して妻になつたばかりなのですが、それで出遅れたような形になっていることを気にしているのでしょうか。

「八色さん。頑張るのもいいですが、一番大事なのは自分自身なんですからね。怪我せず、無事に帰ってくることを約束してくださいね」

「ふあつ、はつ、はいっ！ わかりまひたっ！ 旦那様のおっしやるとおりに！」

八色さんは私に優しくされることに慣れていないらしく、こういつた思いやりの言葉をかけると半ばパニックを起こします。

そつした仕草が普通の女の子らしく、彼女がとんでもない筋金入りのストーカーであつたことが最近は気にならなくなりつつあります。

「雄一様。ティアナとティオをよろしくおねがいますね」

「ええ、もちろんです。必ず無事に帰ることをお約束しますよ」

ティアナさんとティオ君はこの場に居ない為、代わりに母親であり私の妻でもあるマリアさんが頭を下げます。

すでに二人は私の子でもあるのですから、守ることは当然のことです。迷いなく、マリアさんには断言をして返します。

こうして会議は終わり、私達は反乱軍の鎮圧の為に動き始めます。

04 大森林自治区へ

会議の翌日。業務の引き継ぎを済ませ、魔王軍と合流する準備を進め、出発の時間となりました。

とはいえ、防衛部門の社員を編成し、連れて行くにはもう少し時間がかかります。こちらに関しては、部門の代表としてジョアンさんが残り、後から合流することで話が付きました。

そして残る四人、私と八色さん、テイオ君にティアナさんの四人が、イチロースズキさんの案内で大森林自治区を抜け、魔王城へと先行し合流するという話になりました。

「では、準備はよろしいでしょうか」

イチロースズキさんの問いに、我々は頷きます。

「はい。ところで、魔王城まではどのような手段で？」

「今回は、皆さんステータスの高い方ばかりであるとお聞きしておりますので。ダッシュで向かうのが適切かと思えます」

「こちらは構いませんが、イチロースズキさんも大丈夫なのですか？」

「ええ。これでも私、一応はSランク冒険者相当のステータスがありますので」

となれば、馬や半端な乗り物を使うよりは、走った方が早いのでし

よう。

しかし、我が乙木商事には便利な乗り物があります。

「それでしたら、こちらで便利な乗り物を用意できます」

「ほう、それは？」

「自動車、というものです」

私が言うと同時に、社員が準備した自動車がこの場に運び込まれます。

荒い道でも難なく走破可能な、乙木商事の運輸部門でも使用している特注品の自動車です。運転席、助手席、後部座席があり、輸送用のコンテナを乗せたトレーラーを牽引可能なように作られた、高馬力の一品。

Sランク冒険者程度であれば、走ると同程度以上の速度で移動できます。そして我々の疲労も少なくて済むので一石二鳥。

「大森林自治区付近までは、これを利用しましょう。そこから先は、道次第になりますが。まあ、到着してから考えましょう」

「助かります。ありがとうございます、乙木さん」

イチロースズキさんも、さすがに連日走り抜けるのは疲労度の面で問題があると感じていたのでしょう。頭を下げて感謝をします。

「では、それぞれ座席について下さい。運転席は、私が座りますので」

そう言って、総勢五名で自動車へと乗り込みます。

すると、なぜか後部座席にイチロースズキさん一人。助手席、そして運転席との間の隙間にぎゅうぎゅうになってまで八色さん、テ

イオ君、ティアナさんが入り込みます。

「皆さん」

「なあに、パパ？」

「わたし、パパの隣がいい」

「あの、旦那様。私もお隣が」

願望丸出しでした。

このままでは到着までの間、めちゃくちゃに疲れてしまいます。

「イチロースズキさんと入れ替わりなさい。三人が後部座席で、助手席にイチロースズキさんです」

私が強く言つて、ようやく三人も観念しました。そろそろと自動車を降りて、イチロースズキさんと座席を入れ替わります。

これで行うべく、私も落ち着いて運転席に座れますね。

私も席に付き、それぞれが安全の為にシートベルトを装着後。ようやく出発準備が整ったので、エンジンをかけます。

「それでは、出発といきましょう」

その声と共に私はアクセルを踏み、自動車は加速。順調に乙木商事を離れていきます。

概算だと明日の朝には大森林自治区の最寄りの乙木商事関連の商業施設に到着するはずだ。

そこで車を置くか、それとも大森林自治区にそのまま入るかを判断し、進むことになるでしょう。

05 突入準備

翌日の早朝。私達は、大森林自治区に最も近い、乙木商事関連の商業施設に到着しました。

魔王軍との戦いの最前線にも近いことから、ここでは国の軍に向けた商品も販売しています。

つまり保存食や野営に必要な装備等。これから大森林自治区に突入する私達にとっても便利なものが販売されているわけです。

「では、ここで準備を整えてから行きましょう。お金に関しては私が出しますので、気にせず必要なものを買って下さい」

そう告げて、私は他の四人に準備を任せ、自分は大森林自治区の下見に向かいます。

車で一時間弱かけて移動すると、大森林自治区が見えてきます。見た限りだと、比較的閑散とした森であり、車で通る余裕もある程度です。また草が踏みしめられた、獣道のようなものも見受けられ、そこを車で通っていくことも可能そうです。

地形もそう荒れてはおらず、むしろ荒野を突っ切り最速でここまで飛ばしてきた昨日のルートの方がよほど荒れていたと言えます。

深部まで入ると分かりませんが、ひとまずは自動車でも移動が可能そうに見えます。

そんな判断を下した後、私は商業施設の方へと戻ります。すると、予想外なものが準備されていました。

「旦那様っ！ 有咲ちゃんの方から、通信で連絡がありました！」

嬉しそうに、八色さんが報告してくれます。

「事前にこちらの商業施設に連絡してくれて、森林でも無理やり突破できるぐらいに仕様変更した特別製の移動用の車両と、他にも様々な兵器を収納袋に仕舞って準備してあるそうですっ！」

「それは非常に助かりますね」

「はいっ！ 有咲ちゃんにも、ちゃんとお礼を言っておきました！」

どうやら、先に有咲が手を回して準備をしていていたようです。

収納袋の中身を確認すると、なんと銃火器の類が大量に。他にもロケランやミサイルポッド、対物ライフルなど、何をするつもりかわからないレベルの兵器まで。

とはいえ、銃火器の弾丸は主に麻酔弾。そして武器の類もスタンガンを参考につくったスタンロッド、つまり剣と同じ取り回しが出るスタンガンが入っており、相手の無力化を考えての装備であることは間違いないです。

あくまで大型兵器は何らかのトラブルに対する保険としての装備なのでしょう。

そして肝心の改造された特製車両の方は、もはや戦争で使われるような装甲車らしき外見をしています。前部には細い木々をなぎ倒す為のかなり分厚く重々しいバンパーも付いており、大森林自治区

を無理矢理にでも抜ける意思が感じられます。

先程確認した大森林自治区の光景がずっと続くなら、この車両であれば何の不安も無く抜けられるでしょう。

「有咲には、本当に助けられてばかりですね。帰ったらお礼を言わないと」

「はいっ！」

そうして、私と一緒に装備の確認を済ませた八色さんの二人で、改めて有咲に感謝の気持ちを抱くのでした。

さて。その後は準備された装甲車に荷物を積み込み、いよいよ出発です。準備の時間もあり、昼前の出発となりました。

「では、行きましょう。大森林自治区に着けば、夜間の移動は控えるにしてください。現地の民族を必要以上に刺激してしまう可能性があります」

「わかりました、気をつけます」

イチロースズキさんの忠告を聞き入れ、いよいよ出発です。

森林仕様で重装甲の為か、少し速度が落ちた為、大森林自治区までは一時間と少し掛かりました。

いよいよ大森林自治区を目の前にして、改めて気合を入れ直します。

「ここからは、本当にルーンガルド王国の外であり、魔王軍も管理できていない部族が多数存在する危険区域です。本当に覚悟は出ていますね？」

イチロー・スズキさんの最後の確認に、私達は頷きます。

「当然です。さあ、行きましょう」

私はアクセルをしっかりと踏み、大森林自治区へと入り込みます。
さあ、ここからが本番です。

06 ヴァの民

装甲車に乗つての大森林自治区の通行は、かなり順調にいきます。

森林地帯であるため、スピードはあまり出せていませんが。それは徒歩でも同じこと。元々、魔王軍も通ることがあるために踏みしめられた広めの獣道があるので、そこを通ることで最短、かつ最速で森を進んでゆきます。

道中、オークやオーガなどの姿も見えましたが、この装甲車の姿の異様さに威圧されてか、追いかけられたり、攻撃されたりするとはありませんでした。

このまま大森林自治区は何事も無く抜けられるかも知れない、と思いはじめた午後。

ついに、懸念していた問題にぶち当たります。

突如、装甲車の進路を塞ぐように、獣道の脇から飛び出してくる魔物達。見たところゴブリンのようで、槍を持っており、それらを突き出して私達に威嚇しています。

「オイ！ マモノ、トマレ！」

片言ながらも、ゴブリンが声を上げます。ダンジョン等で見られるゴブリンは会話など出来ない知能の低い種族が大半であり、それらと比べると彼らはかなり知能が高いようです。

これなら交渉の余地があるでしょう。強行突破はせずに、大人しく止まります。

装甲車を停止させると、全員で降り、ゴブリン達と対面します。

「ッ！ マモノカラ、ヒトガデタ！」

どうやら、装甲車を魔物の一種だと勘違いしているようです。

「魔物ではありません。乗り物の一種です」

「ノリモノ、ノイツシュ？ ワケノワカラヌコト、イウナ！」

「貴方たちは馬に乗ったりしますか？ それと同じですよ」

「又？ ヘンナウマダナ？」

会話から、どうやら馬等の家畜の概念がある程度には文化的な相手だと推察されます。

これは、どうやら会話の余地がありそうですね。

「私の名前は、乙木と申します。こちらの皆さんは」

「私は魔王軍のイチロースズキでございます」

「七竈、八色、です」

「ティアナ」

「ティオだよ」

それぞれが名乗ると、今度はゴブリン達の中でも、最も体格の良い個体が一人、前に出ます。

私の身長も超えており、オーガと比べても差し支えないほどの巨体。かなり屈強なゴブリンです。

「オトギ！ オマエガゾクチョウダナ？」

「はい、そう思ってもらって結構です」

この集団のリーダーではあるので、おおよその理解は合っています。なので、細かい訂正は無しのままで行きます。

私が肯定すると、大柄のゴブリンは胸を張り、威風堂々とした態度で名乗りを上げます。

「ワレコソハ！ ヴァノタミガゾクチョウ、ゴヴァゴヴァデアル！」
「ゴヴァゴヴァさん、ですか。私達を引き止めたのは、どうしてですか？」

私が問うと、ヴァの民とやらの族長である大柄のゴブリン、ゴヴァゴヴァさんが説明してくれます。

「オレ、マオウグン、シッテル。ツヨイヤツラ。ダカラ、ココ、トオツテイイ。ダガ、オマエラシラナイ！ ヨワキモノ、ココ、トオルシカク、ナシッ！」

つまり、魔王軍が強いことは知っているが、私達個人の強さは知らない為、ヴァの民のルールの理由でここを通すわけには行かない、ということなのでしょう。

「では、通るにはどうすれば良いのですか？」
「チカラ、シメセ！ ゾクチョウドウシ、タタカウ！ ツヨキゾク
チヨウノタミ、トオルノユルス！」

なるほど。つまり私が代表して戦い、力を示せば、皆さん通って良いということですね。

そういうことであれば仕方ありませんね。

「分かりました。では」
「待って下さい、旦那様」

私が前に出ようとしたところで、八色さんが引き止めます。

「なんででしょう?」
「ここは、私にやらせてもらえませんか? 一応、すでに反乱軍の目が無いとも限らない場所です。旦那様の実力は見せずにいたほうが有利になると思います」
「なるほど」

確かに、八色さんの言うことも一理あります。

「私の能力なら、目視されずらいです。それに、知っていても対処の難しい力ですから、他の皆さんと比べても、この場合は適任かと思えます」

「では、八色さん。任せても良いですか?」
「はいっ! お任せ下さい、旦那様っ!」

八色さんは嬉しそうにしながら、私の代わりに戦いを引き受けてくれました。

「ゴヴァゴヴァ! お前が私の旦那様と戦う前に、まずは私を倒してもらおう!」

「ナンダト!」
「旦那様は私よりも強い! 私に勝てないようでは、旦那様に挑む資格は無い!」

少し無理をしながらの、強気の発言で、八色さんはゴヴァゴヴァ

さんを挑発します。

「イイダロウ！ マズハ、オマエカラダ！」

見事にゴヴァアゴヴァアさんは挑発に乗ってくれます。

こうして、八色さんとゴヴァアゴヴァアさんの決闘が始まることとなりました。

07 超加速の真髄

ゴヴァゴヴァさんが棍棒を構え、八色さんと立ち会います。

「イツデモコイツ！」

「ええ。いつでも行きます」

そして、次の瞬間には戦いが始まります。

先に動いたのは八色さん。スキル『超加速』を使用したのか、一瞬で姿が消えます。私のステータスですら、目で追うのが精一杯なので、恐らくゴヴァゴヴァさんでは本当に消えてしまったように見えていることでしょう。

「ド、ドコイツター！」

慌てるゴヴァゴヴァさん。その死角となる背後に、すでに八色さんは移動していました。

「こっちですよ」

「ナニッ！」

八色さんの声が背後から聞こえたからか、ゴヴァゴヴァさんは慌てて棍棒を振りつつ振り返ります。

ですが、八色さんはそんなゴヴァゴヴァさんの動きを読んでいた

様子。あっさりと棍棒を回避した後、ゴヴァゴヴァさんの腕を掴み、勢いを利用して投げるような動作をしました。

するとどうでしょう。不思議なことに、ゴヴァゴヴァさんの体は信じられない程の速度で吹き飛び、森の中へと消えていきます。

「グアアアアッ！」

数本の木をなぎ倒し、ゴヴァゴヴァさんはようやく止まります。

「ナ、ナニガオコッタ」

「貴方の背後に周り、そして投げました。それだけですよ」

「グッ！ コノママデハオワランゾ！」

ゴヴァゴヴァさんは多少のダメージは負っているものの、かなりタフな様子で、立ち上がるとまた素早く八色さんへと向かっていきます。

しかし。また気がつくと、八色さんは姿を消しています。超加速を使って移動し、相手の意識の外となっている地点へと移動する技術。ストーカー時代の八色さんの得意技が、これでもかと披露されていますね。

「クッ！ ドコダッ！ ドコニイル！」

ゴヴァゴヴァさんが八色さんを探してキョロキョロしていますが、そうやって動くたびに八色さんは立ち位置を変え、死角に移動します。

そうして混乱させきった後、八色さんはゴヴァゴヴァさんの真正

面に出現します。

「こつちですよー！」

「又ウツ！」

完全に無警戒だった正面に姿を見せられたことで、ゴヴァゴヴァさんは驚きのあまり、また反射的に棍棒を振り下ろします。

これをまた、八色さんは回避しながら掴みます。そして今度は絡め取るような動きで棍棒を取り上げつつ、ゴヴァゴヴァさんの腕を捻り上げます。

ゴヴァゴヴァさんと比べて、明らかに非力な八色さんですが、それでもゴヴァゴヴァさんを、とんでもない勢いで大地に叩きつけ、そのまま腕を極めた状態で宣言します。

「まだやりますか？ このまま、腕を折ることだって簡単に出来ますけど」

「グウ。オマエノ、カチダ」

悔しそうにしながらも、ゴヴァゴヴァさんは正直に八色さんの勝ちを認めました。

八色さんはゴヴァゴヴァさんを開放すると、嬉しそうにしながら私の方へと寄ってきます。

「勝ちました、旦那様っ！」

「おめでとございます、八色さん」

私は言って、八色さんの頭を撫でながら褒めてあげます。

「ふあつ。だ、旦那しゃまあ」

「ところで八色さん。ゴヴァゴヴァさんを投げ飛ばした時、ものすごい勢いで飛ばしていましたね？ あれは、どのような技なのか？」

私は疑問に思った点を八色さんに聞きます。私の知る限り、八色さんのステータスは素早さにかなり偏ったものだったはず。故に、あのような勢いでゴヴァゴヴァさんを飛ばすほどの力は発揮できないはずなのです。

そんな疑問点に、八色さんはあっさり答えてくれます。

「投げそのものや武装解除の技は、日本で旦那様を影から見守っていた頃に学んだゼロ距離戦闘術、ECQCです。でも、勢いよく飛ばしたのは『超加速』のスキルなんです。実は、このスキルで自分以外にも掛けることが出来るということに最近気付いたんです」

ニコニコと話をする八色さん。なるほど、つまり超加速で相手を投げた時の勢いを加速することで、まるで怪力で投げ飛ばしたかのような効果が出せる、ということですね。

しかし、それ以上に気になる点が一つ。

「八色さん？ ECQCを学んだ、というのはどういうことですか？」

「え？ 普通に旦那様を守る為に学んだんですよ？ 旦那様が変な輩に襲われても、あるいは変な虫に付き纏われても、いつでも助けに入れるように、ちゃんとマスターまで修了していますっ！」

元気に、普通のことのように言っていますが。ゼロ距離戦闘術をマスターした女子高生に影から見守られていたと考えると、少々どころでない冷や汗ものです。

もしもそのまま、八色さんが何か変な気でも起こして襲われていたらと考えると、未恐ろしい思いです。

「さすがですね、八色さんは。いつもどおりです」
「はいっ！　ありがとうございます、旦那様っ！」

私は胸の中に抱いた恐怖を、八色さんの頭を撫でて誤魔化すことにしました。

08 宴が始まる

「ツヨキモノ、ミトメル。オマエラ、ココ、トオッテイイ」

私が八色さんと話していたところに、ゴヴァゴヴァさんがやってきます。

「ソシテ、オトギ！ オマエト、オマエノタミ、ゼンブミトメル！ オマエラ、ワレラヴァノタミノナカマ！」

「ありがとうございます、ゴヴァゴヴァさん。これからも、仲良くしていきましょう」

私はゴヴァゴヴァさんに手を差し出し、握手を交わします。

「ヨシ！ アラタナナカマガデキタキネン！ コレカラウタゲ、ハジメル！」

そして、興奮した様子でゴヴァゴヴァさんが宣言すると、野次馬をしていたらしい他のゴブリン達が一斉に「おおお、等と声を上げ、喜び騒ぎ始めます。」

「宴、ですか？」

「ソウダ！ モチロン、オトギモコイ！」

宴に参加しろ、と言われて困惑してしまいます。正直、今は一刻

も早く魔王城に向かいたいです。

私はイチロースズキさんの判断を聞きたくて、視線を送ります。

「構いません。むしろ、ここは参加して友好関係を築いておきましょう。これから移動しても、一時間も移動すれば暗くなって移動出来なくなります。それなら、ここで他の部族の情報収集も兼ねて宴に参加しましょう。それに後々、乙木商事が大森林自治区に来る際にも、今回の縁が役に立つというのもあります」

イチロースズキさんの判断も、尤もなものです。私は納得し、頷いてからゴヴァゴヴァさんに向き直ります。

「分かりました。宴に参加させてください、ゴヴァゴヴァさん」
「イイゾ！ デハ、ツイテコイ！ ワレラノシュウラク、アンナイスル！」

先行するゴヴァゴヴァさん。私達は改めて装甲車に乗り、ゴヴァゴヴァさんの後をついていきます。

こうして私達は腕試しを無事に終え、ゴブリンの部族、ヴァの民と友好関係を築く為の宴に参加することとなるのでした。

集落に到着すると、さっそく広場のような場所に案内され、一段高い座席に私達全員が座らせられます。

同じく高い座席にゴヴァゴヴァさんと、その家族らしきゴブリンが座り、他のゴブリンが宴の準備を進めます。

ゴブリンの宴、と聞いて少しばかり警戒していたのですが、出て

きたのは猪や鹿などの肉を、山菜や木の実を使って焼いた料理。言
つてしまえば、少し豪快なジビエ料理のようなものが出てきました。

そして飲み物も、家畜の山羊の乳から作った酒が出されて、これ
も悪くない品質のものでした。

匂いも独特なスパイスのようなものを配合しているらしく、癖は
ありますが臭くは無く、中々に侮れません。

「デハ！ アラタナカマ！ オトギニカンパイ！」

ゴヴァゴヴァさんが酒の入った樽同然のサイズのコップを持ち上
げ、音頭を取ります。

これを皮切りに宴が始まり、ゴブリン達が騒ぎながら飲み食いを
始め、中には歌ったり、踊ったりして楽しんでいる者がいます。

そんな彼らの姿を、私はしっかりと、この目に焼き付けておこう
と観察します。

想像以上に、彼らは文化的な存在です。大森林自治区に住まう部
族なのだから、もっと原始的な生活をしている可能性を考えていま
した。

しかし、料理は私が食べても美味しいと思える程度には手が込んで
います。酒も山羊の乳をベースに、スパイスで香りを付けて飲みや
すくする、という『裕福さ』が無ければありえない習慣が身につい
ている様子。

焚き火を使って素焼きの肉を食う。酒があつたとしても猿酒と大
差無い程度のもの。そんな想像をしていましたが、彼らは遙かに上
を言っています。

ゴブリンでありながら。自然の中に生きながらも、文化的な裕福さを持ち合わせる彼らに対して、私は不思議と感動に近い感情を抱いていました。

「ドウダ、オトギ！ ウマイカ！」

ゴヴァゴヴァさんが楽しそうにしながら、大声で訊いてきます。

「料理も酒も、非常に美味しいです。素晴らしいですね」

「ソウカソウカ、ウレシイゾ！ ガハハハハ！」

褒められて気分が良くなったのか、あるいは酒が回り始めたのか。ゴヴァゴヴァさんは豪快に笑った後、語り始めます。

「ズットムカシ、コウジャナカッタ。オレノオヤノ、ソノオヤノ、モットムカシ。ワレラ、ヨワカッタ。ホカノブゾクニオワレ、ニゲルダケダッタ」

しみりとした様子で語るゴヴァゴヴァさん。そんな様子を見て、私は真剣に耳を傾けます。

「ソレデ、ダレカガイッタ。ウマイモノ、タクサンクウ。タクサンキタエル。ソレデゲンキニナル。ゼンインゲンキニナツテ、タタカイニカツ」

昔、彼らはよくいるゴブリンのようにその日暮らしをしていたのでしょうか。けれどある日、誰かが食事を充実させ、健康な体を維持し、鍛え、強くなる道を示した。

そこから、きつとヴァの民のゴブリン達は知恵というものを手に入れたのでしょうか。

「スコシズツ、ワレラハカワツタ。クイモノモ、又スマナクナツタ。ヤギ、ソダテテル。カリダケダト、タリナクナツタ。イノシシ、シカ、ウマ、ゼンブソダテルヨウニナツタ。ミンナ、ハライツパイニナツタ。ソレデツヨクナツタ。アンゼンナ、シユウラクツクツタ。ジカントヨウウ、デキタ。ブキツクル。メシ、ウマクスル。ドンドンワレラ、ゲンキデツヨイシユウラクニナツタ」

正にそれが、この部族の歴史なのでしょう。家畜を飼うことで食事が安定する。裕福になることで余裕が出来る。戦う以外の才能がある者が腐らなくなる。

そうやって、集団として生み出す利益をどんどん増やしていった結果、今があるのでしよう。

「デモ、マダタリナイ。ワレラ、モットゲンキニナリタイ。モットツヨクナリタイ。ソノタメニ、イロイロヤツテイル。ツヨキモノ、ナカマニスルノモ、ソノヒトツダ」

言つて、ゴヴァゴヴァさんは私の方に向き直ります。

「オトギ。オマエラ、ツヨイ。ツヨキモノ、ツヨイリユウアル。オレハソウオモウ。ダカラ、オマエラナカマニシタ。オマエラノ、マネスル。ソレデ、モットワレラツヨクナル。モットウマイモノ、クエル。ゴドモたち、ゲンキニナル。ソレガ、オレハウレシイ」

最後まで語ると、ゴヴァゴヴァさんはニカツと笑います。

「オレ、ダカラツヨキモノ、ソンケイシテル！ オトギ、オマエラスゴイ！ マネ、サセテモラウゾ！」

「ええ、どうぞ。存分に真似をしてください」

「ガハハ！ オマエ、イイヤツ！ イイヤツハ、ヨユウアルシヨウ
コ！ ヨユウアルヤツ、ツヨイヤツ！ モットマネ、シタクナツタ
！」

「どうやら、ゴヴアゴヴアさんは集落の発展を願って、私達との交
流を求め、それで宴を開き、私達を仲間と呼んだのでしよう。」

「そう聞くと、ますます熱い気持ちが込み上げてきます。」

「こんなにも、未来を良い方向へ変えようという強い気持ちがある
彼らとなら。」

「きっと乙木商事が大森林自治区に来た時も、良い関係を結べるに
違いありません。」

09 部外者襲来

宴も盛り上がり、料理もほぼ無くなり、酔ったゴブリン達が騒ぎ疲れ、眠る者も出始めた頃。

最初に異変に気付いたのは、八色さんでした。

「旦那様。闇の中から、視線を感じます」

そつと私に耳打ちしてくれる八色さん。

「敵ですか」

「はい。私達を監視しているみたいですから、その可能性が高いです」

八色さんの報告を受け、ゴヴァゴヴァさんにも伝えておきます。

「ゴヴァゴヴァさん。少し良いですか？」

「オウ、ナンダ？」

そして、私達が仲間の戦いの助けに向かっていたこと。敵が近づいてきているかもしれないことを説明します。

すると、ゴヴァゴヴァさんは宴に引き止めて悪かった、等と言った後に、「こう言います。」

「ワレラ、ジブンデジブンヨマモル。オトギ、ジユウニタタカエ！」

「ありがとうございます。では、迎撃に向かわせて頂きます」

ゴヴァゴヴァさんからもゴーサインが出たので、さっそく不審者の撃退に向かいます。

私達は全員で、視線の元となる場所へと向かいます。八色さんの案内で、森の暗闇の中へと進んでいきます。

すると相手も当然気付いているのか、移動をしているようで集落から離れていきます。

「どうやら、集落から離れて横槍が入らない場所で戦いたいようですね」

八色さんの言葉に、全員が頷きます。

そして集落から十分に離れた所で、ようやく敵の姿が見えてきます。

敵はどうやら、複数人のゴブリンのようです。しかし、体がオーガでも呼んだほうが良いくらい大きく、かつゴヴァゴヴァさんのような筋肉質な肉体でもなく、細身で機敏そうな見た目をしていません。

そして何よりも特徴的なのが顔です。総勢五名のゴブリン達が、全員が全く同じ顔をしているのです。

「我々に気づくとは、やはり相当な戦力を呼び寄せたようだな、イチローズスキよ」

「当然です。貴方にやりたい放題されるわけにはいきませんからね、メティドバン殿」

イチロースズキさんに向けて発言したゴブリンから、どうやら彼らが噂の、メティドバンさんが操るホムンクルス、というやつのもうです。

恐らく本体はここに居ないのでしょうが、このゴブリン達は全員がメティドバンさんの指示で動く、メティドバンさんの手足のような存在なのでしょう。

そして中央に立ち、唯一口を開きイチロースズキさんと会話しているのが司令塔のような存在なのでしょう。

「だが、貴様らの足掻きはここまでだ。斥候特化型ではあるが、このホムンクルスはSランク冒険者にも匹敵する能力を發揮するッ！この場で貴様もろとも、全員を滅してくれよう！」

興奮した様子でメティドバンさんが語り、それが終わると同時に五体のホムンクルスが散開します。

かなり素早い動きで、かつ連携も完璧であり、同一の人物に操られているホムンクルスというものの厄介さを感じます。

しかし、そうは言っても限度があります。

強いといってもSランク冒険者相当。私達を相手にするには、不足しています。

「遅いですね」

そう言って、まず攻撃に出たのはイチロースズキさん。前に出ると同時に、彼の背中に風が吹きます。魔法による追い風が彼の一步を大きく伸ばし、一瞬にして距離を詰めることに成功します。

そしてイチロースズキさんが向かった先には、一体のホムンクル

ス。

その頭を掴み、そのまま持ち上げ、さらに魔法を発動。

「お別れです！」

イチロースズキさんは魔法の竜巻を発生させ、ホムンクルスの肉体を包み込み、切り刻みます。

強烈な風の刃に前進を切り刻まれたホムンクルスは、当然戦闘不能。竜巻が収まった後、血だらけのホムンクルスをイチロースズキさんは投げ捨てます。

「この程度でSランク冒険者相当とは。いやはや、敵方の戦力見積もりが甘いというのは問題ですねえ、メティドバン殿」

不敵な表情を浮かべて、イチロースズキさんはメティドバンさんを煽ります。

「くっ！　だが、これで終わりではないぞ！」

悔しがりながらも、まだメティドバンさんは負けたつもりはない様子。

では、ここからは私達乙木商事の四人で叩き伏せてやりましょう。

10 圧倒的戦力差

「行こう、ティオ」
「うん、ティアナ」

先に動き出したイチロースズキさんに感化されたのが、ティアナさんとティオ君も動き出します。

トリッキーかつ素早い動きのホムンクルス達ですが、そういった連携をする魔物と戦う経験も、冒険者である二人にとっては慣れたもの。

「止まれ」

ティアナさんは呟いてから、氷の魔力で冷気のフィールドを広げてゆきます。周囲の木々や植物が凍りつく程の冷気が漂います。

これに包まれた結果、ホムンクルス達は動きが鈍り、コンビネーションが崩されます。

当然、この隙を逃す理由はありません。

「落とす」

ティオ君は一瞬にして距離を詰め、ホムンクルスの一体の首へ目掛けて魔導セイバーを振るいます。

鋭い魔法の刃がホムンクルスの首を一刀両断し、ゴトリと音を立

てて首が落ちます。

「ぬうつ！ 許さぬ！ 我が傑作のホムンクルスを、一体ならず二体までもツ！」

怒った様子のメテイドバンさん。残るホムンクルス三体が集合し、一斉にティオ君へ目掛けて突撃します。

ですがティオ君は冷静に対処。即座に後退し、ティアナさんと合流してから魔法を放ちます。

「近寄るな」

「消し飛べ」

二人が発動した魔法は、一つに合わさり、氷の嵐となってホムンクルスへ目掛けて発射されます。

荒れ狂う風と氷の刃に、危機感からホムンクルス達は即座に後退。

「グオオオオツ！」

ですが完全な後退は間に合わず。ホムンクルス二体を盾として犠牲にし、唯一喋るホムンクルスであった一体が辛うじて生き残りま

「まさか、ここまでの実力者を揃えていたとはッ！ かくなる上は」「させませんよ」

何か奥の手を使おうとしたホムンクルスの背後に、すでに八色さんは移動していました。死角から、武器のナイフで心臓を一突き。背後から貫かれ、胸からナイフが飛び出るホムンクルス。

「がフツ！」

当然、即死のダメージです。せめて一矢報いようとホムンクルスは八色さんのいる方向を振り向きますが、無駄です。すでに八色さんは、そこには居ないのですから。

「ま、まさかこんなことになるとは」

その一言だけを言い残し、ホムンクルスは倒れます。

これで敵は全滅した、かのように思えましたが。次の瞬間、イチロースズキさんが動きます。

「ここですか？」

風の魔法で、離れた場所に竜巻を起こします。それは私の背後で、ちょうど私を狙っていた『六体目』のホムンクルスの邪魔をする位置でした。

ホムンクルスは咄嗟に動きを止めてしまい、それだけの隙があれば十分でした。

八色さんがホムンクルスの首を刎ねて、一撃で終わらせました。スパン、ときれいに刎ねられた首はポーンと跳ねて、そのまま地面に落ちて転がります。

こうして、敵の六体のホムンクルスは全滅しました。私達の勝利です。

「ありがとうございます、イチロースズキさん」

「いえいえ。乙木さんであれば、あの程度対処出来たでしょう。あ

くまで手札を隠すための一手に過ぎませんよ」

確かに、あの程度の敵に背後を突かれたからと言って私が傷つくことはありえませんが、私という最大戦力を温存し、相手に悟らせずに済んでいるのはイチロースズキさんが対処してくれたお陰でもあります。

「ともかく、これではつきりしましたね。メイドバンは、こちらの動きを掴んでいます。一刻も早い合流が必要ですね」

イチロースズキさんの言葉に、私達は全員で頷きます。

とはいえ、戦いは終わったのです。ひとまずは集落に戻りましょうか。

11 八色の悩み

メテイドバンさんのホムンクルス達を撃破した後、私達は何事もなかったかのように宴に戻ってきました。

「オトギ、カッタノカ？」

「ええ、もちろんです」

私が頷くと、ゴヴァゴヴァさんは嬉しそうに笑います。

「ソウカ！ サスガダ、ツヨキモノ！」

豪快な笑い声につられて、私達も戦いの後の緊張感が完全に解されます。

そうして宴会に戻り、しばらくの間、私はゴヴァゴヴァさんとの会話を楽しみました。

「ソノ、オカネ、トイウノハ、ヒツヨウカ？」

「ええ。例えば、ゴヴァゴヴァさんが肉を手に入れます。でもゴヴァゴヴァさんは木の実が欲しい。なので、誰かの木の実と交換したい。でも、今日は誰も木の実を持っていません」

「ソレ、シカタナイ。ホシニクデモツクル」

「はい。ですが、お金があると違います。お肉が欲しいひとに、お金と交換でお肉を渡します。そして、木の実が余っている人が出て

きた別の日に、お金で木の実を交換します。これで、ゴヴァゴヴァさんは欲しかった木の実を手に入れられるわけです」

「オオ！ スゴイナ！ ベンリダ！」

話の流れでお金の話をすることになり、かなり噛み砕いて一部分だけ話してみました。どうやら興味を持ってくれたようです。この様子だと、金銭を介した取引にもすぐに興味を示してくれそうです。

「旦那様。そろそろ、お休みになりませんか？」

そんなところで、八色さんが声を掛けてきました。確かに宴も、かなりお開きに近い空気が流れています。夜も遅いですし、明日に備える方が良さそうですね。

「では、すみませんゴヴァゴヴァさん。今日はこれぐらいで失礼します」

「ガハハ！ オトギ、オモシロイ！ マタ、イロイロオシエテクレ！」

「はい、またいずれ」

そんな約束を交わして、私は宴の席から離れます。

私は八色さんと連れ立って、装甲車の方へと向かいます。計三組の簡易テントが積んであり、そのうち一つが私と八色さんが眠る為の分です。

それを設営するため、装甲車へと向かう道中。ふと、八色さんが口を開きます。

「旦那様。聞いてもいいですか？」

「はい。どうしました？」

八色さんの表情を見ると、あまり浮かない顔をしています。

「私は、ちゃんと上手くやれているんでしょうか？」

「上手く、とは何のことですか？」

私が詳細を問うと、八色さんは少し躊躇った後に口を開いてくれます。

「旦那様には、私の他にも大勢奥さんがいます。皆さんいい人で、いつも旦那様を支え続けてきたんだなって分かります。私も、旦那様の、その、お嫁さんになったので。同じように、いっぱい旦那様を支えたいって思っています」

そこで一つ息を吐く八色さん。

「でも、上手く出来ているか自信が無いんです。陰から見守るだけじゃなくて、一緒にいるようになって、とても難しいんだなって思うようになってきました。皆さん、本当に凄かったんだなって」

「八色さん」

不安げに語る八色さんを、私は肩を抱き寄せ、慰めます。

「旦那様。私は、お役に立てていますか？ 旦那様の妻として、立派にやれているでしょうか？」

「ええ。八色さんはとても頑張っていますよ」

八色さんのことを肯定した上で、私は更に告げます。

「それに、八色さん。妻だからというって、頑張らなければいけないというわけではありません。結果や成果が無ければ、妻として認めないなんてことはありません。貴女はもう、私の妻であり、大切な存在です。だから不安に思わないで下さい。どんな八色さんでも、私は大事にしますから」

そう言って、私は八色さんの頭を撫で、額にキスをします。

「ひゃう、だ、だんなしゃまあ」

顔を真っ赤にして、八色さんは恥ずかしがります。

「八色さんの不安がなくなるまで、いくらでもこうしてあげますからね」

「ひゃ、ひゃいつ」

そんなふうにはイチャつきながら、私と八色さんは装甲車に向かいます。

そうして私は八色さんとスキンシップしながら、テントを設営し、休むことになりました。

スキンシップが高じて、テントの中で何らかの行為に及ぶことになったのですが、それはまた別の話。

12 魔王城に到着

翌日。私達はテントを片付けると、ゴヴァゴヴァさんに挨拶をしてから出発します。

「それではゴヴァゴヴァさん。お世話になりました」

「オトギ、マタアオウ！ オマエ、イイヤツ！」

「ありがとうございます。機会があれば、またいずれ」

そうして再会の約束のようなものを交わし、私達はゴヴァゴヴァさんと別れ、ヴァの民の集落を出発しました。

早朝からの出発であったこともあり、この日はかなりの距離を移動することが出来ました。

そうして日が沈むよりも先に、大森林自治区を抜けることに成功。

「ここからは、私の案内に従ってお進み下さい」

と、イチローズスキさんが案内を申し出てくれたので、言葉に従って進みます。

やがて日が沈み、完全に暗闇が空を包む頃。私達の正面に、巨大な砦が見えてきました。

「見えてきました。あれが我々魔王軍の本拠地である、魔王城です」

イチロースズキさんは魔王城と言いましたが、やはり城というよりは砦と呼んだほうが正確ですね。堅牢そう度高く築き上げられた防壁が全方位を囲んでおり、守りは万全、といった様子。

そんな砦の正門前で装甲車を止めると、ちょうど門が開きます。

「よく来たのじゃ、乙木殿よ！」

門から出てきたのは、なんと魔王、ヴラドガリアさん。直々に出てきてくださるとは、少々驚きました。

私はイチロースズキさんと共に一度装甲車から降りると、ヴラドガリアさんに挨拶に向かいます。

「お久しぶりです、ヴラドガリアさん」

「うむ。ゆっくりと話をしたくもあるのじゃが、今はそうもいかなくてな。早速じゃが、状況を説明したいのじゃ。司令室に来てくれぬか」

「そういうことでしたら、分かりました」

私はヴラドガリアさんの言葉に頷きます。

そうして、私はまた装甲車に戻ると、車を進め、魔王城の中へと入ります。広場のような場所に一旦停車し、車を降りると、ヴラドガリアさんの案内に従って城内を進みます。

そうして到着した一室、司令室にて、状況説明が始まります。

「まず、戦況についてじゃ。イチロースズキがそちらに向かつてから、さらに状況が悪化しての。妾らが強硬手段に出れぬと踏んで、むしろ反乱軍の方が強硬手段に出たようじゃ。元より奴らは大森林

自治区に最も近い砦を占拠しておったのじゃが、今は拳兵の準備を進めており、どうやら大森林自治区を抜け、ルーンガルド王国へと向かうつもりのようにゃ

「それは、かなり切迫した事態ですね」

ヴラドガリアさんの言葉に、私は顔を顰めます。

「時間の猶予は、どれほどのものになりますか？」

「そうじゃな。恐らくじゃが、あと二日もあれば奴らの準備は終わるじゃろう」

「となると、私達の準備した増援が到着するかどうか、といったタ
イミングですね」

これはかなり危険な状態ですね。もし間に合ったとしてもギリギリのタイミングでは、完全に正面衝突することになりかねません。
そうなれば、両軍互いに犠牲が出ることを避けられません。

「となれば、何かしらの手段で敵の拳兵を遅らせる必要があります
ね」

「うむ、そのとおりじゃ。そこで乙木殿よ、お主に頼みがあるのじ
ゃ」

私の言葉にヴラドガリアさんが頷き、続けて提案をします。

「可能であれば、今回到着したお主を含む戦力で、反乱軍への破壊
工作作戦に出てはくれぬじゃろうか？」

「破壊工作、ですか」

「そうじゃ。お主らの戦力を、奴らは正確には把握しておらぬ。か
つ、お主らは妾らと違い、奴らを殺すという選択肢を取ることも容
易な勢力じゃ。破壊工作による遅延と、人的損耗を警戒させての遅

延。この二つで、奴らの行動を鈍らせるのじゃ」

確かに、ヴラドガリアさんの言う作戦には一理あります。

「ですが、皆に侵入しなければ破壊工作など不可能です。どのような手段を考えておられますか？」

「そこは、奴らが最も警戒する戦力を陽動に使うのじゃ。つまり、妾が正面から皆攻めをしてやるのじゃよ」

なるほど。確かに、ヴラドガリアさん本人が出れば、敵も反応をしないわけにはいきません。

「警戒の薄まった方面からであれば、お主ならどうとでも侵入できるのではないか？」

「そうですね。今回の私と共に来てくれた戦力であれば、可能かと」
私は八色さん、そしてティアナさん、ティオ君に視線を向けます。
すると三人とも、自信有りげに頷きます。

「では、決まりじやの。早速、詳細を詰めてゆくのじゃ。イチロースズキよ、委細は頼むぞ」
「畏まりました、魔王様」

こうしてこの後、私はイチロースズキさんと共に、作戦の詳細を話し合い、詰めていくこととなるのでした。

13 破壊工作作戦決行

魔王城に到着した、その翌日。早速ながら、私達は破壊工作作戦の為、反乱軍の占拠した砦へと向かいました。

途中まではヴラドガリアさん率いる陽動軍と行動を共にし、砦が見え始めたところで私達破壊工作組、私と八色さん、ティアナさんとテイオ君の四人が別行動に出ます。

一度隠れるように大森林自治区へと入り、迂回して陽動軍と逆方面へ向かいます。

私達が配置についたところで、通信機を取り出します。無線と似たような技術で作られた、短距離魔力通信機です。

「ヴラドガリアさん、聞こえますか？」

『うむ、聞こえるのじゃ』

「配置に付きました。いつでも作戦を開始してください構いません」

通信機から、僅かに歪んだ音でヴラドガリアさんの声が聞こえます。

『では、ゆくのじゃ！』

ヴラドガリアさんの声が聞こえた後、通信を終了。

そして直後、作戦にあつたとおりの大魔法が発動します。

強烈な闇の魔法が、空に向かって打ち上げられます。太陽すら覆い隠す闇が、付近一帯だけを夜のような暗さになるほど広がります。そして、轟音を立てて魔法が上空で爆ぜます。

威嚇の為に強大な魔法を使う、という作戦でしたが。それにしても、ヴラドガリアさんの使った魔法は強烈ですね。

そのお陰か、魔法による攻撃を警戒して、反乱軍が臨戦態勢を整え始めます。

私達は望遠鏡を利用し、反乱軍の動きを詳細に観察していますが、やはり陽動軍の展開している方面へと分厚く戦力を展開している様子ですね。

まあ、あれだけの魔法を見せつけられたなら、当然の反応でしょう。

「やはりこちらの方面はかなり守りが薄いようです。早めに作戦決行といきましょう」

私が三人に呼びかけると、三人とも頷きます。

早速、作戦決行です。まず、私達は用意した装備の一つ、ステルス迷彩機能を搭載したマントを羽織ります。

完全に周囲の風景に溶け込むというよりは、周囲の光を屈折させて姿を隠す装備なので、周囲の風景が滲んでボヤケたようになりません。

マントの内側は全く見えなくなるのですが、周囲の風景がボヤケて滲み、違和感が出るので完全なステルス迷彩というわけではありません。

ません。

が、今回の作戦行動には十分な性能です。

私達は岩陰、草木の陰に隠れながら、ステータスに頼って素早い移動を続けます。ただでさえ風景に滲んで姿が消えており、見えづらいののに、さらにこれだけの高速移動を続ければ、視認するのは極めて難しいでしょう。

そうして私達は砦の壁面に到着すると、まずはティアナさん、テイオ君が先行します。

垂直な防壁を走って駆け上がり、一瞬にして上まで登ります。

見張りらしき魔物が複数居たようですが、反応する余裕も無かった様子。二人が一瞬で攻撃を繰り出し、全員の意識を刈り取ります。

そのまま二人は砦の内部に侵入し、暴れる予定です。言わば、破壊工作兼、第二の陽動ですね。

ティアナさんとテイオ君の二人で砦の内部を破壊しながら駆け回り、混乱を広げます。そして程々の所で退散する予定です。

やがて騒ぎが大きくなり始めた所で、いよいよ私と八色さんの行動開始となります。

「では、行きましょう、八色さん」

「はい、旦那様」

私と八色さんが、本命の破壊作業員です。このまま侵入し、手薄となった砦を探索。重要物資等を中心に破壊して回ります。

隙を見せぬ三段構えの破壊工作、これで反乱軍の勢いを最大限削

してまいります。

14 戦闘用ホムンクルス

騒ぎが広がっているお陰で、私と八色さんの行動がスムーズに行きます。

倉庫に備蓄された食料はもちろん、投石機などの大型兵器も発見し次第、破壊していきます。

また、砦内部の施設に関しても破壊し、砦としての機能性も低下させます。結局は、ここで生活する魔物達が拳兵するのですから。生活そのものが不便になれば、その分敵の拳兵準備も遅れるというものです。

そうして私と八色さんで破壊工作を進めるうちに、とうとうかなりの重要施設らしき場所を見つけます。

砦の地下に設営された様子の、恐らくはメイドバンの実験施設。ホムンクルスらしき個体が、無数に壁際に飾られています。

「ここも、破壊していきましょう。メイドバンの戦力が削られるのは僥倖です」

「分かりました、旦那様」

「そうはさせんぞッ！」

私と八色さんの会話に、割り込む声が聞こえてきます。

声のした方向に視線を向けると、ホムンクルスの一体が動き出していました。

「まさか、貴様らがこうも早く皆に攻め込んでくるとは思っても見なかったが、しかし我が傑作の戦闘特化型ホムンクルスが、ここで貴様らを葬り去ってくれるッ！」

もはやゴブリンとは呼べぬ肉体を持つホムンクルスが、メティドバンの声で喋ります。

筋肉が異常に盛り上がるだけでなく、骨格もかなり太く頑丈な作りになっているように見えます。腕や足が巨大で、胴体はそれと比べて小さく、不気味な比率となっています。

戦闘特化型、という程ですから、恐らく先日戦ったホムンクルスよりは遥かに強力なのでしょう。

「旦那様。私にやらせてください」

八色さんがやる気を見せていたので、私は頷いて許可を出します。

「行きますッ！」

超加速のスキルを発動し、八色さんが行動開始します。ホムンクルスの死角に周り、武器の短刀型魔導セイバーでホムンクルスの背中を突きます。

「効かぬッ！」

さすがに肉体は頑丈なようで、刃は浅くしか刺さらなかった様子。それでも八色さんは冷静で、反撃してくるホムンクルスの攻撃をいなし、以前見せた技と同様に超加速を乗せた投げを披露してくれます。

ホムンクルスは強烈に壁へと叩きつけられます。

「やった！」

八色さんが思わず声を漏らしますが、これは少々危険ですね。油断している様子。

「これも効かぬわッ！」

粉塵の中から姿を現すホムンクルス。ダメージはほとんど通っていない様子。

その不意を突く動きに八色さんは驚き、隙を見せてしまいます。

私は八色さんをかばうようにスキルを発動。瘴気と詛泥を発生させ、ホムンクルスの攻撃を防ぐ壁を生成。

詛泥から跳び出たダークマターが、ホムンクルスの繰り出した拳を防ぎ切ることに成功します。

「ぐぬうッ！」

ダークマターと接触したことで、呪詛がホムンクルスの拳を冒し、皮膚をボロボロに崩します。

ですが、どうやら再生力が高いらしく、ホムンクルスの拳はみるみるうちに元通り、やはりこの程度ではダメージにならない様子。

「大丈夫ですか、八色さん」

「すみません、旦那様。油断しました」

「気にしないで下さい。貴女が無事ならそれでいいんです」

八色さんは反省しつつ、戦意は失っていない様子。私に謝罪した

後、また臨戦態勢をとってホームクルスと向き直ります。
「ここは、もう少し八色さんに任せてみましょうか。」

15 超加速の奥義

仕切り直し、とばかりに八色さんが動きます。

「今度こそ！」

八色さんはまたホムンクルスの背後に回ります。

「同じ手は二度と喰らわんッ！」

ホムンクルスはそう言うと、地面にめがけて拳を振り下ろします。どうやら闘気属性の魔力を持っている様子で、拳が床を叩くと同時に衝撃波が発生。全方位に目掛けての攻撃が繰り出されました。

「くっ！」

八色さんは咄嗟に距離を取ります。が、広さに限りのある地下室。避けるだけでも一苦勞です。

ギリギリで衝撃波を回避しきった八色さんですが、攻撃に出る余裕は無い様子。それを見たホムンクルスはさらに攻めの姿勢に出ます。

「ぐははははッ！ このまま叩き潰してくれッ！」

拳を連続で地面に叩きつけながら、八色さんを追い込んで行くホ

ムンクルス。その動きは巧妙で、衝撃波のせいではなかなか自由に動けない八色さんでしたが、意を決した様子。

「仕方ないけど、これでッ！」

言うつと、八色さんは周囲に落ちている瓦礫や機材の破片を拾い、手の平に乗せます。

「超加速、フルパワーッ！」

そして八色さんが宣言すると同時のことでした。

超加速のスキルにより、とてつもない速度を与えられた物体が、ホムンクルスへ目掛けて飛翔します。

膨大な運動エネルギーを持った物質が、次々とホムンクルスの肉体へと着弾していきます。

ドスドス、と鈍い音を立てて突き刺さる破片に、ホムンクルスは苦しみます。

「グアアアッ！ こ、これしきでエッ！」

ホムンクルスはダメージを堪えながら腕を振るいますが、それでも衝撃波の弾幕は薄くなります。

お陰で八色さんが包囲網から抜け出し、余裕が出来ました。

「これでトドメです！」

そして八色さんは、一際大きい一抱えほどもある大きな瓦礫を拾い、それを超加速のスキルで飛ばします。

質量が増えた分もあり、超速度で射出された瓦礫が持つ破壊力は

相当なものとなります。

それがホムンクルスの肉体と衝突した瞬間、余りにも大きな運動エネルギーが炸裂。ドゴオンッ！ という巨大な音と共に爆裂しました。

「ウガアアアッ！」

弾けた運動エネルギーがホムンクルスの肉体を傷つけ、手足に至るまでの全身をボロボロに傷つけます。

体中から血を流しながら、ホムンクルスは倒れ込みました。

「私の、勝ちですね」

倒れたホムンクルスを見て、安心した様子で息を吐く八色さん。恐らくは、先程の攻撃が八色さんにとっての奥義のような技だったのでしょう。

疲れも見える八色さんの様子から、どれだけの力を込めて超加速のスキルを発動させたのかが分かります。

「お疲れさまです、八色さん。よく頑張りましたね」

「はい。想定以上の敵でしたが、どうにかかりました。やっぱり技を隠しておいて良かったですね」

「ええ。とはいえ、これでメティドバンさんに私達が策を弄しているとバレてしまいました。そろそろ脱出としましょう」

私と八色さんはそう話し合い、頷きあってから脱出を決めます。

「ぐ、そうは、させんぞ」

どうやら、まだ死んではいなかった様子のホムンクルスから声が上がります。

「まだ生きていたようですね」

一体でも相手の戦力は削っておくに限ります。

私は大量の詛泥を生み出し、地下室を満たしていきます。

「グオオオツ！ な、なんだこれはッ！」

呪詛に侵され、肉体が壊されていく感覚は初めてでしょう。メテイドバンさんの操るホムンクルスは、再生も間に合わずどんどん肉体が崩れていきます。

十数秒ほどで、この地下室に存在していた全ての実験器具、そしてホムンクルスの肉体は溶けて消滅しました。

「行きましよう、八色さん。帰還です」

「はいっ！」

こうして、私と八色さんは皆から脱出することとなりました。

16 脱出直後

私達が砦を出ると、そこにはすでにティオ君とティアナさんが居ました。

「おまたせしたようですね」

私が言うと、二人は首を横に振ります。

「いま来たところ」

「それに、厄介な敵も来てる」

二人は言つて、砦の上を指差します。

そこから姿を見せたのは、以前に斥候型とメティドバンさんが呼んでいたホムンクルス。それも十体を超えて無数に姿を見せています。

「貴様らアアアアッ！ 絶対に許さんぞ、人間風情がアッ！」

ホムンクルスの一体が、怒りに震えるメティドバンさんの声で叫びます。どうやら追撃に来たようです。

「悪いですが、このまま抜け出させてもらいます」

「人間ごときが私を馬鹿にするなアッ！ 許さぬ、許さぬぞオッ！」

怒りからか、メティドバンさんの言葉はどこか支離滅裂でもあります。

そんな様子を、私は疑問に思います。彼は魔王軍の中でも頭脳派であったと聞きます。しかし、今の様子からするととてもそのようには見えません。

言葉から察するに、私達が人間であるという事実が彼を狂わせているのでしょうか。

「何故、そこまで人間を憎むのですか？」

私が何となく、ふとそんなことを訊いてみます。すると、メティドバンさんは烈火の如く怒り狂います。

「何故？ 何故だと？ 貴様ら人間がッ！ 我が同胞をキャンデイゴブリンと呼び、犯した罪を忘れ、なお何故と問うのかッ！ 愚弄するのもいい加減にしろオオオオッ！」

メティドバンさんはそう言って、私達にめがけて魔法を放ちます。同様に、無数のホムンクルスも一斉射撃を行います。

この様子では話は出来ませんし、これ以上この場にいるのも危険です。

「皆さん、退避しましょう」

私が言うと、三人とも頷いてくれます。ホムンクルス軍団の魔法の雨あられを回避しながら私達は砦を離れていきます。

そんな私達の背中に、メティドバンさんの恨みの叫び声が降りかかります。

「許さぬぞオ！ 我が同胞への虐殺の歴史、必ずッ！ 必ず貴様ら人間に償わせて見せようぞオオオツ！」

砦を離れ、私達は陽動軍と合流します。

「作戦は成功しましたよ、ヴラドガリアさん」

私はヴラドガリアさんと合流し、報告します。

「ありとあらゆる物資、施設の破壊をしてきました。拳兵をするにしても、当分は不可能となったはずです」

「分かったのじゃ。では、撤退じゃ！」

ヴラドガリアさんは、陽動軍に撤退の指示を出します。その言葉に従い、砦前に展開していた軍が下がり始めます。

合わせて、私達も後退を開始。ヴラドガリアさんと共に、魔王城へと戻ります。

「ところで、ヴラドガリアさん」

「うむ、なんじゃ？」

「メテイドバンさんと交戦し、少しだけ話を聞きましたが。彼はキヤンディゴブリン、という言葉をお聞きしました。どうやら、その言葉が彼の人間への恨みに関するキーワードのようです」

私が言うと、ヴラドガリアさんは表情を曇らせました。

「何か、知っているのですか？」

問うと、ヴラドガリアさんは頷きます。

「奴に関しては、昔から色々噂があったのじゃ。その一つが、そのキャンディゴブリンという言葉、いや、蔑称に關係している」

そう言って、ヴラドガリアさんは詳細について語り始めました。

17 悲劇のゴブリン

ヴラドガリアさんから聞いた話は、中々に衝撃的なものでした。

まず、キャンディゴブリンという言葉について。これはかつて存在した、とあるゴブリンの一族を、食肉扱いする言葉であるため、魔族や魔物達にとっては蔑称として認識されているようです。

そして、キャンディゴブリンが指す一族とは。私もかつて、聞いたことがあります。この世界で地中海と呼ばれる、巨大な塩湖の周辺に暮らしていたとされるゴブリンの一族です。

彼らは錬金術等、様々な高度な技術を有していました。ですが、ある時、その肉が非常に美味であるとの話が広まってしまい、とある国の王の命令で狩り尽くされ、全滅した。

そんな昔話があり、魔族の間でも地中海の民の悲劇として有名なのだとか。

そして、これとメティドバンさんの関係についてですが。

実は、以前からメティドバンさんは、その地中海のゴブリンと共に暮らしていた、普通の種のゴブリンであったという噂があったのです。

一般的なゴブリンでありながら、地中海の民の技術を持ちながら、その肉体が通常のゴブリンであったため、唯一狩りから逃れること

が出来たのだとか。

そして同胞を殺された怒りから、メティドバンさんは全ての元凶、国王を殺した。

だが、それでも恨みは消えず、今でも人間たちへの復讐心を燃やし続けているという。

そんな噂が、昔からあったのだとか。

しかし、いくらなんでも昔の話が過ぎます。ただのゴ布林であるはずのメティドバンさんが、そんな昔から生きているはずもありません。

だから噂といっても、メティドバンさんのイメージから作られた単なるゴシップに過ぎないと思われるのだとか。

しかし、今回の私が聞き出した言葉から、噂に信憑性が増してしまいました。

そして実際、ありえない話では有りません。

もしも本当に、メティドバンさんが地中海の民の技術を保有しているのだとしたら。そして、私が皆の地下室で見た技術が、まだまだほんの一部に過ぎないのだとしたら。

単なるゴ布林が、何百年と長生きすることも不可能ではないかも知れません。

「と、なるとじゃ。メティドバンの奴が、本当に地中海の民の技術を引き継ぐ者である可能性は高い。思えば、奴の作戦は未知の技術を使つてのものが多かったのじゃ。それを考えると、やつが単なる天才であるというよりも、かの民の技術を継承してある、と考えるのが自然じゃ」

ヴラドガリアさんも、どうやら私と同じ結論のようです。

「そうなりますと、彼は義憤や利益ではなく、自分の信念、復讐心から戦っていることになります」

「うむ。説得で無力化するの難しいじゃろうな」

私と共に、ヴラドガリアさんは頷き合います。

「最悪の場合、いや、むしろ高い確率で、メティドバンに関しては殺さねばならぬじゃろうな」

それは、当然導かれる結論です。

魔王軍としての義憤からであれば、魔王本人であるヴラドガリアさんの説得次第では戦いをせずに済む可能性もあります。戦争から得られる利益、利権が大事なのであれば、それらに変わる何かを提示することが出来れば説得可能です。

しかし、復讐心から来る行動には、こちらから提示できるものが何も有りません。故に、彼を説得することはほぼ不可能なのです。

「一応、接敵した場合は説得を試みてみますが。しかし、期待はしないで下さい」

「うむ。最終的には、そういうことになるうな」

魔王様も、メティドバンさんの処遇に関しては納得している様子。

私としても、可能であれば説得したいのですが。こればかりは難しいでしょう。

18 本隊到着

破壊工作作戦が終了してから二日後。とうとう、乙木商事が編成した軍勢が魔王城へと到着しました。

数々の最新鋭の装備を積み、戦闘用の装甲車両に乗って、ジョアンさん率いる防衛部門のエリート軍団が魔王城前に立ち並んでいます。

「こ、これはものすごい軍勢じゃの」

「はい。攻城兵器としても、最新のものを持ち込んであります。反乱軍の装備では、守ることも難しいでしょう」

「いや、そもそも最新でなくともこれだけの数が揃えばどうとでもなりそうじゃが」

確かに、装甲車両に積み込んだ兵器の数は、馬車や人力で運べるものではありませんからね。通常の軍隊と比べても、数倍の積載量はあると思います。

「ともかく、これだけの兵器があれば、物量で反乱軍を押し切る事が可能です。持ち込んだ兵装も、非殺傷武器が中心ですから、犠牲を最小限に抑えながらの鎮圧も現実的なのです」

「うむ、心強いじゃー！」

ヴラドガリアさんも満面の笑みで頷きます。

「ダーリン！ 部隊を連れてきたよ〜！」

そんなこんなで話しているところに、ジョアンさんが歩み寄ってきます。

「ありがとうございます、ジョアンさん。道中、問題はありませんでしたか？」

「うん！ ダーリンがゴブリンの部族？ と仲良くなってくれたお陰で、案内とかいろいろしてもらえて、スムーズに進めたんだ」

なるほど、どうやらジョアンさんもゴヴァゴヴァさん達と遭遇したようです。

「ゴヴァゴヴァさんと会ったのですね」

「うん。ダーリンが乗ってた車と似たものが沢山来たから、ダーリンの仲間だってすぐ分かったみたいだよ。で、俺がダーリンを助けに行くって話をしたら、快く通してくれてさ」

「なるほど。また会った時に感謝しておかねばなりませんね」

ジョアンさんも世話になったのですから、それ相応のお礼も準備しておくべきでしょうね。

そんなこんなで防衛部門の軍団と、魔王軍が集結することとなったのですが、さすがに大量の物資と装甲車両は魔王城に入り切らないので、乙木商事の部隊は魔王城周辺で待機することとなりました。

そうして、私達はいよいよ反乱軍鎮圧の為の本作戦を立てるため、司令室に集合します。

「では、お集まりいただきましてありがとうございます。今回の作戦の詳細をまとめさせていただきます、イチロースズキです」

会議の司会を担う、イチロースズキさんが話を進めていきます。

「今回、乙木さんが集めて下さった軍が中々のものだったので、当初の計画は間違いなく成功するでしょう」

言ってから、イチロースズキさんは図を広げます。

「具体的には、砦を包囲してから退路を断ち、籠城作戦を強制します。物資も限られる敵軍は、包囲しているだけで弱体化してゆき、最終的には投降せざるをえなくなります。まあ、単純な物量にものを言わせた城攻めですね。しかし単純だからこそ強い。メティドバンの妙な策略によってカウンターを食らう可能性も低い。今回の目的を踏まえると、ベストの選択と言えるでしょう」

イチロースズキさんの説明する作戦に、私も納得し、同意の意味で頷きます。

確かに、相手は物資も限られる反乱軍です。物量でまさるこちらが包囲すれば弱く、それが出来れば問題なく鎮圧可能でしょう。

これまでそれが出来なかったのは、まず魔王軍の数では足りなかったこと。圧倒的な物量とはいかない為、向こうも強行突破作戦に出る選択肢が取れます。

そうなればどちらにも被害が出る為、魔王軍としてはまずい。だから、今までは包囲作戦には出られなかった。

ですが、今は違います。我々の軍勢が合流したことにより、問題

なく包囲作戦を決行出来ます。

となれば、安定の選択肢である以上、選ぶのは当然というわけです。

「では、さっそくですが。詳細な戦力の算出と、それをを用いた作戦の手順について話を詰めていきましょう」

そうして、イチローズキさん主導で今回の作戦について詳細を詰めていくこととなりました。

19 攻城戦開始

翌日、いよいよ作戦開始となりました。

装甲車両に乗り、部隊を大きく迂回させて砦の後方に回らせます。対して、魔王軍には正面から正直に展開してもらいます。

移動速度に差もあり、砦の近くに展開完了するタイミングは同じとなり、ちょうど完全に包囲する形となりました。

魔王軍が見えたと思えば、またたく間に見たことも無い乗り物に乗った軍隊が展開し、包囲されてしまったのですから。反乱軍からしてみれば、たまったものじゃないでしょう。

実際、望遠鏡を使い様子を観察していましたが、防衛にも困っている様子で、慌てて展開するあまり、隊列はぐちゃぐちゃです。

「展開が終わらないうちに、こちらから攻めましょうか」

私は言うと、信号を使った暗号通信で部隊に指示を出します。

三方面を囲む防衛軍、そして一方面を担う魔王軍。それぞれに均等に配備した攻城兵器での攻撃が開始されます。

それは乙木商事で開発された最新兵器、魔導砲です。純粋なエネルギーを発射するモードから、物体の固有振動数と同調することで物質破壊に特化したモードがあり、今回は物質破壊モードでの砲撃になります。

殺傷力は低く、非生物に対しては効果が低い代わり、防壁のような石材には特攻効果があります。

四方面からの一斉砲撃。合計三百門による防壁破壊攻撃が降り注ぎます。有効射程距離10kmの、この世界の他の攻城兵器とは比べ物にならない長射程砲撃が、一方的に防壁を崩していきます。

一発、また一発と当たる毎に、防壁が崩れていきます。

流石にこの状況で悠長にするほど反乱軍も馬鹿ではなく、同じく攻城兵器で反撃を繰り出してきました。

とは言え、相手が使っているのは投石機や弩砲ばかり。有効射程距離は、この世界の特別な素材を使った最高品質のものでも1kmをギリギリ超える程度。まるでこちらに届く気配はありません。

「一方的じゃの」

「はい。流石に射程がこれだけ違つと、手も足も出ないでしょうね」

私はヴラドガリアさんと戦場の様子を見ながら言います。

そうこうしている内に、敵側も射程の問題に対処してきます。

無事な防壁の上に十数名の魔術師らしい魔族が立ち並んでいます。そして、全員で一斉に魔法を使い、一つに合わせて強化して放ちます。

そうして大幅に性能を上げた炎の魔法は、皆から約3km離れた位置に展開した私達の部隊に目掛けて飛んできます。

直撃すれば、部隊が大打撃を受けるに十分な威力の魔法でしょう。しかし、残念ながらそうは行きません。

「魔導バリア、展開！」

私の号令と共に、各所に展開した装甲車が防衛システムを起動。対物ライフル砲の直撃すら数発は耐える強度のバリアが展開されま

す。炎の魔法は部隊に直撃することなく、バリアと衝突し、炸裂しま

す。炎の嵐と爆発が収まったあとには、無傷の部隊と、バリアを消去し、堂々と佇む装甲車の姿がありました。

合成した魔法の威力でさえ通用しなかったことで、明らかに反乱軍側は衝撃を受けています。見るからに士気を失った様子で、攻城兵器も次々と動かなくなっていきます。動かす兵士が、諦めてしまったのでしよう。

やがて、こちらの砲撃で防壁のほぼ全てが完全に崩壊。砦を守るものが一切無くなります。

こうなると、完全に戦う意思を失ってしまったのでしよう。次々と反乱軍が白旗を上げ、降伏してきます。

「どうやら、上手く行ったようですね」

「そうじゃの。反乱軍の大半が降伏し始めておるようじゃ。残るは砦の中の残党のみじゃ」

私の言葉に頷いてから、ヴラドガリアさんは言います。

「さあ、残党の処理と行こうかの」

「ええ、行きましょう」

私とヴラドガリアさんは頷き、出撃の準備を始めます。

いよいよ作戦の第二段階。砦の中への突入作戦開始です。

包囲され、逃げ道もなく、砦を守る防壁も壊され、先日の破壊工作で物資も残り少ない。このような状況で戦う意思が維持できる者は少なく、砦からはぞろぞろと捕虜となる反乱軍が並んで出てきます。

そんな彼らを、我々の軍が拘束し、次々と無力化。

そんな流れ作業じみてきた光景を横目で見ながら、私は突入部隊の隊列の方へと向かいます。

突入部隊は精鋭中の精鋭。魔王軍の人員は含めず、乙木商事の戦力のみで編成されています。

これは、非殺傷武装が我々乙木商事だけが装備しているものである為です。魔王軍の精鋭は、私達が捕縛出来なかった、漏れた反乱軍の捕縛を後方で任せます。

そうして、隊列の先頭に到着。そこには魔王軍から唯一の参加者であるヴラドガリアさん。そして乙木商事の最精鋭である八色さん、ティオくん、ティアナさん、そしてジョアンさんが立っています。

「では、これから部隊の振り分けを行います。基本は、最低でもツーマンセルを維持して下さい。人数不利状況なら撤退。他部隊と合流し、安全な制圧を優先して下さい」

私は言うと同時に、部隊振り分けのデータを全員に送信します。部隊員が装備しているゴーグルには、今私を送った情報も含め、様々な有用なデータが表示可能となっています。

「また、敵戦力の中でも最重要人物であるメテイドバンを発見した場合も即座に撤退して下さい。部隊の誰も、いかなる状況であっても交戦を禁じます。対メテイドバン戦力として、私と魔王ヴラドガリアさんが出撃しますので、こちらに連絡を回して下さい。即座に向かいます」

作戦としては単純。一般兵は部隊の皆さんに任せて、最も危険なメテイドバンに関しては私とヴラドガリアさんという最高戦力二人で当たります。

破壊工作作戦の時、八色さんでも苦戦するほどの相手でしたからね。さらなる切り札が存在する可能性を考えると、安全に交戦可能な戦力は現状だとこの二人しかいません。

「では、各自最終調整を。只今より五分後、突入開始の通信と同時に作戦を開始して下さい」

私からの通達は以上。続いて、ヴラドガリアさんが前に出ます。

「お主らには、負担を掛けることになると思う。じゃが、反乱軍とはいえ妾の大切な部下でもあるのじゃ。どうか、可能な限り命は奪わずに無力化を頼むのじゃ。そして、お主らも命を大事にしてほしいのじゃ」

そう言って、ヴラドガリアさんは頭を下げます。

「頼む。妾の部下達を、助けてやってくれ」

その姿に感銘を受けたのか、部隊の皆さんの士気が上がったように見えました。

その後、作戦開始まで各自準備を整えます。装備の点検を行い、突入開始の通信を待ちます。また、部隊によっては突入箇所が異なるため、そうした一部の部隊は別の場所へと展開。ジョアンさんと八色さんが率いる第二分隊が左翼に。ティオ君とティアナさんが率いる第三分隊が右翼に向かっています。

そして私とヴラドガリアさんと共に正面突入する、最精鋭の第一分隊。以上の三分隊で、突入作戦を実行します。

「作戦、開始です」

各自の装備したゴーグルに、突入開始の通信が入ります。私も皆さんと同じものを装備してありますので、通信をしっかりと確認。

「行きましょう、ヴラドガリアさん」

「うむ。一刻も早く、メティドバンの奴を止めてやらねばな」

メティドバンは、いざとなればこちらの部隊員を殺すことも厭わないでしょう。何しろ、人間を恨む、地中海の民の生き残りなのですから。

そうなる前に、私とヴラドガリアさんでメティドバンさんを止めなければなりません。

二人で、誰よりも早く、皆へと突入します。

後ろに続く部隊員達も、スムーズに皆へと侵入し、作戦を実行しているようです。麻酔弾を装填した魔導銃に、魔導スタンガン。他

にも捕縛用ネット等、敵の拘束、無力化を優先した武装を使い、遭遇した反乱軍を次から次へと捕縛しているようです。

「後方の皆さんは、上手くやっているようですね」

「うむ。それにしても、反撃が手ぬるい。メティドバンの奴のホムンクルスも姿が見えん」

確かに、ヴラドガリアさんの言う通り。ホムンクルスの姿が無く、反乱軍による反撃は明らかに土気が砕けた手ぬるいものに過ぎず、あっさりと捕縛が成功しすぎています。

「もしま、時間稼ぎやもしれぬ。一刻も早く見つけるべきじゃの」

ヴラドガリアさんの予想は、つまりメティドバンが反乱軍を囿に何らかの最終手段、切り札を使う準備をしている可能性を示唆していました。

「そうですね。行きましよう」

私は頷き、ヴラドガリアさんと共に、砦のより奥深くへと足を進めます。

21 メテイドバン最終形態

皆の内部を探し回った結果。メテイドバンは、皆内部の司令室に籠もっていました。

ただし、ただ単に隠れていたわけではありません。

司令室は、見たことも無い機材にあふれており、その中央の、玉座にも見える不気味な座席にメテイドバンが座っていました。

「来たか人間よ。そして、魔王様も」

メテイドバンは椅子に座ったまま、こちらを見据えます。

「だが、一步遅かったようだな。我が最強のホムンクルス、接続型強化生体外骨格、その名も『シリアルキラー』の起動準備は終了したッ！」

言つと、メテイドバンは座席に座ったまま、何かのスイッチを押します。

すると、みるみるうちに周囲の機材がメテイドバンへと集まり、そして次々とメテイドバンの肉体へと突き刺さります。

無数の管が突き刺さり、見るも無残な姿になったメテイドバン。

しかし、その表情は不敵な笑みを浮かべたままです。

「刮目せよッ！　これが我が同胞の怒りの結晶ッ！　人類を滅ぼす人造の神であるッ！」

そして、メテイドバンの宣言と同時に、無数の管に沿って、肉のような物質が生成されます。

やがて生成された肉同士がくっつき、管も集まり、最終的にはメテイドバンを中心に据えた一つの人型へと変形。

生み出されたのは、巨大な人型の化け物でした。

「フハハハハッ！　今回ばかりは、感謝をしてやるぞ、人間よッ！　貴様が以前見せた、未知のエネルギーによる攻撃ッ！　あれのお陰で、こやつを動かすエネルギー問題が解決したッ！　この『シリアルキラー』は、我が復讐心、同胞を失った悲しみ、怒り、人類を滅ぼすまで尽きぬ炎を原動力に動くッ！　つまりは、無限のエネルギーを発揮する、最強のホムンクルスであるッ！」

なんと。メテイドバンの言葉が本当なら、これは厄介ですね。

「ぬう。原動力が乙木殿と同様の未知のエネルギーを利用しておるとなれば、妾の魔眼でも奴を停止出来ぬのじゃ」

ヴラドガリアさんは困ったようになります。正に、私もそれを心配していました。

ホムンクルスの多くは魔力を原動力にしており、それは即ちヴラドガリアさんの力があれば簡単に無力化可能であるという意味でもあります。

しかし、このシリアルキラーと呼ばれた存在は、メテイドバンの

復讐心を原動力にして動く兵器。私の詛泥等のスキルのような、呪いに近いエネルギーを元にしていているとなると、厄介な相手になります。

「魔王様ツ！ 貴女に恨みはありませんが、ここは押し通らせていただきますツ！」

「そうはさせぬ。妾も、伊達に魔王とは呼ばれておらぬのじゃ」

そうして、二人の戦闘が開始されます。

メテイドバンが操るホムンクルス、シリアルキラー。そして魔王ヴラドガリアさん。二人が同時に駆け出し、正面から拳を交えます。

そして、なんとヴラドガリアさんは闘気属性の魔法で身体を強化し、正面から殴り合っているにも関わらず、なんと僅かにシリアルキラーに押し負けて、後方に吹き飛ばされます。

「なんじゃとツ！」

「フハハハッ！ このシリアルキラー、魔王様のお力をベースに設計された真正銘の殲滅兵器ツ！ ステータスに換算すれば、魔力以外の全ステータスがSSSSの上位に匹敵する数値を誇るのですツ！」

自慢げに語るメテイドバンさん。その言葉が本当なら、たしかにヴラドガリアさんが押し負けることもあるでしょう。彼女のステータスは、筋力、体力、速力に関してはSSSS。もしもシリアルキラーのステータスがSSSS+に相当するのならば、闘気で強化したヴラドガリアさんの身体能力でも僅かに分が悪いでしょう。

なんともまあ、とんでもない兵器を完成させたものです。確かにこれだけの性能のホムンクルスであれば、人類は成すすべなく蹂躞

されるでしょうね。

「じゃが、それならばッ！」

ヴラドガリアさんは、即座に判断を切り替えます。物理的な能力が高いのであれば、魔力を使い、魔法で攻めればいい。

そう考えたのでしよう。深淵属性の、ヴラドガリアさんの魔法により生み出された弾丸がシリアルキラーを狙います。

「フハハハッ！ 無駄無駄無駄無駄アッ！」

ですが、それすらもシリアルキラーには通用しませんでした。

深淵属性の弾丸が直撃した途端、魔力が謎の力に侵食され、霧散。ほとんどダメージを与えることが出来ず消滅しました。

「なっ！」

「我が復讐心を全身に満たすシリアルキラーに、生半可な魔力など通用しませんぞッ！ ダメージを与えたいのであれば、魔王様お得意の極大魔法を発動なされると良い！ だが、その巻き添えでどれだけの魔族、そして人間が死に絶えるのかは分かりませぬがなアッ！」

「ぐぬ、メテイドバン、貴様アッ！」

ヴラドガリアさんは悔しそうに表情を歪めます。深淵属性の弾丸ではかすり傷にもならない、魔法に対する強い抵抗力。これを打ち破るには、それこそ砦周辺一帯を破壊するほどの威力で魔法を放たねばなりません。ヴラドガリアさんの魔力であれば、それも可能でしょう。

ですが、こちらにはそんな選択肢は選べない。それが分かっているからこそ、メテイドバンは自信満々に煽ってきているのでしよう。

「さあ魔王様、どうぞ降伏なさいませッ！　そして人間よッ！　今こそ貴様の命、この場で刈り取ってくれようぞッ！」
「ぐッ、乙木殿ッ！」

ヴラドガリアさんは悔しげな表情を浮かべたまま、こちらに視線を送ってきます。

私は頷き、前へ出ます。ここは、私が頑張るべき場面でしょう。

22 その執念の意味とは

私はヴラドガリアさんと入れ替わるように前へと出ます。
そして、詛泥と瘴気を発動。シリアルキラーの周囲に展開。

「無駄無駄無駄アツ！ 効かぬ、効かぬぞオツ！」

やはり、近い性質の力同士であるせいなのでしょう。あまりダメージは入っていない様子。

しかし、デバフそのものはある程度有効なのか、動きは僅かに鈍っています。

私は即座にダークマター製のカランビットナイフを生み出し、シリアルキラーの腕に沿わせるようにして刃を振るいます。

鋭い刃によってシリアルキラーの腕の表面は切り裂かれます。

ですが、大きなダメージは入っていない様子。切り裂かれた腕は即座に肉が溢れ、傷を埋め立て、修復していきます。

正に怪物。化け物じみた能力ですね。

「ハハハハツ！ 無力、無力だ人間よツ！ このまま貴様を殺し、吾輩は大森林自治区の魔物共を引き連れ、人類の領域へと進軍するツ！ シリアルキラーという神が率いる魔物の軍勢が、人類を絶望の縁に落とすのだツ！」

メテイドバンはこちらへと拳を繰り出し、反撃しながら語ります。その言葉に違和感を覚え、私は回避しながら言葉を返します。

「お言葉ですが。大森林自治区の方々は思いの外理性的です。わざわざ危険を犯して、人類へと喧嘩を売るようには思えません」

「フハハハッ！ 馬鹿めがッ！」

メテイドバンは私をあざ笑い、そして語ります。

「神である我がシリアルキラーに従わぬのなら、力で従えるまでッ！ それでもまだ従わぬと言っているのであれば、脳にホムンクルスでも埋め込んで無理にでも大森林自治区から引きずり出してやるぞッ！」

「それは、あまりにも身勝手では？」

メテイドバンの語る計画に、私は苛立ちを覚え、反論します。また、同時に詛泥の中からダークマターの弾丸を生み出し、シリアルキラーへと射撃。肉体を貫くことは出来ず、半ばまで埋まった所で弾丸は止まります。

「貴様ら人間が知ったようなことを語るなッ！ あの悲劇を、人々が我が同胞を肉と見做し、下品な欲望に満ち溢れた目で刃を振るつたあの日をッ！ あの惨劇を知らぬ身でッ！ 何を語るといっただッ！」

メテイドバンは怒りに任せ、拳を振るい、私を狙います。回避する私に対して、メテイドバンは罵声を浴びせながら攻撃を続けます。

「死んだのだッ！ 肉を割かれ、皮を剥がれッ！ 美味しい美味しいと言われ、その身を人類に喰らわれてッ！ 我が同胞は苦しみ死んで

いったッ！ 貴様らがわが同胞を家畜と呼んで、傲慢にも強制的な繁殖を試みたッ！ 無残な実験で、数々の同胞がッ！ 苦しみ、悲しみ、絶望の余り自害していったッ！ その恨みをッ！ 怒りを知らぬ貴様がアッ！ 何を持って身勝手を語るッ！」

メテイドバンは言い切ると、拳を合わせ大きく振り下ろします。復讐心が溢れるあまり、動力に使っているエネルギーが腕にまで伝わったのでしよう。呪詛の力が拳を包み、床に打ち付けられた衝撃と共に周囲へと飛び散ります。

これを浴びたら、私はともかくヴラドガリアさんは少くないダメージを負います。私はダークマターの盾を生み出し、後方で魔力を集中させ、大技を狙っている最中のヴラドガリアさんを守ります。

と、同時に私はメテイドバンへと反論し、意識をこちらへ向けさせます。

「地中海の悲劇を、私は伝聞でしか知りません。しかし、私は知っています。大森林自治区に住まう者たちを。あの森に生きるゴブリン達を。彼らは彼らの哲学で、明日の幸福を夢見て、懸命に生きているのです。敵と闘うことよりも、強者に学び、より幸せを求める聡明さもある。我々人類とも、彼らは分かり会えるのです！」

言い返しながら、私は呪泥と瘴気を両腕に纏います。呪詛の力を腕に濃縮し、密度を高めます。

「だというのに！ 貴方の言うように、このまま人類との戦争になればッ！ 大森林自治区まで巻き込んだの復讐劇が繰り広げられるのならばッ！ 彼らまで、醜い争いの犠牲者になってしまうッ！」

私は濃縮した呪詛の力を拳に込め、シリアルキラーへと殴りかか

ります。

「欲深き人間がアツ！ 知った口で語るなアアアアアツ！」

メテイドバンは絶叫し、そしてシリアルキラーは拳を振るいます。私の拳と、シリアルキラーの拳が正面から衝突。私の呪詛の力が、そしてメテイドバンの怨念が、互いに互いを侵食しようと鬨ぎ合います。

ここが、今こそが踏ん張りどころです。

負けるわけにはいきません。私の拳に宿るのは忌まわしき、呪詛の力ですが。それでも、ここで押し負けることは、きつと許されない。

あのゴブリン達、ヴァの民の皆さんの未来の為にも。私はここで、押し通ります！

23 本物の願い

バチバチ、と音を立てて私の拳とシリアルキラーの拳が鬨ぎ合います。同じ系統の力だからこそ、互いに互いを侵食できず、ぶつかり合ってエネルギーが弾けるばかりとなっています。

「グウウウツ！ 醜き人間、如きがアツ！」

メテイドバンの拳が押し込まれてきますが、私も踏ん張って耐えます。

「確かに、人間は醜いです。自分の欲望に飲まれて。いつも間違っただけです。私だって、正しい道だけを歩んできたつもりはありません」

言い返ししながら、私はジリジリと拳を押し返します。

「命を支配し、傷つけてまで自らが生き残り、幸せになろうとするツ！ それが人間の本質かもしれませんツ！ でも、だからこそ、その生き残りたいという願いは本物だツ！ 誰にだって存在する、その願いだけは同じなんだツ！」

一歩、また一歩と。私の拳が、シリアルキラーを、メテイドバンの意思を押し返していきます。

「それがだから、なんだと言っただッ！ だから分かり合えると言っ
うのか？ そんなもの、幻想だッ！ 世迷い言に過ぎぬッ！」
「ああ、そうでしょうねッ！ 同じ願いがあるからって、分かり合
えるわけじゃないッ！ それが戦争、この世の全ての争いというも
のですッ！」

メテイドバンの反論を受け入れた上で、私は言い返します。

「ですがッ！ 貴方は解るはずだッ！ 生き残りたいという願いを
ッ！ それを踏みにじることの理不尽さをッ！」

私は、大森林自治区での出来事を、ゴヴァゴヴァさん達の笑顔
を思い返しながら語ります。

「あの森に生きるゴブリン達は、確かに明日を夢見て生きていたッ
！ 私や貴方も知っている、生きるという望みを、命あるからこそ
の尊い願いを抱いていたッ！ それを、貴方が踏みにじるとい
うのですかッ！ 地中海の民の悲劇を知っている貴方がッ！ 願いを踏
みにじられる絶望を知る貴方がッ！ 何故そんなことが出来るん
ですかッ！」

私は言い切ると、今までで一際強い力を込め、拳を突き出します。

「なっ
」

私の言葉で意思が揺らいだのか。メテイドバンは声を漏らし、シ
リアルキラーの拳から溢れるエネルギーに揺らぎが生まれます。

その弱い部分を貫くように、私の拳が突き進みます。そしてシリ
アルキラーの拳と衝突。私の呪詛の力が炸裂し、みるみるうちに拳
を腐食させてゆきます。

「ぐうッ！　これほどとはッ！」

慌ててメティドバンは、シリアルキラの腕を切り落とします。辛うじて呪詛の侵食から免れた様子ですが、それでも片腕を失うという代償を支払っています。再生にも時間がかかる様子で、ダメージは大きいでしょう。

「まだ分かりませんか？　貴方の復讐心の、本当の意味を。貴方が本当に願っていることを」

「私の、願いだと？」

じりじりとにじり寄る私に警戒し、メティドバンはシリアルキラに身構えさせます。先程まで、溢れるほどだったエネルギーが見るからに減少しており、弱体化しています。

このまま、彼は言葉で追い詰めていきましよう。

「貴方がこれほどまでに強い怒りを、恨みを人類に抱いたのはッ！　同胞の生き残りたいという願いに強く共感していたからではないですかッ！　それを踏みにじることの醜悪さを理解しているからではないのですかッ！」

「な、何を」

私の言葉の語気に圧されたのか、シリアルキラはたじろぐように一歩後ろへと下がります。

「それでもなお、貴方が大森林自治区をッ！　あの森に住まうゴ布林達の明日を踏みにじるといふのならッ！　貴方の恨む人間達と、いったい何が違うといふのですかッ！」

私は言うと、拳を振りかぶります。

「乙木殿ッ！ 受け取るのじゃッ！」

ちょうどそのタイミングで、ヴラドガリアさんの準備が終わったようです。

練りに練って、濃密に高めた魔力。闘気と深淵の属性を合わせた力が、私の方へと飛んできます。

私はそのヴラドガリアさんからの贈り物を、詛泥の膜で包み込み、拳に乗せません。

「生き残りたいという願いの否定がッ！ 本当に貴方の復讐になるとでも思っているのならッ！ 私がここで、止めてみせるッ！」

「ぐっ、くそオオオオオッ！ 動けエエエッ！」

メテイドバンは、必死にシリアルキラーを動かそうともがいている様子。しかし動力となるエネルギーが不足している様子で、まともな防御姿勢もとれません。

そんなシリアルキラーの頭部に目掛けて、拳を突き出します。

「ガアアアアアッ！」

私の拳の表面を包む詛泥が、シリアルキラーの肉体に宿る復讐心のエネルギーを貫きます。そうして弾けて開いた穴に目掛けて、拳に宿ったヴラドガリアさんの魔法の力を叩き込んでやります。

抵抗力も失い、防御姿勢さえとれずに拳を食らったシリアルキラーは、そのボディを内側から深淵の魔力によってスタスタに破壊されてゆきます。

そうしてシリアルキラーを構成する肉や、骨格代わりの管が千切れ、砕け、ボロボロと崩れ落ちます。

そうして全てのエネルギーがシリアルキラーの全身に伝わりきった後。そのボディは完全に破壊し尽くされていきました。

ボロボロと崩れ落ちるシリアルキラーの胴体から、メテイドバンの本体が姿を表します。

啞然とした表情で、呆然とこちらを見ていました。

「ま、まさか。我が最高傑作が」

そう呟くと、その場に倒れ込むかのような勢いで、膝を突き、項垂れるメテイドバン。

これで決着は付きました。私達の勝ちです。

24 理解した後

メティドバンは、その場に崩れ落ちたまま、肩を震わせます。

「そんな、まさか。同じ、だと言うのか。我が復讐の計画が、我が同胞を滅ぼした、かの狂王とそれに従った人間共と。同じことを繰り返そうとしていたというのか？」

その言葉に、私は何も返しません。

戦闘が終わり、メティドバンの方へと歩み寄るヴラドガリアさんが、代わりに口を開きます。

「全てが同じ、とは言わぬ。じゃが、お主がこのまま復讐心に飲まれ、必要の無かった犠牲を出しても突き進むというのなら。その本質は変わらぬ。生み出される犠牲者達は、お主の同胞が抱いた絶望と同じものを抱いて死にゆくのだらう」

ヴラドガリアさんの言葉で、ついにメティドバンは限界が来たように、涙を流しながら語ります。

「そうですか。私は、間違ったのですね、魔王様。私は復讐の結実を願う余り、同胞の願いすら踏み躪ろうとしていたのですね」

泣き崩れるメティドバンへと、私も歩み寄って声を掛けます。

「間違いは誰にでもあります。私だって、今まで何度も間違えてきました。だからこそ、気づいた時に引き返せるか。どうやり直すかの方が重要なのです」

「人間、お前は」

メテイドバンが何かを言う前に、私は言葉を続けます。

「さあ、立ちましよう。そして願わくば、どうかこれからは一人でも多くの仲間を救うため、その力を使ってくださいませんか？ 出来るなら、私達と一緒に」

私が語りかけると、メテイドバンは視線を逸らしつつ問い掛けてきます。

「我が同胞は、許してくれるだろうか。間違えた私を。復讐よりも、優先するものを見出してしまった私を」

その言葉には、ヴラドガリアさんが答えます。

「誰が許すでもなく、お主は自由じゃ。大切なのは、お主の本当の願いを理解した今、それに恥じぬよう生きることじゃろっ？」

「ええ、そうですね」

ヴラドガリアさんが言いつつ、私に視線を向けてきたので、私も付け加えて語ります。

「もしも貴方の同胞が貴方に願うとすれば。それは復讐の果てに犠牲者と生み出し、生涯を復讐に費やし死にゆくことではなく、同じ悲劇を二度と繰り返さないことを願うと思います」

私とヴラドガリアさんの言葉で、メテイドバンは目を見開き、そして何かを思い返すかのように虚空を見つめます。

「ああ、そうだ。そのとおりだ。我が同胞は優しくかったのだ。だから技術の全てを封じ、争わぬことを選んだのだ。なのに、何故私は、そんな簡単な、当たり前前なことにも気づかなかったのだっ！」

顔をしわくちやに歪めて、メテイドバンは涙を流します。

「メテイドバンよ。今は泣くがよい。お主は今、真の意味で同胞の無念を理解したのじゃ。これからは、泣く間も無いほど忙しくなるじやろう。だからこそ、今ここだけでは、思う存分、泣くと良いのじゃ」

「魔王様。かたじけのうございますっ」

ヴラドガリアさんはメテイドバンの肩に手を添え、慰めます。メテイドバンも、ここぞとばかりに号泣。貯まりに貯まった感情を吐き出すかのように、大量の涙を流します。

私はそんなメテイドバンの様子を見守り、彼が立ち直るまで待つこととなりました。

やがて涙が止まると、メテイドバンは立ち上がり、私に向き直ります。

「すまなかつたな、人間よ。そして、ありがとう。私の本当の望みが分かったのは、お主のお陰だ」

「いえいえ、気にしないで下さい」

言って、私は手を差し出します。

「改めまして。私は乙木商事の会長を務めております、乙木雄一という者です。以前より、魔王軍との同盟締結を望み、交渉しておりました」

「うむ。我が名はメティドバン。魔王軍七武将が一人、賢将メティドバンである」

メティドバンは私の手を握り、握手を返してきます。

「乙木よ。今回の御恩は決して忘れぬ。魔王軍の一員としても。そして私個人としても、お主の助けになると約束しよう」

「ええ、ぜひ。期待しております」

こうして。無事メティドバンとの戦いも終え、最終的には協力関係すら結ぶことに成功。

突入作戦は、最高の形で成功を納めることとなりました。

25 戦後処理

メテイドバンの降伏後。反乱軍の鎮圧は、無事完了。こちら側は一切の犠牲者を出すことなく、反乱軍側も負傷者こそ出たものの、死者は無し、という結果で終わりました。

最高の結果とも言える戦果を上げて、魔王軍の皆さんと共に、私は魔王城へと帰還しました。

そして魔王城に帰還し、一泊の休息を置いてからの翌日。戦後処理として、反乱軍の扱いと、我々乙木商事の人間への恩賞を決める為の会議が開かれます。

「では、まずは反乱の首謀者、メテイドバンへの処遇から決定しようかの」

会議に集まったのは、ヴラドガリアさんに側近のサティーラさんと、宰相のイチロースズキさん。そして現在の唯一の生存する四天王であるレオニスさん。さらに当の本人であるメテイドバン。

乙木商事からは私ただ一人が出席者となっています。

「現在は深く反省もしており、情状酌量の余地もあるとは言え、反乱軍を結成し、魔王軍全体を混乱に陥れ、犠牲者を出しかねない状況に追い込んだ罪は軽くないのじゃ」

「承知しております、魔王様」

ヴラドガリアさんの言葉に、メテイドバンは深く頂垂れます。

「よって、メテイドバンは魔王軍七武将の地位を剥奪。及び、今後無期限の謹慎処分とする」

「魔王様、お待ち下さいッ！」

そこで声を挟んだのは、レオニスさんです。

「こやつは魔王様に自ら弓を引いた愚か者です。しかし、決して邪悪な男ではありません。地位や権力を求めて反乱に加わった一部の者共とは違いますッ！　どうか、どうか寛大な処置をお願い申し上げますッ！」

レオニスさんは深く頭を下げ、メテイドバンの処遇を軽くしてもらえるよう、ヴラドガリアさんに頼み込みます。

それに誰よりも驚いているのは、他ならぬメテイドバン。

「れ、レオニス殿。なぜ庇うのです？　私とは決して、友好的関係ではなかったはず」

「ああ、その通りだ。むしろ、お前の小賢しさにイライラして衝突したことも数知れぬ。だが、だからこそ吾輩は知っている。お前の心根が、決して邪悪なものではないと。真に魔族の未来を憂い行動出来る男であると」

レオニスさんの言葉に、感激した様子でメテイドバンは肩を震わせ、俯きます。

「まあ待て、レオニスよ。そう判断を早まるでない。本題はここからであるぞ？」

ヴラドガリアさんは、そんな二人の様子を見ながら、茶目つ気のあるウインクと共にそんなことを言います。

「さて。では次に決めねばならぬのは乙木殿への恩賞じゃな。反乱軍鎮圧の為の戦力の提供に加え、本人もメテイドバンの捕縛に協力しておる。今回の一番の功労者でもある乙木殿には、我が魔王軍から送れる最大の恩賞を贈ろうと思う」

言つと、ヴラドガリアさんは傍らに立つサティーラさんに視線を向けます。

サティーラさんは頷くと、一枚の書類を取り出します。

「今回の戦の間、私は単独で各州を周り、この許可証を手に入れてきました。大森林自治区の管理官の認定証です。魔王様は、以前より今回の件が片付きましたら、こちらを乙木殿へ、と考えていらっしやいました」

その言葉に、今度は私が驚きから目を見開きます。

「いいのですか？ そんなに大層なものを、これだけで貰ってしまつて」

「構わぬよ。元より乙木殿には、最終的に大森林自治区を治めて貰う予定であつたからな。今回のことで、多少性急にでも話を進めてしまつ方が良いと判断したのじゃ」

「それに加え、乙木さんは既に大森林自治区の部族と友好的な関係にありますからね。決して時期尚早、というわけではないと思われ
ます」

私の問いにヴラドガリアさんが答え、さらに補足するようにイチロースズキさんが語ります。

確かに、既に大森林自治区のヴァの民と呼ばれるゴブリンの一族と関わりがあり、その関係もあって今回乙木商事の部隊がスムーズに魔王城まで到着出来たという面もあります。

全くの準備なし、というわけでもありませんので、悪い展開ではありません。

「ですが、かなり無理をしたのでは？」

「全くだ。今回の準備のために、どれだけ魔王様が心を尽くしたか」「よせ、サテイーラ。それは良いのじゃ」

なるほど。ヴラドガリアさんが無理を通してくれたようです。反乱軍まで出して、あげくここまでの立ち回りをしてくれたとなると、相当立場を悪くしたころでしょう。

「本当に、ありがとうございます」

私はヴラドガリアさんに頭を下げます。

「ふふ、構わぬよ。それよりも、ここからが大事な話じゃ」

そうして、ヴラドガリアさんは再びメティドバンへと視線を向けました。

26 メテイドバンの処分

「さて。乙木殿が大森林自治区の管理官として決まったのじゃが。とはいえ、勝手のわからぬ領地での仕事には苦勞が多いであろう？ となると、補佐官が必要となるはずじゃ」

メテイドバンに視線を向けながら、ヴラドガリアさんが語ります。それはつまり、そういうことなのでしょう。

「ま、魔王様、それは」

「うむ。そしてちょうど、我が軍にはおるじやろう？ 様々な知識に精通しており、補佐業務にもなれており、だというのに都合よく何の仕事も無い男が、一人だけのう」

そう。それはつまり、メテイドバンさんを私たち乙木商事の補佐官として出向させる、ということですよ。

「よ、よいのですか？」

「うむ。むしろ、信頼できる能力を持った部下でなければ困る。つまり、お主が適任なのじゃよ」

「うう、ありがとうございます魔王様ッ！」

ヴラドガリアさんの言葉に、メテイドバンは涙ぐみます。

それも当然のこと。七武将の地位剥奪。そして無期限の謹慎処分。

これは魔王軍に席を置きながら、何の仕事も役職も無い状態にする、という処罰だったはずです。

本来なら、何の身動きも取れない状態で飼い殺しにされるような十分に重い処罰のはずです。しかし、メティドバンが補佐官となるのであれば話は変わります。

役職無しとなったのは、新たな役職である大森林自治区管理補佐官という立場をスムーズに受け入れさせるため。

そして無期限謹慎処分は、魔王軍に席を置きながら、余計な雑務に煩わされることなく、乙木商事の方へと出向させる為の方便。

要するに、処罰として一切機能していません。

むしろ、乙木商事との今後の関係性において、極めて重要な役割を担うことになるとも言えます。

「良かったですね、メティドバン」

「乙木殿。お主にも感謝してもし足りぬほどの恩がある。今後、この補佐官としての役割を通して、全霊でもって恩返しをさせていただこう」

そう言うと、メティドバンと私は互いに手を差し出し、握手を交わしました。

「宜しくおねがいします、メティドバン」

「うむ、こちらこそ宜しく頼むぞ、乙木殿よ」

こうして無事、私たち乙木商事と魔王軍の同盟は締結され、大森林自治区への足掛かりも出来ました。

これからまた、忙しくなりそうです。

などと考えていた所で、慌ただしい足音が聞こえてきます。

「ダーリン！ 大変だよっ！」

そして、バアンツ！ と大きな音を立てて会議室の扉を開き、ジヨアンさんが入室してきます。

「どうしたのですか、ジヨアンさん。そんなに慌てて」
「今さっき、乙木商事の本部から通信があっただよ！ 緊急のやつ！」

緊急通信。それは高出力の通信機を使い、中継基地無しでも本部と通信する為の技術を使った通信です。

使うエネルギーが多く音質も悪いため、普段は使わないのですが、それでも今回のように、通常の通信が届かない魔王城のような場所でも通信が受け取れるというメリットがあります。

どのような場所でも受け取れる、という性質から、緊急時の通信にのみ制限し、利用しています。だから緊急通信、というわけです。

「それは非常事態ですね。具体的には、どのような？」

私が問うと、緊張した様子でジヨアンさんが言います。

「内藤組ってやつが、ルーンガルド王国に対して攻め込んできたって！ しかも、それに応戦した勇者のみんなが被害を受けちゃって、負傷して撤退、可能な限り早くこっちに戻ってきて、力を貸してほしいっ！」

それは、まさに緊急の内容。

内藤組の蜂起による被害報告と、救助要請という正に切羽詰まったものでした。

「乙木殿よ」

顔がこわばっていた私に、メテイドバンが話しかけてきます。

「帰るのだろうか？ お前の国に」

「ええ、そうなります。一刻も早い援助が必要です」

「であれば、私も一緒に向かおう」

「メテイドバンもですか？」

その言葉に、メテイドバンは頷きます。

「我が知識を、存分に利用してほしいのだ。乙木殿の身内が危ないというのなら、是非力にならせてほしい。恩を返すべきは、まさにこの時だと私は思う」

「そうですね」

どうやらメテイドバンの決意は堅いようです。

「では、お願いします。行きましょう、メテイドバン！」

「ああ！ 我が知識と力、存分に振るおうぞ！」

こうして、私は新たな仲間となったメテイドバンを引き連れ、急遽ルーンガルド王国へと帰還することになるのです。

26 メテイドバンの処分（後書き）

これにて九章は完結となります。

十章からはついに内藤組との対決が始まります。

ここまでお読み頂きありがとうございます。

面白かった、続きが読みたい等思っていただけでしたら、ぜひブックマーク、評価ポイント等の方を頂けると嬉しく思います。

また、現在マンガよもんが様の方で連載中のコミカライズ版も宜しくお願いいたします。

01 緊急帰国

内藤組が攻め込んできた。その報告を受け、私達はすぐさまルーンガルド王国へと引き返しました。

部隊全体の指揮はジョアンさんに任せ、私は少数精鋭のみで先行して帰還します。一刻も早く、詳細な情報を乙木商事の本社から手に入れる為です。

私に同行しているのは、八色さんとメティドバン。ティアナさんにテイオ君。そして最速での行軍をするために必要最低限の部隊員のみです。

行きの道程よりも遥かに速く、かつ効率的に進んだ為、大森林自治区との境界に最も近い乙木商事の拠点に戻るまで二日の時間で済みました。

拠点に到着すると、私はすぐさま施設の通信設備を使い、本社の有咲と連絡を取ります。

「有咲。状況を教えてくれ」

「ああ。ルーンガルド王国に攻め込んできたのは、近隣の三国。バロメッツ公国、アデルタンド王国、サダルカーン王国。その中でも、元ルーンガルド王国の大商家から分かれたって経緯があるバロメッツ公国が、内藤の拠点になつてゐるみたいだよ」

そうして、有咲から私はさらに詳細な情報を聞き出します。

敵である内藤組の戦力は、三国の常備軍に加え、一般市民や冒険者からも徴兵した義勇兵も含む総勢二万の軍勢。

しかも、その多くが恐らくは内藤のスキル『洗脳調教』の影響を受けている様子とのこと。

本人たちが嫌がりながらも、行軍の歩みは止まるどころか、遅くもなりはしない。何らかの強制力があるスキルの影響がなければあり得ない状況です。

さらに、バロメツツ公国との国境線から進軍してくる敵軍の中には、有咲のクラスメイト達であり、内藤組の勢力に組み込まれていた召喚者の姿もあるそうです。

金浜君や三森さんも、この召喚者たちと交戦したとのこと。

そして召喚者達も、他の敵兵と同様、あるいはそれ以上に強く洗脳調教の影響を受けていたのだとか。

戦いを嫌がりながらも、一切の手加減無く襲いかかってくるクラスメイトに、さすがの金浜君達も手を焼いた様子。

結果、こちら側が少なくない被害を受けたというわけです。

「厄介だな」

「だね。このままだと、こっちから攻め込む事もできない。向こうは戦う意思が無いのに戦わされている人間ばかりだもんな。防衛戦はともかく、こっちから攻め込んで制圧、なんてどれだけの被害が出るか分からないよ」

敵とはいえ、望まずに戦場に立っている人たちです。問答無用で敵として切り捨て、戦争の被害者とするのは非道な行いと言えるでしょう。

「となると、直接の戦闘以外の手段で戦力を削ぐ必要があるな」
「うん。雄一なら、どうする?」

有咲に問われ、私は少し考えた後、答えます。

「まずは物資の供給を絶ち、敵軍を干上がらせよう」
「だよな。アタシも、そうすると思った。もう既に、ある程度準備を済ませてるよ」

有咲も同様の答えに至っていたようで、安心します。

敵軍が軍として機能するためには、洗脳による戦闘の強要だけでは足りません。食料を始めとする、あらゆる物資が必要となります。それらの供給を、乙木商事の力を用いて絶ちます。ルーンガルド王国から三国に出てゆく物資の遮断。そして逆に、三国から資源を買い占め、干上がらせます。

そうすれば、いくら強要されていたとしても、軍は軍として行動することが出来なくなります。戦闘不能とまでは行かずとも、戦闘能力を大きく削ぐことは出来ます。

直接戦闘による泥沼の殺し合いを続けるよりは、被害を少なく抑えることが出来るでしょう。

「じゃあ、よろしく頼む有咲。こっちもできる限り、早くそっちに戻る」

「うん、分かった。待ってるから」

こうして通信を終え、私は一刻も早く乙木商事本社へと戻るべく行動を開始します。

01 緊急帰国（後書き）

お久しぶりです。投稿再開です。

今回の十章が完結するまでは連続投稿していきます。

普段よりも少し短くなってしまっていますが、よろしく願いします。

そして、本日より本作のコミカライズ第2巻が発売となります。

もしよろしければ、皆様お手にとって読んで見てください。

キャラクター達が生き生きと表情豊かに描かれていて、とても魅力的になっていきます。

02 乙木の帰還

その後、無事に私達は乙木商事の本社へと帰還しました。そして到着すると即座に、ルーンガルド王国の王都に向かいます。目的は王城。国王との謁見です。

マルクリーヌさんが手配してくれたお陰もあって、謁見はすぐに来ることになりました。

私は一人、国王と向かい合います。この世界に召喚されて以来、二度目の対面です。

「国王陛下。この度は、お願いがあつて参りました」

私が言うと、国王は苦々しい表情を浮かべます。

「お願いとは、白々しい。早く言え」

どうやら、私は国王陛下にあまり好かれていない様子。

まあ、当然でしょう。今では、ルーンガルド王国の流通のほぼ全てを抑え、資産、技術力でも国に匹敵するものを持つ乙木商事。その代表が私なのです。

国の長としては、あまり気分がいいものでも無いのでしょうか。

「では、単刀直入に言わせて頂きます。現在、戦争関係にある三國との国境に配置されている軍の動きを、防衛にのみ集中していただ

きたいのです」

「敵を討つなど？ ふざけたことを言うな」

「であれば、仕方ありません。乙木商事からの、軍への物資供給が滞る可能性があります。こちらは無理は出来ません」

要するに、軍に物を売らない、という脅しです。

そこらの商会がそのような事を言っても戯言に過ぎません。しかし、乙木商事はあらゆる面で条件が違います。

そもそも、軍の扱っている兵器等も乙木商事が技術を提供して作ったものが多いのが現状です。私が首を横に振れば、それだけで機能停止しかねません。

それだけ根深く、この国の細部まで乙木商事は手を広げてきました。こういった時に、こちらからの要求を否と言わせないために。

私の言葉を受けて、国王は長く沈黙を貫いていましたが、ようやく重い口を開きます。

「分かった。専守防衛に努めることを約束しよう」

「ありがとうございます、陛下」

私は頭を下げると、続けて『対価』を口にします。

「では、こちらの都合で軍を動かして頂くお礼として、乙木商事からも防衛部門の隊を率いて、この度の戦争終結に向けて協力致しますよう」

「もういい、好きにせよ」

お礼とは名ばかりの、私にとって都合のいい提案にも、国王は拒否することは出来ませんでした。

許可も出た以上、これから乙木商事は正式に国の要請に従って前線に向かうことが出来ます。

これで軍に一切の邪魔をされることなく、前線で活動できるようになりました。

こうして無事、謁見を通して目的も達成したので、私は王城を後にします。

そのまま乙木商事の本社に戻り、三国に送る戦力の手配を進めます。

数日後には、ジョアンさん率いる防衛部隊も本社に帰還し、全隊が揃います。

隊員の休息、物資の補給に一日を費やし、ようやく準備が整います。

「じゃあ、行ってくる」

出発直前。私は妻達を前にして言葉を交わします。

「行ってらっしゃい、雄一」

まずは有咲が寄ってきて、互いに抱き合います。

すぐに離れて、次はシャーリーさん。

「無事に帰ってきて下さいね」

「ええ。任せてください」

シャーリーさんとのハグも終え、次はマリアさん。

「ティアナとテイオはこちらで面倒を見ておきますから、心配しなくてもいいですよ」

「はい、お任せします」

今回の作戦には、ティアナさんとテイオ君は連れて行きません。

他にもジョアンさん、八色さんも乙木商事にて待機となります。現在は、遠征の疲れを癒やす為にも各自休息を取っています。

魔王軍の援軍で同行して貰った皆さんには、今回は本社の守りとして残って貰います。

代わりと言ってはなんですが、今回はマルクリーヌさん、そしてシュリ君が同行することとなっています。

そうしてマリアさんとのハグも終え、いよいよ出発の時です。

遠征続きで、妻達には寂しい思いをさせてばかりですからね。なるべく早く終わらせて、帰りたいところです。

03 前線到着

乙木本社から防衛部門の部隊を引き連れて出発した私。
ルーンガルド王国の国内では特に邪魔をされるはずもなく、順調に進みます。

特に問題も無く、全軍で最前線へ。最も激しい戦闘が起こっている、バロメッツ公国との国境へと到着しました。

既に王国軍が陣地を敷いており、金浜君や乙木商事が事前に派遣した戦力もその一角に集結していました。

私はまず、そこへと顔を出します。

「乙木さん！」

私の姿に気づいた金浜君が、声を上げてこちらに駆け寄ってきてきます。

金浜君には怪我等は無いようで、ひとまず安心します。少なくとも、敵戦力は勇者である金浜君を傷つけるほどのものではないようです。

「たった今、応援の戦力を連れて来ました。戦況はどのような状況ですか？」

「はい。説明するよりも、まずはみんなの様子を見て下さい。その方が、話もしやすいですから」

言つて、金浜君は一つのテントへと私を案内します。
そこには、金浜君を始めとする召喚者が集まっていました。

聖女の三森さん。剣聖の東堂君。賢者の松里家君。さらには、乙木商事から派遣された戦力である、召喚者による冒険者パーティ『勇なる翼』の皆さん。仁科さん、真山君、鈴原さん、木下さん、涼野さんの五人が待機していました。

全員が怪我らしい怪我などはしていない様子。ですが、その表情は優れません。

「あ、かいちよーっ！」

私の姿を見て、涼野さんが明るい表情でこちらに寄ってきます。
その声を聞いて、他の皆さんも顔を上げ、安堵したような表情を浮かべます。

「お疲れのようですね。何があつたんですか？」
「うん。ウチらも、覚悟はしてたんだけどさ。ソレ以上にキツイっ
ていうか、ヤな感じの戦いばっかだった」

悲しげな声で語る涼野さん。

そのまま私は全員から詳細な話を聞いて、ようやく理解します。

敵の殆どが、内藤のスキル『洗脳調教』の影響を受け、嫌々ながらも戦場に立たされている兵士です。

口々に戦いたくない、こんなのは嫌だ、と叫びながら、悲壮な表情で突撃してくる様は、精神的なダメージが大きかったようです。

中でも、同じ召喚者。内藤組に付いた結果、洗脳調教によって無理やり戦わされる羽目になったクラスメイトも多数居るらしく。そんな相手との度重なる戦いで、精神的にすり減っているのだからか。

受けたダメージや負傷は、三森さんと鈴原さんがスキルを使い癒やしてくれます。なので表面的にはダメージが無いように見えますが、特に勇なる翼の五人は精神的な疲労が溜まっています。

気分の悪い戦いを、ほぼ一方的な攻撃を受けながら、可能な限り敵を無力化するという理不尽なほど面倒なやり方で戦い続ける。そんな状況下、みんな疲れ果ててしまったのでしょうか。

皆さん、このまま戦い続けるのは無理だという結論に至ったようです。

「不幸中の幸いといいますが、内藤のスキルも完璧じゃないみたいで、戦場以外では強制力もさほど強くありません。殆どの兵士は捕虜にしたり、無力化して戦場から離れた場所で開放すると無理に暴れることは無くなります」

金浜君が補足するように、洗脳された敵兵の特徴を語ります。

「とは言え、それでも厄介な相手であることには変わりません。それに、内藤が特に強く洗脳した相手、例えば俺達のクラスメイトや敵軍の指揮官なんかは、捕虜にしてもスキルの強制力からは逃れられません」

「問題の解決には至らない、というわけですね」

状況を理解し、私は頷きます。

「分かりました。ひとまず、これからの戦いは乙木商事の防衛部門が引き受けます。皆さんは、まずは後方でゆっくりと休んで下さい」

私がそう告げると、誰もが安堵した様子で息を吐きました。

04 非殺傷制圧

私は金浜君たちとの話を終えた後、すぐに乙木商事の部隊の方へと戻り、急ぎ敵軍へと攻め込むことを決定しました。

向こうはこちらが積極的に攻め込んでこないと高を括っている様子なので、最初のうちに可能な限り多くの捕虜を捕らえておきたいのです。

敵戦力を減らすという目的もありますが、それ以上に、内藤のスキルがどのような働き方をしているのか、詳細に調べたいという目的もあります。

言い方は悪いですが、人体実験の検体を確保したいのです。

乙木商事の部隊と共に前線へと出るのは、私を含め八人。魔王軍から共にここまで付いてきてくれたメテイドバン。乙木商事の部隊を率いるマルクリーヌさん。個人的に付いてきてくれたシュリ君。そして金浜君、三森さん、東堂君、松里家君という面子です。

金浜君たち四人は、先に前線で戦っていた召喚者の中でも、数少ない疲労が残っていないメンバーです。

ここからも続けて私達に協力したい、ということだったので、ぜひともお願いしました。

「それにしても、俺達も前線に出なくて良かったんですか？」

私と共に、展開する部隊の後方に立つ金浜君が問いかけてきます。

「ええ。恐らく制圧だけならうちの部隊が持ってきた装備だけで可能です。私たちは、非常事態に備えてここで待機。全隊指揮を取ることに集中します」

言って、私は望遠鏡を使い戦場を見渡します。

戦闘向けの大型装甲車両の天井に乗り、戦場全隊が見える高さから一望する景色です。我が乙木商事の部隊だけでなく、その向こうに展開するバロメツツ公国の軍まで丸見えです。

「見たところ、突出した戦力は存在しないようですし。やはり問題なく制圧可能だと思いますよ」

「そうですね。それなら、ひとまずお任せします」

金浜君は納得したように、装甲車両の車内に戻ります。私以外の七人が、これで車内に待機していることとなります。

さて、そろそろ準備も出来ましたし、作戦開始と行きましょう。

「全隊、進軍開始！」

私が無線通信で全隊へと指示を出すと、同時に我が軍が進軍を開始します。

一系乱れぬ統率された進軍に、敵軍がざわつく様子が見られます。

そうこうしている内に、こちらの射程距離の範囲内に敵軍が入りました。

「全隊、『着色弾』一斉掃射ッ！」

そしていよいよ、私の号令で今回の作戦の要とも言つべき兵器による総攻撃が開始されます。

最前線に立つ乙木商事防衛部隊の隊員が、バズーカ砲のようにも見える砲身を持つ兵器を抱えます。

そして引き金を引くと、砲身の中から色とりどりの砲弾が射出されます。

爆薬ではなく、魔法による空気圧による射撃。発射されたのは、カラーボール。現代日本のコンビニに、防犯アイテムとして配置されている物に良く似た砲弾です。

この砲弾こそが、今回の秘策『着色弾』。乙木商事の全店舗に配備されている、防犯目的の魔道具です。

開発経緯としては、最初は単純に、現代日本のコンビニのものと同じ機能、完全にカラーボールそのものを作り上げようとしていました。

既存の溶剤としては速乾性の溶剤があまり製造されていない為、溶剤の開発からスタートすることになりました。

これは極めて単純な魔道具化で解決。微量な魔力を吸い取ること、で蒸発、乾燥する溶剤を作ることで、カラーボールと同様の魔道具は完成しました。

しかし、この段階で有咲のアイディアが炸裂。

「なあ。もっと効率悪く、魔力を吸い取ることって出来ないか？」

そのアイデアは、詳しく聴いてみればまさに画期的と言えるアイデアでした。

付着した対象から微量な魔力を吸収して乾燥する溶剤を制作可能ならば。同様に膨大な魔力を吸収することで乾燥する溶剤だって制作可能なはずです。

そうするとどうなるか。乾燥する過程で、溶剤が付着した対象は急激に魔力を吸収され、魔力切れを起こします。

魔力切れの状態は非常に負担の掛かる状態であり、言わば全力ダッシュでスタミナ切れしたような状態そのものです。

こうなれば、相手は瞬時に行動不能に陥るといわけです。

当然、単純にすぐさま完成、とはいきませんでした。膨大な魔力を吸収し乾燥するとは、逆に言えば乾燥するまでに膨大な魔力が必要という意味にもなります。

すなわち、僅かな魔力しか持たない相手に付着した場合、速乾性が失われることにもなります。

この点を解決するため、溶剤は二種類のものを使うことにしました。一つは従来の微量な魔力で乾燥する溶剤。もう一つが、膨大な魔力を必要とする粘着質な溶剤。

最初に従来の溶剤が乾燥することで、第二の溶剤が接着剤のような働きを持ち、対象の動きを拘束しつつ付着し魔力を急激に吸収し続ける、という設計になっています。

こうして完成した乙木商事製のカラーボール『着色弾』は完成し、あらゆる店舗で従業員の緊急時の安全を守る魔道具として活用されています。

当然、在庫の数も相当数存在していたため、今回はそれらをこの

前線まで運び込み、敵兵の拘束手段として利用している、というわけです。

「さて。順調なようですね」

敵兵は次々に着色弾の餌食となって倒れ、無力化されていきます。魔力に特化したCランク冒険者でもなければ、耐えることなど不可能な勢いで魔力を吸収するのです。複数着弾することを考えると、Bランク冒険者でも厳しいでしょう。

結果として、敵軍は前衛から順番に、無傷で無力化されていきます。

「こうなると、敵軍は秘策の一つでも使ってくるかと思いますが」

私が言うと同時に、戦場の一角が騒がしくなります。

「嫌だああアアあつ！ 戦いたくねえよおオツ！」

等と叫びながら戦う少年。私にも見覚えのある、召喚者が敵兵として前線に飛び出してきました。

飛び出してきた召喚者の情報を訊くため、車内に戻ります。

「金浜君。今飛び出してきたクラスメイトの名前は分かりますか？」
「もちろんです。野村浩一、スキルは技能模倣。一度見たスキルを何でも真似できますが、チートスキルなんかは模倣できず、数にも限りがあります。そして内藤組の筆頭とも言える、前の世界でも内藤と仲の良かった不良一味ですよ」

金浜君の言葉で、私も思い出します。

そういえば、この世界に召喚される時、有咲と一緒に私を囲んできた不良男子三人組。その一人が彼だったように思います。

「なるほど。敵としては厄介ですが、我々が出張れば問題ないでしょうか」

「はい、恐らく。僕ら四人のスキルは模倣不可能でしょうし、ステータスは彼自身のものなので単純な身体能力での制圧も簡単です。恐らく、彼はAランク冒険者と同等かそれ以下の実力しかありませんから」

金浜君の言葉に、一同が苦笑いを浮かべます。

「常識で言えば、Aランク冒険者というのも相当な実力者なのだがな」

等と、言葉を挟んだのはメティドバン。

「まあ、事実ではありませんし。ひとまずは、彼を無傷で制圧、拘束することから始めましょうか」

そう言つて、私達は軽く作戦を話し合った後、金浜君と共に前線へと向かいました。

前線では次々と着色弾を喰らいながらも前進してくる野村君に我が部隊が後退しながら応戦しているところでした。

恐らくは、魔力常時回復のようなスキルを模倣しているのでしょう。着色弾の吸収以上の魔力を常に保持している為、乾燥し硬化した着色弾の溶剤による拘束効果以上の成果は出ていません。

「野村ツ！ これ以上は止めるんだ！」

真つ先に、金浜君が野村君の眼の前に出ていきます。

「うるせえツ！ オレだつて止めてえんだよおオオツ！」

言つと、野村君は金浜君に向けて手を翳し、瞬時に次々と魔法を放ちます。

恐らくは様々な属性をスキル扱いでコピーし、同時に行使しているのでしょう。

無数の魔法の弾幕を見て、しかし金浜君は慌てません。

「ふんッ！」

余裕の表情で剣を一振り。その剣圧だけで、野村君の魔法は完全に無力化されます。

「実力差は明らかだ！ 野村、大人しく投降しろ！」

「うるせえええッ！」

野村君は自分の意思では行動を止められません。故に、目の前で分かりやすく敵対行動を取っている金浜君と戦闘行為を行わずにはいられません。

これが、精神操作、支配系スキルの弱点の一つ。命令に従うよう矯正する都合上、個人の思考による細かな状況への対応が出来ないため、釣り出し等が簡単に出来てしまいます。

身体能力をスキルで強化したらしい野村君は、金浜君に殴りかかります。

金浜君はその拳を手で受け止め、続くもう片方の拳も同様に受け止めます。

野村君の両手を掴み、抑え込むように拘束した所で金浜君が声を上げます。

「乙木さんッ！ お願いします！」

その言葉で、私も行動を開始。

動きを止めた野村君の手足を囲うように、ダークマターを含む合金製の拘束具を生成。

デバフにより著しく身体能力を落とした野村君は、あっさりと手足の自由を奪われます。

「う、ぐう。や、やめてく、れえ」

最後まで戦いを嫌がりながら、野村君は倒れます。デバフと拘束具の重さにより、行動不能となったのです。

こうして無事、野村君の無力化、確保に成功しました。

これで内藤のスキルの影響について詳しく調べられるはずですね。

06 尋問開始

捕縛した野村君を後方につれてゆき、乙木商事の方で設置した基地設備の中で尋問を開始します。

魔力圧、魔素量それぞれを測定する機材はもちろんのこと。様々な測定機材を持ち込んでいます。

これらの機材を使いつつ、野村君を尋問することで、より正確に内藤のスキルについて解析していきます。

尋問は私を含め、メティドバン、シュリ君、松里家君の四人で行います。

「では、始めましょうか。君の名前は野村浩一で間違いありませんね？」

「ああ、そうだよ！ だからなんだってんだ、ああ？」

拘束具によるデバフの影響で相当辛いはずなのですが、それでも強気な態度は崩さない様子。

私は他の三人に順番に視線を向けます。機材の反応を見てくれているのですが、全員首を横に振ります。どうやら、特に何の反応も無かったようです。

続けて尋問を続けましょう。

「今回の進軍。バロメッツ公国を中心としたルーンガルド王国への軍事行動は、内藤隆が主導したものですね？」

「あたりめーだろ！ でなきゃこんな命がけの戦争なんてやりたくねえよ！」

この返答も外れ。特に反応はありません。

「では、もう二度とルーンガルド王国に攻め入るようなことはありませんね？」

「やりたくねえに決まってるだろ！ でも、関係ねえんだよ！ 隆のヤツのスキルのせいだよッ！」

その言葉には、今度は反応がありました。魔力圧、魔素量共に変化している為、スキルの影響を受けていることに間違いありません。また、やりたくないと言っているにもかかわらず、無理やりにも暴れようと身動きし、拘束から逃れようとしています。

様子からして、意思に反する行動を強要されているように見えませんね。

そうして、その後も尋問を続けました。

結果としては、ルーンガルド王国に対して敵意を示し、実際に行動に移すよう強要されているようだ、ということが分かりました。

また、行動が強要される条件は曖昧ですが、基本的にはルーンガルド王国への敵意を自ら否定するような意思を示した場合、敵意を強要されるようであると判明しました。

つまり、ルーンガルド王国へ攻め込む命令に従うなら問題なく進軍出来る。命令に逆らうならスキルの影響で行動を強要され、結局

意思に反して進軍することになる、という仕組みのようです。

「という結果になりましたが、なにか意見はありますか？」

私が問い掛けると、まずは松里家君が口を開きます。

「チートスキルであることを考慮しても、強力すぎる効果のような気がしますね」

「そうだね。いくらなんでも、万単位の人間の意思を同時に捻じ曲げるなんて無茶苦茶すぎるよ。何か仕組みがあると考える方が自然だね」

松里家君の感想に、シュリ君が補足をします。

これに私も頷くと、続けてメティドバンが発言します。

「内藤とやらが、常にスキルで支配を継続しているというわけではないはずだ。精神支配スキルというものは、本来多大なコストを支払ってようやく成立する。常に軍全隊へと影響を及ぼしているとは考えにくい」

言つと、さらにメティドバンは自身の考えを語ります。

「故に、精神支配自体が条件付きで発動しているものと考えられるな」

「条件付き、ですか」

私が問うように言つと、これにはシュリ君が解説します。

「強い効果を発揮する代わりに、発動条件が厳しいスキルって多いでしょ？ 多分内藤って人のスキルはそのパターンってことなんじ

やないかな？」

「うむ、左様である」

シュリ君の言葉にメテイドバンも同意します。

「恐らくは、特定の条件下で初めて精神支配効果自体を対象者に付与し、さらに条件付きで支配効果が発揮するように絞っておるのであろうな」

「それだけ厳しい条件下で発動するのなら、これだけ大人数へ同時に精神支配を掛けることも無理じゃ無いかもね」

メテイドバン、そしてシュリ君の言葉で、私もさらなる可能性を見出します。

「だとすれば、その前提条件を崩すことが出来れば話が変わってきますね」

「うむ。恐らくは精神支配効果自体が無効化されるであろうな」

どうやら、希望らしきものが見えてきたようです。

「ボクたちはこのまま、あの野村っちを尋問してもっと詳しい条件について調べてみるよ」

「精神支配が発動した時の状況まで遡ることが出来れば、打破する手段にも思い至るはず」

シュリ君とメテイドバンが、自らさらなる調査を買って出てくれました。

「分かりました。お願いできますか？」

「まっかせなよトギンっ！ 野村っち以外にも捕虜なんて幾らで

もいるんだから、すぐに一から十まで全て解き明かしてあげるよ！」

シュリ君の自信に満ちた言葉に、メテイドバンと松里家君も頷きます。

この三人にまかせておけば、問題ないでしょう。

となれば、私も私で出来ることをしていかなければなりませんね。

07 反転進撃

シュリ君、松里家君、メティドバンの三人が内藤のスキルについて調べている間に、私は本来やるべきことをやっておくことにしました。

それは、侵攻してきたバロメッツ公国軍を押し返すこと。反撃、進軍してルーンガルド王国の国境から遠ざけることです。

この争いはそもそも、内藤が起こしたものです。このまま守っているだけでは埒があきません。

かといって、来る兵全てを無力化し、捕縛するというのも無理がある話。

ですので、状況を変える為には内藤が居るであろうバロメッツ公国首都まで進軍。そして内藤自身を押さえる他ありません。

それにはやはり電撃的な進軍により、援軍が来るよりも先に内藤へと到達するのが最も望ましいと言えます。

ですので、私は乙木商事の防衛部隊を引き連れ、国境の守りにはルーンガルド王国の国軍のみを残し、進軍することにしました。

野村君と共に攻めてきた軍勢は打倒しましたが、その先にも恐らくは防衛戦力として一般市民や召喚者が配置されているでしょう。

それらも可能な限り順次無力化し、周辺から援軍が送られてくることによる無駄な争いが起こるよりも先に首都を目指します。

そんな進軍を続けて翌日の野営地にて。

私はここまで付いてきてくれた『勇なる翼』の皆さんと、金浜君、三森さん、東堂君の様子を見に向かいました。

ここまで戦闘はありませんでしたが、もう少し進めばさすがにバロメツツ公国の軍と接敵するでしょう。

そうになると、皆さんには体力的な面以上に、精神的な負担をかけることになります。

ですので、もしも気負い過ぎているようなら何らかの手段で慰めるか、あるいは酷い様子ならば待機するよう指示するつもりで顔を出します。

皆さんが寝泊まりするテントの近くまで来ると、先にある人物と顔を合わせるようになりました。

「乙木さん？ どうなされたんですか？」

木下ともえさん。皆さんの教師であり、数少ない大人組の一人です。

「こんばんわ、木下さん。皆さんの様子を見に来たのですが、どうでしょうか？」

「はい。乙木商事の防衛部隊であれば一般人の方々を無傷で拘束出来るかと分かっていますから。以前よりは、だいぶ顔色も良いと思います」

「以前よりは、ですか」

となると、やはり負担は感じているのでしょね。

「もしも辛いようでしたら、ここからの戦いで前線に立つ必要はありませんよ」

私が言つと、木下さんは首を横に振ります。

「いいえ。少なくとも私は、前に出なければいけません。戦わされている人々の中には、私の生徒たちも居るんですから」

どうやら覚悟が決まっている様子。木下さんは、そのまま心情を語ります。

「生徒同士で争うなんて、本当ならあつてはならないこと。けれど状況が許さないのであれば、せめて私が前に出て、みんなを守りたいんです。生徒たちの心が傷つくぐらいなら、代わりに私が」

「それは俺たちだって同じ気持ちですよ、先生」

木下さんが語っているところに声を挟んできたのは、テントから出てきた金浜君でした。

「先生が傷つくぐらいなら、俺たちだって頑張りたいです。だから、みんな帰ろうともしなかった。ここまで付いてきたんです」

金浜君は言いながら、木下さんの肩に手を置きます。

「それに、クラスメイトと戦わなければいけないからこそ。その責任や苦しさを、他の誰かに肩代わりしてもらおうなんて思えない。俺たちは、俺たち自身でこの戦いを終わらせないといけない。だから、先生だけに頑張ってもらおうなんて、誰も思っていない。み

んなで、頑張っていきましょう」

金浜君の言葉に、木下さんは瞳を潤ませながら頷きます。

「はい。そうですね。私達は、仲間ですから。一緒に頑張りましたよ
うっ!」

どうやら、この様子を見る限りであれば、大丈夫そうですね。
少なくとも、ただ辛い、苦しいという思いばかりで押し潰される
ようなことにはならないでしょう。

とは言え、苦しいことには変わりないはず。

こんな戦いは、一刻も早く終わらせたい。そんな気持ちだが、改
めて湧き上がるのを感じます。

08 週休二日制

乙木商事の防衛部隊による侵攻作戦は順調に進みました。

最初に到達した都市でこそ大きな反撃はあったものの、その後は散発的な小規模の反撃があるのみで、大きな戦闘は一度だけという結果に。

その上で、バロメッツ公国首都までの行程の半分まで到達することが出来ました。

敵の反撃が少なかったこともありませんが、それ以上に装甲車両での移動という圧倒的な進軍速度が功を奏していると言えます。

とはいえ、ここから先はさらに守りは固くなるはず。大きな戦いが待っていることは想像に難くありません。

そんな中。ついに後方に残してきたシュリ君、松里家君、メティドバンから内藤のスキルについての詳細な解析が出来たという連絡が届きました。

また、これに伴い、三人もこちらに合流すること。

私は待ちに待った解析結果の詳細に期待しながら、三人の合流を待つことにしました。

「おまたせ、オトギン！」

翌日。合流したシュリ君が、私に抱きついて来ます。

「お待ちしていましたよ。解析結果が出たんですね？」

「うん。早速だけど、作戦会議と行こうか！」

こうして、私は合流した三人を連れて、作戦会議室として使っているテントに向かいます。

テントでは、先に金浜君、そしてマルクリー又さんが待っていました。

「さて。それでは解析結果の報告から始めましょうか」

私が言うと、代表してシュリ君が報告を始めます。

「まずは複数の捕虜を尋問した結果、内藤のスキルによる精神支配効果が付与される条件が判明したよ。支配を受けている人は全員、内藤から『自身の願望、欲望を扇動する』ような行為を受けていることが分かったんだ」

欲望の扇動、と来ましたか。これはまた分かりづらい発動条件ですね。

「多くの人が内藤に願望、欲望を扇動された後、不自然にその感情が喪失。それ以降、内藤の命令に逆らえなくなったそうだよ」

「つまり、彼奴のスキルは対象の感情を対価に精神支配効果を付与するものであるうな」

シュリ君の説明を、さらにメテイドバンが補足します。

「対象者本人の感情に置換している以上、支配の維持に管理も魔力の供給も不要。自然体で常に対象者の心に纏わりつき、必要となれば魔力を吸い上げ、さらには欲望を喪失している以上現状を打破しようとする意思も薄弱となる。恐ろしい程に合理的なスキルであると言える」

メイドバンの評価に、私も含めこの場の全員が表情を引き締めます。やはりと言いますか、内藤のスキルは相当に厄介なようですね。

「で、そこまでは分かったから、さらに実験を続けたんだよ。一つの仮説に従ってね」

シュリ君が報告を続けます。

「欲望を対価に付与されているということは、逆を言えば欲望が復活するようないことがあれば精神支配の付与が解除、あるいはそこまでは行かなくても弱まるんじゃないかって思ってたね。ちよーっと色々な手段で野村っちの欲望を刺激した結果」

その言葉に何故か松里家君が顔を赤らめています。何があったのか気になりますが、今は訊くべきタイミングではありませんね。

「見事に野村っちの精神支配は解除されたってわけ！」

シュリ君は自身有りげに、両手を広げながら結果を報告します。

「これで、内藤のスキルへの対抗手段は確立したも同然だよ！」

「確かに。その解析結果を踏まえれば、今後の侵攻作戦も大きく有

利になるでしょうね」

私はシュリ君の言葉を受け、今後の作戦について考えつつ頷きます。

「さあ、オトギン。この結果を踏まえて、良い作戦は思いついたかな？」

「ええ、もちろんです」

既に私の頭の中には、あるプランが組み立てられつつあります。

「そうですね。作戦名は、週休二日制作戦とでも名付けましょうか」

私の告げた作戦名に、皆さん揃って微妙な表情を浮かべますが、作戦そのものは大真面目です。

さあ、このまま作戦の詳細まで話し合っていきましょう。

09 アットホームな職場

週休二日制作戦について話し合った翌日。いよいよ、我が乙木商事の防衛部隊は次の目的地、バロメッツ公園首都までの道中で最大の都市を目指して進軍します。

そして案の定、都市に到達するよりも先に、敵軍が展開しています。

見るからに装備もまばら。鎧や盾の代わりに、紐で繋いだ木の板や鍋の蓋を装備しているような姿も少なくありません。

いよいよ、なりふりかまわず市民を使い潰そうとしているようです。

しかし、問題ありません。

今回の作戦が成功すれば、彼らは精神支配から逃れ、無事に元の生活に戻ることが出来るのですから。

「それでは、準備はいいですか？」

「もち、任せてよかいちよーっ！」

私が声を掛けたのは涼野さん。今回の作戦における、重要な役割を担っています。

「では、始めて下さい」

「りょーかい！」

私の合図と同時に、まずは涼野さんが自らのスキル『魅了魔法』を使います。

敵軍全隊に、薄く浅く、彼らの欲望を刺激し、興奮させる効果のある魔法が発動します。

それは本当に僅かな効果ですが、しかし彼らの心が、刺激に対してより激しく反応する状態に陥っているのは間違いありません。

ここからが、作戦の第二フェーズです。

『乙木商事の、お得情報〜っ！ 今回お越しの皆様に関り、特別にお知らせいたします！』

突如戦場に響くアナウンス。部隊の設備を使い、拡声器を利用して敵軍全体に声が届くようにしています。

そして届けるのは本当にお得、に思える情報です。

『乙木商事は週休二日制、アットホームな職場で楽しく働ける素敵な労働環境を皆様にご提供致します！ 初年度の給与は最大金貨一千枚まで！ さらに、社員限定で乙木商事の商品を五割引でお買い上げいただける社員割引も実施中！ さらにさらに！ 今なら貴方のご紹介で新しく従業員が就職なされた場合、最大金貨一枚分のポイントをプレゼント！』

耳障りのいい求人情報が、次々と流されていきます。

敵軍に所属する彼らは、精神支配を受けてやりたくも無い戦争に連日駆り出されている状態です。更には乙木商事の作戦で国内の物

資も少なくなり、かなりひもじい思いをしているはずですよ。
そんな状況下で聞こえてきた、ホワイトな求人情報。これに反応しないはずがありません。

『乙木商事は資格、性別、種族、職歴全て不問！ 元敵軍であった社員も元気に働いております！ さあ、このチャンスに、今すぐご応募下さい！ 今なら応募用紙に合わせて、乙木商事の美味しい保存食一式を粗品として進呈致します！』

さらにトドメとして、ひもじい彼らに現物支給。食料を粗品として渡すとまで宣言。

魔法の影響もあり、欲望を十分に刺激された市民たちは、ついに我慢の限界を突破します。

「う、うおおおおおっ！ オレはバロメツツ公国の人間をやめるぞおオオオツッ！」

「ひもじいからって、草食ってる場合じゃねえ！」

「乗るしかねえ、このビックウエーブによお！」

次々と欲望を刺激され、精神支配から逃れた敵軍の一般市民たちがこちらの部隊へと突撃してきます。

もちろん、目的は攻撃ではありません。我先にと、粗品付き応募用紙を受け取りに来ているのです。

混乱しないよう、部隊員達が彼らを整列させながら、順番に求人の応募用紙と保存食のセットを受け渡していきます。

「どつやら上手く行ったようですね」

「いや、にしても上手く行きすぎただけだね」

呆れたような声を上げたのはシュリ君です。

「確かに欲望を刺激すればいいとは言ったけど、こんな方法で全軍の欲望を一度に刺激するとはねえ」

「ええ。ですが、上手く釣れない相手もいます。そういう人物には、ほらあの通り」

私は戦場の一角を指さします。

そこでは、勧誘用のチラシや釣りの為の高級食材を手に戦場を駆け回る金浜君の姿が。

彼の身体能力の高さを活かし、放送だけでは勧誘に成功しなかった人々を直接誘惑してもらっています。

お陰で、強い精神支配を受けていた敵兵も次々と支配から開放され、乙木商事の求人応募用紙に自身の情報を書き込んでいます。

「勇者を求人のためにパシらせるなんて、オトギンぐらいなもんだよ、まったく」

呆れたように息を吐くシュリ君。どうやら僅かばかり不満もあるようですが、結果さえ良ければそれで良しとしましょう。

その後、一時間ほどかけて求人応募用紙と保存食を配り終えた頃には、敵兵は一人残らず精神支配から開放。もはや乙木商事の防衛部隊と敵対する意思など微塵も存在していません。

こうして無事、内藤の精神支配に対する作戦は成功を収めました。

10 興奮する聖女

週休二日制作戦が無事成功した、その日の夜。
私個人の天幕で休んでいたところに、近寄る人影がありました。

「乙木さん、少しいいですか」

天幕の外から声がかかります。
声は三森さんのものでした。

「ええ。どうぞ、入って下さい」

私が許可をすると、天幕の中へと三森さんが入ってきます。

「どうされたんですか？」

何の用件なのか問い掛けますが、三森さんは俯いたまま何も言いません。

「三森さん？」

なにやら様子がおかしいので、再び呼びかけます。
三森さんは緊張しているのか肩が震えており、顔も少しばかり赤いようです。

「三森さん。私にできることであれば、何でもしますから。まずは、何があつたのか話していただけませんか？」

「本当にっ？ 何でもですか！」

三森さんの緊張を解すつもりで言うと、三森さんはガバリと顔をあげ、勢い良く尋ねてきます。

突然の勢いに困惑しながらも、私は頷きます。

「え、ええ。できる範囲であれば」

「言いましたね！ 今何でもって言いましたねっ！」

言うと、三森さんは勢い良く私へと飛びかかってきます。

予想外の行動に私が回避できずにいると、三森さんはなんと、私の腰に掴みかかってきます。

そしてズボンに手を掛け、私の股間に向けて声を上げます。

「乙木さんっ！ どうか私に、貴方の臭くて白いのをお恵み下さいッ！」

ああ。三森さんは混乱しているようです。

その後、私のズボンを引きずり降ろそうとする三森さんをなんとかだめて事情を聞きます。

三森さんは、以前から私の体臭を異常に好んでいました。それは以前から知っていたことです。着用済み衣類等をやたら要求されていましたので。

それが今回の作戦中に使われた欲望を増幅する魔法により暴走し

た、というのが三森さんの主張です。

涼野さんの魔法は敵味方識別して適用されていた上、三森さんの魔力に対してはほぼ無力だったはずだ。

なので、あったとしてもプラーシーボ効果のようなものしか無いはずなのですが、それはともかく。

そうした経緯でついに我慢できず本丸（意味深）に突撃してきたというわけです。

「なので乙木さん。大人しく脱いで下さい」

「え、いやですが」

「何でもするって言いましたよね？」

できる範囲で、と言ったのは無視されているようです。

「三森さん、どうしてもしたいんですか？」

「はいっ！ もう我慢できません。もう身体の内側から乙木さんの臭いで全てを塗り替えてほしくてたまらないんですっ！」

妖艶な仕草で自分の身体を抱えるようにしながら、三森さんは言います。

「それに、もしここでダメだと言っようでしたら、奥さんに告げ口しますから」

「逆効果では？」

「いえいえ。ここまでしたのに乙木さんが抱いてくれなかった、愛人にもしてくれなかったと言えば、奥さん方は同情してくれるはずですよ」

確かに。日本的に考えれば貞操を守ったという意味でプラスに見られますが、異世界的に考えれば甲斐性無し、根性無し扱いです。似たような理由も含み、八色さんを娶るよう散々に叱られた記憶があります。

「ええと。それはつまり、私に三森さんを愛人、あるいは妻として扱ってほしいという解釈で間違い無いですか？」

「はい。抱いていただけるのであれば妻でも愛人でも性奴隷でもかまいませんっ！」

目がキマっていて怖い三森さんが堂々と頷きます。怖い。

「三森さんは私のことを愛している？」

「はいっ！ 乙木さんの体臭を愛しています」

「体臭」

「はい。あ、でもその次ぐらいに乙木さん本人のことも好きですよ？ 父親的な安心感があつて」

私本人よりもその体臭が上というのは気になりますが、少なくとも気持ちの無い肉体関係、というわけでは無いようです。

となれば、仕方ありませんね。

「わかりました。私も覚悟を決めましょう」

「そ、それはつまり！」

「はい、三森さん。いえ、沙織さん」

「ひゃいっ！」

「愛し合いましょう」

と、というわけで。

この日の夜、私は三森さんと関係を結ぶこととなりました。

11 生徒同士の語り合い

沙織さんとの関係の変化については、ひとまず今回の戦争が終わってから報告する、ということ二人の間で話がまとまりました。

翌日、ぎこちない歩き方をする沙織さんに違和感を抱いた様子の仁科さんがこちらを睨んできましたが、すつとぼけておきます。

そうして、私達はさらにバロメッツ公国首都へと向けて進軍します。

最初の作戦の後、さらにもう一度接敵しましたが、既に動員人数も限界に近いのか、規模は小さくなっていました。

ここより先の反撃は、そう激しくないものになると予想されます。

そうして三日後。いよいよ首都目前という段階になって、最後の敵軍と接敵します。

しかもどうやら、今回は人数よりも少数精鋭。しっかりとした武装で身を固めた兵士に加え、召喚者の姿が何人も確認されました。

総勢千人弱ほどのこの敵軍が、内藤の最後の手札と見て良さそうですね。

「では、今回もこれまでどおりの作戦で行きましょう」

ある天幕の中、作戦会議をしていたところ、不意に手が上がりま

「すみません。少しだけお願いがあるんですが」

手を上げたのは、木下さんでした。

「はい。何かありましたか？」

「今回の、生徒たちの説得ですが、私達にお任せして貰えませんか？」

つまり、求人放送と物欲で釣る作戦でも靡かなかった召喚者の説得をするために、自分たちが前線に出る、という意味です。

「いいんですか？ 恐らくですが、戦場で唯一危険のある場所になりますか？」

恐らく、内藤はチートスキル持ちである召喚者にはより強固な精神支配を掛けているはずです。

そして今回の敵軍には数多くの召喚者が含まれています。

即ち、説得無しで精神支配から逃れられる召喚者の数は少なく、説得の過程で彼らからの反撃を一斉に受けるリスクがあるのです。

それを理解していてもなお、木下さんは頷きます。

「全員が納得しています。クラスメイトの、生徒のことは私達が受け持ちます。乙木商事の皆さんにこそ、危険な場所に向かってもらうのは申し訳ないですから」

責任感からか、木下さんははっきりと断言します。やはり、自身の生徒というのもあってか、全て他人任せで楽に終わらせよう、という気持ちにはならなかったようです。

ある意味では予想の出来ていた事態ではあるので、私は頷きます。

「分かりました。では、召喚者の皆さんの説得はお任せします。ですが、それ以外の敵兵に関しては私達に任せてもらいます。いいですね?」

「はい。ありがとうございます!」

木下さんの要望も通り、これで作戦会議も終了です。

さあ、軍と軍による最後の戦いに挑みましょうか。

「では、作戦開始!」

今までの作戦通り、求人放送と応募用紙と粗品の配布による精神支配の解除を狙います。涼野さんは戦場が狭い分、今までよりも強く魅了魔法を発動させます。

さらに、今までは違い、支配が強い敵兵の説得要員として涼野さんを除く『勇なる翼』の皆さん。そして三森さん、東堂君、松里家君に加え、マルクリー又さんとシュリ君も参加します。

私も金浜君と共に前線に出ますので、ある意味では総力戦とも言えるでしょう。

『乙木商事の、お得情報〜っ!』

いよいよ放送が始まりました。ここから、私達も行動開始です。

私は金浜君と共に、召喚者以外の説得に向かいます。マルクリー又さんとシュリ君も別方面で召喚者以外の説得です。『勇なる翼』と三森さん、東堂君、松里家君は召喚者の説得。

案の定、精神支配が解除されなかった敵兵の多くが召喚者でした。

「待ちやがれえッ！」

さあ、どこから説得に向かおうか、と考えているところに声がかかり、同時に金浜君に向かって魔法が飛んできます。

「誰だッ！」

金浜君はこれを剣で問題なく弾くと、声の主の方へ視線を向けます。

「てめえだけは許さねえからなあ、金浜アッ！」

「お前は、神埼か！」

金浜君に向かって攻撃してきたのは、事前に要警戒として情報共有していた召喚者の一人。『即死魔法』のスキルを持つ、神崎竜也です。

どうやら金浜君と因縁らしきものがあるようですね。

12 神崎竜也

「金浜君。彼とはどういう関係で？」

私が尋ねると、金浜君は苦笑いを浮かべます。

「いえ。単に俺の婚約者のことを以前から好きだったとかで逆恨みしているだけですよ」

「ああ、失恋の責任転嫁ですか」

想像以上に下らない因縁だったようです。

「ゴチャゴチャと何の話をしてんのかしらねーが、てめえだけは絶対に許さねえ！ ぶっ殺してやるッ！」

神崎君は、興奮した様子で突撃してきます。両手に即死魔法を纏い、拳で金浜君へと殴りかかります。

ただ、当然金浜君の方が圧倒的にステータスで勝っている為、軽くあしらわれてしまいます。

「どうしましょう、乙木さん！」

「そうですねえ」

見たところ、精神支配などは関係なく、金浜君を敵視して襲って来ているようですしね。

「普通に撃退していいでしょうね」

「ですねっ!」

言つと、金浜君は剣を使わず、拳で反撃します。

勢いそのままに、素人丸出しの構えで拳を振り回す神崎君に対して、訓練を受けて体術も修めている金浜君の一撃は遥かに無駄の無い動きでした。

正確に、鳩尾に拳を叩き込みます。

「グウッ」

うめき声を上げ、その場に崩れ落ちる神崎君。

「これで終わりですね。乙木さん、拘束具を」

「いえ、まだのようですよ」

戦いは終わったと言わんばかりに、金浜君は私に拘束具の用意をするよう求めて来ましたが、どうやら神崎君の戦意はまだ薄れていないようです。

「く、クソがあ! てめえなんかにも負けるかアッ!」

気合を入れて、どうにか立ち上がる神崎君。

これにため息を吐く金浜君。

「あのさあ神崎。どうしてここまでするんだよ?」

「うるせえッ! あの子が言ったんだよッ! そんなことがあっても諦めねえ、何があっても立ち上がるッ! そんな漢らしいヤツが

好みだつてよオッ！」

「どうやら、金浜君の婚約者という女性が言っていた言葉が原因のようですね。」

「むしろ、その言葉があつたからこそ、自分にもワンチャンスあるのでは、と勘違いをしているのでしょうか。」

「しかし、ここはそんな勘違いを正してやるのも大人の責務というもの。」

「少しいいでしょうか？」

「ああん？ 何だてめえ？」

私が声を掛けると、神崎君はガン飛ばして来ます。が、気にせず私は話を続けます。

「何があつても諦めず、立ち上がる。そんな漢らしい人間を目指しているのですよね？」

「何だよ、わりいか？」

「いえ。悪くはないのですが、気になる点がいくつか」

私はそのまま、神崎君の勘違いを指摘していきます。

「まず、恐らくですが貴方が狙っている女性は、その条件に合致する男性を好んでいるわけではなく、そもそも好んでいる男性が既にいて、その男性の特徴を挙げただけなのではありませんか？」

「なっ！」

「それに、失恋した相手にいつまでも固執するのは、何があつても諦めないというよりは、いつまでも継り付く迷惑で女々しい行為であり、貴方の目指すところと真逆だと思つのですが」

「ぐっつ！」

私の言葉が突き刺さっている様子で、神崎君はショックを受けたようにうめき声を上げます。

が、まだ指摘すべき点は残っています。

「そして最後に。そもそも貴方が仮に条件通りの漢らしい人間になったとしても、世界で唯一の男になるわけでもないのですから、貴方が選ばれる保証なんて一切無いと言いますか、むしろ他の条件から鑑みるに可能性は皆無ですよ」

「ウグアアアアッ！」

ショックの大きさからか、神崎君は頭を抱えてその場に膝を付きます。

「そ、そんな。オレのやってきたことは、無意味だったってのかよ
お」

「無意味に決まってるだろ。俺の婚約者だぞ、そもそも」
「ぐはぁッ！」

そして、金浜君の言葉がトドメとなったようです。ショックを受け、その場に倒れ込みます。

そのまま動き出さないのをしっかりと時間を置いて確認した後。

「乙木さん。拘束お願いします」

「ええ、了解です」

金浜君の要望に従い、無力化された神崎君を拘束することとなりました。

なお、これは後に分かったことですが。彼がその場に倒れ込んだのは、ショックのあまり無意識のうちに自分自身に即死魔法を発動し、実際にダメージを受けていたからだっただようです。

即死魔法のスキル自体に、即死魔法への耐性が含まれていたのが不幸中の幸いでしたね。

13 加藤淳也

ダークマター入りの合金による拘束の後、神崎君を後方に捕虜として送り、私と金浜君は敵兵の説得に再び向かいました。

そして、続けて運悪くも、敵からの妨害を受けてしまいます。

「これ以上、お前らの好きにはさせねえ！」

言いながら、こちらに向かって襲いかかってきたのは金髪を長く伸ばした男。要注意人物の最後の一人。スキル『弱体化』を持つ加藤淳也です。

スキル『弱体化』は、不可逆なステータスの減少を引き起こすスキル。対象に触れている必要があるという欠点はあるものの、一般的には恐ろしいスキルです。

しかし、このスキルはデバフの一種である為、デバフに対する高い耐性を持つ者にはそもそも無効。ステータスの減少自体も、本人の能力を基準にする為、圧倒的な格上相手には髪の毛ほどの効果も発揮しません。

そして金浜君は両方の条件を満たしているため、彼に触れられたところで何の影響もありません。

加藤君の拳を普通に受け止め、呆れたように息を吐く金浜君。

「今度はお前か、加藤」

「なかなかやるじゃねえか、金浜！　だが、オレにいつまでも触れていていいのか？」

問題ありません。が、どうやらそれを理解していない様子の加藤君。余裕ぶっています。

「そんなにお望みなら」

あえて金浜君は加藤君の挑発に乗るように、つかんだ腕をそのまま利用し、加藤君を投げ飛ばします。

「クツ！　やるなツ！」

吹き飛ばされた加藤君はどうにか着地します。恐らく一割どころか一分にも満たない力しか使っていない金浜君を相手にこれなので、勝敗の結果は明らかです。

到底負けることが無いと理解しているためか、金浜君は加藤君との対話に入ります。一応、役割としては敵対者の説得ですからね。

「なあ、加藤。お前もまさか、内藤に支配されてるわけでもないのに、こんな馬鹿なことをやってるのか？」

「バカとはなんだ！　オレにはなあ、オレなりの夢があつて内藤に味方してんだよ！」

ほう。どうやら加藤君には加藤君なりの理由があるようです。

「その夢ってのは何なんだよ」

呆れた様子で尋ねる金浜君。これに、加藤君は意気揚々と答えます。

「それはなあ。男と男による、男だけの世界を作るためだッ！」

堂々と宣言する加藤君。ですが、その意味が分からず私と金浜君は同様に首を傾げます。

「なあ、加藤。それってどういう意味なんだ？」

「分からねえか？ そりゃそうだよなあ。軟弱な女なんかと乳繰り合ってるてめえなんぞにはなあ！」

発言の節々から想像するに、なにやら悪い予感がします。

「オレはてめえらみたいな軟弱者とは違うッ！ 男同士で愛し合うことこそが、真の男ってやつなんだよッ！ そのためには、既存の軟弱者共を支配し、理解させるしかねえんだよッ！ だからオレは内藤についてんだよ！」

なるほど、なるほど。

つまり、加藤君は同性愛者であると。

そして彼は男同士で愛し合う以外の恋愛関係を認めていない。故に男女という関係性を世の中から排除するために、内藤に与している、と。

「馬鹿だろお前」

金浜君が思わず漏らした言葉に、私も激しく同意です。

14 制圧完了

加藤君が個人でどのような好みを持っていようが、それは自由にしてもらって構いません。ですが、それを他人に強要されるのであれば別です。

「金浜君。加藤君は、以前からこうなのですか？」

「いえ。地球にいた頃は、女遊びが激しいヤツだったんですが」

言っと、金浜君は躊躇いながら続きを語ります。

「ヤツはルーンガルド王国の騎士団の男たちに顔立ちが良いからと肉体関係を迫られ、それ以来恋愛対象が男性に変わってしまった、という噂があっただんですが、まさか真実だったとは」「な、なるほど」

元凶はルーンガルド王国の騎士団にあるというわけですか。

このような風紀の乱れた話、マルクリーヌさんにはとても聞かせられませんね。

「何にせよ、彼は自分の意思で内藤に協力しているようです。無力化して、拘束する必要がありますね」

「ええ。任せて下さい、乙木さん」

そう言っ、金浜君は前に出ます。

「おい加藤。戦う前に、一つだけ教えておいてやる」
「何だよ？」

「ルーンガルド王国の騎士団は高給取りだからな、ほぼ全員が女性と結婚してるぞ」

「な、何だつてええええッ！」

金浜君から齎された衝撃の事実にも、加藤君はショックを受けた様子。

「オレだけだつて言つてたあの言葉は、嘘だったのか？」

「それにさあ、加藤。世の中を変えるつて言うんなら、自分の力でどうにかしろよ。内藤のスキルに頼り切つて自分の都合のいい世界を作ろうなんて、女々しい軟弱者の発想、お前の言う男と男の世界では嫌われるんじゃないか？」

「なっ！ た、たしかに言われてみれば。お、オレは軟弱者だったのか？」

頭を抱え、悩み始める加藤君。

そこに金浜君が攻め込みます。

「スキあり！」

「ぐぼあっ！」

加藤君の顔面を一撃で正確に殴り飛ばし、意識を奪う金浜君。気絶した加藤君は、せつかくの美形な顔立ちが台無しな状態となつてしまいます。

「ふう。乙木さんの神埼への対応から学ばせて貰いましたよ。心を折つてから捕虜にした方が、その後の扱いが楽になるつて」

「な、なるほど」

「さあ、乙木さん。拘束お願いします」

「ええ、任せて下さい」

こうして無事、加藤君もダークマター入り合金製の拘束具で捕縛。後方へと捕虜として送られることとなりました。

とまあ、想定外の接敵はあったものの。

その後は無事、問題なく敵兵の説得という役割に専念することが出来ました。

半時間ほどで敵兵は完全に降伏。全ての精神支配が解除され、戦意も失われたため、敵の全軍が降伏することとなりました。

召喚者の説得を担当していた側も、無事役割を果たした様子で、全員が無事に戻ってきました。

こうして色々であったものの、最後の精神支配された敵軍との戦いが終わりました。

召喚者の動員された人数から考えると、もう内藤には味方は残っていないはずです。

残すは首都に待ち構える、内藤本人を押さえるのみとなりました。

15 バロメッツ公国首都

最後の防衛線を突破し、いよいよバロメッツ公国首都が見えてきました。

そして、この段階になってようやく異常事態に気付きます。

「首都に、人が全くいない？」

望遠鏡の他、防衛部隊が持ち込んだ様々な観測機器を使って首都の様子を偵察した結果、私はそう結論付けました。

一般市民も含め、バロメッツ公国首都には相当な人数の人間がまだ残っているものと予想していました。

しかし、首都内部には人の姿はもちろん、魔力圧、魔素量を測定する観測機器にも何の反応もありません。

これはつまり、人間サイズの生物が首都内には一切存在していないことを意味します。

首都全体に、乙木商事の機器を騙すほどの隠蔽を掛けている、とは考えられませんからね。魔王の隠蔽すら見抜く技術ですから、内藤は無論、バロメッツ公国の技術であったとしてもありえませんが、

となると、考えられることはただ一つ。

「内藤が、首都の住民を何らかの理由で外に追い出したんでしょう」

ね

私は、この異常事態について話し合うため、全員を集めた作戦会議の場にてそう発言しました。

「間違いなく、畏だろつな」

マルクリーヌさんが、厳しい表情で断言します。

「ですが、内藤の性格から考えると、そこまで回りくどい手段は使つてこないと思います。今までも、敵軍は順次こちらにぶつかってきただけでしたし」

そして金浜君が、内藤の性格を踏まえて意見を言います。

「しかし、彼奴はスキルの強さから推察するに、相当なステータスを持つはずだ。生半可な戦力を差し向ければ、間違いなく被害を受けるであろうな」

メティドバンが、部隊を首都に突入させた場合の予想を立てます。

「やはり、畏があるとしても、まずは少数精鋭で突入するのが一番でしょうか」

全員の意見を踏まえ、私はそんな結論を導きます。

「行けるとしたらオトギンとカナカナぐらいだけだね。スキルの効果から逆算すると、内藤の魔力が最低でもSSS+ランクに相当するはず。他のステータスも同等以上である可能性を考えると、畏や奇襲に対応できるのはステータスがオールSSSSに到達している

人間だけだよ」

シユリ君がこれまでの調査結果から内藤のステータスを逆算し、推測した結果、先行するのに適切な人物を絞り込んでくれました。

「なるほど。確かに安全マージンを十分に取るなら、シユリ君の言うとおりですね」

私は頷くと、金浜君の方に向かって尋ねます。

「金浜君は、この結論に異存はありませんか？」

「ええ、もちろんです。他の皆が危険にさらされるリスクを減らす為なら、俺が先行するぐらい問題ないです。それに、乙木さんも来てくれるわけです。戦力は十分過ぎるぐらいですよ」

金浜君も作戦に同意してくれました。

となれば、これで決定です。私と金浜君で先行し、畏の有無等を確認しつつ、内藤の捕縛、無力化に努める。

やはり最後は、突出した個人同士のぶつかり合いになりましたね。ステータスというものが存在する以上、仕方のないことではあります。すが。

「では皆さん。部隊の指揮、防衛は任せました。私と金浜君で、内藤の制圧に向かいます」

こうして、バロメッツ公国での最後の戦いが始まります。

16 金浜蚩一の覚悟

私は金浜君と共にバロメツツ公国首都へと突入し、大通りを直進します。

事前の調査どおり人気は一切なく、また罫の類も見られません。

警戒は依然継続しますが、それでも想像以上に手緩い状況に困惑してしまいます。

「金浜君は、内藤のことを詳しく知っているのですか？」

私が問うと、金浜君は首を横に振ります。

「いいえ。関係はほとんどありませんでした。何度が学校で衝突したことはありましたけど。アイツは補導されて停学処分になっていましたし。他のクラスメイトよりはマシ、というだけで、ほとんど関わりはありませんでしたよ」

「なるほど」

金浜君の意見を受けて、私も少し考えます。

「実は、有咲から内藤の人物像については事前に少しだけ聞き及んでまして」

「そうなんですか？ 確かに、彼女なら他のクラスメイトよりは詳しくそうですが」

「はい。有咲曰く、彼は単に暴力的、短絡的なように見えて、実際はかなり理性的だったようです」

私が言うと、金浜君は驚いたような表情を浮かべます。

「アイツが理性的、ですか？」

「ええ。と言つても、一般的な理性とは基準がかなり違っていたようです。何しろ彼は、合理的に自分と敵対する人間を作つて、積極的に暴力行為に及んでいたそうですから」

「なる、ほど。そういう方面では理性を働かせていた、というわけですか」

それを本当に理性と呼ぶのかはともかく。内藤はただ無秩序に暴力をふるい、暴れていたわけではなかったそうです。

理性ある人間と同様に知識を使い、上手く立ち回り、人間関係を利用して、しかし積極的に争いを生み出していたのだとか。

「その様はまるで、喧嘩そのものが目的だったように思えた、と有咲は言っていましたよ」

まあ、それも今になって思えば、程度の話ではあるのですが。

しかし、内藤を最もよく知る人物による評価ですから、やはり信憑性は高いでしょうね。

「喧嘩そのものが目的、ですか」

苛立ちのようなものを声色に乗せながら、金浜君は呟きます。

「もしもこの戦争が、そんな理由で起こされたものだとしたら。俺は今まで以上に、内藤のことを許せなくなりそうです」

金浜君の怒り、苛立ちも理解できません。乙木商事の部隊に限れば、ここまで人的被害は無しで順調に進んできています。

が、ルーンガルド王国の兵士の中には重傷を負い、その後の人生に影響するような後遺症を残した人も少なからず居るはずです。

当然、死者も少なからず出ているでしょう。

また、敵軍でありながらも、精神支配を受けて強制的に戦わされていたバロメツツ公国の人々。そして今も国境線で戦わされているはずの、アデルタンド王国、サダルカーン王国の兵士達。

彼らも含めれば、本当に膨大な数の人間が取り返しのつかない被害を受けています。

それが内藤個人の、それもただ争いを望むという気質に由来して起こったものだとしたら。彼は相応に恨まれることになるでしょう。

と、なれば。

今回の戦争には、ある形で決着を付けなければならない可能性があります。あります。

「金浜君。一つ聞いておきます」

「はい、何でしょうか？」

私は、覚悟を問うためにその言葉を口にします。

「君は、内藤を殺す覚悟は出来ていますか？」

その言葉に、金浜君は面食らったかのように目を見開きました。

17 死の必要性

「乙木さんは、内藤は死ななければいけないと考えているんですね」

金浜君は質問で返してきました。が、これには答えておきましよう。

「私個人の考えは関係なく、内藤の死は避けられません。これだけの大事をしかしてにおいて、無罪放免とはいきません」

「乙木さんでも、庇えませんか？」

金浜君の期待も含んだ問いに、私は首を横に振ります。

「庇えませんよ。彼程の大罪ともなれば、その恨みは相当なものです。それを私が、乙木商事の会長が庇うとなれば、復讐、報復の対象となるのは乙木商事の社員達になります。何の罪も無い社員を危険に晒してまで、彼を庇うようなことは出来ません」

「なら、内藤の死を偽装すれば」

続けての金浜君の提案にも、私は否定を返します。

「それも無理でしょう。内藤が己の罪を認め、反省し、大人しくするといふのであれば不可能でもありません。しかし、彼はいずれ再び同じことを繰り返す質の人間でしょう。結局その時に全てが露見するでしょうから、偽装する意味がありません。むしろ、世間の悪

感情を余計に増幅するでしょうね」

その言葉に、金浜君は俯きます。

たとえ罪人であろうとも、元クラスメイト。その生命を奪うというのは、酷なことでしょう。

ですが、金浜君はすぐに顔を上げて、私に向かって言います。

「分かりました。それなら、俺も覚悟を決めます。内藤に降伏するよう宣言して、説得して、それでも反省しないようなら。俺が、ヤツを斬ります」

どうやら覚悟が決まったようです。

「分かりました。ですが、金浜君が一人で背負うわけではありません。私も、内藤を殺すつもりでここに来ています。背負う罪は半々ですよ」

「あはは。そう言ってもらえると、少しは気が楽になります」

と、金浜君は口では言ったものの。本心から気が晴れた様子は無く、随分と強張っている様子。

少々心配にはなりますが、これ以上は語ってどうにかなる問題でもありません。

大人しく、内藤の本拠地。恐らくは城で待ち構える彼の下へと向かいます。

その後も罨などは一切無く、何のトラブルも無いまま城へと到達します。

そのまま唯一、人の気配のする方へと進んでいくと、私達は玉座の間の前へと到着しました。

「居ますね」

「ええ」

私が言うと、金浜君も同意し頷きます。

この玉座の間の向こうに、唯一の人の気配が。それも、隠す気もさらさらしない様子で、膨大な魔力を垂れ流しながら待ち構えています。

金浜君が先頭となって、玉座の間の扉を開きます。

そして、その先で待っていたのは。

「よう。待ってたぜエ、勇者様」

玉座に腰を掛けた内藤が、待ち望んでいたかのように言いました。

18 内藤の理由

金浜君を認識した後、内藤の視線は私の方へと向きます。

「余計なオツサンもついてきたみてえだが、まあいい。関係ねえかな」

言つと、内藤は立ち上がります。

「ほら、剣を抜けよ勇者様」

挑発するかのように、笑いながら言う内藤。その表情は、どこか楽しげにも見えます。これから起こる戦いを望んでいたかのように。

「その前に内藤、聞かせてくれ」

「ああ？ 何だよ」

「どうして、こんな事をした」

金浜君が問うと、内藤は鼻で笑います。

そして、少しだけ間を置いてから口を開きます。

「お前らは、世界が何色に見える」

内藤の、唐突な意図の分からない問い掛けに、金浜君も私も口を噤みます。

「どうやら回答は必要としていなかったようで、内藤はそのまま語り続けます。」

「俺にはずっと灰色だった。クソツタレ共と何の刺激も無い毎日を通り越すのが苦痛だった。ここは俺の居場所じゃねえんだって感じてた」

思わぬ形での内藤の自分語りにも、金浜君と共に耳を傾けます。

「けど、そうじゃねえ瞬間もあった。殴り合いの喧嘩をしてる時がそうだった。ガキの頃から、気に入らねえヤツとやり合う時間だけが、俺の生きる意味だった」

つまり、内藤にとっては喧嘩をすることだけが生きが이었다のでしょうか。

「けどまあ、そんな時間はいつまでも続かねえ。弱いものイジメなんかしたって何も変わらねえ。ちゃんとした、張り合いのある敵が居なきゃあつまんねえ。この世界に来るまでは、敵も居なくなつて最悪の毎日だったよ」

この世界に来るまでは、ということとはつまり。

「それが変わったのが、召喚されたあの日だ。俺が手に入れた力があれば、望めば望んだだけ敵が増える。上には上がいて、俺にとっては最高の場所だった」

レベルがあり、ステータスのあるこの世界。確かに内藤の言う、張り合いのある敵という存在には事欠かないでしょう。

「だから俺は思いついたんだ。最高に楽しい時間を過ごす為にはどうすればいいか。ヒントはあったぜ、勇者様。てめえだよ」

「俺が？」

「そうだ。勇者様は、魔王つてやつと戦うためにいるんだろ？ その魔王つてのは、世界を相手に殺し合う、最高に楽しい役割がある」

なるほど。内藤が望んでいるものが、少しだけ分かってきました。

「憧れたねえ。俺もそうなりたと思って思ったぜ！ だから俺は決めたんだよ、この世界の全ての敵になって、てめえら勇者様も含めた全員とやり合うつてなァ！」

言葉通り。内藤はまさに、世界を相手に戦争をする。それ自体が目的だったのでしょう。

そうして争いの最中にいる時だけ、彼は生きているという実感を得られるのですから。

「剣を抜けよ金浜ッ！ 殺し合おうぜ！ この日の為に、俺は生きてきたんだからよオッ！」

内藤に煽られながらも、金浜君は冷静なまま剣を抜きます。

「お前が、救いよりの無い人間だつてことだけは分かった」

そして、金浜君は剣を構えて言います。

「そんな理由で、罪の無い人々を犠牲にしてきたつて言うのなら。俺はお前を許すわけにはいかないッ！」

「そりゃあ嬉しいねえ！ 流石だよ、優等生の金浜君よオ！」

いよいよ、戦いが始まります。

19 内藤の実力

剣を構える金浜君に、内藤は挑発するように言います。

「余裕そうじゃねえか、金浜」

「当然だ。俺は勇者として今まで戦い抜いてきた。他人を支配して利用してきただけのお前は敵じゃない」

「それが自惚れだってこと、教えてやるよ」

言うのと、次の瞬間に内藤は、今までに溢れさせていた魔力を遥かに超える量の魔力を垂れ流しにします。

それも、勇者である金浜君と同等か、それ以上の。

そして闘気属性の膨大な魔力を身に纏い。内藤は、金浜君へと襲いかかります。

「金浜アツ！」

「なッ！」

金浜君も、私も予想外のスピードで内藤は距離を詰め、金浜君へと拳を振り下ろします。

咄嗟に金浜君は剣でこの攻撃を受けます。

しかし。圧倒的な威力で繰り出された攻撃に、金浜君本人はとまかく足場が耐えられません。

衝突した瞬間、内藤の攻撃によって金浜君の足場が砕けます。

そのまま金浜君は、城の階下へと床をぶち抜きながら吹き飛ばされます。

「どうした金浜アツ！ 勇者様つてのはこんなもんじゃねえだろッ！」

内藤は、煽る様に言います。

すると、次の瞬間。城の階下で、膨大な魔力が溢れ出ます。

恐らくは、金浜君が勇者のスキルを使い、本気を出したのでしょう。

そして同時に、階下から衝撃波が。剣を一閃した軌道そのままの魔力の塊が、内藤へと襲いかかります。

「ッハア！」

内藤は、まるでこれを待っていた、とでも言うかのように、喜色を顔一面に浮かべながら、飛んできた剣閃を拳で受け止め、弾き飛ばします。

弾き飛ばされた金浜君の飛ぶ斬撃は、玉座の間を中心にして城を斜めに切り裂きます。

轟々、と音を立てながら、斜めに切り裂かれた城が滑り、崩れ落ちてゆきます。

そんな中、金浜君は階下から飛び上がって、玉座の間まで戻ってきます。

光、炎、治癒、闘気という、金浜君が持つ全ての属性の魔力を纏った状態です。恐らく、この状態が金浜君の全力なのでしょう。風もないのに金浜君の髪は靡き、そして光を放っています。

そんな金浜君から睨みつけられている内藤は、嬉しそうに笑います。

「ハハハハッ！ いいねえ、最高だよ金浜アツ！」
「内藤ッ！ その力は何だ！」

内藤の力があまりにも強すぎる為に、金浜君は問います。正常な手段で勇者に匹敵する程の力を入れることなど、不可能です。本気を出す前とは言え、それでもSSSSというステータスを持つ金浜君に匹敵している内藤の力は異常と言う他ありません。

「知らねえのか？ スキルってのは進化するんだよ！ 俺のスキルは『洗脳調教』から『完全支配』に進化したッ！ お陰で助かっているぜエ、何しろ、支配した人間が手に入れた経験値も、スキルも、あらゆるものを俺が回収できるんだからなアツ！」
「なっ！」

内藤の言っていることはつまり。
バロメッツ公国だけでなく。アデルランド王国、サダルカーン王国、さらにはルーングルド王国に居た頃に支配した人間も含めるとすれば。

「何十万人もの人間から回収した経験値とスキルのお陰で、俺は力を手に入れた！ 見せてやるよ、金浜ッ！」

そう言っつて、内藤はステータスボードを表示、拡大し、私達に見

えるようにして表示してきました。

その数値に、私も金浜君も思わず息を飲みます。

【名前】 内藤隆

【レベル】 487

【筋力】 SSSS+

【魔力】 SSSS+

【体力】 SSSS+

【速度】 SSSS+

【属性】 闘気

【スキル】 ERROR

数値上で言えば、内藤は私達を遥かに超えるステータスを持っています。

さらには。私以外の人間で、初めてのスキル欄のERROR表示。

私という前例を考えれば、内藤はそれだけ膨大なスキルを獲得している、ということになります。

「理解したか、金浜アツ！ 遠慮なく、全力で俺を殺しに来いッ！俺は強えからなアツ！」

その言葉に偽り無く。内藤は、これまで私達が敵対したあらゆる存在と比べても、最も強力な敵であると言えます。

「それでも、俺は負けるわけにはいかないんだッ！」

金浜君は内藤のステータスを見て、さらに魔力を引き出し、自らを強化します。

ここからが、戦いの本番です。

20 正面衝突

ここに来て、ようやく内藤の狙いが分かりました。
なぜ首都に畏れも無く、住人が一人も居なかったのか。

それはまさにこの瞬間、金浜君と全力で戦う為に。金浜君が住人の命を気にして本気を出せない、なんて事態を避ける為にやったことだったのでしょうか。

「金浜アアアアアッ！」

「内藤オオオオツ！」

金浜君と内藤が、互いの名前を叫びながら激突します。

内藤が拳を振りかぶり、それを金浜君が剣で迎え撃ちます。

二人の攻撃が正面衝突して、強烈な衝撃波を発生させます。

それによって城は更に崩壊し、さらに二人は反動によって勢い良く吹き飛びます。

内藤と金浜君は、それぞれ反対方向へと吹き飛ばされ、首都の市街地と真ん中へと墜落します。

ですが、それでも二人のステータスを考えると、大したダメージにはなっていないでしょう。

次の瞬間には、内藤が吹き飛んだ方角から、闘気属性の魔力の塊

が、弾丸のように発射され、金浜君の墜落した付近へと飛んでゆきます。

雨のように降り注ぐ鬨気の弾丸を、金浜君は飛ぶ斬撃で迎え撃ちます。

二人の攻撃は空中で交差し、爆発します。その余波で、首都の市街地はまるでジオラマか何かのように簡単に壊れていきます。

まさに内藤の狙い通り、住人が居ないお陰で、金浜君が全力で応戦出来ているようです。

弾丸と飛ぶ斬撃の応酬が終わると、内藤が市街地の建物を打ち抜きながら、金浜君へと突撃していきます。

「受け止めてみなアッ！」

勢いを乗せた拳の一撃。何らかのスキルの力が乗っているらしく、拳は濃い魔力を携え光っています。

これを金浜君は剣で受け止めます。

「ぐうッ！」

「オラどうしたアッ！」

鏝迫り合いのような状態ですが、内藤が僅かばかり優勢なようです。

ここです。私に加勢するならば、このタイミングでしょう。

「金浜君ッ！」

私は声を掛けてから、自分が仕掛けることを伝えます。恐らく金

浜君なら、私が何をするつもりか把握出来ているでしょう。

私はここまで、内藤の取るに足らない存在だという認識を利用して、油断を誘っていました。

そしてここで、動きが止まっているこのタイミングでこそ、この油断を利用した奇襲は最大限有効となります。

私は瘴気と詛泥を生み出し、一斉に内藤へと浴びせます。

魔力とは異なる理によるデバフが、急激に内藤のステータスを低下させます。

「なッ！」

「ハアアアアアッ！」

当然、鏑迫り合いの趨勢は変化します。デバフの影響もあり、体勢を崩した内藤を、金浜君が一気に押し返します。

そして剣の一閃と同時に吹き飛ばしました。

内藤に飛ぶ斬撃が直撃。そのまま内藤は城まで吹き飛ばされ、その城門へと衝突して止まります。

追撃をするべく、私と金浜君で急接近すると、どうやら内藤にかのりのダメージが入っている様子。

デバフも恐らくまだ残っているはず。このまま行けば、私達の勝ちでしょうね。

21 涙の絶叫

「これで、終わりだ」

その場に倒れ伏したままの内藤に、金浜君が告げつつ剣を向けます。

ですが。金浜君はまだ覚悟が決まりきっていないのか、剣を構えたまま、迷うような素振りを見せます。

それを見た内藤が、ギリ、と歯を噛み締めます。

「おい、ふざけんなよ」

怒りの滲む声で、内藤は言います。

そして同時に何らかのスキルを発動し、今まで以上の力を身体から溢れさせ、赤く禍々しい光を放ち始めます。

「テメエは勇者だろうがッ！ 戦って、殺し合うのが役割じゃねえのかよッ！」

そして内藤は、私の掛けたデバフすら上回るバフ効果によって、無理やり立ち上がります。

「甘ったれてんじゃねえッ！ ちゃんと俺と殺し合えッ！」

「グッ！」

そして立ち上がった内藤は、金浜君に襲いかかります。拳の連撃で金浜君を追い詰めていきます。

「この期に及んで舐め腐りやがってッ！ 殺し合わなきゃあ、嘘だろうがッ！ それがテメエの役割だろうがッ！ 今更、ふざけた真似してんじゃねえッ！」

怒りのままに叫びながら、内藤は金浜君に連撃を加えます。その瞳には、僅かばかりの涙すら浮かんでいました。

金浜君は防戦一方となっており、戦況は一気に不利に傾いてしまします。

「金浜君ッ！ 私が代わります！」

私は苦戦する金浜君と入れ替わるように飛び出し、内藤の拳を受け止めます。

そして返しの蹴りで内藤を吹き飛ばし、距離を取ります。内藤は瓦礫の中へと突入し、土煙の中へと姿を消します。

「私がやりますから、金浜君は援護に集中して下さい」
「っ、分かりましたッ」

金浜君の代わりに、私が内藤を殺す。それを暗に伝えます。

「やるじゃねえか、おっさん」

瓦礫の中から身体を起こしつつ、内藤が姿を見せます。

「アンタが代わりに殺し合ってくれてるってんなら、大歓迎だぜエッ

！」

凶暴な笑みを浮かべながら、内藤がこちらに向かって突撃してきます。

「乙木さんッ！ 援護しますッ！」

すかさず、金浜君が私に対してバフを掛けてくれます。勇者によるバフ効果は相当なものらしく、私自身の身体能力が飛躍的に向上するのを感じます。

「感謝します」

それだけ言うと、正面から内藤を受け止めます。

重い拳の一撃を、私も同様に拳を出して撃ち合います。

魔力がこもった拳は、バチバチと光を弾けさせ、反発しあい、お互いに吹き飛びます。

ただ、勢いの乗った内藤の拳を、私は咄嗟の一撃で迎え撃ち、互角でした。恐らく、金浜君のバフのお陰もあり、今は私の方が内藤の力を上回っているようです。

これ以上、内藤がスキルでパワーアップする前に決着を付けましょう。

22 決着と救済

「いいぜエツ！ これだよ、コレエツ！」

内藤は興奮した様子で、再び私に向かって飛びかかってきます。今度は私も同様に、内藤に向かって駆けつつ、拳を繰り出します。

内藤の拳を弾きながら、私の拳が内藤の顔を殴り飛ばします。

錐揉み回転をしながら吹き飛ばす内藤。ですが、空中で体勢を立て直し、なんとか着地に成功した様子。

さらに追撃する為、私は内藤に駆け寄ります。

「楽しいなア、おっさん！ こうじゃなきゃな、殺し合いつてのは！ でなきゃあ、生きてる意味がねえんだよッ！」

私は興奮した様子の内藤に拳と、そして蹴りを交えた連撃で攻撃します。

内藤はここは防御に回ったようで、全ての攻撃を耐えるように、腕を交差し、腰を落として構えます。

しかし、そんな防御の上からでも、私の攻撃は確実に内藤にダメージを与えていました。

やがて防御が崩れたところで、私は内藤の鳩尾に鋭い一撃を繰り出します。

「ゴハアッ！」

内藤は、口から血を吐きながら吹き飛んでゆきます。

城を、城壁を貫通し、市街地の建物を幾つも貫き、ようやく停止します。

それを、私と金浜君は素早く追います。

追いつくと、内藤は口から血を吐きながら、瓦礫に背を預けていました。

「カハツ。良いねエ、最高の気分だぜ」

内藤は、追いついた私を見ると、ふらふらと立ち上がります。

どうやら先程までの圧倒的な身体強化には制限時間があつたらしく、身体を包み込んでいた魔力の光は消え失せています。

ダメージも相当なもので、満身創痍と言っていい状態でしょう。

「どうして。お前は、そんな状態で笑ってるんだ」

そんな内藤の姿が理解できないのか、金浜くんは苦々しい表情を浮かべて内藤に問います。

「ふん、テメエには分かんねえよ」

内藤は、そんな金浜君の問いを拒絶するように言いました。

対して私は、内藤に向かって金浜君とは異なる言葉を投げかけます。

「私には、分かるような気がします」

金浜君が驚き、内藤は納得したような視線をこちらに向けます。

「誰にも理解されない。同じ感覚では周囲の人と一緒に生きて行けない。そんな疎外感を、私は被害妄想だとも、異常なことだとも思いません。それを満たすために、足掻くという人生もまた、一つの選択なのでしょう」

私は、自分の過去に重なるような気持ちで語ります。

「ですが、それで他人を傷つけたり、厭世感のあまり孤独に陥るのには良くない。本当なら、埋まらないはずの空白を、忘れたり、代わりに埋めてくれる何かを見つけた方が良い。無理にでも衝動のまま生きるよりも、その方が幸せなこともあります」

「なんだよ、おっさん。テメエも俺が間違ってるとも言いたいのか？」

内藤の言葉に、私は首を横に振ります。

「やったことを、事実だけで言うなら確かに君は間違っている。ですが、元を正すなら、君に違う道を示すことの出来なかった人々が、我々大人が間違っていたのでしょうか。こんな結果に至った原因は、少なくとも君だけには無い」

言っと、私はダークマター製のカラビットナイフを生み出し、構えます。

「なので責任は大人が、私に取りましょう。殺し合うことしか出来ないというのなら、そうさせてしまった私達大人が、幕を下ろします」

「そうかよ」

内藤はそれだけ言うと、私の構えに合わせ、臨戦態勢を取ります。

そして、やがてどちらからというわけでもなく。同時に私と内藤は、前へと出ます。

内藤が振るった拳に、私はすり抜けるような動きでナイフを滑り込ませ、懐に入り込みます。

そのまま、ナイフを内藤の肋骨の隙間から突き立て、正確に心臓を貫きます。

「カハッ！」

致命傷を受けた内藤は、血を吐きながら、その場に力なく倒れ込みます。

「ありがとよ、おっさん」

楽しかったぜ。と、最後の言葉は掠れて消えるかのように小さく告げられました。

赤い光の無理な身体強化は、命をも消耗して発動したスキルだったでしょう。高いステータスを保持するにではあっさりと、静かに内藤は息を引き取りました。

こうして、内藤隆との戦いは終わりを告げました。

23 戦後処理

内藤の死後。スキル『完全支配』の効果は失われ、戦争を強制されていた全ての人々は開放されました。

バロメツツ公国だけではなく、アデルランド王国、サダルカーン王国の方面からも、防衛戦が終結したとの報告が上がってきます。

こうして三国とルーンガルド王国の戦争は終わりを迎えました。

ですが、内藤が残した傷跡は大きいものでした。

戦争による物資の消耗。兵士として亡くなった人々。三国は例外なく消耗しており、戦争が終わったからと言って平和な日々がすぐさま戻っては来ません。

そこで、乙木商事は戦後復興に協力することになりました。

三国への乙木商事の展開が出来るため、こちら側にも悪い話ではありません。支援金や労働力は相当に費やすことになりましたが、見返りとしては十分すぎるものが手に入ります。

無事復興すれば、乙木商事は四力国を股にかける大企業に成長します。そうなれば、今までとは比べ物にならない権力、資産、武力が手に入るでしょう。

そして戦後復興の後は、大森林自治区への進出もあります。乙木商事の未来は明るいと言えるでしょう。

一方で、内藤の死という形で戦争が終結したことで、少なからずシヨックを受けている人々が居ます。

それは、内藤のクラスメイト。召喚された勇者たちです。

これまで、彼らは一人の死者も出さずに過ごしてきました。優れたステータスにチートスキルもあり、かつ危険な戦いは金浜君達がほとんど担っていた為、幸いにも誰一人欠けることなく今までは過ごしてきました。

しかしここにきて、敵になったとはいえ、クラスメイトが死を迎えました。

それによって、彼ら是否応なしに、自分たちが暴力的な手段で死ぬかもしれない、という可能性を意識させられる羽目になりました。

これまで以上に、彼らは自分たちの未来についてよく考えることになるでしょう。

その選択次第では、乙木商事の社員として、争いの場から遠ざけ、保護する人数は増えていくでしょう。

「乙木さん！」

復興支援の指示を出し、忙しくしている私のところへ、金浜君が駆け寄ってきます。

「今回は、色々とお世話になりました。乙木さんがいなければ、どれだけの被害が出ていたか想像も出来ません。本当に、ありがとうございます」

「いえいえ。当然のことでしたまでです」

そう返すと、金浜君は真剣な表情で本題に入ります。

「これからのことですが。俺たちはルーンガルド王国に帰ることに
なりました。復興支援を手伝えなくなります」

「まあ、それは仕方ありませんよ。君たちは、ルーンガルド王国に
とって大事な戦力ですから。国外に出ている状況を長く続けたくは
ないのでしよう」

魔王軍の恐怖が未だ残っている以上、ルーンガルド王国としては
仕方のないことです。

「はい。ですので、例の件ですが。乙木さんに、全て任せてしまっ
ことになります」

「それは、当然でしょう。元より、私が全責任を負うつもりでした
ので。むしろ、金浜君が関わっていない、という体裁になる方が良
いぐらいです」

例の件。それは、召喚された勇者たちにはあまり聞かせるべきで
はない内容です。

それは、内藤の遺体を解剖し、検査、研究するという計画のこと。
以前より存在していた、勇者とは人間よりも魔物に近い存在では
ないか、という仮説を証明するための実験をする予定です。

敵とはいえ、クラスメイトの遺体がそのような扱いを受けるとな
ると相当にショッキングでしょう。

また、実験の結果によっては、さらにショックを与えることにな
りかねません。

ですので、これに関しては私が勝手に、かつ秘密裏に行う予定で
す。

金浜君としては、おそらく私だけに罪を背負わせることに負い目があるでしょう。

内藤に止めを刺した件もあり、かなりの負い目を感じているようです。

「すみません。では、乙木さんにお任せして、俺たちは先にルーンガルド王国に帰らせてもらいます」

「ええ。問題ありませんよ。任せて下さい」

そうして話を終え、金浜君は立ち去ってゆきます。

この様子ですと、もう一つの秘密についてはやはり告げない方が良さそうですね。

内藤を殺した時。私は明確に、自分自身の中に新たな力が芽生えるのを感じました。

それはスキル『完全支配』。内藤が所持していたスキルと、全く同じものを私が習得してしまったのです。

勇者が魔物に近い存在ではないかという仮説に加え、殺し合うことでスキルを奪うことになるという事実。

余りにも不穏で、常識からは外れた状況です。

戦いこそ終わりましたが、問題はまだまだ山積み。

これからのことを考えると、気持ちが重たくなります。

私は溜息を付いてから、まずは目の前のことから順に片付けてゆくことにしました。

23 戦後処理（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございます。

この話で十章は終了となります。

続きの投稿が再開されるまで、もう少しお待ち下さい。

また、再度の宣伝となりますが、現在本作のコミカライズ第2巻が発売中となっております。

是非そちらもお手にとってお読み頂ければと思います。

01 召喚者の再雇用

内藤が起こした事件から、そして内藤が亡くなってから半年が経過しました。

内藤によって荒らされた三国の戦後処理も落ち着き、また乙木商事はこの機会に便乗して店舗や工場等を三国に展開していきま

す。そうして多国籍企業となった乙木商事ですが、現在は魔王領の大森林自治区へと『魔王領本店』という建前のもと、本拠地を少しずつ移転し始めている段階です。

森林の外縁部、エッジに広がるように施設を建設し、現在は最低限の技術開発部門と生産工場が大森林自治区へと移転してきています。

当然、私と私の妻たちも全員がこちらへと移転しています。

ようやくルーンガルド王国に依存しない業務形態が実現されつつあります。

また、乙木商事の移転とは別に、多くの召喚者が大森林自治区へと移ってきました。

内藤組との争い。戦争を実際に体験し、戦いに関わる仕事を嫌が

る召喚者が一気に増えた為です。

戦後のどさくさに紛れて、全員の身柄を乙木商事が確保。そして戦争に関わらない仕事、つまり大森林自治区での新本拠地の開発を手伝って貰っています。

こうして多くの召喚者は、一般人として働くことが出来るようになりまして。

「おーい、かいちよーっ!」

開発中の土地を視察して回っていると、私を呼ぶ声がありました。振り向くと、そこに居たのは涼野さん。未だに召喚者としては珍しく、冒険者として戦いに関わる活動を続けている人物の一人です。

「どうなさいましたか?」

「ウチのパーティーメンバーの話なんだけど、少し時間ある?」

「ええ、大丈夫ですよ」

「じゃあ、歩きながら話そ!」

涼野さんに誘われるまま、開発中の森林を散策しながら話をすることになります。

密集しすぎていた木々を適度に間引くように伐採した結果、以前よりも明るくなった森林を歩きながら、涼野さんは口を開きます。

「ウチ以外のみんなが、これからも冒険者を続けるかは保留にしたの、覚えてる?」

「ええ、もちろん。涼野さんが、自分だけは冒険者を辞めないと直

接言いに来てくれたこともちゃんと覚えていますよ」

「うへへ。ありがと、かいちよー」

照れたように笑う涼野さん。

ですが、すぐに表情を引き締めます。

「結論からだけど、ウチのメンバーは全員冒険者に復帰するってさ」
「そうですね」

その決意に対して、私から掛けるべき言葉が見当たらず、少し淡泊な言葉を返してしまいます。

ですが、涼野さんは気にせず話を続けます。

「正蔵がさ、言ってたんだよね。『戦うって、全然カッコいいことじゃない。でも、だからこそ今さら投げ出したくない』って。意地張っちゃってさ」

「そうですね。ですが、その決断を私は否定しませんよ」

きつと、真山君にも複雑な感情があるのでしょうか。ですが、それを飲み込んで冒険者として活動することを選んだ。

戦争とは全く異なるとはいえ、暴力を扱う仕事を続ける決意をするのは大変なことだったはずですよ。

「かいちよーなら、そう言ってくれって思った。正直さ、ウチも正蔵のこと言えないんだよね。昔のウチって、どうしようもないヤツで、最低だったけど。そんなウチでも恵まれてた。ウチと比べてもずっと辛い思いしてる人がいるんだって思うと、やっぱりダサくてもさ、助けになりたいって思っちゃったんだよね」

恥ずかしそうに、頬を掻きながら言う涼野さん。

「多分、他のみんなもおんなじようなこと思ってると思う。で、それってやっぱりかいちよーが色々ウチらのことを助けてくれたからだっていう気持ちもあるわけ」

「それは、ええと、それほどでもないですよ」

「ふふつ。でも、ウチらはみんな感謝してるから。ありがとね、かいちよー！今日はそれが言いたかったの！」

そこまで言うと、涼野さんは駆け出し、仕事に戻ります。冒険者として、開発作業をしている人を魔物から守るために。

「じゃあね、かいちよー！」

「ええ、頑張ってください！」

手を振って走ってゆく涼野さんを、私も手を挙げて見送りました。

01 召喚者の再雇用（後書き）

お久しぶりです。

ある程度の話が書き上がったので投稿させてもらいます。
これからもコンビニおっさんをよろしくお願いいたします。

また、Narrative Worksの新作も同時に投稿が開始
されています。

『異世界チーレム転生できたけど、ヒロインが全員ギャグ漫画の世
界の登場人物なんだが?』という作品ですので、興味があればペー
ジ下部のリンクから読みに行つて頂けると幸いです。

開発中の土地を見回った後は、すでに施設の建築の始まっている場所へと視察に向かいました。

ここでは力作業が多いため、警備部門から一部の人員が出向しています。

そして同時に、内藤組との戦争で捕虜となったとある召喚者三人もここで働いています。

また、監視の意味で実力のあるジョアンさんが三人の指揮をしています。

今回は、その様子を見る為もあってここに来ました。

「ほーら、次はあつちの資材をここまで運んできて！ 三人とも、休むのはまだ早いからね！」

声を上げて、三人を指揮するジョアンさんが真っ先に見つかりました。

そして近くには、視察の目的でもある三人の召喚者がぐったりとしています。

「ち、ちくしょう。人使いが荒すぎるっつうの」

一人は野村浩一君。肩で息をしながら、倒れ伏した状態で悪態を

ついています。

「ここで立ち上がらなきゃ、漢じゃねえっ」

もう一人は神崎竜也君。野村君と同様に肩で息をしていますが、しっかりと立ち上がっています。

「はあ、せめて指導者が屈強な男性だったらなあ」

最後の一人は加藤淳也君。膝をついた状態で、他の二人と同様に肩で息をしています。が、意識は全く関係ない方向へと逸れている様子。

そんな三人とジョアンさんの方へと私は歩み寄ります。

「あっ、ダーリンっ！」

そして真っ先に私のことに気づいたジョアンさんが飛びつくような勢いで抱きついて来ます。

それを受け止めると、そのままジョアンさんが私の頬に頬ずりしてきます。

「今日はどうしたの？もしかして、俺に会いに？」

「それももちろんありますが、その三人の様子を見ていこうと思っ
ています」

私は言うと、ちゃっかりお姫様抱っこを求めてくるジョアンさんを抱きかかえたまま、三人の方へと向き直ります。

「調子はどうですか、皆さん」

「こんなもん付けてんだ、最悪に決まってるんだろ」

野村君が真つ先に言い返ししながら見せて来たのは、手首に付いているバングルのようなもの。

実はこれ、私が作った特製のデバフバングル。これを付けることで彼らのチートスキルと身体能力を抑制。急に暴れられてもある程度安全に対処出来るようになっていきます。

この影響もあって、彼らはちょっとした力仕事をするだけで疲れ果てていたというわけです。

「捕虜である以上、仕方のない処理だと思って下さい。皆さんが真面目に働いていれば、いずれ取れますよ」

「そうあって欲しいもんだな」

皮肉っぽく言いながら、加藤君が言い返して来ます。

しかし神崎君が何か言いたげな様子で、加藤君を見ます。

「どうしましたか？」

「いや、なんでも」

中途半端に否定してから、神崎君は首を横に振ります。

「駄目だな、黙ってるってのも筋じゃねえし。おっさん、コイツら態度は悪いけど、俺も含めて感謝してんだよ」

「おい、竜也！」

口を開いた神崎君を、野村君が制止しようとしています。しかし、構わずに神崎君が話を続けます。

「正直、今の待遇が最高だとは思わねえ。けど、俺たち戦争に加担して、結構な被害を出したんだろ？ だったら、最悪殺されたって文句は言えねえ。それが、コイツを付けてりゃあ働くだけで許してくれるんだから、本当は感謝してんだよ」

神崎君の言葉を、加藤君と野村君は否定しません。バツが悪そうにしていますが、神崎君の意見には同意しているようでした。

「だから、俺らは俺らなりにやり直す。ちゃんと働いて、真人間になれるって証明してやるよ。だからまあ、こいつら文句ばっか言ってっけど、許してくんねーかな」

「許すも何も、別に責めてはいませんよ。君たちは捕虜になった。だから私は監視している。それ以上でも、以下でもありません」
「けっ、めんどくせーおっさんだな」

私が言うと、最後に野村君が悪態をつきます。

が、その言葉に、言うほどの悪意が乗っていないことぐらいは、私にも分かりました。

「さて。この様子なら、ジョアンさんに任せて大丈夫そうですね。これからもよろしく願います、ジョアンさん」
「うんっ！ まかせてダーリン！」

ジョアンさんを下ろすと、私の頬にキスをしてから離れて行きます。

「さあ、三人とも！ 十分休憩出来たでしょ？ 次の仕事だよ！」

ジョアンさんの言葉に、三人同時に、三者三様の表情で嫌そうにしているのが、なんだか少し面白くて、私は笑ってしまいます。

それを最後に、この現場を後にしました。

03 救護室

建設中の施設を見回った後は、仮設の救護室へと向かいました。開発途上の拠点である以上、怪我人はどうしても数多く出てしまいます。

ですので、この場に怪我人を集め、強力な回復系のスキルを持つ人員を動員し、集中的な治療を行っているというわけです。

そして、この場に視察に来た理由は主に二つほどあります。

一つは、ここで働いている涼野さんのパーティーメンバー、仁科雪さん、鈴原歩美さん、木下ともえさんの三人に会うためです。

救護室に入ると、丁度鈴原さんが治療を終えたところでした。

「はい、これで傷は塞がりましたよ」

「ありがとうございます！」

魔物との戦いで負傷したらしい警備部門の社員が、鈴原さんに頭を下げて退出していきます。

そして、鈴原さんの傍らでは木下さんが仕事を手伝っていました。簡単な事務作業を肩代わりしているようです。

「お二人とも、仕事の調子はどうですか？」

「乙木さん？ ええ、滞りなく治療は出来ていますよ。やっぱり周囲が魔物の森ということもあって、負傷者が多いのは少し気になり

ますが」

「立地上、仕方のないことですからね。実力的に見合っていない社員は連れてきていないので、大きな怪我等は少ないはずですが」
「はい。記録上でも、大怪我を負った人はほとんど居ませんね」

私と鈴原さんの会話に、木下さんが資料を見ながら補足します。

「それに、大怪我を負った人でも私たちのスキルであれば大抵は治療できます。命さえ無事であれば」

少しだけ、暗い雰囲気の声で鈴原さんが言います。

沈黙が流れますが、私はそれを破るように話題を出します

「涼野さんから聞きました。冒険者として、活動を再開するそうですね」

私が言うと、二人ともが頷きました。

「怪我人を治療していると、どうしても考えてしまいました。私達が護衛に参加していれば、怪我をせずに済んだ人がいたはずなのに」と

「戦争があつて、ショックを受けたのは事実ですけど。大人の私たちが、生徒に守られるわけにもいきませんから」

二人の様子から、虚勢を張っているようには見えませんでした。少なくとも、冒険者としての活動再開自体は無理をしているわけでは無さそうです。

「無理はなさらないでくださいね。こちらから、可能な限りの援助はしますので」

「ええ、いつもありがとうございます、乙木さん」
「いえいえ、それでは」

二人の様子も見れたので、私は別室へと向かいます。

続けて他の救護室に、仁科さんともう一つの目的の為向かいます。
ドアを開ける前、部屋に近づいた段階で既に二人の会話が聞こえます。

「ねえ沙織、お願いだってば！ ホント近くに良い温泉があるんだから！」

「それは良いんだけど。雪、最近変なイタズラしてくるでしょ？」

「しないしない！ してもちよつとだけだから！」

「もう、結局するんじゃない。それじゃあ行かないからね？」

「もー、そんなこと言わないでよお」

姦しい二人の会話が聞こえてきますが、ここは空気を読まずに入室しましょう。

ドアを開き、挨拶します。

「お疲れ様です、仁科さん、それと沙織さん」

部屋に居たのは仁科雪さんと、ついこの間私の妻となったばかりであり、ルーンガルド王国の聖女でもある三森沙織さんです。

戦争中のひと悶着も、その後他の妻たちに紹介した時のひと悶着も、今となっては懐かしいものです。

「雄一さんっ！」

私に気づいた途端、沙織さんは飛びついて来ます。

これがジョアン君のように親愛の表現なら可愛いものなのですが、沙織さんの場合は私の体臭を嗅ぐという欲望ありきの行動なので少し複雑な心境です。

実際、抱きついた勢いそのままに私の首まわりの匂いをスンスンと嗅いでいる音がハッキリ聞こえてきます。

すっかり欲望を開放している沙織さんの様子は、当初周囲の皆さんを困惑させたものです。

しかし、そんな状態になっても仁科さんだけは変わりません。友達を盗られたような気分なのか、私相手にジェラシーを隠そうともしない表情で睨みつけてきます。

「ぐぬぬぬ、乙木さんめ。羨ましいっ！」

「スンスン。そうだ、雪！ さっきの温泉の話スンスン、雄一さんと一緒ならスンスンスン、いいですよ？」

「えっ？ いや、それはちょっと」

臭いを嗅ぎまくりながら提案してくる沙織さんに、流石に遠慮する仁科さん。

と、こんな話をしている場合ではありません。

「仁科さん。聞いておきたいことがあるのですが」

「ん？ なんですか？」

「涼野さんから、冒険者に復帰すると聞きました」

「ああ、なるほど」

納得したように頷くと、仁科さんは即答します。

「沙織が戦うなら、私も戦います。だから遠慮なく、今まで通り依頼をしてくださいね、乙木さん！」

「どうぞやら、心配は必要無さそうですね。」

「ええ。分かりました」

では遠慮なく、これから冒険者としての皆さんに頼ることにしましょ。

04 聖女の行方

さて、次は沙織さんへの用事です。

「もうひとつ用事があるのですが、沙織さん」

「スンスン、あ、はい？」

「嗅いでないで、すこし真面目に話を聞いてくれますか？」

「分かりました」

お願いすると、ちゃんと沙織さんは嗅ぐのを止めて一度離れてくれます。

「ルーンガルド王国から、行方不明の聖女について質問状が届きました」

私が言うと、沙織さんはようやく真剣な表情をしてくれます。

「ついに、ですか」

「はい」

「じゃあ、こうしていられるのも終わりですね」

寂しそうに言う沙織さん。

ですが、私は首を横に振って否定します。

「いいえ。こちらはまだ聖女様を発見出来ていないという旨を返信

しておきましたよ」

「えっ？」

「ですので、これからも側に居てくれますか、沙織さん」

私が言うと、沙織さんは少しだけ涙ぐみ、そのまま笑顔を浮かべます。

「ありがとうございます、雄一さん」

「当然のことです。貴方はもう、私の妻なのですから」

言って、私は沙織さんを抱き寄せます。

「ただ、王国が沙織さんの力を頼りにしているのは事実です。そして私が疑われているのも事実。なので、この問題は少しずつ解決していかなければなりません」

「はい」

「ゆっくりと、王国との間で妥協案を探っていきます」

「はいっ」

「なので、安心してください。絶対に、王国には帰しませんので」

涙を流す沙織さんを、私は抱きしめたまま宥めます。

沙織さんが泣き止むまで、そのまま沙織さんを抱きしめ続けました。

その後、沙織さんが泣き止んだので話を続けます。

「一応、今後王国との取引材料を色々と用意してから沙織さんの存在について公表するつもりです。王国にとっては自国の利益の方が

大事でしょうから、相応のものを用意すれば認めてくれるはずですよ」
「そうですね。王国が躍起になって取り込もうとしていたのは、治癒の力を持つ私よりも、戦う力のある三人の方でした。特に金浜君に固執していたので」

「ええ。とはいえ時期が悪い。戦後復興のタイミングなので、聖女という治癒能力の高い存在は政治的なアイコンとして便利に使えると考えているでしょう」

私の予想する、王国のスタンスを話に挙げます。

「なので、復興が落ち着いた頃に王国との交渉に入るつもりです。この話は金浜君にも通しているので、協力してくれるはずですよ。勇者として順調に、王国内で発言力を高めているようですし、力強い味方になってくれるはずですよ」

最近の金浜君からの連絡や乙木商事の支社が拾ってくる情報から推察すると、間違いなく金浜君の地位は向上しています。

単なる力ある一個人から、王侯貴族の一員として。順調に、段階を踏みながら足場を固めていつているようです。

「ですので、今は安心してここに居てください、沙織さん」
「はいっ！」

嬉しそうに、笑顔で頷く沙織さん。

こうして笑ってくれるなら、王国を相手に立ち回るのも悪くはありませんね。

05 家族との休息

一通りの視察も終わり、私の家族が住まう為に建てられた屋敷へと帰ってきます。

ルーンガルド王国に本拠地があった頃は、コンクリート製の現代建築風の自宅でしたが、立地が大森林自治区というのもあり、今の屋敷は木材を使った日本家屋風の屋敷になっています。

妻たちにも異国情緒がありつつ落ち着ける雰囲気が良いと好評の新しい屋敷です。

「おかえりなさい、雄一」

私が帰ってくると、最初に出迎えてくれるのは有咲。

妻たちの中で決まり事でもあるのか、必ず出迎えは有咲が行ってくれます。

「ただいま、有咲」

「視察、どうだった？」

「どこも順調そうだったよ」

その後、有咲に視察した状況について話します。

有咲のスキル『カルキュレイター』は既に私の想像を絶するレベルで成長しており、私の報告も含め、様々な情報を仕入れては各所に正確な指示を出してくれます。

互いにスキルを共有する魔法陣を刻んでいるため、一応は私も同じスキルを使えるのですが。負担があるために常用は出来ないのと、その影響で慣れに違いがあるため、使いこなすことは出来ていません。

なので近頃の乙木商事の発展は、有咲の活躍無しではあり得なかったと言えるでしょう。

話しながら屋敷の居間に向かうと　まだ仕事であるジョアンさんと沙織さん以外の、私の家族が全員揃っていました。

妻であるマルクリーヌさん、シャーリーさん、マリアさん、八色さん。なんやかんやあり、婚約状態の魔王ヴラドガリアさん。義理の息子と娘であるティオ君とティアナさん。養子となったローサさん。

そして一人、部外者ながらヴラドガリアさんに意地でも付きそうサテイーラさんが居ます。

「皆さん、ただいま帰りました」

「おかえり、雄一殿」

マルクリーヌさんが最初に返事をしてくれます。

「雄一様、どうしたんですか？　少し表情が優れないみたいですが」

そして、マリアさんが私の様子を気遣ってくれます。

「涼野さんの冒険者パーティが、全員復帰するという話をしまして。難しいものだな、と」

私は今日あったことを簡単に要約して告げます。

彼女達は全員が自分の意思で復帰するのです。止める権利はありません。

ですが可能なら、冒険者をせすとも済むようにしたかった、という気持ちもあります。

「相変わらず、誰かの為のことで悩んでいるんですね」

シャーリーさんが寄ってきて、よしよし、と私の頭を撫でてくれます。

「パパ、がんばってる」

「パパ、優しい」

そしてテイオ君とティアナさんが左右から私に抱きついて来ます。それを受け止めると、ローサさんが続きたそうにこちらを見ているのに気付きました。

「ローサさんも、こちらにどうぞ」

「う、うんっ！」

私が呼ぶと、ローサさんも嬉しそうにこちらへ近寄ってきて、正面から抱き着きます。

三人を抱きしめっていると、ヴラドガリアさんがそれを見て口を開きます。

「うむうむ。仲良きことは良いことじゃ」

「そうですね？ 何だか邪な気配を感じますが」

ヴラドガリアさんの言葉を、サティーラさんが訝しみます。

まあ、確かにティオ君とティアナさんは私のお嫁さんになりたいと度々発言しているので、間違いではないでしょう。

その後、雑談をしているうちに風呂の準備が出来たということが入浴に向かいます。

私と一緒に風呂に入る担当を妻たちでローテーションしているらしく、今日は八色さんが担当です。

屋敷の雰囲気に合わせて作った、木組みの立派な湯船に浸かっていると、後から八色さんが入ってきます。

「旦那様、お背中流しますっ！」

「はい。よろしくお願いします」

最初はこうして背中を流されることにも慣れませんでした。今ではある程度平常心で受け入れることが出来ます。

まあ、偶に平常心が失われるのはご愛嬌です。

入浴を終えて戻ると、仕事の連絡を受け取った有咲から話がありました。

「雄一。シュリヴァさんから連絡が来てたよ」

それは、私が頼んでいた重要な案件の連絡でした。

「内藤の遺体の、分析結果が出たって」

いよいよ、召喚者の謎に迫る時が来ました。

06 解剖の結果

翌日、連絡を受けたため、詳細を聞く為にシュリ君と松里家君に連絡を取ります。

乙木商事の技術の粋を集めて作った長距離通信機を使い、ルーンガルド王国の研究所の二人に繋がります。

『ひさしぶり、オトギン』

『お久しぶりです、乙木さん』

「こちらこそ、お久しぶりです」

内藤の遺体の分析を任せて、私たちだけで大森林自治区に来てしまいましたからね。二人とは声だけとはいえ、本当に終戦直後以来になります。

『さっそくだけど、分析結果について報告するね』

「はい、よろしく願います」

いよいよ、待ちに待った分析結果が知れるとなると緊張してきますね。

『結論から言うと、やっぱり召喚者はほぼ百パーセントの確率で人間じゃないね』

「やはり、ですか」

予感はしていましたが、改めて断言されるとやはり動揺してしまいますね。

『解剖した結果、内蔵や体組織、骨格までも形だけは人間そのものだったけど、血液や細胞を分析に掛けたらやっぱりどこも厳密には人間のものとは違うっていう結果が得られたからね。特に、死後もまるで生きているかのように様々な耐性が残り続けるっていう特性は、魔物のものにそっくりだった』

「ホムンクルス技術等、他の可能性はどうですか？」

『無いね。ボク自身がホムンクルスの身体だから分かるけど、体組織そのものはほぼ人間と変わらないのがホムンクルス。他にもメッティから貰った類似技術のデータと比較しても、やっぱり一番近いのは魔物だったよ』

ちなみに、メッティとはメティドバンの愛称だそうです。

そして、メティドバンも少量の血液だけを預かって、こちらで簡易分析を行ってくれたのですが、その結果もメティドバンの知る人造技術とは一致しないというものでした。

『で、ここからが一番大事なところ。体組織がほぼ魔物のものと同等だということは、魔物と同じような特性があっても不思議じゃない』
『い』

「具体的には？」

『今、一番危惧してるのは進化だね。魔物は環境や経験によって、世代交代を経ずに急激な進化を果たすことがある。もしかしたら、召喚された勇者たちにも同じことが起こるんじゃないか、ってね』

それは、つまり。

「我々は、ある日突然人から逸脱した化け物に変わってしまう可能

性もある、ということですね？」

『否定はしないよ。もちろん、進化自体が限られた魔物にのみ見られる現象だから、そこまで高い可能性では無いけど。起こったら困る問題としては筆頭になっちゃうね』

正直、想像以上にショッキングな内容ですね。

「シュリ君。このことは内密にお願いします」

『そうだね。確定したわけでもない情報で、召喚者を無意味に怯えさせる必要は無いとボクも思うよ』

知られたら、間違いなく大きな混乱が起こるでしょう。

少なくとも対処方法を考えてからでないと、伝えても無意味な騒動に発展するだけです。

『一応、本当にそんな可能性があるのかどうか、まつつんの体組織を培養して比較実験してるところ。でもまあ、進化する魔物とそうでない魔物の違いについての先行研究はあるんだけど、正直信憑性が微妙なものが多い。ほぼ一からの研究になっちゃうから、ちょっと時間はかかるかもね』

「それでも、調べて頂けるだけありがたいです」

私には手を出せない領域の話なので、つくづくシュリ君が味方でいてくれて良かったと思います。

『で、こっちはこっちで研究を進めはするんだけど、それ以外にも情報収集する手段はあると思うんだよね』

「それ以外、ですか？」

『うん。魔物の進化について知りたいなら、魔物に聞けばいいんだ』

『お』

シュリ君はそう言って、私にやって欲しいことを告げます。

『現在生存している最古の魔物と言われている、龍の里の龍神様。彼なら魔物の進化について。あるいは、過去に存在していた勇者についての知識があるかもしれない。オトギンには、その龍神様のところを訪ねて聞き取り調査をして欲しいんだ』

どうやら、私にも出来ることがあるようです。

07 シャーリーの過去

シュリ君と松里家君との通信を終え、私は妻たちを集めて話をします。

召喚された勇者が魔物のように進化をして、異形の姿になってしまふ可能性があること。そして、それに関連する情報を知っているかもしれない、最古の魔物である龍神様に会いに行くこと。

これらを告げると、全員が複雑そうな表情をしていました。

が、その中でも一人。シャーリーさんだけが、意を決したような表情を浮かべ、口を開きます。

「雄一さん。実は今まで黙っていたことがあります」

「はい」

私は、シャーリーさんと向かい合います。

「実は。私、その龍神様を祀る、龍の里の出身なんです」

その言葉に全員が驚きます。

中でも、マルクリー又さんが驚きのあまり疑問を投げかけました。

「龍の里の民は、龍神と対話する為に特化したスキルを継承し続ける為、里から外に出ることは無いと聞いている。それなのに、シャ

「リー殿はその龍の里出身なのか？」

「はい。私は、里一番の出来損ないでしたから」

シャーリーさんは、悲しげに顔を俯向け、話します。

「龍の里の民は、みんな龍神様と対話をする為のスキルと、龍神様から溢れる膨大な魔力から身を守るスキルを持って生まれます。ですが私は、対話をする為のスキルしか持たずに生まれました」

「それは、そうか」

「はい。物心付いた頃には、もう龍神様の魔力に酔って、まともに暮らせない状態でした」

想像だにしないシャーリーさんの過去に、私たちは全員言葉を失います。

「龍の里の姫巫女としての努めも果たせない上に、身体も弱くては里に置いておけない。そう判断した大人によって、私は里から追放されることになりました。それからは紆余曲折ありましたが、龍神様と対話するスキルを応用すると、難解な内容の書籍や書類でも、その意味や意図をある程度理解できる、ということが分かりました。それを活かして、冒険者ギルドの受付嬢として働くようになったんです」

そうして、私と出会ったというわけですね。

「なるほど。苦労されていたんですね」

「いえ。里から追放されたと言っても、お陰で今は魔力に酔ったりすることもなく健康に暮らせていますから。これで良かったんだと思います」

言つと、シャーリーさんは顔を上げて私に提案します。

「それよりも雄一さん。こんな私でも、一応は龍の里と縁がありま
す。普通に訪れても門前払いを受けるでしょうけど、私が一緒なら
少なくとも話ぐらひは聞いてくれると思います」

「それは、いいのですか？」

ありがたい申し出ですが、シャーリーさんにとっては苦しい選択
のほずです。

例え恨みが無いのだとしても、かつて追い出された故郷ともなれ
ば、心境は千々に乱れることでしょう。

「はい。龍神様と雄一さんが会わなければいけないのなら。私に出
来る精一杯のお手伝いをしたいんです！」

決意を秘めた目で、シャーリーさんは言います。

心境としてはシャーリーさんを大変な目に遭わせる可能性がある
以上、心苦しいのですが。

しかし、やはり妻の決意を否定するわけにもいきません。

「分かりました。お願いできますか？」

「はいっ！ お任せ下さい、雄一さんっ！」

こうして、龍の里への案内を、シャーリーさんに任せることとな
りました。

07 シャーリーの過去（後書き）

ここまでで第十一章は終わりです。

面白かった、という方は、よろしければ評価ポイント、いいねボタンの方を押して頂ければ幸いです。

次は第十二章になります。

まだ書き貯めた分があるので、投稿は続きます。

また、現在Narrative Worksの新作が同時に投稿されています。

『異世界チーレム転生できたけど、ヒロインが全員ギャグ漫画の世界の登場人物なんだが?』という作品です。

もし興味がありましたら、ページ下部のリンクから読みに行ってくださいと幸いです。

01 里への旅路

乙木商事の長距離輸送用車両を借りて、龍の里へと向かいます。

その道中で、シャーリーさんから詳細な話を聞き出しました。

「龍神様と会話する為に必要なスキルは『精霊言語』といって、元々は精霊や神様に類する存在が私達とコミュニケーションを取る為に使っているとされる言葉です。精霊言語は言葉ではなく、意味そのものが伝わる言語と言われていて、相手と自分がどんな言葉を発しているか、正確に伝えたいことがそのまま伝わるそうです」

聞いてみれば、龍の里の民が使うスキルはかなり特殊なもののようにです。

「そして、私が持っているスキルは『精霊眼』。意味そのもので情報のやり取りをする、精霊の性質をそのまま発動できるスキルで、精霊言語よりも広い範囲で意味そのものが伝わり、私の近くに居る人も、私を仲介するような形で精霊言語と同じ力を発揮出来ます」
「それは、つまりシャーリーさんのスキルは精霊言語の上位スキルということでしょうか？」

「かも知れません。龍の里でも初めて見るスキルだったそうなので。ただ、私はもう一つのスキルがありませんでした。なので、上位スキルであったとしてもあまり意味の無いことです」

普段の生活では役に立つんですけどね、と苦笑するシャーリーさん。

「龍の里の民が持つもう一つのスキルは『魔力吸収』。周囲の魔力を吸収して、自分自身のものとして蓄えるスキルです。龍の里の民はこのスキルのお陰で、龍神様の魔力から守られ、同時に沢山の魔力を蓄え、精霊言語の発動訓練をたくさんこなすことが出来ます。私はこのスキルが無かったので、龍神様の魔力に耐えられませんでした。里を追放される一番の理由になりました」

「精霊言語がそんなにたくさん魔力を必要とするなら、精霊眼も発動させるのは大変なのでは？」

「それが、精霊眼にはほとんど魔力を使わないんです。生まれつきの身体の性質に近いといえますか、基本的には自然に、負担なく発動できます。誰かの仲介をする時は少しだけ魔力を使いますが」

聞けば聞くほど、シャーリーさんの持つスキルは精霊言語の上位スキルであるように感じてしまいます。

生まれが龍の里でなければ、あるいは龍神から漏れ出す魔力に耐えられるスキルがあれば。話は大きく変わっていたのでしょうか。

たればの話に意味はありません。が、第三者が無責任に感想を抱くとすれば、もったいない、の一言に尽きるでしょう。

「あ、ほら！ 雄一さん、見えてきました！」

助手席で興奮した様子で指差すシャーリーさんの視線の先には、大きな山岳がありました。

ルーンガルド王国のほぼ北限に広がる山岳地帯。その一角に、龍の里は存在しているそうです。

ただし、龍神の魔力があらゆる生物に自然と忌避感を抱かせる為、環境に適応した生物以外は自然とたどり着くことがほぼあり得ない

のだとか。

ここに至るには、場所を知っている人物による案内を受けるか、あるいは龍神の魔力に抵抗できるだけの力を持つかをする必要があります。

幸い、私たちはその両方を兼ね備えている為、里の発見には苦勞しませんでした。

山岳の麓に広がる、閑散とした森。その一部分は切り開かれており、里へと続く道が整備されています。

ルーンガルド王国の上層部が訪れることもあるため、整備されているのでしよう。

馬車を通るに十分な大きさがあるため、乙木商事の輸送車両も通行可能なはずですよ。

「このまま、集落までまっすぐ進みましょう」

「はい！ 里の人たちとの交渉になったら、任せてください！」

力こぶを作るような仕草でやる気を見せてくれるシャーリーさんに、つい笑みがこぼれてしまいます。

こんな素敵な女性に、妻に不快な思いをさせたくありません。

交渉の状況次第では、私が前に行くべきでしょうね。

密かに覚悟を決めた上で、輸送車両を走らせます。

02 里長との面会

龍神の魔力と思われるものが、進むほどに濃くなっていきます。

「シャーリーさん、体調はどうですか？」

「はい、問題ありません。コレもありますし」

言って、シャーリーさんはペンダント型の魔導具を掲げます。

シャーリーさんが龍神の魔力で体力を崩さないよう、周囲の魔力の影響を遮断、軽減するような効果を発揮する魔導具を作り、装着してもらっています。

これがあれば、少なくとも集落の中での行動ぐらいでは体調を崩すことは無いでしょう。

そんなやり取りをした直後。見通しの悪い林道を徐行する輸送車両の前に、戦士らしい装備に身を包んだ集団が姿を表しました。

「何者だ！ ルーンガルド王国の許可無き者はこの先に進むことを許されない！ 即刻引き返せ！」

先頭に立つ、リーダーらしい立派な装備に身を包んだ男性が声を張り上げます。

それを見て、驚いた様子のシャーリーさん。

車両の窓から身を乗り出し、手を振って声を掛けます。

「お父さんっ！ 私だよ、シャーリー！ 話したいことがあるの！」

その言葉に、相手方のリーダーや私も含めた、全員が驚きを表情に浮かべます。

「シャーリー、なのか？」

「はいっ！」

「っ、事情は分らんが、ひとまずここで待て！ 里長の判断を仰ぐ！」

そうして、リーダーこと、シャーリーさんの父親は一人で森の奥へと走って行きました。

残された戦士たちは私たちを、というより見たことのない乗り物である輸送車両に警戒しているようで、鋭い視線と気配を緩めるつもりが無いようです。

「なんとか、上手くいきそうですね」

「だといいいですが」

シャーリーさんは確信があるのか、笑顔でそんなことを言いました。

しばらくすると、シャーリーさんの父親が戻ってきます。

「里長の所へ案内する。その魔導具はこの場に置いていってくれ」

あちら側からすれば、輸送車両の危険度が測れない以上、当然の

判断でしょう。

輸送車両を降りて、そのままシャーリーさんの父親について進みます。

やがて龍の里に到着します。周囲を木の柵で覆った、簡素な守りに囲まれた集落に見えます。建物も、この森で手に入る素材だけで作られているようで、あまり近代的ではない様子。

案内されるがまま、扉の無い門をくぐって龍の里へと入ります。

奥に進むと、一際大きな建物があり、どうやらそこを目指している様子。

「件の者たちを連れてきた」

シャーリーさんの父親が言うと、扉を守っていたらしい兵士は脇に寄って、扉を開きます。

そのまま扉をくぐり、中へと案内されます。

到着したのは、いかにも里長といった風貌の、里で取れる素材で出来ていると思われる装飾品に身を包んだ老人でした。

「よく来たね、シャーリー。それと、お客人」

里長は、私と、そしてシャーリーさんも歓迎するように口を開きます。

「お久しぶりです、里長」

シャーリーさんも里長には含む所が無いのか、笑顔で対応します。

03 事情説明

私の驚きを察してか、シャーリーさんはこちらを向いて説明してくれます。

「里長は、私に良くしてくれた数少ない方々の内の一人なんです」

それを聞いて、里長も口を開きます。

「シャーリー。君のスキル『精霊眼』は我々の未来、可能性を示したのだ。無下にする由も無かるう」

どうやら里長は、シャーリーさんのスキルが特別なものであると認識しているようです。

「さて、お客人。お名前を伺ってもよいかな？」

「はい。乙木雄一と申します。シャーリーさんは私の妻で、今回、私が龍神様に聞きたいことがあるため、里との仲介の為に付き添って頂きました」

「ほう、龍神様に。それは随分、特別な事情のようだ」

そのまま、私は里長に細かな事情を説明します。

私を含めた、沢山の勇者がルーンガルド王国によって召喚されたこと。

勇者とは何なのか、研究を進めたところ、どうやら魔物に近い存在であると判明したこと。

その為、魔物について最も古くから知識を蓄えてきたであろう龍神から様々な情報を聞き出したいこと。

これらを順を追って説明すると、里長は難しそうな表情を浮かべます。

「ううむ。これは私が勝手に判断して良いものではありませんな」

言つと、里長は隅に控えていたシャーリーさんの父親に視線を向けます。

「サヴァンよ。誰か姫巫女を呼んで来てくれたまえ」

「はっ」

言われてシャーリーさんの父親、サヴァンさんは外へ出ていきます。

「さて。サヴァンが戻るまでの間。シャーリーが外でどのように暮らしているのか、教えて頂けませんか」

表情を緩める里長。

本当にシャーリーさんの近況を知りたいというのもあるのでしょうが、私の人となりを知るといふ目的もあるのでしょうか。

私は頷き、話を始めます。

「そうですね。では、シャーリーさんと住んでいる現住所の話から」

その後、程々にシャーリーさんと私の私生活のある程度話し終えたところでサヴァンさんが戻ってきました。

その後ろには、一人の女性が居ます。

「里長。姫巫女をお連れしました」

「ご苦労、サヴァン」

姫巫女が前に出て、里長に頭を下げます。

「ネール、ただいま参りました」

「うむ。実は龍神様にお伺いしなければならなかったことがあってな」

里長はそう言うてから、姫巫女のネールさんに事情を説明します。

その最中、ネールさんは時折シャーリーさんを睨むような視線を送ってきました。

どうやら、あまり良くは思われていない様子。

里長のように好意的な人物も居る一方、ネールさんのようにシャーリーさんを疎む人物も居るでしょう。

そして、里の多くの人はネールさんと同様の態度を取るのでしょうか。

「どうかね、引き受けてくれるか？」

里長の説明が終わり、ネールさんに問い掛けます。

「承りました」

思いの外、あっさりとネールさんは龍神への伝言役を引き受けてくれました。

その後。龍神からの返答を貰うまでに時間が掛かるそうので、この日はひとまずシャーリーさんの実家で一泊させていただくことになりました。

サヴァンさんに案内されながら、シャーリーさんの実家へ向かいます。

「シャーリー」

「はいっ」

道中、それまで黙りっぱなしであったサヴァンさんが口を開きま

す。

「外の暮らしはどうだ」

「えっと、楽しく暮らせてるよ。雄一さんも良くしてくれてるし、仕事も楽しいんだ」

シャーリーさんは本心からそう思ってくれているようで、笑顔で楽しそうに語ります。

「そうか」

サヴァンさんの答えはそれだけでした。

反応の薄いサヴァンさんに、シャーリーさんは少しだけ悲しげに俯きます。

ただ、私にはサヴァンさんが、何か安堵して表情を緩めたようにも見えました。

あまり他所の家庭の事情に口出しをするのも良くないかと思いましたが、このまま放置するのも良くなさそうです。

私は何か声を掛けようと考えますが、そこでちょうどシャーリーさんの実家に到着してしまいます。

「ここが我々の家だ」

言つと、サヴァンさんは扉を開いて中に入ります。

すると入れ替わるように、家の中から一人の女性が飛び出して来ます。

「シャーリーっ!」

「お母さん!」

飛び出してきた女性はシャーリーさんの母親であるらしく、そのまま勢いよくシャーリーさんを抱きしめます。

シャーリーさんは困惑している様子ですが、母親の方は構わずシャーリーさんに声を掛けます。

「大きくなったわね。ご飯も、ちゃんと食べてるのね。顔色も良いし、よく肥えてるわ」

「もっつ! 肥えてるなんて、失礼だよお母さん!」

「うふふ、そうね。ごめんなさい。シャーリーも大人の女性だもの

ね

娘の成長を噛みしめるように言ってから、シャーリーさんの母親はこちらに向き直ります。

「はじめまして。私がシャーリーの母。シエラです」

「ご挨拶が遅れました。私はシャーリーの夫、乙木雄一です。今日はよろしく願います、シエラさん」

「ええ。ゆっくりしてってくださいな」

シエラさんは私たちを歓迎してくれている様子。

「良ければ、外でのシャーリーの暮らしぶりについて教えてくださいいな」

「ええ、もちろん」

こうして、トラブル無く私たちは迎え入れてもらえることになりました。

その後、夕食をシエラさんが準備する間、私とシャーリーさんは手持ち無沙汰になりました。

せっかく時間がありますのでシャーリーさんと色々話し合いをしておきたいところです。

「シャーリーさん、少しお話したいことがあるのですが、いいでしょうか？」

「えっと、はい。秘密の話ですか？」

「まあ、どちらかといえば」

「では、私の部屋でししょうか」

そうして、私はシャーリーさんの部屋に案内されました。

05 家族関係

シャーリーさんの部屋で二人きりになると、私はさっそく本題を切り出します。

「聞きたいのは、シャーリーさんの家族との関係についてです」「そう、ですか」

言つと、シャーリーさんは少しだけ躊躇つような様子を見せました。

「まずは、サヴァンさんとの関係についてです。親子関係は良好と言える状態でしょうか？」

「どうなのでしょう。お父さんは、あんまり私に興味を持ってくれないので」

悲しげに、シャーリーさんは言います。

「昔からそうなんです。時々、簡単な質問はされるんですけど。それを聞いて、何か言ってくれることは無くて。叱られることも、文句を言われることもあまりないけど、褒められた記憶も無いんです。会話が続いたこともあんまりなくて。少しだけ、言いたいことを言ったらもう関係ない、って感じで。私は、お父さんがどう思ってるのかわからないんです」

だから関係の良し悪しは判断できませんね、と、ごまかすように
呟くシャーリーさん。

その悲しげな様子に、こちらまで悲しい気持ちが伝染するかのよ
うです。

これ以上サヴァンさんとの関係を掘り下げるのもシャーリーさん
には辛い話になりそうなので、次の話題に移ります。

「ではシエラさんとの関係は？」

「お母さんは、いつでも私に優しくしてくれました。里の誰よりも
すごい、特別な才能を持って生まれたんだって」

言葉は前向きなものでしたが、声色はどこか暗く、あまり良い感
情を抱いていない様子。

「それに対して、シャーリーさんはどう思っていたんですか？」

私が問うと、一息吐いてからシャーリーさんは答えます。

「私は、巫女のなり損ないなので。いつも励ましてくれるお母さん
の期待に答えられないのが、ずっと辛かった」

泣きそうな声で、シャーリーさんは言います。

「本当に私に、そんな特別な力があるなら。もっといろいろなこと
を上手にできて。巫女として認められたかもしれないのに。それが
出来ないのが、なんだか、私がダメだから、優しいお母さんを裏切
っているみたいで、ずっと苦しかったです」

一際悲しげに語るシャーリーさんの肩を抱き寄せ、背中を擦りま

す。

「辛かったですね」

「はい。どうして私は、お母さんに何も返せないんだろう。大好きなのに。それが言葉だけ、形だけになったみたいで。私は本当は、お母さんのことを大事に思っただけじゃないかって。いつも後悔と、自省ばかりで。悲しかった。そんな自分が、嫌だった」

涙を流すシャーリーさん。

その涙を拭いながら、私は考えます。

きっと、いいや間違いなく。シャーリーさんとご両親は、お互いを愛し合っている。それなのにこんなすれ違いで悲しい思いをしななければいけないなんて。

そんなのって無いでしょう。

どうにか、シャーリーさんにご両親の思いを伝えられないでしょうか。

表面的な言葉だけでなく。本心から愛しているのだと、シャーリーさんが信じられる何かが無いか。

そんなことを、つい考え込んでしまいます。

このまま何も知らないフリをして、龍神と対話してそれっきりというのはいくつまでいっていいでしょう。

私は、シャーリーさんとご両親の思いを仲介する決意を固めました。

06 父の後悔

シャーリーさんとの話を終えた私は、まずはサヴァンさんと話をしに向かいました。

どうやら家の裏手で剣術の自主訓練をしている様子で、今は素振りをしているところでした。

「サヴァンさん」

私は、サヴァンさんに呼び掛けます。

すると素振りを中断し、こちらを向いたサヴァンさん。

「どうなされた、雄一殿」

「少し、お手合わせ願えませんか？」

言いながら、私はそこらに置いてある訓練用の木刀のうち、普段自分が使うカランビットナイフに近いサイズのを両手にとって構えます。

「ほう。雄一殿も戦いを？」

「ええ、まあ。スキルを使った搦め手が得意なので、剣術自体はそれほどでもないのですが」

「ご謙遜を。構えが堂に入っています」

サヴァンさんも興味を示したようで、木刀の切っ先を上げて構え

ます。

「一手、宜しく頼みます」

「ええ、こちらこそ」

こうして、私とサヴァンさんのスパージングのようなものが始まりました。

高すぎる私のステータスを大きく制限し、有咲から借りている『カルキユレイター』の力も最低限に制限して、それで私とサヴァンさんの立ち会いは五分か、少し私が有利なぐらいでした。

今の制限付きでも私はSランク冒険者並みに戦えると自負しておりますので、おそらくサヴァンさんもそれぐらいの実力者なのでしょう。

里の戦士のリーダーのような立場にあるのも納得です。

やがてどちらからともなく剣を止め、立ち会いを終わめます。

「ありがとうございました、雄一殿」

「いえ、こちらこそ良い運動になりました」

「娘は、良い戦士に嫁ぐことが出来たようですね」

納得、あるいは安堵したようにサヴァンさんは言います。それを見て、私は一つ聞いてみることにしました。

「シャーリーさんを、とても大切に思っているんですね」

「ええ。可愛い一人娘です。幸せになってもらいたい」

その言葉に、私は安堵します。

やはり、サヴァンさんはシャーリーさんを愛している。

「直接、伝えてあげないのですか？」

私が問い掛けると、難しい顔をしてサヴァンさんは答えます。

「私は、良い父親になれなかった。今更、そのような態度で接するわけにもいきません」

やはり、すれ違いを起こしているようです。

「私のような若造が口を出すのもどうかと思いましたが、一つだけいいでしょうか」

「む」

顔を顰めるサヴァンさんに、続けて言います。

「それは、シャーリーさんから直接言われたのですか？ 悪い父親だと。あるいは、今更構わないでくれと」

「いえ。ですが、あの子は私との会話を避けているようなので」「直接聞いたわけではないんですね？」

重ねて問われ、サヴァンさんは渋々認めるように頷きます。

「対話は、言いたいことを言い終えれば成り立つというものでも無いと思います。まずは、シャーリーさんに聞いてみてはどうでしょうか」

「聞く、ですか」

「シャーリーさんが何を、どのように思っているのか。サヴァンさんの想像ではなく、本人から直接聞かなければ分からないことも多いでしょう」

きつと、言葉が足りなかったのでしょうか。伝えるべきことは伝えつつもりだったのでしょうか。

例えば、今日のこと。

『外の暮らしはどうだ』

あの質問が、サヴァンさんにとっては娘のことを心配している意思表示のつもりだったのでしょうか。でなければ、こんな質問はしない、という理由で。

『そうか』

あの返答も、サヴァンさんにとっては最大限娘を尊重したつもりで発した言葉なのでしょう。

ですが、伝わっているかどうか。それは相手の話を聞かなければ分からないことです。

「サヴァンさんは、まずはシャーリーさんの思いをしっかりと聞き出して、ズレを修正するところから始めるのが良いんじゃないでしょうか」

私の言葉に、サヴァンさんは答えを返しません。

ですが思う所はあったのか、考え込む様子は見せてくれました。

少しでも、いい方向に変わることを祈りましょう。

07 母の懇願

夕食の時間となり、四人で食卓を囲み、食事を済ませます。

突然の来訪であったにも関わらず、シエラさんは随分と張り切つて料理をしてくれたようで、集落の食事とは思えないような豪華な料理が並んでいました。

特に、シャーリーさんがよく食べてくれることが嬉しいようで、皿が空になるとすぐにおかわりは要らないか、と訊いていました。そんなシエラさんの様子に困りながらも、シャーリーさんは嬉しそうにおかわりをお願いしていました。

そうして明るい雰囲気ですぐに夕食を終えた後、シャーリーさんが湯で身を清める為に席を外し、サヴァンさんも考えることがあるのか、外へと出てしまい、私とシエラさんの二人だけが残されました。

話を聞くいい機会だと思っていると、シエラさんの方から口を開きます。

「雄一さん。娘を、よろしくお願いします」

言つて、シエラさんは頭を下げます。

「私たちでは、あの子を幸せにしてあげることが出来ませんでした。きつと、里に居たままではずっと変わらなかつたでしょう。それが、

あの子があんなにも笑うようになって。きっと、雄一さんのお陰なのだと思います」

何かに縋るような声で、シエラさんは言います。

「どうか、あの子を。シャーリーを幸せにして下さい」

深く、これ以上無いぐらい腰を折って頭を下げるシエラさん。

「どうか、頭を上げてください」

私は、シエラさんの願いに答えます。

「当然、シャーリーさんは幸せにします。私が必ず、彼女を万難から守ります。ですからお願いなど不要です」

「ありがとうございます」

私が言うと、ようやくシエラさんは頭を上げました。

「ただ、一ついいでしょうか」

私は続けて、気になっていたことを口にします。

「シャーリーさんの幸せは、そのあり方は、決して一つだけではありません。私だけ居れば良いというものでもありません」

今度は、私が頭を下げます。

「なので、改めてシエラさんにも、シャーリーさんの幸せの為に必要なことを考えていただけませんか？」

私が言つと、シエラさんは顔を顰めます。

「私では、駄目なんです。あの子は特別なんです。あの子のスキル『精霊眼』は、きつと人と人が、あるいはもつと大きな括りで、互いに分かり合う為の力なんです。決して落ちこぼれなんかじゃない。なのに私は、あの子に自信を持たせてあげることが出来なかった」

言つて、シエラさんは懺悔するように言います。

「あの子を、よく笑う子に育てられなかった。私は駄目な母親です」「本当に、そうでしょうか」

シエラさんの言葉に、私は疑問を投げかけます。

「シャーリーさんの幸せに必要なのは『精霊眼』ですか？ 私は違つと思ひます」

私の言葉に、シエラさんは呆けたような表情で耳を傾けます。

「今日の食卓で、シャーリーさんは笑っていました。それは『精霊眼』があるからでも、私が彼女を守っているからでもなかったはずです。その理由を、そしてだからこそ分かる、シャーリーさんの幸せに必要なものを、改めて考えて頂けませんか？」

その言葉に、俯いてシエラさんは答えます。

「はい、少し、考えてみようと思ひます」

消え入るような声で、しかしシャーリーさんの為に力を振り絞つ

て、シエラさんは決断してくれました。
これ以上の干渉は、邪魔なだけでしょう。

08 龍神洞

翌日。私たちは龍神への伝言の結果を聞くため、里長の下へと向かいます。

「龍神様は、お客人にお会いすると仰ったそうだ」

里長はしかし、難しそうな表情を浮かべています。

「何か問題が？」

「うむ。龍神様はお会いしてくれるそうのだが、姫巫女がな」

里長は首を横に振ります。

「アレがお客人への同行を拒否しおつてな。他の巫女達も、姫巫女に言われておるので同行は難しい」

「なるほど。つまりこのままだと、私は龍神様とお会いしても会話が出来ない、ということですね」
「そうなる」

しかし、里長が悩んでいるのはこの問題そのものではない様子。

「実は、姫巫女が条件次第では同行すると言っておる」

「どうやら、ここからが本題のようです。」

「シャーリーを里から追い出す。二度と帰ってくることを許さない。これを約束するならば、同行してもよいと言っておいたのだ」

なるほど、それで里長は困っていたんですね。

「雄一さん、私は」

シャーリーさんが何かを言いかけますが、手で遮って私が先に話します。

「シャーリーさんに付いてきてもらいますので、問題ありません」
「しかしシャーリーは」

「私のスキルで守ることが出来ます。体調に影響があるようなら、途中で引き返します」

私の言葉に、里長は真剣な様子で視線を合わせて来ます。

「可能なのだな？」

「はい」

私は視線を逸らさず、里長の返答を待ちます。

時折里長は私から視線を外し、シャーリーさんの方を見ているようです。

しばらく間を置いてから、里長は息を吐いて、口を開きます。

「分かった。二人が龍神様の住まう場所、『龍神洞』へと入ることを認めよう」

これで、無事龍神と会うことが出来そうですね。

「ありがとうございます」

「なに、自信があるようだったのな。それに、シャーリーも文句一つ言わず、お客人を信じておるようだ。拒否するようなものもあるまい」

こうして、里長から許可を貰うことが出来ました。

龍神の住まう『龍神洞』へ向かいます。

龍神洞へと向かう道中。昨日見た姫巫女が遠くからこちらを睨んでいる様子が確認出来ました。

それにシャーリーさんが萎縮する様子を見せたので、私は肩を抱き寄せます。

「心配無用です。行きましょう、一緒に」

私の言葉に、シャーリーさんが肩の力を抜きます。

「はい。行きましょう、雄一さん！」

龍神洞。それは龍神の膨大な魔力を浴びて成長したダンジョンと複雑に絡み合った大洞窟なのだとか。

故に、龍神と対話する巫女はダンジョンを突破する戦闘力を必要とします。

そして対話能力、魔力への耐性、戦闘力の三つを総合し、最も優れた者が姫巫女に選ばれるのだとか。

女性に限られるのは、どうやら対話に必要なスキル『精霊言語』が女性の方が強い効果を持って生まれるからだそうです。

逆に、男性は『魔力吸収』のスキルに優れるのだとか。故に女性は巫女、男性は戦士として育てられ、戦闘能力や魔力への耐性の足りない巫女は戦士の護衛を伴って龍神との対話に向かうそうです。

今回、私はシャーリーさんを伴い龍神洞の最深部、龍神が住まう場所へと向かっています。

これはちょうど、巫女と護衛の戦士の構図に被るものがあります。

さらに言えば、シャーリーさんは魔力への耐性は全くありません。私が『詛泥』のスキルで薄い球状の膜を展開し、龍神の魔力を吸収しなければ、ここに立っているだけで苦しい思いをすることになります。

より一層、気合が入るといふものです。

「なんだか、懐かしい感じがします」

「懐かしい、ですか？」

「はい。まだ私が、冒険者ギルドの受付嬢だった頃みたいな感じが」

私が首を傾げると、シャーリーさんはふふつと笑ってから続けて語ります。

「覚えてませんか？　ずっと昔、私が不良冒険者に付き纏われそうになった時の話です」

言われてから、そういえばそんな出来事もあった、と思い出します。

あれはまだシャーリーさんが私の専属受付嬢になる少し前の出来事でしょうか。

薬草の納品を終えた後、ギルドを出た私と入れ違いで雰囲気の妙な男がギルドに入っていくのを見かけたのです。

それを不審に思い、念のためにと戻ってみれば、シャーリーさんが強引なナンパを受けていたのでしたね。

「雄一さんが間に入ってくれて、そのまま相手を制圧してくれたんです」

「そんなこともありましたね」

「あの時の背中は、とても頼もしく見えましたよ」

言って、シャーリーさんは私の背中を撫でるように触ります。

なるほど、立ち位置やシャーリーさんを守る立ち回りから、当時

のことを思い返したというわけですね。

「思えばあの頃から、雄一さんは自分をよく見てくれていたんですね」

「あの時は、偶然みたいなものですよ」

「そんなこと言って、なんだかんだで周りに気を配っているのは分かっていますから！」

ポン、と私の背中を叩くシャーリーさん。

「ずっと、いつもいつでも、私を大切にしてくれていた雄一さん。そんな貴方だから、私は好きになっただけです」

言って、そのまま私の背中に抱きついてきます。

「これからも、よろしくおねがいします」

「ええ。こちらこそ」

シャーリーさんの体温を感じつつ、龍神洞を進みます。

「まだ駆け出しの冒険者だった頃から優しかったシャーリーさん。そんな貴女だから好ましく思っているんです」

私が答えを返すと、シャーリーさんはより強い力で抱きついて来るのでした。

二時間ほどかけて龍神洞を進み、とうとう最深部へと到着しました。

そこで、ついに私は龍神と相まみえることになりました。

その巨体は鍾乳石に飲み込まれており、頭を残してほぼ全身が洞窟と一体化していました。

残る頭だけでも十分に巨大で、人間ぐらいの大きさの生き物なら、スナック感覚で丸呑み出来そうなほどです。

そして、間違いなく強い。

恐らくは魔王であるヴラドガリアさんや、勇者である蛍一君に匹敵する力があるでしょう。

それほどの威圧感が、横たわっているだけでも伝わってきます。

「雄一さん」

シャーリーさんは、私に手を差し出します。

私が手を握ると同時に、シャーリーさんが『精霊眼』のスキルを発動させます。

辺り一帯に、今までにない清涼な空気が流れるような感覚があり

ました。

そして、これで恐らく私も龍神と直接対話が可能になったはずで
す。

シャーリーさんを見ると、頷いて肯定してくれます。

すると、そのタイミングを待っていたかのように、龍神が目を開
きます。

『里の子よ。そして異界の召喚者よ、よくぞ参った』

その言葉に、つい私は目を見開き驚いてしまいます。

『知りたいことがあるのだろう。自由に訊くといい』

「では、お言葉に甘えて」

私は早速、何よりも最初に聞かなければならないことを質問しま
す。

「召喚された勇者が、どういう存在なのか。龍神様はご存知でしょ
うか」

『然り』

肯定の言葉。それに続けて、龍神は詳しい話を続けてくれます。

『全てを伝えるには、この世界の成り立ちを語らねばならぬ』

そうして、龍神は途方もない過去の話を始めます。

『かつて、この世界には何も無かった。神々はここを神の園と呼び、
新たな神が生まれ出る為の場所とした』

神の園。聞いたことのない言葉によって、謎が解き明かされる期待が高まります。

「神は、新たな神に至る可能性を持つ存在として、異界の生物を召喚した。それが、始まりの魔物であった」

「魔物が、成長すれば神になるということですか？」

「然り」

なんと。予想外の事実です。

「神の園は魔物の世界となり、やがて知性ある魔物は国をつくり、国にとって必要な生物を神に請願し、召喚するようになった。そうして召喚された生物の中に、人があった」

魔物によって召喚されたのが、この世界の人類の起源、ということですね。

「人もまた、知性故に国を作り、時に魔物と同様、神に請願し、召喚をした。魔物の中でも優れた存在は神へと至り、世界には、弱き魔物と神に至る可能性を持たない生物で溢れた」

「つまり今、この世界は神の園としての役割を果たしていない、ということでしょうか？」

「否」

龍神は否定し、さらに話を続けます。

「世界は安定した。しかし人は更に発展することを望んだ。外敵を廃する手段として、勇者の召喚を神に請願した。神は、新たな神の誕生を望んだ。利害が一致し、神は召喚に応えた。異界の人類を、

神に至る可能性を持つ存在として作り替え、勇者とした』

なるほど。それが勇者の起源ということですか。

「つまり、勇者とは神に至る可能性を持つように身体を作り変えられた、いわば人型の魔物であるということですね？」

『然り』

望んで求めた答えですが、こうして聞かされるとやはりショックですね。

11 召喚者

驚くべき事実が判明しましたが、まだ聞きたいことはあります。

「では次の質問です。魔物の進化という現象について」

『既に語った事実より、察しているのだろうか？』

龍神に問いで返され、私は頷きます。

「聞き方を変えましょう。神に至る可能性。それが魔物の進化ですね？」

『然り。神に至ることを正しいあり方とするなら、今の世に残る魔物の多くは不完全な形で神に至る可能性を発現している』

つまり、魔物の進化とは、神に至ることに失敗した魔物の姿、ということなのでしょう。

「では、神に至る為に必要な条件は分かっていますか？」

私が訊くと、龍神は少し考えるような間を置いた後、語ります。

『私のステータスを見ると良い』

そうして、龍神は自分のステータスボードを開示しました。

【名前】なし

【レベル】 1 0 8 4 3 5

【筋力】 ERROR

【魔力】 ERROR

【体力】 ERROR

【速力】 ERROR

【属性】なし

【スキル】なし

特徴的な、ERRORという表示に目がいきます。

『この表示は、この世界の枠に収まらぬことを示す。恐らく、神に至るとは、ステータスの全てがこの表示に変わることの意味するの
だろう』

「龍神様のステータスは、なぜERRORに？」

『私にはるか昔に、筋力から速力まで、全てSSSSSSに到達した。その時、表示が今のもの変わった』

つまり、神に至る条件の一つはステータスオールSSSSS。

スキルについては条件こそ不明なもの、ERRORになることは判明しています。

なるほど、全てがERRORになれば神に至る、というのは自然な予想ですね。

『異界の勇者よ。更に知識を求めるのであれば、最後の女神、そなた達の前に勇者として召喚された者の足跡を辿ると良い』

「最後の女神、ですか？」

『前回の勇者召喚で呼ばれた者のうちの一人だ。あの少女は最後まで戦い抜き、そして女神へと至った』

なるほど。実際に女神になった勇者の記録を辿れば、神に至る条件について知ることが出来る、というわけですね。

条件を知ることさえ出来れば、なりたくない人が神になってしまふことを回避することだって可能になるでしょう。

「分かりました。ありがとうございます、龍神様」

『久々に、話が出来てこちらも楽しかった。感謝するぞ、異界の勇者よ』

龍神は言うつと、その視線を私から逸して、隣に立つシャーリーさんへと向けます。

『さて。里の子よ、聞きたいことがあるのだろう』

龍神の言葉に、シャーリーさんは息を飲みます。

12 なり損ない

シャーリーさんは龍神に問われ、意を決した様子で口を開きます。

「龍神様。私は、私のスキルは、何なのでしょうか」

その問いは、シャーリーさんの中にあるコンプレックスを端的に表したものでした。

「私は、巫女になれない、なり損ないなのでしょうか」

問い掛けるシャーリーさんは、今にも泣き出しそうに見えます。

「必要なものを持たず、必要とされることが出来ず、たった一つの長所にも価値が無い私は、何なのでしょうか」

龍神は、シャーリーさんに問われ、ゆっくりと間を開けた後、答えます。

『精霊眼とは何か、を知りたいわけではあるまい。ならば、私から言えることは一つ』

どこか優しい語り口でシャーリーさんに語りかける龍神。

『なり損ないというなら、私も同じなのだ』

その言葉に、シャーリーさんは目を見開きます。

『遙か古の時代に、神へと至るべく召喚された数多の魔物の内の一匹が私だ。戦いを恐れ、逃げ、生き残ること以外に何一つ誇るようなこともなく、やがてこの地に横たわり、何も成さず、神へと至る気概も無ければ、至る可能性すらも残されていない、神に望まれた役割を何一つ出来やしないのが私だ』

龍神は、自分がどういう存在なのか語ってから、シャーリーさんに聞きます。

『里の子よ。そなたは、私をどう思う』

龍神の問いを受け、シャーリーさんは言葉に詰まります。

『そう。その沈黙が答えだ。誰も答えなど持たず、決める権利を持たない』

優しく、龍神はシャーリーさんを諭すように言います。

『善悪も、優劣も無く、生まれた全てを世界は祝福している。能力の過不足を理由に、自らを卑下する道理など無いのだ』

「本当に、そうなんでしょうか」

疑う言葉を口にしたシャーリーさんを、龍神はさらに諭します。

『そなたは生まれ、ここにいます。真実、真理というものは、思いの他そういった単純なものに過ぎない』

シャーリーさんのコンプレックス。あるいは、シャーリーさんを否定してきたものは、生まれてきたことまで否定できるような、世界の真理めいた超然的なものでは無いということなのでしょう。

『私は良く知っている。そなたが異界の勇者の為、命を危険に晒してまでここに立つと決めた勇気を。優しさを。だから、もう良いのだ。自らを責め苛むな、優しき人の子よ』

龍神の言葉を受け、シャーリーさんは涙を零します。

「私は、私はっ！」

『言葉も、道理もまずは忘れよ。そなたの隣を。歩んだ道のりを見よ』

シャーリーさんを遮るように言って、龍神は続けます。

『忘れられぬ人が。言葉が。思い出があるのなら。胸に残るものの為に、言葉も、道理も尽くすのだ。であればそなたは、何かのなり損ないではない。誰かにとって、決して替えの効かぬ、自分自身になっっているはずだ』

龍神の言葉に続けて、私はシャーリーさんを抱き寄せます。

「私にとって、シャーリーさんは唯一無二の存在です。きっと今まで、シャーリーさんと出会い、関わった多くの人にとっても同じでしょう。もうとっくに、貴女は何かのなり損ないではないんですよ」

シャーリーさんは、涙を流しながら頷きました。

言葉は無くとも、シャーリーさんの胸に支えていた何か溶けて消えていくのが、はっきりと分かりました。

13 帰り道

龍神との対話を終えた私たちは、龍神洞を後にしました。

里に戻ると、姫巫女は訝しむような視線と共に、どうせ龍神様にお会い出来なかったのだろう、と言って、嫌味をつらつらと並べ立てました。

しかし、シャーリーさんはそれにはつきりと言い返します。

「だったら、何なんですか。貴女に何か関係ありますか？」

言い返されることを想定していなかったのか。姫巫女は何も言い返せず、口を噤みました。

その後は里長の下へと向かい、龍神と対話出来たことを報告しました。

こうして里での用事を終え、帰る時が来ました。

里長の家を出ると、サヴァンさんが待っていました。

「シャーリー。話がしたい」

その言葉に困惑しながらも、シャーリーさんは私の方を一度見ながら頷きます。

そのままサヴァンさんに連れられて、シャーリーさんは実家へと一度帰りました。

私はしばらくの間、シャーリーさんの実家の前で用事が終わるのを待ちます。

小一時間ほど経った頃、ついにシャーリーさんは家から姿を見せました。

その顔にはうつすらと涙の跡が残っており、しかし笑顔を浮かべていました。

また、シャーリーさんを見送る為なのか、サヴァンさんとシエラさんが一緒に家から出てきます。

三人は互いに、何かを確認するかのようじじくりと抱きしめ合います。

そこに言葉はありませんでしたが、シャーリーさんにとっては十分なようでした。

晴れやかな様子で、家族から離れるシャーリーさん。

「お父さん、お母さん！ 行ってきます！」

笑顔のシャーリーさんを、二人もまた笑顔を浮かべて見送ります。

三人が、家でどのような会話をしたのかまでは分かりません。

ただ、少なくともこれまでのすれ違いは解消されたのだろう、と安心出来る笑顔でした。

里を出て、二人で乙木商事の輸送車両を残した場所へと向かいます。

その道中、シャーリーさんから提案がありました。

「雄一さん。お互いに、敬語を使うのを止めてみませんか？」

思わぬ提案の理由を、シャーリーさんは続けて語ります。

「私、気づいたんです。無意識のうちに、誰とも距離を取ろうとしてることに。踏み込むこと、踏み込まれることが怖かった」

シャーリーさんの言葉に、私も気付かされます。

私も同じなのでしょう。癖付いたから、という部分もありますが、元をたどれば他人と深く関わり合うことが怖かったからだったのだと思います。

「でも、お父さんとお母さん。それに龍神様とお話をして、変わりたい、変えたいって思いました。ちゃんと話をして、心の深い所まで知ってもらって。それが嬉しく思える人とは、もっと距離を詰めたかって思ったんです」

シャーリーさんは言って、私の手を握ります。

「ねえ、雄一。よかったら、私のこと、有咲ちゃんみたいに呼び捨てにしてほしいな」

私は、これまでの自分が恥ずかしい。

大切な人だと言いながら、今まで通りという言い訳めいた惰性で、距離を詰める努力やお互いを分かり合う努力を放棄してきた。

シャーリーさんが、いや。シャーリーが勇気を出して自分を変えたのなら。

俺も、今、変わるべきなのだろう。

「そう、だな」

俺は、シャーリーに意思を伝える。

「俺も、君を大切にしたい。今まで以上に。だから、シャーリー。これからも、よろしく」

俺の言葉に、シャーリーは満面の笑みを浮かべた。

「うんっ!」

この笑顔が、変わらぬように。

俺もシャーリーのように、変わっていきつつと思っ。

14 ただいま

乙木商事の輸送車両に乗って、長い道のりを進む。
会話は少なかった。けれどシャーリーとの帰り道は、楽しかった。

自宅に到着すると、真っ先に迎えてくれたのはマリアだった。他の妻たちは仕事や用事があるのか、皆出払っていた。

「お帰りなさい、雄一様」

俺は頷き、マリアに感謝を伝える。

「ただいま、マリア。出迎え、いつもありがとう」

俺の様子が変わったことに驚いたのか、一瞬だけ目を見開いて驚くマリア。

しかし、すぐに笑みを浮かべ、頷いて応える。

「さあ。旅の成果をみんなに報告するよりも、まずは湯に浸かって疲れを癒やして下さいな。浴場の準備は出来ていますよ」

「いつも気が利くな、マリアは」

「当たり前のことをしているだけですよ」

微笑むマリアを軽く抱きしめた後、俺は家に入る。

俺が湯船にゆっくり浸かっていると、忙しい足音が近づいてくる。

「パパ、ボクがお背中を流すよ!」

「パパ、私もお背中を流したいの!」

ティオとティアナが、騒がしく浴場に飛び込んでくる。

「おかえり、ティオ。ティアナ。仕事は終わったのか?」

俺が訊くと、二人は顔を見合わせてから、首を傾げる。

「お仕事は、パパが帰ってくるから急いで終わらせたよ」

「それよりパパ、少し、普段と違う?」

二人に問われ、苦笑いを浮かべる。

疑問に思われるぐらい、俺は家族との距離を図り損ねていたらしい。

「ああ、そうだよ。家族や、他にも親しい人達とは、今までよりも仲良しになりたくなっただ」

「僕、パパのこと好きだよ?」

「私も。それでも、もっと仲良しになるの?」

俺は湯船から出ると、二人の頭を撫でます。

「そっだぞー。仲良しに、好きに上限は無いからな」

その言葉に、二人は揃って笑顔を浮かべる。

「じゃあ僕も、もっと仲良しになりたい！」

「お背中流したら、もっと仲良しになれる？」

「ああ、なれるさ。ティオとティアナの背中は、俺が洗ってあげよう」

こうして俺たちは、三人で仲良く入浴を済ませるのだった。

その日の夜。自室の縁側で有咲と二人、何となく、夜空を肴に酒を飲む。

大森林自治区のとある部族が作る伝統的な酒で、竹を使って作られるらしく、独特の香りがあつて非常に美味しい。

「雄一。敬語使うの、やめたんだね」

有咲に聞かれ、頷く。

「分かり合つて、難しいんだろうと思つてさ」

些細なすれ違いで不幸になっていた、シャーリーとそのご両親のことを思う。

「だから、言葉遣いで距離を置くなんて、馬鹿らしくなつたんだ」

それが全てというわけでもないが、大きな理由の一つでもある。

俺は、俺の大切な人達、家族や友人とはすれ違いたくない。だから誤解を招くような言葉遣いは、辞めるべきだと思つた。

「そうだね」

有咲は俺の内心を知ってか知らずか。それだけ言って、夜空を見上げる。

言葉を尽くしたり、時にはそれが邪魔であったり。

人が分かり合うというのは、とても難しいことなのだろう。

それでも、決して不可能などではない。

今、同じ夜空を見上げる有咲のことを思うと、何となく、そんな気がするのだ。

14 ただいま（後書き）

これで十二章は終了です。

また、書き溜めた分はこれで終わりですので、一旦毎日投稿を終了させていただきます。

面白かった、という方は、もしよろしければ評価ポイント、いいねボタンの方を押して頂けると幸いです。

今後とも、コンビニおっさんをよろしくお願いいたします。

この作品の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n1428fd/>

クラス転移に巻き込まれたコンビニ店員のおっさん、勇者には必要なかった余り物スキルを駆使して最強となるようです。

2024年5月15日01時55分発行